鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）

東九州自動車道建設（曽於弥五郎IC～末吉財部IC間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

定塚遺跡・稲村遺跡

（曽於市大隅町）

第２分冊

2010年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）
定塚遺跡・稲村遺跡（第2分冊）

二〇一〇年三月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

２分冊目次

本文目次

第Ⅳ章　定塚遺跡の調査
第４節　縄文時代早期の調査
１　調査の概要……１
２　遺構……１
（１）竪穴住居状遺構……３
１号竪穴住居状遺構……８
２号竪穴住居状遺構……８
３号竪穴住居状遺構……11
４号竪穴住居状遺構……14
５号竪穴住居状遺構……21
６号竪穴住居状遺構……21
７号竪穴住居状遺構……26
８号竪穴住居状遺構……26
９号竪穴住居状遺構……28
10号竪穴住居状遺構……30
11号竪穴住居状遺構……33
12号竪穴住居状遺構……33
13号竪穴住居状遺構……37
14号竪穴住居状遺構……39
15号竪穴住居状遺構……39
16号竪穴住居状遺構……42
20号竪穴住居状遺構……44
17号竪穴住居状遺構……44
18号竪穴住居状遺構……47
19号竪穴住居状遺構……51
21号竪穴住居状遺構……53
22号竪穴住居状遺構……55
23号竪穴住居状遺構……67
24号竪穴住居状遺構……69
25号竪穴住居状遺構……69
26号竪穴住居状遺構……76
27号竪穴住居状遺構……78
28号竪穴住居状遺構……78
29号竪穴住居状遺構……80
30号竪穴住居状遺構……80
31号竪穴住居状遺構……82
32号竪穴住居状遺構……91
33号竪穴住居状遺構……98
34号竪穴住居状遺構……98
35号竪穴住居状遺構……98
36号竪穴住居状遺構……100
37号竪穴住居状遺構……100
38号竪穴住居状遺構……104
39号竪穴住居状遺構……111
40号竪穴住居状遺構……111
41号竪穴住居状遺構……116
42号竪穴住居状遺構……116
43号竪穴住居状遺構……117
44号竪穴住居状遺構……119
45号竪穴住居状遺構……119
46号竪穴住居状遺構……122
47号竪穴住居状遺構……122
76号竪穴住居状遺構……123
48号竪穴住居状遺構……123
49号竪穴住居状遺構……126
50号竪穴住居状遺構……128
70号竪穴住居状遺構……130
51号竪穴住居状遺構……133
52号竪穴住居状遺構……133
53号竪穴住居状遺構……137
54号竪穴住居状遺構……137
55号竪穴住居状遺構……139
56号竪穴住居状遺構……143
57号竪穴住居状遺構……143
58号竪穴住居状遺構……147
59号竪穴住居状遺構……147
60号竪穴住居状遺構……148
61号竪穴住居状遺構……153
62号竪穴住居状遺構……157
72号竪穴住居状遺構……159
75号竪穴住居状遺構……159
78号竪穴住居状遺構……162
79号竪穴住居状遺構……162
63号竪穴住居状遺構……164
64号竪穴住居状遺構……164
65号竪穴住居状遺構……166
66号竪穴住居状遺構……167
71号竪穴住居状遺構……169
80号竪穴住居状遺構……173
81号竪穴住居状遺構……176
82号竪穴住居状遺構……176
97号竪穴住居状遺構……179
67号竪穴住居状遺構……180
68号竪穴住居状遺構……180
69号竪穴住居状遺構……181
73号竪穴住居状遺構……181
77号竪穴住居状遺構……182
74号竪穴住居状遺構……185
83号竪穴住居状遺構……185
84号竪穴住居状遺構……191
85号竪穴住居状遺構……191
86号竪穴住居状遺構……191
87号竪穴住居状遺構……195
90号竪穴住居状遺構……199
88号竪穴住居状遺構……199
89号竪穴住居状遺構……199
91号竪穴住居状遺構……201
92号竪穴住居状遺構……201
93号竪穴住居状遺構……203
94号竪穴住居状遺構……203
95号竪穴住居状遺構……203
96号竪穴住居状遺構……205
（２）土坑……224
Type １（円形タイプ）……224
Type ２（楕円形タイプ）……225
Type ３（楕円形スモールタイプ）‥230
Type ４（隅丸正方形タイプ）……236
Type ５（隅丸長方形タイプ）……239
Type ６（隅丸長方形ロングタイプ）‥252
Type ７（五角形タイプ）……256
Type ８（釣鐘形タイプ）……259
Type ９（その他）……259
Type10（連穴土坑タイプ）……268
（３）集石遺構……307
Type １……307
Type ２……313
Type ３……317
Type ４……319
Type ５……326
（４）道路状遺構……358

挿図目次

第１図 縄文時代早期遺構位置図……２
第２図 竪穴住居状遺構位置図……４
第３図 １号竪穴住居状遺構実測図……９
第４図 縄文土器出土状況図１……10
第５図 ２号竪穴住居状遺構実測図……12
第６図 ３号竪穴住居状遺構実測図……13
第７図 ４号竪穴住居状遺構実測図１……15
第８図 ４号竪穴住居状遺構実測図２……16
第９図 竪穴住居状遺構内出土土器１……17
第10図 竪穴住居状遺構内出土土器２……18
第11図 竪穴住居状遺構内出土土器３……19
第12図 竪穴住居状遺構内出土土器４……20
第13図 ５号竪穴住居状遺構実測図……22
第14図 竪穴住居状遺構内出土土器５……23
第15図 竪穴住居状遺構内出土土器６……24
第16図 竪穴住居状遺構内出土土器７……25
第17図 ６号竪穴住居状遺構実測図……27
第18図 ７～９号竪穴住居状遺構実測図‥29
第19図 10号竪穴住居状遺構実測図１……31
第20図 10号竪穴住居状遺構実測図２……32
第21図 11号竪穴住居状遺構実測図……34
第22図 12号竪穴住居状遺構実測図……36
第23図 竪穴住居状遺構内出土土器８……38
第24図 13号竪穴住居状遺構実測図１……40
第25図 13号竪穴住居状遺構実測図２……41
第26図 14号竪穴住居状遺構実測図……43
第27図 15号竪穴住居状遺構実測図……45
第28図 竪穴住居状遺構内出土土器９……46
第29図 16・20号竪穴住居状遺構実測図‥48
第30図 竪穴住居状遺構内出土土器10……49
第31図 竪穴住居状遺構内出土土器11……50
第32図 縄文土器出土状況図２……50
第33図 17号竪穴住居状遺構実測図……52
第34図 18号竪穴住居状遺構実測図……54
第35図 19号竪穴住居状遺構実測図……56
第36図 竪穴住居状遺構内出土土器12……57
第37図 竪穴住居状遺構内出土土器13……58
第38図 竪穴住居状遺構内出土土器14……59
第39図 竪穴住居状遺構内出土土器15……60
第40図 竪穴住居状遺構内出土土器16……61
第41図 縄文土器出土状況図３……62
第42図 縄文土器出土状況図４……63
第43図 竪穴住居状遺構内出土土器17……64
第44図 竪穴住居状遺構内出土土器18……65
第45図 竪穴住居状遺構内出土土器19……66
第46図 21号竪穴住居状遺構実測図……68
第47図 22号竪穴住居状遺構実測図１……70
第48図 縄文土器出土状況図５……71
第49図 竪穴住居状遺構出内出土土器20‥72
第50図 竪穴住居状遺構出内出土土器21‥73
第51図 竪穴住居状遺構出内出土土器22‥74
第52図 竪穴住居状遺構内出土土器23……75
第53図 23・24号竪穴住居状遺構実測図‥77
第54図 25号竪穴住居状遺構実測図……79
第55図 26号竪穴住居状遺構実測図……81
第56図 27号竪穴住居状遺構実測図……83
第57図 竪穴住居状遺構内出土土器24……84
第58図 28・29号竪穴住居状遺構実測図‥85
第59図 竪穴住居状遺構内出土土器25……86
第60図 竪穴住居状遺構内出土土器26……87

第61図 縄文土器出土状況図６ ……88
第62図 竪穴住居状遺構内出土土器27 ……88
第63図 30号竪穴住居状遺構実測図 ……90
第64図 31号竪穴住居状遺構実測図 ……92
第65図 縄文土器出土状況図７ ……93
第66図 竪穴住居状遺構内出土土器28 ……94
第67図 竪穴住居状遺構内出土土器29 ……95
第68図 竪穴住居状遺構内出土土器30 ……96
第69図 竪穴住居状遺構内出土土器31 ……97
第70図 竪穴住居状遺構内出土土器32 ……99
第71図 32号竪穴住居状遺構実測図 …… 101
第72図 33号竪穴住居状遺構実測図 …… 102
第73図 34号竪穴住居状遺構実測図 …… 103
第74図 35号竪穴住居状遺構実測図 …… 105
第75図 竪穴住居状遺構内出土土器33 …… 106
第76図 36号竪穴住居状遺構実測図 …… 107
第77図 37号竪穴住居状遺構実測図 …… 109
第78図 竪穴住居状遺構内出土土器34 …… 110
第79図 38号竪穴住居状遺構実測図 …… 112
第80図 竪穴住居状遺構内出土土器35 …… 113
第81図 竪穴住居状遺構内出土土器36 …… 114
第82図 縄文土器出土状況図８ …… 115
第83図 39・40号竪穴住居状遺構実測図 ‥ 118
第84図 41号竪穴住居状遺構実測図 …… 120
第85図 42号竪穴住居状遺構実測図 …… 121
第86図 43・44号竪穴住居状遺構実測図 ‥ 124
第87図 竪穴住居状遺構内出土土器37 …… 125
第88図 45・46号竪穴住居状遺構実測図 ‥ 127
第89図 47・76号竪穴住居状遺構実測図 ‥ 129
第90図 48・49号竪穴住居状遺構実測図 ‥ 131
第91図 竪穴住居状遺構内出土土器38 …… 132
第92図 50・70号竪穴住居状遺構実測図１ …… 135
第93図 50・70号竪穴住居状遺構実測図２ …… 136
第94図 51号竪穴住居状遺構実測図 …… 138
第95図 52号竪穴住居状遺構実測図 …… 140
第96図 竪穴住居状遺構内出土土器39 …… 141
第97図 竪穴住居状遺構内出土土器40 …… 142
第98図 53号竪穴住居状遺構実測図 …… 144
第99図 54号竪穴住居状遺構実測図 …… 145
第100図 竪穴住居状遺構内出土土器41 …… 146
第101図 55号竪穴住居状遺構実測図 …… 149
第102図 56号竪穴住居状遺構実測図 …… 150
第103図 竪穴住居状遺構内出土土器42 …… 151
第104図 竪穴住居状遺構内出土土器43 …… 152
第105図 57号竪穴住居状遺構実測図 …… 154
第106図 58号竪穴住居状遺構実測図 …… 155
第107図 竪穴住居状遺構内出土土器44 …… 156
第108図 59号竪穴住居状遺構実測図 …… 158
第109図 60号竪穴住居状遺構実測図 …… 160
第110図 第１遺構集中区実測図１ …… 161
第111図 第１遺構集中区実測図２ …… 163
第112図 竪穴住居状遺構内出土土器45 …… 165
第113図 縄文土器出土状況図９ …… 168
第114図 竪穴住居状遺構内出土土器46 …… 170
第115図 竪穴住居状遺構内出土土器47 …… 171
第116図 63・64号竪穴住居状遺構実測図 … 172
第117図 第２遺構集中区実測図１ …… 174
第118図 第２遺構集中区実測図２ …… 175
第119図 竪穴住居状遺構内出土土器48 …… 177
第120図 竪穴住居状遺構内出土土器49 …… 178
第121図 67号竪穴住居状遺構実測図１ …… 183
第122図 67号竪穴住居状遺構実測図２ …… 184
第123図 68号竪穴住居状遺構実測図 …… 186
第124図 69号竪穴住居状遺構実測図 …… 187
第125図 竪穴住居状遺構内出土土器50 …… 188
第126図 竪穴住居状遺構内出土土器51 …… 189
第127図 竪穴住居状遺構内出土土器52 …… 190
第128図 73・77号竪穴住居状遺構実測図 … 192
第129図 竪穴住居状遺構内出土土器53 …… 193
第130図 竪穴住居状遺構内出土土器54 …… 194
第131図 74号竪穴住居状遺構実測図 …… 196
第132図 竪穴住居状遺構内出土土器55 …… 197
第133図 竪穴住居状遺構内出土土器56 …… 198
第134図 83・84・85号竪穴住居状遺構実測図 …… 200
第135図 86号竪穴住居状遺構実測図 …… 202
第136図 87・90号竪穴住居状遺構実測図 … 204
第137図 88・89・91号竪穴住居状遺構実測図 …… 206
第138図 92・93・94号竪穴住居状遺構実測図 …… 207
第139図 95・96号竪穴住居状遺構実測図 … 208
第140図 竪穴住居状遺構内出土土器57 …… 209
第141図 竪穴住居状遺構内出土石器１ …… 210
第142図 竪穴住居状遺構内出土石器２ …… 211
第143図 竪穴住居状遺構内出土石器３ …… 212
第144図 竪穴住居状遺構内出土石器４ …… 213
第145図 竪穴住居状遺構内出土石器５ …… 214
第146図 竪穴住居状遺構内出土石器６ …… 215
第147図 竪穴住居状遺構内出土石器７ …… 216
第148図 竪穴住居状遺構内出土石器８ …… 217
第149図 竪穴住居状遺構内出土石器９ …… 218
第150図 竪穴住居状遺構内出土石器10 …… 219
第151図 竪穴住居状遺構内出土石器11 …… 220
第152図 竪穴住居状遺構内出土石器12 …… 221
第153図 竪穴住居状遺構内出土石器13 …… 222
第154図 竪穴住居状遺構内出土石器14 …… 223
第155図 土坑実測図１ …… 231
第156図 土坑実測図２ …… 232
第157図 土坑実測図３ …… 233
第158図 土坑実測図４ …… 234
第159図 土坑実測図５ …… 237
第160図 土坑実測図６ …… 238
第161図 土坑実測図７ …… 240
第162図 土坑実測図８ …… 241
第163図 土坑実測図９ …… 248
第164図 土坑実測図10 …… 249
第165図 土坑実測図11 …… 250
第166図 土坑実測図12 …… 251
第167図 土坑実測図13 …… 253
第168図 土坑実測図14 …… 257
第169図 土坑実測図15 …… 260
第170図 土坑実測図16 …… 266
第171図 土坑実測図17 …… 267
第172図 土坑実測図18 …… 269
第173図 土坑実測図19 …… 272
第174図 土坑実測図20 …… 273
第175図 土坑実測図21 …… 274
第176図 土坑実測図22 …… 275
第177図 土坑実測図23 …… 276
第178図 土坑内出土土器１ …… 277
第179図 土坑内出土土器２ …… 278
第180図 土坑内出土土器３ …… 279
第181図 土坑内出土土器４ …… 280
第182図 土坑内出土土器５ …… 281
第183図 土坑内出土土器６ …… 282
第184図 土坑内出土土器７ …… 283
第185図 土坑内出土土器８ …… 284
第186図 土坑内出土土器９ …… 285
第187図 土坑内出土土器10 …… 286
第188図 土坑内出土土器11 …… 287
第189図 土坑内出土土器12 …… 288
第190図 土坑内出土土器13 …… 289
第191図 土坑内出土土器14 …… 290
第192図 土坑内出土土器15 …… 291
第193図 土坑内出土土器16 …… 292
第194図 土坑内出土石器１ …… 293
第195図 土坑内出土石器２ …… 294
第196図 土坑内出土石器３ …… 295
第197図 集石遺構実測図１ …… 310
第198図 集石遺構実測図２ …… 312
第199図 集石遺構実測図３ …… 314
第200図 集石遺構実測図４ …… 316
第201図 集石遺構実測図５ …… 318
第202図 集石遺構実測図６ …… 320
第203図 集石遺構実測図７ …… 322
第204図 集石遺構実測図８ …… 323
第205図 集石遺構実測図９ …… 324
第206図 集石遺構実測図10 …… 325
第207図 集石遺構実測図11 …… 327
第208図 集石遺構実測図12 …… 328
第209図 集石遺構実測図13 …… 329
第210図 集石遺構実測図14 …… 330
第211図 集石遺構実測図15 …… 331
第212図 集石遺構実測図16 …… 332
第213図 集石遺構実測図17 …… 333
第214図 縄文時代早期包含層出土礫分布図 …… 334
第215図 集石遺構内出土土器１ …… 335
第216図 集石遺構内出土土器２ …… 331
第217図 集石遺構内出土土器３ …… 337
第218図 集石遺構内出土土器４ …… 338
第219図 集石遺構内出土土器５ …… 339
第220図 集石遺構内出土土器６ …… 340
第221図 集石遺構内出土土器７ …… 341
第222図 集石遺構内出土土器８ …… 342
第223図 集石遺構内出土土器９ …… 343
第224図 集石遺構内出土石器１ …… 344
第225図 集石遺構内出土石器２ …… 345
第226図 集石遺構内出土石器３ …… 346
第227図 道路状遺構位置図 …… 358

表・グラフ目次

表１～３ 竪穴住居状遺構一覧表１～３ ……5～7
表４～14 土坑一覧表１～11 ……296～306
表15～17 集石遺構一覧表１・２ ……308，309
グラフ１～７ 集石遺構構成礫データ１～７ ……347～353
グラフ８～11 集石遺構構成礫重量１～４ ……354～357

第Ⅳ章　定塚遺跡の調査

第４節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

定段遺跡発掘調査のメインとなるのが縄文時代早期の調査であった。Ⅴb 層のアカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源）とⅨ層の薩摩火山灰（P14：桜島起源）に挟まれたⅥ～Ⅷ層の調査がそれである。南九州では，薩摩火山灰降下後からアカホヤ火山灰降下までを縄文時代早期の時間幅とする場合が多い。本報告でもそのような認識で記述していきたい。

また，定段遺跡からはこのアカホヤ火山灰と薩摩火山灰の間に，P11と P13（共に桜島起源）と呼ばれるテフラが確認された。特に P11はⅥb 層としているように，比較的多くの軽石を含む層として存在していることから，遺跡地に少なからず影響を与えたテフラであると考えられる。

P13は，Ⅶ層下部あたりに散在する黄色の軽石で，一つの層を成すまでにはいたらないが，遺構の埋土中に比較的集中して存在するという状況が確認できた。Ⅶ層からⅧ層に掘り下げていくと，黄色の軽石，つまり P13が集中する部分が現れる。多くの場合，そこが遺構中である。というような状況が見られた。

後述するように，Ⅵ～Ⅷ層のいわゆる遺物包含層からは，大量の遺物が出土した。時間的変遷の指標となる土器型式でみると，15を越える段階が設定できるほど，豊富な内容をもつ情報を得ることができた。これらの多くは，Ⅶ層とⅧ層，つまり P11と薩摩火山灰の間の層から集中して出土した。２つの層から出土する土器型式は，ある程度の傾向がみられ，時間差の表れとして把握できるものと考えた。ただし，実際は，混在して出土していることから，本報告での記載は，Ⅵ～Ⅷ層を縄文時代早期該当層とするが，出土土器については層位ごとではなく，従来の土器編年を基準としながら，土器型式ごととすることにした。

石器については，どの土器型式に伴うものかが不確定であることから，層位ごとの記載とした。土器は型式ごと，石器は層位ごとと，遺物によって記載が異なることになるが，当然，遺物の観察表に必要な情報は記載してあるので，参照していただきたい。

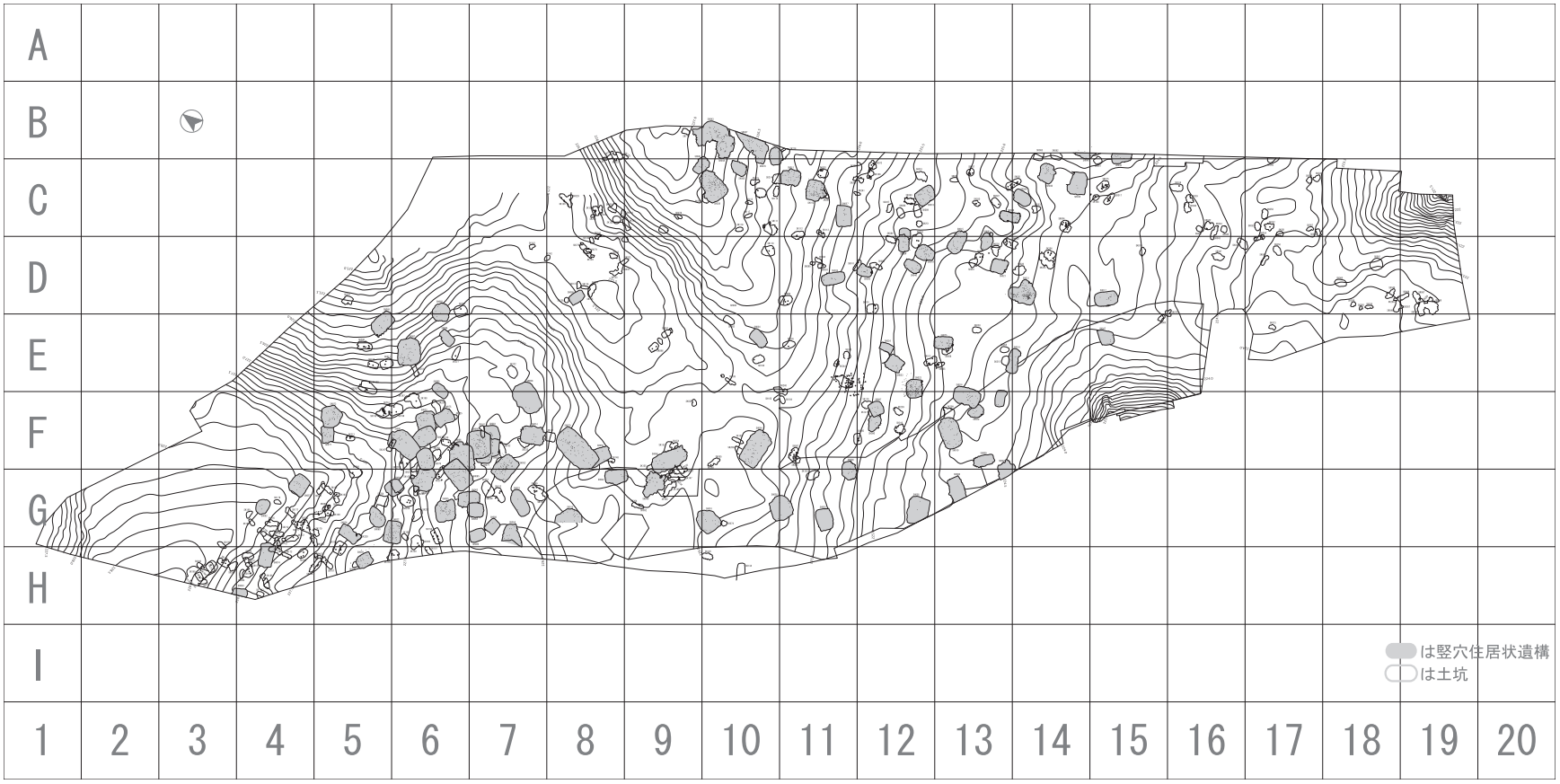
２　遺構

縄文時代早期の遺構としては，竪穴住居状遺構97基，土坑257基，連穴土坑15基，集石遺構54基，道路状遺構２条であった。

これらの多くは，前平式土器（１類）や加栗山式（３類）・吉田式土器（６類）など，早期でも前半期とされる土器型式の段階のものと考えられる。

竪穴住居状遺構としたものは，「状」を付しているものの，基本的には竪穴住居的な機能を持つ建物跡として捉えている遺構で，総数97基検出された。本遺跡の竪穴住居状遺構は，竪穴の内外に柱穴状ピットや炉の痕跡はほとんどみられないという特徴をもつ。

土坑257基の中には，竪穴住居状遺構より一回り小さいが，形状はほとんど同じという遺構もいくつか存在する。竪穴住居状遺構と土坑の違いは，遺構の検出面積を一つの目安としたということは，第Ⅲ章第３節（１）「遺構の認定」で述べた通りである。



第１図　縄文時代早期遺構位置図

（1）竪穴住居状遺構

竪穴住居状遺構は97基検出された。遺構が単独に検出されたものや，他の遺構と重複するが全形を想定できるものは計83基であった。

形状　検出面の形状は，隅丸長方形が圧倒的に多く，次に隅丸正方形，楕円形（ないし卵形），その他となっている。ただし，遺構に付随すると考えられる柱穴状ピットや炉跡，小土坑等はほとんど検出されておらず，建物内部の具体的構造は明瞭でない。言い換えれば，この状況からどのような建物が建つか検討することが必要となろう。

ところで，炉跡については，SH18とSH37の床面から焼土を含む小土坑が検出されている。いわゆる炉的な意味合いが強いものと考えていたが，それより下位にいずれも深さ１ｍほどもある土坑が検出されたことから，単純に住居内の炉という捉え方は慎重になる必要があろう。

規模　全形を想定できた83基のうち，検出面積が最大のものが17.52㎡，最小のものが2.45㎡，平均値が5.34㎡であった。４㎡以下の遺構が33と全体の約40％を占める。ちなみに，現在の１坪である3.3㎡より小さいものは22基（26.5％）であった。最大値を示すのはSH70で，２位のSH04，11.99㎡を大きく離している。これら２基を含む12基が約９㎡より広く，他の遺構の面積と比べてやや離れた傾向があることから，大形の部類として考えておきたい。

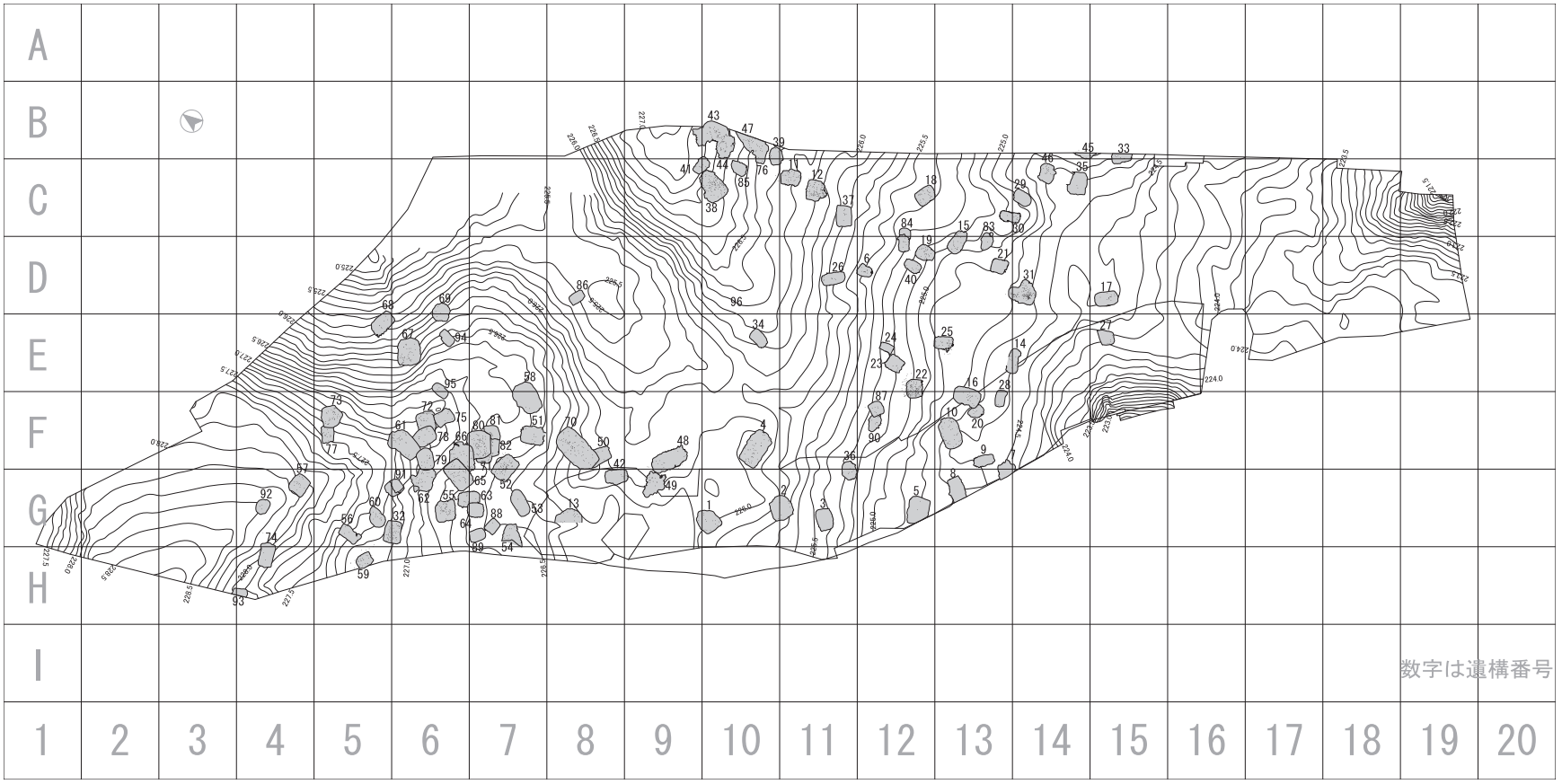
本報告では遺構壁面の傾斜の度合いを見るための数値として，「床面積」÷「検出面積」＝「壁面傾斜値」を提示した。数値が１に近いほど垂直度が高いということになる。また，形状をみる一つの目安として，「短軸」÷「長軸」＝「長短値」も提示した。数値が１に近いほど正方形，円形に近いということになる。

検出状況　97基のうち，ほぼ単独で検出されたのが36基であった。その他は，同じ竪穴住居状遺構や土坑・連穴土坑との重複，あるいは地層横転や削平や調査区外へ広がるもの等であった。遺構が重複するもののうち，２箇所の遺構群が際だっている。F，Ｇ－６区に展開する一群（第１遺構集中区）と，その南東側にありF，Ｇ－６区から７区にかけて展開する一群（第２遺構集中区）である。それぞれ６基，８基の竪穴住居状遺構が重複して検出された。

多くの遺構がⅨ層の薩摩火山灰を掘削して，Ｘ層やⅪ層まで達している中で，SH31やSH43のように薩摩火山灰を床面とする掘り込みが張り出し状に隣接して検出された例がある。薩摩火山灰上面で検出し，薩摩火山灰中に床面があるため，ひじょうに浅い。中には輪郭のみ把握できて，掘り込みまで確認できないものもあった。

これらが一つの遺構なのか，床面を異にする遺構の重複なのかは不明確であるが，埋土で違いが確認できないことや，それぞれの間で土器も接合すること等から，本報告ではひとつの遺構として把握しておきたい。

分布　竪穴住居状遺構の分布をみると，Ｂ－９区からＧ－12区方向へ南北に延びるラインを境に東西に分布している。また，連穴土坑のSK97がある谷部を取り巻くように分布しているようにもみえる。また，D，Ｅ－12，13区付近には，径20ｍの環状に分布しているようにもみえる。前述したように，F，Ｇ－６，７区には遺構が複雑に重複している２大遺構群が存在する。その周囲にも多くの竪穴住居状遺構がかなりの密度で存在しており注目される。このあたりは，標高228ｍを越える部分もあり，調査区域の中で最高所のある区域となっている。



第２図　竪穴住居状遺構位置図

表１　竪穴住居状遺構一覧表１

遺構名	検出区	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	床面積（㎡）	検出面積（㎡）	炉跡	備考
SH01	G9，10	略隅丸方形	310	275	6.02	6.86	無	SK74
SH02	G10，11	略隅丸方形	320	280	6.57	7.40	無	横転
SH03	G11	隅丸長方形	280	210	4.88	5.22	無	
SH04	F10	隅丸長方形	480	280	10.61	11.99	無	SK208
SH05	G12	隅丸長方形	360	275	8.01	8.81	無	横転，路線外
SH06	D12	隅丸長方形	195	155	2.26	2.49	無	SK11
SH07	F，G13，14	隅丸(長)方形	230	215	3.43	3.70	無	
SH08	G13	隅丸長方形	295	195	4.66	5.41	無	路線外
SH09	F13	隅丸長方形	265	140	2.99	3.28	無	
SH10	F13	隅丸長方形	415	250	8.68	9.01	無	SK209
SH11	C10，11	隅丸長方形	265	215	4.29	4.64	無	SK214
SH12	C11	隅丸長方形	265	220	4.85	5.15	無	SK09
SH13	G8	隅丸長方形	230	170	3.90	4.10	無	
SH14	E13，14	隅丸長方形	320	150	4.16	4.50	無	SK215
SH15	C，D13	隅丸長方形	320	190	4.35	4.95	無	
SH16	E，F13	隅丸長方形	305	225	6.84	7.10	無	SH20
SH17	D15	隅丸長方形	305	180	4.50	4.90	無	
SH18	C12	隅丸長方形	265	195	4.05	4.66	無	
SH19	D12	隅丸長方形	245	195	2.58	3.88	無	SK34
SH20	F13	楕円形	210	155	2.34	2.47	無	SH16
SH21	D13	隅丸方形	205	180	2.96	3.44	無	
SH22	E，F12	隅丸方形	245	210	4.10	4.48	無	
SH23	E12	隅丸方形	230	200	3.63	3.91	無	横転
SH24	E12	隅丸方形？	175	125	1.69	1.76	無	横転
SH25	E13，14	隅丸長方形	240	170	3.09	3.51	無	SK08
SH26	D11	隅丸長方形	310	155	3.15	4.22	無	
SH27	E15	隅丸長方形	195	190	2.95	3.31	無	路線外
SH28	E，F13	隅丸長方形	205	125	2.13	2.56	無	攪乱
SH29	C14	隅丸長方形	250	165	3.30	3.59	無	
SH30	C13，14	隅丸長方形	270	130	2.93	3.12	無	
SH31	D13，14	不定形	350	315	3.22	7.66	無	
SH32	G5，6	隅丸長方形	290	225	5.26	5.78	無	
SH33	B，C15	（隅丸方形？）	255	130	2.34	2.80	無	路線外

表２　竪穴住居状遺構一覧表２

遺構名	検出区	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	床面積（㎡）	検出面積（㎡）	炉跡	備考
SH34	E10	隅丸長方形	255	155	3.23	3.48	無	
SH35	C14	隅丸方形	290	245	5.87	6.59	無	攪乱
SH36	F, G11	楕円形	240	195	3.44	3.63	無	
SH37	C11	隅丸長方形	270	200	4.82	5.06	無	
SH38	C9, 10	隅丸長方形	415	300	8.61	9.76	無	SH41, SK219
SH39	B, C10, 11	隅丸長方形	230	160	2.96	3.12	無	SK238
SH40	D12	隅丸長方形	220	145	2.63	2.77	無	
SH41	C9, 10	隅丸長方形	235	165	2.37	3.01	無	SH38
SH42	F, G8, 9	隅丸長方形	300	195	3.98	4.80	無	
SH43	B9, 10	隅丸長方形	350	230	6.01	6.69	無	SH44
SH44	B10	隅丸長方形	295	225	4.95	5.58	無	SH43
SH45	B14	隅丸方形？	155	80	1.26	1.37	無	
SH46	C14	隅丸長方形	240	210	3.51	4.15	無	路線外
SH47	B10	隅丸長方形	345	220	4.43	5.41	無	SH76
SH48	G9, 10	隅丸長方形	490	240	9.09	9.83	無	SK152ほか
SH49	F, G9	不定形	385	270	4.32	6.14	無	
SH50	F8	隅丸長方形	340	200	5.28	6.22	無	SH70, SK148
SH51	F7	隅丸長方形	310	240	5.79	6.38	無	SK151, SK233
SH52	F, G7	隅丸長方形	340	255	6.71	7.69	無	
SH53	G7	隅丸長方形	360	185	5.11	5.54	無	
SH54	G7	隅丸長方形？	235	255	3.89	4.38	無	横転
SH55	G6	隅丸方形	275	260	5.48	6.32	無	
SH56	G5, 6	隅丸長方形	270	160	3.04	3.65	無	SK220
SH57	G4	隅丸方形	255	230	4.79	5.25	無	
SH58	E, F7	隅丸長方形	420	305	9.61	10.60	無	
SH59	H5	隅丸長方形？	210	165	2.76	3.15	無	SK223
SH60	G5, 6	不定形	295	190	2.99	3.91	無	SK254
SH61	F6	隅丸長方形	445	260	9.30	10.18	無	第1遺構集中区
SH62	F, G6	隅丸長方形	325	255	6.21	6.94	無	第1遺構集中区
SH63	G6, 7	隅丸長方形	280	195	4.28	4.85	無	SH64
SH64	G6, 7	隅丸方形	210	185	3.12	3.46	無	SH63
SH65	F, G6, 7	隅丸長方形	390	255	8.20	9.42	無	第2遺構集中区
SH66	F, G6, 7	隅丸方形	390	310	9.78	10.77	無	第2遺構集中区

表３　竪穴住居状遺構一覧表３

遺構名	検出区	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	床面積（㎡）	検出面積（㎡）	炉跡	備考
SH67	E6	隅丸長方形	350	300	8.49	9.14	無	
SH68	E5	隅丸長方形	330	205	5.25	5.85	無	
SH69	D, E6	隅丸方形	240	240	3.44	4.26	無	
SH70	F8	隅丸長方形	610	330	15.78	17.52	無	
SH71	F7	隅丸長方形	330	210	5.23	6.13	無	第2遺構集中区
SH72	F6	隅丸長方形	285	230	5.07	5.99	無	第1遺構集中区
SH73	F5	不定形	305	270	5.48	6.01	無	
SH74	H4	隅丸長方形	325	195	4.84	5.41	無	
SH75	F6	隅丸長方形	250	200	3.82	4.21	無	第1遺構集中区
SH76	B10	隅丸長方形	255	150	2.69	3.18	無	
SH77	F5	隅丸長方形	225	165	2.68	3.28	無	
SH78	F6	隅丸長方形	300	220	5.37	5.88	無	第1遺構集中区
SH79	F6	隅丸長方形	280	210	4.51	5.06	無	第1遺構集中区
SH80	F6, 7	隅丸長方形	360	305	9.33	10.06	無	第2遺構集中区
SH81	F7	（隅丸方形？）	180	180	2.34	2.67	無	第2遺構集中区
SH82	F7	（隅丸方形？）	225	110	1.53	1.81	無	第2遺構集中区
SH83	D13	楕円形	230	160	2.45	2.64	無	
SH84	C, D12	隅丸長方形	300	150	3.36	4.09	無	
SH85	C10	楕円形	240	160	2.42	2.87	無	
SH86	D8	隅丸長方形	205	135	2.19	2.45	無	
SH87	F12	隅丸方形？	180	175	2.69	2.93	無	
SH88	G7	隅丸長方形	185	150	2.39	2.54	無	
SH89	G7	隅丸長方形	210	155	2.48	2.92	無	
SH90	F12	楕円形	225	165	2.49	2.69	無	
SH91	G5, 6	隅丸方形	225	200	3.52	3.87	無	
SH92	G4	楕円形	210	165	2.44	2.74	無	
SH93	H3, 4	隅丸長方形？	190	100	1.52	1.67	無	
SH94	E6	隅丸長方形	215	135	2.30	2.64	無	
SH95	E, F6	隅丸長方形	225	190	2.27	2.66	無	
SH96	D, E10	隅丸長方形	240	140	2.66	2.81	無	
SH97	F7	隅丸長方形	310	180	5.10	5.50	無	第2遺構集中区

※　規模を示す数値については，想定値を含む。

１号竪穴住居状遺構（SH01：第３図）

検出状況　SH01は G9区と G10区にかけて検出された。当初本遺構は，平成16年度に実施された工事用道路部分の調査の一画で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であったが，遺構の南側のみの調査であったため，遺構内部の堆積状況を観察できる好条件を得ることができた。第３図の断面図がその記録である。東南隅で SK74が若干重複する状態で検出されたが，断面図をみると SK74より SK01が新しいことがわかる。

形状と規模　北側の一部がやや張り出すが，基本となる平面プランは隅丸方形と考えられる。長軸は3.10m，短軸が2.75mを測り，長短値は0.89であった。検出面からの深さは約35cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。第３図の断面図をみると実際の掘り込み面はさらに10～15cm程度上位にあったことが想定される。遺構の面積は，検出面で6.86㎡，床面積で6.02㎡を測り，本遺跡の平均値を約１㎡上回る数値となっている。壁面傾斜値は0.88であった。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は黒褐色土層を基本とし，黄色および白色のパミスを少量含む。ただし，埋土③にはブロック状に混入している部分も見られた。遺構下位に行くに従い，粘性が増し，床面直上の埋土は黒茶褐色の粘質土層となっている。

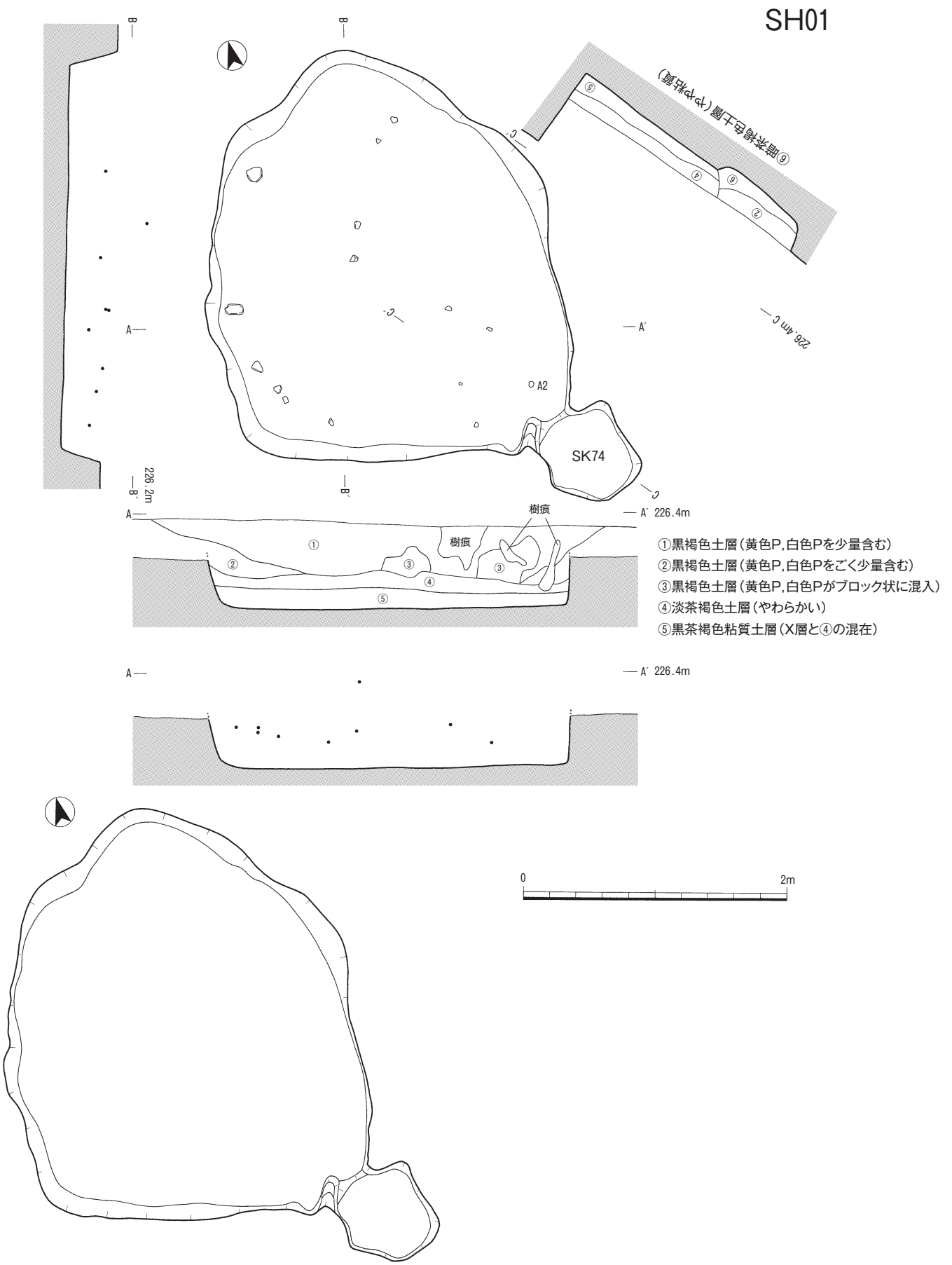
出土遺物　埋土中から出土した遺物は17点（含一括２点）で，うち４点を図化した。A1は前平式土器の胴部片で横位の貝殻条痕が施されている。A2は加栗山式土器の胴部片である。比較的明瞭な斜位の貝殻条痕の上に貝殻腹縁部による二列の刺突文が施されている。上野原遺跡で多く出土したタイプである。加栗山式土器は小片ながら他にも数点出土しているが，いずれも角筒土器であった。同一個体の可能性もある。A20は倉園Ｂ式土器の完形資料である。口縁部下に斜位の貝殻刺突文を巡らし，胴部には横位から斜位の貝殻条痕文が施されている。口唇部と底部の立ち上がりに刻みがみられる。遺構内からの１点と周辺の包含層から出土した29点の接合資料である。

B31は安山岩製の磨石である。長さ13.70cm，幅8.20cm，厚さ6.30cm，重量1074.00g と比較的大形の磨石である。また，長軸両端に敲き痕が明瞭にあり，むしろ敲石的な様相が強い。

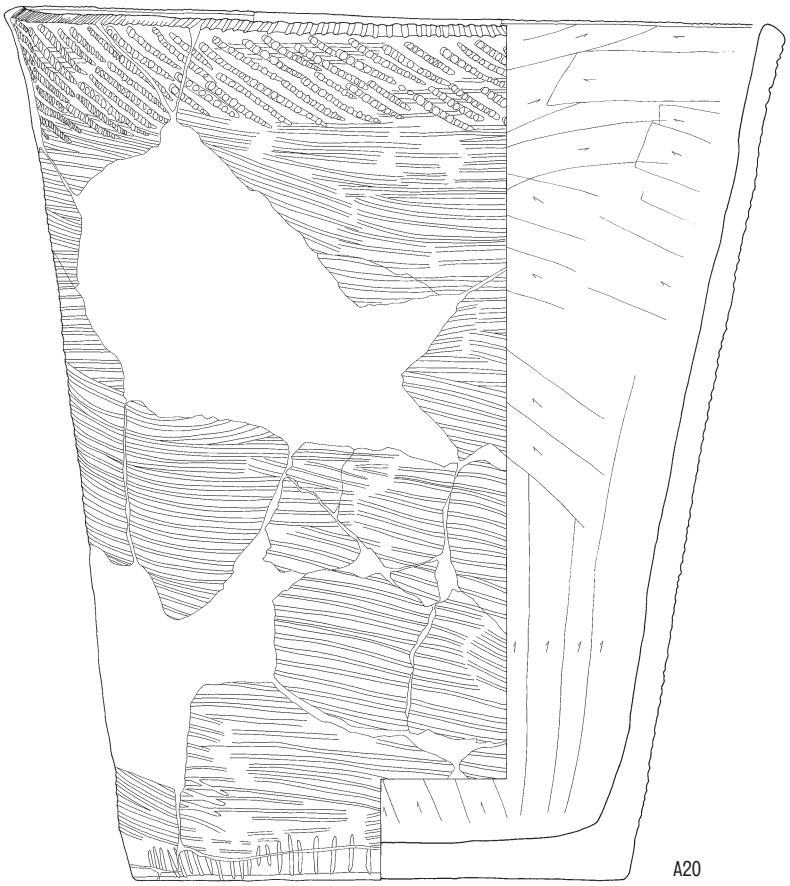
重複遺構　前述のように，SH01の東南隅には，先行する土坑である SK74が存在する。SK74は G10区で検出され，長軸が85cm，短軸が75cmの隅丸方形状の平面プランを呈している。深さは約25cmで，検出面積は0.43㎡であった。埋土は SH01と同様に黄色および白色のパミス混じりの黒褐色土層を基本とするが，下位には暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。出土遺物はなかった。

２号竪穴住居状遺構（SH02：第５図）

検出状況　SH02は G10区と G11区にかけて検出された。本遺構も SH01と同様に，平成16年度に実施された工事用道路部分の調査で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であるが，第５図断面図をみると，遺構埋土の上位にある埋土②はⅧ層の下部を削るような形で堆積していることがわかる。遺構壁面上端から南北に高さ10～20cm，幅約50cm，15～25度の角度で開くような形状を呈している。これが，遺構本来の形状を示すものなのか，廃棄後，竪穴が埋まっていく過程で削平されたのかについては不明である。ただ，上部構造を検討する上で参考になる事例であるといえる。東



第３図　１号竪穴住居状遺構実測図



C	4	5	6	7	8	9
D						
E						
F						
G						
H						

第４図　縄文土器出土状況図１

端で遺構側から外側へ傾斜する小規模（径約70㎝）な地層横転が検出された。

形状と規模　平面プランは円形に近い隅丸方形である。長軸は3.2m，短軸が2.8mを測り，長短値は0.88であった。検出面からの深さは約35㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。前述のように，掘り込み面がさらに10～20㎝程度上位にあった可能性も考えられる。遺構の面積は，検出面で7.40㎡，床面積で6.57㎡を測り，本遺跡の平均値を約１㎡上回る数値となっている。壁面傾斜値は0.89であった。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は黒褐色土層を基本とするが，比較的上位にある埋土②にはＰ13の一次ではないかと考えられる黄色パミスの小ブロックがみられ，全体的に黄色および白色のパミスを多く含んでいた。埋土③ではパミスも少量となり，埋土④ではほとんど見られなかった。最下部である埋土⑤は淡黄茶褐色の粘質土層であるが，埋土④と埋土⑤の境界で厚さ２㎝程度の硬化面を確認することができた。第５図遺構の中央付近に図化したのがそれである。「十」の字状に残したベルト下の一部で検出したが，それ以外にも広がっていた可能性が高い。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は９点（含一括２点）で，うち１点を図化した。A4は前平式土器の胴部片で横位の貝殻条痕が施されている。遺構内出土は一括で取り上げた小片の１点で，残り２点は包含層（Ⅶ層）出土の土器片であった。A4の内面の一部は剥げ落ちている。これは断面でも観察できるように，粘土を貼り付けて厚さを確保した部分の剥落と考えられる。

重複遺構　重複する遺構はないが，前述したように，東端で遺構側から外側へ傾斜する小規模（径約70㎝）な地層横転が検出された。アカホヤ火山灰（Ｖ層）も含まれているので，縄文時代前期以降の所産と考えられる。

３号竪穴住居状遺構（SH03：第６図）

検出状況　SH03はG11区で検出された。本遺構もSH01やSH02と同様に，平成16年度に実施された工事用道路部分の調査で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面である。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形で，長軸は2.80m，短軸が2.10mを測り，長短値は0.75であった。検出面からの深さは約20㎝と比較的浅い。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の面積は，検出面で5.22㎡，床面積で4.88㎡を測り，本遺跡の中では平均的な数値を示している。壁面傾斜値は0.94と高い。

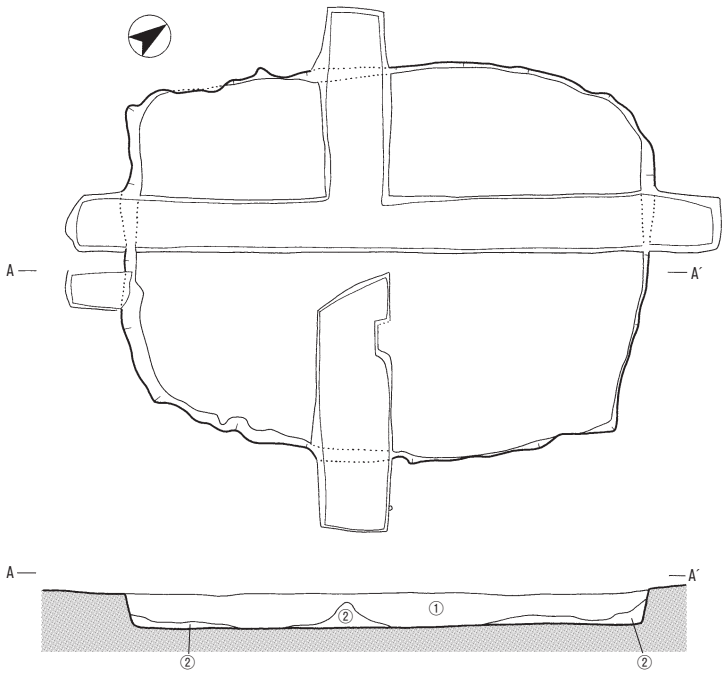
遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は黒褐色土層を基本とし，黄色および白色のパミスを少量含む。床面直上には淡茶褐色の柔らかい埋土②が堆積しているが，遺構の中央部にやや高まりを見せるという特徴がある。

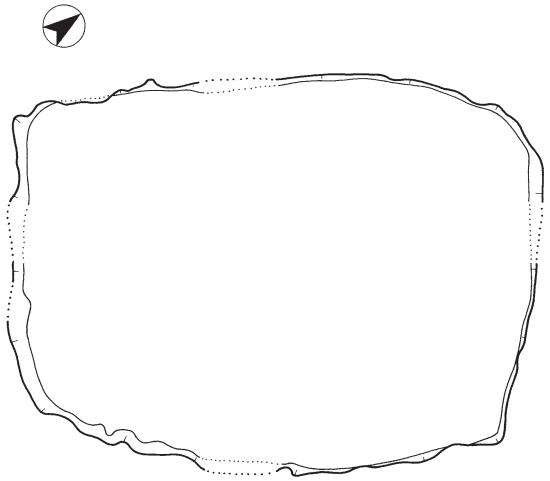
出土遺物　埋土中から出土した遺物は42点で，うち５点を図化した。A5とA6は前平式土器の口縁部片である。口縁部下にヘラ状工具による連続刺突文をそれぞれ１段，２段施している。胴部は横位ないし斜位の貝殻条痕が施されている。A7とA8は前平式土器の胴部片である。A9は前平式土器の底部片と考えられるものである。

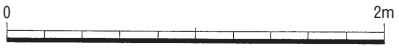
第５図　２号竪穴住居状遺構実測図

SH03



①黒褐色土層（黄色P,白色Pをごく少量含む）
②淡茶褐色土層（やわらかい）





第６図　３号竪穴住居状遺構実測図

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

４号竪穴住居状遺構（SH04：第７，８図）

検出状況　SH04はF10区で検出された。検出の段階では２つの遺構の重複ではないかと考え，SH06という番号も合わせて付していたが，全体的な形状やフラットな床面，あるいは埋土の状況等から，最終的には一つの遺構として記録した。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面でる。北西隅でSK208が重複した状態で検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形で，長軸は4.80m，短軸が2.80mを測る。長短値が0.58でかなり長方形度が高い。検出面からの深さは30～40cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の面積は，検出面で11.99㎡，床面積で10.61㎡を測り，本遺跡平均値の約２倍の数値で，大形の部類に入る。壁面傾斜値は0.88であった。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は黒褐色土層を基本とし，黄色および白色のパミスを含む。パミスは埋土②で多く（特に白色）みられ，埋土③は少量みられた。ただし，埋土③中や下位には，Ｐ13の黄色パミスがブロック状に堆積している部分も見られた。床面近くには暗茶褐色の粘質土がみられるが，東側は５cm程度，西側は20～25cmと，西側に行くほど厚く堆積しているのが観察された。

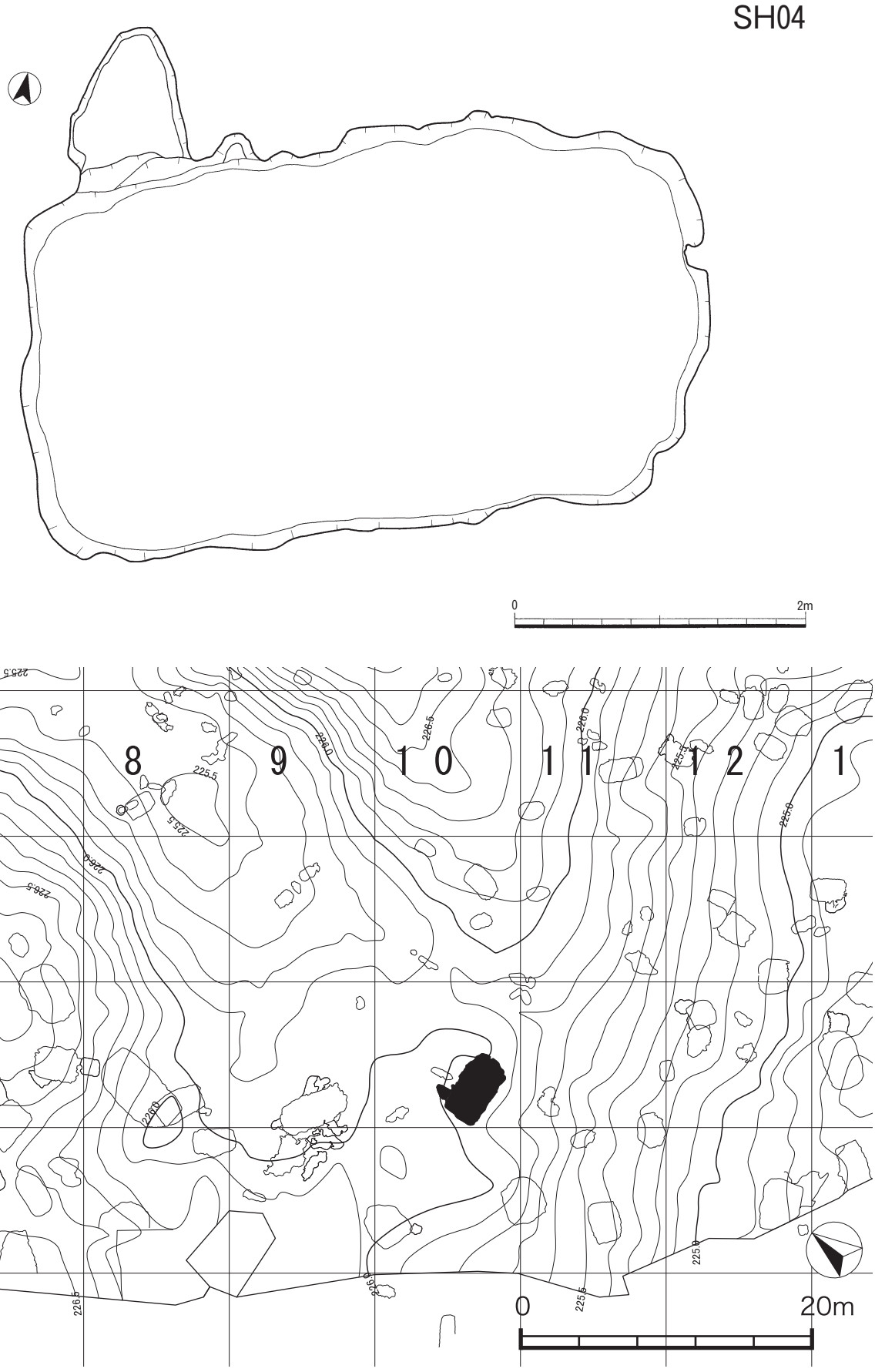
また，本遺構の埋土には，薩摩火山灰（Ｐ14）のブロックが４か所ほどみられた。いずれも浮いた状態であったので，入り込みと判断した。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は47点で，うち11点を図化した。A10～A12は前平式土器の口縁部片である。A10とA11はいずれも口縁端部外面に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。A12はフラットな口唇部にヘラ状工具による浅い押圧文が施されている。口縁部直下には，同じくヘラ状工具による縦位の連続押圧文（刺突文？）が巡らされている。胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。A13～A19は前平式土器の胴部片で，いずれも貝殻条痕を斜位に施すものである。A22は前平式土器の底部片である。底面の一部が若干残るが，厚さ４㎜と極めて薄いのが観察できる。斜位の貝殻条痕は底部から約２cmの幅でナデ消されている。A21は吉田式土器である。本遺構内出土の胴部片１点が周囲の包含層中の土器30点と接合したものである。口径22.6cmで，やや外傾する口縁部をもつ。口唇部は若干丸みが見られる部分があるものの，ほぼフラットを呈する。刻み等の文様はない。口縁部下に横位の貝殻刺突文を１段施し，その下位に縦位の貝殻刺突文を巡らしている。この刺突文は，幅約１cmで，「C」字状の刺突文の間に押引文を施す細かな文様構成となっている。胴部は押引文が全面に施されている。

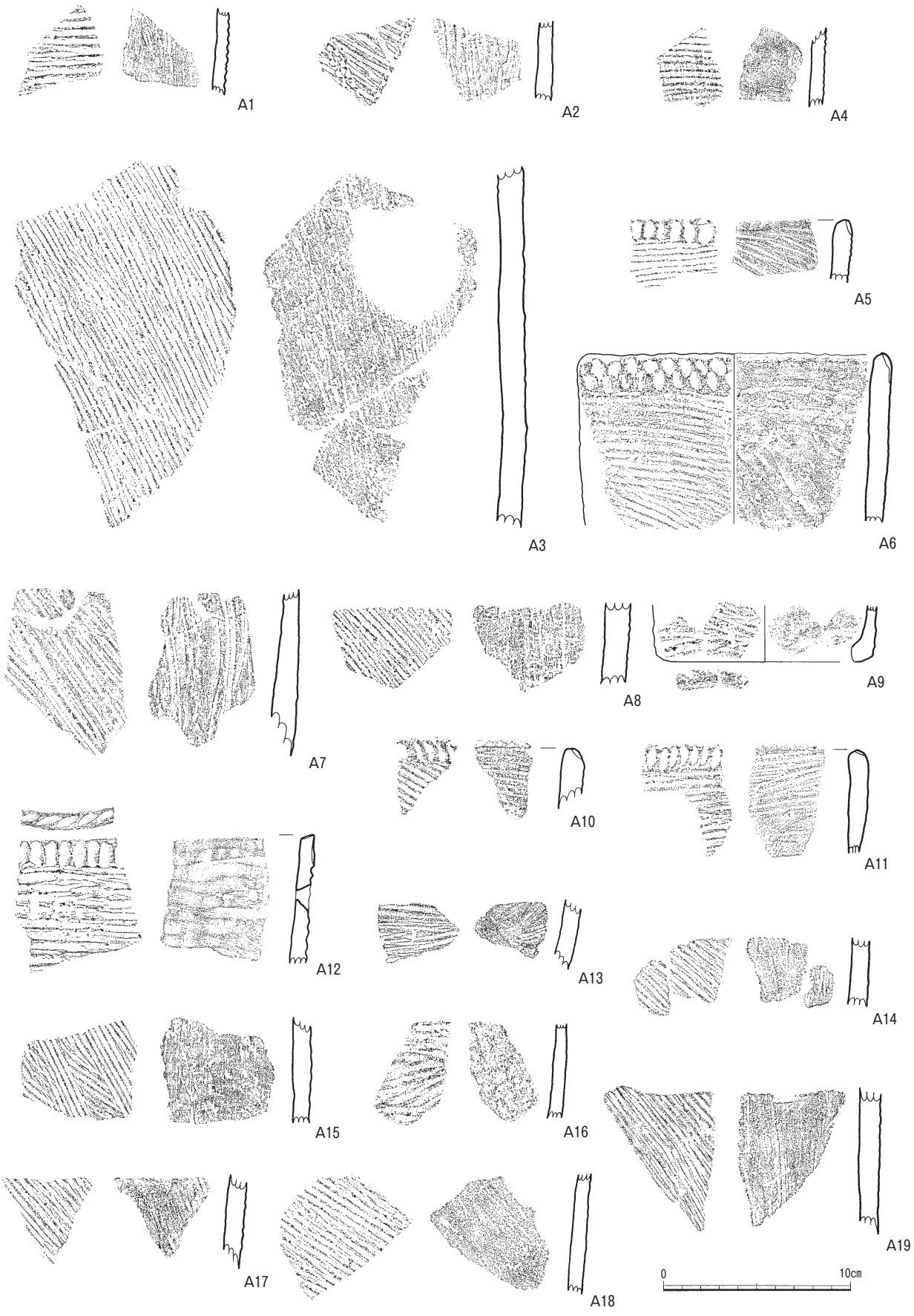
本遺構からは数点の軽石が出土しているが，明らかに加工品と考えられるのはB48とB49であった。他の軽石については，人工的な面を形成している可能性が見られるものもあるが，摩滅や風化がみられ，確証にはいたらなかった。B48は勾玉状の軽石加工品である。長さ4.50cm，最大幅2.40cm，最大厚1.90cmを測る。形状は勾玉状を呈し，勾玉の頭部に当たる部分に，穿孔途中とも考えられる凹みが２か所，対をなす位置に存在する。これは床面に近い位置で出土した。B49は厚さ２cm弱の扁平な軽石で表裏両面共に平滑に摩滅している。

SH04

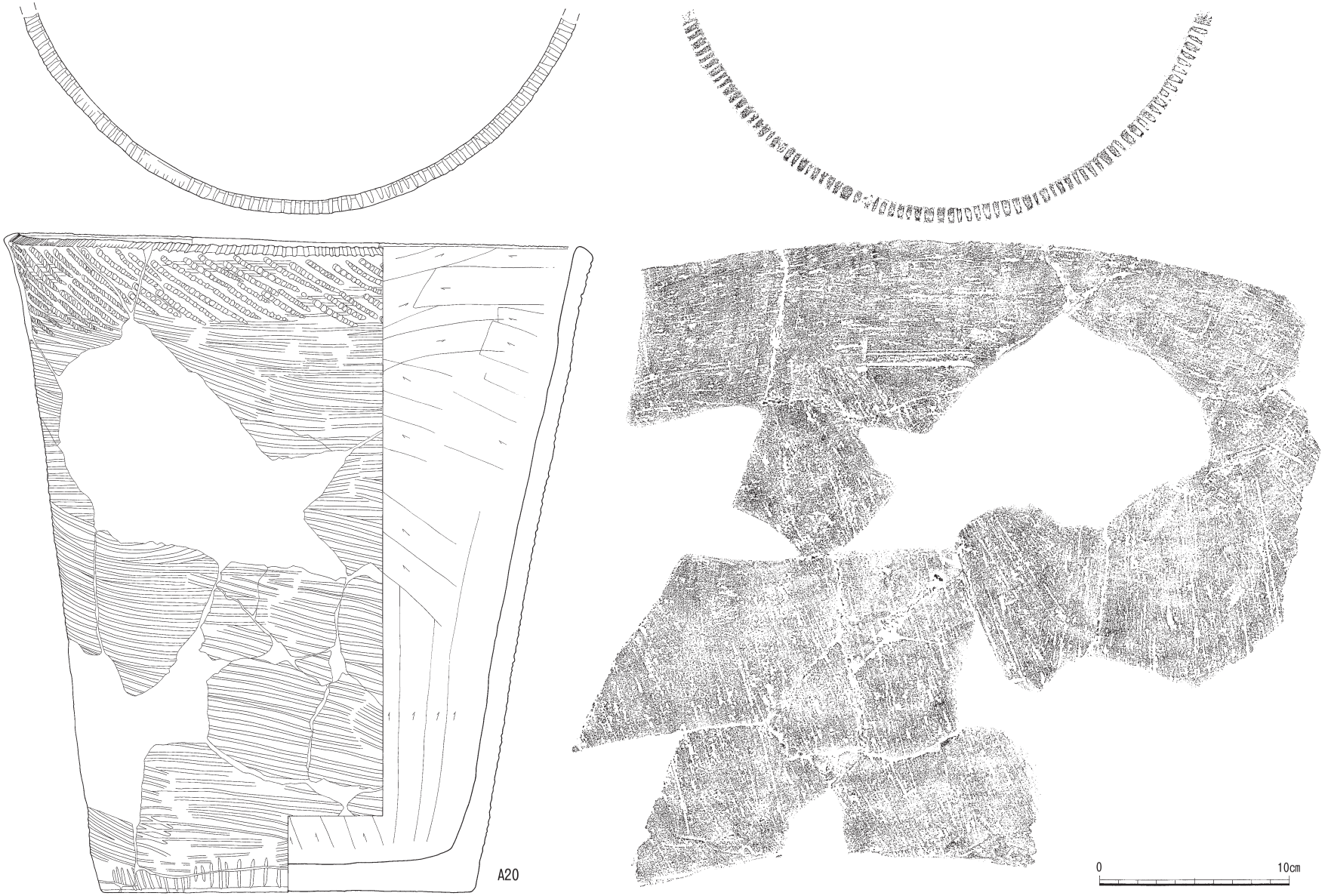
第７図　４号竪穴住居状遺構実測図１



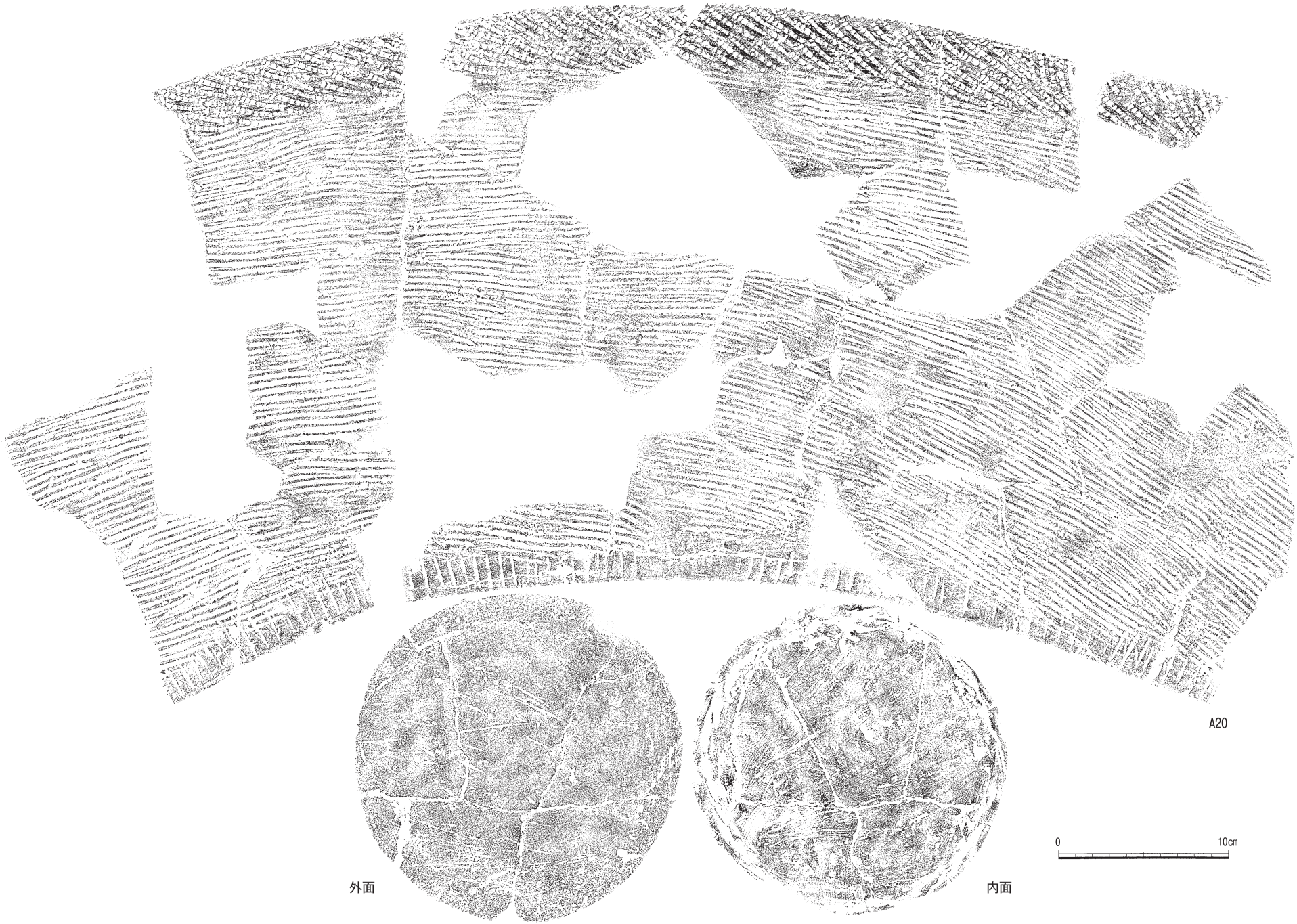
第８図　４号竪穴住居状遺構実測図２



第９図　竪穴住居状遺構内出土土器１



第10図　竪穴住居状遺構内出土土器２



第11図　竪穴住居状遺構内出土土器３

第12図　竪穴住居状遺構内出土土器４

重複遺構　前述のように，SH04の北西隅には，土坑 SK208が存在する。前後関係は不明である。現存する長軸が85㎝，短軸が80㎝で，楕円形状の平面プランが想定される。深さは約20㎝で，検出面積は0.55㎡であった。埋土は SH01と同様に黄色および白色のパミス混じりの黒褐色土層を基本とする。出土遺物は無かった。

５号竪穴住居状遺構（SH05：第13図）

検出状況　SH05は G12区で検出された。本遺構は，平成16年度に実施された工事用道路部分の調査の一画で検出された。遺構の南側は既存の林道によってすでに削平されていた。また，東側は地層横転によって大きく破壊されていた。第13図の断面図が示しているように，床面すれすれで破壊から免れた部分もあった。後述する出土遺物 A39は，まさにかろうじて残存した遺物で，接合・復元した結果，前平式土器の完形品となった。

検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　削平部分が多いため推定となるが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。残存している部分から数値を取ると，長軸は3.60m，短軸が2.75mを測り，長短値は0.76であった。検出面からの深さは残存部で約20㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。遺構の推定面積は，検出面で8.81㎡，床面積で8.01㎡を測り，本遺跡の平均値を大きく上回る数値となっている。推定壁面傾斜値は0.91であった。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は第13図の断面図のように，やや中央部が凹んでいる。地層横転による圧力が働いた結果である可能性も考えられる。

埋土　埋土は黒褐色土層を基本とし，黄色および白色のパミスを少量含む。遺構下位には淡褐色の比較的柔らかい層が堆積している部分もあった。

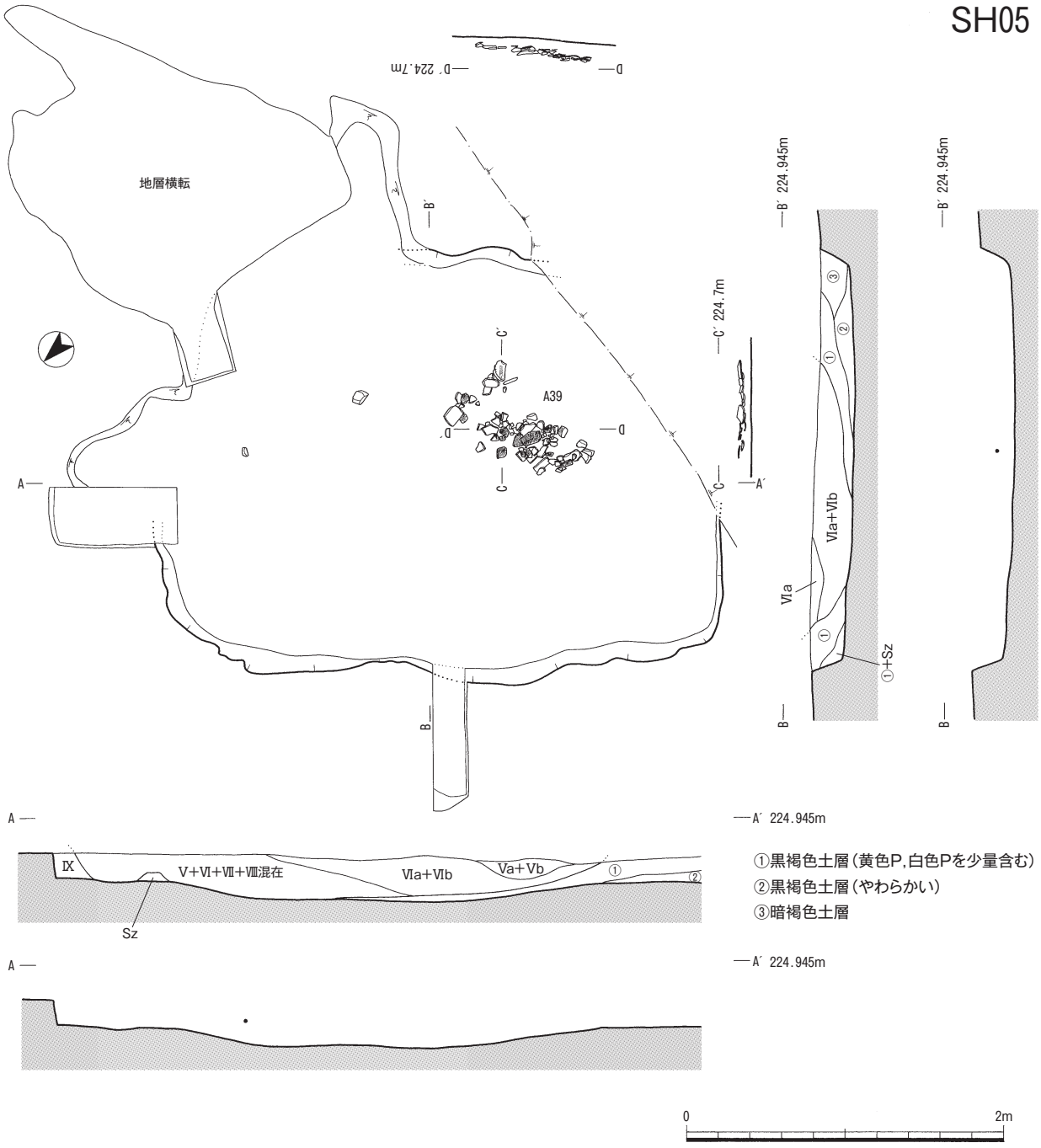
出土遺物　埋土中から出土した遺物は３点で，うち１点を図化した（A39）。この１点は前述した前平式土器の完形品である。これは遺構のやや南西寄りの床面近くでまとまって出土したもので，地層横転による削平からかろうじて免れた。口径18.5㎝，器高が31.5㎝を測る。口縁部下にヘラ状工具による２段の連続刺突文を巡らし，胴部を斜位の貝殻条痕で飾るものである。貝殻条痕は底部付近で横位に変化している。フラットな口唇部はやや内傾するが，水平を呈する部分もあり，一個体の中での変異が確認できる好資料である。内面は，ヘラ削り仕上げによる凹凸がみられる。

重複遺構　重複する遺構はないが，南部が林道による削平，東部および遺構中央の埋土部分が地層横転により破壊されていた。

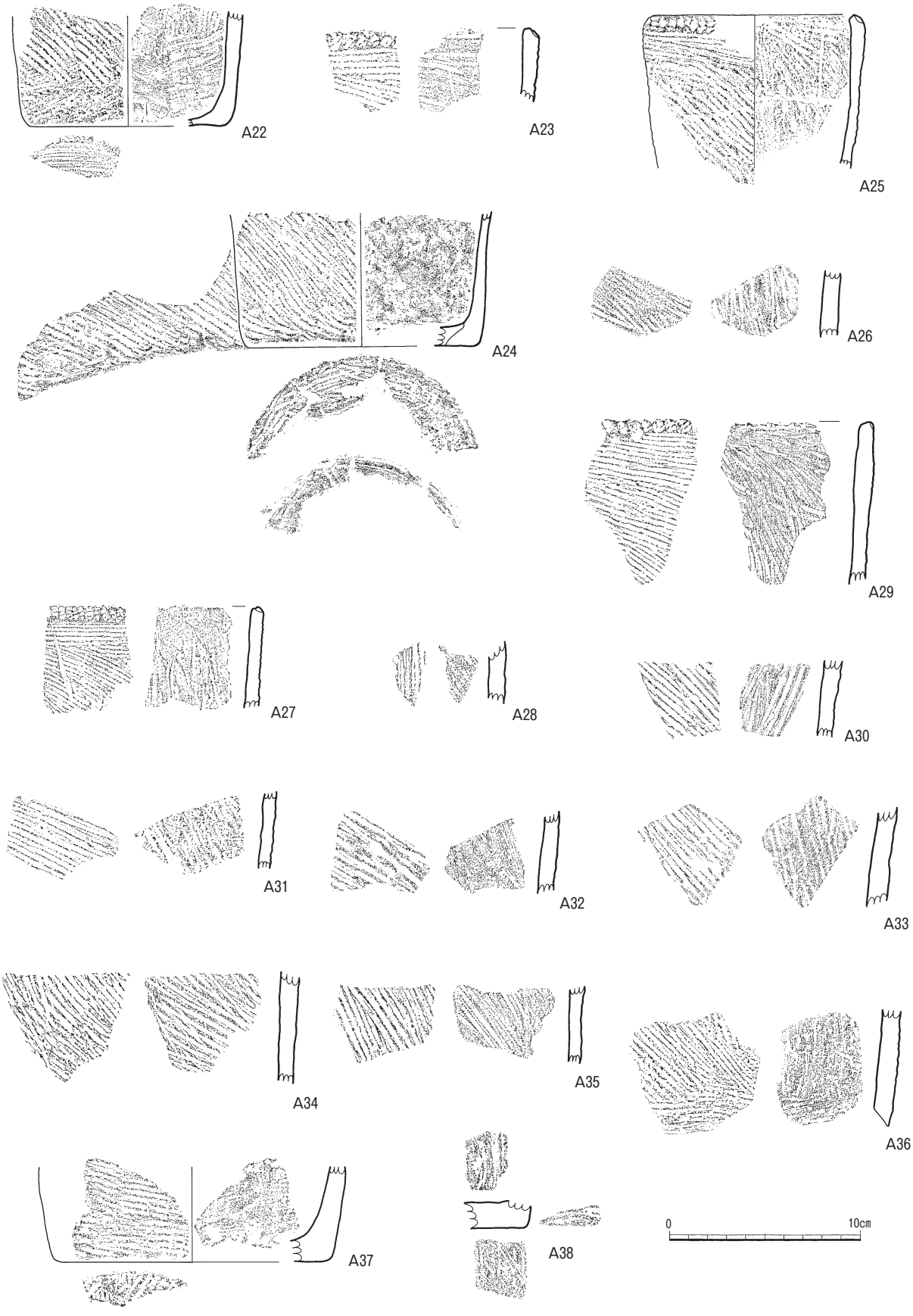
６号竪穴住居状遺構（SH06：第17図）

検出状況　SH06は D12区の11区寄りで検出された。当初（発掘調査段階）本遺構は，SK10，つまり土坑として記録していたが，形状や規模から，竪穴住居状遺構の範疇に入れて報告することにした。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。北隅で SK11が重複する状態で検出されたが，第17図の断面図をみると SH06より SK11が新しいことがわかる。

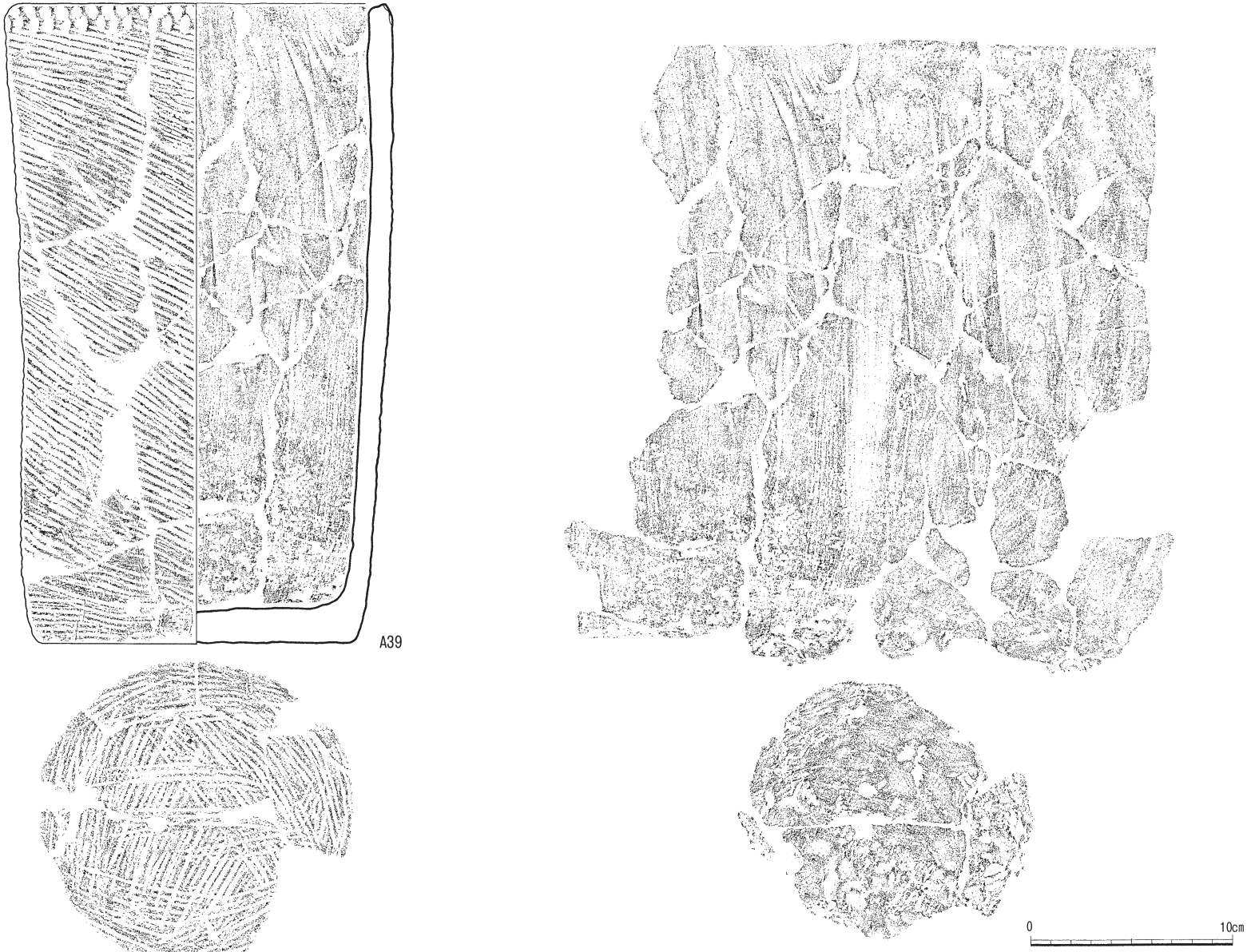
形状と規模　北側が SK11と重複することから全形は推定となるが，基本となる平面プランは隅丸



第13図　５号竪穴住居状遺構実測図



第14図　竪穴住居状遺構内出土土器５



第15図　竪穴住居状遺構内出土土器６

第16図　竪穴住居状遺構内出土土器７

長方形と考えられる。長軸は1.95m，短軸が1.55mを測り，長短値は0.79であった。検出面からの深さは20cm弱で，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。遺構の推定面積は，検出面で2.49㎡，床面積で2.26㎡を測り，推定壁面傾斜値は0.91であった。本遺跡で竪穴住居状遺構とした96基の中では，最も規模の小さい遺構である。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は淡黄褐色の粘質土（通常は遺構埋土の下位で検出される場合が多い）が主となり，一部に黒褐色のやや硬質の土がみられる。他の遺構の埋土状況や検出面からの深さが浅いことなどから，当時の掘り込み面はかなり上位にある可能性が高い。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は10点で，うち２点を図化した。A25は前平式土器の口縁部片である。口唇端部外面を潰すように貝殻腹縁部による刺突が巡っている。その直下は横位，さらにその下位は斜位の貝殻条痕が施されている。A26は前平式土器の胴部片で，外面に斜位の浅い貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　前述のように，SH06の北側には，SK11が存在する。SK11はD11区とD12区の境界線上で検出され，推定値であるが，長軸が160cm，短軸が80cmで，平面プランは不明である。深さは約12cmで，検出面積は1.25㎡であった。埋土は白色パミスを比較的多く含む黒褐色土層で，下位の埋土④には薩摩火山灰のブロック小粒も含んでいた。出土遺物が１点あった。

７号竪穴住居状遺構（SH07：第18図）

検出状況　SH07はF13，14区とG12，13区の４つのグリッドの接点で検出された。本遺構は，平成16年度に実施された工事用道路部分の調査の一画で検出された。SH05と同様に，遺構の南側は既存の林道によってすでに削平されていた。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　削平部分が多いため推定となるが，基本となる平面プランはおそらく隅丸長方形と考えられる。掘り込みラインには比較的凹凸がみられる。長軸は2.30＋αm，短軸が2.15mを測る。検出面からの深さは約10cmとかなり浅い。検出面がかなり低かったことによるものと考えられる。掘り込みは薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。残存部分の面積は，検出面で3.70㎡，床面積で3.43㎡を測り，壁面傾斜値は0.93であった。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。

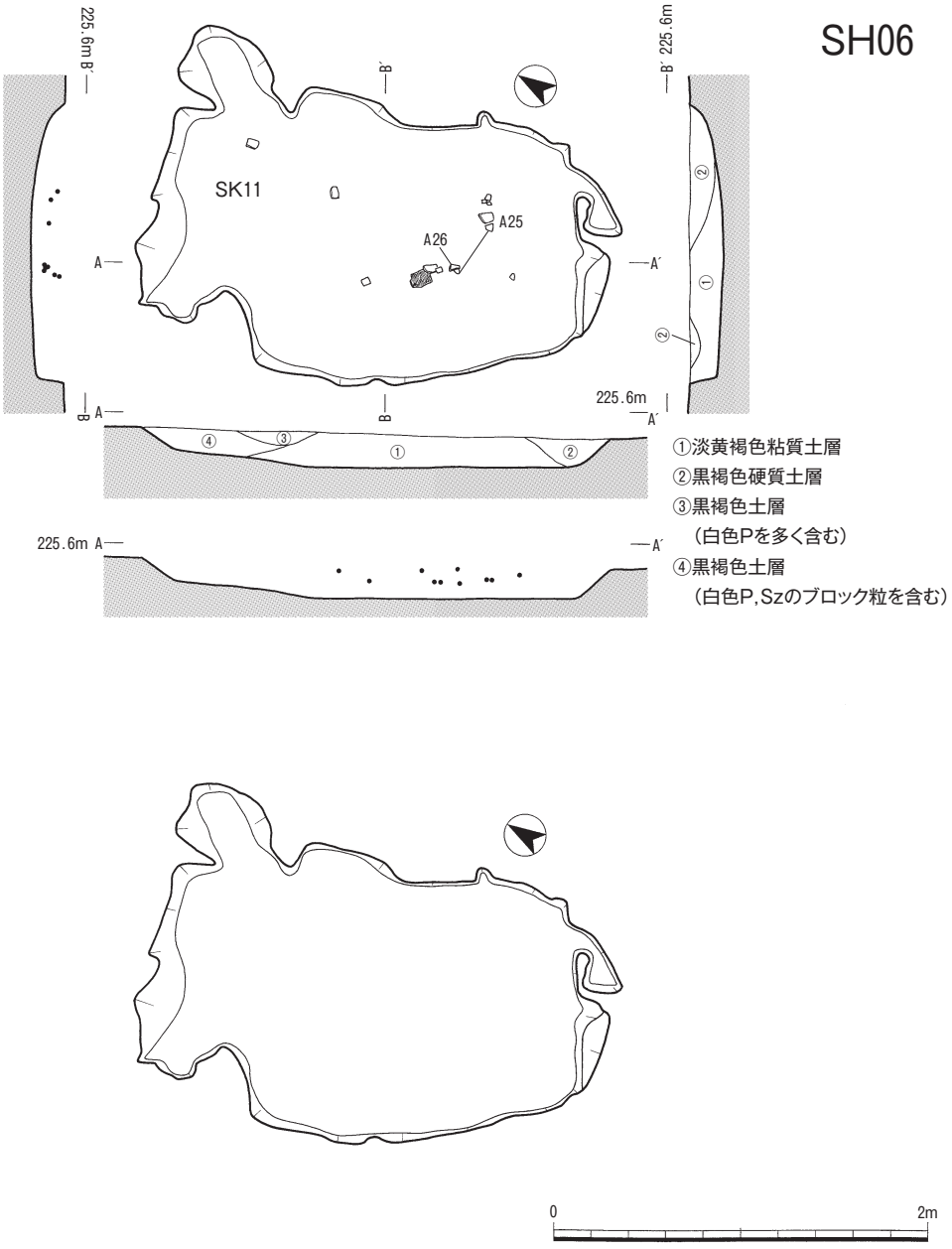
埋土　埋土は白色パミスをごく少量含み，やや硬質の暗褐色土をベースに，黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層が上位に堆積していた。また，薩摩火山灰のブロックもみられた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

重複遺構　重複する遺構はないが，南部が林道建設によって削平されていた。

８号竪穴住居状遺構（SH08：第18図）

検出状況　SH08はG13区で検出された。本遺構は，平成16年度に実施された工事用道路部分の調査の一画で検出された。SH05やSH07と同様に，遺構の南側は既存の林道によってすでに削平され



第17図　６号竪穴住居状遺構実測図

ていた。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　遺構の南側が削平されているが，基本となる平面プランはおそらく隅丸長方形と考えられる。長軸は2.95＋αm，短軸が1.95mを測り，この時点で長短値が0.66とかなり低い。つまり長方形度が高いと言うことになる。検出面からの深さは約18cmと浅い。SH07と同様に検出面がかなり低かったことによるものと考えられる。この付近は，遺跡が存在する台地の縁辺部に近く，薩摩火山灰層（Ⅸ層）の堆積が浅い。そのため，遺構の検出面が下位にずれ込んでいることが考えられる。掘り込みは薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。残存部分の面積は，検出面で5.41㎡，床面積で4.66㎡を測り，壁面傾斜値は0.86であった。

遺構の北隅には，長軸80cm，短軸40cmの楕円形ピットが存在した。床面からの深さは10cmと浅い。また，東隅には，三角形（底辺40cm，高さ15cm）状のステップがみられた。床面から約10cmほどの高さ，検出面から４cm下位の位置であった。ピットおよびステップの機能については不明である。焼土や炭化物が集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黒褐色土層で黄色および白色のパミスをごく少量含む。また，下位には淡茶褐色の柔らかいつちがみられた。

出土遺物　埋土中からは６点の遺物が出土した。A23は前平式土器の口縁部片である。フラットな口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。口縁部直下は横位，その下位は斜位の貝殻条痕が施されている。A24は底径12.4cmの底部片で，前平式土器と考えられる。胴部は底部付近まで斜位の貝殻条痕が施されている。また，底面にも貝殻条痕がみられる。胴部内面は黒ずみ，一部炭化物が付着している。

重複遺構　重複する遺構はないが，南部が林道建設によって削平されていた。

９号竪穴住居状遺構（SH09：第18図）

検出状況　SH09はF13区で検出された。本遺構もSH01やSH02と同様に，平成16年度に実施された工事用道路部分の調査で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面である。

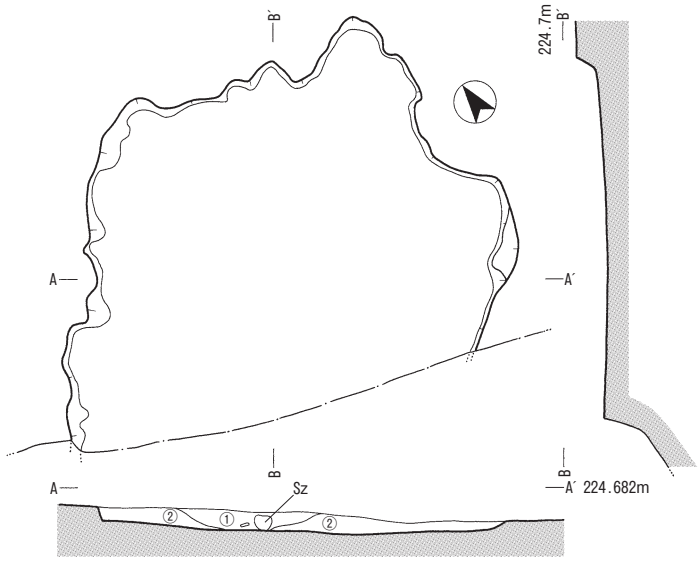
形状と規模　平面プランは隅丸長方形で，長軸は2.65m，短軸が1.40mを測り，長短値は0.53と長方形度がかなり高い。検出面からの深さは約15cmと浅く，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している部分は少なかった。遺構の面積は，検出面で3.28㎡，床面積で2.99㎡を測り，本遺跡の中では平均よりかなり小さい数値を示している。壁面傾斜値は0.91と高い。

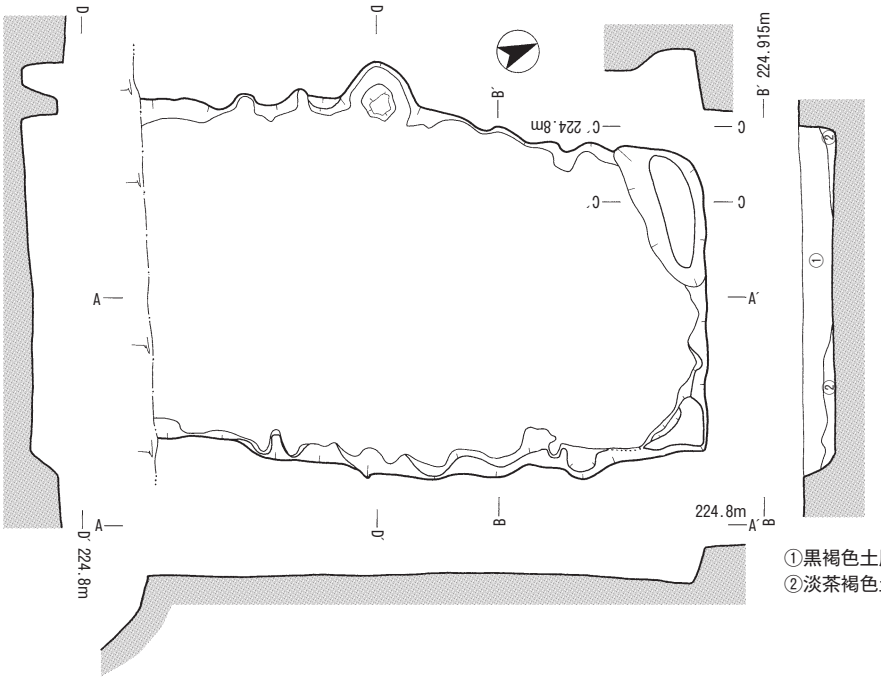
遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

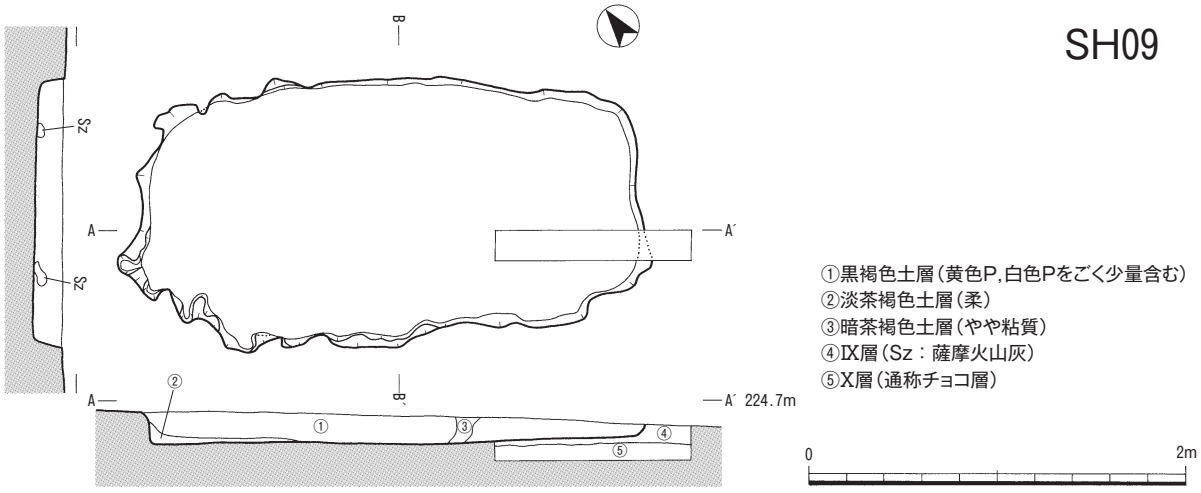
埋土　埋土は黒褐色土層を基本とし，黄色および白色のパミスを少量含む。床面直上には淡茶褐色の柔らかい埋土②が堆積していた。

出土遺物　埋土中からは３点の遺物が出土した。A27は前平式土器の口縁部片である。フラットな口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。口縁部直下は横位，その下位は斜位の貝殻条痕が施されている。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。







第18図　7，8，9号竪穴住居状遺構実測図

10号竪穴住居状遺構（SH10：第19図）

検出状況　SH10はF13区の12区寄りで検出された。本遺構も平成16年度に実施された工事用道路部分の調査で検出された。当初，複数（３基以上）の遺構が絡み合っている可能性を考え調査を進めたが，結局，大形の竪穴住居状遺構と土坑（SK209）が１基重複する複合遺構であることが判明した。第19図の断面図をみるとSK209よりSH10が新しいことがわかる。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　北側がSK11と重複するが，基本となる平面プランは隅丸長方形で，長軸は4.15m，短軸が2.50mを測り，長短値は0.60であった。検出面からの深さは10～25cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の推定面積は，検出面で9.01㎡，床面積で8.68㎡を測り，推定壁面傾斜値は0.96とひじように高かった。

遺構の北半中央に長軸140cm，短軸130cmの隅丸方形状の土坑が検出された。検出面積のわりに床面が狭く，ややすり鉢状の構造を呈している。埋土は遺構本体部の竪穴のものとほぼ同じで，淡茶褐色の粘質土をベースとして，その上位に黄色および白色のパミスが混入した黒褐色土層が堆積し果ていた。

その他に，柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は淡茶褐色の粘質土（埋土②）の上位に，黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）が堆積していた。埋土①は遺構内土坑のある部分と，遺構の南半分の中央部で厚くみられた。

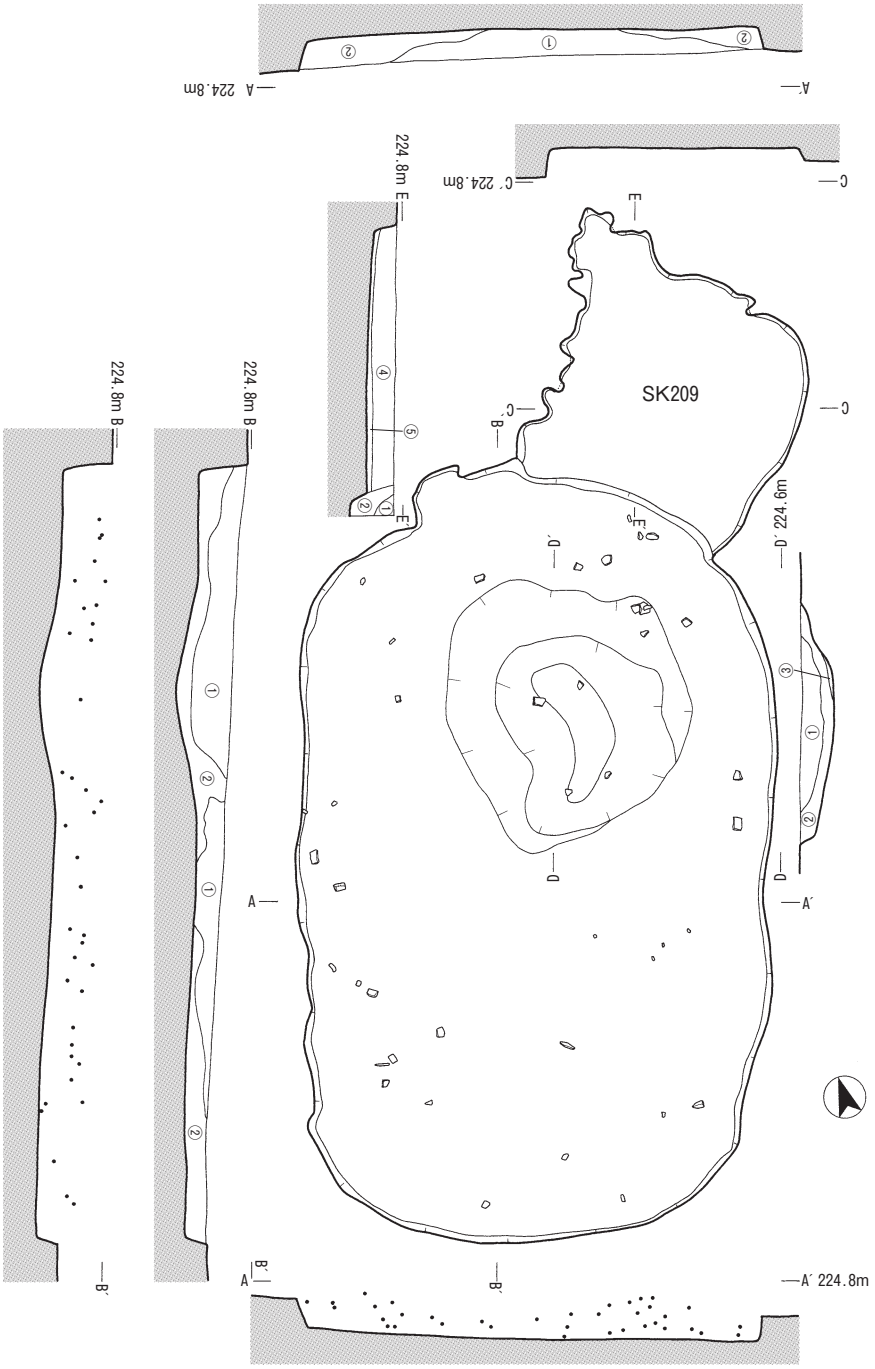
出土遺物　埋土中から出土した遺物は51点（Ｐ１の２点を含む）で，うち10点を図化した。A30～A38は前平式土器の胴部片で，貝殻条痕文を斜位に施したものである。A30～A35は，内面にも貝殻条痕がみられる。A36は底部に近い胴部片である。これも斜位の貝殻条痕文を基本とするが，底部付近は横位に変化している。A37とA38は底部片である。A37は横位に近い斜位の貝殻条痕文が見られる。底面にも若干貝殻条痕が残る。A38は底面の一部のみであるが，横位の貝殻条痕文が若干残っている。

A29は遺構内のＰ１から出土した，前平式土器の口縁部片である。フラットな口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。口縁部直下は横位，その下位は斜位の貝殻条痕が施されている。

B8は安山岩製のスクレイパー状石器である。現存する長さが14.35cm，幅5.30cm，厚さ1.30cm，重さ92.02gを測る。断面三角形状の大形剥片の両側面に細かな剥離を施して刃部を形成している。この石器は，２点の接合資料で，ほぼ半分のところで破損している。もう１点は，約10mと離れたSH16の埋土中から出土した。異なる遺構の埋土内同士で接合した興味深い例である。

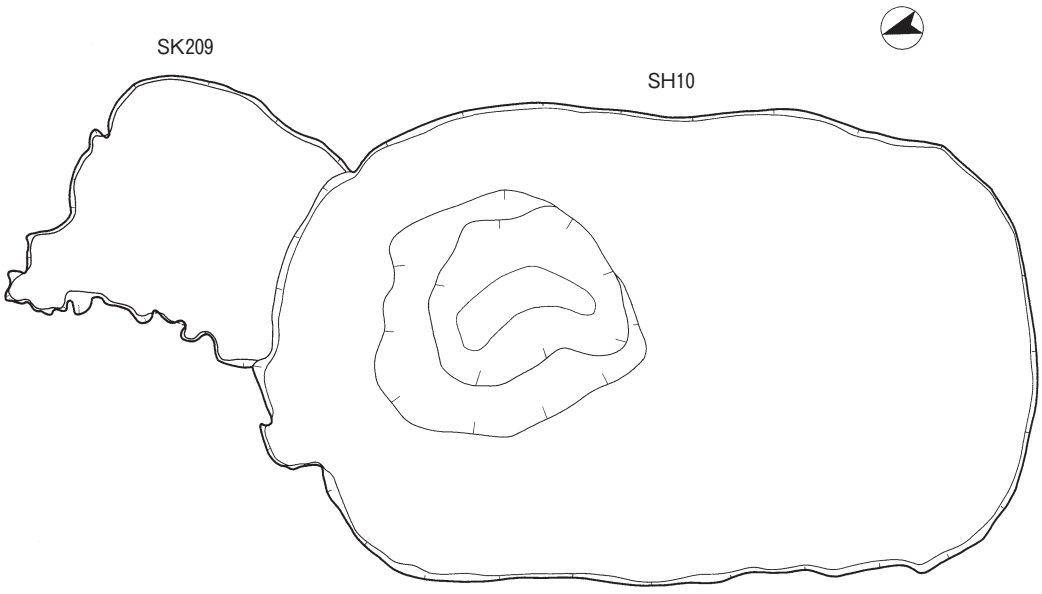
重複遺構　前述のように，SH10の北東隅には，SK209が存在する。SK209もF13区で検出された。現存する規模は，長軸が135cm，短軸が120cmで，平面プランは隅丸方形状を呈する。深さは約14cmで，検出面積は1.60＋α㎡であった。埋土は下位に淡茶褐色の粘質土が薄く堆積し，その上位に黄色および白色パミスをごく少量含む黒褐色土が堆積していた。出土遺物は無かった。

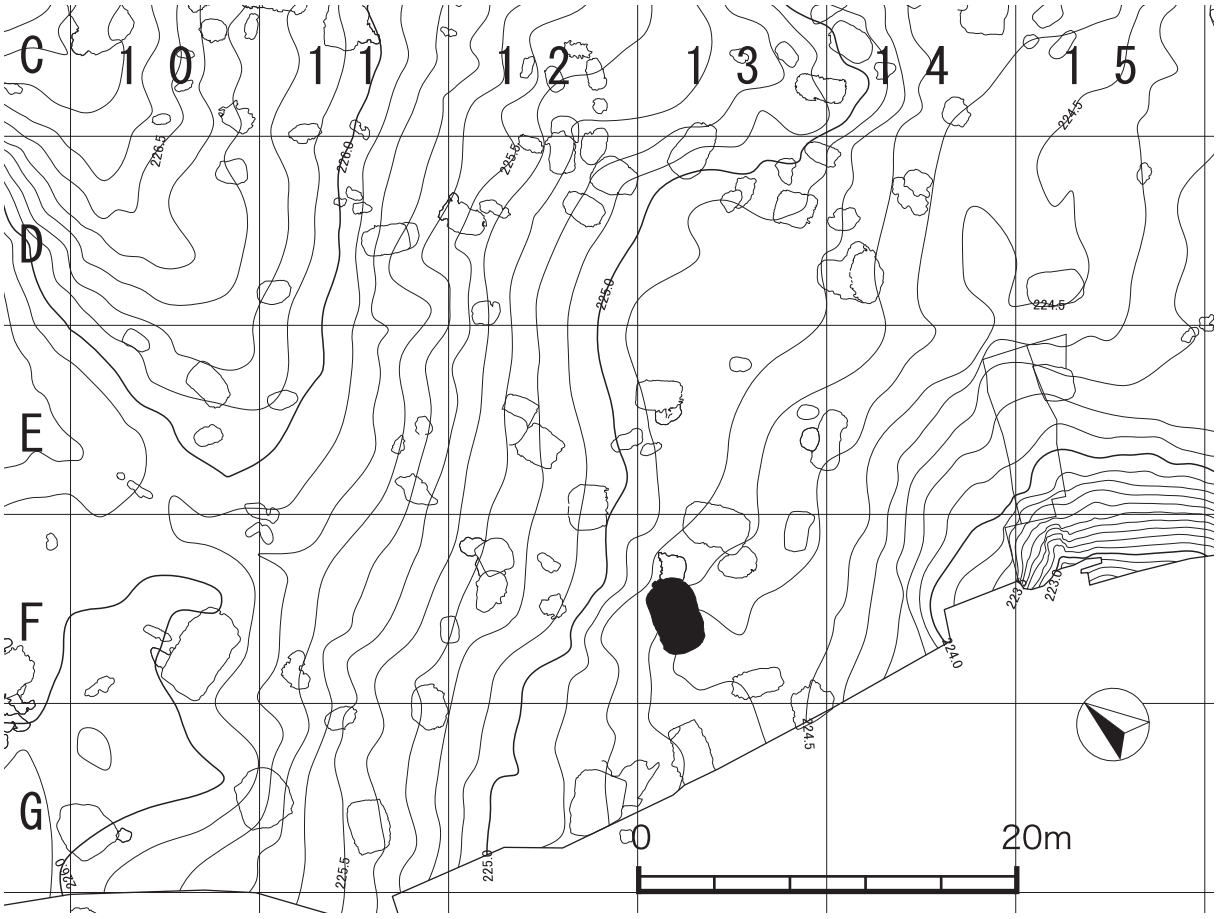
SH10



①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②淡茶褐色粘質土層
③暗黄茶褐色土層
④黒褐色土層
⑤淡褐色土層

第19図　10号竪穴住居状遺構１





第20図　10号竪穴住居状遺構２

11号竪穴住居状遺構（SH11：第21図）

検出状況　SH11はC11区の10区寄りで検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

本遺構の西側にはSK214が重複して存在する。ここでは，全体の平面形状から２つの遺構として記録した。たたし，後述するように，同一遺構とする可能性も残しておきたい。

形状と規模　東側でSK214と重複するが，基本となる平面プランは隅丸長方形で，長軸は2.65m，短軸が2.15mを測り，長短値は0.81であった。検出面からの深さは20～24cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の面積は，検出面で4.64㎡，床面積で4.29㎡を測り，壁面傾斜値は0.92と高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

前述のように，SK214と同一の遺構ではないかという可能性も考えた。その場合の長軸は3.60mで長短値は0.60と高い。

埋土　埋土は淡茶褐色の粘質土（埋土②）の上位に，黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）が堆積していた。埋土①のパミスは，上位に行くほど量が増す傾向があった。埋土②は遺構の北西隅で厚く堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は26点で，うち４点を図化した。A41は前平式土器の口縁部片である。フラットな口唇部の端部にヘラ状工具による連続刺突文を巡らすものである。口縁部直下は横位の貝殻条痕が施されている。A42とA43は前平式土器の胴部片である。器面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

B30は安山岩製の磨石である。長さ9.95cm，幅9.30cm，厚さ5.90cm，重量752.00gを測る。一部に敲き痕が明瞭に残る。

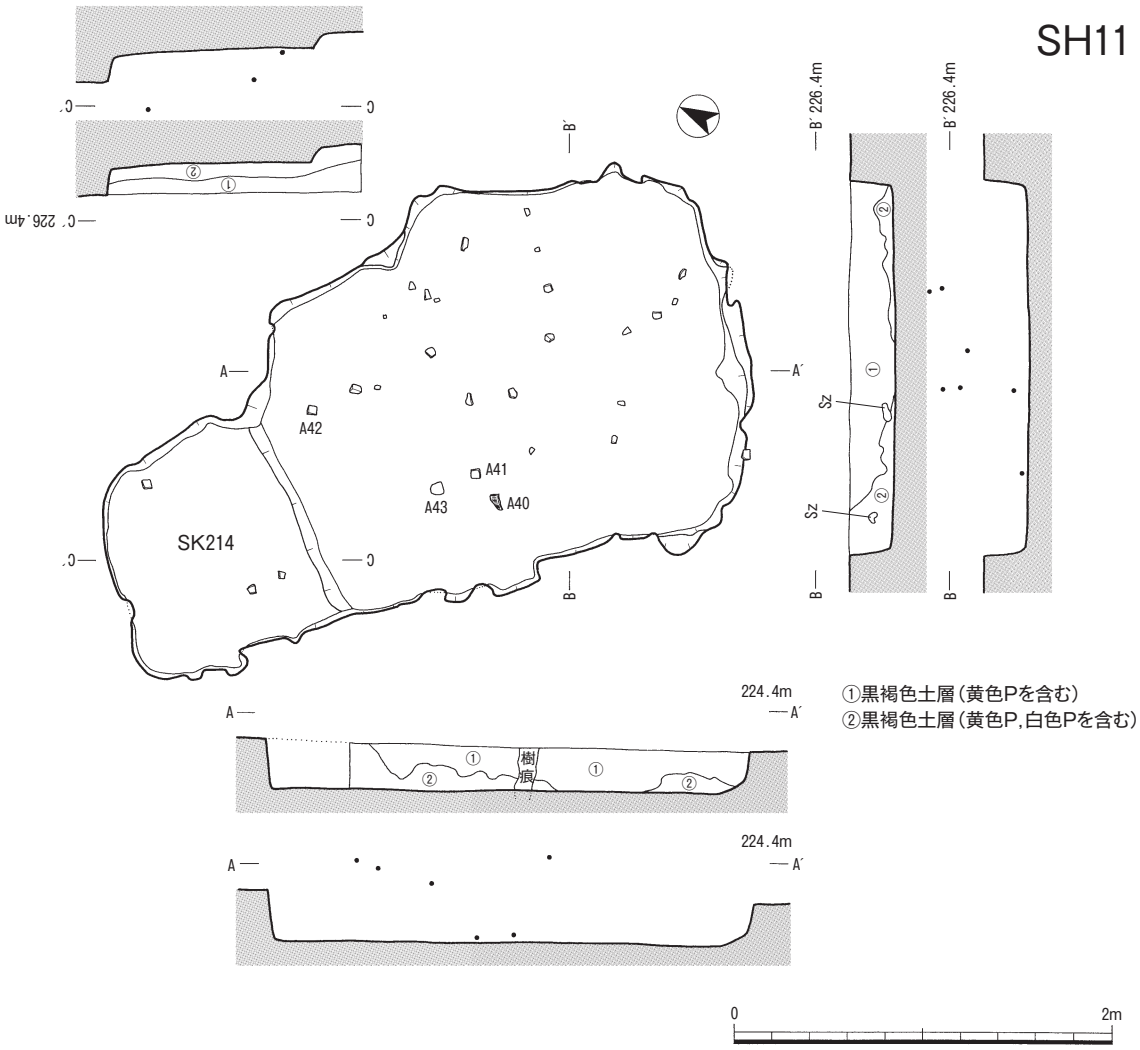
重複遺構　繰り返しになるが，SH11の北西側には，SK214が重複して存在する。SK214はC10区で検出された。現存する規模は，長軸が120cm，短軸が100cmで，平面プランは隅丸方形状を呈するものと考えられる。深さは約15cmで，検出面積は1.17＋α㎡であった。埋土は下位に淡茶褐色の粘質土が薄く堆積し，その上位に黄色および白色パミスをごく少量含む黒褐色土が堆積していた。出土遺物は３点で，いずれも小片であった。

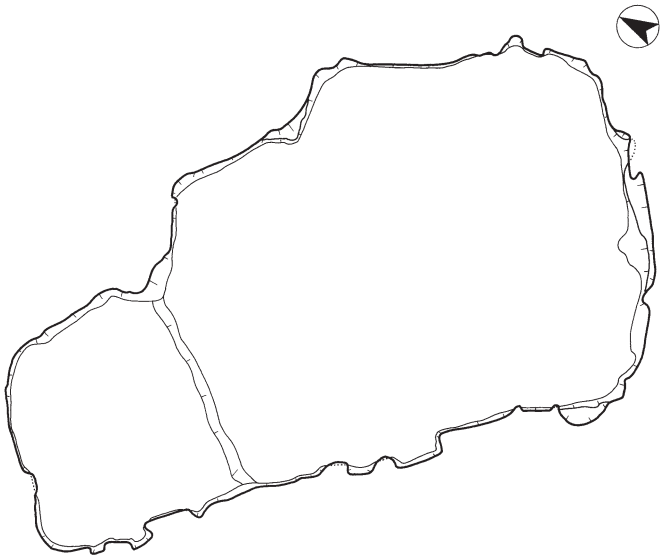
SH11とSK214の２つの遺構は，それぞれ平面プランの南側ラインが重なり，一直線をなすことや第21図断面図のように埋土も連続性があること等から，同一の遺構である可能性もある。全体の平面形状から２つの遺構としたが，SK214はSH11の張り出し部である可能性も考えられよう。

12号竪穴住居状遺構（SH12：第22図）

検出状況　SH12はC11区のほぼ中央で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。本遺構の南側にはSK09が重複して存在する。

形状と規模　南側でSK09と重複するが，基本となる平面プランは隅丸長方形で，長軸は2.65m，短軸が2.20mを測り，長短値は0.83であった。検出面からの深さは約30cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の面積は，検出面で5.15㎡，床面積で4.85㎡を測り，本遺跡の中では，平均より若干小さなサイズということになる。壁面傾斜値は0.94と高かった。





第21図　11号竪穴住居状遺構実測図

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡褐色土（埋土②），やや粘質の淡茶褐色土（埋土③）が堆積している。埋土①，②はほぼ遺構全体でみられたが，埋土③は，遺構の東側に偏ってみられた。

注目されるのは，遺構西部の中央に薩摩火山灰の大きな堆積が見られたことである。当初，この薩摩火山灰が１次なのか，それとも遺構の埋土中なのかについて不明瞭であったが，周囲の埋土①，②を掘り下げていくうちに，ブロック状の入り込みであることが判明した。つまり，この薩摩火山灰は，本遺構の埋土の中に浮いた状態で検出されたのである。

問題はこのブロックはどうして入り込んだのかという点である。意図的なのか自然なのか。本遺構のアウトラインが明らかな現状では，全くの自然現象で自然で入り込むことは考えにくい。遺構の一部が崩壊して堆積したということは考えられないのである。ただ，本遺構の製作当時，掘り上げられた土が竪穴の周辺部にあり，廃棄後自然と竪穴部へ流れ込んだという状況も考えられないこともない。しかし，第22図の断面図を見る限り，薩摩火山灰のブロックは独立しており，近くの壁側から入り込んだ様子は示していない。

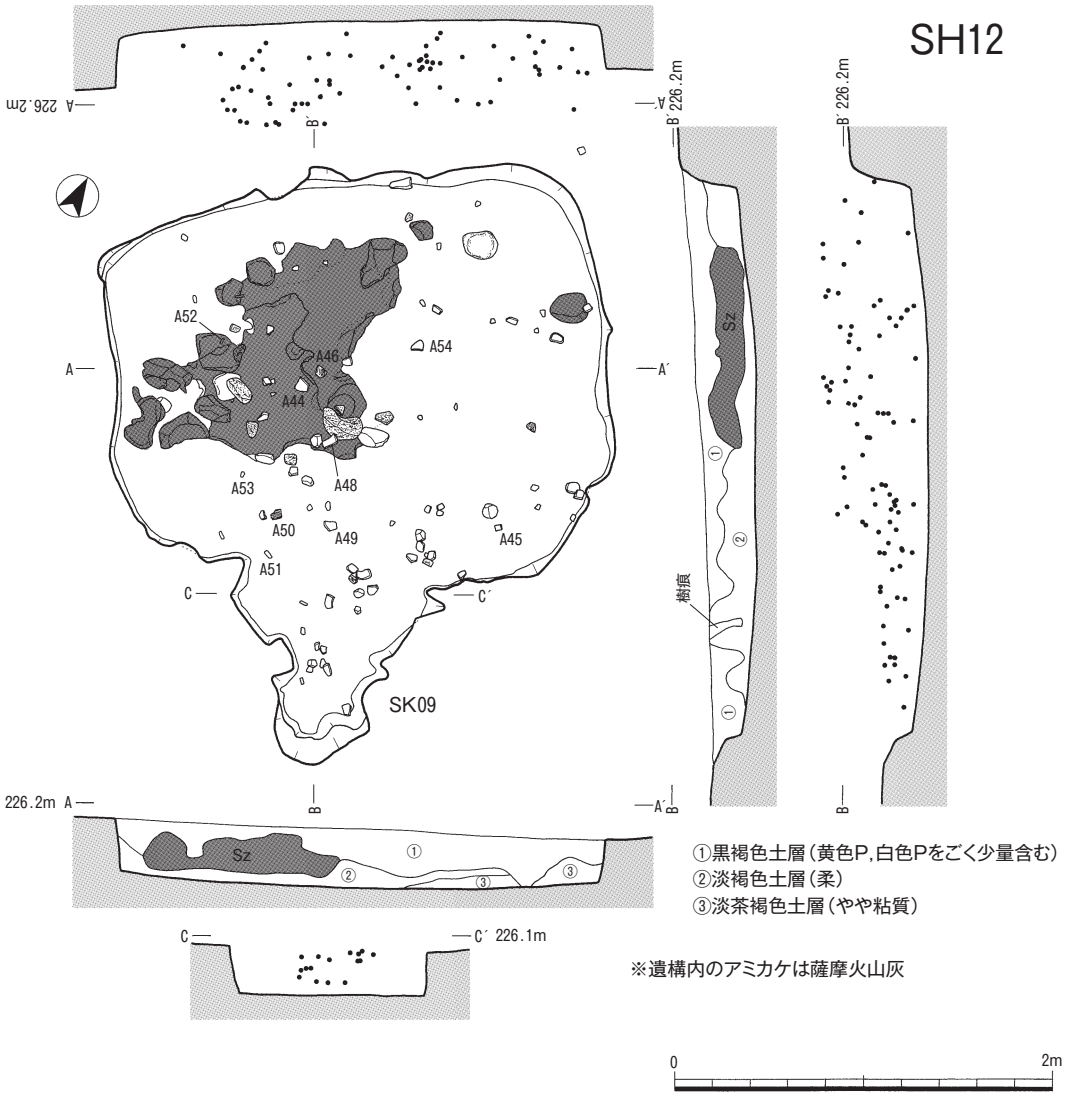
では，上から入り込んだとは考えられないだろうか？つまり，土屋根の想定である。柱穴状のピットも検出されておらず，本遺構の構造物としての具体的な資料を持ち合わせていない。当然，上屋についても同様で，屋根が茅状の植物で葺かれているのか，それとも土で覆われているのかについては，全く不明瞭である。しかし，竪穴を掘り下げる際，大量に排出される土（ここでは薩摩火山灰）の取り扱いが気になるところである。建物の外側をめぐる周堤帯として利用したり，土屋根として，屋根の上に薩摩火山灰をのせたりした可能性はないだろうか？その際の土が，廃棄後に上から落ち込んで堆積したのではというわけである。

意図的に薩摩火山灰を置いた，配置したということは考えられないだろうか？竪穴内の「しきり」として，あるいはテーブル状の高まり，台としての利用である。

いずれにしても，本遺構の構造や機能を解明する上で大きなヒントとなる状況であることには変わりない。部分的に入っている小児頭大のブロックも含め，薩摩火山灰の入り方には注意しておきたい。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は74点で，うち20点を図化した。A44～A47は前平式土器の口縁部片である。A46は断面が蒲鉾状を呈する口唇部をもち，端部外面を貝殻腹縁部の連続刺突文で飾るものである。口縁部直下は横位の，それより下位は斜位の貝殻条痕文が施されている。この土器は，包含層から出土した土器２点とも接合した。この包含層中から出土した２点の内面が黒色を呈するのに対し，遺構内から出土した１点の内面は明るい茶褐色を呈していた。全く異なる色調の土器同士が接合する例の一つである。A44と A45は口唇部文様にヘラ状工具を用いたものである。A44は口唇端部に，A45は口縁直下にそれぞれ施文されている。いずれも横位の貝殻条痕が見られるが，A44は下位の方で若干斜位になる傾向がみられる。

A48～A50は前平式土器の胴部片である。器面にはすべて斜位の貝殻条痕が施されている。A49は若干横位の部分も見られることから，底部に近い部分である可能性もある。



第22図　12号竪穴住居状遺構実測図

A51と A54は底部片である。前平式土器と考えられる。A54は底径16.2㎝を測る。底面の内外面に貝殻条痕が見られる。A51は底径10.4㎝を測るやや小形の土器である。胴部および底部内面では貝殻条痕がみられる。若干上げ底気味の底部外面には，白色の粘土痕が残る。

B1は玉髄製の凹基式打製石鏃である。B7は砂岩製の砥石で，長さ18.20㎝，幅14.80㎝，厚さ4.90㎝，重さ1842.00g を測る。扁平な自然礫の中央部を利用し，面は凹みを帯びている。B40は砂岩製の石皿片と考えられるものである。裏表両面に磨痕がみられる。

B51，B53，B71は軽石加工品である。B71は大形の軽石加工品で，湾曲する面を複数持つ。B51と B53はいずれも整形した一面に溝状の筋を複数もつものである。

重複遺構　繰り返しになるが，SH12の南側には，SK09が重複して存在する。SK09も C10区で検出された。現存する規模は，長軸が105㎝，短軸が100㎝で，あるが平面プランについては明瞭でない。深さは15～25㎝で，検出面積は0.66＋α㎡であった。埋土は下位に比較的柔らかい淡茶褐色土があり，その上位に黄色および白色パミスをごく少量含む黒褐色土が堆積していた。第22図断面図のように，重複する SH12との連続性にあまり違和感はない。そのため，出土した遺物が，どちらに属するものかについては不明瞭な部分が多い。ただし，SK09や SH12の SK09側には，長さ５㎝前後の小礫がややまとまって出土している。木炭片も見られることから，いわゆる集石土坑的な在り方も想定される。SH12をベースに，火を用いる施設として同時に SK09部分が存在したのか？それとも，時間差があるのか？２つの遺構の連続性に違和感がないとした埋土状況ではあるが，SK09側の床面に埋土②が存在しないことを考慮すると，SH12廃棄後に，SK09が掘られ，小礫を利用した火を用いる施設として用いられたという想定も成り立つかも知れない。そうすると，20個を越える小礫が集中する，長さが160㎝ほどの隅丸長方形状のプランも考えられよう。

出土遺物は３点で，２点を図化した。A52と A53は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

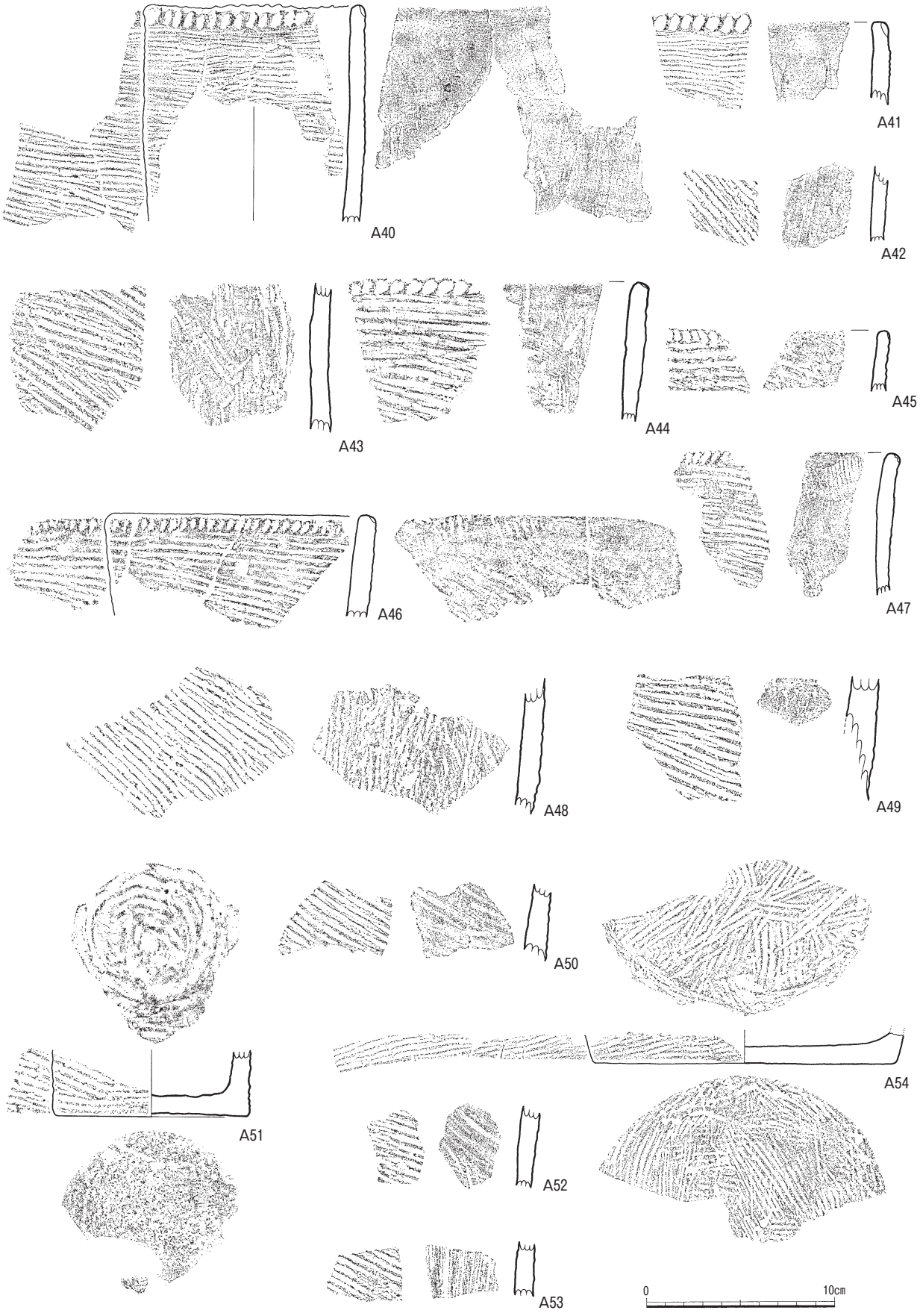
13号竪穴住居状遺構（ＳＨ13：第24，25図）

検出状況　SH13は G8区で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰層上面であった。本遺構の西側には，SK272が重複して存在する。また南側は，確認調査の際のトレンチで大きく削平されていた。

形状と規模　一部削平されていることから，全形は知り得ないが，平面プランは隅丸方形状を呈するものと考えられる。残存するデータからは，長軸2.30＋αｍ，短軸が1.70＋αｍを測る。検出面からの深さは約60㎝と比較的深かった。床面は薩摩火山灰層を掘り抜けて，X 層に達していた。遺構の推定面積は3.90＋α㎡であった。

柱穴状のピット，焼土や炭化物が集中するような痕跡はみられなかった。床面は凹凸もなく，ほぼ水平であった。

埋土　本遺構は埋土に特徴がみられた。第40図の断面図でもわかるように，竪穴部の埋土中位に P13と考えられる桜島噴出の軽石層が検出された。これは，P13の一次層と考えられるもので，本遺構が廃棄された後，竪穴部がまだ完全に埋まらない段階で P13の噴出物が降下し，堆積したものと想定されるのである。ただし，この軽石層は一様に堆積しているわけではなく，ブロックで見られることから，P13降下の規模や降下時の本遺構の状態を考慮する上で貴重なデータが得られたと



第23図　竪穴住居状遺構内出土土器８

考えられる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は42点で，うち６点を図化した。A55と A56は志風頭式土器と考えられる胴部片である。後者は確実に角筒土器，前者も角筒土器の可能性をもつ。地文とする貝殻条痕文の上から波状沈線文や貝殻腹縁部による刺突文等を重ねて施したものである。A57と A60は前平式土器の胴部片と考えられる。A58，A59は加栗山式土器の胴部片である。特に A59は第40図の断面図中央に見られるように，P13の軽石層よりも上位で出土した。このことがすぐに P13と加栗山式土器の時間的前後関係を示すものではないが，上野原遺跡の調査結果から，P13の降下は加栗山式土器の段階であると想定されていることと整合する状況といえる。ちなみに，志風頭式土器の破片は，P13の堆積層よりも下位の埋土から出土しており，P13と土器型式の関係を知る上で貴重な資料となった。

重複遺構　SH13の西側で重複して SK272が検出されている。長軸が155㎝，短軸が50㎝を測り，平面が隅丸長方形状をなす。北側一部には一段低い段を有している。遺構内からの遺物出土はなかった。

14号竪穴住居状遺構（SH14：第26図）

検出状況　SH14は E13区と E14区の境界線上で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。本遺構の北西側には SK215が重複して存在する。また，南東側は地層横転により削平されている。

形状と規模　SK215との重複，および地層横転による削平で全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は3.20m，短軸が推定で1.50mを測り，長短値は0.47と極めて長方形度が高い遺構である。検出面からの深さは約12㎝と浅い。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。遺構の推定面積は，検出面で4.50㎡，床面積で4.16㎡を測り，本遺跡の中では，平均よりやや小さなサイズということになる。壁面傾斜値は0.92と高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

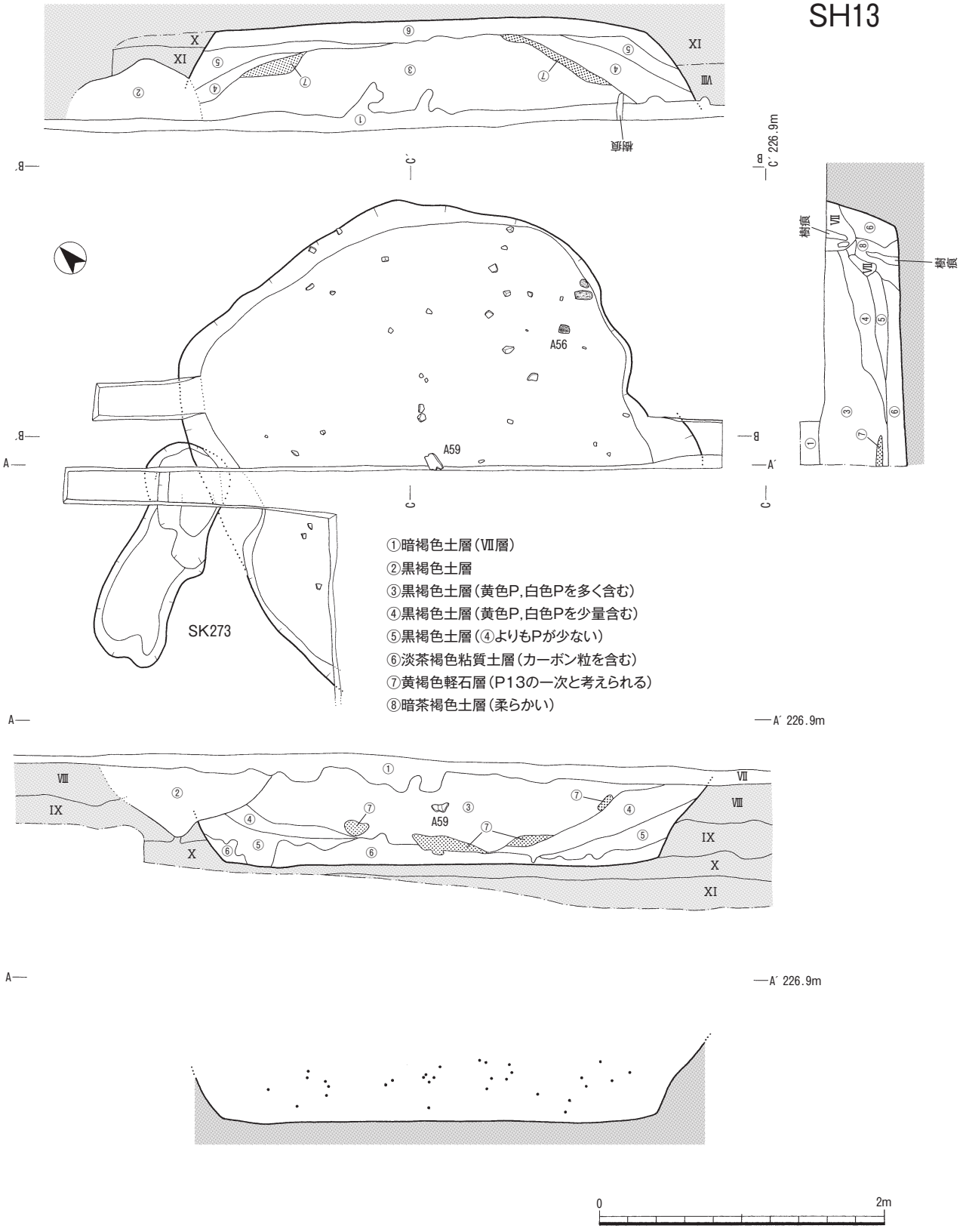
埋土　埋土の多くは黒褐色土層で，壁際付近の床面直上に比較的柔らかい淡褐色土が堆積していた。黒褐色土層中に黄色や白色のパミスが顕著に見られるような状況はなかった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は13点で，うち３点を図化した。A61は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕文が施され，炭化物が若干付着しているのが観察できる。A62とA63は前平式土器の底部片である。A63は底端部片，A62は底面部になる，A62は内外に貝殻条痕がみられる。

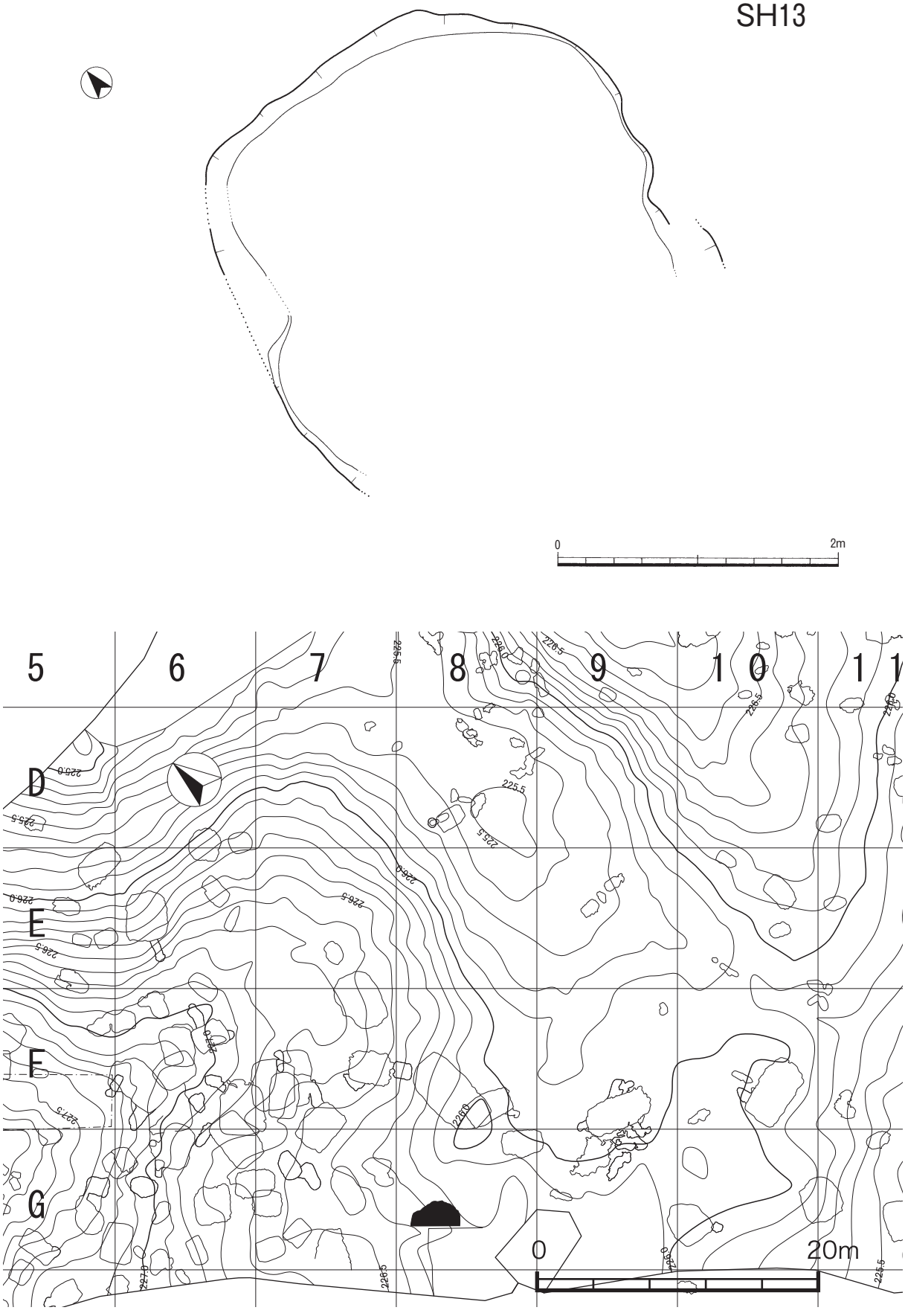
重複遺構　SH14の北側では SK215が重複して検出された。規模は，長軸が120㎝，短軸が100㎝でだ円状の平面プランをもつ。深さは約15㎝で SH14よりも深い。遺物は出土しなかった。

15号竪穴住居状遺構（SH15：第27図）

検出状況　SH15は C13区と D13区の境界線上において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。



第24図　13号竪穴住居状遺構実測図１



第25図　13号竪穴住居状遺構実測図２

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は3.20m，短軸が推定で1.90mを測り，長短値は0.59と長方形度が高い。検出面からの深さは約15cmと浅い。薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。遺構の推定面積は，検出面で4.95㎡，床面積で4.35㎡を測り，本遺跡の中では，平均よりやや小さなサイズということになる。壁面傾斜値は0.88であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかったが，遺構の西側で長さが130cm，幅が25cmのステップが検出されている。床面からの高さは約５cmである。床面に凹凸は見られずほぼ平坦であるが，西側へ傾斜しているのが特徴的である。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。また，埋土①と②の境界線上では，拳大の薩摩火山灰がブロック状に入り込んでいる部分もみられた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は24点で，うち13点を図化した。A64とA66は前平式土器の口縁部片である。A64はフラットな口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。A66は断面が蒲鉾状を呈する口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。いずれも口縁直下は横位のその下位には斜位の貝殻条痕文が施されている。A66は同一個体と考えられる土器片が周辺の包含層中から数点で出土している。A68～A73は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻刺突文がみられる。

B9とB10は安山岩製のスクレイパー状石器である。いずれも欠損品であるが，現存する状況は，B9が長さ8.50cm，幅6.00cm，厚さ1.20cm，重さ46.82g，B10が長さ3.20cm，4.95cm，厚さ0.60cm，重さ8.29gを測る。B9は断面三角形状を呈する剥片の縁辺部に細かな剥離を行い，刃部を形成している。B10は断面が台形状を呈する剥片の縁辺に剥離を行い，刃部を形成したものである。

B52は軽石加工品である。２本の溝が「Ｖ」字状に刻まれている。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

16号竪穴住居状遺構（SH16：第29図）

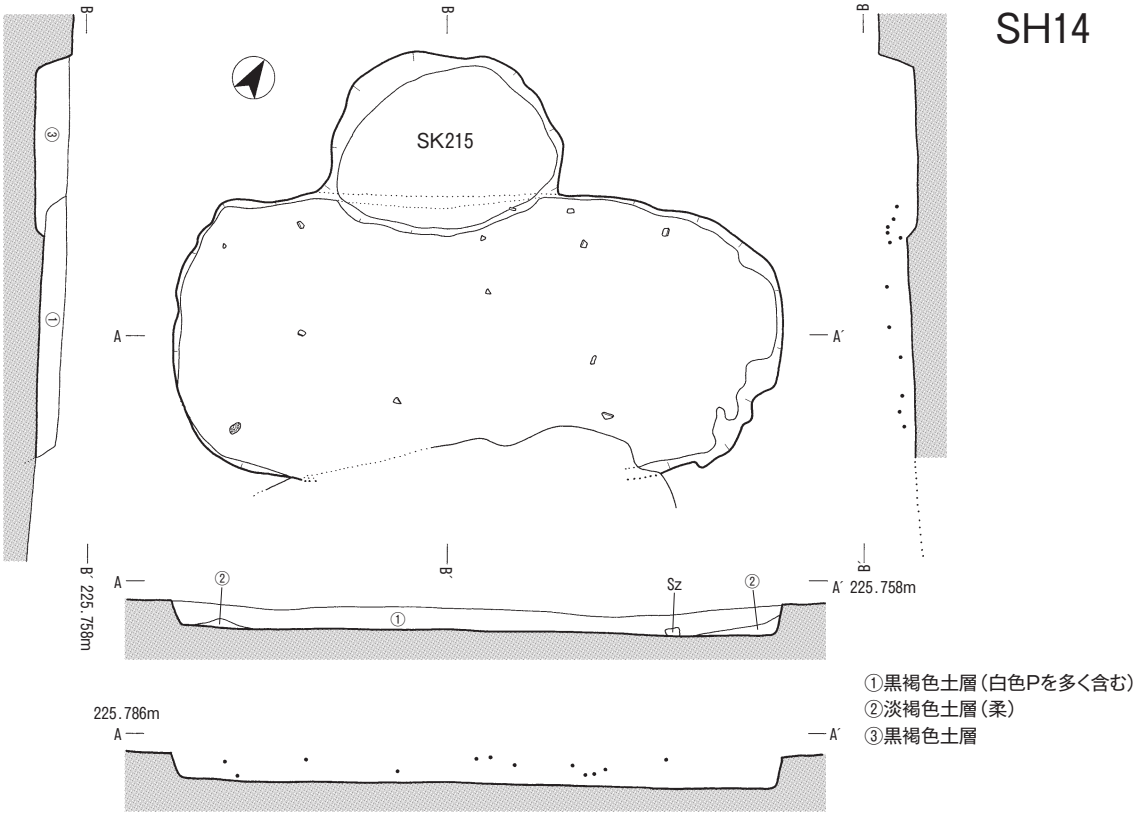
検出状況　SH16はE13区とF13区の境界線上で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。本遺構の南側にはSH20が重複して存在する。

形状と規模　SH20と重複するため，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は3.05m，短軸が推定で2.25mを測り，長短値は0.74であった。検出面からの深さは約12cmと浅い。薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。遺構の推定面積は検出面で7.10㎡，床面積で6.84㎡を測り，壁面傾斜値は0.96と極めて高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。床面に凹凸は見られないが，南側が若干深い傾向があった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。また，部分的に薩摩火山灰のブロック（拳大程度のもの）が見られた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は20点で，うち５点を図化した。A74は前平式土器の完形品である。口径17.0cm，器高29.5cmを測る。フラットな口唇部の端部にヘラ状工具による連続刺突文を



第26図　14号竪穴住居状遺構実測図

巡らすものである。外面は口縁部直下と底部直上は横位の貝殻条痕文，胴部全体には斜位の貝殻条痕文が施されている。遺構内12点，包含層中16点の土器片による接合資料である。A76は前平式土器の口縁部小片である。フラットな口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。口縁部直下には斜め気味の貝殻条痕文が施されている。A77は前平式土器の胴部片である。外面には浅い斜位の貝殻条痕文が見られる。A78は前平式土器の底部片である。胴部への立ち上がり部分はなく，底面のみである。外面には貝殻条痕が明瞭である。

重複遺構　前述したように，SH16の南側にはSH20が重複して存在する。SH20は当初，土坑（SK12）として把握し，記録を進めていたが，形状や規模を検討する過程で，本遺跡での竪穴住居状遺構の範疇とすることが妥当と判断し，SHの番号を付した。引き続き，事項で紹介する。

20号竪穴住居状遺構（SH20：第29図）

検出状況　SH20はF13区で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。本遺構の北側にはSH16が重複して存在する。発掘調査段階ではSK12として記録を進めた遺構である。

形状と規模　SH16と重複するため，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは卵形に近い楕円形と考えられる。長軸は2.10m，短軸が推定で1.55mを測り，長短値は0.74であった。検出面からの深さは10cm強と浅い。薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。遺構の推定面積は検出面で2.47㎡，床面積で2.34㎡を測り，壁面傾斜値は0.95と極めて高かった。規模的には本遺跡検出の竪穴住居状遺構の中でSH86に次いで小さい。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。床面は凹凸もなく，ほぼ水平であった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に部分的ではあるが淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。また，部分的に薩摩火山灰のブロックが見られた。

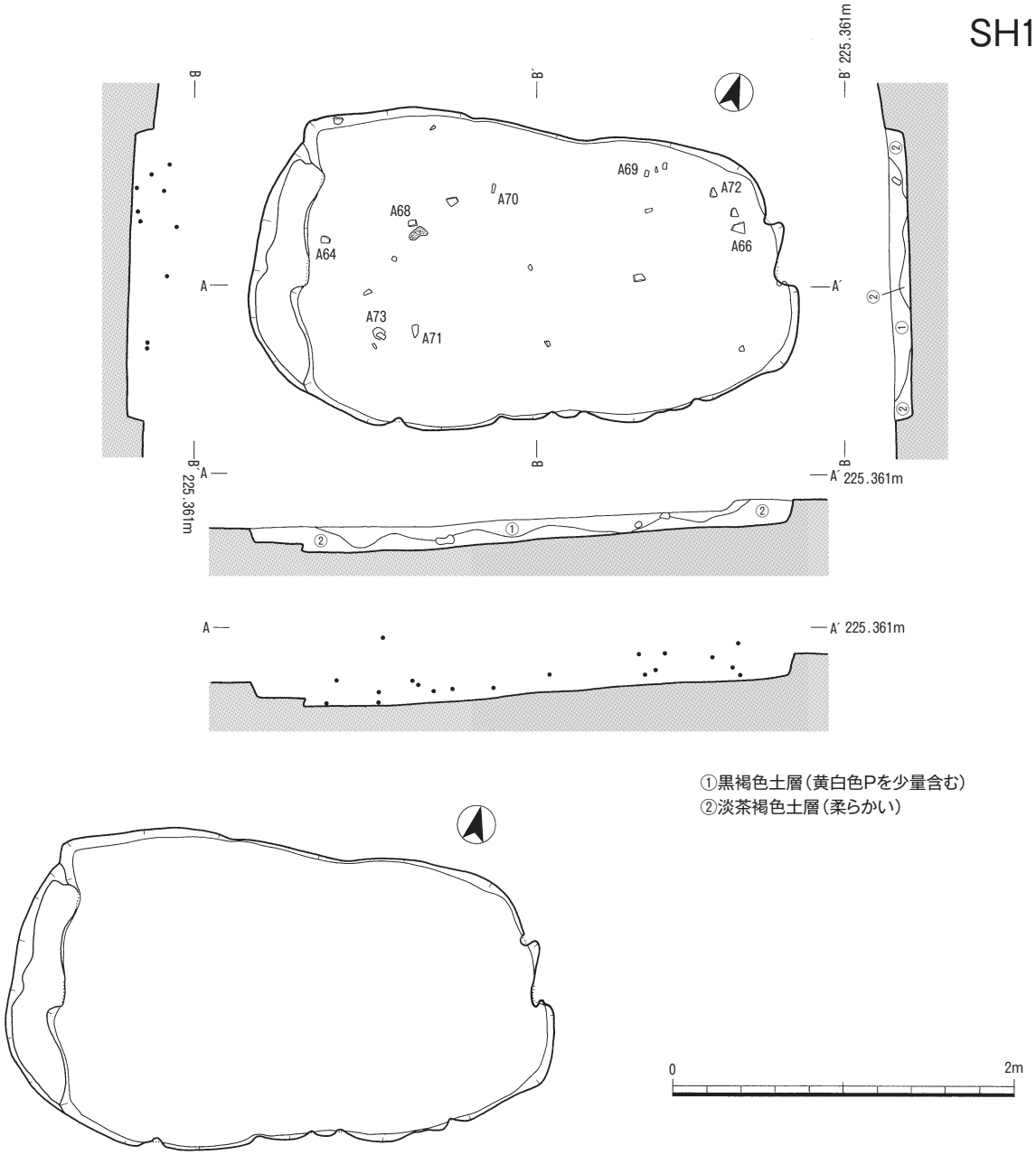
出土遺物　埋土中から出土した遺物は14点で，うち図化できたのは1点のみであった。A93は前平式土器の胴部小片である。外面は斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　前述したように，SH20の北側にはSH16が重複して存在する。前述のように，SH20は当初，土坑（SK12）として把握し，記録を進めていたが，形状や規模を検討する過程で，本遺跡での竪穴住居状遺構の範疇とすることが妥当と判断し，SHの番号を付した。第29図の断面図をみると，SH16よりもSH20の方が新しいことが分かる。埋土①と埋土③は同じ黒褐色土層であるが，埋土①の方がパミスが多いため，分層が可能となった。

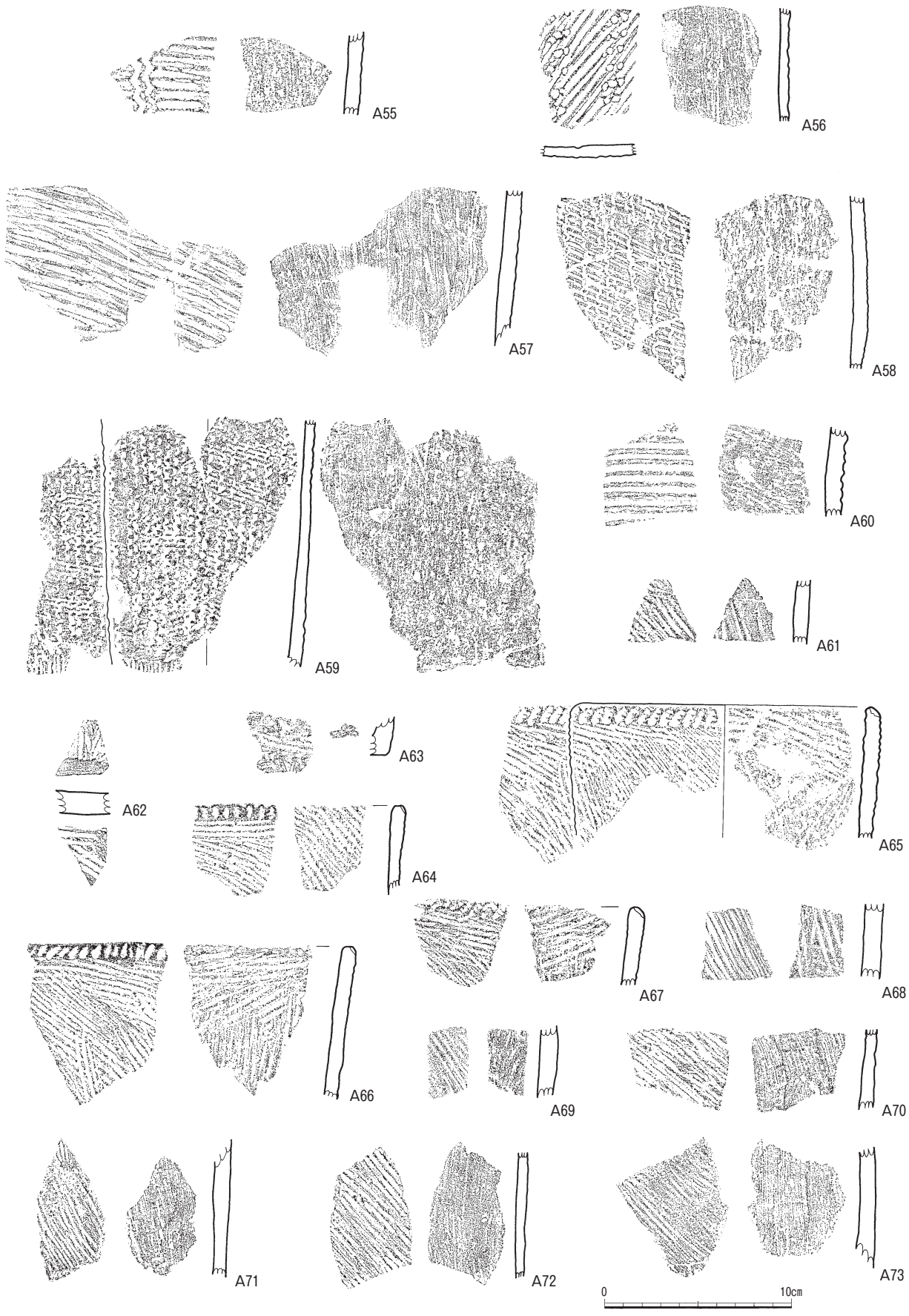
17号竪穴住居状遺構（SH17：第33図）

検出状況　SH17はD15区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。本遺跡で検出された竪穴住居状遺構の中で，最も南東側に位置するものの一つである。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は3.05m，短軸が推定で1.80mを測り，長短値は0.59と長方形度が高い。検出面からの深さは10cm強と浅い。薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。遺構の推定面積は，検出面で4.90㎡，床面積で4.50㎡を測り，本遺跡の中



第27図　15号竪穴住居状遺構実測図



第28図　竪穴住居状遺構内出土土器９

では，平均よりやや小さなサイズということになる。壁面傾斜値は0.92と高い。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は17点で，うち６点を図化した。A79は前平式土器の口縁部片である。フラットな口唇部の端部にヘラ状工具による連続刺突文を巡らすものである。刺突は刻み状にメリハリがあり，口唇トップは波状を呈している。口縁部直下には横位の貝殻条痕文が辛うじて残り，下位に続く斜位の貝殻条痕文によって上塗りされた状況が観察できる。A80は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文を施している。A81は前平式土器の底面の一部である。内外面共に貝殻条痕が見られる。A82は外面に斜位の貝殻条痕文が施された胴部片である。斜位の貝殻条痕文といえば，前平式土器の胴部片の可能性が高いが，条痕がやや浅いことや内面の仕上げにナデ調整がみられること等から，完形近く復元した札ノ元Ⅶ類土器の1177にも類似することを記録しておきたい。

B12は安山岩製のスクレイパー状石器である。欠損品であるが，現存する状況は，長さ4.90㎝，幅8.10㎝，厚さ0.90㎝，重さ31.22g を測る。横長の大形剥片の縁辺に丁寧な剥離を加え刃部を形成している。刃部の一部は使用による摩滅痕がみられる。

B50は摩擦による平坦面を一面有する軽石製加工品である。長さ8.20㎝，幅6.10㎝，厚さ3.05㎝，重さ34.87g を測る。摩擦の対象物は何か？平坦面はほぼ水平である。このことがヒントになると考えられるが，逆に平坦面を作ったという可能性も含めて，具体的な用途については明らかでない。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

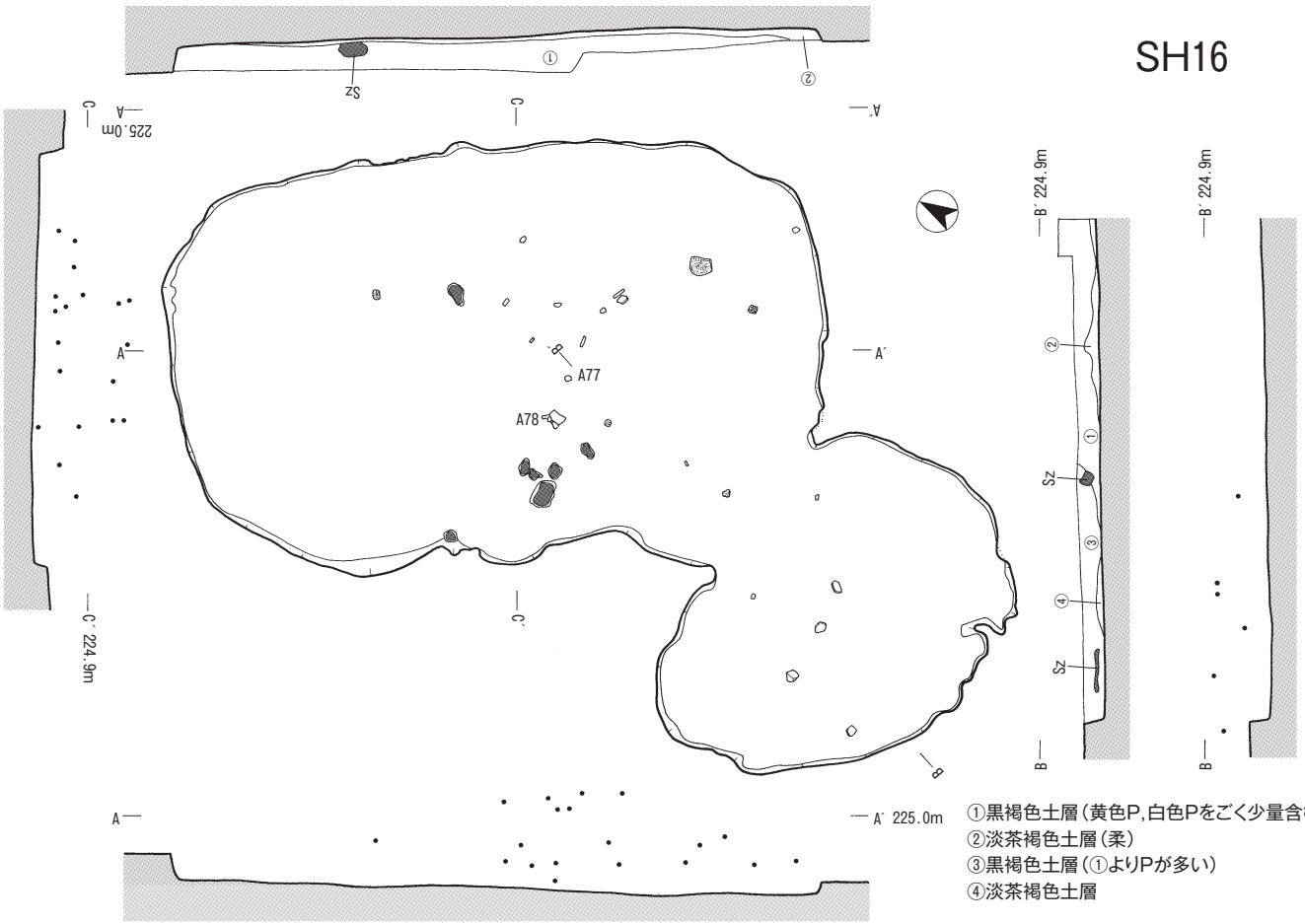
18号竪穴住居状遺構（SH18：第34図）

検出状況　SH18は C12区で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰層上面であった。単独で検出されたが，床面検出の土坑が１基存在する。遺構内土坑としてとらえているが，重複遺構である可能性も想定しておきたい。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を呈し，長軸2.60m，短軸が1.95mを測り，長短値は0.74であった。検出面からの深さは約25㎝で，床面は薩摩火山灰層を掘り抜けて，X 層に達していた。遺構の面積は，検出面で4.66㎡，床面積で4.05㎡を測り，壁面傾斜値は0.87と高かった。

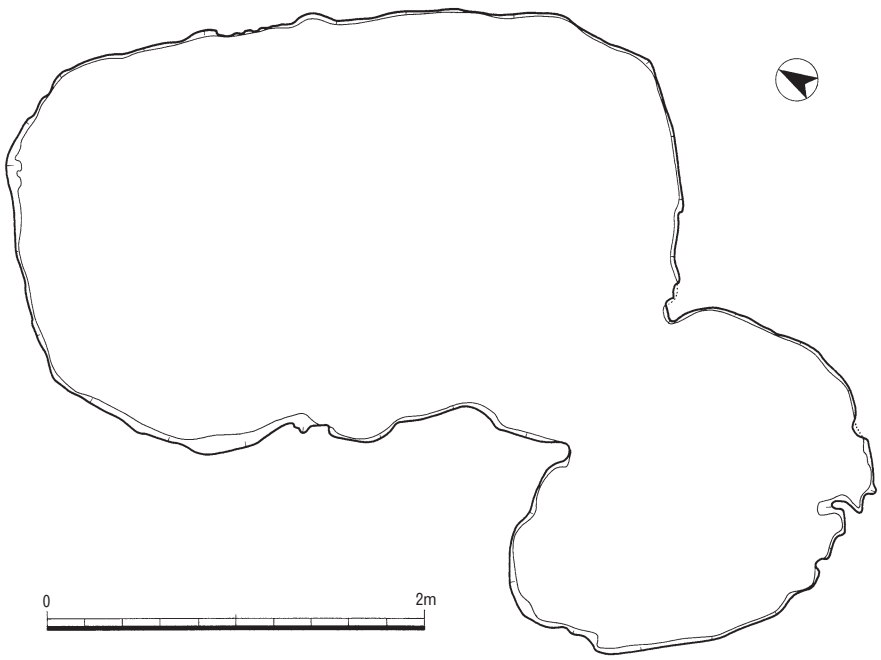
竪穴部の埋土を取り除いた段階で，長軸120㎝，短軸75㎝を測る楕円形の土坑を検出。約10㎝の深さを埋める黒褐色土の中にはカーボン粒が入っており，当初は炉跡が検出されたものと認識していたが，土坑の床面が不安定であることから，さらに掘り下げてみたところ，最終的にはⅩⅣ層まで達し，深さ75㎝と規模の大きな土坑となった。床面は極めてフラットで，土坑開口部よりも広め，つまりややオーバーハングした状態で検出された。

特徴的なのは埋土の状況で，多くはⅩⅢ層やⅩⅣ層がブロック状に入るというもので，土坑掘削後，それほど時間をおくことなく埋めた可能性が考えられる。一部にⅨ層：薩摩火山灰層の小ブロックが含まれていたことから，薩摩火山灰降下以前の土坑が薩摩火山灰降下後の竪穴住居状遺構と偶然重複したという状況でもなさそうである。むしろ竪穴部が掘削された後，つまり薩摩火山灰層が取

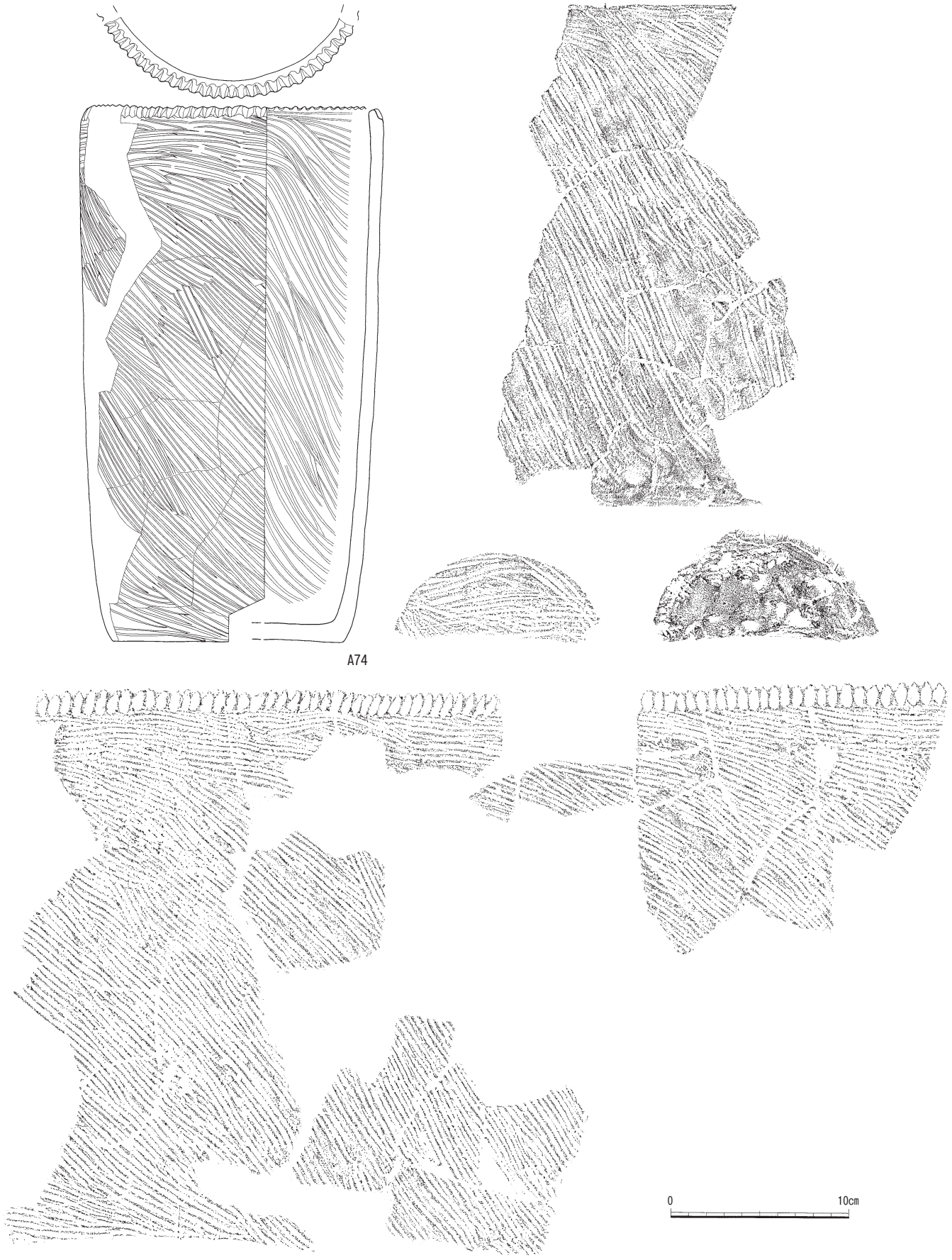


①黒褐色土層（黄色P,白色Pをごく少量含む）
②淡茶褐色土層（柔）
③黒褐色土層（①よりPが多い）
④淡茶褐色土層

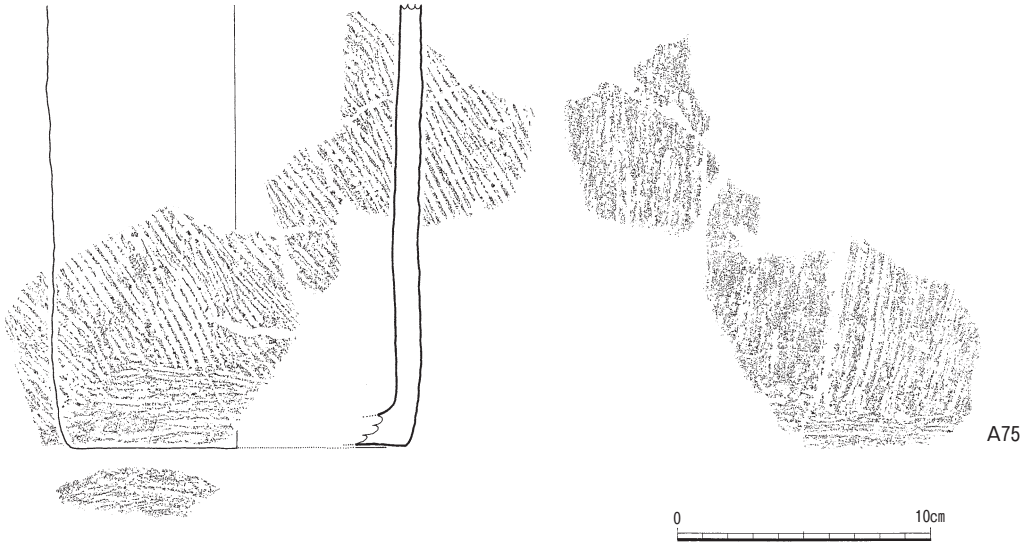
※遺構内のアミカケは薩摩火山灰



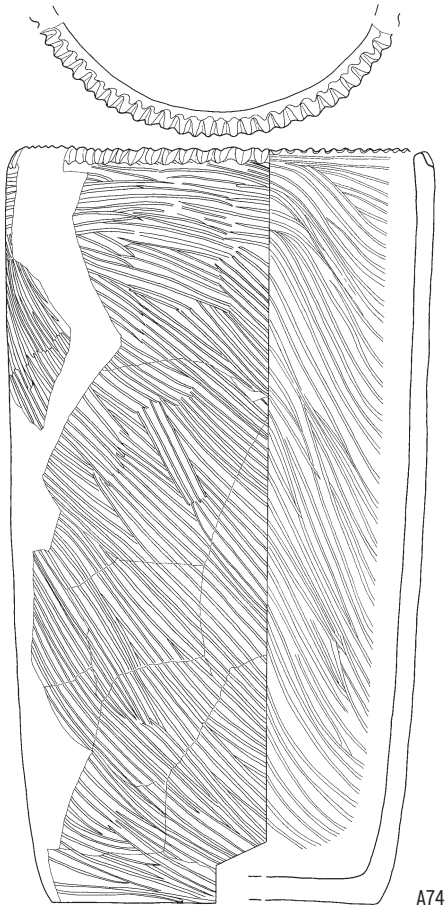
第29図　16号，20号竪穴住居状遺構実測図



第30図　竪穴住居状遺構内出土土器10



第31図　竪穴住居状遺構内出土土器11



第32図　縄文土器出土状況図２

り除かれた後に掘削され，程なく埋め戻された土坑である可能性が考えられるのである。

土坑上位のカーボン粒を含む部分が，竪穴住居状遺構の炉的な場所として使用されたものなのかどうかについては，断定はできないが。少なくとも，床面のレベルでカーボン粒が集中してみられる場所があることは事実である。竪穴部そのものの機能も含めて，極めて大きな検討課題である。同様な構造を持つ竪穴住居状遺構として，近接するSH37があり，関連が注目される。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層をメインとし，床面近くの一部で比較的柔らかい淡茶褐色土層が検出された。土坑の埋土については前述の通りである。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は27点で，うち４点を図化した。A81～A85は前平式土器の口縁部である。口縁部下に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすもので，胴部には横位～斜位の貝殻条痕文が施されている。A86は内外面ともに斜位の貝殻条痕が見られる前平式土器の胴部片である。

重複遺構　遺構内土坑の存在についてはこれまで述べてきたとおりで，あきらかに重複する遺構はなかった。

19号竪穴住居状遺構（SH19：第35図）

検出状況　SH15はD12区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は2.45m，短軸が推定で1.95ｍを測り，長短値は0.80と長方形度は低い。検出面からの深さは約30cm弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の面積は，検出面で3.88㎡，床面積で2.58㎡を測り，壁面傾斜値は0.67と低かった。これは，遺構の南側に長さ140cm，幅50cmのステップがあり，その部分を床面に含めていないことによるものと考えられる。ステップの高さは，床面が15cm前後であった。また，西隅にも検出面から緩やかに傾斜する壁面があった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

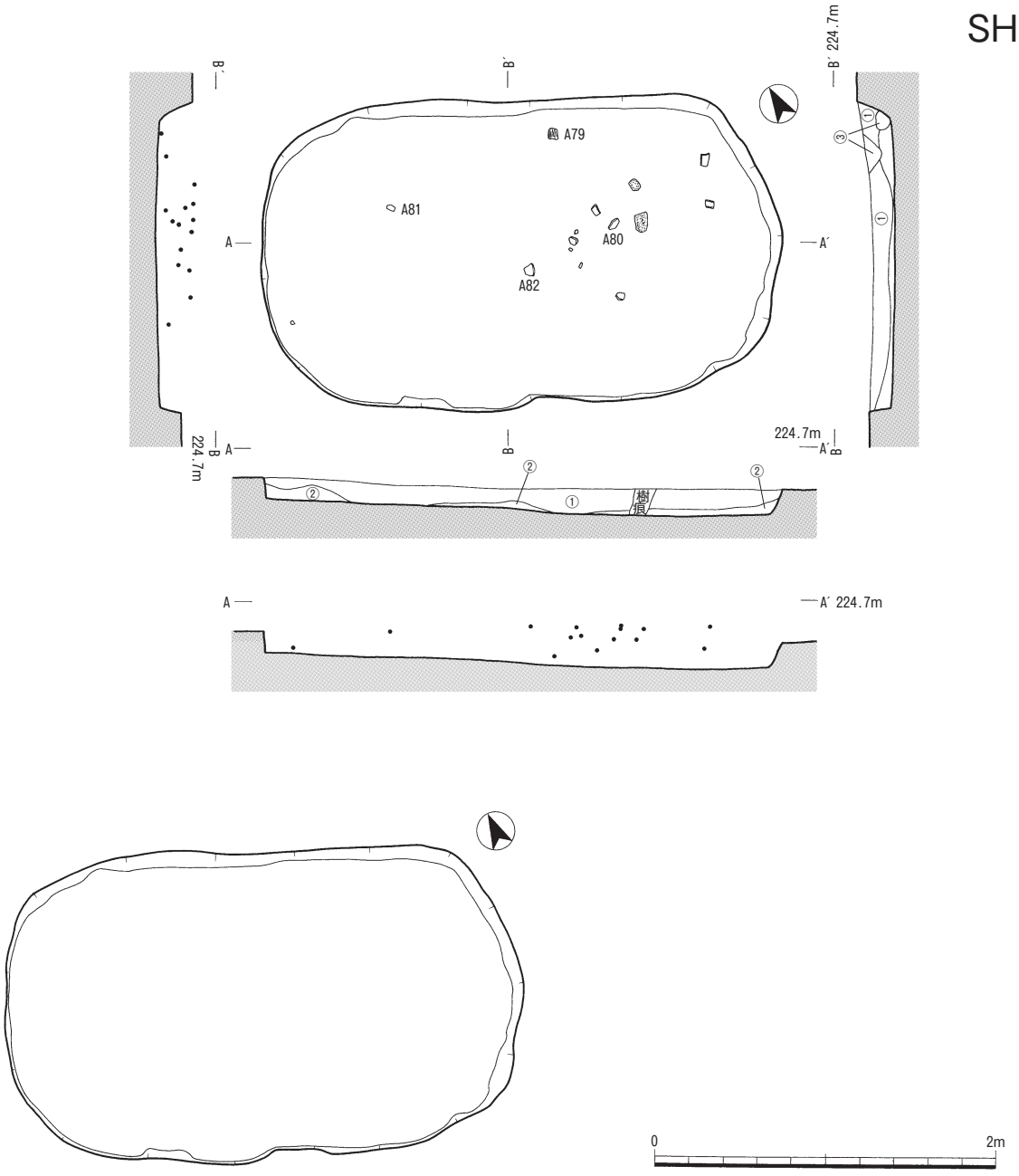
埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は23点で，うち11点を図化した。A97は吉田式土器の完形品である。口径27.5cm，器高28.5cmを測る。本遺跡出土の縄文土器の中で，最も完形度の高い土器である。第35図のように，遺構の南西隅の床面近くに横倒しになった状態で出土した。A97の南側には後述する石皿（B45）が乗っかかるような状態で出土した。A87～A90は前平式土器の口縁部片である。A87とA90はフラットな口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。これらと異なり，A88の口唇部にフラットな面はみられない。断面がやや蒲鉾状を呈している。A89は断面が舌状を呈する口唇部の端部にヘラ状工具による連続刺突文を巡らすものである。いずれも口縁直下から胴部にかけて斜位の貝殻条痕文が施されている。A91は吉田式土器と考えられる底面である。外面は丁寧なミガキ仕上げがみられ，光沢がある。

B45は石皿の完形品である。長さ26.0cm，幅23.5cm，厚さ10.5cm，重さ8.5kgを測る。人頭大の円礫の一面を利用し，長さ13.0cm，幅8.00cmの摩滅痕が顕著な凹面を有する。前述のように，吉田式土器の完形品（A97）に寄り添うような状態で出土した。

本遺構からは，周辺の遺物包含層や他の遺構内遺物と接合し，完形ないし完形に近い状態に復元

SH17



第33図　17号竪穴住居状遺構実測図

した土器が３個体確認された。A95，A96，A98がそうである。いずれも多くの接合片のうちの１点が本遺構内出土の土器片ということで，本遺構内遺物を代表するという状況ではない。しかし，埋土の堆積過程で入り込んだ遺物と言うことで，その情報的価値は低くはないと考える。接合を重ねた遺物の出土状況を検討した結果，３個体はいずれも包含層を主体として出土しているが，遺構出土の資料として報告する。

A95は前平式土器の完形資料である。口径23.0cm，底径22.6cm，器高32.6cmを測る。口径と底径の比率を見てわかるように，ほぼ完璧に近い円筒状を呈する土器である。口縁部下にヘラ状工具による２段の刺突文が巡らされ，胴部はほぼ全面に横位の貝殻条痕文が施されている。口唇部はフラットで，口縁部文様と同じ施文具によるものと考えられる浅い刻みがみられる。１ｂ類の典型的な資料である。SH19からだけでなく，他にSH20，48，65，71からも１点ずつ出土し，包含層中のものと合わせると計57点の接合資料である。

A96は吉田式土器の完形資料である。口径24.6cm，底径18.0cm，器高27.0cmを測る。底部から口縁部へ向けて少しずつ開く器形を呈するもので，口縁部下に貝殻腹縁部による縦横の刺突文，胴部にやや粗目の押引文と横位条痕文を施した土器である。フラットな口縁部には浅くて細い刻みが施されている。SH19からだけでなく，他にSH31，45号集石遺構からも１点ずつ出土し，包含層中のものと合わせると計74点の接合資料である。

A98は完形ではないが，口縁部から胴部まで比較的まとまりをもつて接合した吉田式土器である。口縁部下に横位および斜位の貝殻刺突文をもち，胴部には浅い押引文が施された土器である。包含層中のものと合わせると計10点の接合資料である。

21号竪穴住居状遺構（SH21：第46図）

検出状況　SH21はD13区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸方形である。長軸は2.05m，短軸が推定で1.80mを測り，長短値は0.88で，本遺跡では少数派の正方形に近いタイプである。検出面からの深さは20cm強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。ただし，遺構の東南部には，薩摩火山灰層内でおさまる浅い掘り込みが広がっていた。検出面から約３cm程度と，極めて浅いため，油断をすると見逃してしまいそうな掘り込みラインラインであった。この浅い掘り込み部分およびその近くには，遺構の壁面が入り江状に切り込まれたような部分が３か所あり，遺構の構造に関するものかどうか注目される。

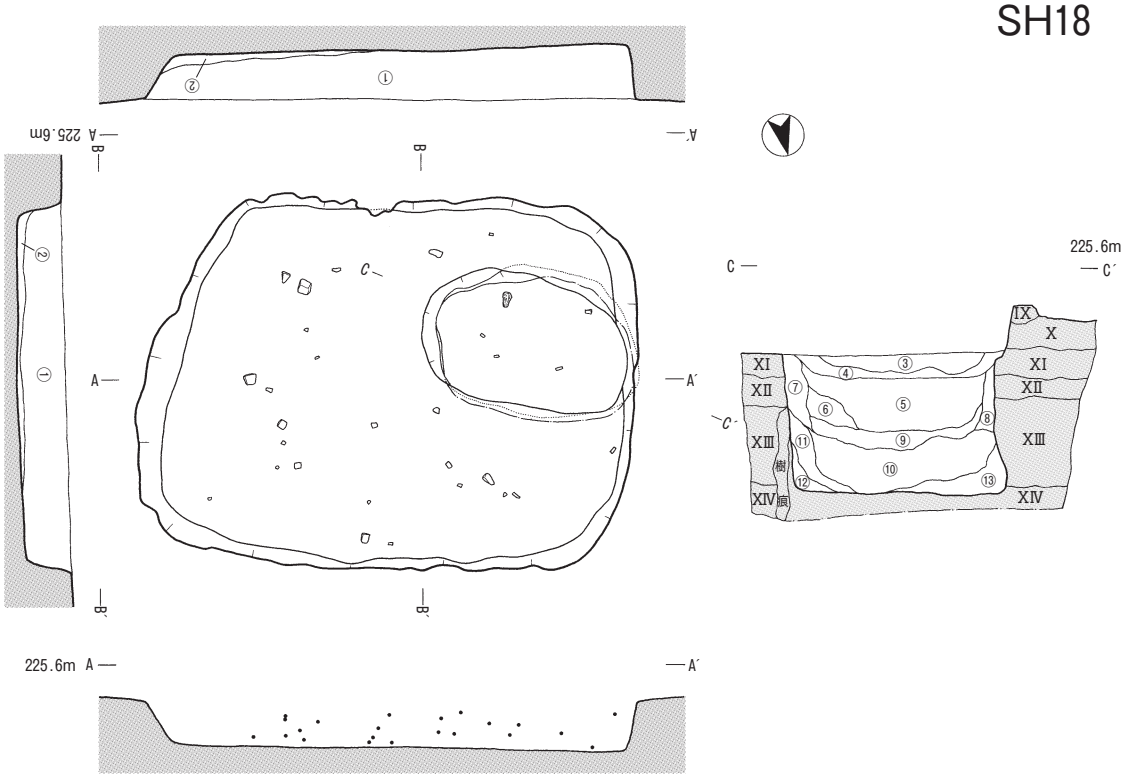
遺構の推定面積は，検出面で3.44㎡，床面積で2.96㎡を測り，本遺跡の中では，小形の部類に入る。壁面傾斜値は0.86であった。

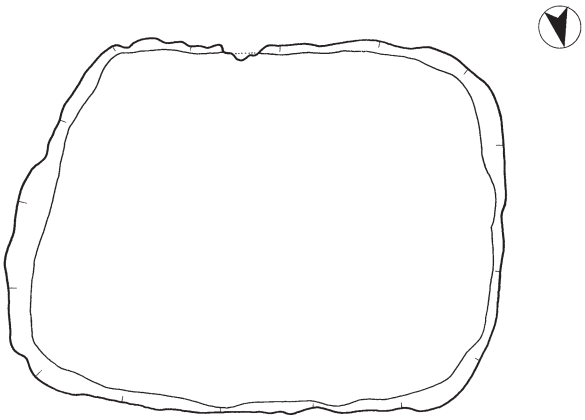
柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土の堆積状況は，近接するSH19と類似していた。

また，遺構の西隅には，拳大から小児頭大の薩摩火山灰のブロックがまとまって検出された。いずれも床面から５～10cm程度浮いた状態で検出されている。隣接する遺構壁面の薩摩火山灰層は，垂直に近い立ち上がりを示し，極めて良好な状態，つまり掘削当時の形状を保った状態で検出され

SH18





①黒褐色土層（黄色P,白色Pをごく少量含む）
②淡茶褐色土層（柔らかい）
③黒褐色土層（カーボン粒を含む）
④黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
⑤淡褐色土層（淡黄褐色土のブロックを含む。ブロックの多くは
XIII層であるが,IX層やXIV層のものも若干みられる）
⑥暗褐色土層（淡黄褐色土のブロックを少量含む）
⑦暗褐色土層
⑧⑦と類似
⑨暗茶褐色土層
⑩淡褐色土層（⑤と類似）
⑪淡褐色土層（⑩よりブロックが少ない）
⑫淡褐色土層
⑬⑫と類似（若干ブロックが入る）

第34図　18号竪穴住居状遺構実測図

たことから，薩摩火山灰のブロックは周辺の崩壊土ではなく，意図的に他から持ち込まれた可能性が高いと考えられる。ブロック内の土やブロックと遺構壁面の間にある土は純粋で，壁面との境も容易に剥ぐことができる状況であった。遺構のコーナーを利用して壇状の施設を設けた可能性もある。

出土遺物　埋土中からは貝殻条痕が施された胴部片が１点出土したが小片のため図化しなかった。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

22号竪穴住居状遺構（SH22：第47図）

検出状況　SH21はE12区とF12区の境界線上において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸方形である。長軸は2.45m，短軸が推定で2.10mを測り，長短値は0.86で，本遺跡では少数派の正方形に近いタイプである。検出面からの深さは約30cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

遺構の推定面積は，検出面で4.48㎡，床面積で4.10㎡を測り，本遺跡の中では，小形の部類に入る。壁面傾斜値は0.92と高かった。

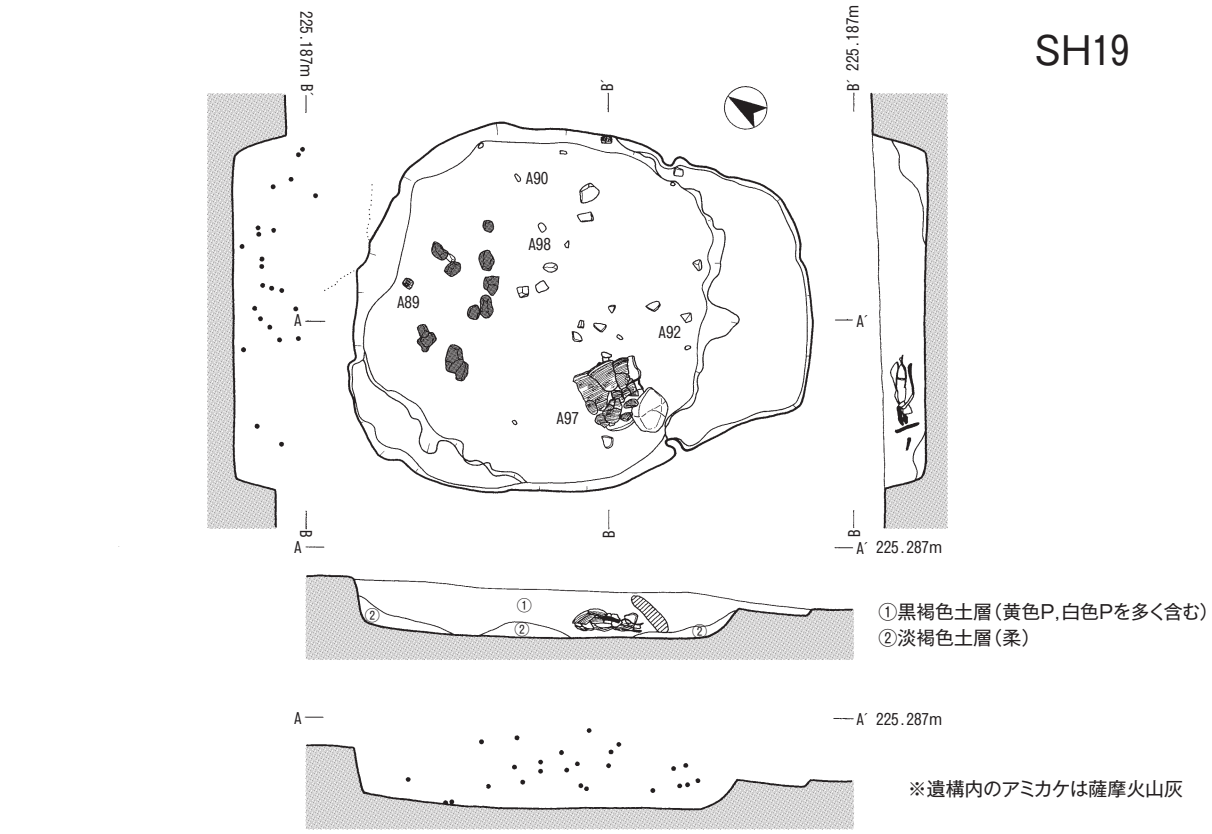
柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土の堆積状況は，SH19やSH21と類似していた。

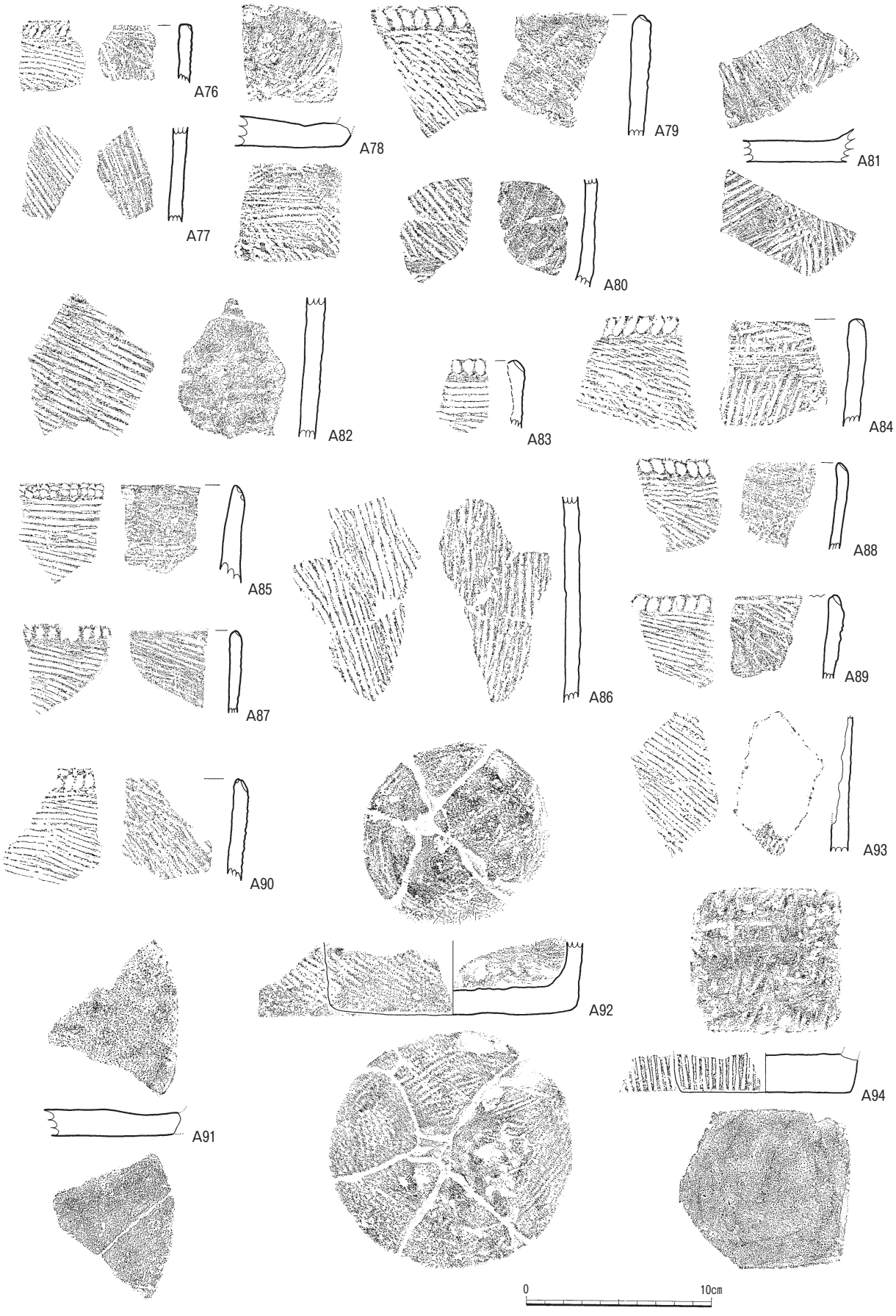
出土遺物　埋土中からは110点の遺物が出土し，うち14点を図化した。A99は倉園Ｂ式土器の完形品である。口径が21.0cm，器高が26.7cmを測る。底部から直線的に立ち上がり，口縁部は外傾しながら若干開く器形をもつ。ややふくらみを持つ口唇部には，連続する細線の刻みが巡る。口縁部直下には，横位２段の貝殻腹縁部による刺突文が施され，胴部には貝殻腹縁部による押引文および条痕文が横位に施されている。遺構内10点，包含層中６点の土器片による接合資料である。A100～A105は吉田式土器で同一個体と考えられるものである。A100はやや外傾する口縁部で，無文でフラットな口唇部をもち，口縁部直下には横位２段の貝殻腹縁部による刺突文が施され，さらにその下には，貝殻腹縁部による押引文や押引文を施すことによってできるクサビ様の「ハ」字，あるいは「Ｖ」字の文様が特徴的である。胎土や色調等が，A100と同一個体ではないかと考えられるのが，A101～A105である。A103，A104は押引文の胴部片，A105は同じく押引文をもつ胴～底部である。底径は14.2cmである。底部の立ち上がりには縦位の貝殻刺突文が連続して施されている。A104やA105は多くの包含層出土の遺物と接合した。A105は13点の土器片が接合したが，SH22の埋土内から出土したのは２点だけで，ほとんど周辺の包含層出土土器との接合であった。

A106～A108も吉田式土器の口縁部片である。やや外傾する器形をもつ。フラットな口唇部には米粒状の連続刺突文が施されている。口縁部直下には横位４段の貝殻腹縁部による刺突文が，また，胴部には押引文が施されている。これらと同一個体と考えられるのがA109の同一底部で，底径15.8cmを測る。

A94は角筒土器の底部である。４辺のうち完全に残る１辺の長さは約８cmである。辺形はやや外

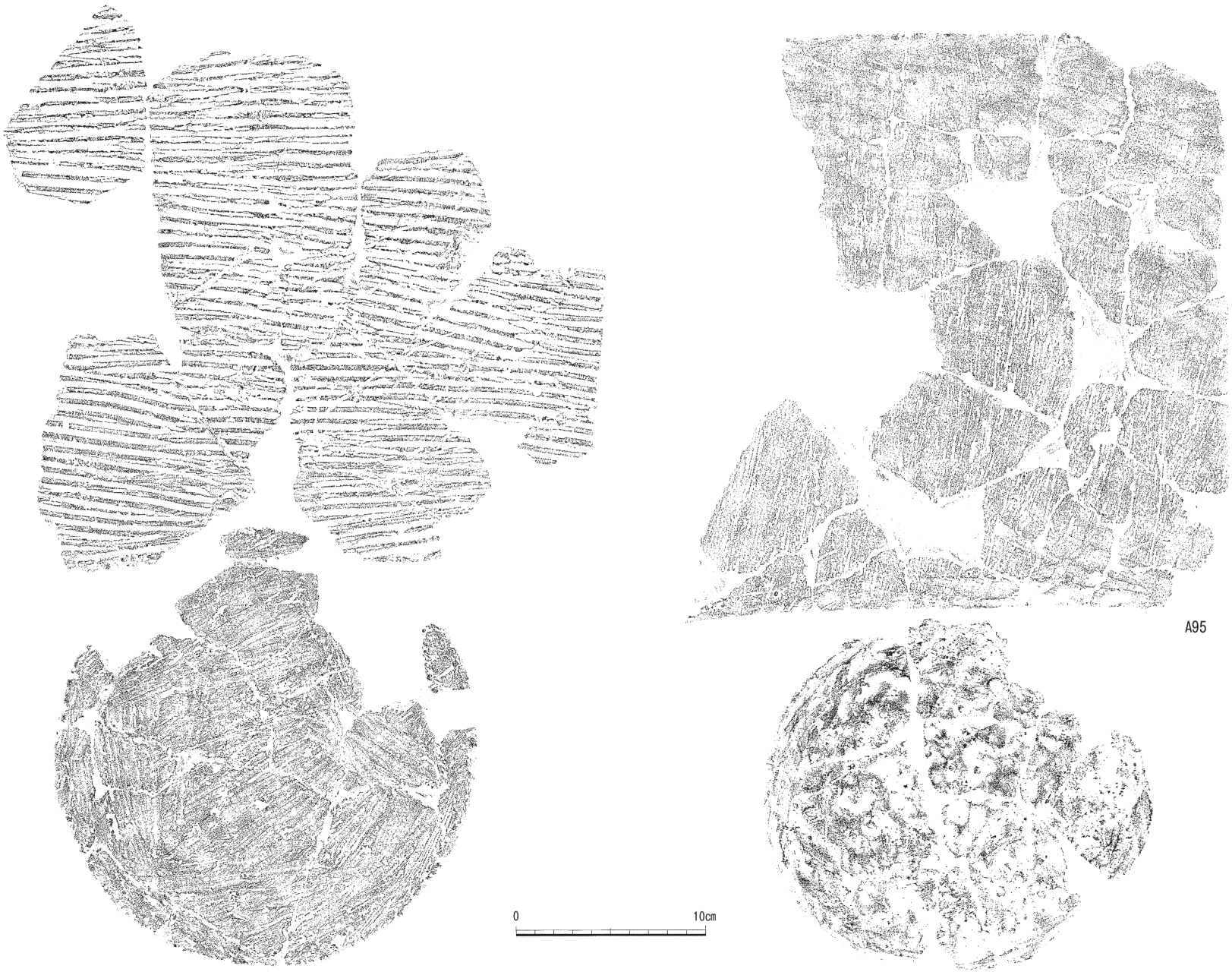


第35図　19号竪穴住居状遺構実測図

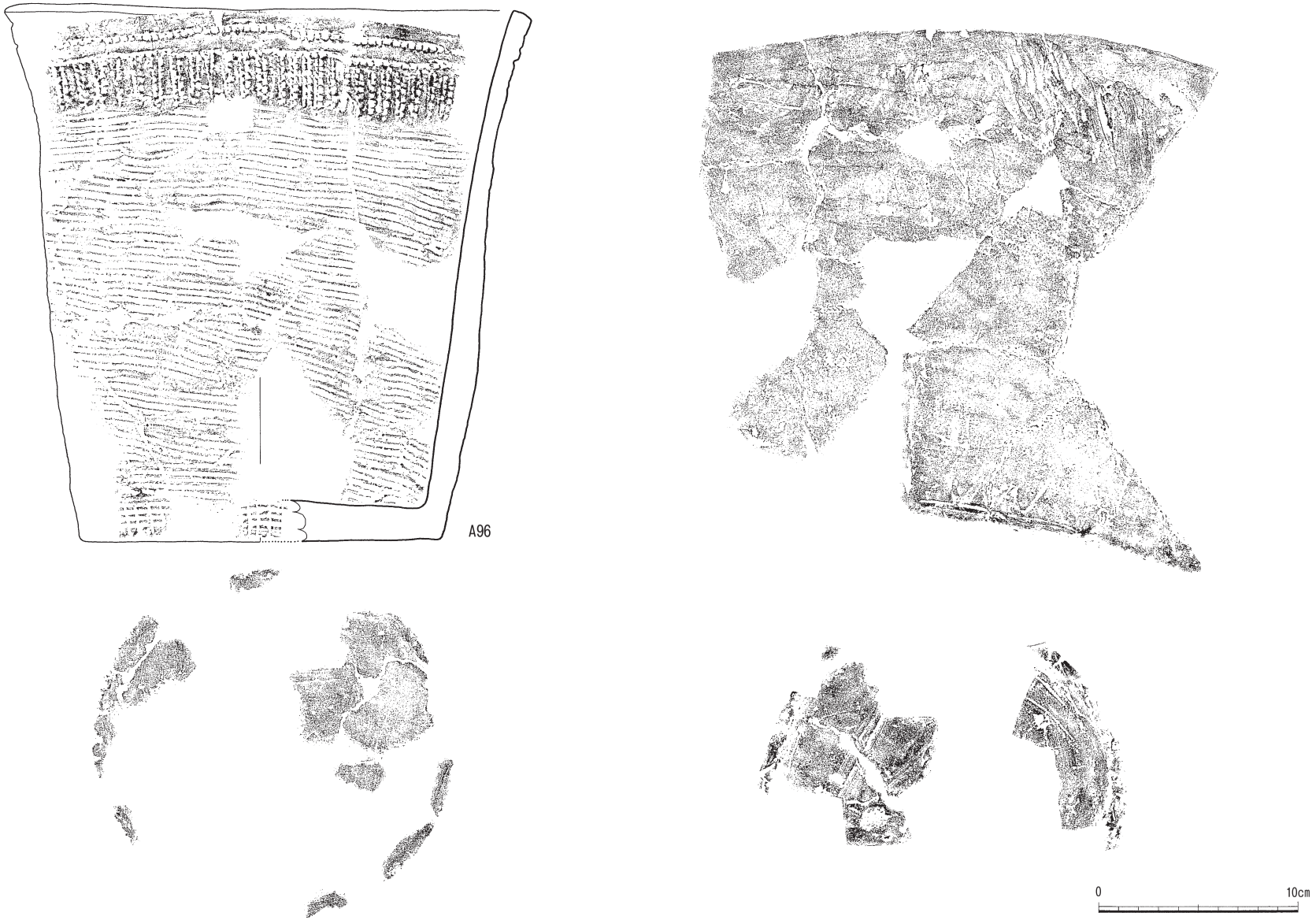


第36図　竪穴住居状遺構内出土土器12

第37図　竪穴住居状遺構出土土器13

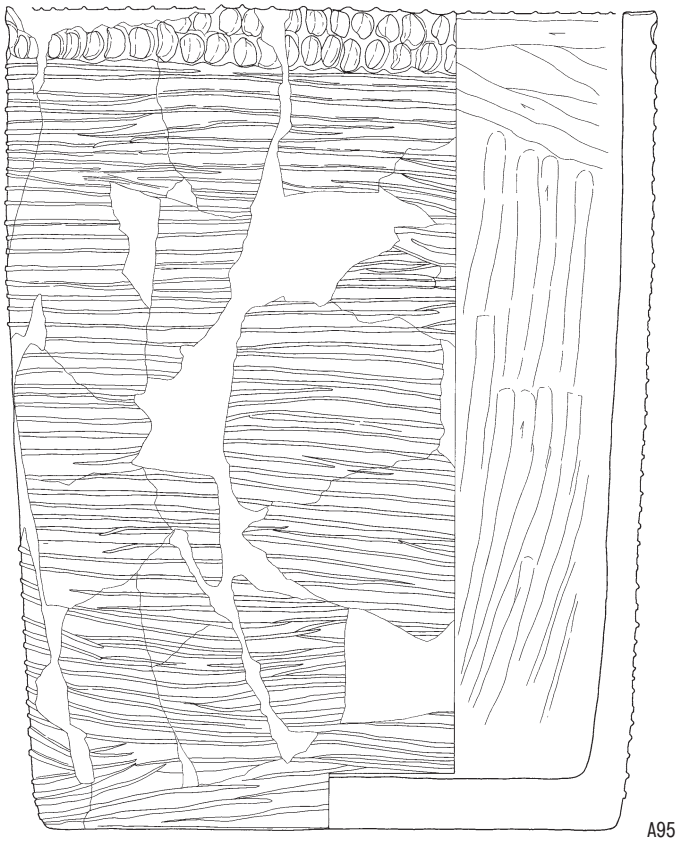


第38図　竪穴住居状遺構出土土器14



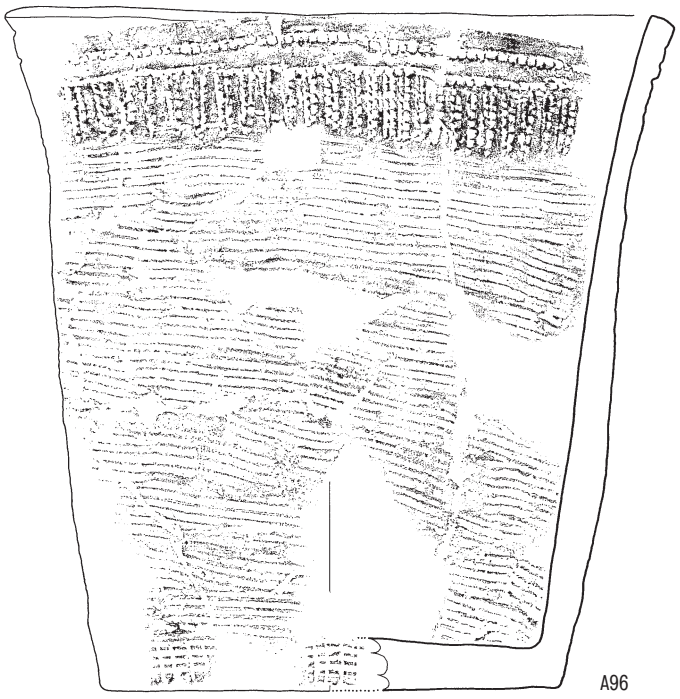
第39図　竪穴住居状遺構出土土器15

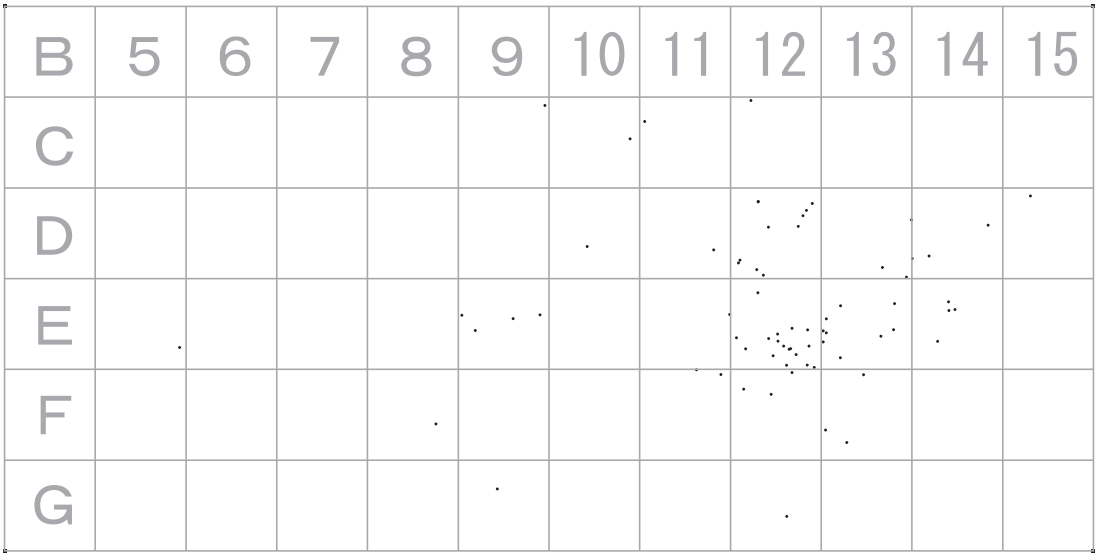
第40図　竪穴住居状遺構出土土器16



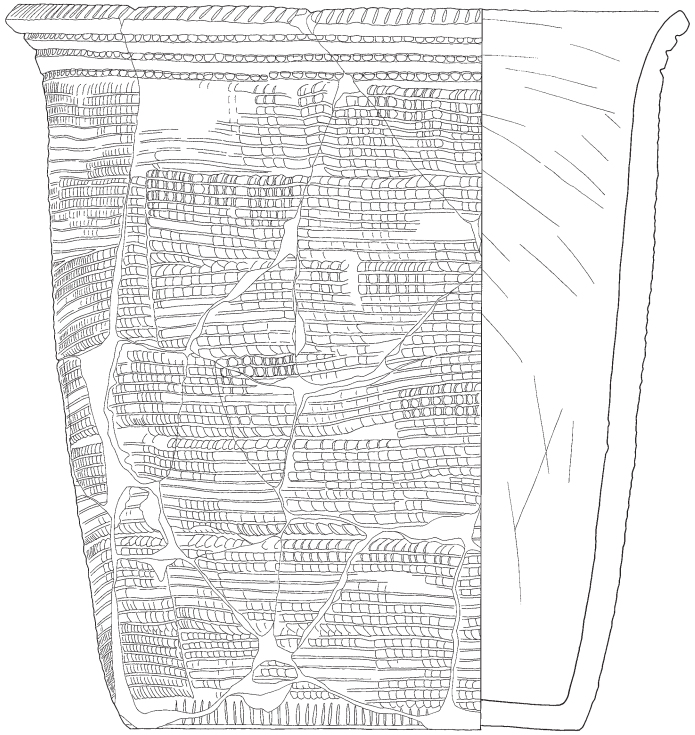
B	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
C													
D													
E													
F													
G													
H													

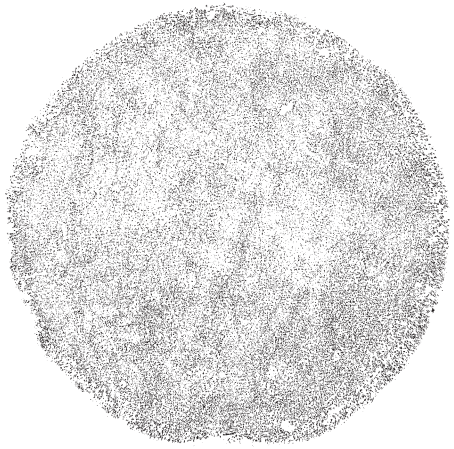
第41図　縄文土器出土状況図３

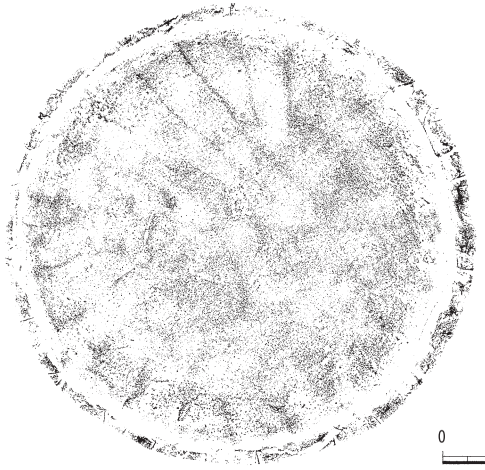




第42図　縄文土器出土状況図４

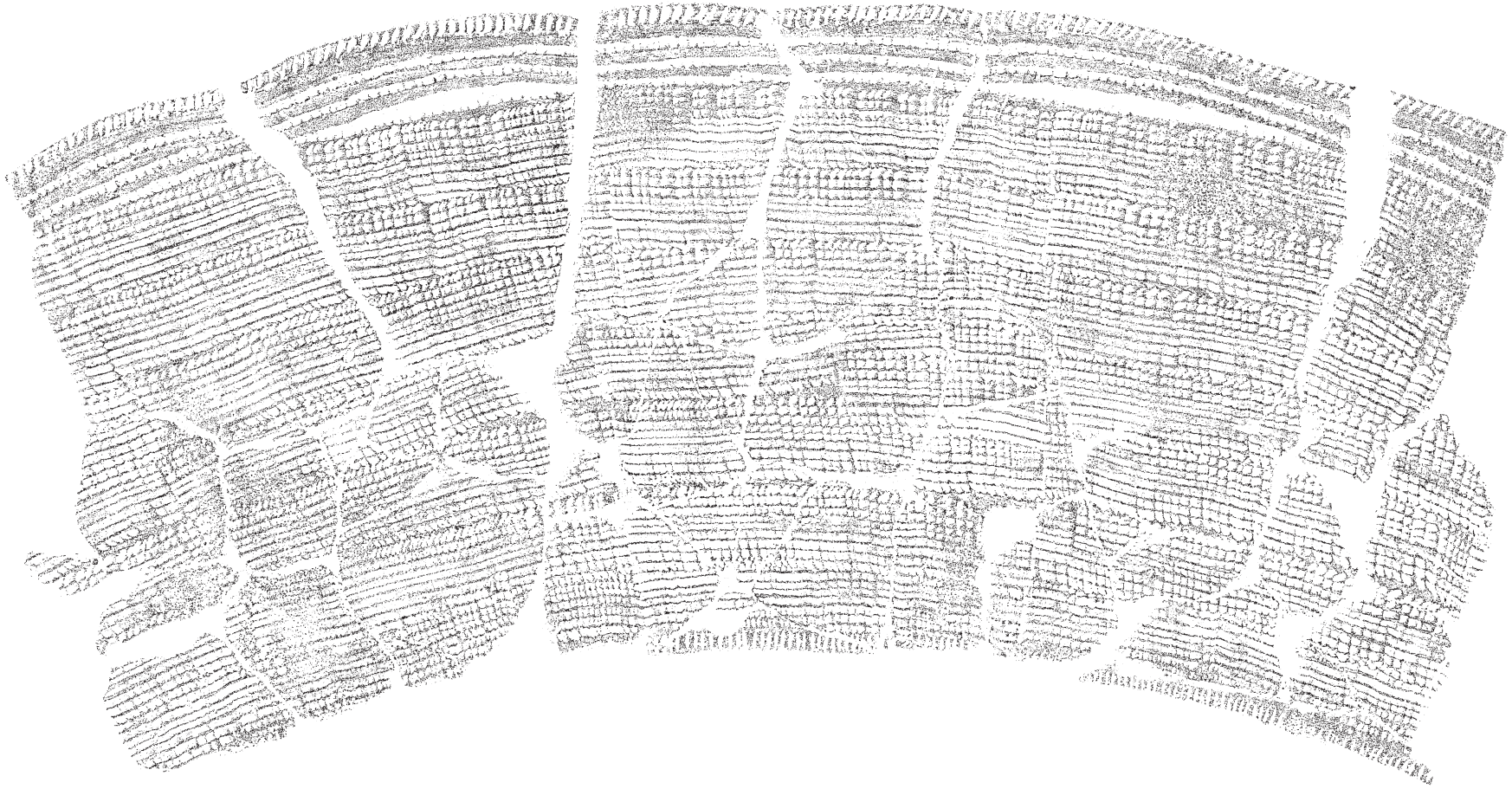




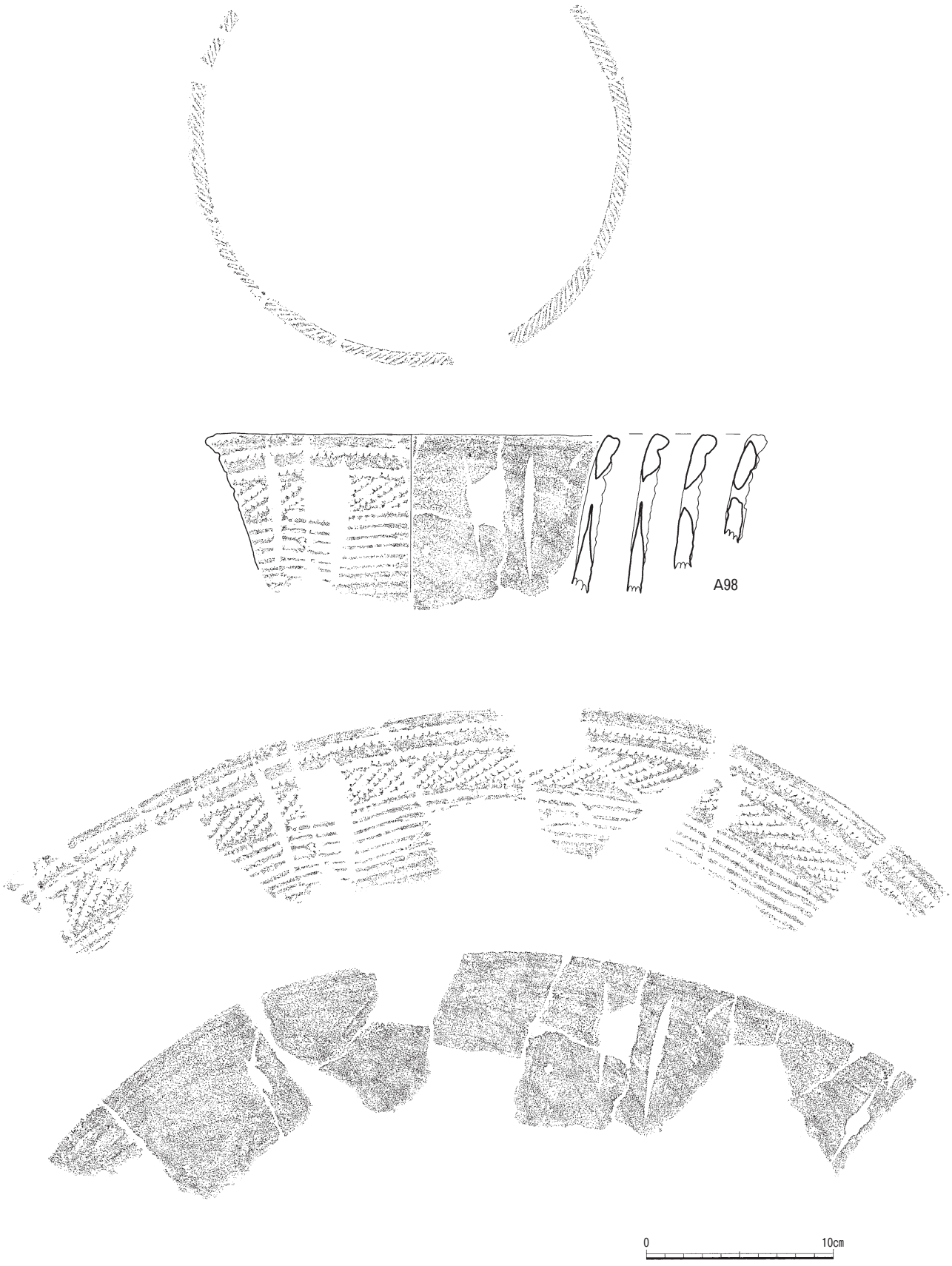


0 10cm

第43図　竪穴住居状遺構出土土器17



第44図　竪穴住居状遺構出土土器18



第45図　竪穴住居状遺構出土土器19

側にふくらみながらカーブしている。そのため，底部の中心部をクロスするラインは，9.0cmと8.5cmとやや長めの数値を示す。また，数値の通り，正方形ではない。底部外面は丁寧な仕上げて平滑である。内面も条痕が部分的に残るものの，ほぼ水平である。底部の立ち上がりには，幅1.5mmほどの刻みが縦位に巡らされている。残存する最長の刻みは約２cmである。残念ながら胴部が無く，どのような文様が展開していたのかについては不明である。ただ，端正な文様や，想定される胴部器壁の薄さから，加栗山式土器の角筒土器である可能性が高い。

B46は安山岩製の石皿と考えられるものである。残存する部分の長さは約25.0cm，幅が約20.0cm，厚さが11.0cmを測る。重さは7.5kgであった。使用による摩滅痕は１面のみ観察される。

B54は湾曲する研磨面と円孔や溝状の線刻が見られるもので用途については不明である。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

23号竪穴住居状遺構（SH23：第53図）

検出状況　SH23はE12区で検出された。本遺構周辺は当初，薩摩火山灰層（Ⅸ層）の上面近くまで掘り下げても，黒褐色土が大きく広がって残っていることから，何らかの遺構が，しかも重複して存在する事を想定して検出を行った。その結果，本遺構の北側の一部が地層横転で削平されていることが判明した。また，同じ地層横転によって近接するSH24も削平されていることが明らかとなった。本遺構とSH24が重複する部分はないが，地層横転がなければ接するほどの距離にあることから，同時に存在したものではないと考えられる。

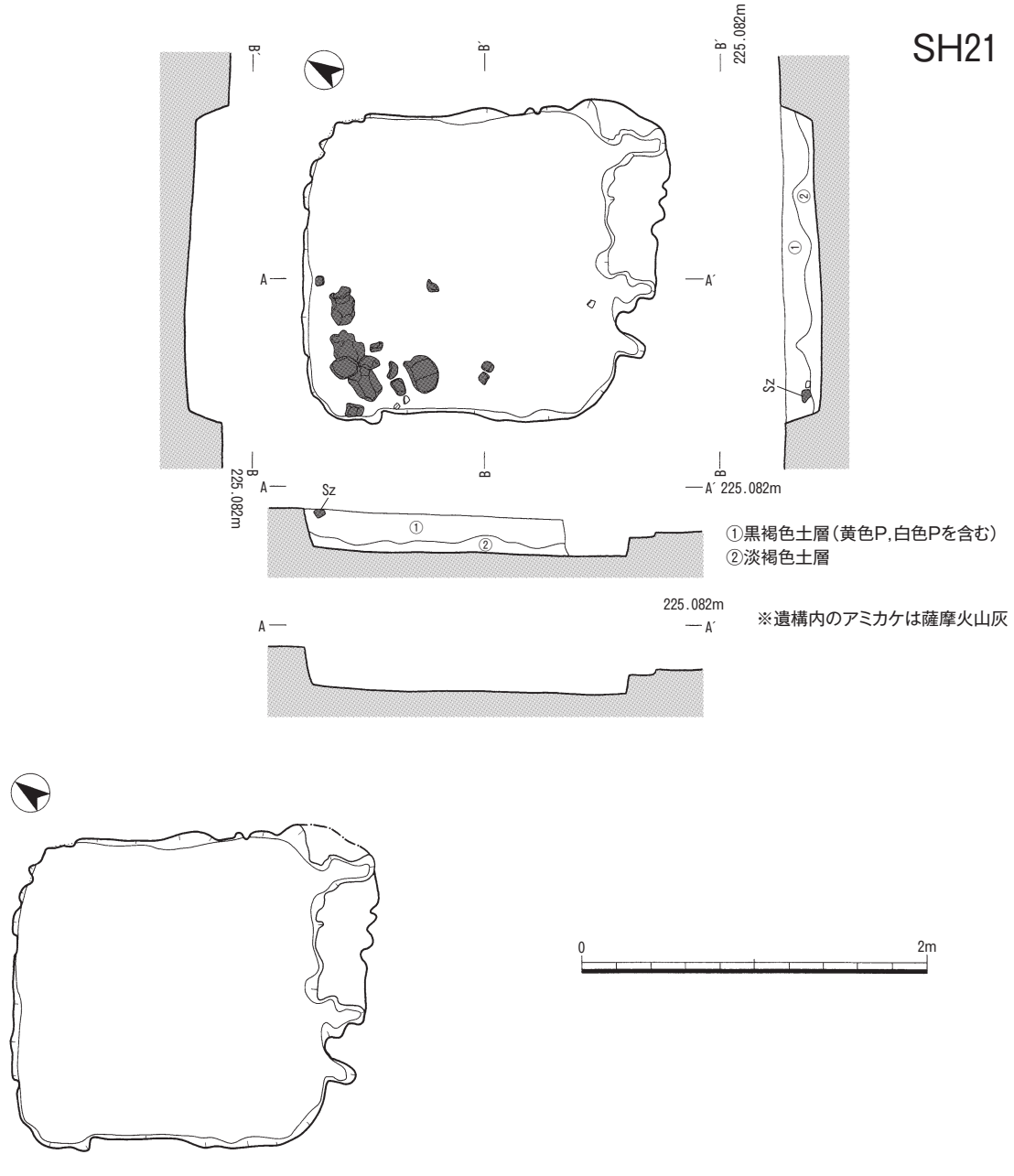
形状と規模　平面プランは隅丸方形で，長軸は2.30m，短軸が2.00mを測る。長短値は0.87で，比較的正方形に近い。検出面からの深さは約20cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の推定面積は，検出面で3.91㎡，床面積で3.63㎡を測り，本遺跡の竪穴住居状遺構の中では小形である。壁面傾斜値は0.93と高かった。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

本遺構の埋土で特徴的なのは，薩摩火山灰のブロックが含まれていることである。ブロックは拳大のものから人頭大のものまであり，遺構東側の壁から約20cm幅のところに置かれるような形で検出された。また，遺構の中央部付近でも床面近くでまとまって検出されている。東壁際のブロックは，遺構検出面から５cm程度掘り下げたところで顔を出し，床面近くまで存在する。当初は，薩摩火山灰層（Ⅸ層）そのものではないかとも考えて掘り下げたが，遺構の壁面が埋土と明瞭に区別できることや，ブロックの下ので埋土①が入り込んでいることから，二次的なものと判断した。問題は，このブロックが自然混入なのか否かである。遺構中央部のブロックはともかく，東壁際のブロック群は，規模や位置が比較的整っていることから，自然の混入というよりは意図的に置かれたものである可能性が高いと考えられる。意図的とした場合，その目的が注目されるが，壁際であることから棚や壇のような機能が考えられよう。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は６点で，うち２点を図化した。A110とA111は前平式土器の



第46図　21号竪穴住居状遺構実測図

胴部片で斜位の貝殻条痕文が施されている。A111は内面にも貝殻条痕が顕著に見られる。

重複遺構　重複する遺構はないが，前述したように，北側の一部が地層横転によって削平されていた。地層横転が無かった場合，近接するSH24と重複していた可能性が高い。

24号竪穴住居状遺構（SH24：第53図）

検出状況　SH24はE12区で検出された。SH23と近接して検出されてもので，検出過程については前項で述べたとおりである。西側が地層横転により大きく削平されている。

形状と規模　残存する２か所のコーナー部分から想定される平面プランは隅丸方形である。，残存部分の長軸は1.75m，短軸が1.25mを測る。検出面からの深さは20㎝弱で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の残存面積は，検出面で1.76㎡，床面積で1.69㎡を測る。想定するプランを入れても本遺跡の竪穴住居状遺構の中では最も小形の部類に入るものと考えられる。残存部分の壁面傾斜値は0.96と高かった。

遺構内外に柱穴状のピットは確認できなかった。また，焼土や炭化物の集中するような痕跡もみられなかった。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

本遺構もSH23と同様に，埋土中に薩摩火山灰のブロックが含まれていた。ブロックは拳大のものから人頭大のものまであったが，規模はSH23の半分であった。意図的に置いたものと判断したが，位置もSH23とほぼ同じであり，注目される。

出土遺物　埋土中から出土した遺物はなかった。

重複遺構　重複する遺構はないが，前述したように，西側の一部が地層横転によって削平されていた。地層横転が無かった場合，近接するSH23と重複していた可能性が高い。

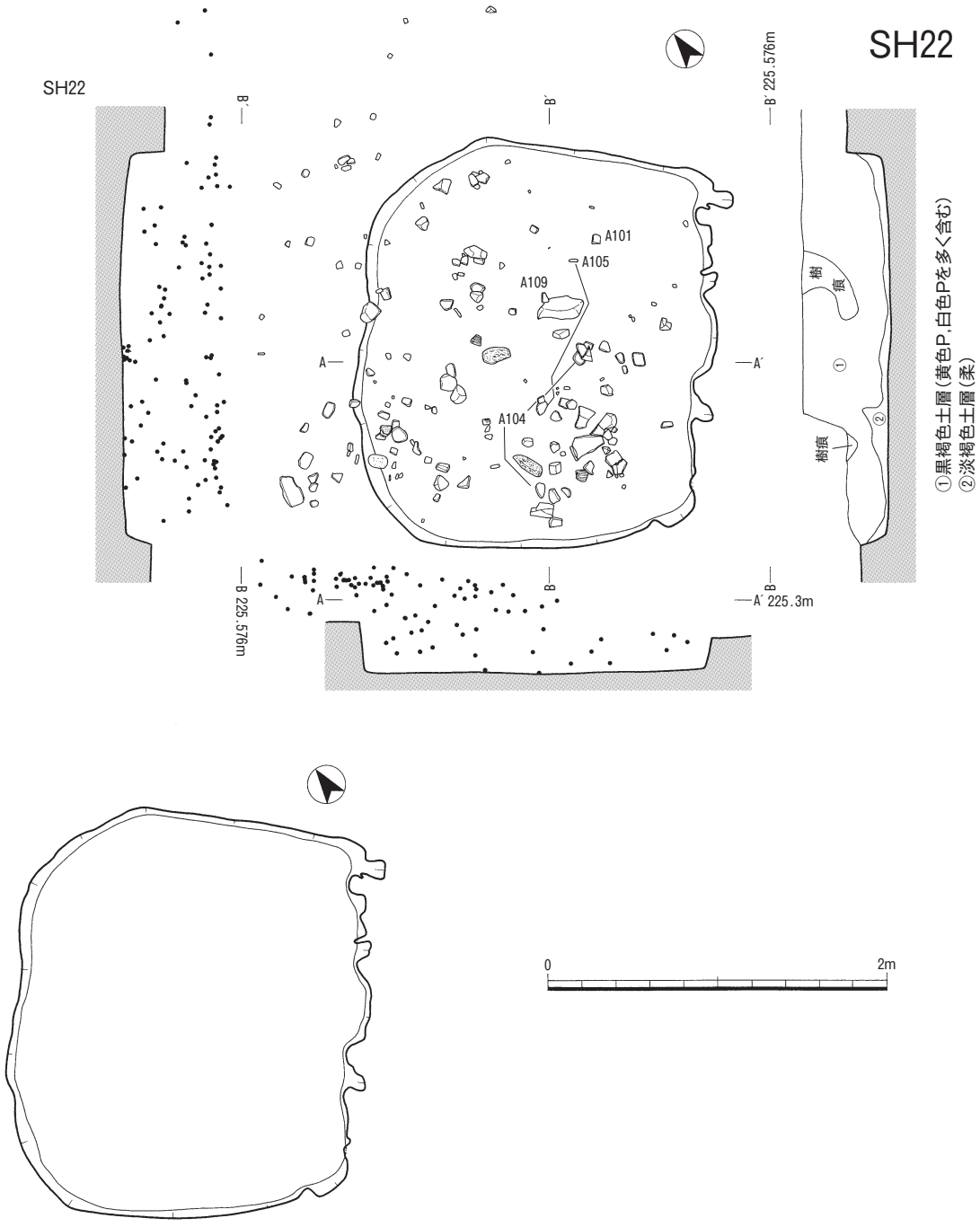
25号竪穴住居状遺構（SH25：第54図）

検出状況　SH25はE13区の12区側ライン際で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。本遺構の南側にはSK08が重複して存在する。

形状と規模　SK08と重複していることから，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は2.40m，短軸が推定で1.70mを測り，長短値は0.71とやや長方形度が高い遺構である。検出面からの深さは30～40㎝程であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。遺構の推定面積は，検出面で3.51㎡，床面積で3.09㎡を測り，本遺跡の中では，平均より小さなサイズということになる。壁面傾斜値は0.88と高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかったが，重複するSK08の床面には，SH25の床面と同じ深さをもつ小ピットが入り江状に掘り込まれていた。埋土は③に近いことから，SK08内にあるが，SH25の形状を示すものと判断した。床面は凹凸もなくほぼ水平であった。

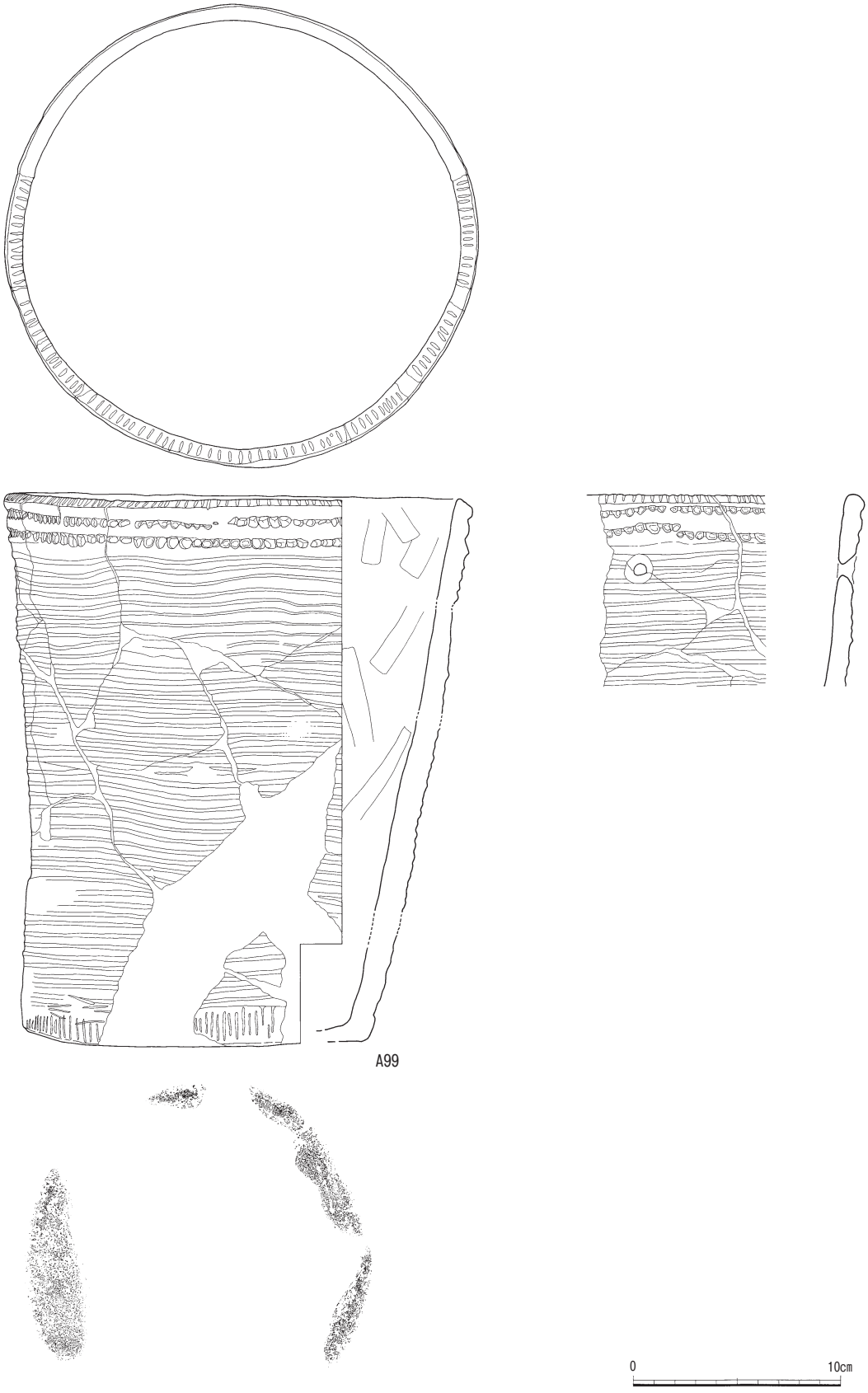
埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土③）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土④）が堆積していた。



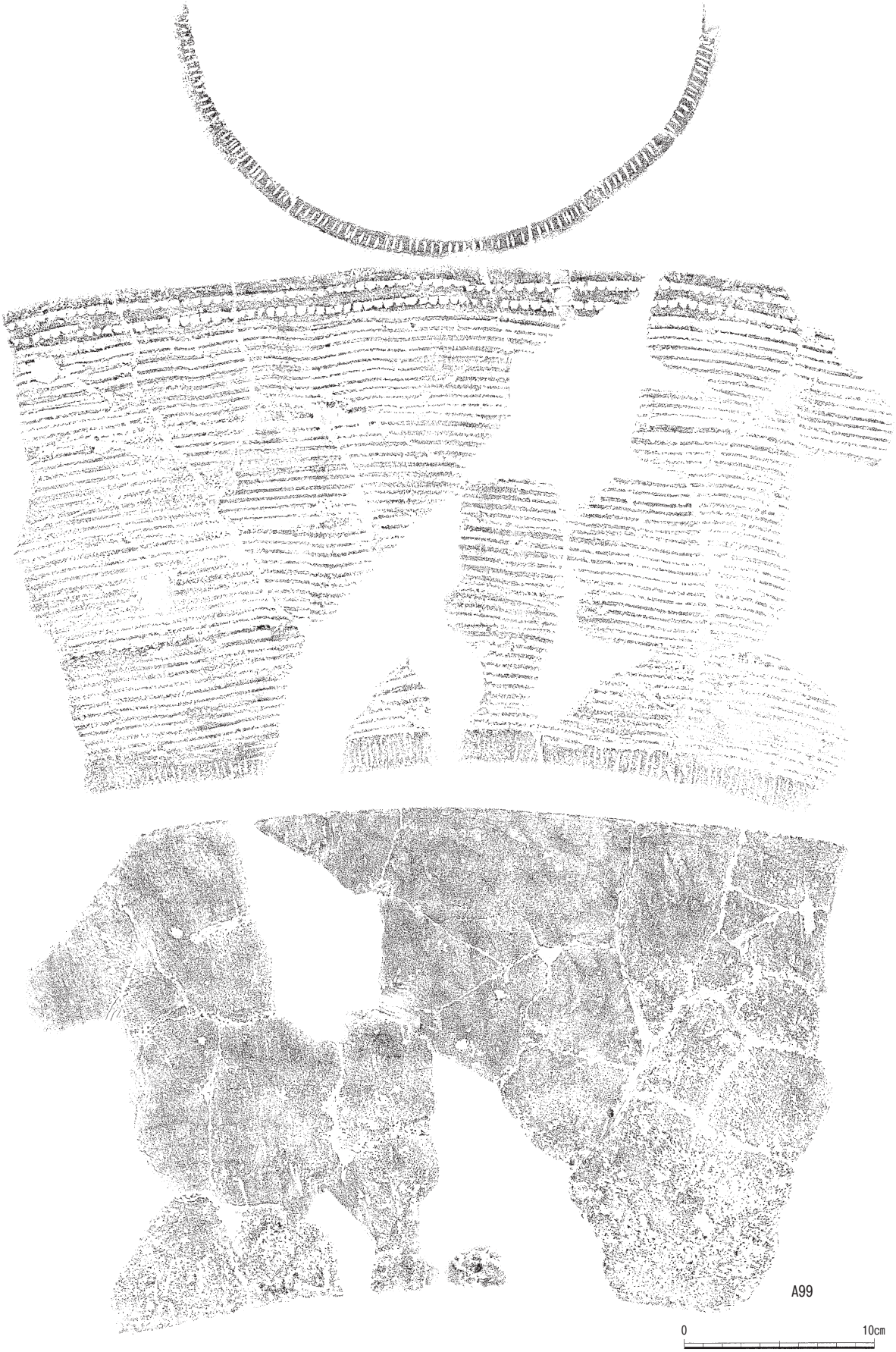
第47図　22号竪穴住居状遺構実測図

B	7	8	9	10	11	12	13	14
C								
D								
E								
F								

第48図　縄文土器出土状況図５

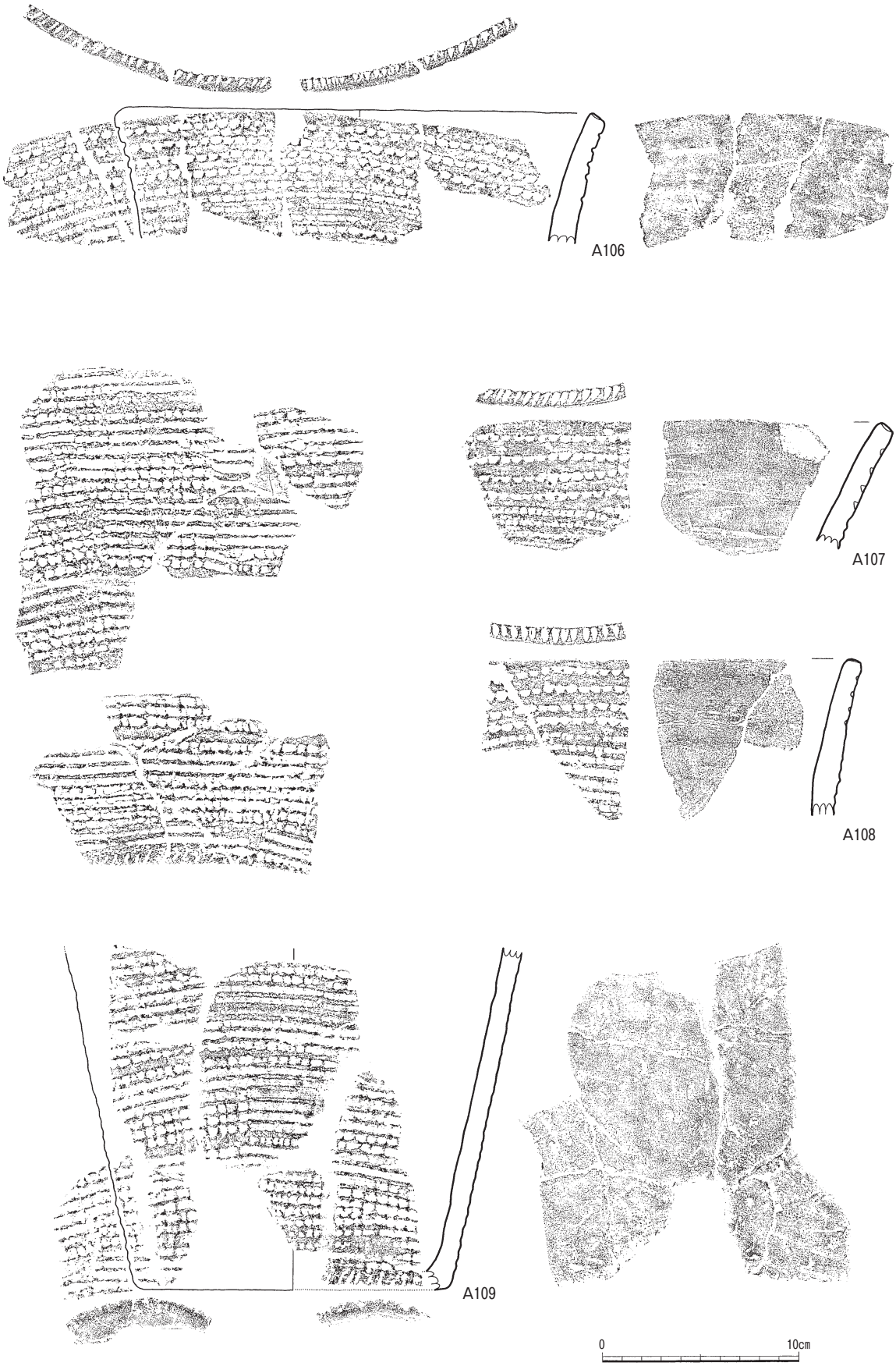


第49図　竪穴住居状遺構出土土器20



第50図　竪穴住居状遺構出土土器21

第51図　竪穴住居状遺構出土土器22



第52図　竪穴住居状遺構出土土器23

注目されるのは，SK08との関係である。第54図の断面図をみると，SK08の方が本遺構より新しいことが分かる。埋土は同じ黒褐色系の土をベースにしながらも，黄色および白色のパミスの混入状態により大きな違いがある。SK08の埋土中のパミスは粒が大きく，量も多かった。このパミスはＰ13と考えられる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は30点で，うち２点を図化した。A113は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。

B13は安山岩製のスクレイパー状石器である。完形品ではないが，現存する状況では，長さが3.00㎝，幅が3.60㎝，厚さ0.75㎝，重さ9.35g であった。剥片の側辺部に丁寧な剥離を施し，刃部を形成している。

重複遺構　繰り返しになるが，SH25の南側には，SK08が重複して存在する。SK09も E13区で検出された。現存する規模は，長軸が155㎝，短軸が100㎝であるが，前述したように埋土の状況をみると平面プランは楕円形もしくは卵形を呈していた可能性が高い。深さは約30㎝で，検出面積は1.26＋α㎡であった。本来は2.25㎡ほどはあったと想定される。埋土は下位に比較的柔らかい淡茶褐色土があり，その上位に黄色および白色パミスを多く含む黒褐色土が堆積していた。このパミスは桜島起源のＰ13と考えられる。繰り返しになるが，第54図の断面図からもわかるように，SK08の方がSH25より後出の遺構である。

26号竪穴住居状遺構（SH26：第55図）

検出状況　SH26は D11区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は3.10m，短軸が推定で1.55mを測り，長短値は0.50で，かなり長方形度が高い遺構である。検出面からの深さは20～25㎝であった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

遺構の東南部には，ベッド状の張り出しが見られた。薩摩火山灰層内でおさまる浅い掘り込みで，検出面からの深さは約５～８㎝，床面からの高さも同程度であった。

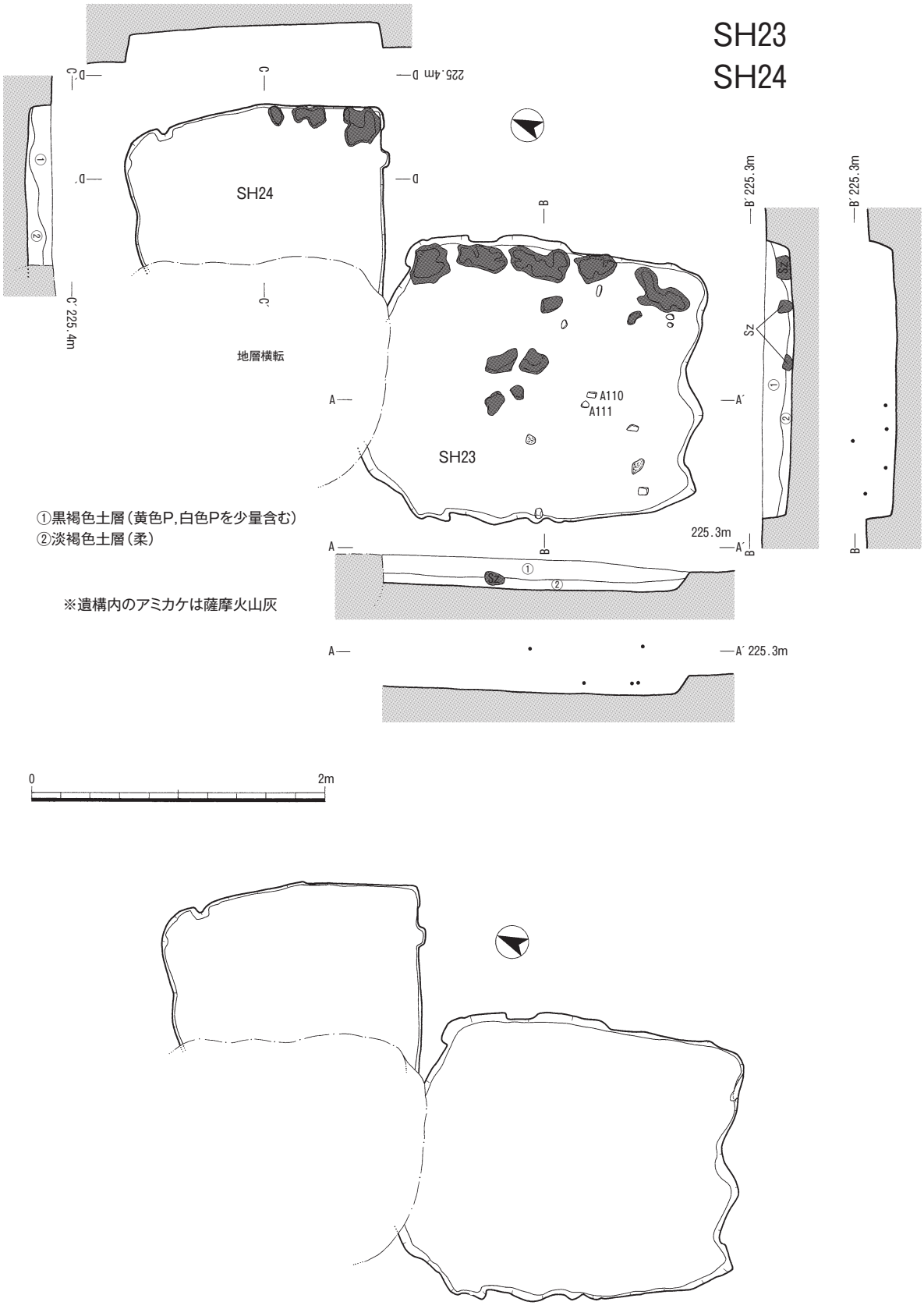
遺構の推定面積は，検出面で4.22㎡，床面積で3.15㎡を測り，本遺跡の平均値より約１㎡小さな遺構である。壁面傾斜値は0.75であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡褐色土（埋土②），さらに淡茶褐色土（埋土③）が堆積していた。埋土②，③はいずれも①よりもかなり柔らかい土質であった。

また，埋土中からは，薩摩火山灰の拳大ブロックがいくつかみられた。いずれも床面から10～20㎝程度浮いた状態で検出されている。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は10点で，うち５点を図化した。A112，A114，A115は前平式土器の口縁部片である。いずれもフラットな口唇部の端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。口唇内面端部には稜が残る。A115の刺突文は，貝殻腹縁部の肋の痕が明瞭に残る。A112は刺突文の間がやや盛り上がったような状態となり，口唇部先端は波状を呈している。胴部外面は斜位の貝殻条痕文が基調となる。A112と A115の口縁部直下には横位の貝殻条痕が施されて



第53図　23号，24号竪穴住居状遺構実測図

いる。A115は内面も外面と類似する貝殻条痕がみられる。A114の内面は刷毛目状の細かな斜位の条線が明瞭である。A114と A115は包含層中の土器片とも接合した。

A116は前平式土器の胴部片である。遺構内遺物２点が接合した。胴部外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。内面も一部に貝殻条痕が観察できる。

A117は前平式土器の底部片である。底径15.8㎝を測る。内外面共に貝殻条痕（文）がみられる。外面のベースは斜位の貝殻条痕文であるが，底端部近くには横位の貝殻条痕が若干施されている。これも包含層中の土器片と接合した。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

27号竪穴住居状遺構（SH27：第56図）

検出状況　SH27は E15区において単独で検出された。しかし，遺構の西側は，平成15年度に実施された確認調査時のトレンチで削平してしまった。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

北東の D15区にある SH17と共に，本遺跡で検出された竪穴住居状遺構の中で，最も南東側に位置するものの一つである。

形状と規模　遺構の西側が確認調査で削平されたことから，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形であると考えられる。残存部分の規模は，長軸が1.95m，短軸が1.90mであった。検出面からの深さは約20㎝であった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

遺構が現存する部分の面積は，検出面で3.31㎡，床面積で2.95㎡を測り，壁面傾斜値は0.89であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は５点で，うち２点を図化した。A118と A119は前平式土器の胴部片である。いずれも内外面に斜位の貝殻条痕文がみられる。A118の外面には，炭化物が若干付着していた。

重複遺構　トレンチによる削平はあったが，重複する遺構等は無かった。

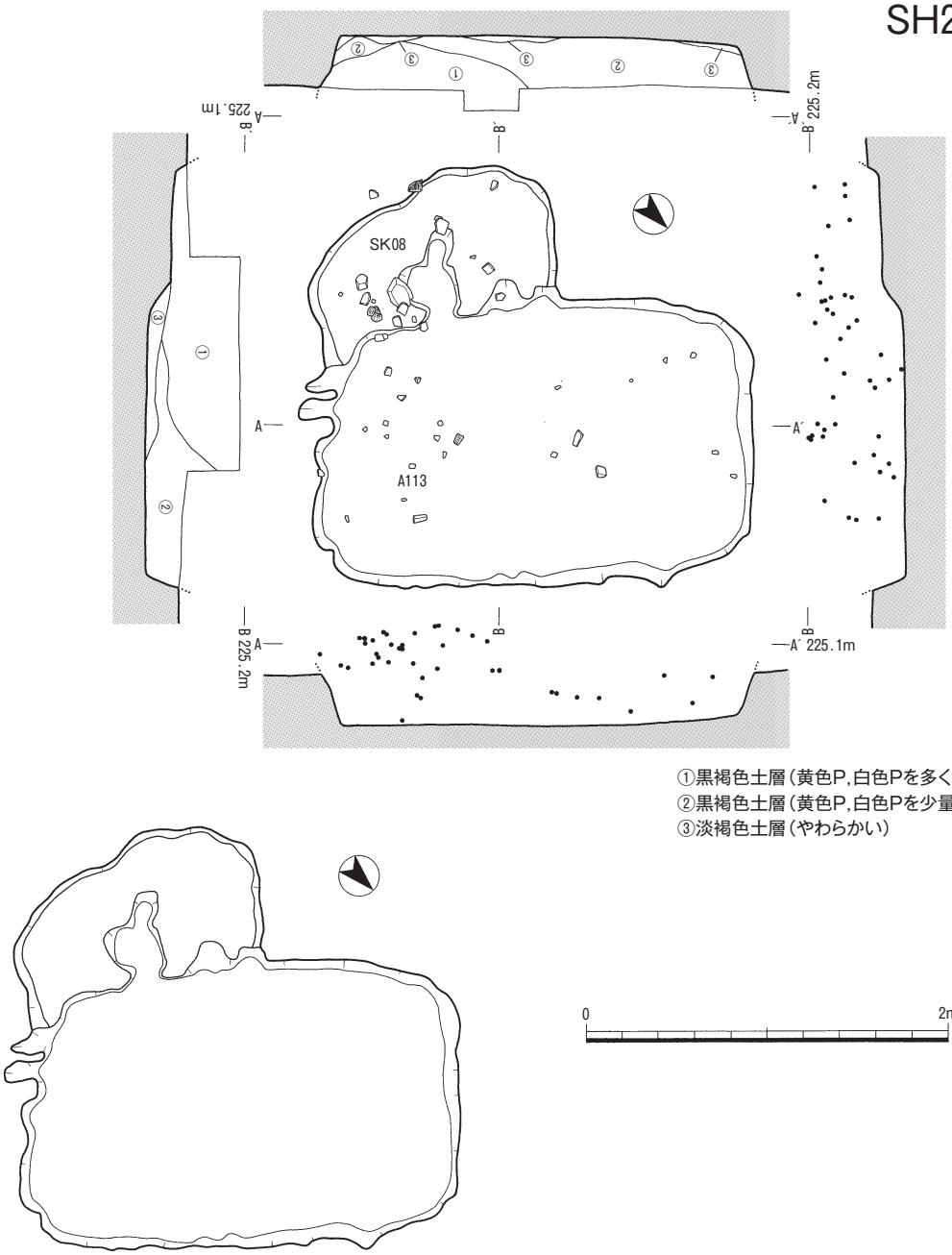
28号竪穴住居状遺構（SH28：第58図）

検出状況　SH28は F13区において検出された。遺構の南西隅は現代の農作業による攪乱（いわゆる芋穴掘削）で削平されていた。発掘調査段階では SK14として記録を進めた遺構である。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　遺構の南西隅に攪乱部分があることから，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形であると考えられる。長軸が2.05m，短軸が1.25mで，長短値は0.61であった。検出面からの深さは20㎝弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

遺構が現存する部分の面積は，検出面で2.56㎡，床面積で2.13㎡を測り，本遺跡の竪穴住居状遺構の中では小さな部類に入る。壁面傾斜値は0.83であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。



第54図　25号竪穴住居状遺構実測図

埋土　埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土①には若干であるが炭化粒がみられた。集中箇所はなかった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は６点で，うち４点を図化した。A120と A121のいずれも前平式土器の胴部片と考えられるものである。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

A128は84点の土器片が接合した前平式土器の完形品である。SH28からの出土は１点のみであった。また SK15から１点出土している。口径28.2㎝，底径23.4㎝，器高47.6㎝を測る，本遺跡の中で最大級の土器資料である。口縁端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らし，胴部全面に比較的明瞭な貝殻条痕文を施した大形土器である。胴部の貝殻条痕文は口縁部直下が横位で，多くは斜位の条痕文で埋め尽くされている。包含層を中心に計84点の土器が接合した資料である。

A129は口径19.5㎝を測る前平式土器である。底部まで接合していないため，底径と器高は不明である。口縁部下に貝殻腹縁部による刺突文を巡らし，胴部を斜位の貝殻条痕で飾る土器である。

重複遺構　遺構の一部に攪乱部分があるが，重複する遺構等は無かった。

29号竪穴住居状遺構（SH29：第58図）

検出状況　SH29は C14区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は2.50m，短軸が推定で1.65ｍを測り，長短値は0.66であった。検出面からの深さは約15㎝と浅かった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。遺構の西側に若干の出っ張りがあるが，掘りすぎの可能性もある。

遺構の面積は，検出面で3.59㎡，床面積で3.30㎡を測り，壁面傾斜値は0.92であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

また，埋土中からは，薩摩火山灰の小児頭大ブロックが２点みられた。いずれも床面直上で検出された。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

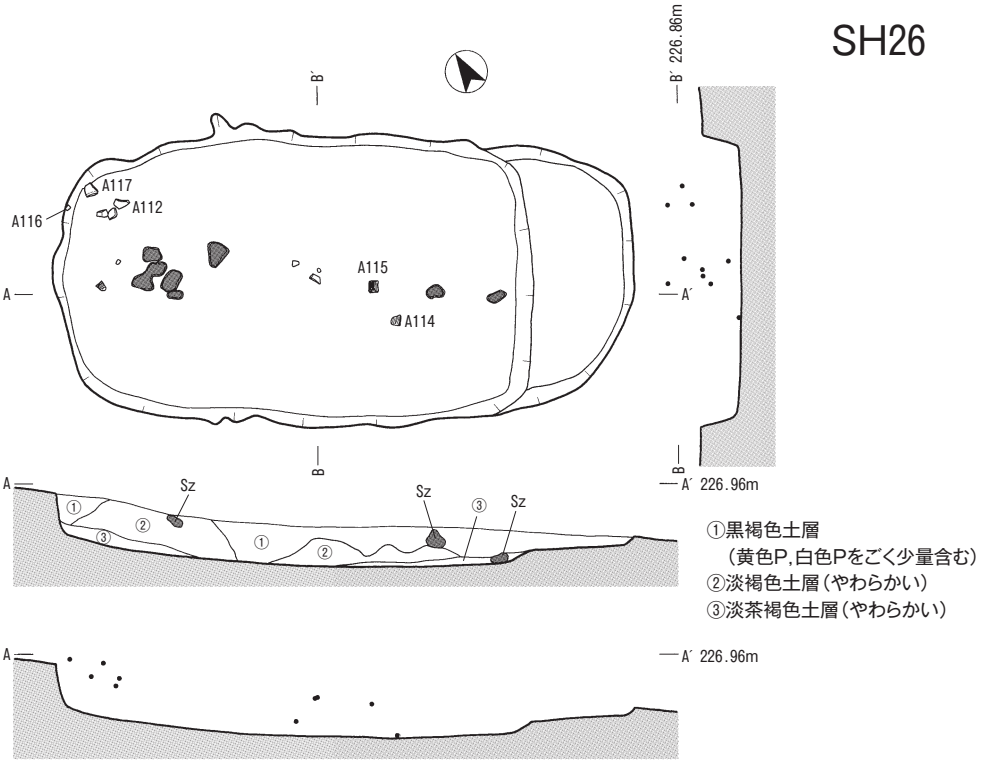
重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

30号竪穴住居状遺構（SH30：第63図）

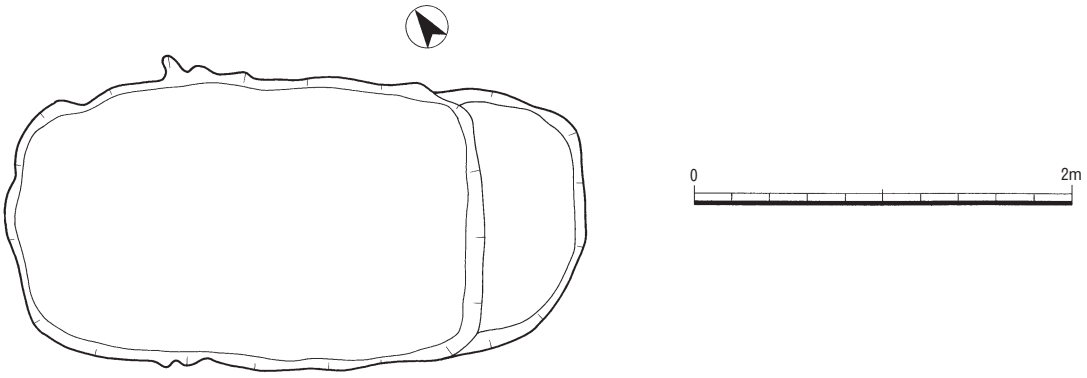
検出状況　SH26は C13区と C14区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は2.70m，短軸が推定で1.30ｍを測り，長短値は0.48で，かなり長方形度が高い遺構である。検出面からの深さは15㎝前後であった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

遺構の長辺部に若干出入りがあることから，２つの遺構が重複している可能性も考えたが，埋土に大きな変化がないこと床面もほぼ水平，フラット面が形成されていること等から，１つの遺構として記録を進めた。



※遺構内のアミカケは薩摩火山灰



第55図　26号竪穴住居状遺構実測図

遺構の面積は，検出面で3.12㎡，床面積で2.93㎡を測り，壁面傾斜値は0.94と高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

また，埋土中からは，薩摩火山灰の拳大ブロックが２か所で検出されている。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は８点で，うち３点を図化した。A122～A124は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A123と A124は同一個体の可能性が高い。内面は丁寧なナデ仕上げで平滑である。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

31号竪穴住居状遺構（SH31：第64図）

検出状況　SH26は D13区から D14区にかけて検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。第64図の平面図のように，複数の遺構が重複しているような状況で検出された。遺構の埋土や検出ラインの連続性等から，同一遺構として記録した。

形状と規模　遺構は，大きく分けて上段と下段の２段構成になっている。下段は長軸2.80m，短軸1.80mを測る楕円形状を呈している。この下段をベースとして，上段は２つの方向へ広がりを見せる。１つは下段の楕円形状の延長線上にある部分，もう一つは下段南側の遺構ラインを基準として，隅丸長方形状に北西方向へ広がる部分である。それぞれ長軸が3.35m，3.50mとなる。これら全体の形状を言葉にすると，不定形ということになろうか。

検出面からの深さは上段で12㎝程度，下段で約20㎝であった。下段は薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達しているが，上段の床面（底面）は薩摩火山灰層中にとどまっていた。

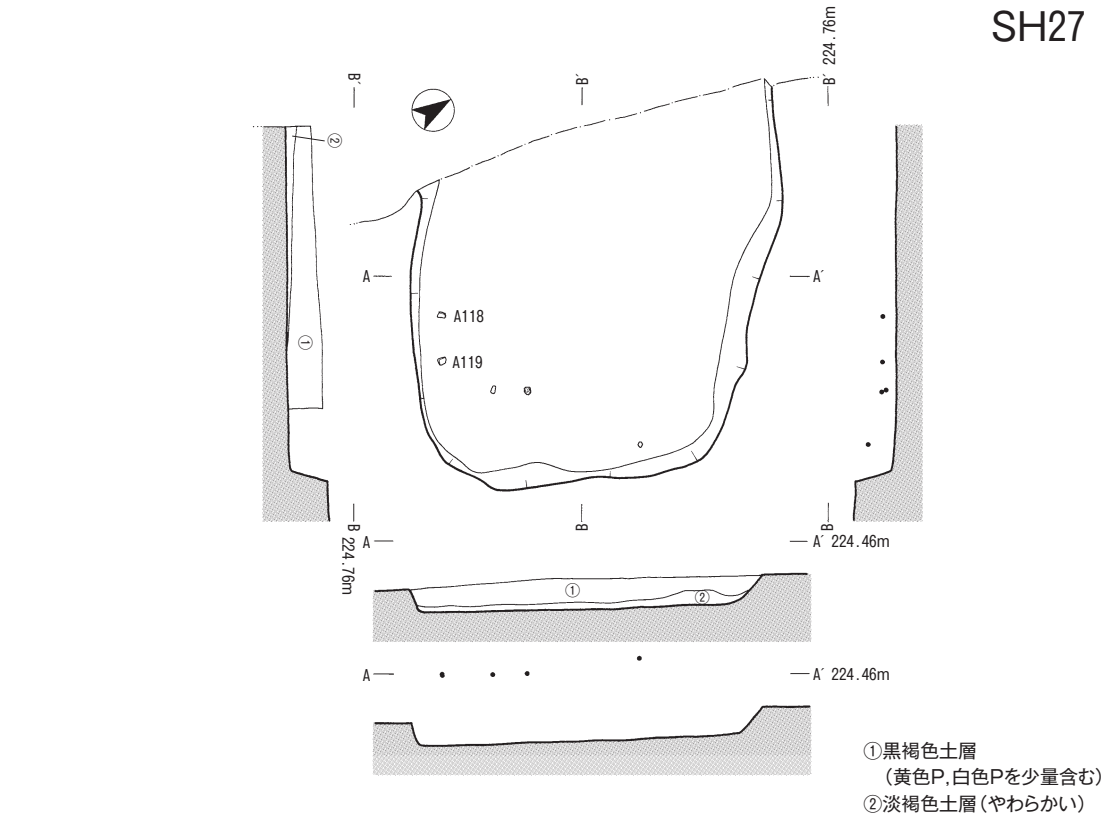
遺構の面積は，検出面で7.66㎡，上段の床面積がで3.22㎡，下段の床面積が約3.0㎡であった。

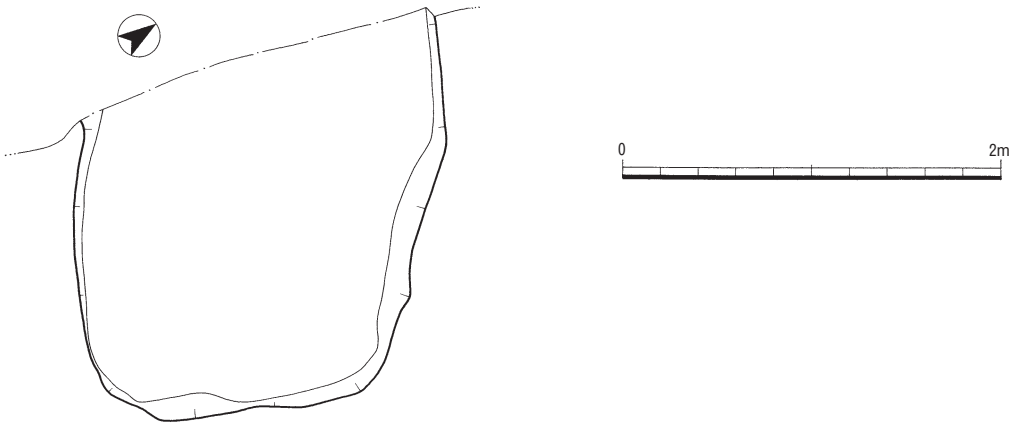
柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

本遺跡で検出された竪穴住居状遺構の多くは，薩摩火山灰層（Ⅸ層）を掘り抜いた状態で検出された。本遺構の下段部分がそうである。下段部分は形状こそ楕円形状で少数派であるが，規模は平均値より２㎡ほど狭い。ここでは隣接する形で，床面（底面）がより高い上段部分が検出され，同一遺構というとらえ方で記録を進めた。異なる遺構の重複である可能性も否定はできないが，検出の際に，上段に当たる部分を把握できずに，見逃してきた可能性があるのでは？という問題点，課題点を提示してくれる事例として注意しておきたい遺構である。

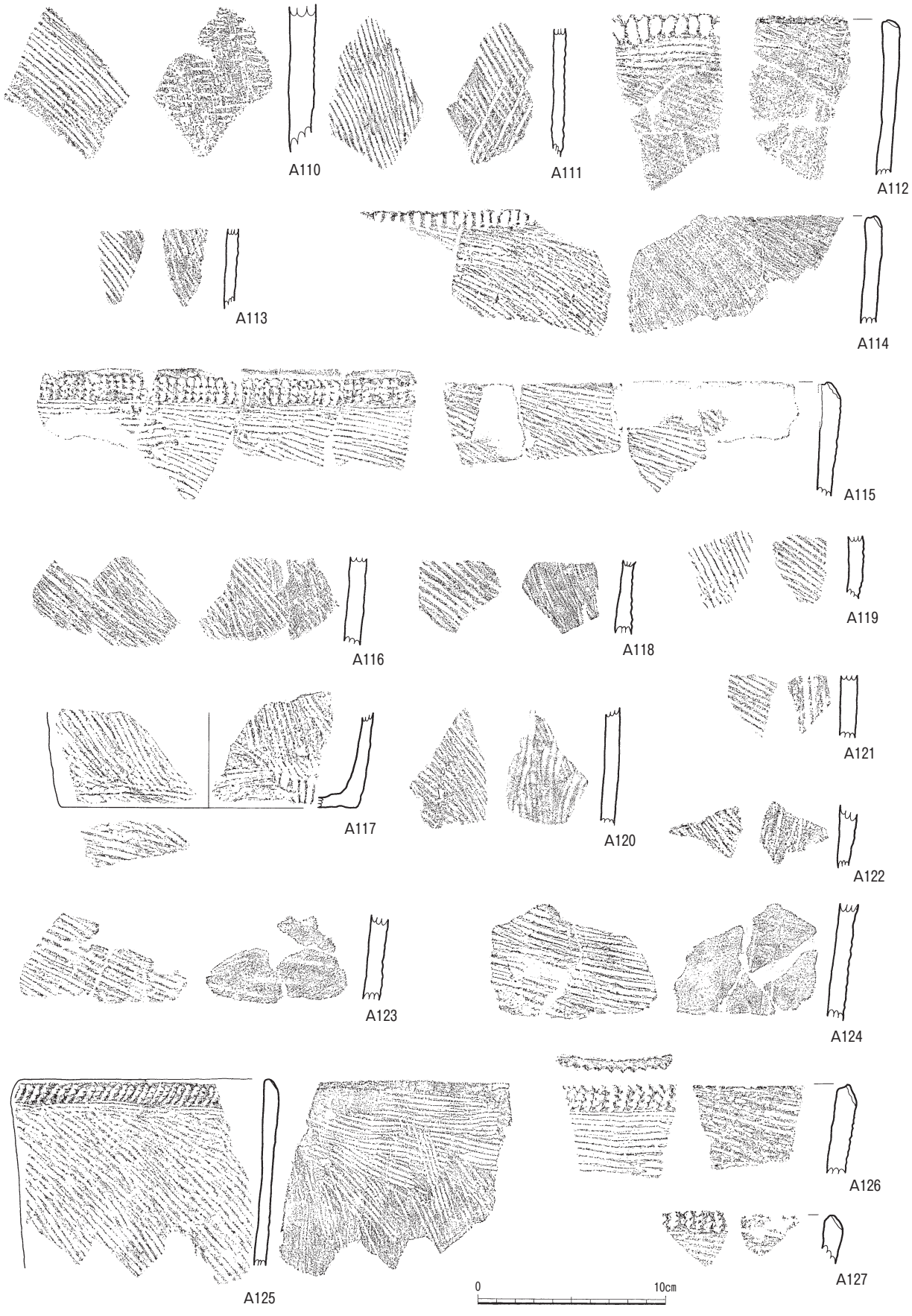
南九州の縄文時代早期，特に前半期の遺構検出は，どうしても薩摩火山灰層に頼ってしまう部分がある。当該期の包含層や，集石遺構の検出レベルは，おおむね薩摩火山灰層より10～20㎝程度高いのが通常である。つまり，遺物や集石遺構を構成する礫が出土するレベルとして，誰でも把握できるわけである。ところが，竪穴住居跡や土坑などは，純粋に土色や土質によって判断する場合がほとんどである。薩摩火山灰層の上位に堆積する黒褐色系の土層の中から，遺構の掘り込み面を探すことはひじょうに厳しいというのが現状である。そのことを考慮すると，本遺構の有り様は，遺構の復元や集落の様子を検討する上で，重要な視点を与えてくれているのかも知れない。本遺跡からは，同様な遺構が複数検出されているので，合わせて検討していきたい。

SH27



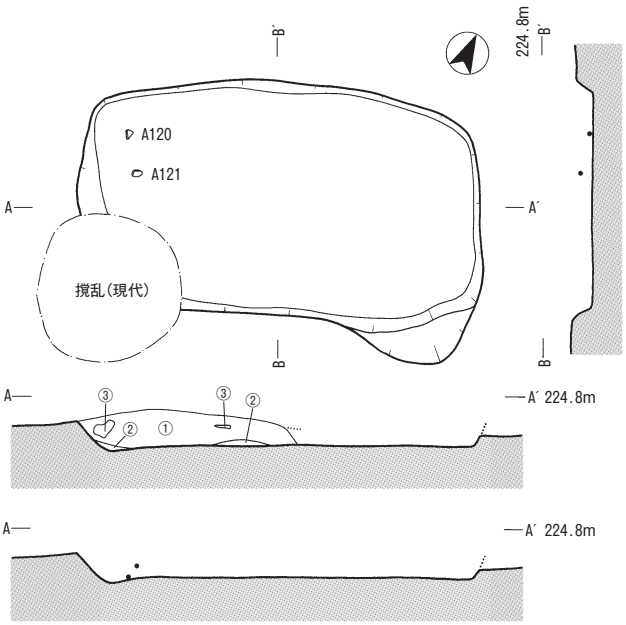


第56図　27号竪穴住居状遺構実測図



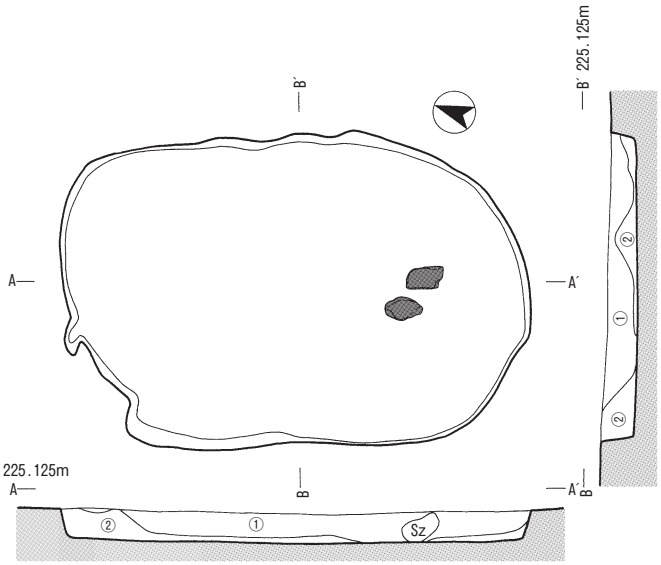
第57図　竪穴住居状遺構出土土器24

SH28



①黒褐色土層(黄色Pをごく少量含む)
②淡茶褐色土層(柔)
③黄茶褐色土層(Ⅶ層類似)

SH29



①黒褐色土層(黄白色Pを少量含む)
②淡茶褐色土層(柔)

※遺構内のアミカケは薩摩火山灰

0 2m

第58図　28号，29号竪穴住居状遺構実測図

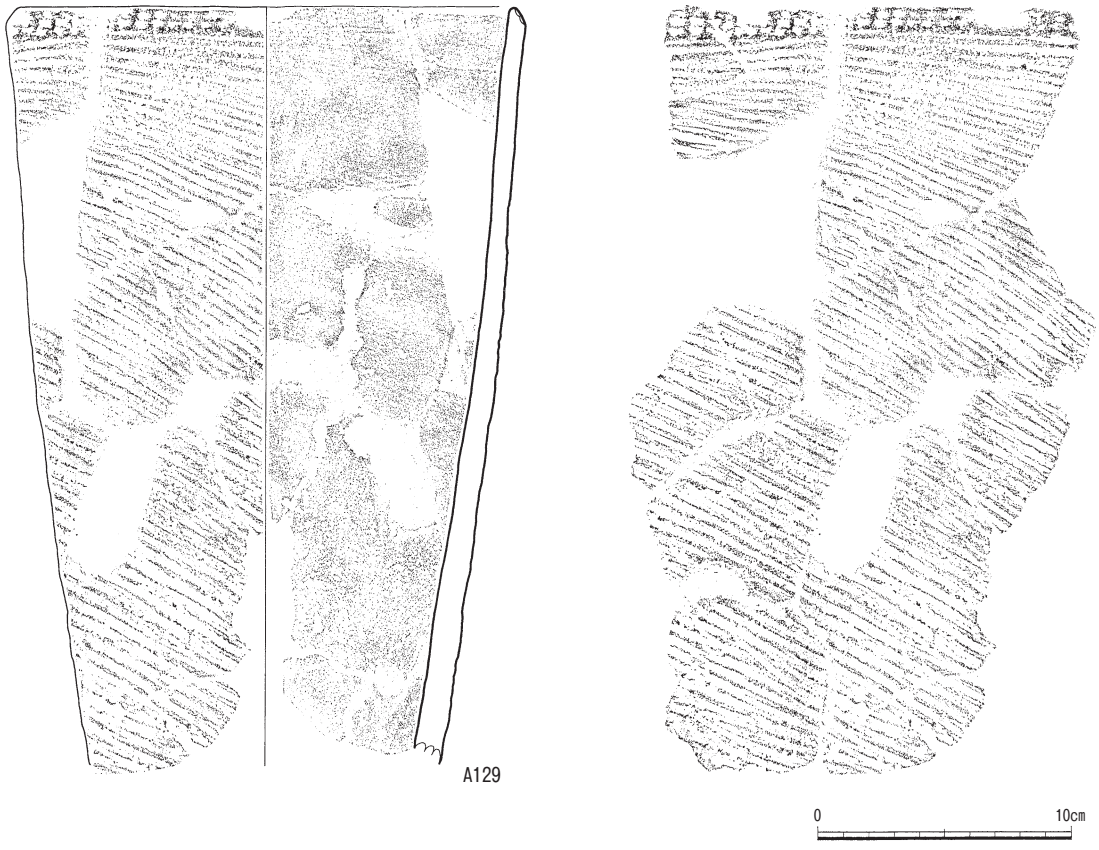
第59図　竪穴住居状遺構内出土土器25

第60図　竪穴住居状遺構内出土土器26

A128

A	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
B											
C											
D											
E											
F											
G											
H											

第61図　縄文土器出土状況図６



第62図　竪穴住居状遺構内出土土器27

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土②）を主としながら，その下位に白色パミスを極少量含む黒褐色土(埋土③)，比較的柔らかい暗茶褐色土（埋土②）と堆積していた。遺構本来の掘り込み面は，確実に埋土②中にあると考えられるが，薩摩火山灰層より上位にあるはずの壁の立ち上がり線や，埋土②にあるであろう本来の掘り込みラインは掴めなかった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は138点で，うち45点を図化した。A125～A145の多くは前平式土器の口縁部片である。A215～A138は口唇端部に貝殻腹縁部による斜位ないし縦位の連続刺突文を巡らすものである。いずれも口縁直下には横位の貝殻条痕文，胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。A130は口径25.4cmを測る。口唇部にはわずかにフラット面が残る。A135もフラット面が残るが内面の稜線はごくわずかに気味で内に入っている。口唇部には浅い刻目が施されている。A130，A135共に内面にも細かな貝殻条痕がみられる。特に A135の胴部内面は縦方向の条痕が目立つ。A138は口径17.0cmを測る。口唇部はフラットで，やや内湾気味である。貝殻刺突文は縦位で明瞭かつ密に施されている。内外面で貝殻条痕文がみられる。周囲の包含層中から出土した土器片とも接合した。A136の口唇頂部は，貝殻刺突文を施したことによる粘土の移動がみられ，波状を呈している。

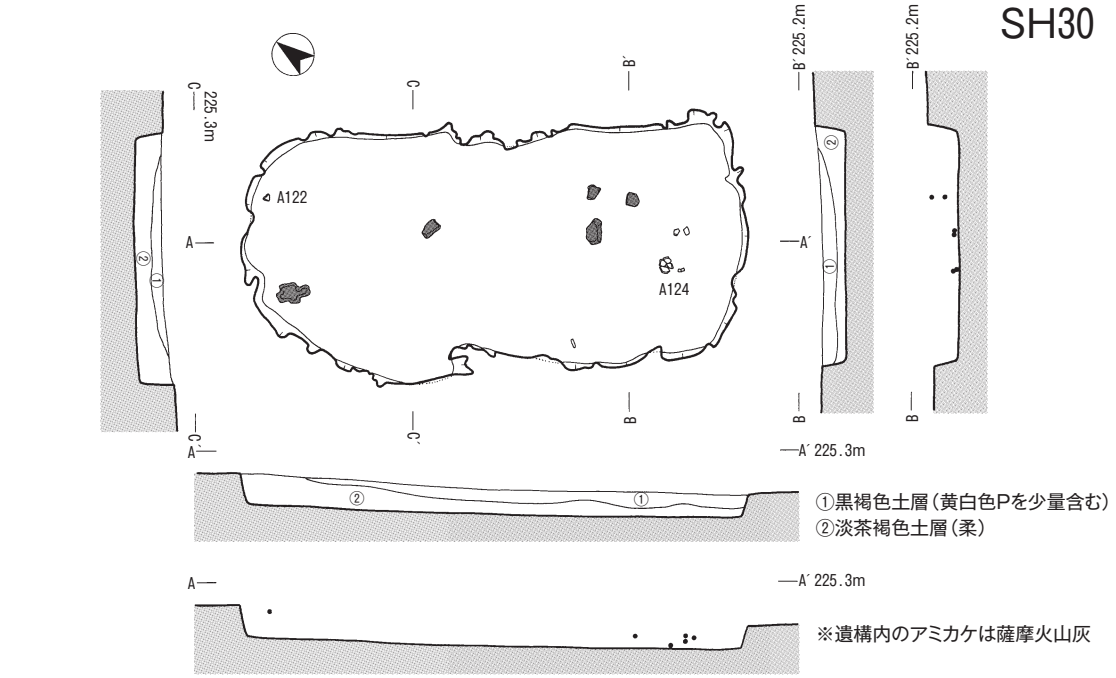
A139～A145は口唇端部にヘラ状工具による連続刺突文を巡らすものである。A139は推定口径24.8cmと前平式土器の中では大形の部類である。口唇頂部は，刺突文による粘土の移動で，波状を呈している。内外面共に丁寧な貝殻条痕文が顕著に施されている。口唇部直下外面には横位の貝殻条痕文があり，下位は横位の貝殻条痕文を施している。口唇部直下には，先端が鋭利な竹串状の施文具で，「○○」「○○○」の刺突文？があり注目される。A142は縦長に接合した前平式土器の口縁部片である。口唇端部（上段）と口縁端部（下段）にそれぞれ浅めの連続刺突文が施されている。上段と下段の刺突文は，それぞれの間隔を埋めるように互い違いに施文されている。外面は口縁部直下が横位，胴部が斜位の貝殻条痕文が施されている。内面はケズリ仕上げの痕跡が見られる。A144は口縁部直下にヘラ状工具による２段の刺突文が施されている。口唇部はフラットである。

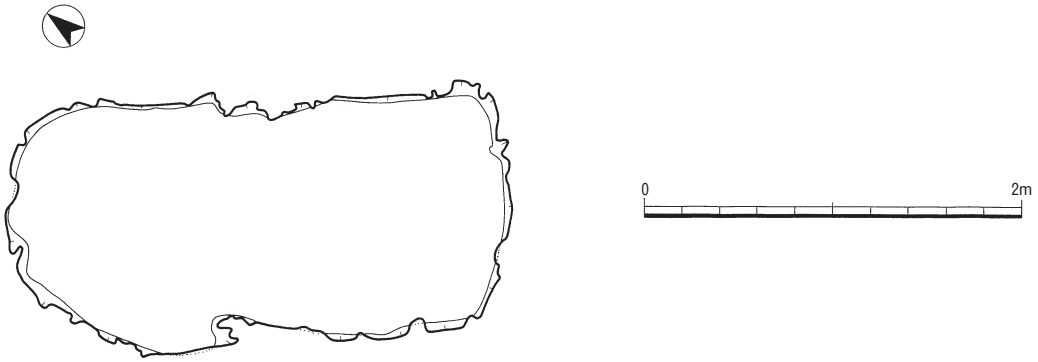
A146～A160は前平式土器の胴部片である。いずれも胴部に斜位の貝殻条痕文が施されている。A146や A147などは内面も貝殻条痕が顕著に見られる。これらは周囲の包含層中遺物と何点か接合した。

A161と A166は前平式土器の底部片である。A161は底径13.7cmを測る。胴部は斜位の貝殻条痕文が施されているが，底部付近は，底端部から1.5cmほどの幅で横位の貝殻条痕文，あるいはそれをナデ消したような状態の，仕上げ痕が観察できる。

B14と B15は安山岩製のスクレイパー状石器である。共に断面三角形の縦長剥片を用い，側辺部に丁寧な剥離を施し刃部を形成している。B15の裏面には研磨痕が観察できる部分がある。いずれも欠損部をもつが，B14は長さ10.30cm，幅6.5cm，厚さ1.10cm，重さ56.19g，B15は長さ5.70cm，幅4.00cm，厚さ0.60cm，重さ14.80g を測る。

B32は凹石，B32と B34は磨石である。B32は凹石である。表裏に磨面，側面は敲き痕がみられる。それぞれの面の境界は比較的はっきりしており，形状は石鹸状をなす。凹みは表裏両面にあり，それぞれ２か所のすり鉢状凹部が重複し，瓢箪形状を呈している。ほぼ完形に近く，長さ9.35cm，幅7.65cm，厚さ3.20cm，重さ319.00g を測る。B33は磨石の半欠品である。長さ6.45cm，幅7.40cm，





第63図　30号竪穴住居状遺構実測図

厚さ4.20cm，重さ226.00g を測る。B34は大形の磨石である。一部欠損しているが，残存部も包含層中の２点を含む３点の接合資料となっている。磨石としているが，中央に石皿状の凹部（摩滅痕をもつ）を持つ面もあり，小形の石皿と呼ぶべき石器かも知れない。長さ12.65cm，幅10.00cm，厚さ4.65cm，重さ963.00g を測る。

重複遺構　形状からは，複数の遺構が重複している可能性も否定できないが，これまで述べてきたように，ここでは一つの遺構として理解し，記録した。つまり，単独で検出された遺構として想定した。

32号竪穴住居状遺構（SH32：第71図）

検出状況　SH26は G5区と G6区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は2.90m，短軸が推定で2.25mを測り，長短値は0.78であった。検出面からの深さは約25cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

遺構の面積は，検出面で5.78㎡，床面積で5.26㎡を測り，本遺跡では，ほぼ平均的な数値を示す。壁面傾斜値は0.91と比較的高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

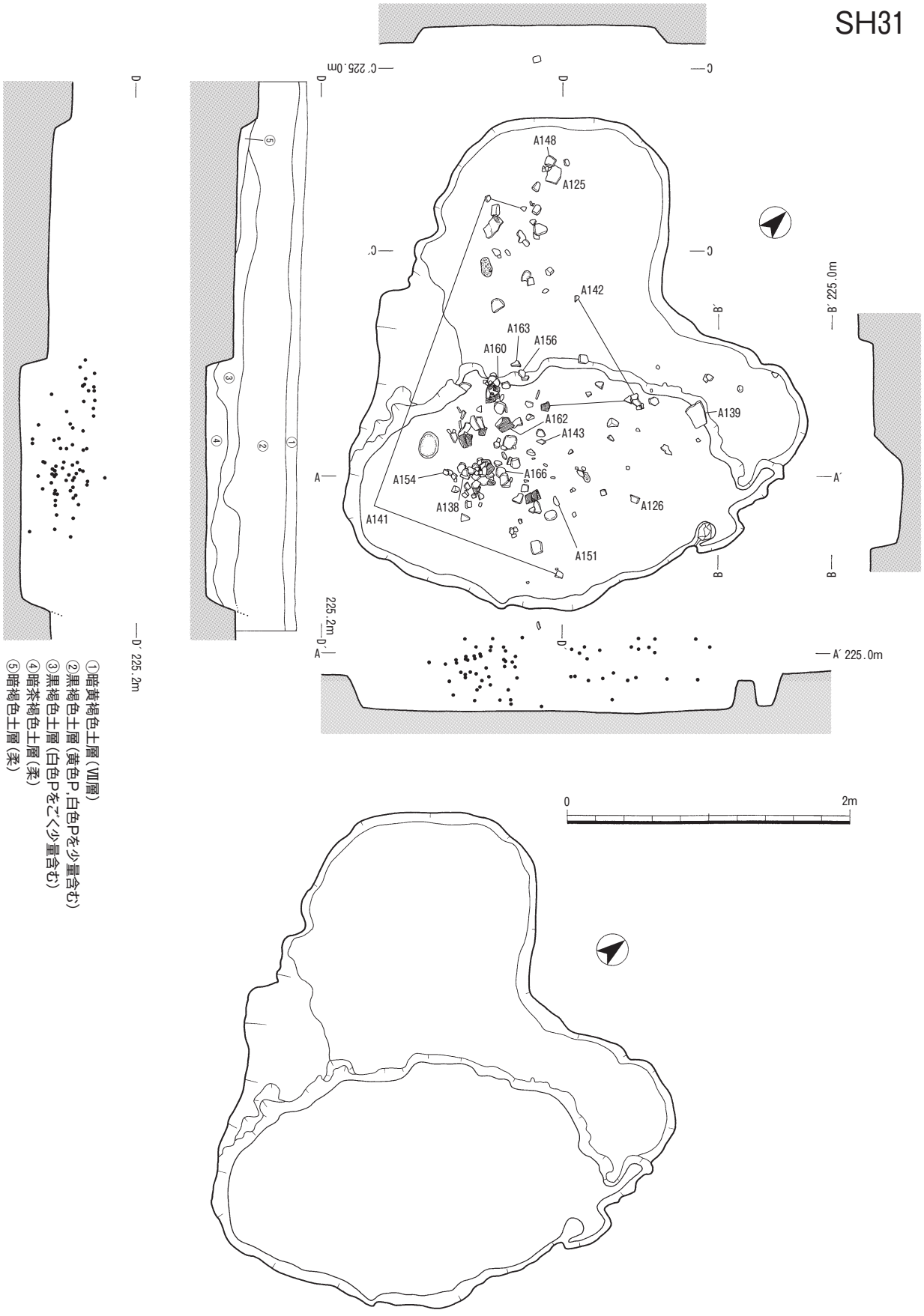
埋土　埋土は黄色パミス（P13）をむ黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土（埋土②）が堆積していた。

また，埋土中からは，薩摩火山灰の拳大ブロックが少量確認された。

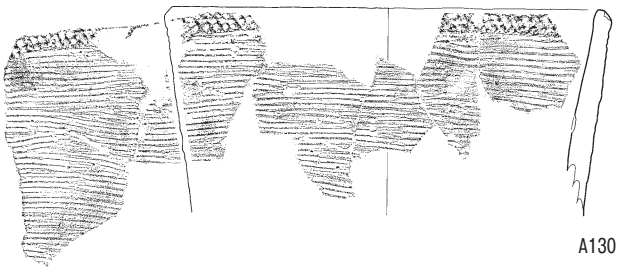
出土遺物　埋土中から出土した遺物は52点で，うち18点を図化した。A167は前平式土器の口縁部片である。口唇端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすもので，深く刺突することでシャープな口唇部を形成し，やや波状を呈している。口縁部直下には同じ施文具による斜位の連続刺突文が施され，口唇部文様と連動した構成となっている。A168～A176，A179は前平式土器の胴部片である。外面を見ると A168～A175は斜位，A176と A179は横位の貝殻条痕が施されている。A177と A178は前平式土器と考えられる底部片である。A177は推定口径13.0cmを測るもので，底面に土器製作時の敷物圧痕が観察できる。もじり編みと考えられる。A178は，底面に貝殻条痕が明瞭に残る土器片である。A180～A182は志風頭式土器と考えられるものである。A180の胴部片は浅い条痕の上から縦方向の２本沈線が施されている。A180と A182は同一個体と考えられるもので，斜位の条痕の上に２本沈線が重ねて施されている。それぞれ胴部片と底部片である。

B6は磨製石斧の剥片をスクレイパー状に加工，使用した石器である。表面には磨製石斧時代の研磨痕が残るが，裏面には大きな剥離面が残る。縁辺部には微細な使用痕も観察できる。現状は，長さ7.30cm，幅4.90cm，厚さ1.10cm，重さ38.75g である。B35は磨石の半欠品である。現状は，長さが7.25cm，幅が7.65cm，厚さが4.80cm，重さが325.00g を測る。

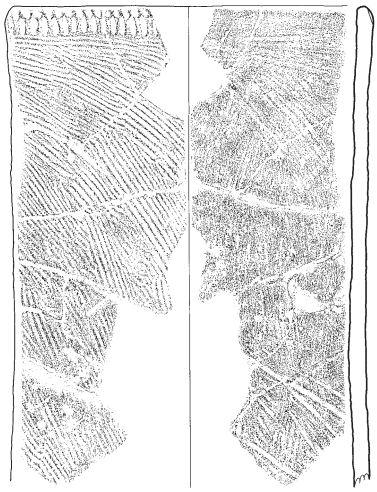
重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。



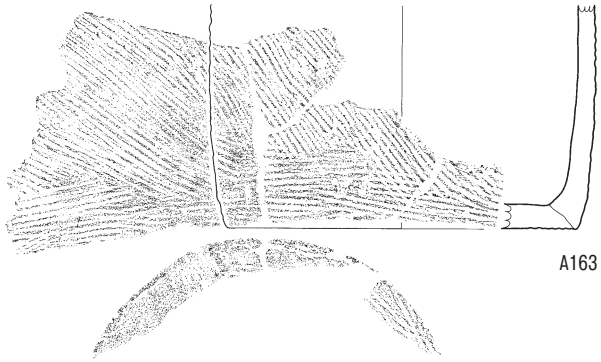
第64図　31号竪穴住居状遺構実測図



B	9	10	11	12	13	14	15
C							
D							
E							
F							
G							

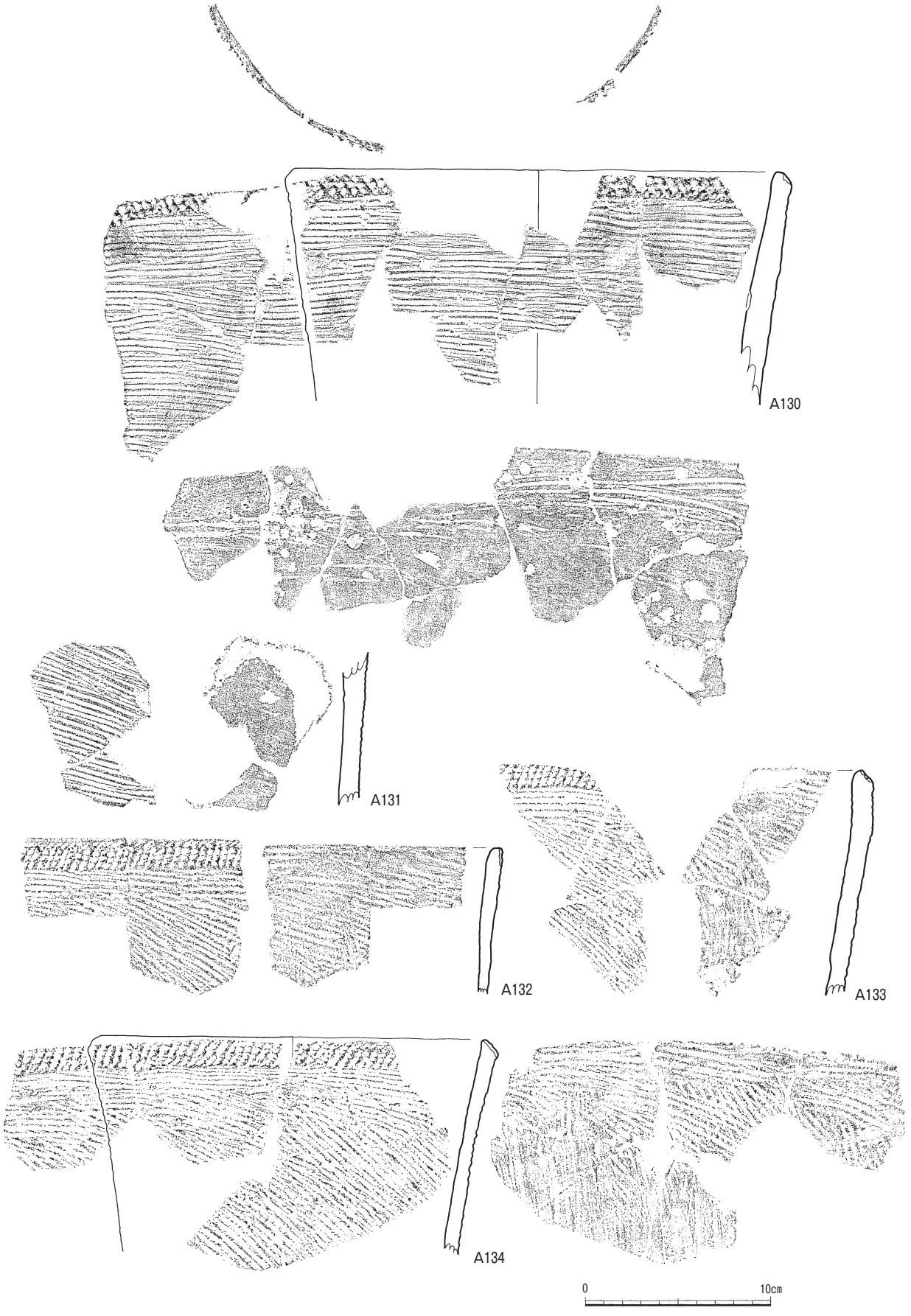


B	13	14	15
C			
D			
E			

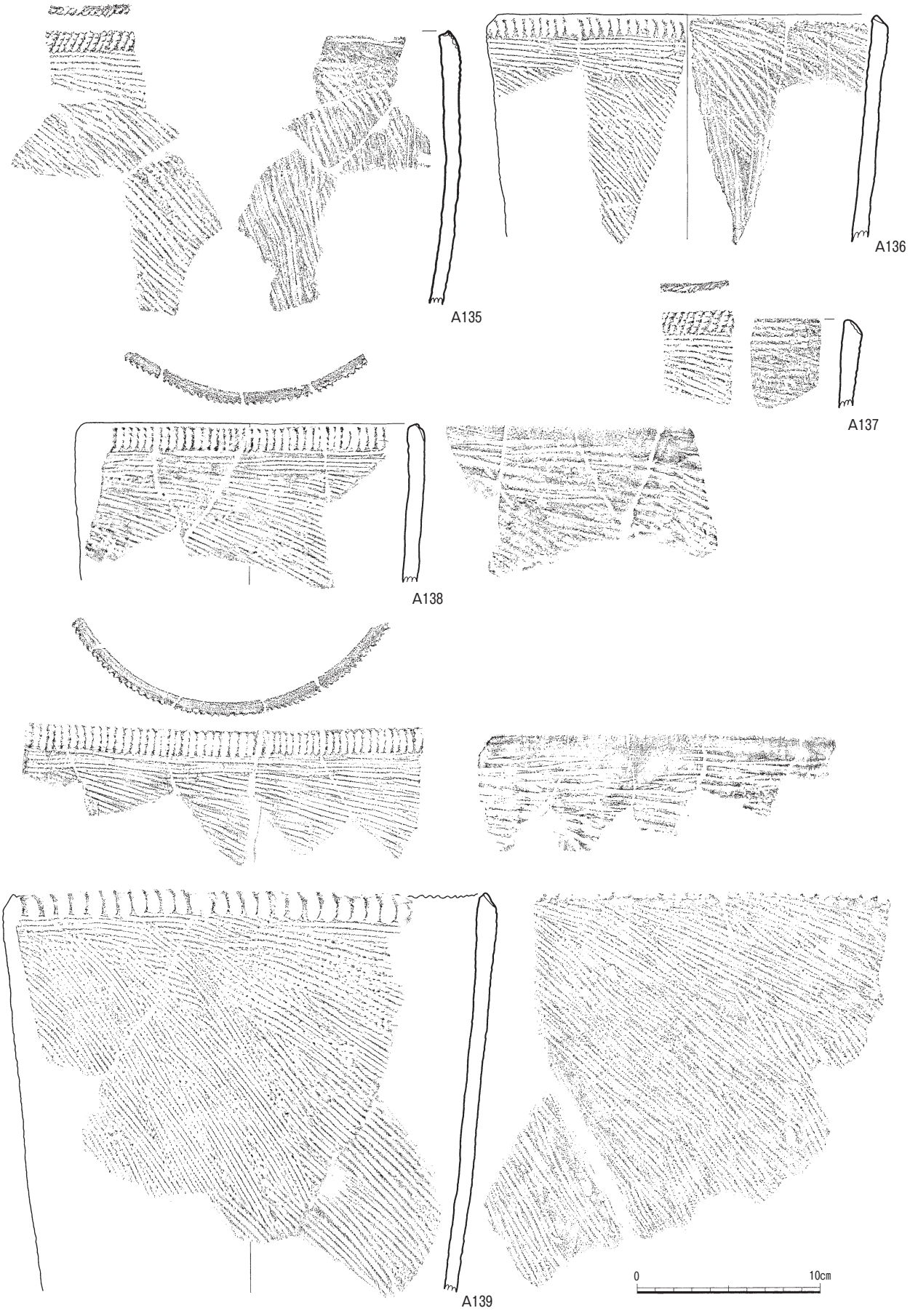


C	13	14	15
D			
E			

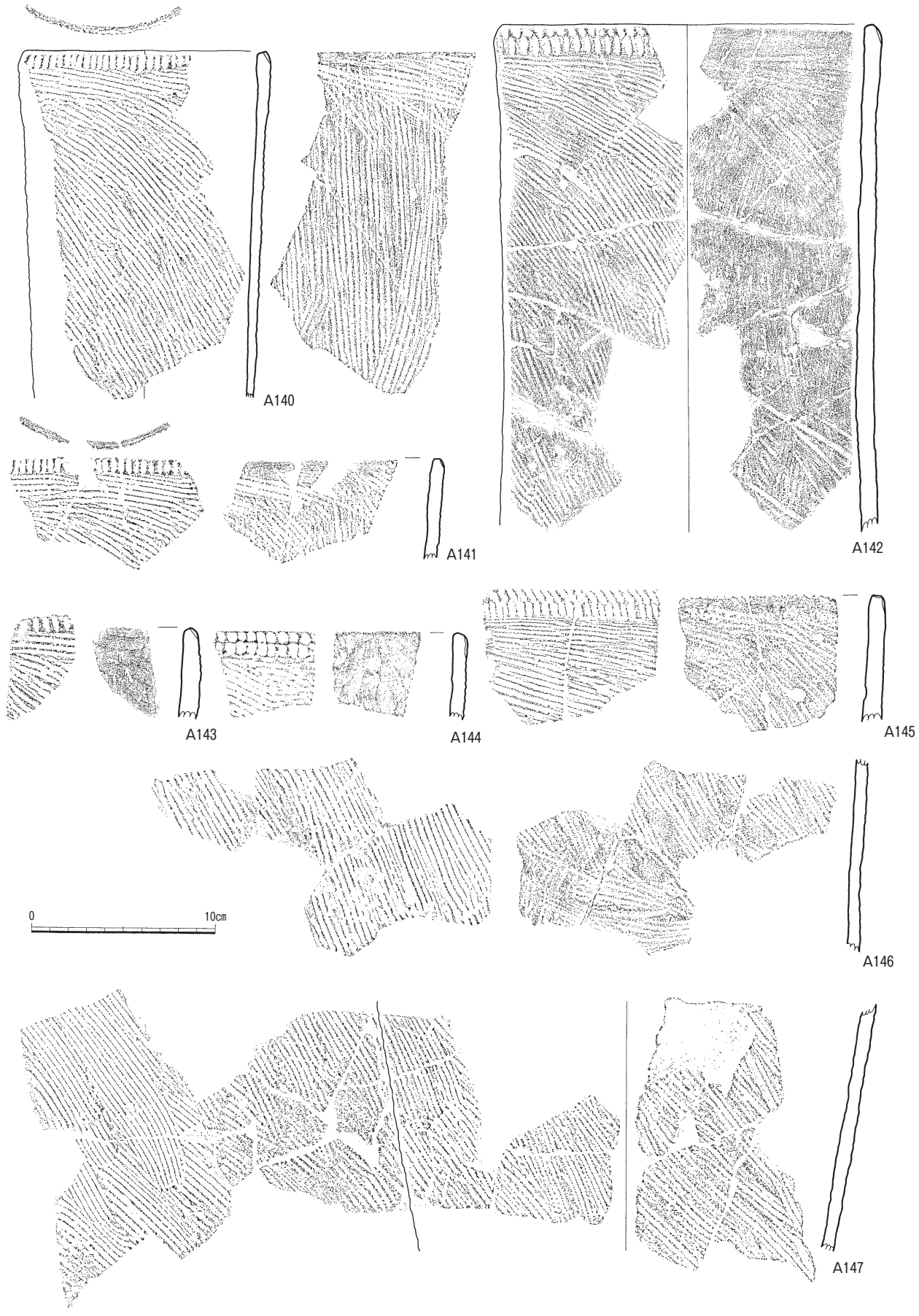
第65図　縄文土器出土状況図７



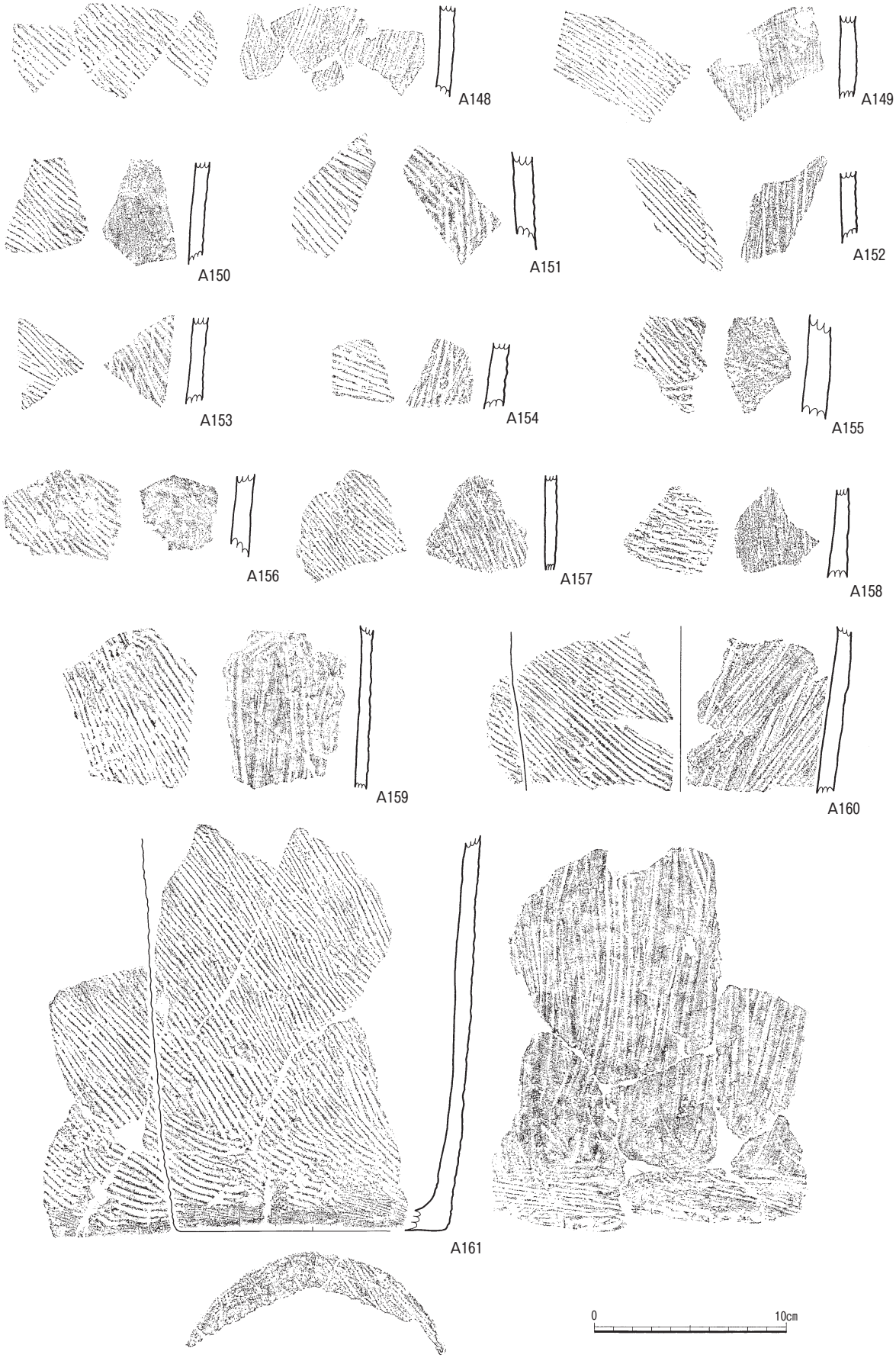
第66図　竪穴住居状遺構内出土土器28



第67図　竪穴住居状遺構内出土土器29



第68図　竪穴住居状遺構内出土土器30



第69図　竪穴住居状遺構内出土土器31

33号竪穴住居状遺構（SH33：第72図）

検出状況　SH33はB15区とC15区の境界線上において検出された。また，北東部は計画路線外へ続いており，全体像については不明である。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　２つのコーナーが検出されていることから，基本となる平面プランは隅丸方形と考えられる。現状の規模は，長軸は2.55m，短軸が1.30mを測る。検出面からの深さは約40cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で2.80㎡，床面積で2.34㎡を測る。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土（埋土②）が堆積していた。また，埋土①中には薩摩火山灰の小ブロックが少量含まれていた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は７点で，うち２点を図化した。A183は前平式土器の胴部片である。内外面に貝殻条痕文が施されている。A184は前平式土器の底部片である。若干残る胴部には横位の貝殻条痕文がみられる。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

34号竪穴住居状遺構（SH34：第73図）

検出状況　SH34はE10区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形である。長軸は2.55m，短軸が1.55mを測り，長短値は0.61と長方形度が比較的高い。。検出面からの深さは20cm強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で3.48㎡，床面積で3.23㎡を測り，壁面傾斜値は0.90であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土（埋土②）が堆積していた。ただし，埋土②は遺構の中心部付近にかなりの厚さで堆積していた。第73図の断面図でもわかるように，遺構として認識するレベルでは既に顔を覗かせていた。他の遺構との相違点として注意しておきたい。

また，遺構の西壁際では薩摩火山灰層の拳大ブロックが床面近くで数個検出された。

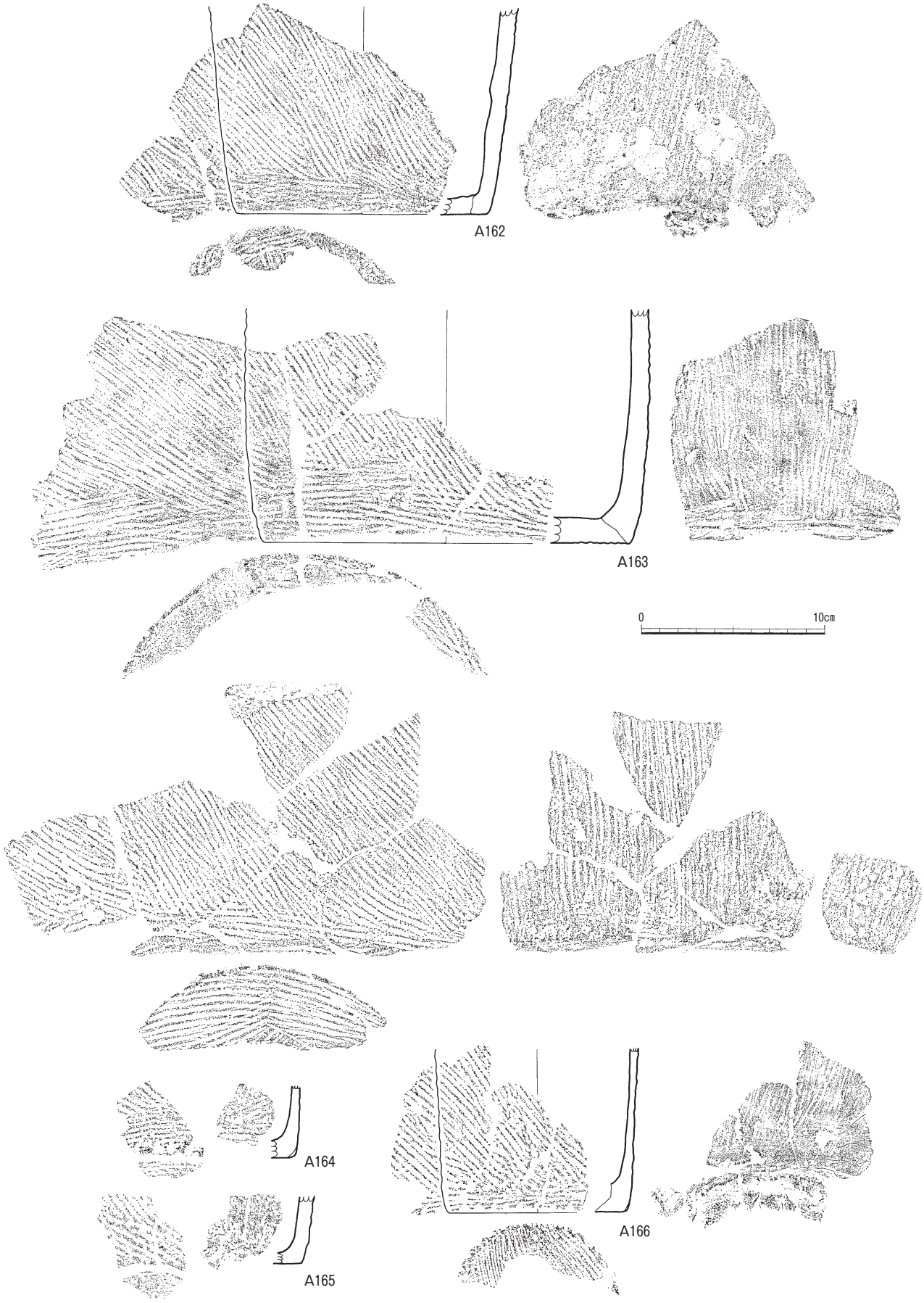
出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

35号竪穴住居状遺構（SH35：第74図）

検出状況　SH35はC14区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の北隅で地層横転による削平が見られる。

形状と規模　一部削平されているが，基本となる平面プランは隅丸長方形である。長軸は2.90m，短軸が2.45mを測り，長短値は0.84で，長方形度は高くない。検出面からの深さは約15cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。



第70図　竪穴住居状遺構内出土土器32

検出部分の面積は，検出面で6.59㎡，床面積で5.87㎡を測り，壁面傾斜値は0.89であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡茶褐色の粘質土（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は２点で，うち１点を図化した。A185は前平式土器の胴部片である。内外面共に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　北隅を地層横転で削平されているが，重複する遺構等はなく，単独で検出された。

36号竪穴住居状遺構（SH36：第76図）

検出状況　SH36は F11区と G11区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは楕円形状を呈し，本遺跡の中では少数派のタイプである。長軸は2.40m，短軸が1.95mを測り，長短値は0.81であった。検出面からの深さは10cm前後と浅いが，遺構中央部は，20cm弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

検出部分の面積は，検出面で3.63㎡，床面積で3.44㎡を測り，壁面傾斜値は0.95と極めて高かった。これは，検出面が低いことも反映していると考えられる。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡茶褐色の粘質土（埋土②）が堆積していた。

本遺跡の埋土で最も特徴的なことは，薩摩火山灰層のブロックが多く含まれていたと言うことである。このブロックは，拳大から人頭大のものまであり，遺構の中央や壁際において，床面からやや浮いた状態で検出された。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は７点で，うち１点を図化した。A187は前平式土器の胴部から底部にかけての大片である。底径が15.3cm，残存部分の器高が28.4cmを測る。胴部外面は斜位ないし横位（底部付近）の貝殻条痕文が施されている。胴部内面には下から掻き上げたようなケズリ仕上げがみられる。外面は丁寧で細かな条痕文であるが，内面は粘土の接合箇所の凹凸が残るほど比較的雑である。

B16は安山岩製のスクレイパー状石器である。現存する部分の長さが5.70cm，幅4.00cm，厚さ0.60cm，重さ14.80g を測る。断面三角形を呈する剥片の側辺部を加工し，刃部を形成している。

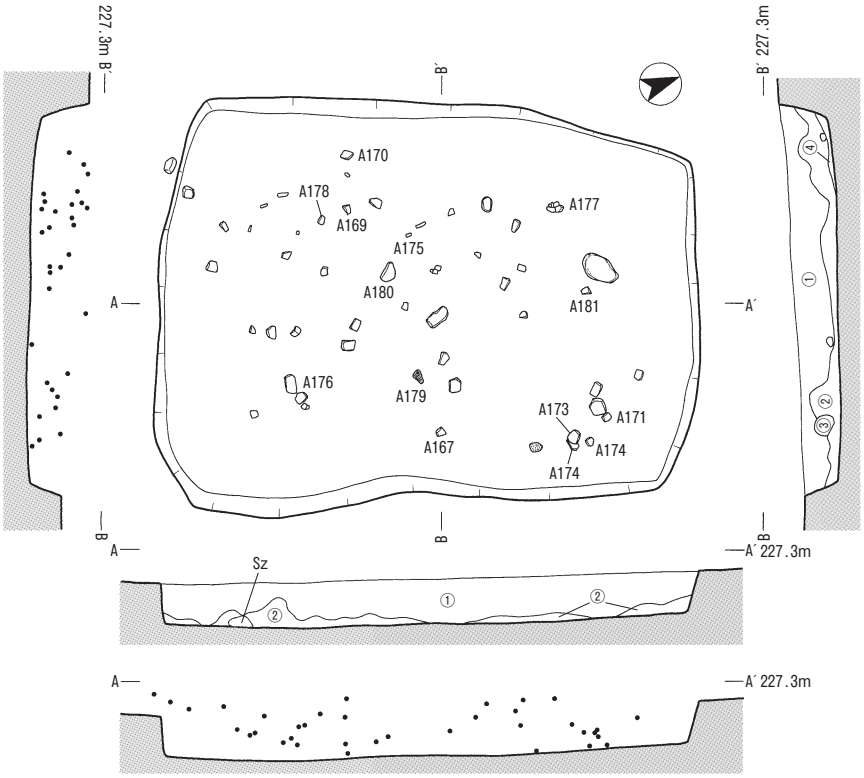
B42は遺構中央の床面付近から出土した石皿である。前述した薩摩火山灰層のブロックよりも下位からの出土であった。長さが29.9cm，幅が26.8cm，厚さ3.0cmを測る扁平な石皿である。砂岩製で，取り上げる際，５個に分かれてしまうほどもろい状態であった。赤色系に変色していると見られる部分もあり，何らかの要因で火熱を受けている可能性もある。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

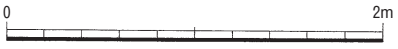
37号竪穴住居状遺構（SH37：第77図）

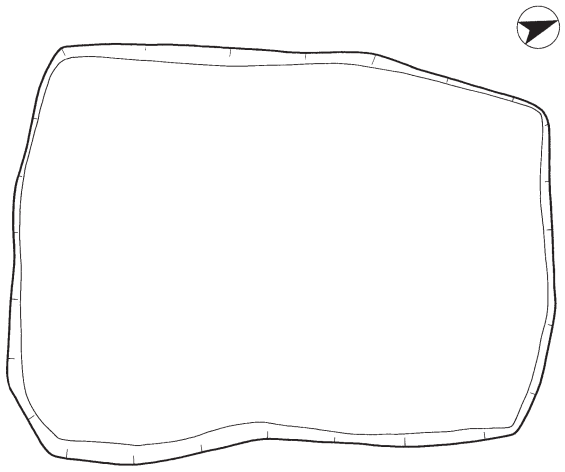
検出状況　SH37は C11区で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰層上面であった。単独で検出

SH32



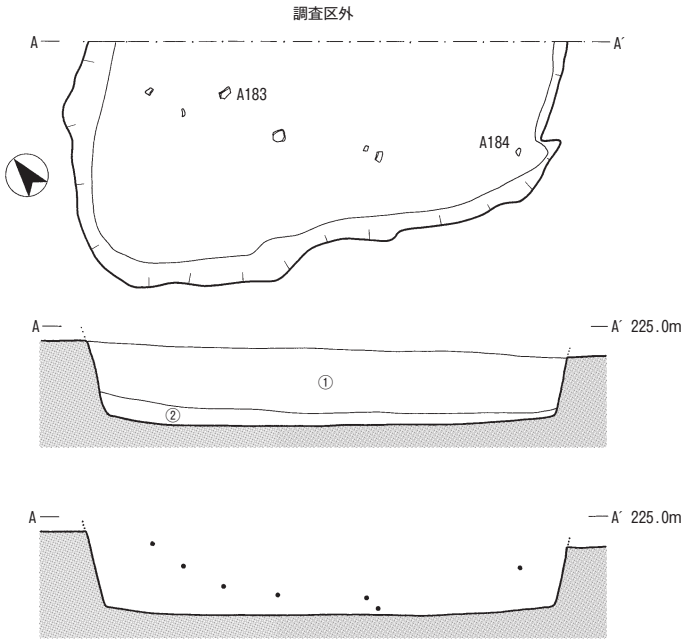
①黒褐色土層（黄色Pを含む）
②暗茶褐色粘質土層
③①＋②のブロック
④暗茶褐色土層



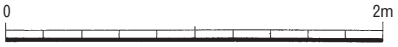


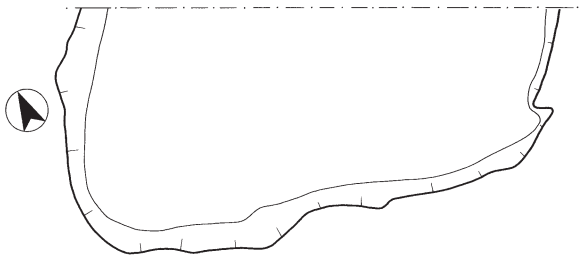
第71図　32号竪穴住居状遺構実測図

SH33



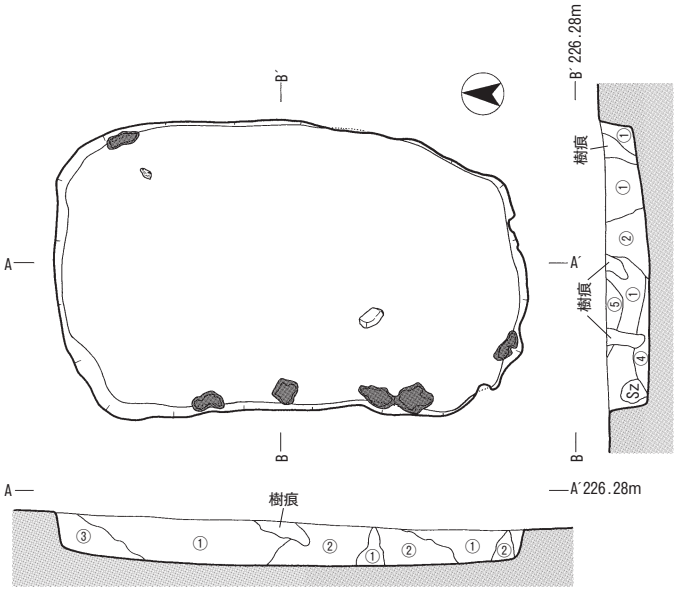
①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
　～部分的にSzのブロックあり
②暗茶褐色粘質土層





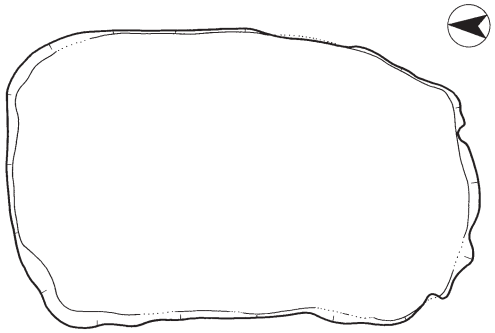
第72図　33号竪穴住居状遺構実測図

SH34



※遺構内のアミカケは薩摩火山灰

①黒褐色土層（黄色P,白色Pをごく少量含む）
②淡茶褐色粘質土層
③淡褐色土層（サラサラ）
④淡茶褐色土層（柔）
⑤黒褐色土層



第73図　34号竪穴住居状遺構実測図

されたが，床面検出の土坑が１基存在する。遺構内土坑としてとらえているが，重複遺構である可能性も想定しておきたい。前述したSH18と同じような状況が見られた。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を呈し，長軸2.70m，短軸が2.00mを測り，長短値は0.74であった。検出面からの深さは約30cmで，床面は薩摩火山灰層を掘り抜けて，Ｘ層に達していた。遺構の面積は，検出面で5.06㎡，床面積で4.82㎡を測り，壁面傾斜値は0.95と極めて高かった。

竪穴部分の埋土を取り除いた段階で，長軸115cm，短軸95cmを測る隅丸方形状の土坑が検出された。約15cmの深さを埋める淡褐色土の中にはカーボン粒が入っており，当初は炉跡が検出されたものと認識していたが，土坑の床面が不安定であることから，さらに掘り下げてみたところ，最終的にはⅩⅦ層まで達し，深さ130cmと規模の大きな土坑となった。土坑の中央部分からやや開きながら立ち上がる形状（断面「Y」字状）を持つ。床面は極めてフラットで，立ち上がりから役50cmほどは若干オーバーハング気味に膨らんでいる。その部分の壁面には，棒状工具によるものと考えられる掘削痕が明瞭に残っていた。

特徴的なのは埋土の様子で，多くはⅫ層からⅩⅦ層のブロックが多量に入り込んでいるという状況であった。特に床面から40cmのところには拳大から人頭大ほどの土塊（ブロック）が集中して置かれていた。この土塊にはⅫ層（P15を含む）やⅩⅥ層（P17を含む），あるいはⅩⅧ層（いわゆるシラス），さらには上位のⅨ層（P14：薩摩火山灰）まで含まれていた。あたかも何かを封じ込めるような状況での出土は，本土坑の機能を検討する上で注意すべき要素といえよう。また，薩摩火山灰が含まれていることは，少なくとも薩摩火山灰降下以後の施設であることがいえるわけで，類似する遺構であるSH18との関連も考慮する必要がある。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層をメインとし，床面近くの一部で比較的柔らかい淡茶褐色土層が検出された。土坑の埋土については前述の通りである。

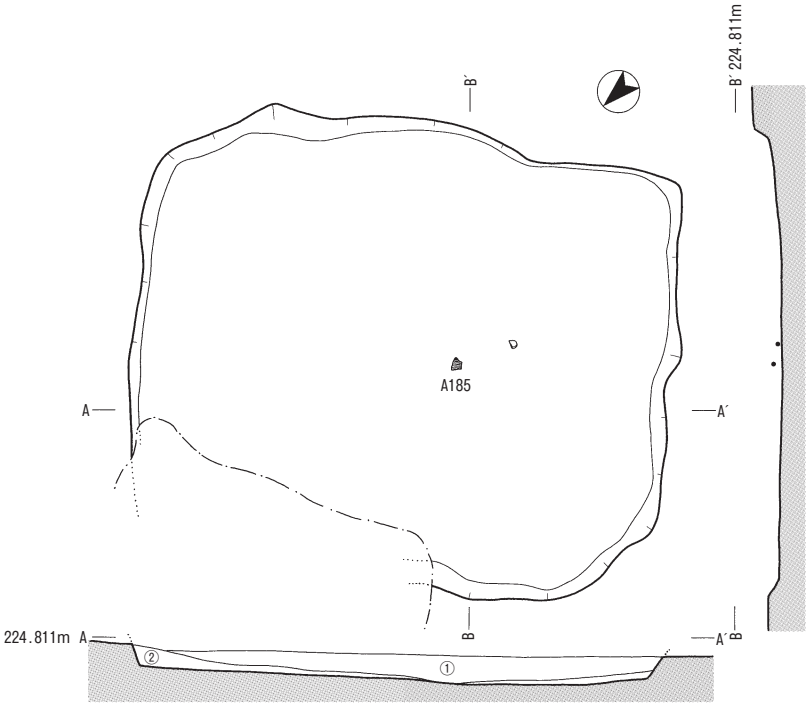
出土遺物　埋土中から出土した遺物は13点で，うち６点を図化した。A186は前平式土器の完形資料である。口径12.8cm，底径11.0cm，器高23.5cmを測る。口縁部下にヘラ状工具による２段の刺突文を巡らし，胴部には横位～斜位の貝殻条痕文が施されている。外器面の底部から３分の１ほどは条痕も浅く，上位と対照的である。この土器は，一個体横倒しの状態で出土した。調査用に残した埋土観察用のベルトにまるまる収まる状態での出土であった。床面からは約10cm程度浮いた状態であった。遺構内土坑との関係が注目されるところであるが，土坑最上位の埋土と竪穴部分の埋土には差があること。前述したように土器が浮いた状態で出土したことから，直接的な関係はないものと考えられる。A188は前平式土器の口縁部である・口縁部下に貝殻刺突文が巡るタイプである。A189と A190は前平式土器の胴部片である。斜位の貝殻条痕文が見られる。A191は前平式土器の底部である。

重複遺構　遺構内土坑の存在についてはこれまで述べてきたとおりで，あきらかに重複する遺構はなかった。

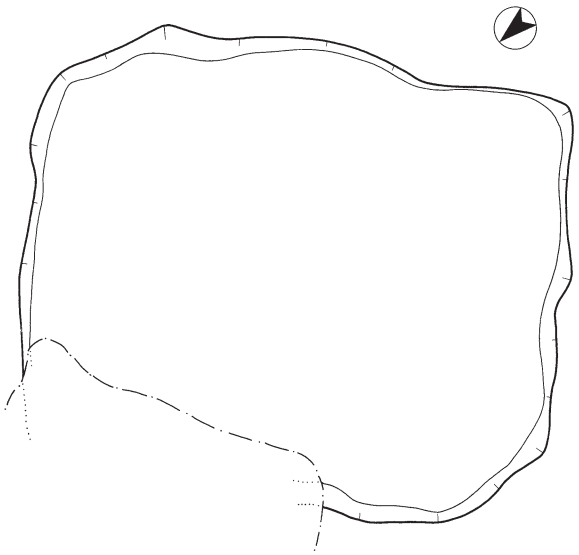
38号竪穴住居状遺構（SH38：第79図）

検出状況　SH38は C9区と C10区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。北側では，若干であるが SH41と接していた。また，西側では SK219が重複して検出さ

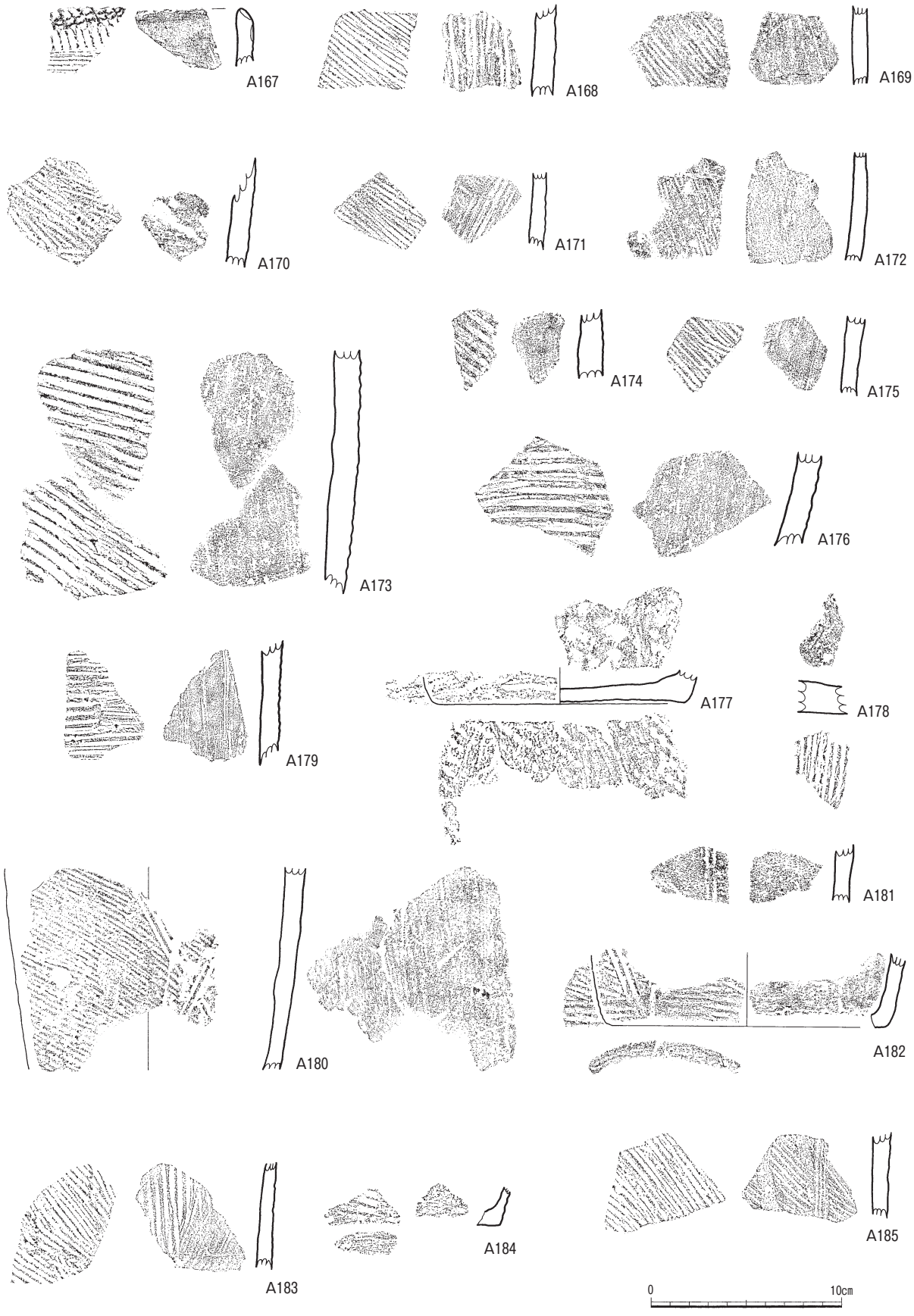
SH35



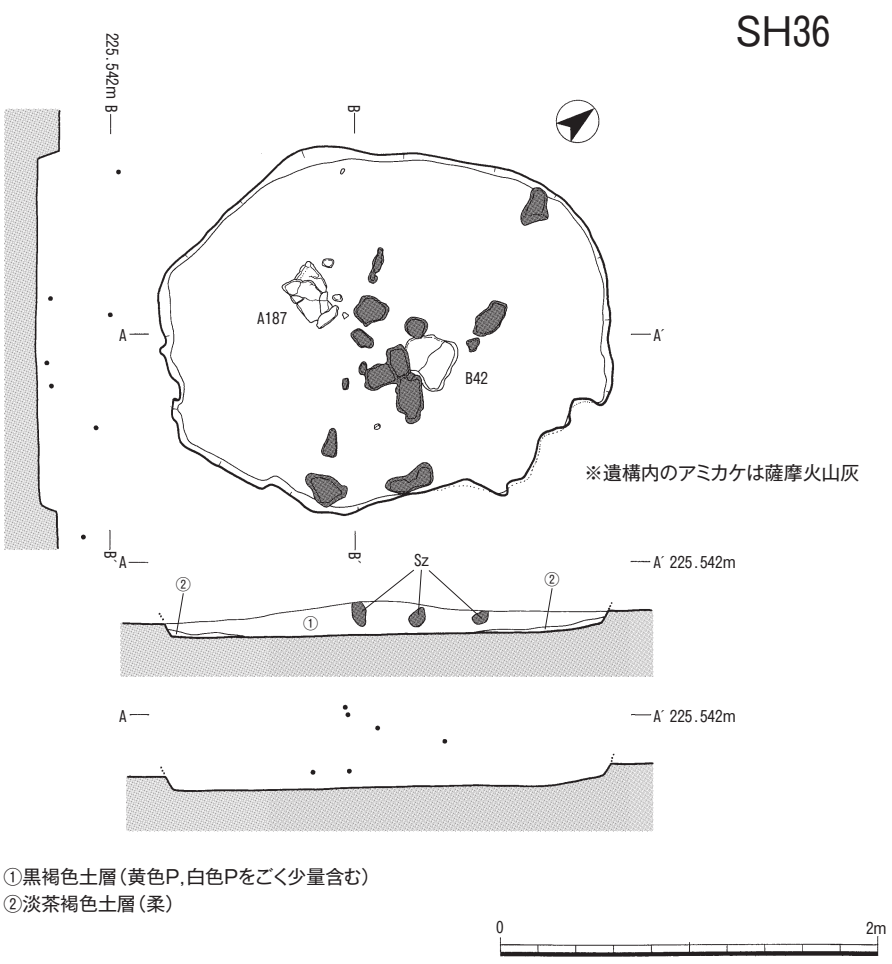
①黒褐色土層（黄色Pを少量含む）
②淡茶褐色土層（柔）

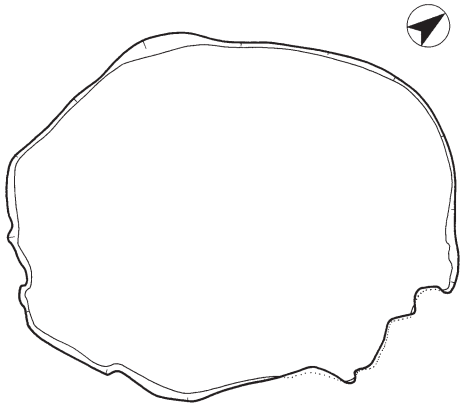


第74図　35号竪穴住居状遺構実測図



第75図　竪穴住居状遺構内出土土器33





第76図　36号竪穴住居状遺構実測図

れた。さらに，図化までにはいたらなかったが，東側では，張り出し状の浅い段が広がる部分もみられた。薩摩火山灰を若干掘り込んだような状態であった。掘り込み（？）自体がひじょうに浅く，広がりのラインが不鮮明で，床面の凹凸も激しかったので，ここでは遺構としての認定から除外したが，注意しておきたい事例である。

形状と規模　平面プランは全体的には隅丸長方形状を呈するが，短辺部分の長さが異なり，釣り鐘状ともいえる形状になっている。北側と南側で異なる遺構が重複している可能性もないことはないが，床面の状態や埋土の状況から，一つの遺構として把握した。拡幅している可能性は考えられる。長軸は4.15m，短軸が3.00mを測り，長短値は0.72であった。検出面からの深さは30cm強で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で9.76㎡，床面積で8.61㎡を測り，本遺跡の中では大形のグループに属する。壁面傾斜値は0.88であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土はＰ13と考えられる黄色パミスを含む黒褐色土（埋土②）を主としながら，その下位に暗茶褐色土（埋土③）が堆積していた。北側の一部には，埋土②を掘り込むように黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土が堆積していた。

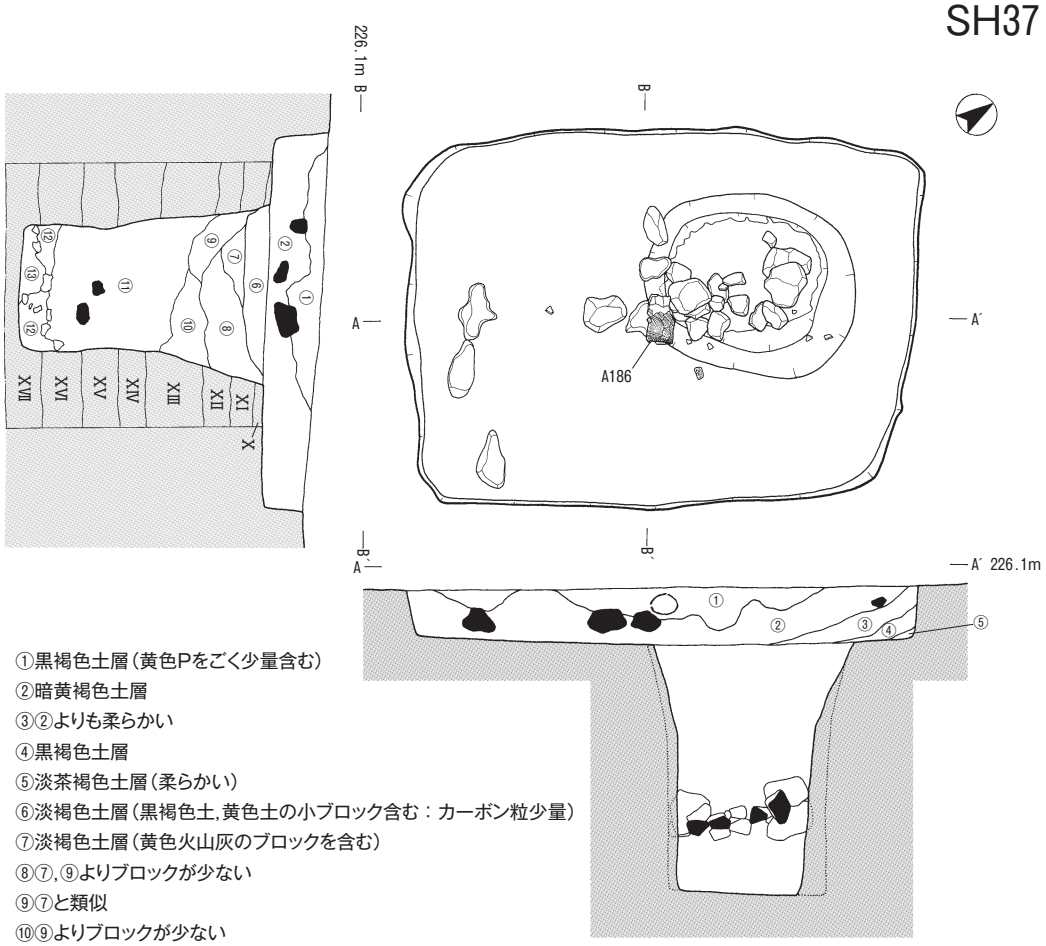
出土遺物　埋土中から出土した遺物は99点で，うち37点を図化した。A193～A197は前平式土器の口縁部片である。A193と A194は口唇端部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を巡らすものである。いずれも口縁直下には横位の貝殻条痕文，胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。A195～A197は口唇端部にヘラ状工具による斜位の連続刺突文を巡らすものである。A197はさらにもう１段，口縁部直下に連続刺突文を巡らすものである。A198～A224は前平式土器の胴部片である。いずれも，外面に貝殻腹縁部による斜位の貝殻条痕文が施されている。A225は底部に近い部分である。A226と A227は前平式土器の底部片である。A227は底径14.0cmを測る。外面は底部付近で横位，胴部は斜位の貝殻条痕文が施されている。

A228は７点の土器片が接合した胴部片である。SH38内から出土したのは１点のみで，残りは包含層中からの出土であった。外面には粗い横位ないし斜位の貝殻条痕文を施し，さらにその上から粗い沈線文を施したものである。繰り返しになるが，条痕文も沈線文も粗い施文で，これまでにあまり見られないタイプの土器である。条痕文をベースに沈線文や刺突文を重ねて文様を構成している志風頭式土器の範疇にはいるのか，その萌芽タイプである前平式土器期のものなのか不明瞭である。

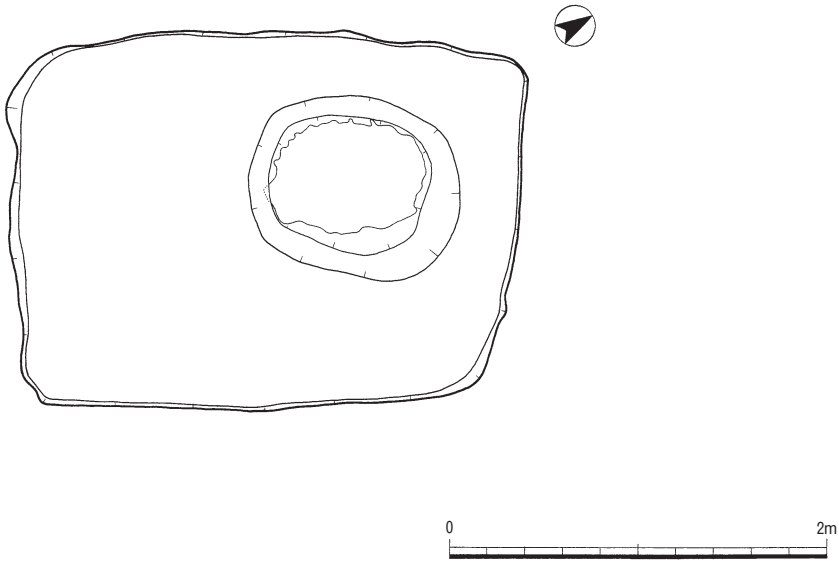
B38は安山岩製のスクレイパー状石器である。断面三角形状の横長剥片の側辺に剥離を加え，刃部を形成している。長さ11.50cm，幅6.40cm，厚さ1.00cm，重さ54.49g を測る。

重複遺構　前述のように北側で SH41とわずかに接している。また，西側では SK219が重複して検出された。SH38一帯は，今回調査した区域の中では最も高い標高地に位置している。後出する SH41，43，47，76等，多くの竪穴住居状遺構や土坑が集中する区域でもある。それぞれ重複遺構も多く，土地利用の観点から注目される集中度である。

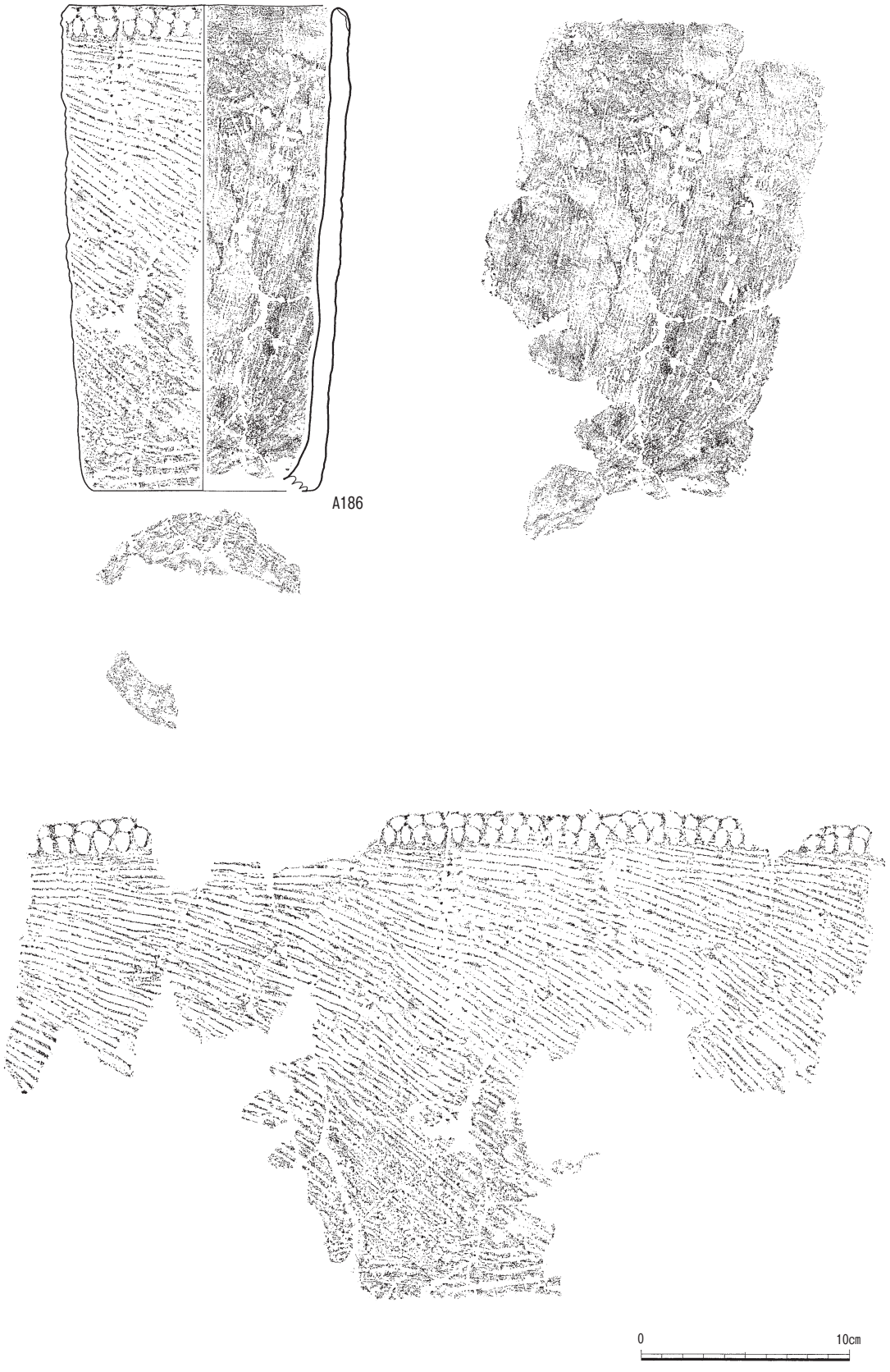
SH37



①黒褐色土層（黄色Pをごく少量含む）
②暗黄褐色土層
③②よりも柔らかい
④黒褐色土層
⑤淡茶褐色土層（柔らかい）
⑥淡褐色土層（黒褐色土，黄色土の小ブロック含む：カーボン粒少量）
⑦淡褐色土層（黄色火山灰のブロックを含む）
⑧⑦，⑨よりブロックが少ない
⑨⑦と類似
⑩⑨よりブロックが少ない
⑪淡褐色土層（黄色火山灰のブロックを多量に含む）
⑫淡茶褐色土層
⑬淡褐色土層（黄色，白色火山灰のブロックを含む）
※黄色火山灰ブロックの多くはXⅣ層，XⅥ層である。



第77図　37号竪穴住居状遺構実測図



第78図　竪穴住居状遺構内出土土器34

39号竪穴住居状遺構（SH39：第83図）

検出状況　SH39はB，C10区とB，C11区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。東側ではSH238が重複して検出された。SH238のすぐ西側には今回の発掘調査の境界線が走っている。

形状と規模　平面プランは全体的やや丸みを帯びているが，隅丸長方形状を呈する。長軸は2.30m，短軸が1.60mを測り，長短値は0.70であった。検出面からの深さは15㎝弱で，薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

検出部分の面積は，検出面で3.12㎡，床面積で2.96㎡を測り，壁面傾斜値は0.95と高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）が一部みられるものの，多くは比較的柔らかい暗茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は５点で，うち４点を図化した。A229は前平式土器の口縁部片である。口唇端部と口縁部直下に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を巡らすものである。前者よりも後者の方が密に施されている。口唇端部の刺突文は，凹凸が激しく，口唇頂部は波状を呈している。A230は前平式土器の胴部片である。外面に貝殻腹縁部による斜位の貝殻条痕文が施されている。A231も前平式土器の胴部片であるが，底部に近い部分と考えられる。外面は，ほぼ横位の貝殻条痕文が施されている。A232は前平式土器の胴部から底部かけての小片である。外面に貝殻腹縁部による斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　前述のように東側でSH238が重複して検出された。規模は，長軸135＋α㎝，短軸80㎝を測る。平面プランは隅丸長方形状を呈する。遺構中央には，拳大の薩摩火山灰ブロックがまとまって検出された。

40号竪穴住居状遺構（SH40：第83図）

検出状況　SH40はD12区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは全体的やや丸みを帯びているが，隅丸長方形状を呈する。長軸は2.20m，短軸が1.45mを測り，長短値は0.66であった。検出面からの深さは約20㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

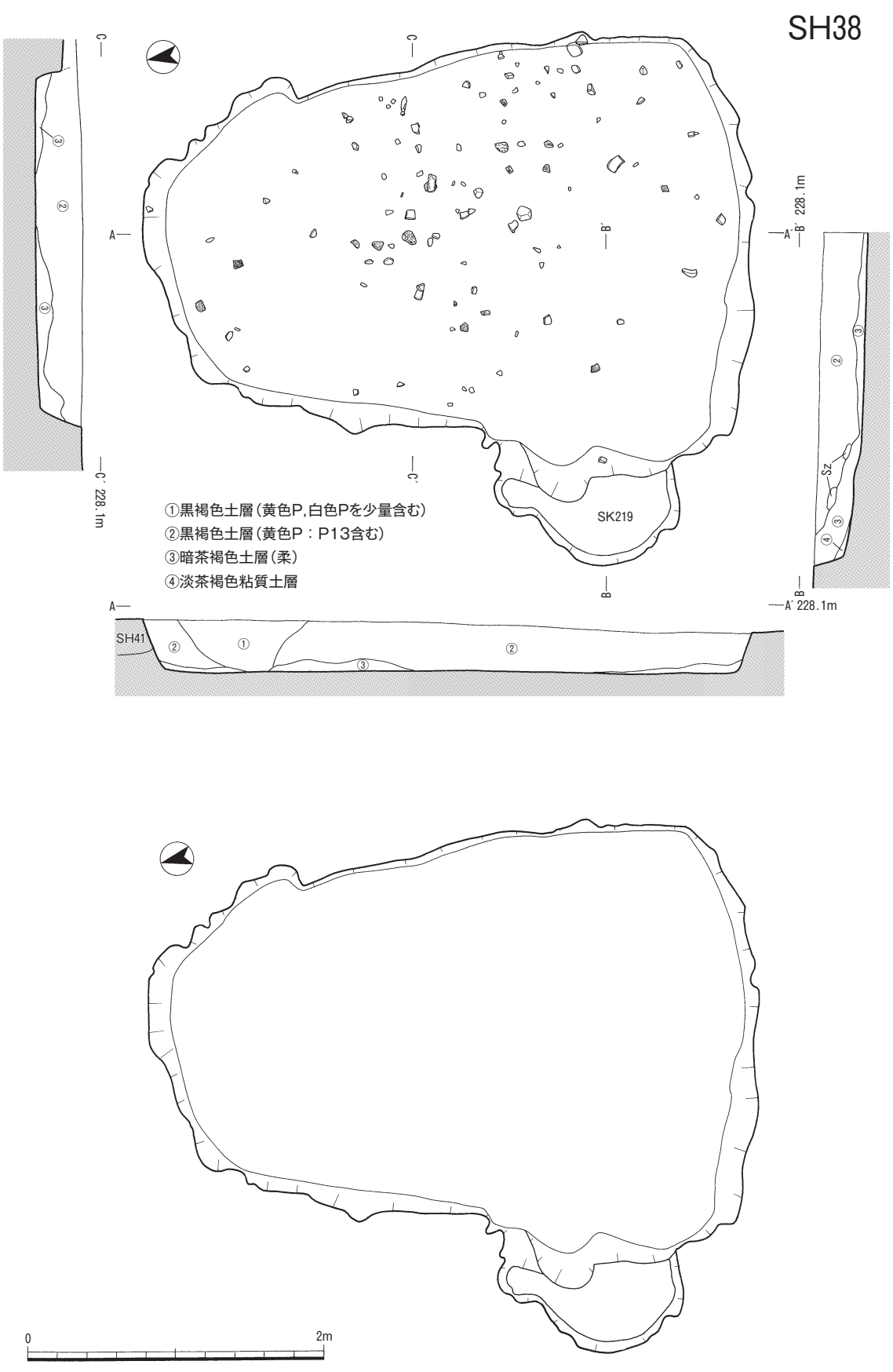
検出部分の面積は，検出面で2.77㎡，床面積で2.63㎡を測り，壁面傾斜値は0.95と高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。

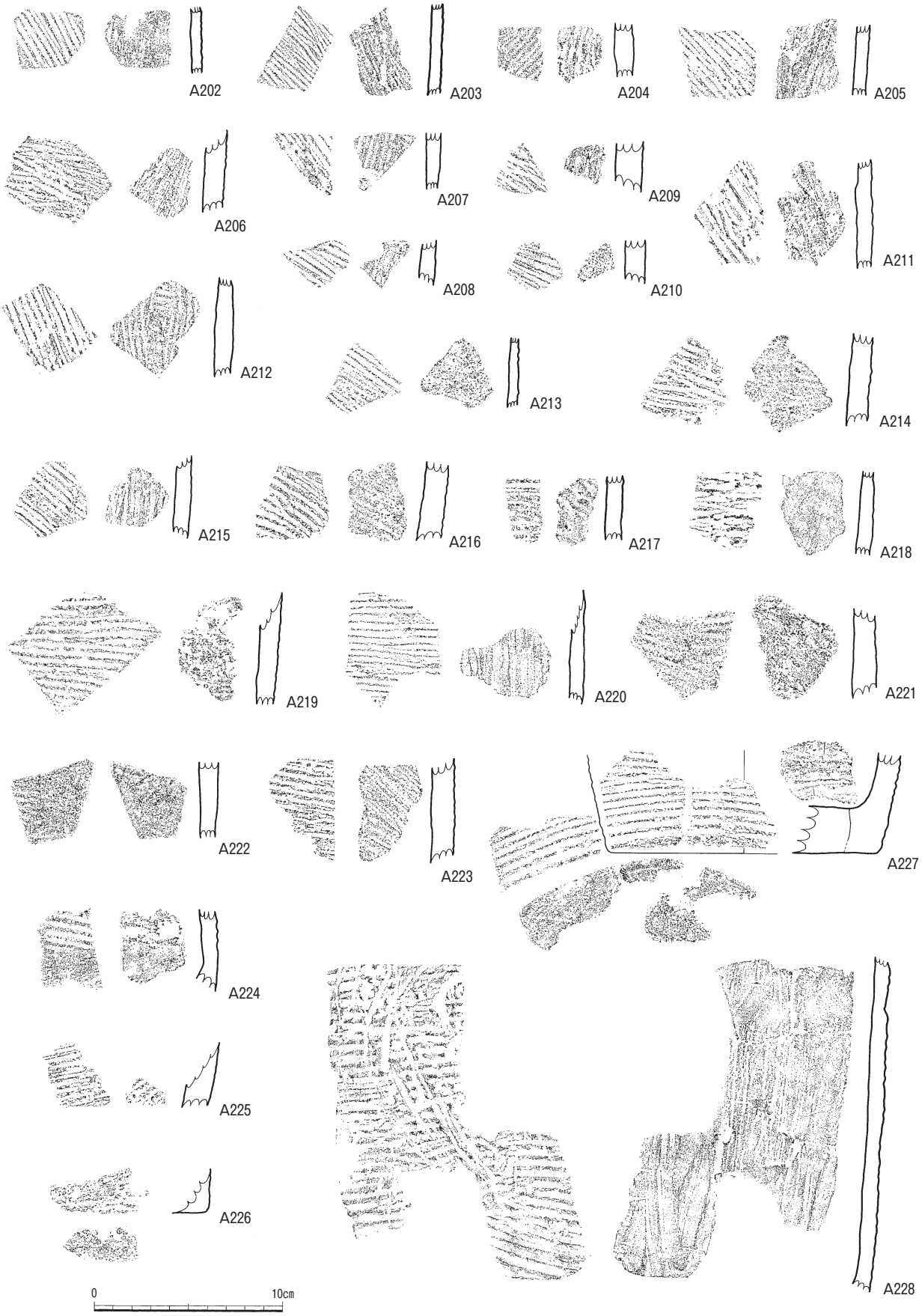
出土遺物　埋土中から出土した遺物は９点で，うち３点を図化した。A233～A235は前平式土器の口縁部片である。口唇端部に貝殻腹縁部による斜位（縦位に近い）の連続刺突文を巡らすものである。A234とA235の外面は，口縁直下が横位，胴部が斜位の貝殻条痕文が施されている。刺突文，条痕文共に繊細な仕上げを行っている。A235は口唇端部の刺突文により，口唇頂部が波状を呈している。また，口唇部の内面側は，フラットな面が残っている。内外面共にやや深い横位の貝殻条痕文がみられた。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。



第79図　38号竪穴住居状遺構実測図

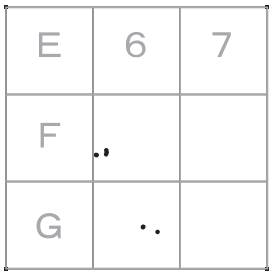
第80図　竪穴住居状遺構内出土土器35



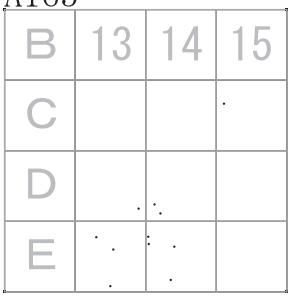
第81図　竪穴住居状遺構内出土土器36

A74

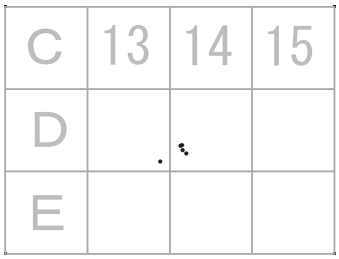
A326



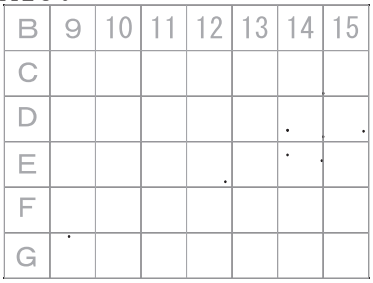
A163



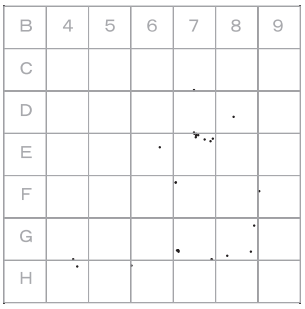
A142



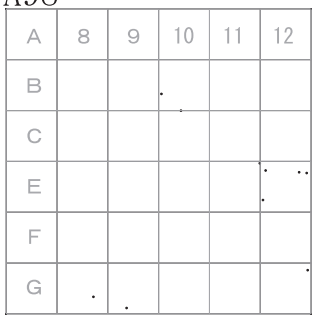
A130



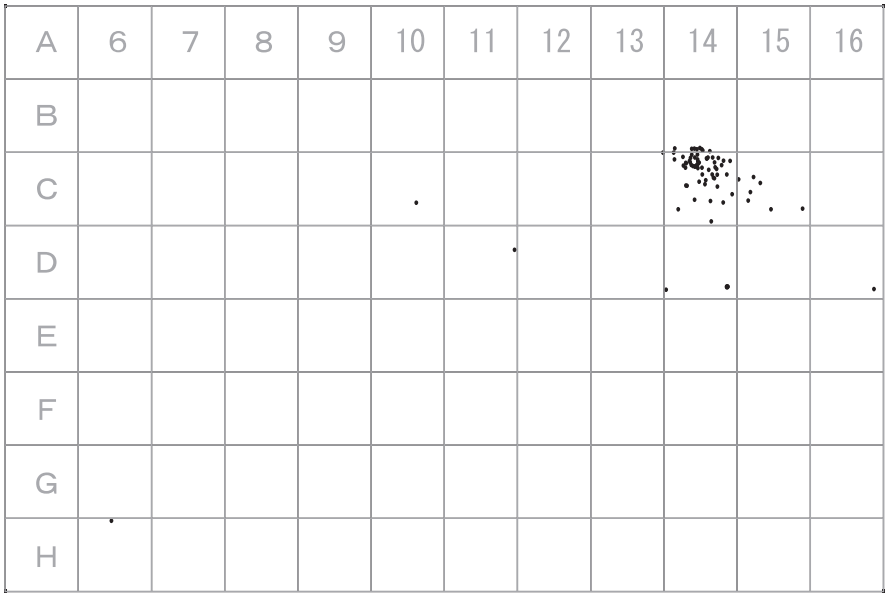
A307



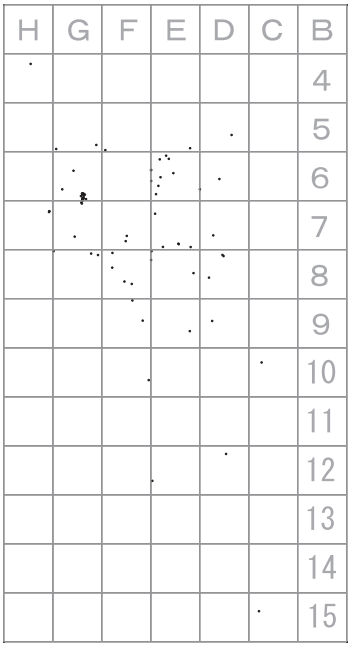
A98



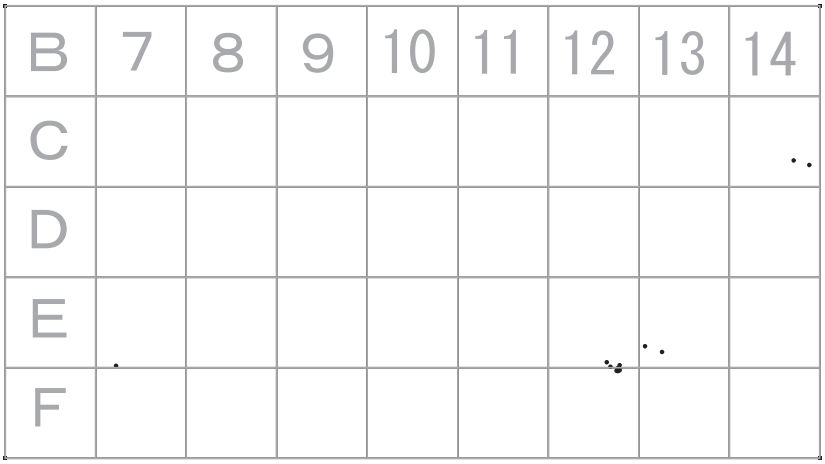
A128



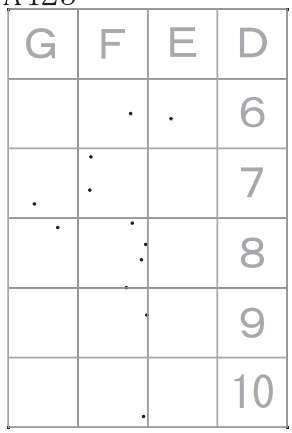
A354



A99



A425



第82図　縄文土器出土状況図８

41号竪穴住居状遺構（SH41：第84図）

検出状況　SH41はC9区とC10区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南側では，わずかであるがSH38と接していた。

形状と規模　平面プランは全体的やや丸みを帯びているが，隅丸長方形状を呈する。長軸は2.35m，短軸が1.65mを測り，長短値は0.70であった。検出面からの深さは約25㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

検出部分の面積は，検出面で3.01㎡，床面積で2.37㎡を測り，壁面傾斜値は0.79と低かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡茶褐色の粘質土層（埋土③）が堆積していた。埋土②はその中間に位置する埋土で，パミスの量が少量であった。埋土にP13の黄色パミスを含む（埋土⑤）と考えられるSH38の方が新しい堆積状況が見られた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は８点で，いずれも小片のため図化できなかった。

重複遺構　前述のように南側でSH38がわずかに接して検出された。

42号竪穴住居状遺構（SH42：第85図）

検出状況　SH42はF，G8区とF，G9区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の南東側に薩摩火山灰層（Ⅸ層）に入り込む極めて浅い黒褐色土の広がりがみられた。

形状と規模　基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は3.00m，短軸が1.95mを測り，長短値は0.65であった。検出面からの深さは約30㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

検出部分の面積は，検出面で4.80㎡，床面積で3.98㎡を測り，壁面傾斜値は0.83と低かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は８点で，うち４点を図化した。A236～A239はいずれも前平式土器の胴部片である。外面に貝殻腹縁部による斜位の貝殻条痕文が施されている。A239は一部条痕文がナデ消されていることから，底部に近い部分と考えられる。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出されたが，前述したように遺構の南東側では，薩摩火山灰層（Ⅸ層）に入り込む極めて浅い黒褐色土の広がりが検出されている。浅すぎるために上端，下端の区別が付かない状況であった。もっとも，当時の掘り込み面は，まだ上位にあるものと考えられるので，最大約20㎝程度の深さがあった可能性もある。問題は，これが遺構なのか？遺構とすればSH42の一部なのか？それとも単独の遺構で，たまたまSH42と重複しているのか？という点である。このような状況は他でも確認された。これまで紹介したSH26やSH31，後述するSH43などがそうである。異なる遺構が重複しているということを積極的に示す状況がないことから，本報告では，床面が下位にある遺構（下段部分），つまりおおむね薩摩火山灰層（Ⅸ層）を掘り抜いて

いる遺構をベースにして，上段はその遺構に付随する部分としての捉え方で記録を進めている。しかし，遺構の重複を完全に否定するものではない。本遺構のように下段と上段は隅丸方形状を呈する形状や規模が似通っているものの，長軸が30度ほどずれている事例を見ると，異なる遺構が重複している可能性も考えておく必要があり，注意しておきたい。

43号竪穴住居状遺構（SH43：第86図）

検出状況　SH43はB9区とB10区の境界線上において検出された。遺構の東側は調査区外へと延びている。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の南西側ではSH44が重複して検出された。また，遺構の北側には薩摩火山灰層（Ⅸ層）を若干掘り窪めたような状態の浅い落ち込み（黒褐色埋土）が広がっていた。

形状と規模　調査区外へ延びたり，他遺構との重複があったりで，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定される長軸は3.50m，短軸が2.30mを測り，長短値は0.66であった。検出面からの深さは約20cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

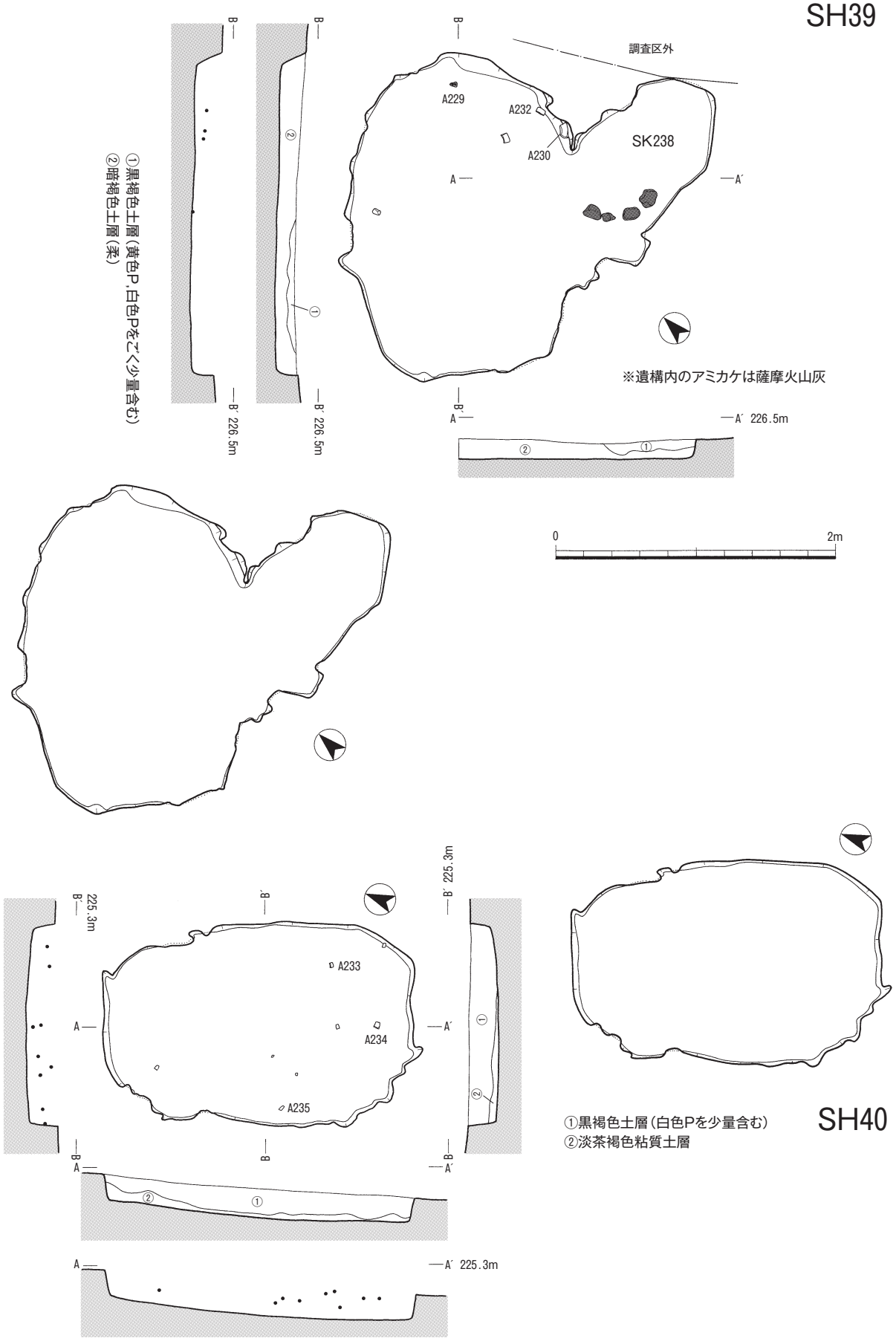
検出部分の面積は，検出面で6.69㎡，床面積で6.01㎡を測り，本遺跡の平均値より高い数値を示す。壁面傾斜値は0.90であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は52点で，うち16点を図化した。A240～A242，A252は前平式土器の口縁部片である。A240は口唇端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らせている。口唇部は比較的フラットで，文様はない。外面に貝殻腹縁部による斜位の貝殻条痕文が施されている。A241は口縁部下に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を，口唇端部外面にはヘラ状工具による連続刺突文をそれぞれ巡らすものである。口唇端部内面は剥がれて欠損している。A242は口縁部下と口唇端部外面にヘラ状工具による刺突文（２段）を巡らすものである。外面には斜位の貝殻条痕文が施されているが，概して風化・摩滅が激しく，表面はザラザラしている。A243～A251は前平式土器の胴部片である。いずれも胴部外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。A251は底部に近い部分と考えられる。A252は口径23.2cmを測る前平式土器の口縁部片である。口唇部はフラットで浅い刻目が施されている。口縁部直下にはヘラ状工具による連続刺突文，さらにその下には貝殻腹縁部による連続刺突文がそれぞれ施されている。胴部には横位の貝殻条痕文がみられる。

B3は擦痕が残る扁平な頁岩製磨製石器である。現存するサイズは，長さ4.10cm，幅4.35cm，厚さ0.45cm，重さ8.21gを測る。B19～B21は安山岩製のスクレイパー状石器である。いずれも断面三角形状の剥片を利用したものである。B19は長さ12.40cm，幅5.10cm，厚さ1.10cm，重さ58.05gを測る。横長剥片の縁辺部を加工し刃部を形成している。B20は長さ8.90cm，幅6.55cm，厚さ0.90cm，重さ42.59gを測る。縦長剥片を利用し，側辺等の一部を刃部として使用している。B21は長さ10.50cm，幅4.50cm，厚さ1.65cm，重さ56.86gを測る。両先端部を欠くが，ほぼ柳葉形の全形がわかる資料である。



第83図　39号，40号竪穴住居状遺構実測図

重複遺構　遺構の一部は調査区外に延び，南西側ではSH44と重複することは，前述の通りである北側には薩摩火山灰層中を床面とする黒褐色土の落ち込みが広がっていた。掘り込みは浅く５㎝程度で，黒褐色の埋土を取り除くと，床面の凹凸が目立った。この広がりの規模は，長軸220㎝，短軸が140＋αcmであった。問題はこの広がりの正体は何か？という点である。ここでは，SH43に付随する部分として理解したが，前項のSH42の場合と同様に，遺構の軸にずれ（ここでは約40度）がある。遺構の床面レベルを異にする遺構の重複である可能性も考えておきたい。

44号竪穴住居状遺構（SH44：第86図）

検出状況　SH44はB10区において検出された。遺構の東側には重複するSH43がある。また，南側ではSK274と重複していた。さらに西側の埋土中からは，集石遺構（56号）が検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　他の遺構との重複部分が多いため，遺構の全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定される長軸は2.95m，短軸が2.25mを測り，長短値は0.76であった。検出面からの深さは約20㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

検出部分の推定面積は，検出面で5.58㎡，床面積で4.95㎡を測り，本遺跡の中ではほぼ平均的な数値を示す。壁面傾斜値は0.89であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

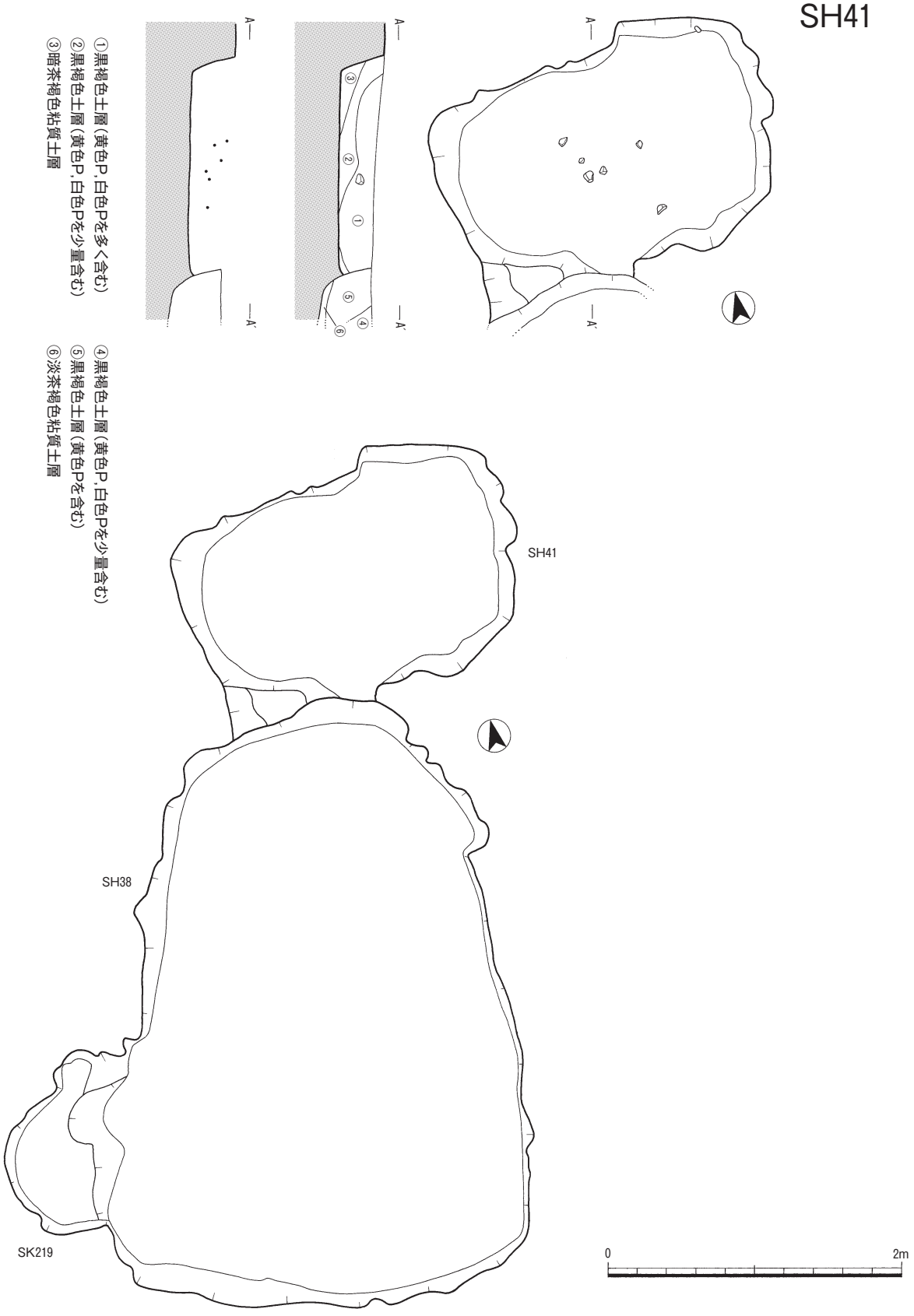
埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は27点で，うち８点を図化した。A253～A256は前平式土器の口縁部片である。A253は口唇端部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を，口縁部直下に同じく縦位の連続刺突文を巡らすものである。これらは２段構成的施文となっており，それぞれの刺突文は一見「く」字状に見える。口縁部直下外面には横位の貝殻条痕文，その下位には斜位の貝殻条痕文が施されている。内面も同様な構成で貝殻条痕が残る。A254～A256はいずれも口唇端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らせている。口唇部は比較的フラットで，文様はない。外面に貝殻腹縁部による斜位の貝殻条痕文が施されている。A257とA258は前平式土器の胴部片である。いずれも胴部外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。A259とA260は前平式土器の底部片である。それぞれ底径12.0㎝，12.4㎝を測る。

重複遺構　遺構の東側ではSH43，また，西側の埋土中からは，集石遺構（56号）が検出された。56号集石遺構は，長軸120㎝，短軸100㎝の範囲に礫127個が集中して出土した。後述する集石遺構の項で分類したタイプでみると，「礫の集中度は高いが，下部に掘り込みがない」とするType２に該当する。ただし，遺構の断面図を見ると，上下に一定の広がりもみられることから，掘り込みが存在した可能性もある。SH44の竪穴部が埋まりきった後にセットされた遺構と考えられる。礫の約６割が安山岩で構成され，砂岩や頁岩がそれに続いている。

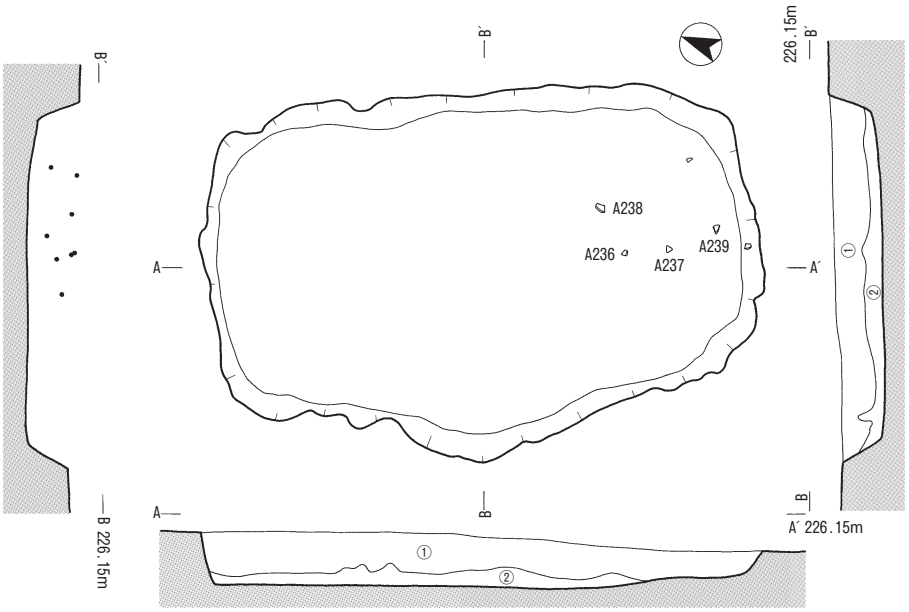
45号竪穴住居状遺構（SH45：第88図）

検出状況　SH44はB14区とB15区の境界線上において検出された。遺構の多くは調査区外へ延び

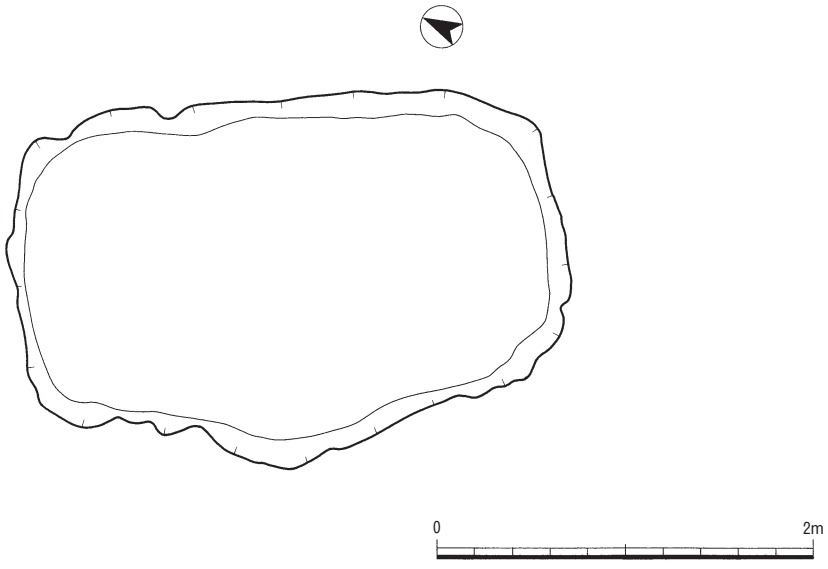


第84図　41号竪穴住居状遺構実測図

SH42



①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②淡茶褐色粘質土層（柔）



第85図　42号竪穴住居状遺構実測図

るものと考えられる。今回の調査で明らかになった部分の形状や規模から，竪穴住居状遺構を想定した。

形状と規模　遺構の全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸方形と考えられる。調査した部分の長軸は1.55m，短軸が0.80mであった。検出面からの深さは約15㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で1.37㎡，床面積で1.26㎡を測る。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

46号竪穴住居状遺構（SH46：第88図）

検出状況　SH44はC14区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　外郭ラインにやや出入りがあるが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は2.40m，短軸が2.10mを測り，長短値は0.88であった。検出面からの深さは約15㎝強で，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

検出部分の推定面積は，検出面で4.15㎡，床面積で3.51㎡を測り，壁面傾斜値は0.85であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は16点で，うち1点を図化した。A261は前平式と考えられる土器の底部片（底面）である。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

47号竪穴住居状遺構（SH47：第89図）

検出状況　SH47はB10区において検出された。遺構の東側は調査区外へと延びている。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の南側ではSH76が重複して検出された。

形状と規模　調査区外へ延びたり，他遺構との重複があったりで，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。遺構の西壁沿いには，薩摩火山灰層をわずかに掘り込んで緩やかに傾斜する張り出し状の段が検出された。推定される長軸は3.45m，短軸が2.20mを測り，推定長短値は0.64であった。検出面からの深さは20㎝強で，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

検出部分の推定面積は，検出面で5.41㎡，床面積で4.43㎡を測り，本遺跡のほぼ平均値となっている。壁面傾斜値は0.82であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に

比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

本遺構の特徴として，薩摩火山灰のブロックが部分的に検出されているという点がある。拳大のものから人頭大のものまであり，ほぼ床面に近いところに位置するものが多かった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は24点で，うち３点を図化した。A262～A264はいずれも前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　前述したように，遺構の南側においてSH76が重複して検出された。

76号竪穴住居状遺構（SH76：第89図）

検出状況　SH76はB10区とC10区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の北側ではSH47が重複して検出された。

形状と規模　SH47と重複する部分が多いことから，全形は推定するしかないが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定される長軸は2.55m，短軸が1.50mを測る。推定長短値は0.59で長方形度が高い。検出面からの深さは20㎝強で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の推定面積は，検出面で3.18㎡，床面積で2.69㎡を測る。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は５点であったが，図化できるような資料は無かった。

重複遺構　前述したように，遺構の北側においてSH47が重複して検出された。

48号竪穴住居状遺構（SH48：第90図）

検出状況　SH48はF9区とG90区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。本遺構周辺は，薩摩火山灰層（Ⅸ層）検出の過程で，黒褐色土の広がりが下位まで続くことから，何らかの遺構が存在する可能性を考慮しながら調査を進めた区域であった。結果として，SH48，SH49の竪穴住居状遺構をはじめ，10基の土坑が集中して存在する，遺構密集地区であることが判明した。

SH48は南西隅でSH49と接しているのをはじめ，北側にSK152とSK154，西側にSK155，南側にSK235，SK107が重複して検出された。

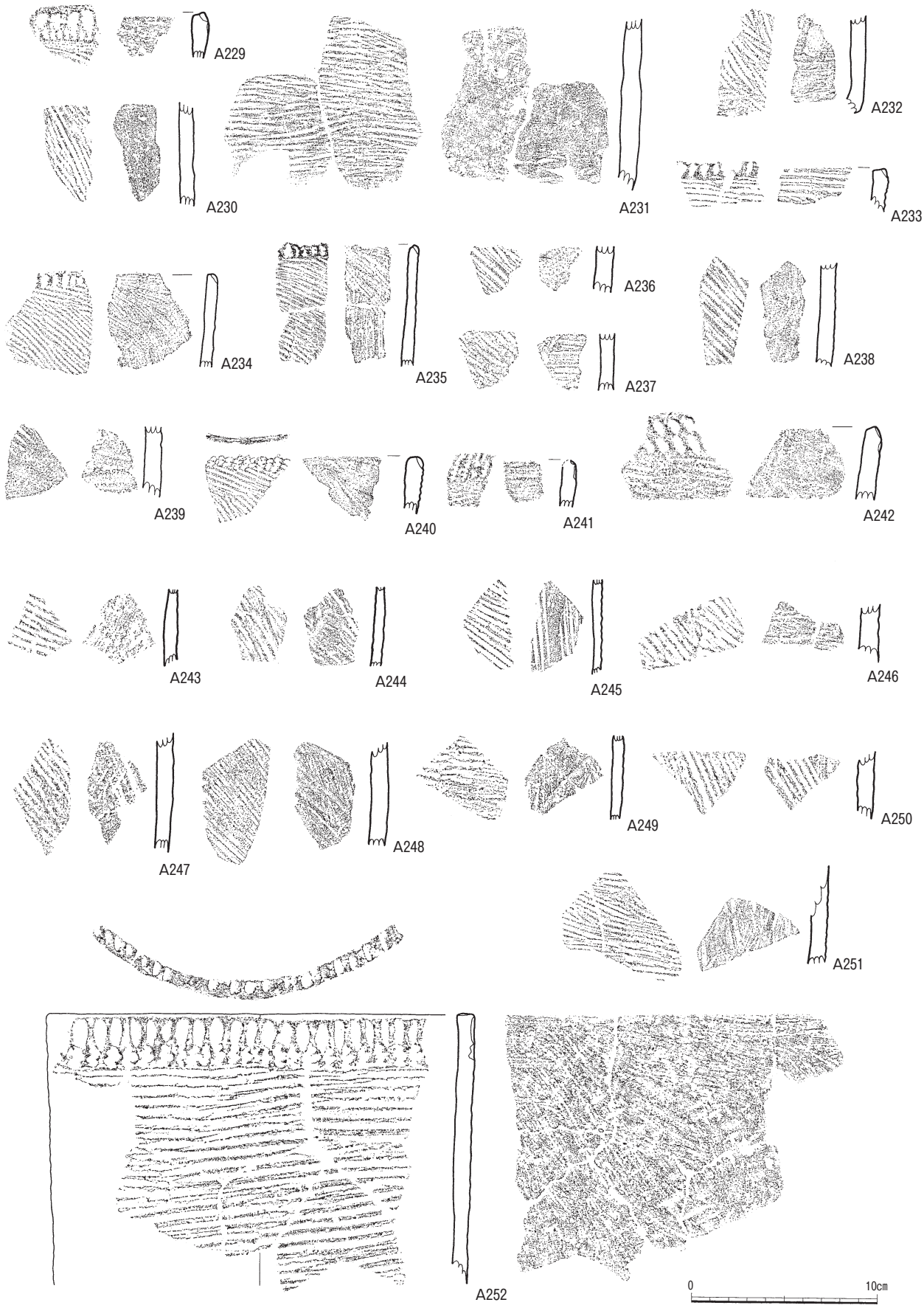
形状と規模　他遺構との重複が激しいが，基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は4.90m，短軸が2.40mを測り，長短値は0.49で，長方形度が極めて高い。検出面からの深さは約20㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で9.83㎡，床面積で9.09㎡を測り，本遺跡の平均値よりかなり高い数値を示す。壁面傾斜値も0.92と高かった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

第86図　43号，44号竪穴住居状遺構実測図



第87図　竪穴住居状遺構内出土土器37

出土遺物　埋土中から出土した遺物は13点で，うち５点を図化した。A271は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。これは３点の土器が接合した資料であるが，うち２点は隣接するSH49の埋土中から出土した土器であった。A267は志風頭式土器の胴部片である。角筒土器の角部を含む胴部片で，外面には斜位の貝殻条痕文を地文とし，二本単位の櫛状工具（貝殻腹縁部か？）による波状文が施されている。A266は加栗山式土器の口縁部から胴部にかけての土器片である。口縁部は残りが悪いため，詳細な文様構成が確認できないところもあるが，口縁部直下に斜位の貝殻刺突文を巡らし，さらにその下に横位２段の貝殻刺突文を施しているものと考えられる。胴部は斜位の貝殻条痕文を地文とし，その上から貝殻腹縁部による縦位の刺突文を重ねている。A267も角筒土器の胴部片である。斜位の貝殻条痕文を地文とし，その上から二本一単位の波状沈線や貝殻腹縁部による刺突文が施されたものである。A268は前平式土器と考えられる底部片である。底径10.2cmを測る。底部付近の外面に横位の貝殻条痕文がみられる。

B43は安山岩製の石皿片である。現存するサイズは，長さ13.40cm，幅12.00cm，厚さ5.00cm，重さ1046.00g を測る。皿状の凹部に明瞭な研磨痕が残る。

重複遺構　前述のように５基の土坑が重複して検出されている。北側にはSK152とSK154がある。２基もまた重複していることもあり，本来の形状が把握できない。現存するスケールはSK152の長軸が145cm，短軸が90cmを測る。検出面積は83.7㎡である。SK154の長軸は110cm，短軸95cmで，検出面積は59.45㎡であった。

西側にはSK155がある。長さ80cm，幅50cmを測る。ここからは遺物が３点出土している。いずれは小片のため図化できなかった。

南側にはSK235があり，さらにそれにSK107が重複して検出された。SK235はSH48から細長く南へ延びた状態で検出された。現存する長さが135cm，幅が50cmを測る。遺物が３点出土した。A265は加栗山式土器の口縁部片である。角筒土器の角部を含む。口縁部直下に貝殻腹縁部による横位の貝殻刺突文を３段施し，胴部には地文の浅い貝殻条痕文の上から縦位ないし斜位の貝殻刺突文が施されている。幅約２～３㎜の口唇部には細かい刻みが密に施されている。また角筒土器の角部には，ヘラ状工具による刻目が明瞭に施されている。

なお，SH48の東南側には，重複はしないが，SK147とSK234が存在する。これらは検出土坑の項で紹介したい。

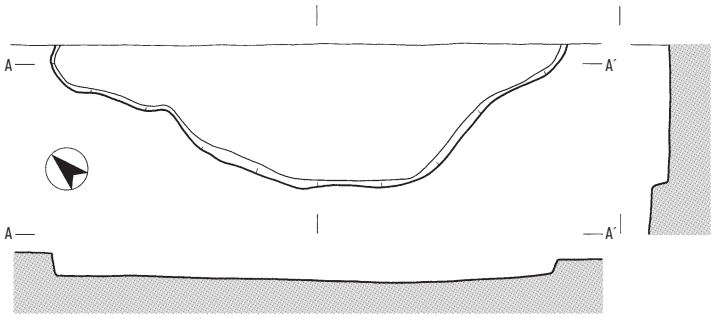
49号竪穴住居状遺構（SH49：第90図）

検出状況　SH48はG9区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。北東側でSH48と接している。２基の竪穴住居状遺構と10基の土坑が集中して存在する，遺構密集地区内で検出された。

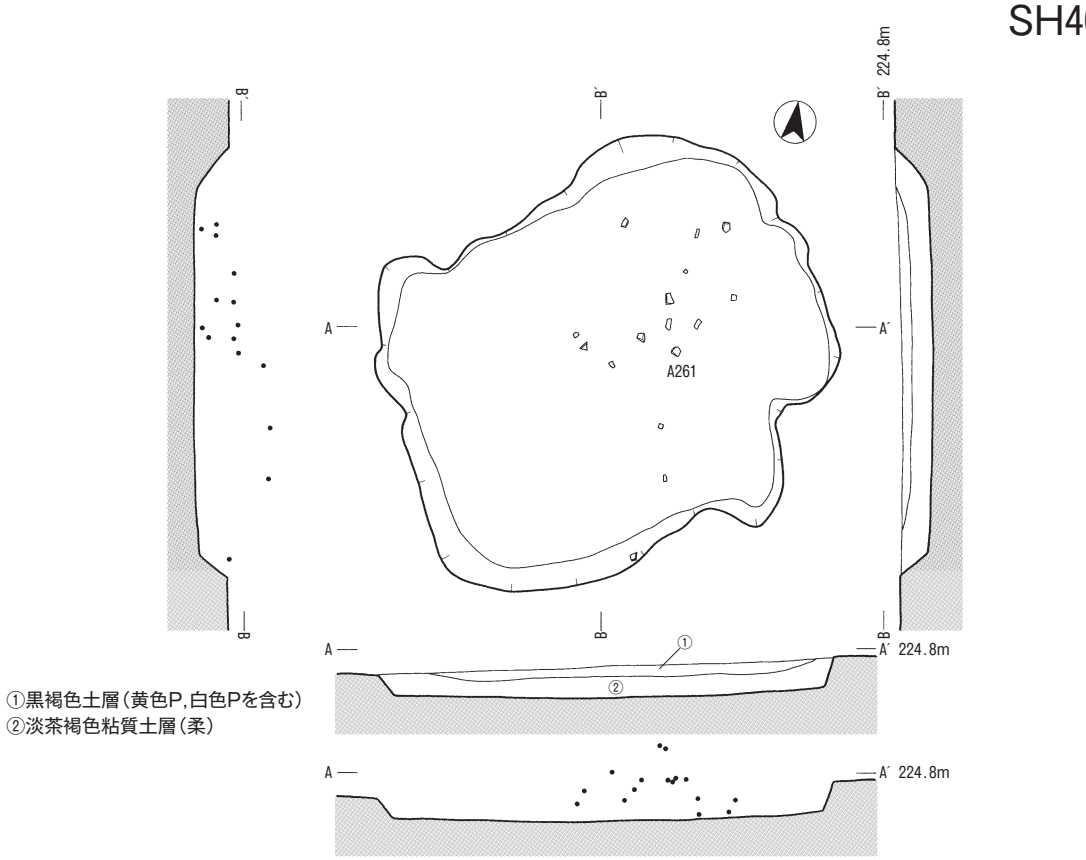
形状と規模　遺構のアウトラインは，出入りが激しく，全体の形状も整っていない（不整形）。平面プランの概要は，長軸は3.85m，短軸が2.70mを測り，長短値は0.70であった。検出面からの深さは約20cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で6.14㎡，床面積で4.32㎡を測り，本遺跡の平均値よりはやや高かった。壁面傾斜値は0.70と低かったが，これは北側に掘り込みラインから床面まで緩やかな傾斜面を

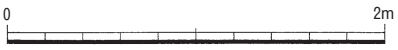
SH45

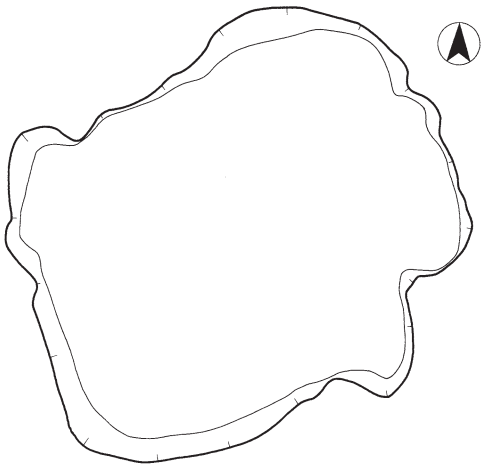


SH46



①黒褐色土層（黄色P,白色Pを含む）
②淡茶褐色粘質土層（柔）





第88図　45号，46号竪穴住居状遺構実測図

有する部分があることによる。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は18点で，うち８点を図化した。A269と A270は前平式土器の口縁部片である。A269は推定口径18.7㎝を測る。口唇端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らしている。口縁部直下には横位の貝殻条痕文，胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。これは３点の土器が接合した資料であるが，うち１点は SH54の埋土中，もう１点は包含層の８層中から出土した土器であった。A271～A275は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　北東側で SH48と接する以外に重複する遺構はない。東側に半島状の出っ張りがあるが，全体の形状から，その出っ張りのすぐ北側にある薩摩火山灰層を遺構内の突出部と理解した。また，前述したように，北側の掘り込みラインと床面ラインは30～70㎝程度離れている。緩やかな傾斜をもちながら床面付近で急な壁面（ほぼ垂直）となる。

なお，SH49の南側には，重複はしないが，SK145と SK146が存在する。これらは検出土坑の項で紹介したい。

50号竪穴住居状遺構（SH50：第92，93図）

検出状況　SH50はＦ８区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。北側で本遺跡の中で最大の竪穴住居状遺構である SH70と，また，南側では SK148と重複している。

形状と規模　他遺構との重複部分が多いが，完掘の状況から，基本的な平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は3.40m，短軸が2.00mを測り，長短値は0.59と長方形度が高かった。検出面からの深さは40㎝弱で，薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

検出部分の面積は，検出面で6.22㎡，床面積で5.28㎡を測り，本遺跡の平均値よりはやや高かった。壁面傾斜値は0.85であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

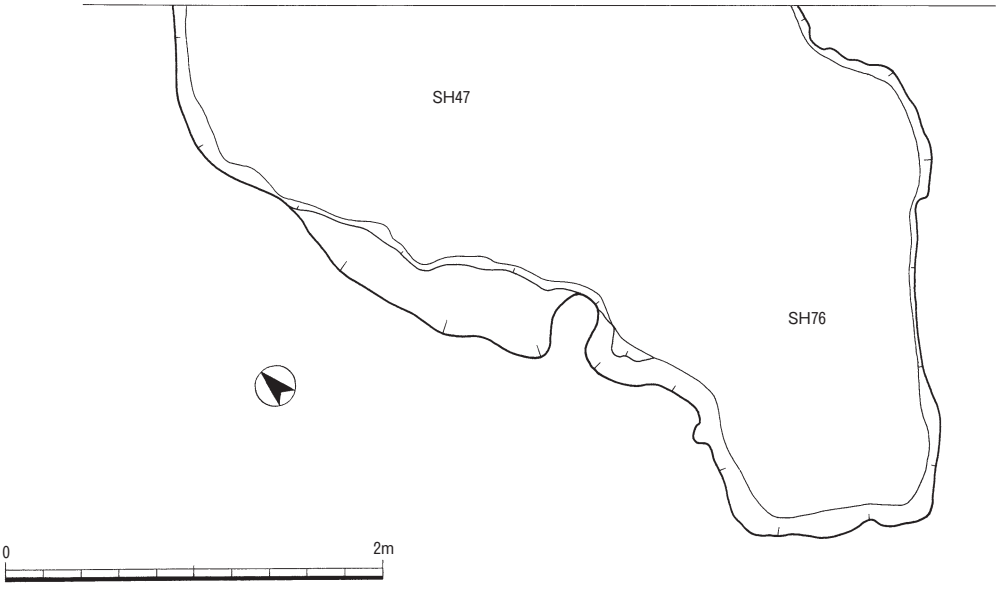
埋土　埋土は白色のパミスを比較的（対 SH70）多く含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい暗茶褐色の粘質土層（埋土③）があるという堆積状況を基本とするが，その中間位置に黄白色の粘質土ブロック（埋土④）が全体的に含まれていた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は12点で，うち６点を図化した。A278は前平式土器の口縁部小片である。口唇端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らしている。口縁部直下外面は横位の貝殻条痕文が施されている。内面は剥落している。A279～A282は前平式土器の胴部片である。外面には斜位（A280と A282）および横位（A281）の貝殻条痕文が施されている。A282は底部に近い部分と考えられる。A283と A284は前平式土器の底部片である。A284の外面には横位の貝殻条痕文が施されている。A283はほぼ底面部分であるが，内外面共に貝殻条痕がみられる。

重複遺構　北側で SH70，南側で SK148が重複して検出された。SH70との前後関係については，埋土による明瞭な切り合い関係がつかめるわけではないが，埋土④が SH50だけにあり，しかも

SH47
SH76

①黒褐色土（黄色P,白色Pを少量含む）
②暗褐色粘質土層



第89図　47号，76号竪穴住居状遺構実測図

SH70の床面レベルよりも高い位置にあるということは，SH50の方が新しい可能性が高いと考えられる。ちなみに主たる埋土である黒褐色の土層は両遺構に堆積しているが，中に含まれる白色パミスの量がSH50の方が多く認められた。

SK148はSH50の南隅で重複している。現存するスケールは長軸が80㎝，短軸が40㎝を測る。検出部分の面積は0.37㎡であった。床面はSH50よりも数～10㎝高いが，SH50に向かって低くなっている。埋土をみると，SH50との堆積状況に違和感はない。

70号竪穴住居状遺構（SH70：第92，93図）

検出状況　SH70はF8区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南側でSH50と重複している。

形状と規模　基本的な平面プランは隅丸長方形で，長軸が6.10m，短軸が3.30mを測る。長短値は0.54と長方形度が高かった。検出面からの深さは40㎝前後で，薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

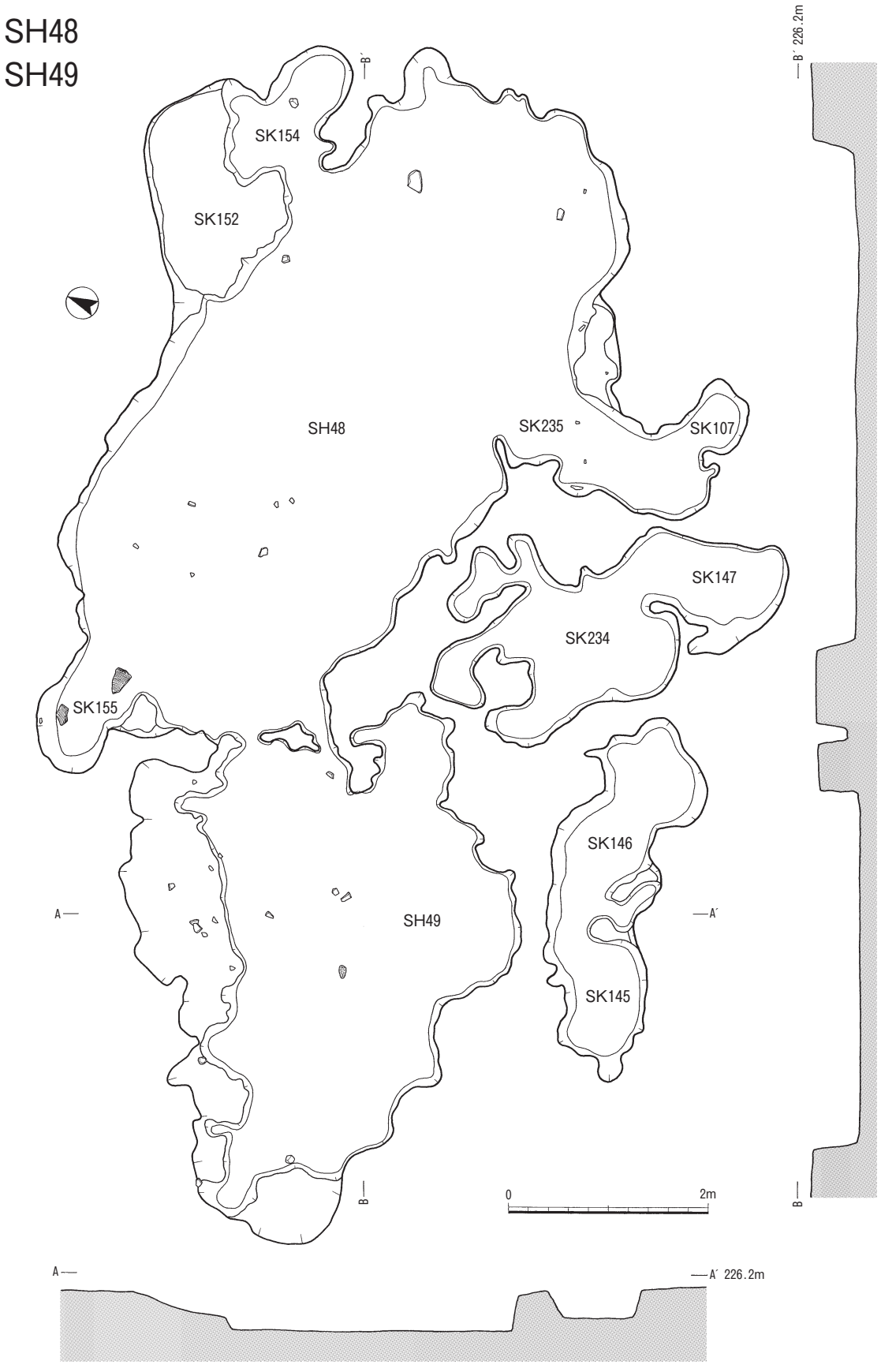
検出部分の面積は，検出面で17.52㎡，床面積で15.78㎡を測り，本遺跡の竪穴住居状遺構の中で最大を誇る。壁面傾斜値は0.90であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

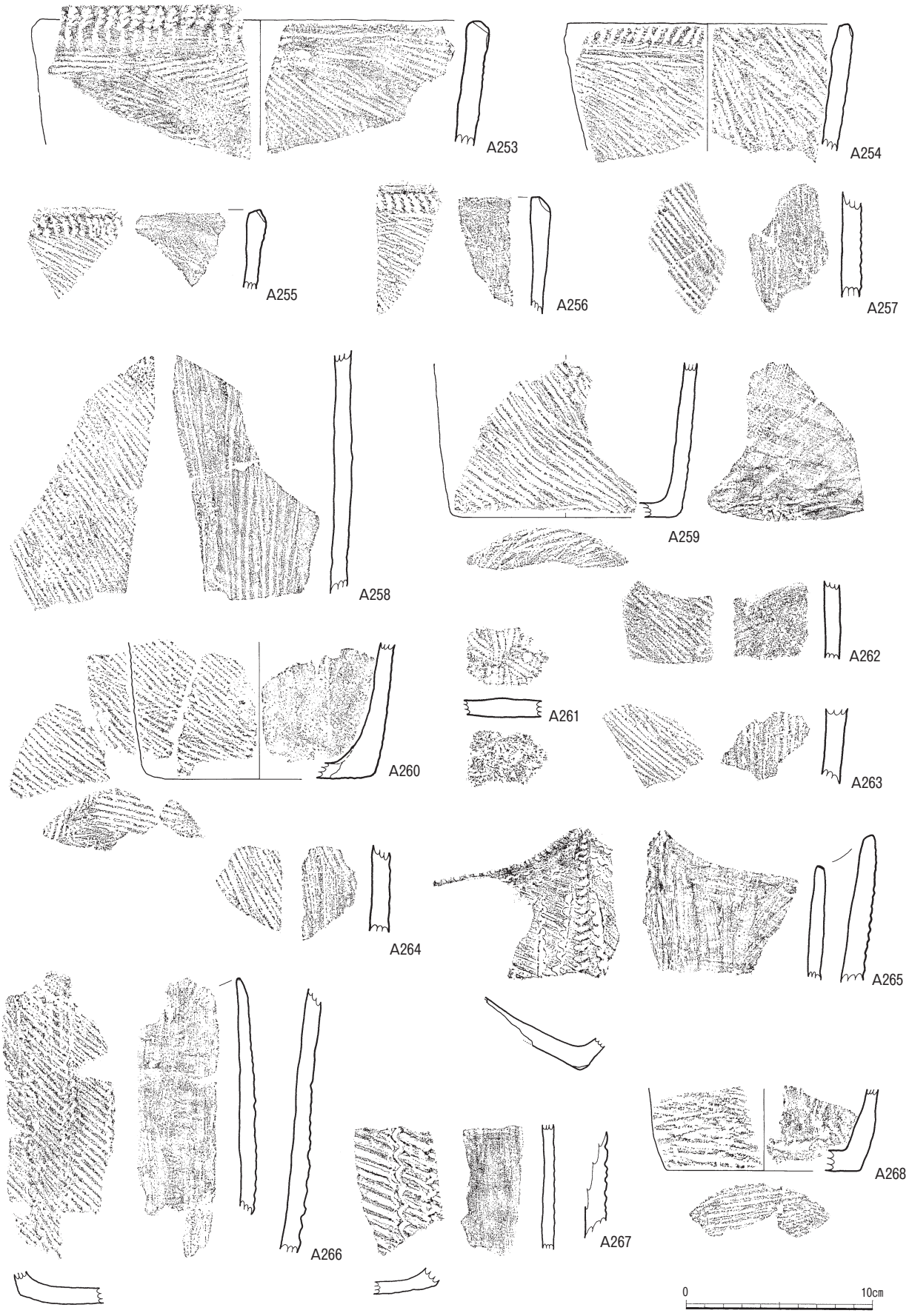
埋土　埋土は白色のパミスを含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位には部分的に砂質を呈する暗茶褐色土（埋土②），さらにその下に暗茶褐色の粘質土層（埋土③）が堆積していた。埋土②と埋土③は基本的には類似する。違いは②がやや砂質の部分を含むことと，③が全体的に粘質ということである。また，埋土②は主として北側で検出された埋土であることも特徴である。竪穴が埋まる過程を示すものとして注目される。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は67点で，うち29点を図化した。A420とA421は前平式土器の口縁部片である。A421は口唇端部と口縁部直下にそれぞれ斜位，縦位の貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らすものである。外面には横位の貝殻条痕文が見られるが，半分は器表面が剥落している。おそらく，土器製作時に粘土を肉付けした部分と考えられる。内面には口縁部付近が横位，胴部になると縦位の貝殻条痕がみられる。包含層中の土器片と接合した。A420は口唇端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らしている。口唇部には若干フラット面が残る。口縁部直下には横位の貝殻条痕文，胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。A426～A442は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A443とA444は前平式土器の底部片である。A443の外面には横位，斜位の貝殻条痕文がみられるが，A444の外面は丁寧なナデ仕上げを行っており，条痕はみられない。少なくとも底端部から3.5㎝の高さまで条痕はない。胴部になると貝殻条痕が施されているものと考えられる。

B67は有孔軽石製品である。長さ6.10㎝，幅6.65㎝，厚さ3.35㎝，重さ17.21gを測るが，完形品ではなく，楕円形状の両端を欠損していると考えられるが，全体の形状が整っていると言うこともあり，欠損部が意図的である可能性も否定できない。特徴的なのは，直径が約１㎝の貫通孔が３か所（２か所は欠損のため半円状）あるということである。孔はいずれもストレートで丁寧な作業の痕がうかがえる。どのような用途の製品なのか注目される。



第90図　48号，49号竪穴住居状遺構実測図



第91図　竪穴住居状遺構内出土土器38

重複遺構　南側でSH50が重複して検出された。SH50では，SH70の床面レベルよりも高位置で，埋土④（黄白色粘質土層）が検出されていることから，SH70の方が古いと考えられる。

SH70は，本遺跡の竪穴住居状遺構の中で，最も規模が大きいことは既に述べた。ただし，本遺構の検出面積が17.52㎡であるのに対し，２番手がSH04の11.99㎡とかなりの差がある。SH70自体が複数遺構の重複ではないのかという懸念も出てくる。SH70のアウトラインを見る限りでは，線形は一つの遺構として違和感はない。強いてあげるならば，埋土の項で述べたように，主として北側に埋土②が堆積しているということである。とはいうものの，埋土②は南側においてもブロックで入っている。以上のようなことから，重複する遺構である可能性も考慮しながら，ここでは１つの遺構として記録を進めたい。

51号竪穴住居状遺構（SH51：第94図）

検出状況　SH51はF7区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。西側隅でSK233と重複し，南側でSK151と接している。

形状と規模　基本的な平面プランは隅丸長方形で，長軸が3.10m，短軸が2.40mを測る。長短値は0.77であった。検出面からの深さは約25㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で6.38㎡，床面積で5.79㎡を測り，壁面傾斜値は0.91であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位には比較的柔らかい暗茶褐色土（埋土②）が堆積していた。①と②の中間には，Ｐ13と考えられるの黄色パミスがやや集中する部分がブロックで存在する。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は12点で，うち５点を図化した。A282とA285は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

B22とB23は，スクレイパー状石器である。いずれも安山岩製で，断面三角形状の縦長剥片を利用したものである。B23は長さ14.60㎝，幅7.10㎝，厚さ1.6㎝，重さ97.73gを測る。先端が一部欠損しているものと考えられる。両側辺には丁寧な加工痕が残る。B23もスクレイパー状石器である。長さが12.60㎝，幅3.85㎝，厚さ1.20㎝，重さ58.35gを測る。断面三角形状を呈し，より鋭角な側辺に丁寧な剥離を行い，刃部を形成している。遺構内から出土した２点が接合した資料である。

B55は軽石製品である。長さ7.8㎝，幅5.90㎝，厚さ3.65㎝，重さ32.13gを呈する。形状はパソコンのマウス状を呈し，底面は研磨によりフラット面を有する。

重複遺構　西北隅でSK233が重複して検出された。現状の規模は，長軸165㎝，短軸70㎝で，検出面積は0.89㎡であった。床面レベルはSH51と同じである。２個に分割された自然礫が１点出土している。南東側ではSK151が接して検出された。それぞれの検出面が接しており，床面は独立している。異なる遺構として取り上げているが，埋土も同じ状況で堆積し，遺構のアウトラインもほぼ平行していることから，２つは有機的な繋がりを持つ可能性も考えられる。

52号竪穴住居状遺構（SH52：第95図）

検出状況　SH52はF7区とG7区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面

であった。北東隅でSK162と重複している。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形で，長軸が3.40m，短軸が2.55mを測る。長短値は0.75であった。四隅の丸味は本遺跡の中では弱い方である。検出面からの深さは約40cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で7.69㎡，床面積で6.71㎡を測り，壁面傾斜値は0.87であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は他の竪穴住居状遺構と異なる堆積状況を示す。まず，最も下位には暗茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積している。第98図の断面図でもわかるように，この埋土②は遺構の中央部分が最も厚く堆積し，壁際にいくほど薄くなっている。つまり，長軸，短軸の断面図に見る埋土②は「△」状に堆積しているのである。埋土②の上には茶褐色の弱粘質土層（埋土③），さらにその上には黒褐色土層（埋土①）が堆積していた。なお，埋土①では黄色，白色のパミスはみられない。また，薩摩火山灰層（Ⅸ層）のブロック（拳大～小児頭大）が集中して検出される場所が３か所確認された。いずれも壁際に近い部分で，床面から５～10cm程度浮いた状態で検出された。

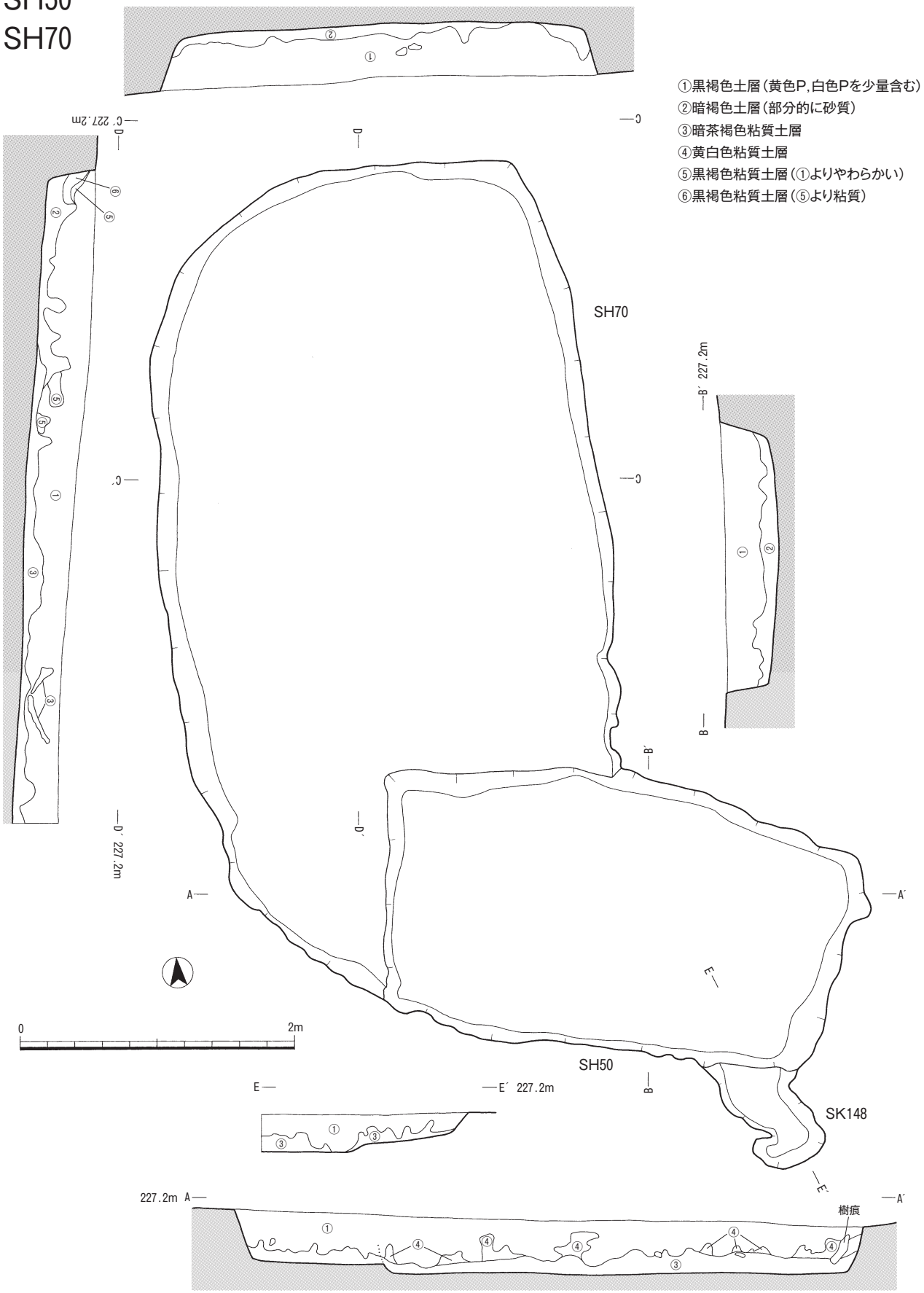
全く同じではないが，類似する埋土状況を示すのがSH12やSH36等である。ただし，これらの場合，遺構の中央で顕著にみられたのは，薩摩火山灰層（Ⅸ層）のブロック群であった。土質こそ異なるものの，類似する堆積を示す，この共通点が意味することについては，SH12の項でも触れたように，土屋根をもつ上屋構造も考慮する必要を提示してくれた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は70点で，うち19点を図化した。A286とA287は前平式土器の口縁部片である。A287は口唇端部外面に貝殻腹縁部による縦位の連続刺突文を巡らしている。口唇部の内面側にはフラット面が残る。内外面共に比較的深い貝殻条痕文が施されている。A286は摩滅が激しく詳細は不明であるが，口唇端部外面に連続刺突文が施されている。施文具は不明瞭である。A288～A299は前平式土器の胴部で，A288とA290，A291は外面に斜位，A294～A299は横位の貝殻条痕文がみられるものである。A293は縦位の貝殻条痕文の上から，斜位の貝殻条痕文が重ねて施されたものである。A289とA292の胴部片は器面の摩滅が激しく，型式については不明であるが，いずれもかすかに条痕が見られる。A300とA301は前平式土器の底部である。A301は径17.0cmを測る，比較的大形の前平式土器である。底面は，ほぼ均一な厚さ（約１cm）を保ち，煎餅状を呈している。胴部には浅い斜位の貝殻条痕文が施されているが，全体的に摩滅が激しい。底外面も摩滅部分が多いが，一部にはミガキ仕上げの痕跡も残っており，かなり丁寧な土器作りを行っていたことが分かる。A300は径12.2cmを測る。わずかに残っている胴部への立ち上がり部分には，横位の貝殻条痕文が見られる。底部内面の立ち上がり部分は，粘土を厚くし，胴部との接合強化を図っている。A301は２つの土器片の接合資料であるが，もう１点はSH60の埋土から出土した土器片であった。約18m離れた遺物の接合資料である。

A304は志風頭式土器と考えられる口縁部片である。緩やかな方形上面観を示す，角筒土器と考えられる。山形頂部の一部が含まれる。口縁部直下に横位３段の貝殻刺突文が施され，胴部には横位の浅い貝殻条痕が見られる。一部器表面が剥落していることもあり，胴部条痕の上に刺突文を重ねているのか否かについては明らかでない。３点の土器片による接合資料であるが，１点は包含層中，もう１点は44号集石遺構内の土器片であった。A302は志風頭式土器と考えられる胴部片であ

第92図　50号，70号竪穴住居状遺構実測図 1

SH50
SH70



第93図　50号，70号竪穴住居状遺構実測図２

る。斜位の貝殻条痕文の上に，２本単位の沈線文がおそらく「Ｖ」字形に施されているものと想定される。

B25は安山岩製のスクレイパー状石器である。長さが6.05cm，幅9.15cm，厚さ1.05cm，重さ62.57gを測る。横長剝片の縁辺部を入念に加工したものである。B57は比較的大形の軽石製品である。平面が三角形状を呈し，長軸16.7cm，短軸15.2cmを測る。また，厚さは6.4cmであった。研磨によるためか一面がややカーブしている。

重複遺構　北西隅でSK162が重複して検出された。これについては，SK162の北側で重複しているSH82の項で取り上げることとする。

53号竪穴住居状遺構（SH53：第98図）

検出状況　SH53はG7区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは基本的に隅丸長方形であるが，北側の一辺はややカーブ状を呈している。長軸が3.60m，短軸が1.85mを測る。長短値は0.51と低く，長方形度が高かった。検出面からの深さは10cm弱で極めて浅い。それでも薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で5.54㎡，床面積で5.11㎡を測り，ほぼ本遺跡の平均値であったが，壁面傾斜値は0.92と高かった。検出面が低かったと言うことが影響しているものと考えられる。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土はほぼ黄色および白色パミスが少量含まれる黒褐色土層で，暗茶褐色の粘質土層がブロックで入る部分もあった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は３点で，うち１点を図化した。B24は安山岩製のスクレイパー状石器である。長さが13.80cm，幅6.90cm，厚さ2.10cm，重さ173.51gを測る。断面三角形を呈する縦長剝片の側辺を入念に加工して刃部を作っている。ほぼ完形に近い状態と考えられる。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

54号竪穴住居状遺構（SH54：第99図）

検出状況　SH54はG7区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南西側（H7区側）は地層横転により削平されていた。

形状と規模　平面プランは基本的に隅丸長方形と考えられる。長軸は2.35＋αm，短軸が2.55mを測る。検出面からの深さは約20cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

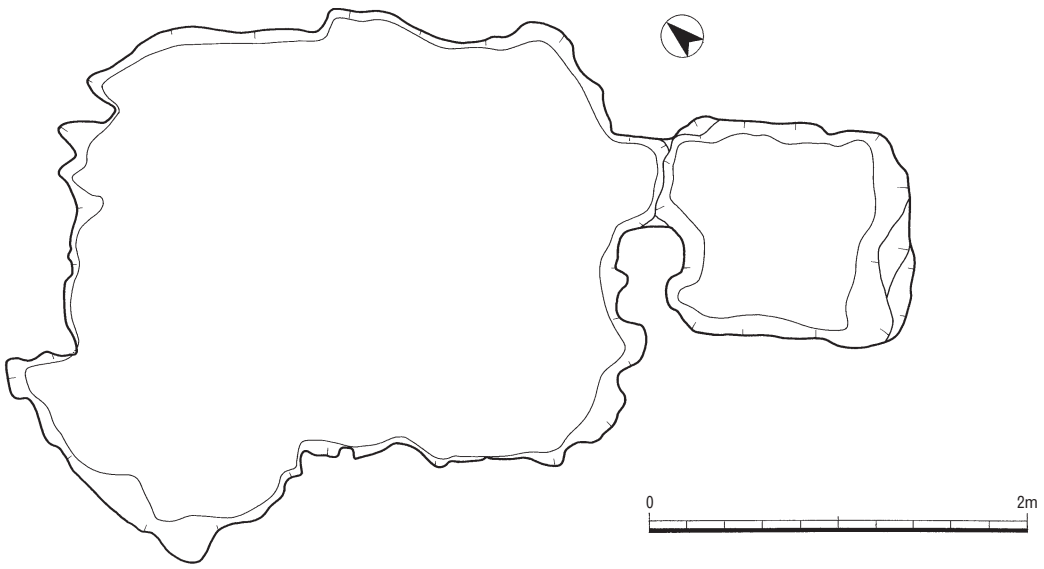
検出部分の面積は，検出面で4.38㎡，床面積で3.89㎡を測り，壁面傾斜値は0.89であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土はほぼ黄色および白色パミスが少量含まれる黒褐色土層で，暗茶褐色の粘質土層がブロックで入る部分もあった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は９点で，うち４点を図化した。A305は前平式土器の口縁部片である。口唇端部外面に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を巡らしている。口唇端部内面は稜が明瞭である。口縁部直下は横位の，胴部は斜位の貝殻条痕文が施されている。内面も同様な貝殻条痕がみられる。A308は志風頭式土器の口縁～胴部片である。全体的に曲線がいびつなことから，

①黒褐色土層（黄色P,白色Pをごく少量含む）
②暗茶褐色土層（柔）



第94図　51号竪穴住居状遺構実測図

いわゆる「レモン形」のフォームを持つ土器の可能性がある。やや内湾する口縁部直下には，貝殻腹縁部による連続刺突文が縦位２段の構成で巡らされている。幅約５㎜ほどの口唇部は比較的フラットで文様はない。胴部には横位および斜位の貝殻条痕文をベースに，２～３本の沈線を１単位とする直線文が上から重ねて施文してある。内面は剥落が目立つ。全体的に作りが雑という印象は否めない。９点の土器片の接合資料であるが，SH54から出土したのは１点のみ。３点は53号集石遺構からの出土，その他は包含層中からの出土であった。

A307は倉園Ｂ式土器の完形資料である。口径19.6cm，底径17.8cm，器高32.85cmを測る。口縁部が若干外傾するが，ほぼ円筒形に近い形状を呈する。口縁部下に３個一対の連点文を上下２段に巡らすものである。連点文のベースは貝殻腹縁部によるもので，地文も斜位の貝殻条痕文が明瞭に施されている。フラットな口唇部にも貝殻腹縁部によるものと考えられる刻目がみられる。

B36は安山岩製の磨石半欠品である。現状のサイズは，長さ7.10cm，幅8.60cm，厚さ4.90cm，重さ293.00g を測る。磨面には光沢が見られる部分もある。B56は軽石加工品である。長さが7.75cm，幅7.00cm，厚さ3.50cm，重さ55.73g を測る。形状はパソコンのマウス様を呈する。底にややカーブする研磨面があり，何を対象物としたのか注目される遺物である。

重複遺構　南西側が地層横転により削平されているが，重複する遺構はなかった。

55号竪穴住居状遺構（SH55：第101図）

検出状況　SH55は G6区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは隅丸方形で，長軸は2.75m，短軸が2.60mを測る。長短値は0.95と高く，正方形に近い。検出面からの深さは25cm弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

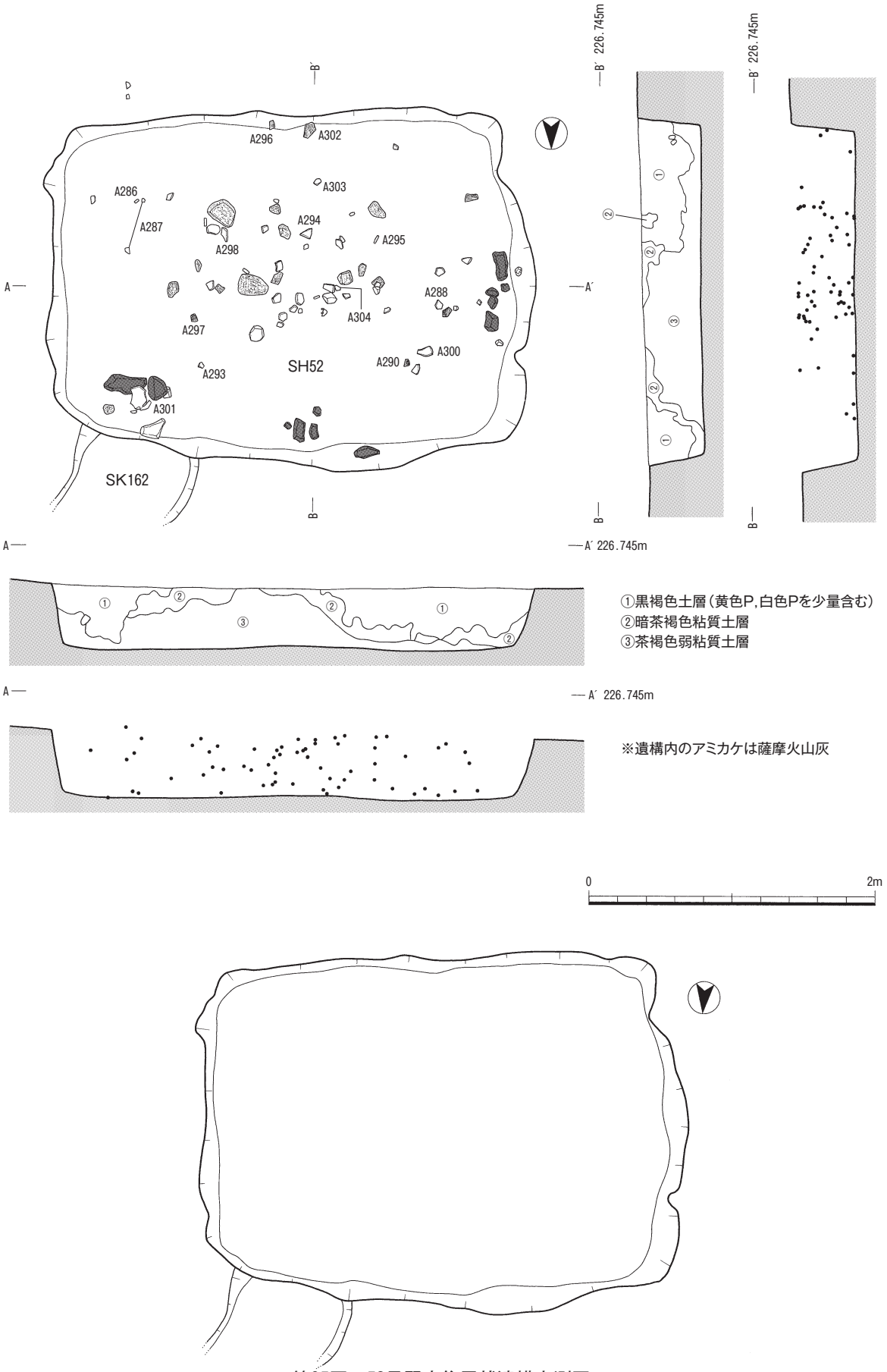
検出部分の面積は，検出面で6.32㎡，床面積で5.48㎡を測り，壁面傾斜値は0.87であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

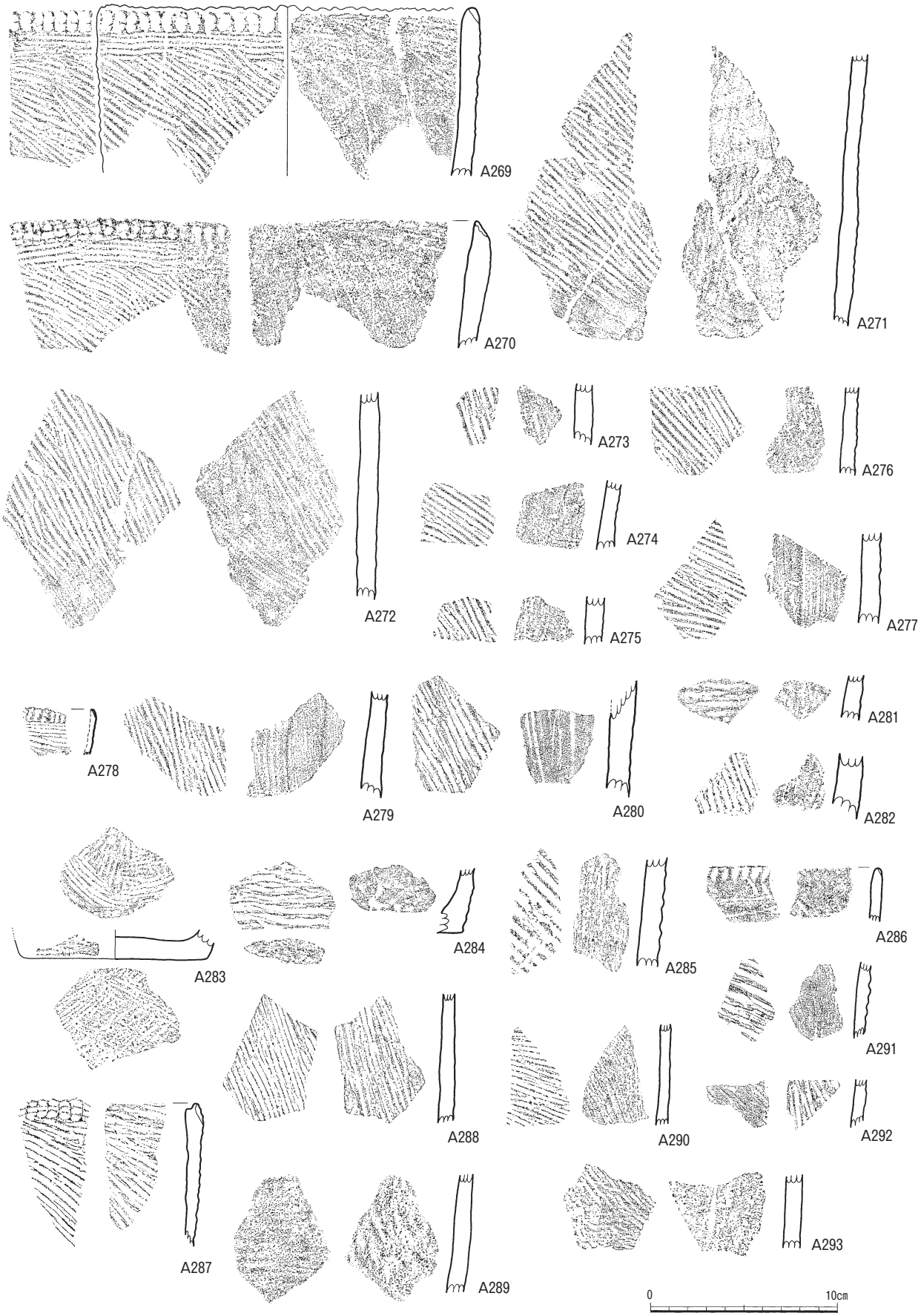
埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位には比較的柔らかい暗茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中には，薩摩火山灰層（Ⅸ層）のブロック（拳大～小児頭大）がいくつかみられた。また，第104図の断面図のように，Ｐ11（Ⅵb 層）の軽石ブロックも確認されたが，これは何らかの理由で混入したものと考えられる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物44点で，うち15点を図化した。A309～A318は前平式土器の胴部片と考えられるものである。外面に横位ないし斜位の貝殻条痕文が施されている。A319の胴部片は外面に貝殻条痕は見られない。土器型式については不明である。A320～A323は前平式土器の底部片である。A321の外面には底端部から斜位の貝殻条痕文が施されている。A323は横位の貝殻条痕文である。A322の底面は厚さ1.8cmを測る。底径は復元できないが，大形の土器である。

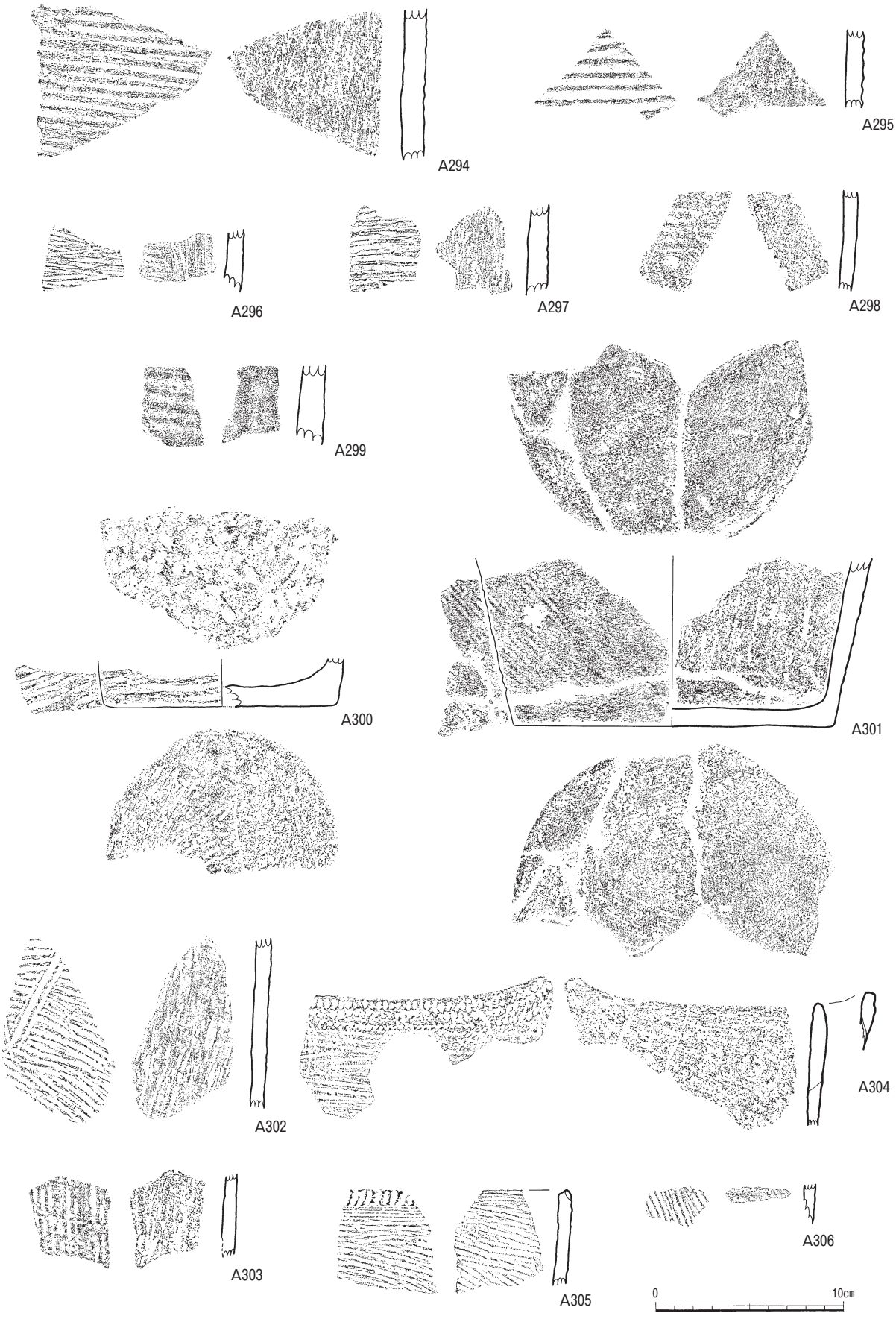
A326は前平式土器の完形資料である。口径，底径共に11.4cmと同一サイズを示す珍しい事例である。円筒形そのものであるが，底部付近で若干膨らむ形状を呈している。器高は26.0cmである。口縁部下にヘラ状工具による連続刺突文を巡らすもので，胴部全体に横位の，底部からの立ち上がり部分には縦位の貝殻条痕文が施されている。特に後者は約５ cm と長く，特徴的である。フラットな口唇部には浅めの刻目がみられる。



第95図　52号竪穴住居状遺構実測図



第96図　竪穴住居状遺構内出土土器39



第97図　竪穴住居状遺構内出土土器40

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

56号竪穴住居状遺構（SH56：第102図）

検出状況　SH56はG5区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の南東隅でSK220が重複して検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形で，長軸は2.70m，短軸が1.60mを測る。長短値は0.59と長方形度が高い。検出面からの深さは20cm弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で3.65㎡，床面積で3.04㎡を測り，壁面傾斜値は0.83であった。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位には比較的柔らかい暗茶褐色土（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物３点で，うち１点を図化した。A324は前平式土器の口縁部片と考えられるものである。口縁部直下に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を施している。口唇部はフラットで無文である。内外面共に横位および斜位の貝殻条痕文が施されている。A325は前平式土器の底部片である。底径16.8cmを測る。内外面共に斜位の貝殻条痕文が顕著にみられる。外面の底部付近は横位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　南東隅でSK220が重複して検出された。長軸が120＋αcm，短軸が50cmを測る。検出面からの深さは約５cmと浅く，SH56の床面とは約15cmの段差が見られた。SH56の全体の形状から見ると，SK220もSH56の一部である可能性もある。隅丸長方形状の遺構の一隅にステップ状の段があるとの想定も考えておきたい。

57号竪穴住居状遺構（SH57：第105図）

検出状況　SH57はG4区において単独で検出されたが，南東隅が地層横転によって削平されていた。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　想定される平面プランは隅丸方形で，長軸は2.55m，短軸が2.30mを測る。長短値は0.90と正方形に近い形状を呈している。検出面からの深さは西側で20cm弱，中央部分では約10cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

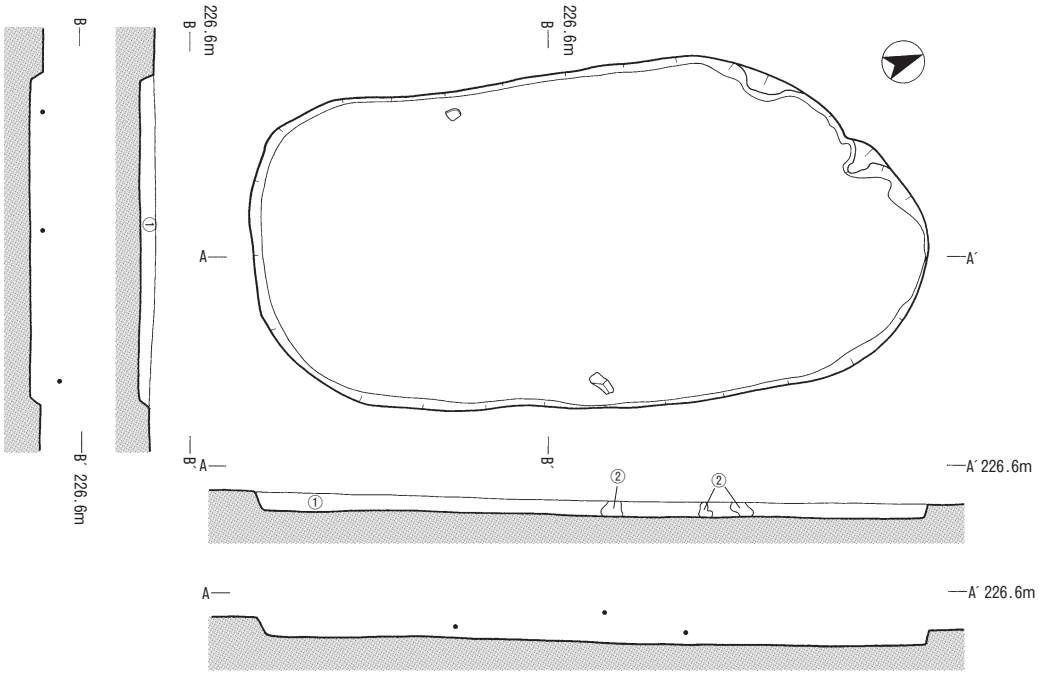
検出部分の面積は，検出面で5.25㎡，床面積で4.79㎡と，本遺跡のほぼ平均値であった。壁面傾斜値は0.91と高かった。これは検出面が低いことによるものと考えられる。

柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

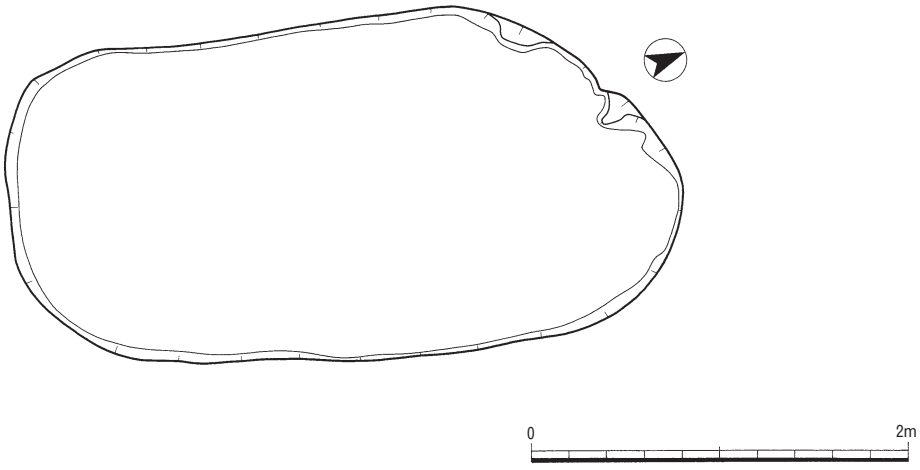
埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）が一部見られるが，全体的に比較的柔らかい暗茶褐色土層が安定して堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物14点で，うち４点を図化した。A327は前平式土器の口縁部大片である。口径は求められないが，前平式土器最大クラスの土器と考えられる。フラットな口唇部には，ヘラ状工具による連続刻目文が施されている。口縁部直下には，まず縦位の刺突文，さらにその下に斜位の刺突文が連続して巡っている。この２段の文様は，逆「く」字状に展開されている。

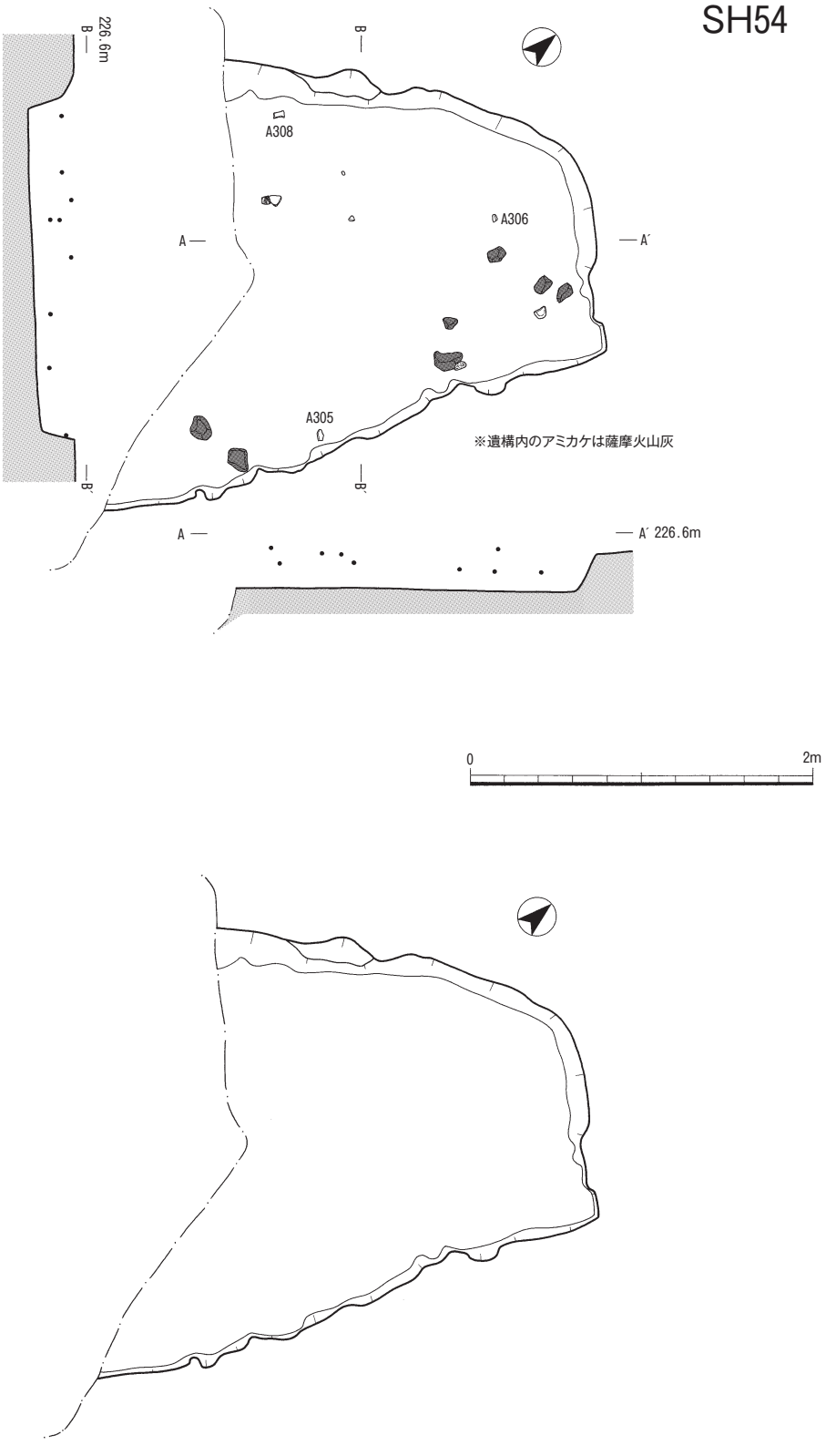
SH53



①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②暗茶褐色粘質土層（ブロック）



第98図　53号竪穴住居状遺構実測図



第99図　54号竪穴住居状遺構実測図

第100図　竪穴住居状遺構内出土土器41

約25㎝残る胴部は，一貫して横位の貝殻条痕文で覆われている。A331は同一個体と考えられる底部片であるが，横位の貝殻条痕は，底面に近い部分（幅約５㎝）で斜位に転じている。いずれも胎土に砂粒が多く，表面はザラザラしている。A329は器表面に斜位の貝殻条痕を持つ胴部片である。A328も前平式土器の口縁部片である。推定口径が10.4㎝と小形である。口縁部下にヘラ状工具による連続刺突文を巡らし，胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。フラットな口唇部には浅い刻目がみられる。また，縦長穿孔の補修孔も残っている。

重複遺構　南東隅で地層横転による削平が見られたが，遺構自体は単独で検出された。

58号竪穴住居状遺構（SH58：第106図）

検出状況　SH58はE7区とF7区の境界線上において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。平成16年度に実施された確認調査の際，４トレンチで検出された遺構である。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形で，長軸は4.20m，短軸が3.05mを測る。長短値は0.73であった。検出面からの深さは20㎝弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で10.60㎡，床面積で9.61㎡を測り，本遺跡で検出された竪穴住居状遺構の中では大形のグループに属する。壁面傾斜値は0.91と高かった。柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡茶褐色土層（埋土②），暗茶褐色の粘質土層（埋土③）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物18点で，うち４点を図化した。A330は前平式土器の口縁部である。フラットな口唇部には，ヘラ状工具による浅い連続刻目文が施されている。口縁部直下には，ヘラ状工具による縦位２段の刺突文が連続して巡っている。この２段の刺突文は，それぞれの隙間を埋めるような配置がなされている。胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。

A332～A334は加栗山式土器である。A334は角筒土器の角頂部を含む口縁部片である。口唇部は幅３㎜と狭いが，フラットでヘラ状工具による刺突文が施されている。口縁部直下にはやはりヘラ状工具による縦位の連続刺突文がめぐり，さらにその下位に，貝殻腹縁部による横位１段の貝殻刺突文が巡らされている。胴部には地文となる斜位の浅い貝殻条痕文の上から，縦位および斜位の貝殻刺突文が施されている。A332とA333は角筒土器の底部である。A332は底面の中心部で6.5㎝強を測る，比較的小形の土器である。外面の一部に斜位の貝殻条痕が残るものの，残存する部分についてはナデによる仕上げを行っている。A333の外面には，斜位の貝殻条痕文のあと，底端部から縦位に立ち上がる貝殻条痕文を重ねて施文している。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

59号竪穴住居状遺構（SH59：第108図）

検出状況　SH59はH5区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の南側は調査対象地外へと延びている。また東側では，SK223が重複して検出された。

形状と規模　推定される平面プランは隅丸方形で，推定長軸は2.10m，短軸が1.65mを測る。長短値は0.79であった。検出面からの深さは15㎝強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達し

ている。

検出部分の面積は，検出面で3.15㎡，床面積で2.76㎡を測る。柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物20点で，うち10点を図化した。A335～A337は前平式土器の口縁部である。フラットな口唇部には，ヘラ状工具による連続刻目文が施されている。口縁部直下には，ヘラ状工具による縦位１段（A335，A336）縦位２段（A337）の刺突文が連続して巡っている。この２段の刺突文は，それぞれの隙間を埋めるような配置がなされている。胴部外面には横位の貝殻条痕文が施されている。A338は同じく外面に横位の貝殻条痕文が施されている胴部片である。A339～A342は外面に斜位の貝殻条痕を施す胴部片である。A343は前平式土器の底部片である。外面には底端部から斜位の貝殻条痕が見られる。

B59は幅が２㎝前後，深さが約５㎜を測る，溝を有する（有溝）軽石製品である。長さが11.20㎝，幅が11.30㎝，厚さが4.3㎝，重さが103.84g を測る。

重複遺構　遺構の西側で，SK223が重複して検出された。長軸が70＋αcm，短軸が60㎝を測る。深さはSH59の床面とほぼ同レベルである。検出部分の面積が0.34㎡であった。

60号竪穴住居状遺構（SH60：第109図）

検出状況　SH60はG5区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の東側では，SK254がほぼ接して検出された。

形状と規模　基本となる平面プランは卵形に近い楕円形で，長軸は2.95m，短軸が1.90ｍを測る。長短値は0.64であった。検出面からの深さは約25㎝であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

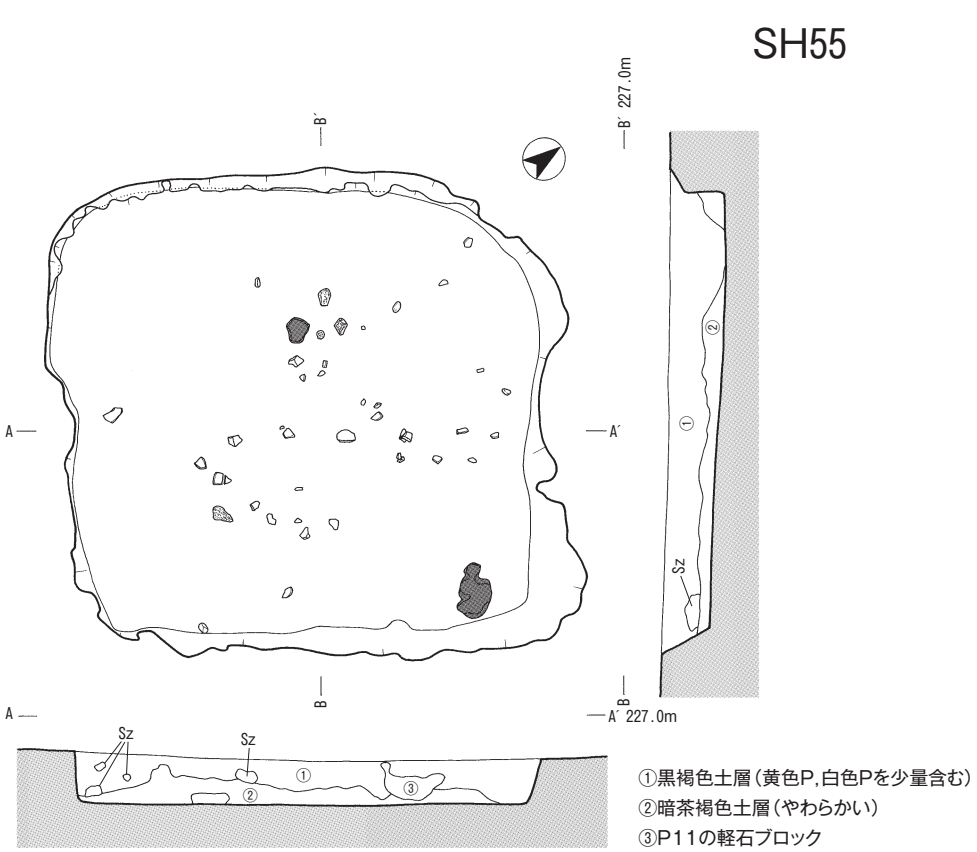
検出部分の面積は，検出面で3.91㎡，床面積で2.99㎡を測る。柱穴状のピットや焼土や炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

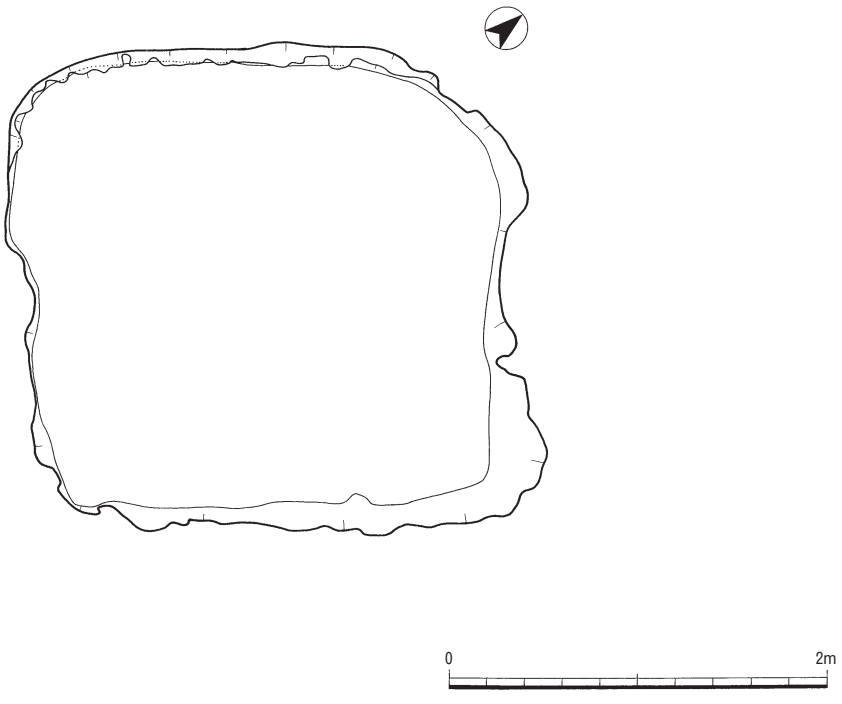
幅が最大値を測る両側で，薩摩火山灰層部分にやや内側へ傾斜するステップ状の段がある。向かい合う位置にあることから，構造用の細工である可能性もある。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に暗茶褐色土層（埋土③）が堆積していた。この埋土①と③の間に暗黒褐色土層（埋土①よりもさらに暗い）が薄く堆積していた部分もあった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物12点で，うち４点を図化した。A347は加栗山式土器の胴部片である。器壁の薄い角筒土器で，外面には浅い斜位の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文を施し，さらにクサビ形突起を貼付している。遺構東南部の段上から出土した。A345は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。A346は前平式土器の底部片と考えられる。外面には粗い貝殻条痕文の痕跡が残る。

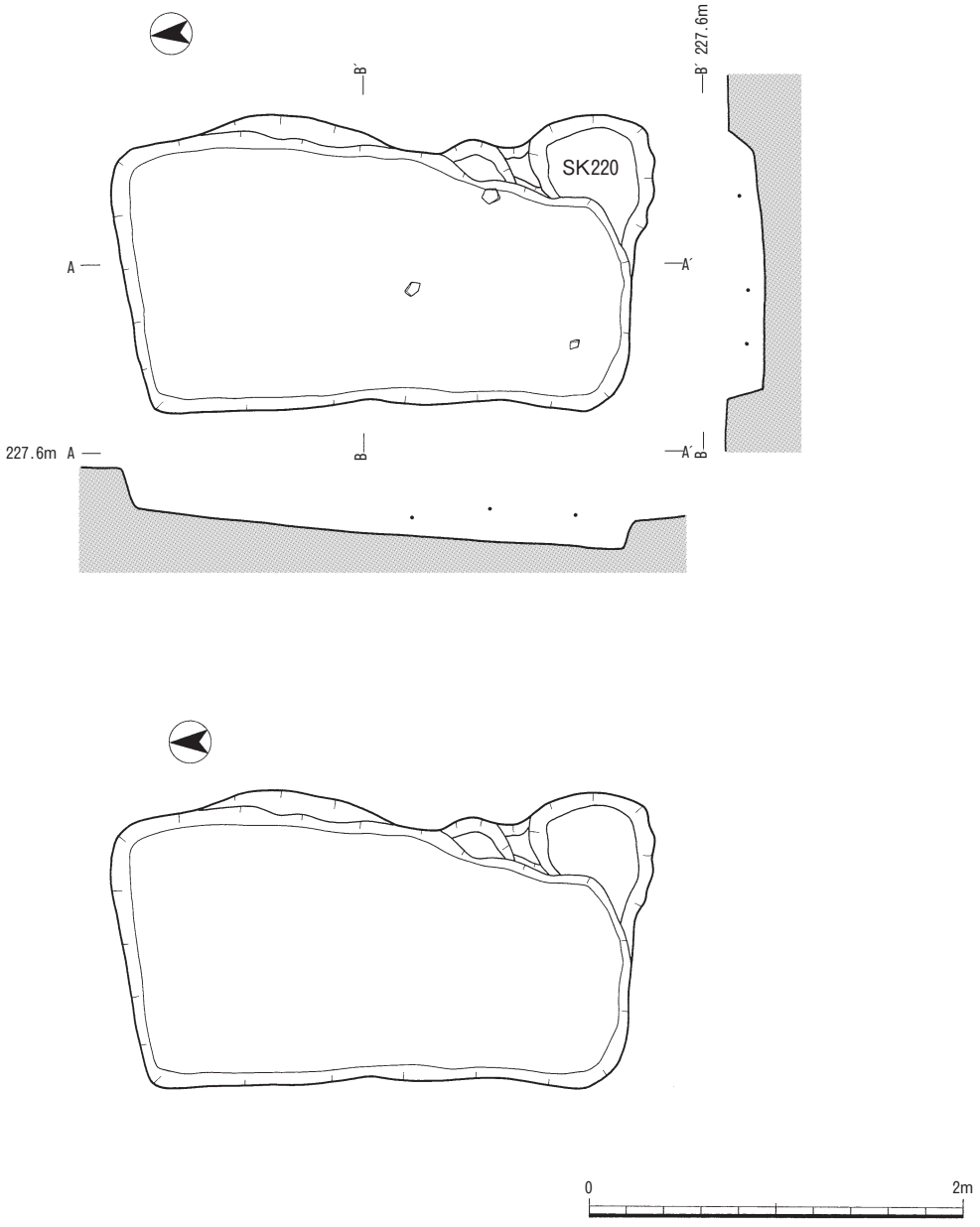
重複遺構　遺構の東側で，SK254が近接して検出された。SK254は平面プランが隅丸長方形状を呈し，長軸が1.60㎝，短軸が1.20㎝を測る。深さは５～10㎝と浅い。検出部分の面積が1.93㎡であっ



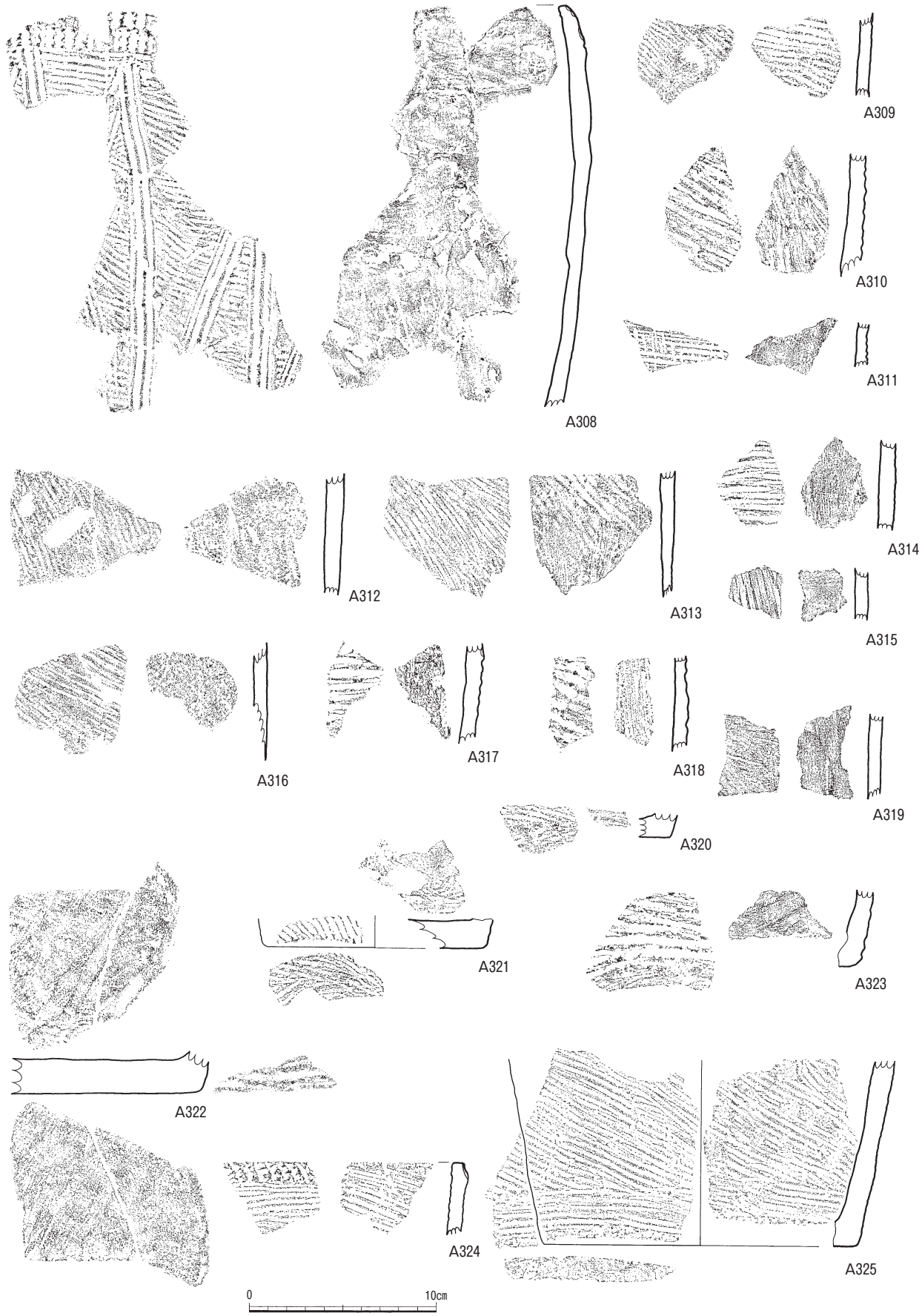


第101図　55号竪穴住居状遺構実測図

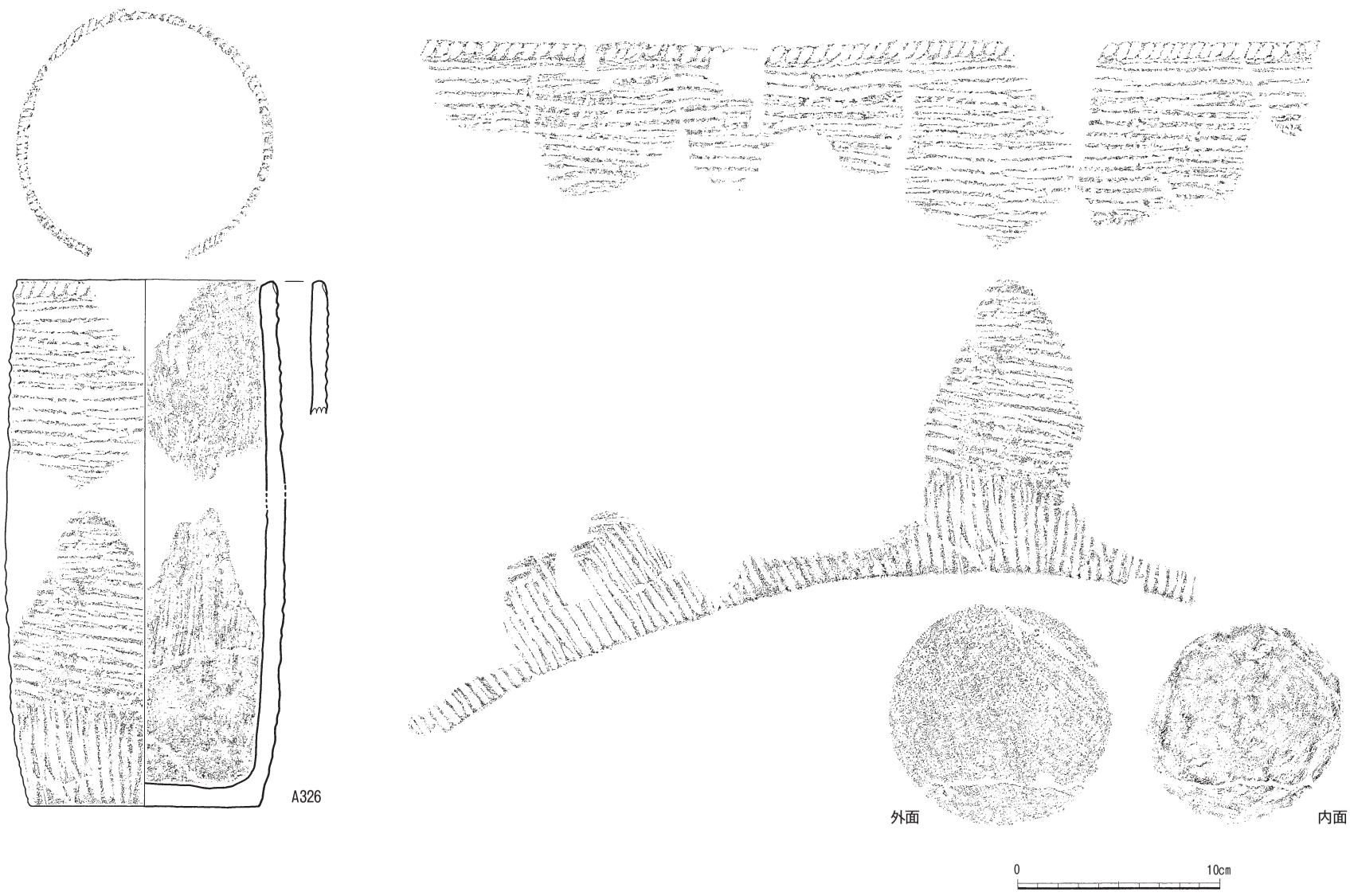
SH56



第102図　56号竪穴住居状遺構実測図



第103図　竪穴住居状遺構内出土土器42



第104図　竪穴住居状遺構内出土土器43

た。土坑としたものの中では，比較的大きめの部類に入る。遺物の出土はなかった。

※第１遺構集中区（第110，111図）

F6区から G6区を中心にして，竪穴住居状遺構と土坑が複雑に重複しながら集中的に検出された。最終的には竪穴住居状遺構が６基，そして土坑が７基確認できた。この集中地区を「第１遺構集中区」と呼び，記録を進めていきたい。

61号竪穴住居状遺構（SH61：第110，111図） ―第１遺構集中区①―

検出状況　SH61は F6区（若干 F5区にかかる）において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，近接する遺構との境界線がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，南側で SH78，SH79と，西側で SK226と SK247が重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定長軸は4.45m，短軸が2.60mを測る。長短値は0.58で長方形度が高かった。検出面からの深さは20㎝弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

検出部分の面積は，検出面で10.18㎡，床面積で9.30㎡を測る。本遺跡検出の竪穴住居状遺構の中では大形のグループに入る。柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

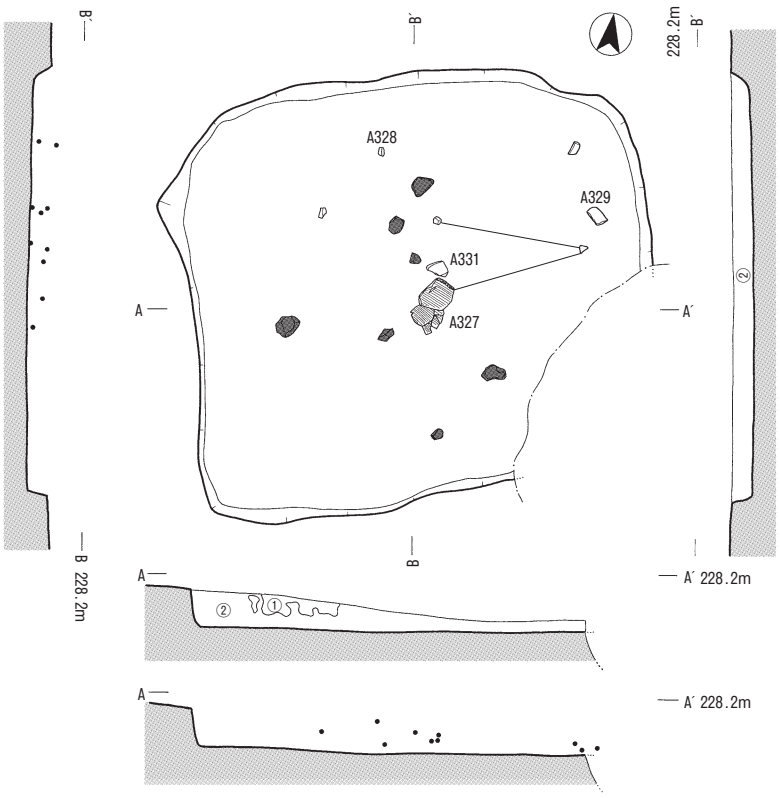
出土遺物　埋土中から出土した遺物28点で，うち５点を図化した。A348と A349は前平式土器の口縁部片である。A348のフラットな口唇部には，ヘラ状工具による連続刻目文が施されている。口縁部直下には，まずヘラ状工具による縦位の連続刺突文が，さらにその下には半裁竹管状工具による爪形の連続刺突文がそれぞれ巡っている。胴部外面には横位の貝殻条痕文が施されている。全体的に摩耗がはげしく，ザラザラしていることもあり，文様にシャープさはない。A349も摩滅が激しく不明瞭な部分が多いが，口縁部下の縦位の貝殻刺突文がかすかに見て取れる。A352は前平式土器の底部片である。外面には横位の貝殻条痕文が施されている。また，底面には網代の圧痕が観察できる。

重複遺構　SH61と重複する遺構は，竪穴住居状遺構および土坑が２基ずつ確認された。ここでは土坑について取り上げる。

SK226は SH61の南西隅で検出された。想定される平面プランは隅丸長方形状を呈すると考えられる。長軸が1.45＋αcm，短軸が0.95㎝を測る。深さは25㎝強で，検出部分の面積が1.19㎡であった。出土遺物は５点で，２点を図化した。A626と A627はいずれも前平式土器の底部片である。外面にはそれぞれ横位，斜位の貝殻条痕文が施されている。A627は摩耗が激しく，全体的にザラザラしている。

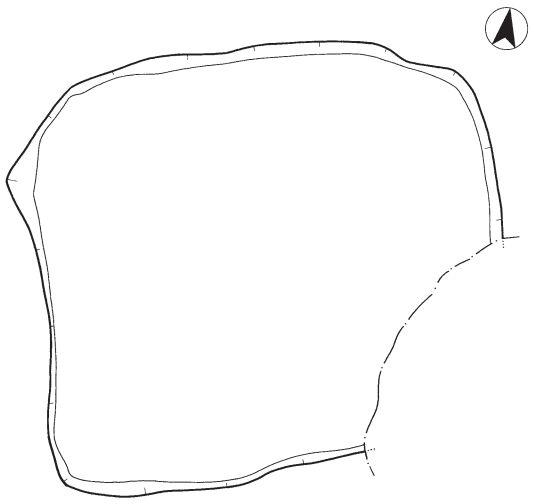
SK247は SH61の北西隅で検出された。平面プランが隅丸長方形を呈し，長軸が170㎝，短軸が65㎝を測り，長短値が0.38と低い値を示している。この遺構は，ブリッジ部分は崩壊しているものの，いわゆる連穴土坑であることが想定される。SH61の一隅の壁をブリッジとし，トンネル状の

SH57

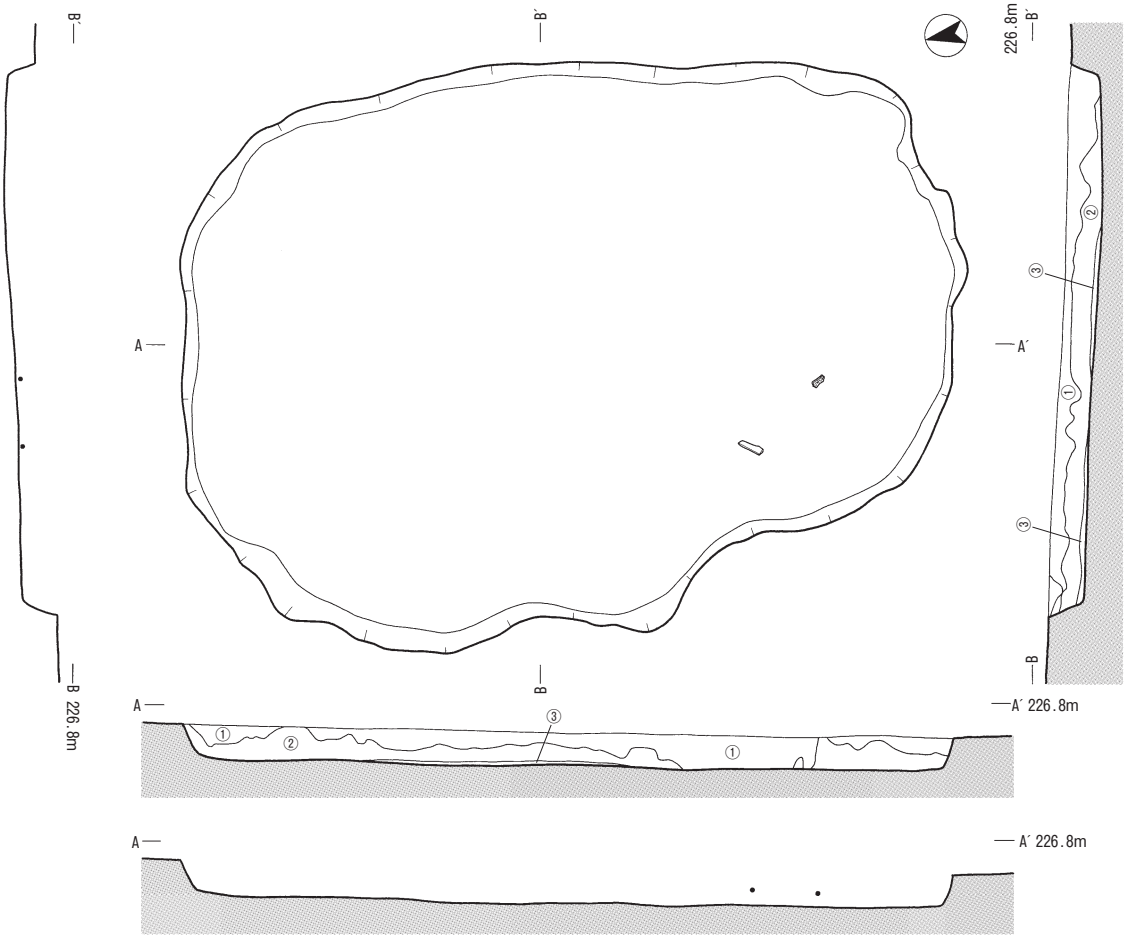


①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②暗茶褐色土層（柔）

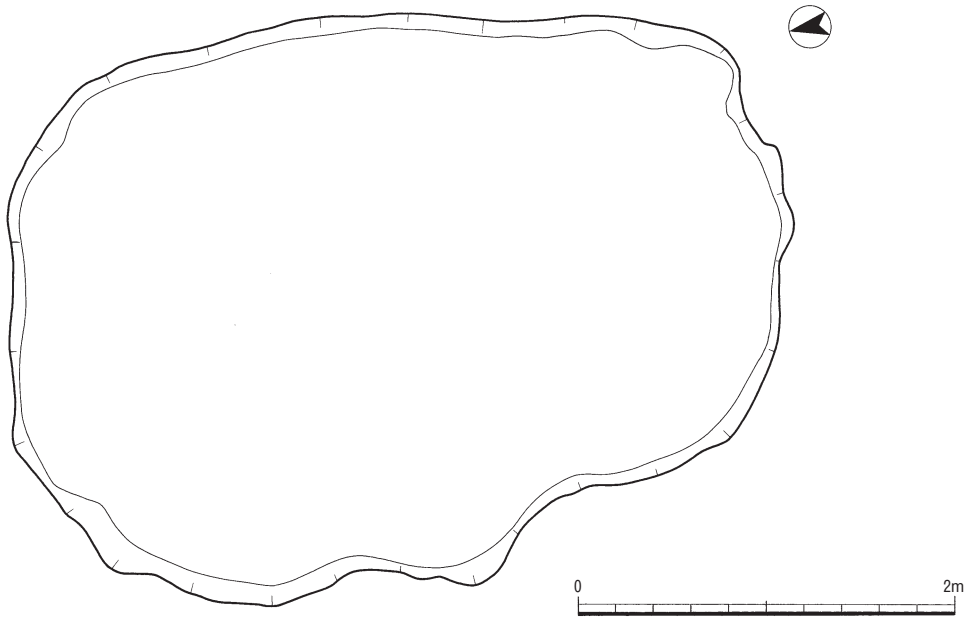
※遺構内のアミカケは薩摩火山灰



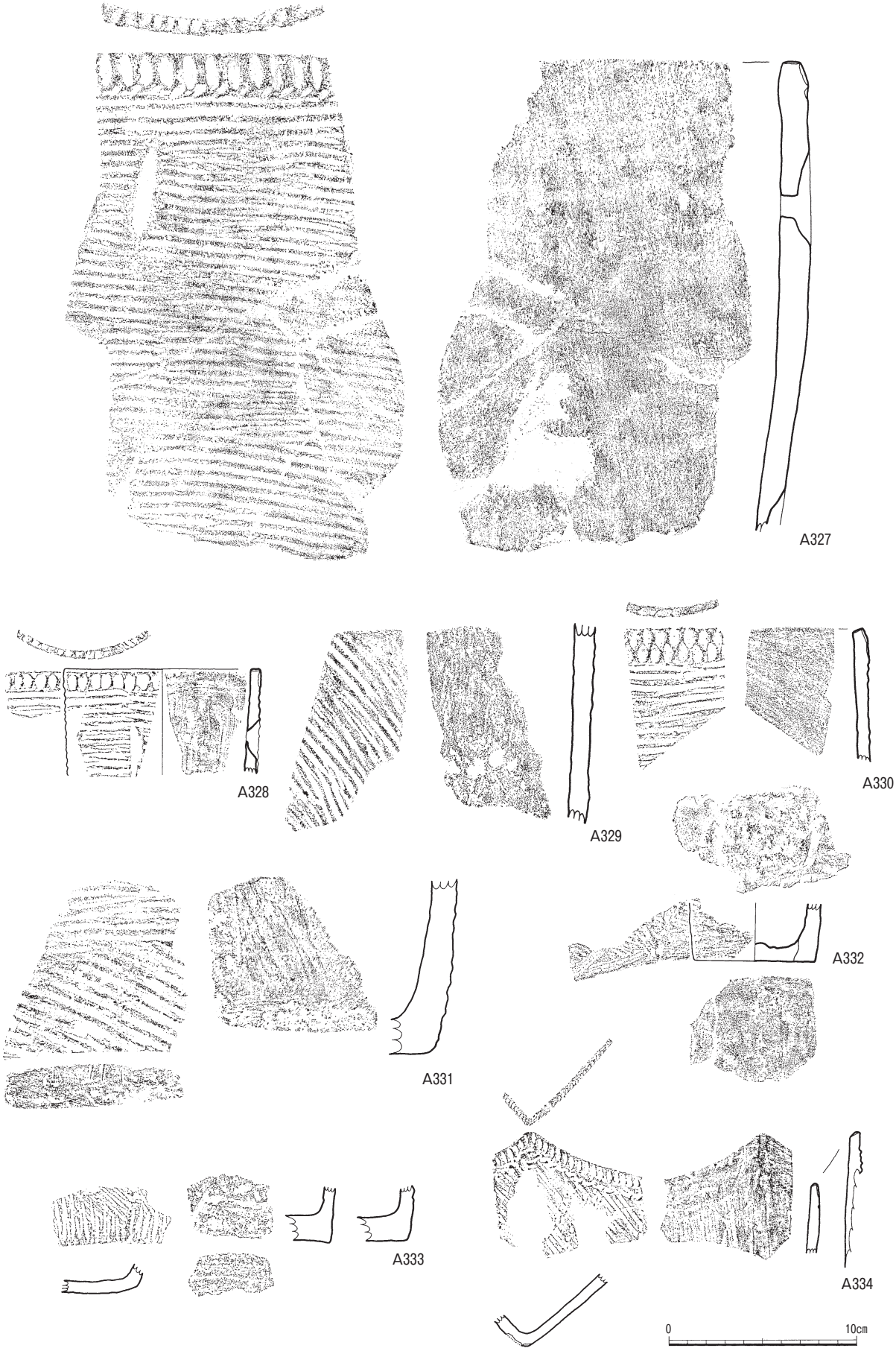
第105図　57号竪穴住居状遺構実測図



①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②淡茶褐色土層
③暗茶褐色粘質土層



第106図　58号竪穴住居状遺構実測図



第107図　竪穴住居状遺構内出土土器44

穴を掘ったものと考えられる。かつてブリッジ下の空洞（トンネル部）が存在したと想定される部分では，薩摩火山灰層の人頭大ブロックが検出されている。かつてのブリッジの一部と考えられる。出土遺物は６点（いずれも小片）であった。

62号竪穴住居状遺構（SH62：第110，111図） ―第１遺構集中区②―

検出状況　SH62はG6区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，近接する遺構との境界線がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北側でSH79と，東側でSK163，SK227，SK228が重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定長軸は3.25m，短軸が2.55mを測る。長短値は0.78であった。検出面からの深さは10～20cmで，東側の方が深かった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で6.94㎡，床面積で6.21㎡を測る。本遺跡の平均値より一回り大きいサイズである。柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物34点で，うち10点を図化した。A353は前平式土器の口縁部である。復元口径14.2cmを測る。無文でやや内傾する口唇部をもち，口縁部直下にはヘラ状工具による縦位の連続刺突文を巡らしている。ここまでは，ほぼ一般的な前平式土器であるが，A353の場合，口縁部直下の一部を肥厚させ，その部分だけ若干山形口縁状に作り上げている。この肥厚部は，４か所に配置されているものと考えられる。刺突文の直下には，横位の貝殻条痕文をやや深めに施し，さらに胴部は斜位の貝殻条痕文を組み合わせて文様効果を高める工夫をしている。A355～A360は外面に斜位の貝殻条痕文が施された胴部片である。前平式土器の可能性が高いが，後述するように，志風頭式土器も出土していることから，ここでは断定を避けたい。

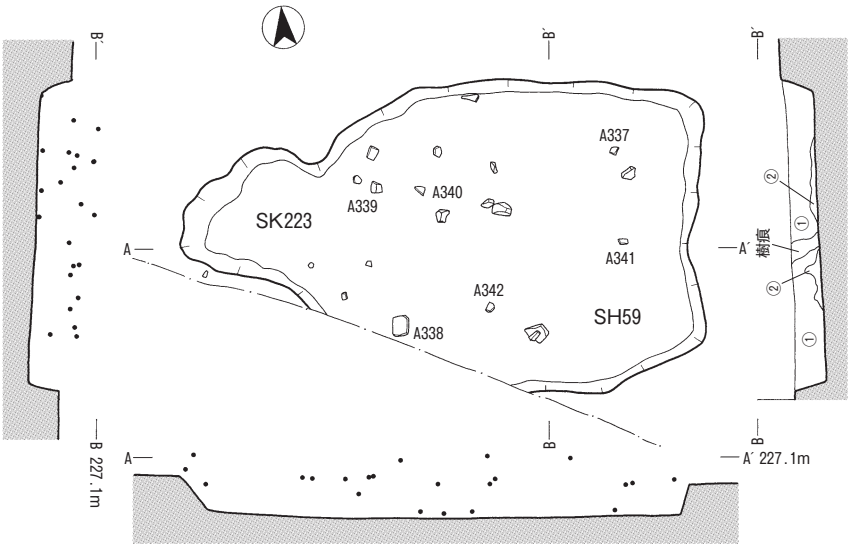
A362は志風頭式土器と考えられる口縁部片である。角筒土器の山形部分にあたる。A361とA363も角筒土器と考えられる胴部片である。A361は横位の貝殻条痕文の上に縦位の短沈線がみえる。A363は斜位の浅い貝殻条痕文である。

B41は安山岩製の石皿片である。現状では長さ12.80cm，幅14.75cm，厚さ6.50cm，重さ1784.00gを測る。扁平な表裏両面共に使用による摩滅痕が顕著である。２点の石片が接合した事例であるが，1点はSH66内からの出土であった。B44は花崗岩製の石皿片である。現状では長さ14.60cm，幅11.60cm，厚さ4.65cm，重さ882.00gを測る。やや凹部をもつ楕円形状の石皿である可能性が高い。

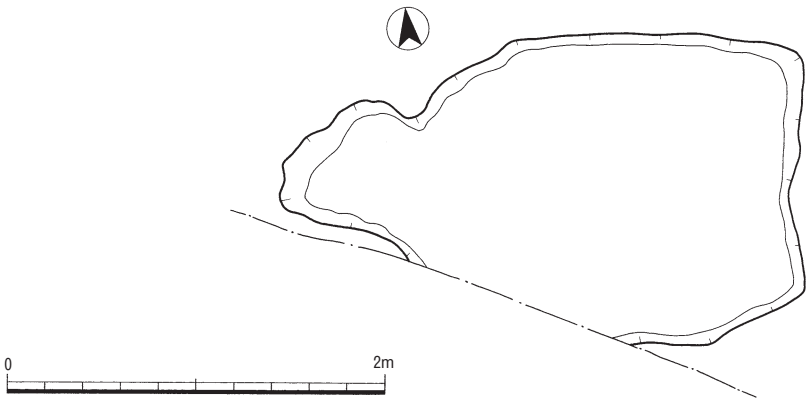
重複遺構　SH62と重複する遺構は，竪穴住居状遺構が１基，土坑が３基であった。ここでは土坑について取り上げる。

SK163はSH62の西側で検出された。想定される平面プランは楕円形状を呈すると考えられる。長軸が65＋αcm，短軸が70cmを測る。深さは20cm強であるが，一段下がるピット状落ち込み部分は30cmを越える深さがあった。検出部分の面積が0.35㎡であった。A599は埋土中から出土した遺物で，外面に斜位の貝殻条痕が施された胴部片である。

SK227はSH62の北側で検出された。平面プランが略隅丸長方形状を呈し，長軸が105＋αcm，短



①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②暗茶褐色粘質土層



第108図　59号竪穴住居状遺構実測図

軸が90㎝を測る。深さは約30㎝で，検出部分の面積は0.73㎡であった。出土遺物はなかった。

SK228はSH62の南西側で検出された。平面プランは隅丸長方形状を呈し，長軸120㎝，短軸45㎝を測る。床面は上下２段に分かれており，深さはそれぞれ，約15㎝，25㎝であった。出土遺物はなかった。

72号竪穴住居状遺構（SH72：第110，111図） ―第１遺構集中区③―

検出状況　SH72はF6区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，南側でSH75，西側でSH78と重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定長軸は2.85m，短軸が2.30mを測る。長短値は0.81であった。検出面からの深さは10～20㎝で，東側の方が深かった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で5.99㎡，床面積で5.07㎡を測る。本遺跡の平均値より若干大きいサイズである。柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物23点で，うち４点を図化した。A447～A449は前平式土器の胴部片である。外面はA447が横位，A448とA449が斜位の貝殻条痕を施している。A450は前平式土器の底部である。胴部外面には横位の貝殻条痕文が顕著である。

重複遺構　SH72と重複する遺構は，SH75とSH78の竪穴住居状遺構２基であった。それぞれの内容については，それぞれの項で取り上げる。

ところで，SH72の東南側の一部に，約30㎝ほどずれた外郭線および段がある。段は検出面とSH72床面のちょうど中間に位置し，約10㎝となっている。外郭線は重複するSH75の方へ延び，それによって切られたような状況になっている。もう一つの遺構の存在か，あるいはSH72関係の外郭線なのか（例えば拡幅による）については不明であるが，注意しておきたい部分である。

75号竪穴住居状遺構（SH75：第110，111図） ―第１遺構集中区④―

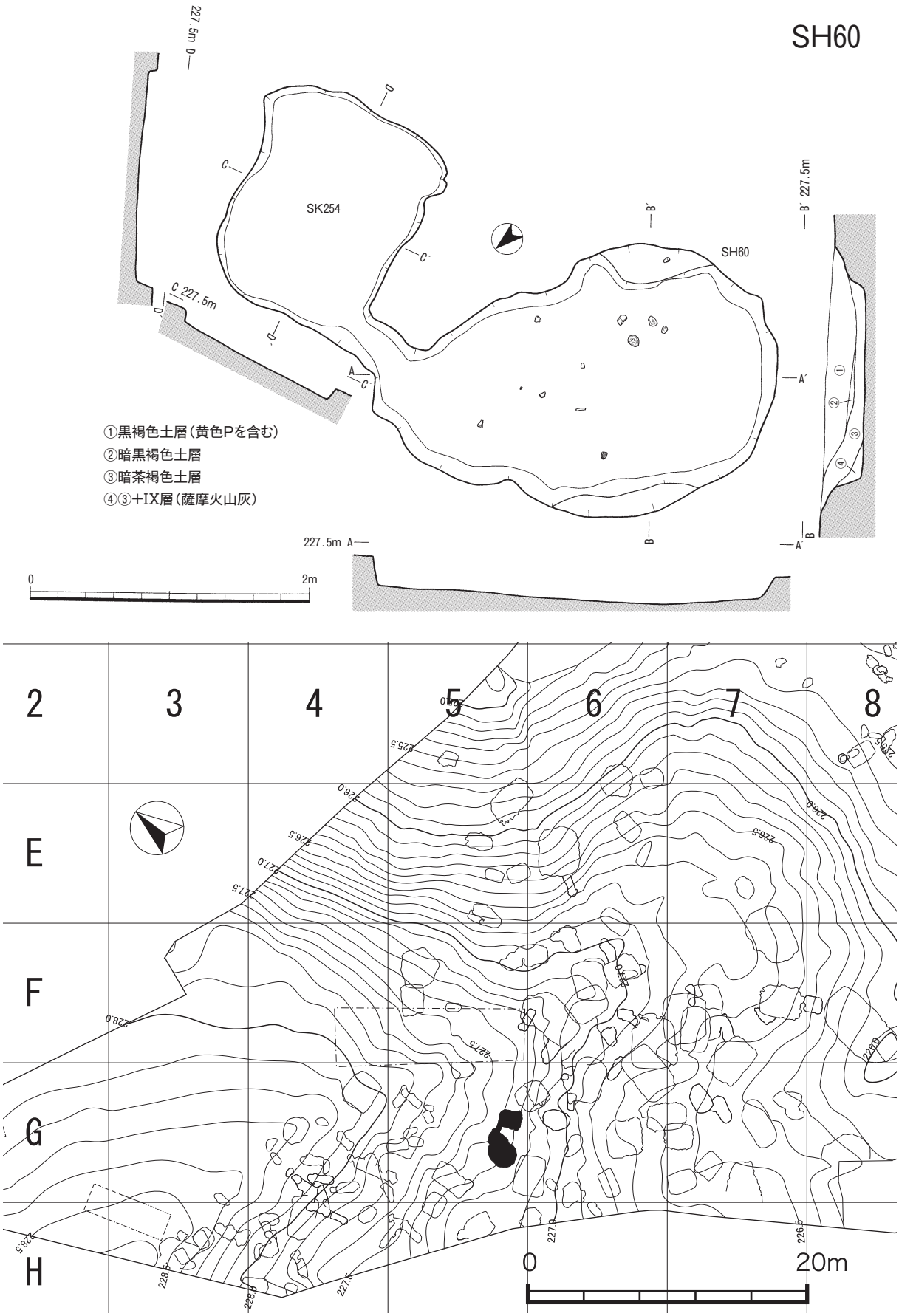
検出状況　SH75はF6区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北側でSH72，東側でSK224，南側でSK225と重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは略隅丸長方形と考えられる。推定長軸は2.50m，短軸が2.00mを測る。長短値は0.80であった。検出面からの深さは10㎝強で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で4.21㎡，床面積で3.82㎡を測る。遺構の南西隅では，長軸110㎝，短軸60㎝，深さ約15㎝のピットが検出された。その他，焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物９点で，うち３点を図化した。A468は前平式土器の口縁部片



第109図　60号竪穴住居状遺構実測図

第110図　第１遺構集中区実測図１

である。口唇部にはヘラ状工具による連続刺突文が施されている。口縁部直下にはヘラ状工具による斜位の連続刺突文が巡っている。胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。A469は前平式土器の胴部片で，斜位の貝殻条痕文が施されている。A470は径9.2cmの底部片である。底部外面は，滑石混入土器のような手触り感がある。

重複遺構　SH75と重複する遺構は，竪穴住居状遺構１基と土坑２基であった。ここでは土坑について取り上げる。

SK224はSH75の東側で検出された。想定される平面プランは隅丸長方形状を呈すると考えられる。長軸が175＋αcm，短軸が75cmを測り，深さは20cm弱である。埋土中には，拳大の薩摩火山灰層ブロックが含まれていた。検出部分の面積が1.17㎡であった。出土遺物はなかった。

SK225はSH75の南側で検出された。平面プランが隅丸長方形状を呈し，長軸が80＋αcm，短軸が50cmを測る。深さは約10cmで，検出部分の面積は0.27㎡であった。出土遺物はなかった。

78号竪穴住居状遺構（SH78：第110，111図）　―第１遺構集中区⑤―

検出状況　SH75はF6区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北側でSH61，東側でSH72，西側でSH79と重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは略隅丸長方形と考えられる。推定長軸は3.00m，短軸が2.20mを測る。長短値は0.73であった。検出面からの深さは15cm強で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

検出部分の面積は，検出面で5.88㎡，床面積で5.37㎡を測る。その他，焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物11点で，うち２点を図化した。A474は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A475は前平式土器の胴～底部片である。胴部外面には斜位および横位の貝殻条痕文が施されている。

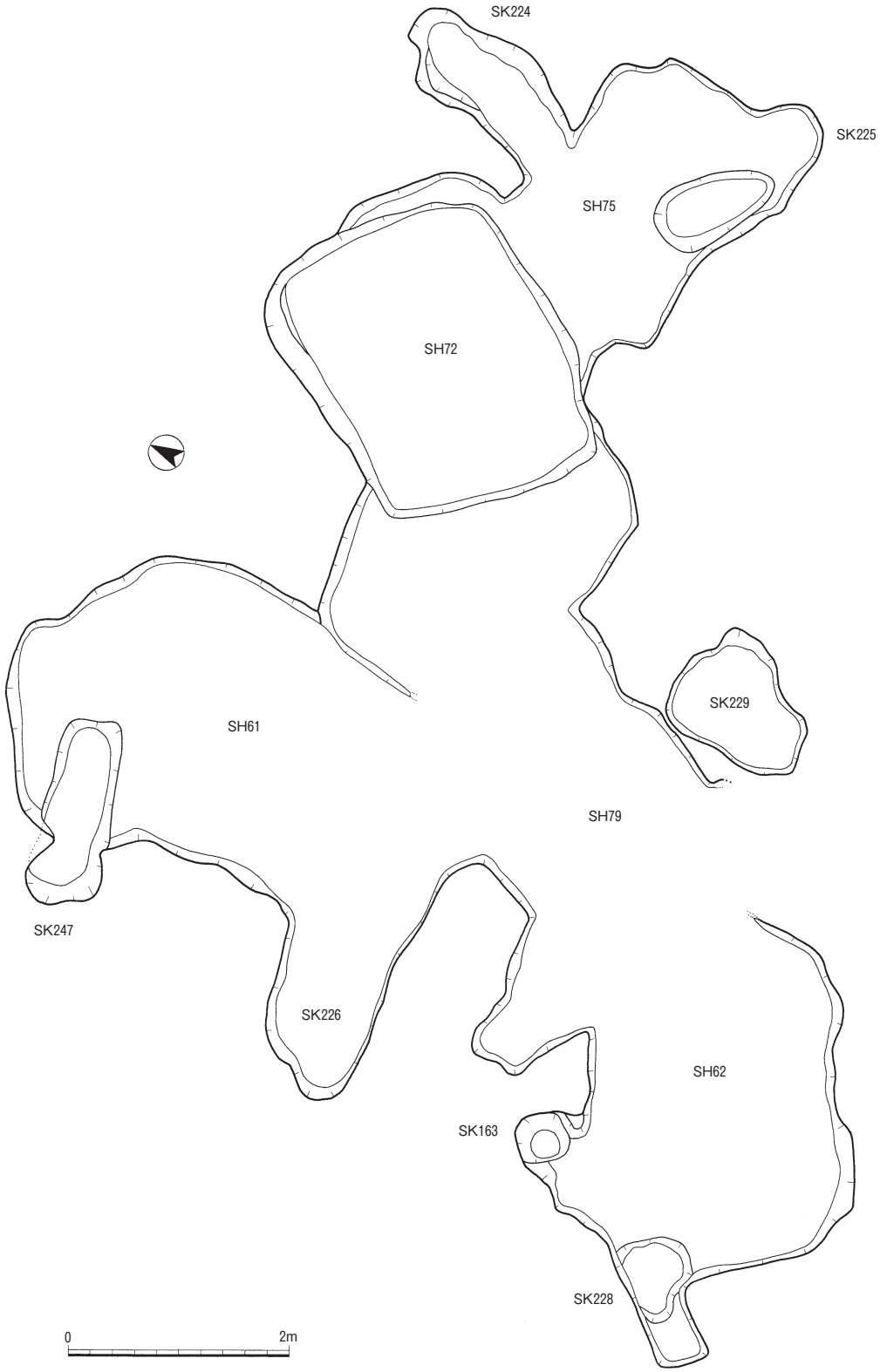
重複遺構　SH75と重複する遺構は，竪穴住居状遺構３基であった。それぞれの内容については，それぞれの項で取り上げる。

79号竪穴住居状遺構（SH79：第110，111図）　―第１遺構集中区⑥―

検出状況　SH75はF6区およびG6区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北側ではSH61・SH78，南西側ではSH62・SK227と重複していることが判明した。また，東側にはSK229が近接して検出された。

形状と規模　重複部分が多すぎて，推定の域が大きいが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定長軸は2.80m，短軸が2.10mを測る。長短値は0.75であった。検出面からの深さは約15cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

推定される面積は，検出面で5.06㎡，床面積で4.51㎡を測る。その他，焼土，炭化物の集中する



第111図　第１遺構集中区実測図２

ような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物15点で，うち１点を図化した。A476は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　SH79と重複する遺構は，竪穴住居状遺構３基と土坑１基（SK227）であった。また，近接する土坑が１基（SK229）検出された。竪穴住居状遺構の内容については，それぞれの項で取り上げる。また，SK227はSH62の項で既に取り上げているので，ここでは近接するSK229を紹介する。

SK229はSH79のすぐ東側で検出された土坑で，平面プランはやや不整形であるが，隅丸長方形をベースにしているものと考えられる。長軸が130㎝，短軸が105㎝を測る。深さは約20㎝で，検出面積は1.07㎡であった。遺物が１点出土している。

63号竪穴住居状遺構（SH63：第116図）

検出状況　SH63はG6区およびG7区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南側ではSH64が重複して検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を呈し，長軸は2.80m，短軸が1.95ｍを測り，長短値は0.70であった。検出面からの深さは約30㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

推定される面積は，検出面で4.85㎡，床面積で4.28㎡を測り，壁面傾斜値は0.88であった。その他，焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

埋土中からは，拳大から人頭大，あるいはそれらがさらに集まった薩摩火山灰層のブロックが検出された。図化したものは，薩摩火山灰層の硬い部分で，遺構の北側で検出されているが，南側でもいくつかの小形ブロックがみられた。

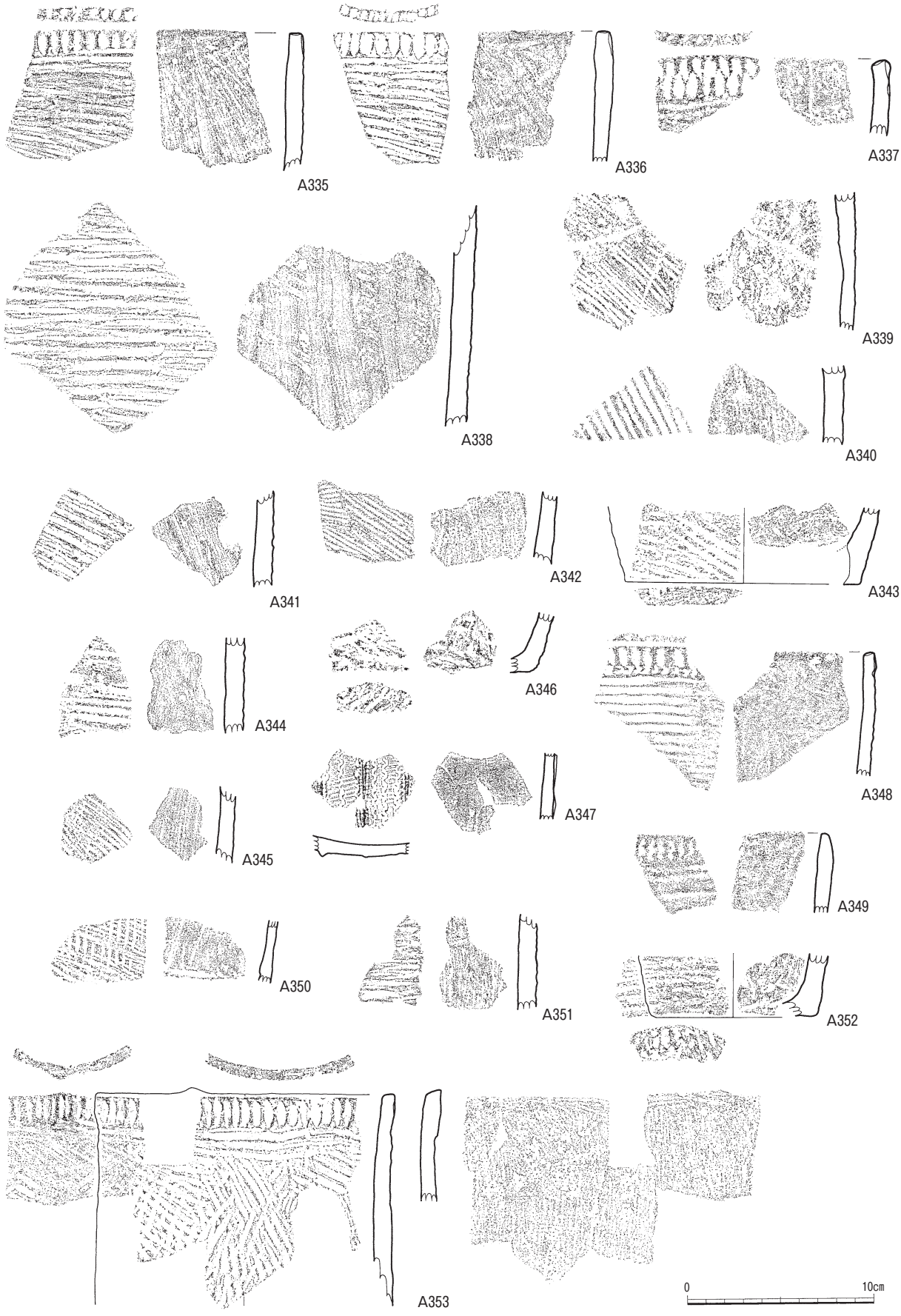
出土遺物　埋土中から出土した遺物16点で，うち８点を図化した。A354は吉田式土器の完形資料である。口径36.6㎝，底径23.7㎝，器高40.0㎝を測る吉田式土器の中でも最大級の土器である。口縁部下に爪形状の刺突文が４段施されていることが最大の特色である。胴部には押引文が顕著にみられる。包含層中を中心に，84個の土器片が接合した資料である。SH63のほかにSK165や44号集石遺構からも１個ずつ出土した。A364は前平式土器の口縁部片である。口唇部外面に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らしている。口唇頂部は鋭角な稜線をなす。A365～A369は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。B61は溝を有する（有溝）軽石加工品である。有溝の軽石加工品は，本遺跡で複数出土している。その用途について注目されるところである。

重複遺構　遺構の南側でSH64が重複して検出された。

64号竪穴住居状遺構（SH64：第116図）

検出状況　SH64はG6区およびG7区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南側ではSH63が重複して検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸方形を呈し，長軸は2.10m，短軸が1.85ｍを測り，長短値は0.88と



第112図　竪穴住居状遺構内出土土器45

正方形度が高かった。検出面からの深さは約30㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

推定される面積は，検出面で3.46㎡，床面積で3.12㎡を測り，壁面傾斜値は0.90であった。その他，焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。この埋土①と③の間に暗黒褐色土層（埋土①よりもさらに暗い）が薄く堆積していた部分もあった。

遺構の中央部分に，薩摩火山灰層の大きなブロックが検出された。ブロックは厚いもので30㎝もあり，ほぼ床面直上のものもある。本来，竪穴部は薩摩火山灰層が堆積していた部分である。そこに薩摩火山灰層があるということは，まず，それが一次なのか，あるいは二次なのかというポイントがある。当然そのことを考慮して調査を進めていくわけであるが，この場合，ブロックは薩摩火山灰層の中で最も硬い部分が中心となっており，薩摩火山灰層の自然堆積部分とは異なった堆積状況となっている。ブロックが床面直上にあっても，竪穴部の埋土に含まれているというのが実態である。つまり，二次的な入り込みということで理解した。このように，遺構の中央に薩摩火山灰層のブロックが入り込んでいる例は，これまでもSH23やSH36のようにいくつかの事例が存在する。注目される事象である。

出土遺物　埋土中から出土した遺物２点で，２点とも図化した。A370は前平式土器の底部片である。胴部外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。

B62は研磨による平坦面をもつ軽石加工品である。サイズは長さが6.65㎝，幅7.80㎝，厚さ2.75㎝，重さ40.18gであった。

重複遺構　遺構の北側でSH63が重複して検出された。

※第２遺構集中区（第117，118図）

F6，7区からG6，7区を中心にして，竪穴住居状遺構と土坑が複雑に重複しながら集中的に検出された。最終的には竪穴住居状遺構が８基，そして土坑が４基確認できた。この集中地区を「第２遺構集中区」と呼び，記録を進めていきたい。52号竪穴住居状遺構については既に述べたのでここでは除く。

65号竪穴住居状遺構（SH65：第117，118図）　―第２遺構集中区①―

検出状況　SH65はF6，7区とG6，7区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，近接するSH66との境界線がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，東側でSH66，北西隅でSK231が重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定長軸は3.90m，短軸が2.55mを測る。長短値は0.65で長方形度が高かった。検出面からの深さは約25～40㎝であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

推定面積は，検出面で9.42㎡，床面積で8.20㎡を測る。本遺跡検出の竪穴住居状遺構の中では大形のグループに入る。柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物24点で，うち10点を図化した。A371と A372は前平式土器の口縁部片である。いずれも口縁部下にヘラ状工具による２段の連続刺突文を巡らしたもので，胴部には口縁部文様直下は横位，下位に行くと斜位の貝殻条痕文が施されている。A373～A375は前平式土器の胴部片である。外面には横位（A374），斜位（A373と A375）の貝殻条痕文が施されている。A374には補修孔がみられる。A376と A377は前平式土器の底部片である。A377の外面には底部付近が横位，胴部が斜位の貝殻条痕文が施されている。底面にも貝殻条痕が見られる。A376の底部付近の外面には，ごく浅い貝殻条痕文が横位に施されている。

B37と B38は安山岩製の磨石である。B38は包含層中の遺物と接合し，ほぼ完全な形を保っている。サイズは長さ9.85cm，幅7.30cm，厚さ3.15cm，重さ323.00g を測る。楕円形状の扁平な円礫を用いている。B37は一部欠損するが厚手の磨石である。長さ7.75cm，幅8.50cm，厚さ6.65cm，重さ625.00g を測る。

B64は軽石製の加工品である。長さ9.20cm，幅5.00cm，厚さ2.80cm，重さ38.7g を測る。断面長方形の四角柱状を呈し，表裏及び側面は研磨によりフラットである。一部，断面形が鋭角になり刃部状の仕上げを行っている面もある。全体的に磨製石斧を模したような形状である。

重複遺構　SH65と重複する遺構は，竪穴住居状遺構１基（SH66），土坑１基（SK231）であった。ここでは SK231について取り上げる。

SK231は SH65の北西隅で検出された。想定される平面プランは隅丸長方形状を呈すると考えられる。長軸が190＋αcm，短軸が70cmを測る。深さは約35cmで，検出部分の面積が1.10㎡であった。出土遺物は４点で，いずれも図化できなかった。

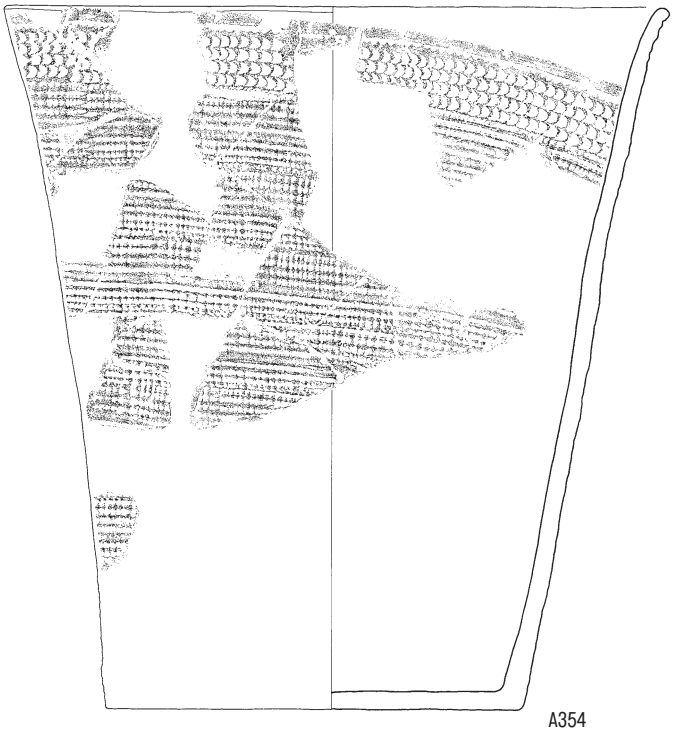
66号竪穴住居状遺構（SH66：第117，118図）　―第２遺構集中区②―

検出状況　SH66は F6，7区と G6，7区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，近接する SH65との境界線がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，西側で SH65，東側で SH97が重複していることが判明した。

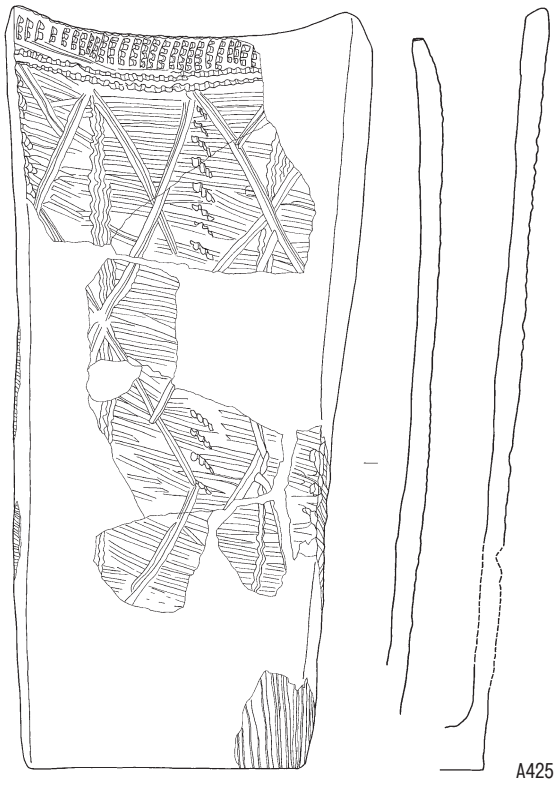
形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定長軸は3.90m，短軸が3.10mを測る。長短値は0.79であった。検出面からの深さは約30～40cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

推定面積は，検出面で10.77㎡，床面積で9.78㎡を測る。本遺跡検出の竪穴住居状遺構の中では大形のグループに入る。柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかったが，遺構の外郭線に変化点が２か所あるので触れておきたい。いずれも隅丸長方形の短辺部にあたる。一つは北側の短辺部分で，長軸約100cm，短軸約40cmの楕円形状を呈する突出部が存在する。土坑としての取り扱いはしなかったが，SH66に伴うものなのかどうかについては不明瞭である。また，もう一つの短辺，遺構の南側には，幅40cmほどの張り出し部分がある。床面からは15cm程の段差があるが，段そのものはフラットではなく，検出面まで緩やかに傾斜している。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。



H	G	F	E	D	C	B
						4
						5
						6
						7
						8
						9
						10
						11
						12
						13
						14
						15



G	F	E	D
			6
			7
			8
			9
			10

第113図　縄文土器出土状況図９

出土遺物　埋土中から出土した遺物51点で，うち４点を図化した。A378～A380は前平式土器の口縁部片である。A380は口唇端部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を巡らすものである。口唇部はフラットで無文である。胴部外面には横位の貝殻条痕文が見られる。A378はフラットな口唇部に，ヘラ状工具による連続刻目文が施されている。口縁部直下には，まずヘラ状工具による縦位の連続刺突文が，さらにその下には貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文がそれぞれ巡っている。胴部外面には横位の貝殻条痕文が施されている。A379は口縁部直下にヘラ状工具による２段連続刺突文が施されている。口唇部はやや舌状を呈する。A381～A392は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。

A395～A397は加栗山式土器（角筒形）の胴部片である。外面には，浅い斜位の貝殻条痕文を地文に，貝殻腹縁部による縦位および斜位の刺突文を重ねて文様を構成している。角部にはヘラ状工具による細かな刻目文が連続して施されている。A393と A394は加栗山式土器（角筒形）の底部片である。A393の外面には縦位の条痕が施されている。

B63は軽石製の加工品である。長さ10.80cm，幅7.20cm，厚さ2.90cm，重さ43.13g を測る。ややカーブする研磨面をもつ。

重複遺構　SH66と重複する遺構は，SH65と SH97の竪穴住居状遺構２基であった。これらについてはそれぞれの項で取り上げる。重複はしていないが，遺構の北側で隣接する SK230が検出されたので，紹介しておきたい。

SK230は SH66の北側で隣接して検出された。平面プランはおおむね楕円形状を呈する。長軸が170cm，短軸が85cmを測る。深さは約30cmで，検出部分の面積が1.07㎡であった。出土遺物は３点で，いずれもを図化できなかった。

71号竪穴住居状遺構（SH71：第117，118図）　―第２遺構集中区③―

検出状況　SH66は F7区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北側で SH80と SH97，東側で SH82が重複していることが判明した。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形で，長軸は3.30m，短軸が2.10mを測る。長短値は0.64と長方形度が比較的高かった。検出面からの深さは約40cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

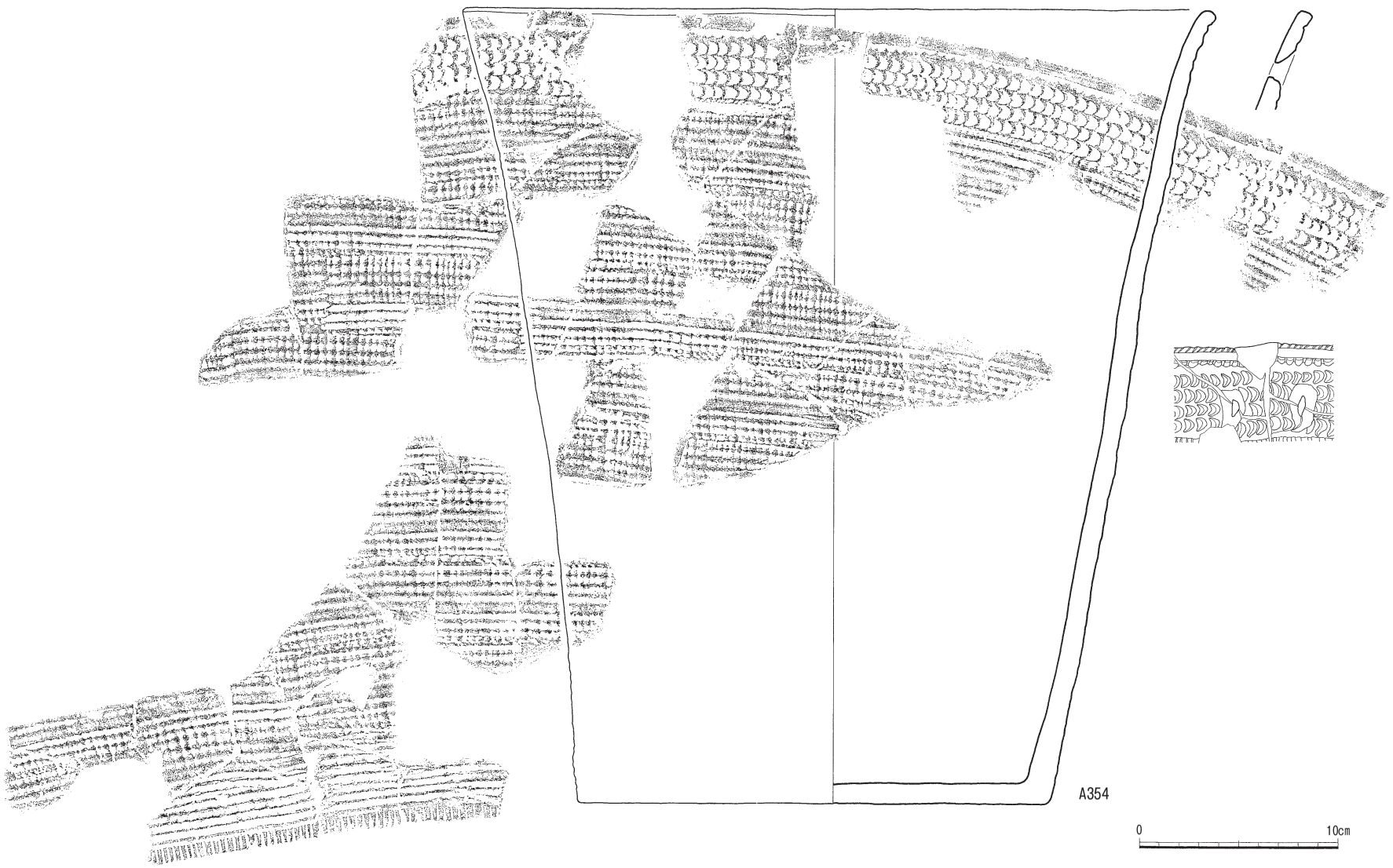
面積は，検出面で6.13㎡，床面積で5.23㎡と，本遺跡の平均値をやや上回る数値となっている。柱穴状のピットや焼土あるいは炭化物が集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

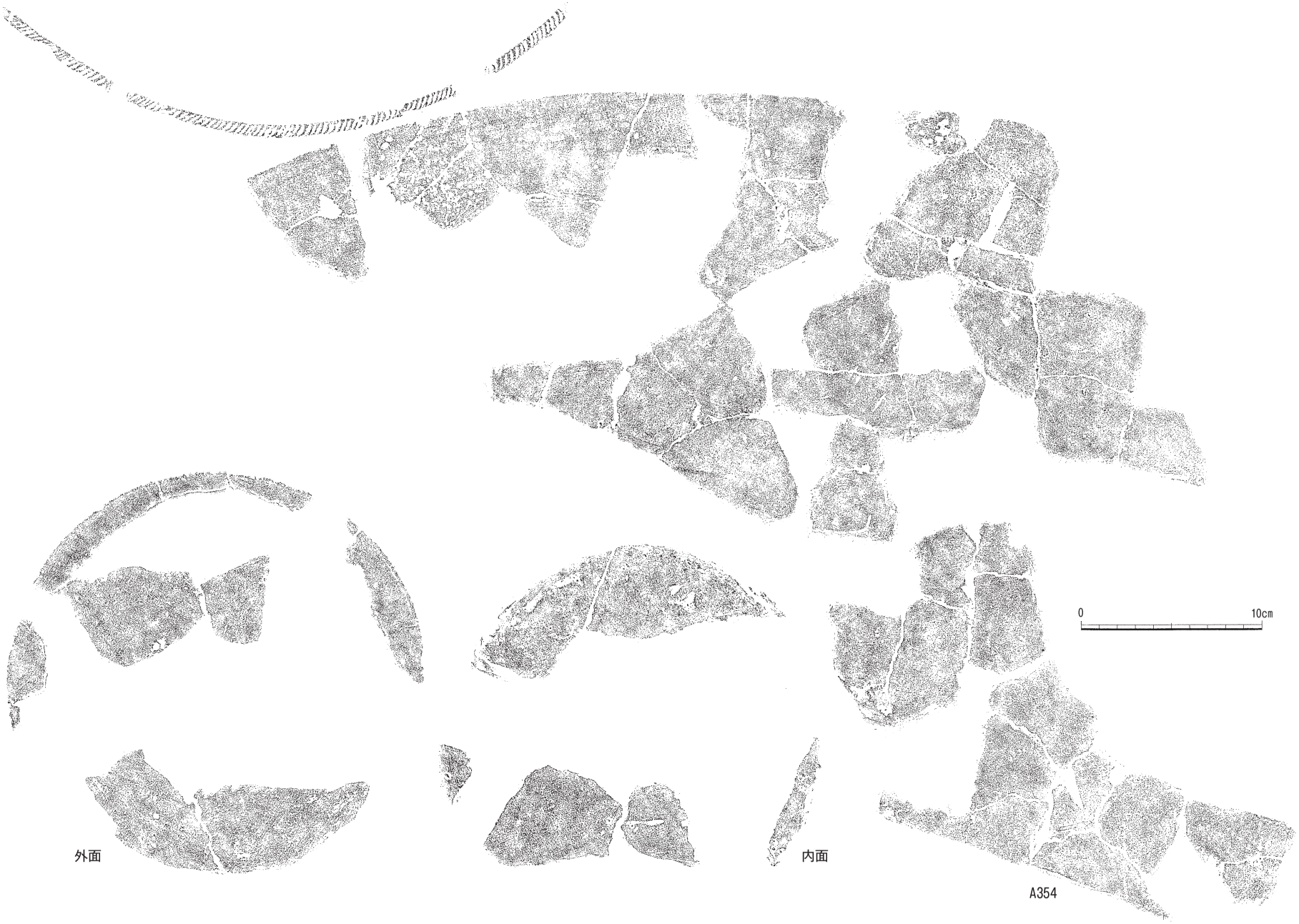
出土遺物　埋土中から出土した遺物は16点で，うち６点を図化した。A445は前平式土器の胴部片である。斜位の貝殻刺突文が明瞭である。A446は外面に貝殻条痕文と貝殻腹縁部による刺突文らしき文様が見られる胴部片である。前平式土器の最終末か志風頭式土器の段階と考えられる。

B65は軽石製の加工品である。長さ9.10cm，幅5.60cm，厚さ3.00cm，重さ25.86cmを測る。パソコンのマウス状を呈し，底面は研磨により平坦面を形成している。

重複遺構　SH71と重複する遺構は，SH80と SH82，SH97の竪穴住居状遺構３基であった。これら

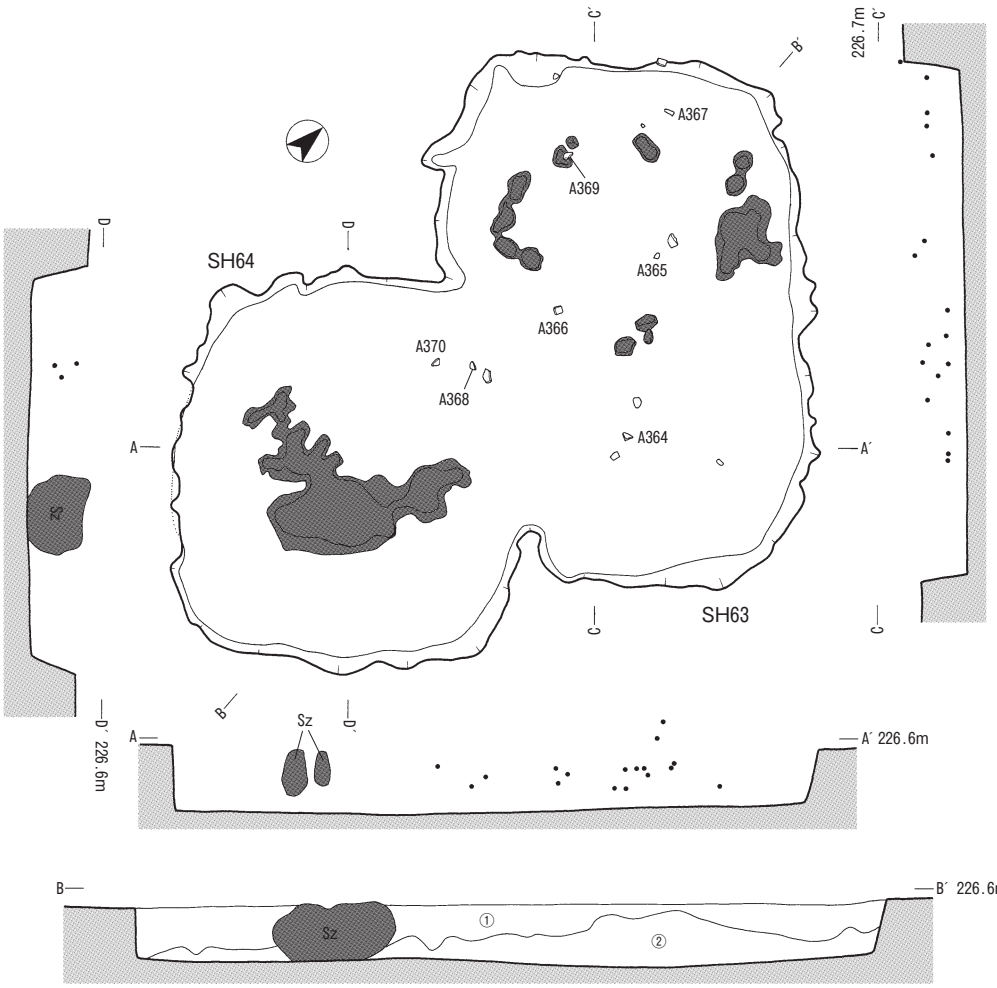


第114図　竪穴住居状遺構内出土土器46



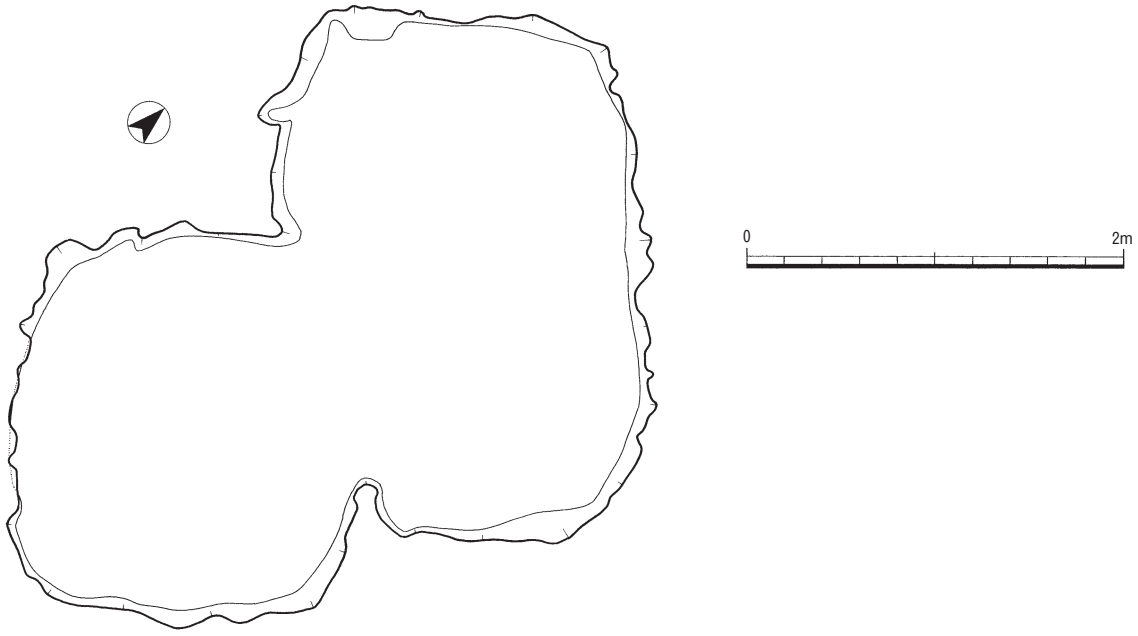
第115図　竪穴住居状遺構内出土土器47

SH63
SH64



①黒褐色土層（黄色Pを含む）
②暗茶褐色粘質土層

※遺構内のアミカケは薩摩火山灰



第116図　63号，64号竪穴住居状遺構実測図

についてはそれぞれの項で取り上げる。

80号竪穴住居状遺構（SH80：第117，118図） ―第２遺構集中区④―

検出状況　SH80はF6区とF7区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北西側でSH66やSH97，南側でSH71，SH81，SH82，東側でSK161が重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。推定長軸は3.60m，短軸が3.05mを測る。長短値は0.85であった。検出面からの深さは約30cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

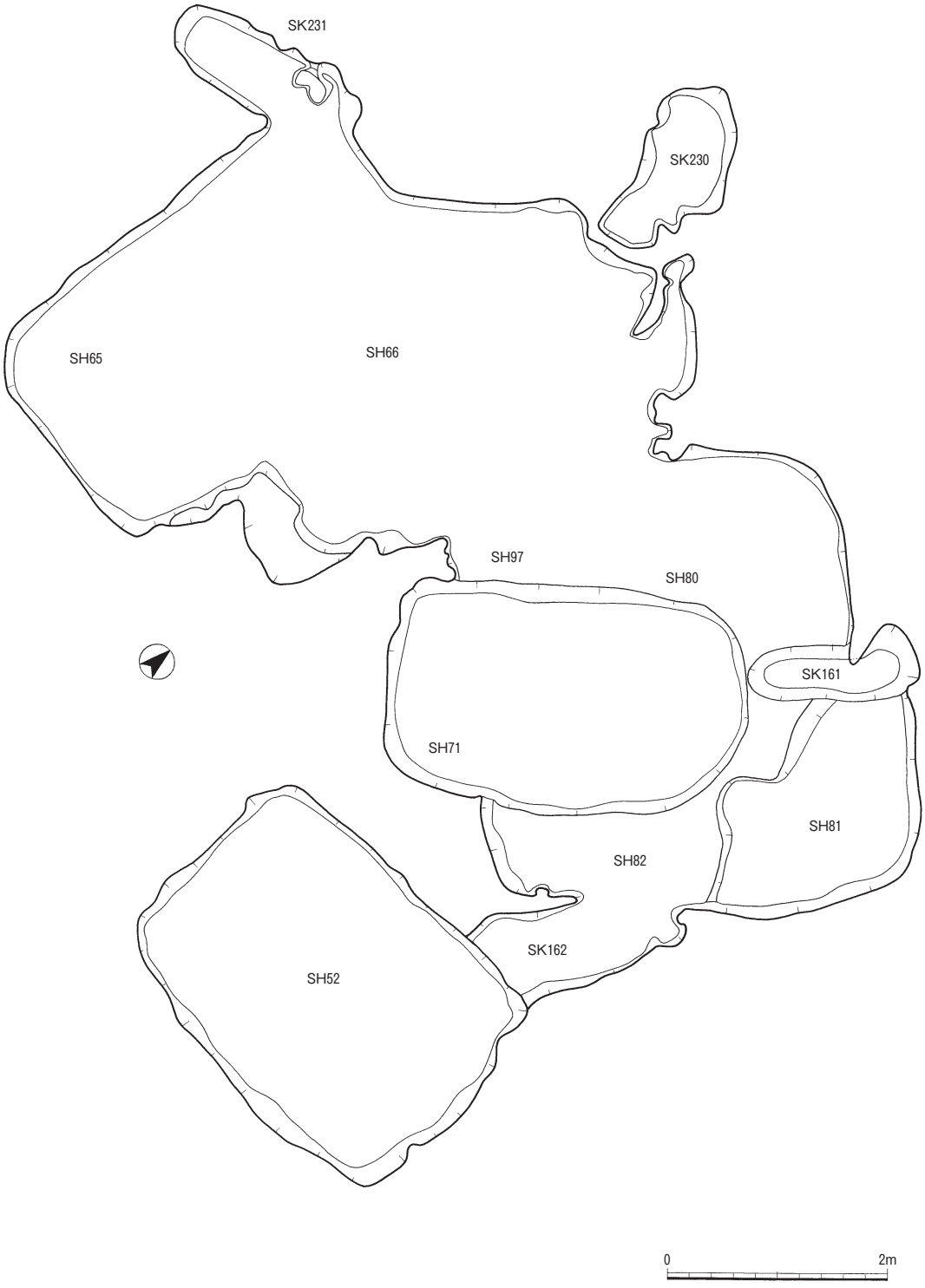
推定面積は，検出面で10.06㎡，床面積で9.33㎡を測る。本遺跡検出の竪穴住居状遺構の中では大形のグループに入る。柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物73点で，うち22点を図化した。A423，A425はいずれも完形資料である。A423は前平式土器の完形品である。口径13.0cm，底径9.8cm，器高22.0cmを測る。フラットな口唇部には，ヘラ状工具による連続刻目文が施されている。口縁部直下には，ヘラ状工具による上下二段の刺突がみられる。文様は「く」字状を呈している。胴部は横位の貝殻条痕文が施されている。縦位の条痕文が施され，微妙な深さで痕跡を残している部分もある。底面は細かな条線が見られ，平滑に仕上げている。A425は志風頭式土器の角筒土器である。ほぼ完形に復元できた資料である。方形を呈する口縁部と底部の一辺は，それぞれ約13.0cm，約10.0cmを測る。推定器高は最頂部で28.2cmであった。口縁部下にまず貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を巡らし，その下位に横位２段の貝殻刺突文を施している。胴部は横位の貝殻条痕文を基調としながら，直線文や波状文，貝殻刺突文などを組み合わせて文様を施している。また，底部からの立ち上がり部分には縦位の条痕がみられる。A480は前平式土器の口縁～胴部である。口唇部はフラットで文様はない。口縁部直下にヘラ状工具による上下二段の刺突文がみられる。胴部は横位の貝殻条痕文が施されている。A477～A479，A481は前平式土器の口縁部である。A479は無文でフラットな口唇部をもち，口縁部直下に上下二段のヘラ状工具による斜位の刺突文がみられる。胴部は横位の貝殻条痕文である。若干口縁部が波状になるかも知れない気配もある。A478は口唇部に連続した刻目文をもち，口縁部直下上下二段ないし三段の連続刺突文が施されている。刺突文は比較的先端が鋭利な施文具で行ったものと考えられる。A479とA481も前平式土器の口縁部である。いずれも無文でフラットな口唇部を持つ。A477は口唇端部外面に貝殻刺突文を，A478は口縁端部にヘラ状工具による縦位の刺突文を施している。胴部は横位の条痕文である。A482～A491は前平式土器の胴部片である。斜位および横位の貝殻条痕文が施されている。A492～A495は前平式土器の底部片と考えられるものである。A494は推定底径が8.2cm，と小形の土器である。胴部に横位の貝殻条痕文が施されている。A492とA493は胴部および底面に貝殻条痕文が施されている。A493の条痕文は浅くて細い。A495はいわゆる「レモン形」土器の底部片である。底面は平滑でスベスベしている。

重複遺構　SH80と重複する遺構は，SH66，SH71，SH81，SH82，SH97の竪穴住居状遺構５基と，

第117図　第２遺構集中区実測図１



第118図　第２遺構集中区実測図２

SK161の土坑１基であった。ここでは土坑について取り上げる。

SK161はSH80の北側で重複して検出された。平面プランは隅丸長方形状を呈する。長軸が155㎝，短軸が50㎝と細長い土坑である。深さは約45～55㎝で，検出部分の面積が0.73㎡であった。

土坑はSH80から少し飛び出すような形で検出されているが，SH80の壁面と重なる部分には，壁面の名残の飛び出しがみられる。このことから，SK161はSH80の壁面を利用してブリッジを作るタイプの連穴土坑であった可能性が高いと考えられる。

出土遺物は１点のみで摩耗が激しく図化できなかった。

81号竪穴住居状遺構（SH81：第117，118図）　―第２遺構集中区⑤―

検出状況　SH81はF7区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，遺構の西側全体でSH71，SH80，SH82，SK161が重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が極めて多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸長方形と考えられる。残存部分は，長軸は1.80m，短軸も同じく1.80mを測る。検出面からの深さは約15㎝であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

現状の面積は，検出面で2.67㎡，床面積で2.34㎡を測る。重複するSH82と遺構のアウトラインが重なっていることから，本来，一つの遺構である可能性やSH82の拡幅である可能性もある。もし一つの遺構であったとすると，推定面積が９㎡程となり，本遺跡検出の竪穴住居状遺構の中では大形のグループに入ることになる。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

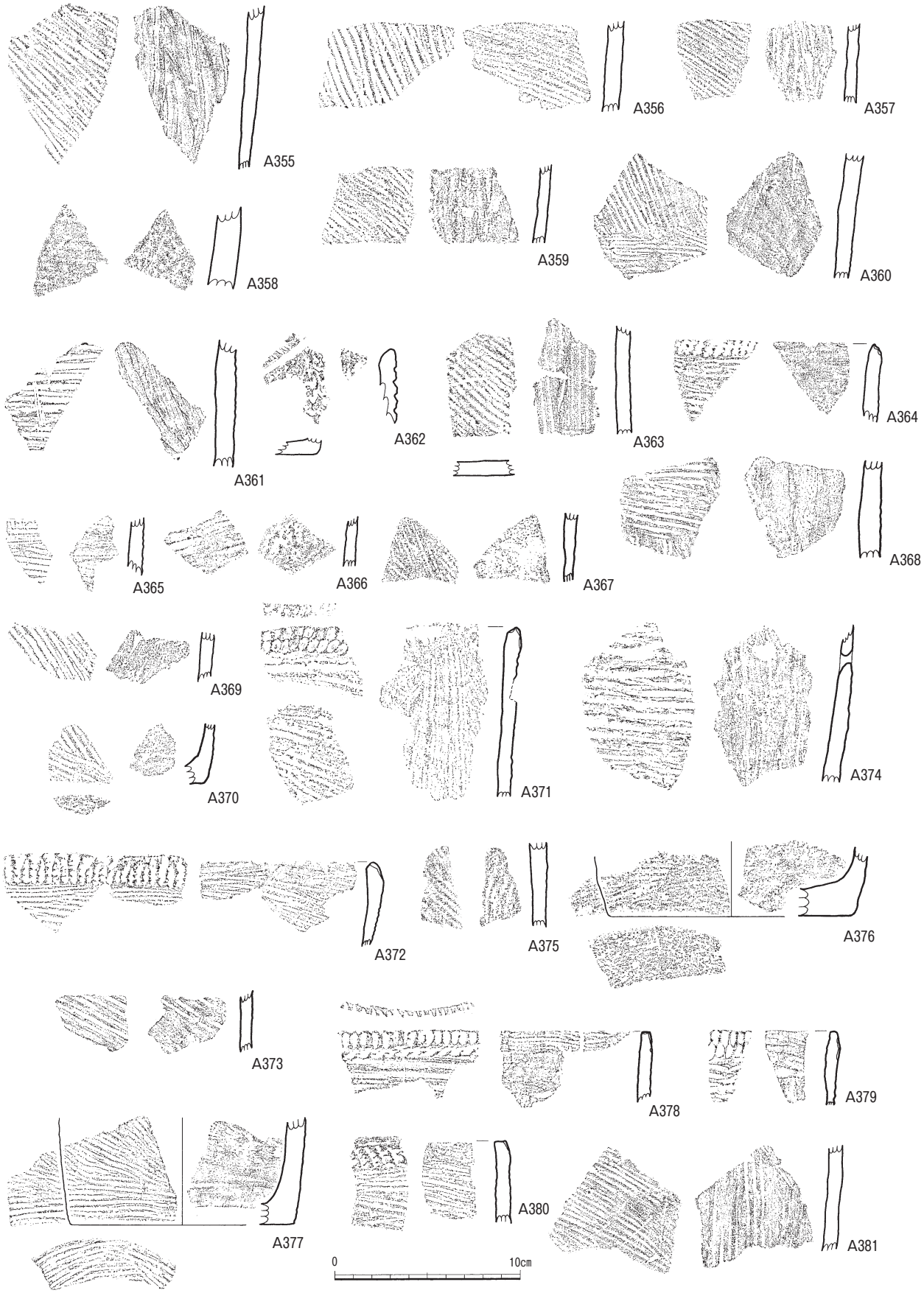
出土遺物　埋土中から出土した遺物９点で，うち３点を図化した。A424は前平式土器の完形品である。口径12.4㎝，底径7.4㎝，器高15.5㎝を測る。口唇端部外面には先端の鋭利なヘラ状工具による斜位の連続刺突文が施されている。口唇部はわずかにフラット面を残し，やや内傾する。口縁部下には横位の，胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。A496は前平式土器の胴部片である。内外面に斜位の貝殻条痕文を施している。

B5は頁岩製の石斧の基部である。現状では長さ7.00㎝，幅4.80㎝，厚さ2.80㎝，重さ110.00gを測る。

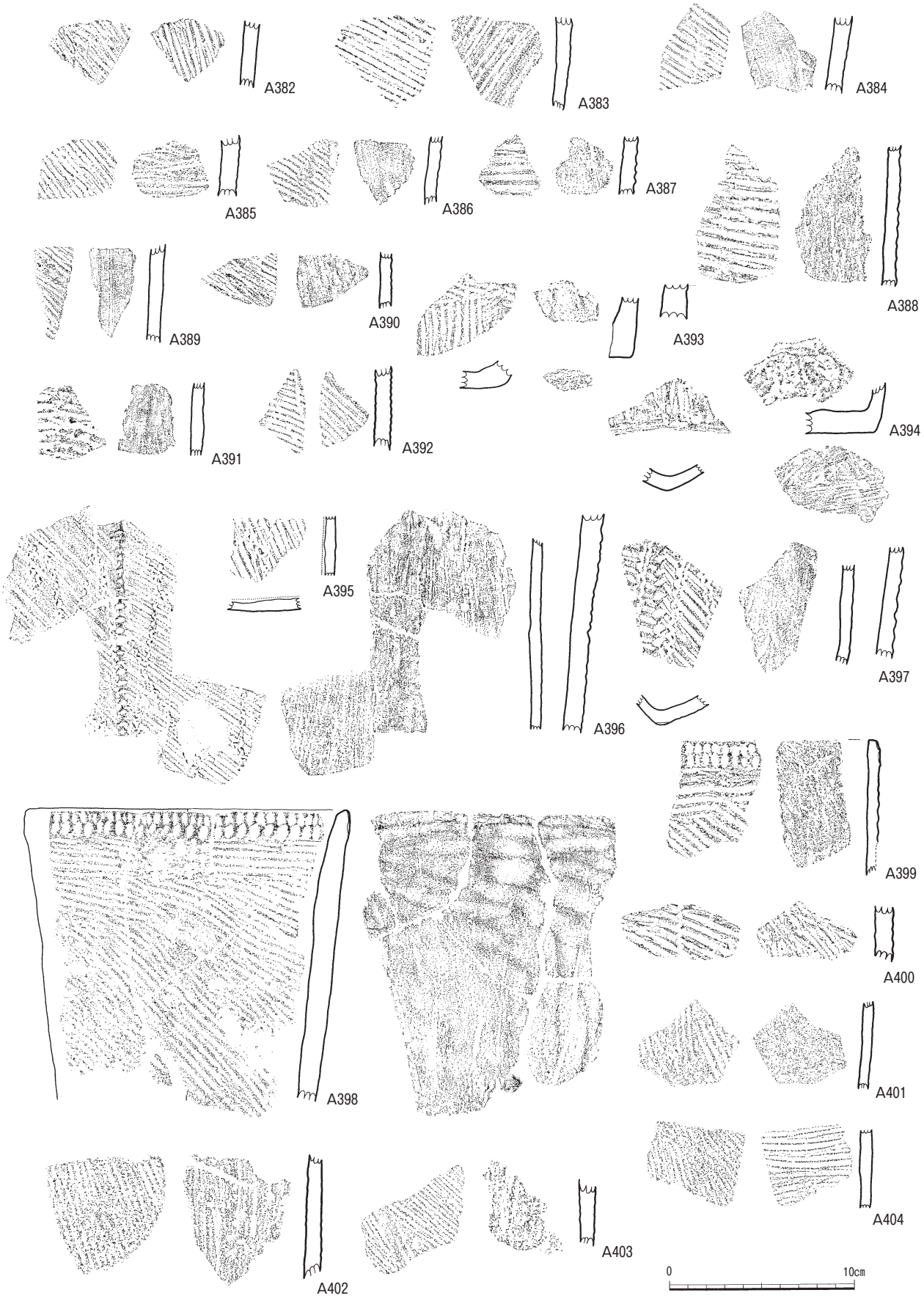
重複遺構　SH81と重複する遺構は，SH71，SH80，SH82の竪穴住居状遺構３基と，SK161の土坑１基であった。竪穴住居状遺構３基についてはそれぞれの項で，SK161は前項（SH80の項）で取り上げた。SH82との関係における，いくつかの可能性については前述の通りである。

82号竪穴住居状遺構（SH82：第117，118図）　―第２遺構集中区⑥―

検出状況　SH82はF7区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北側でSH71，SH80，SH81，南側でSK162が重複していることが判明した。



第119図　竪穴住居状遺構内出土土器48



第120図　竪穴住居状遺構内出土土器49

形状と規模　重複部分が極めて多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸方形と考えられる。現存部分は，長軸が2.25m，短軸が1.10mを測る。検出面からの深さは25cm強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

現状の面積は，検出面で1.81㎡，床面積で1.53㎡を測る。重複するSH82と遺構のアウトラインが重なっていることから，本来，一つの遺構である可能性やSH82の拡幅である可能性もあることは前項で述べた通りである。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミス含む黒褐色土層を種としながら，下位にはきやや粘質の暗茶褐色土が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物５点で，うち１点を図化した。A497は前平式土器の口縁部片である。口唇部はフラットで無文である。口縁部直下には縦位の貝殻刺突文を巡らしている。さらにその直下には横位の貝殻条痕文，そして胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　SH82と重複する遺構は，SH71，SH80，SH81の竪穴住居状遺構３基と，SK162の土坑１基であった。ここでは土坑について取り上げる。

SK162はSH82の南側で重複して検出された。また，さらに南側ではSH52と重複している。推定される平面プランは隅丸長方形（両端を欠く）である。現存部分は，長軸が145＋αcm，短軸が80cmと細長い土坑である。深さは20cm弱で，検出部分の面積が1.15㎡であった。

97号竪穴住居状遺構（SH97：第117，118図）　―第２遺構集中区⑦―

検出状況　SH97はF7区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。検出作業の当初は，重複する遺構との関係がなかなかつかめず，土層観察ベルトを多く残しながら掘り下げを行った。その結果，北側でSH80，SK273，西側でSK66，南側でSH71が重複していることが判明した。

形状と規模　重複部分が極めて多いので，推定の域を出ないが，平面プランは隅丸方形と考えられる。現存部分は，長軸が320m，短軸が190mを測る。検出面からの深さは30強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

現状の面積は，床面積で2.69㎡を測る。柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

出土遺物　埋土中から出土した遺物13点で，うち４点を図化した。A517は前平式土器の口縁部片である。口唇部はフラットで，ヘラ状工具によるきわめて浅い押圧文がみられる。口縁部直下には上下二段の押圧文が施され，胴部は横位の貝殻条痕文がみられる。若干ではあるが，口縁部が波状を呈する可能性がある。A516は外面に斜位の貝殻条痕文が施された前平式土器の胴部片である。

B47は石皿の完形品である。石榴石を用いたもので，長さ37.5cm，幅27.7cm，厚さ7.8cm，重さ約10kgを測る。大きく凹む面と径２～３cm程度の円形の凹みを12個もつ面からなる。この石皿とほぼ密着して出土したのがB70の軽石製品である。研磨による平坦面の反対側には，底に微細な穴のある幅１cm弱の筋状の落ち込みがみられる。この２者の完形については不明である。

重複遺構　SH97と重複する遺構は，SH66，SH71，SH80の竪穴住居状遺構３基と，SK273の土坑

１基であった。ここでは土坑について取り上げる。

SK273はSH97の北側で重複して検出された。推定される平面プランは略楕円形である。現存部分は，長軸が120㎝，短軸が40㎝と細長い土坑である。深さは30㎝弱で，検出部分の面積が0.48㎡であった。

67号竪穴住居状遺構（SH67：第121，122図）

検出状況　SH67はE6区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南側ではSK218が重複して検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を呈し，長軸は3.50m，短軸が3.00mを測り，長短値は0.86であった。検出面からの深さは約30㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達している。

推定される面積は，検出面で9.14㎡，床面積で8.49㎡を測り，壁面傾斜値は0.93と高かった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

埋土中からは，拳大から人頭大，あるいはそれらがさらに集まった薩摩火山灰層のブロックが検出された。図化したものは，薩摩火山灰層の硬い部分で，遺構の北側で検出されているが，南側でもいくつかの小形ブロックがみられた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物39点で，うち16点を図化した。A398とA399は前平式土器の口縁部部片である。A398は舌状の口縁部をもち，口縁部直下にヘラ状工具による上下二段の刺突文を施しているものである。文様直下は横位の貝殻条痕文であるが，胴部は斜位の貝殻条痕文で覆われている。内面には口縁部下は横位，胴部は縦位のヘラケズリの痕跡が顕著に残る。全体的に風化が激しくザラザラしている外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A399もA398と同様な前平式土器の口縁部片であるが，A398よりもサイズが小さくなると考えられる。A400～A411は前平式土器の胴部片である。胴部外面には主として貝殻条痕文が施されている。A410とA411は胴部片であるが，外面に文様は見られない。もともと無文なのか，風化によるものかは不明である。A412は前平式土器の底部片である。底径12.2㎝を測る。A413は外面に押引文が施された胴部片である。吉田式土器と考えられる。円形に近い形状から，円盤状土製加工品（メンコ）の可能性もある。

重複遺構　遺構の南側でSK218が重複して検出された。SK218はSH67から南側へ細長く延びた土坑で，現状のサイズは，長軸160㎝，短軸55㎝，深さ30～40㎝を測る。SH67から約１m延びたところで，平面形は円形のふくらみをもつ。その境目付近の埋土中にに薩摩火山灰層の大形ブロックがあることから，本来はブリッジが存在していたものと想定される。つまり，SK218はブリッジ（トンネル部）こそないものの，いわゆる連穴土坑のタイプであると考えられる。この場合，当初はSH67の壁面を利用していたとも考えられ，ブリッジの崩壊が繰り返された可能性が考えられる。ただし，土坑のアウトラインは，SH67からほぼ均一幅で延びている。トンネル部をSH67から離す必要があった可能性も一考する必要があるかも知れない。

68号竪穴住居状遺構（SH68：第123図）

検出状況　SH68はE5区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を呈し，長軸は3.30m，短軸が2.05mを測り，長短値は0.62で長方形度が高かった。検出面からの深さは約35cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

面積は，検出面で5.85㎡，床面積で5.25㎡を測り，壁面傾斜値は0.90と高かった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色や白色のパミスを少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に淡茶褐色土層（埋土②）が堆積していた。

埋土中からは，拳大の薩摩火山灰層のブロックが数か所で検出された。

出土遺物　埋土中から出土した遺物11点で，うち４点を図化した。A414～A416は前平式土器の胴部小片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A417は前平式土器の胴部の内外面および底部外面それぞれに貝殻条痕文が見られる。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。ただし，遺構の北側において，図化できないほどわずかな段差で，遺構埋土と同じ黒褐色土（埋土①）の広がりが観察された。重複する遺構とまではいかないが，SH68自体の広がりとしてとらえられる可能性もあり，同様に上段を有する遺構とともに注意しておきたい。

69号竪穴住居状遺構（SH69：第124図）

検出状況　SH69はD6区およびE6区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは円形に近い隅丸方形状を呈し，長軸は2.40m，短軸が2.40mを測り，長短値は１であった。これは検出面の数値で，床面の形状を見るとやや長方形状を呈している。検出面からの深さは約35cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

面積は，検出面で4.26㎡，床面積で3.44㎡を測り，壁面傾斜値は0.81であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は白色のパミス（5～10㎜大）を比較的多く含む暗褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土層：若干砂質土も混在（埋土③）が堆積していた。南側の一部では，埋土①と埋土③の中間に，白色のパミス（10㎜大）を含む黒褐色土（埋土②）が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物５点で，うち２点を図化した。A418とA419は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

73号竪穴住居状遺構（SH73：第128図）

検出状況　SH73はF5区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南西側ではSH77が重複して検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸方形を基本とするものと考えられる。長軸は3.05m，短軸が2.70mを測り，長短値は0.89であった。検出面からの深さは約30cmで，薩摩火山灰層を掘り抜けてⅩ層に達している。

推定される面積は，検出面で6.01㎡，床面積で5.48㎡を測る。本遺跡の平均値よりもやや高い数値であった。壁面傾斜値は0.91と高かった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色パミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物41点で，うち11点を図化した。A466は志風頭式土器の口縁部片である。角筒土器あるいはレモン形土器の頂部にあたる。口縁部直下に縦位の貝殻刺突文を連続して巡らし，胴部には横位の貝殻条痕文を地文に，その上から貝殻刺突文や棒状工具の先端で連続刺突文を施したものである。縦形穿孔の補修孔もみられる。包含層中から出土した912と類似する資料で，同一個体の可能性もある。A451～A453，A460～A463は前平式土器の胴部片である。外面に斜位や横位の貝殻条痕文が施されている。A464と A465は前平式土器の底部片である。A464は底部の立ち上がり部分で，胴部外面には横位の貝殻条痕文が明瞭に施されている。A465は風化が激しいが，斜位の貝殻条痕文がうっすらと観察できる。

B39は砂岩製の磨石片である。現状のサイズは，長さ6.65㎝，幅4.75㎝，厚さ4.40㎝，重さ93.0g を測る。側辺部に敲打痕がみられる。

重複遺構　遺構の南西側で SH77が重複して検出された。

77号竪穴住居状遺構（SH77：第128図）

検出状況　SH77は F5区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。北東側では SH73が重複して検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を基本とする。長軸は2.25m，短軸が1.65mを測り，長短値は0.73であった。検出面からの深さは約20㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けて X 層に達している。

推定される面積は，検出面で3.28㎡，床面積で2.68㎡を測る。。壁面傾斜値は0.82であった。

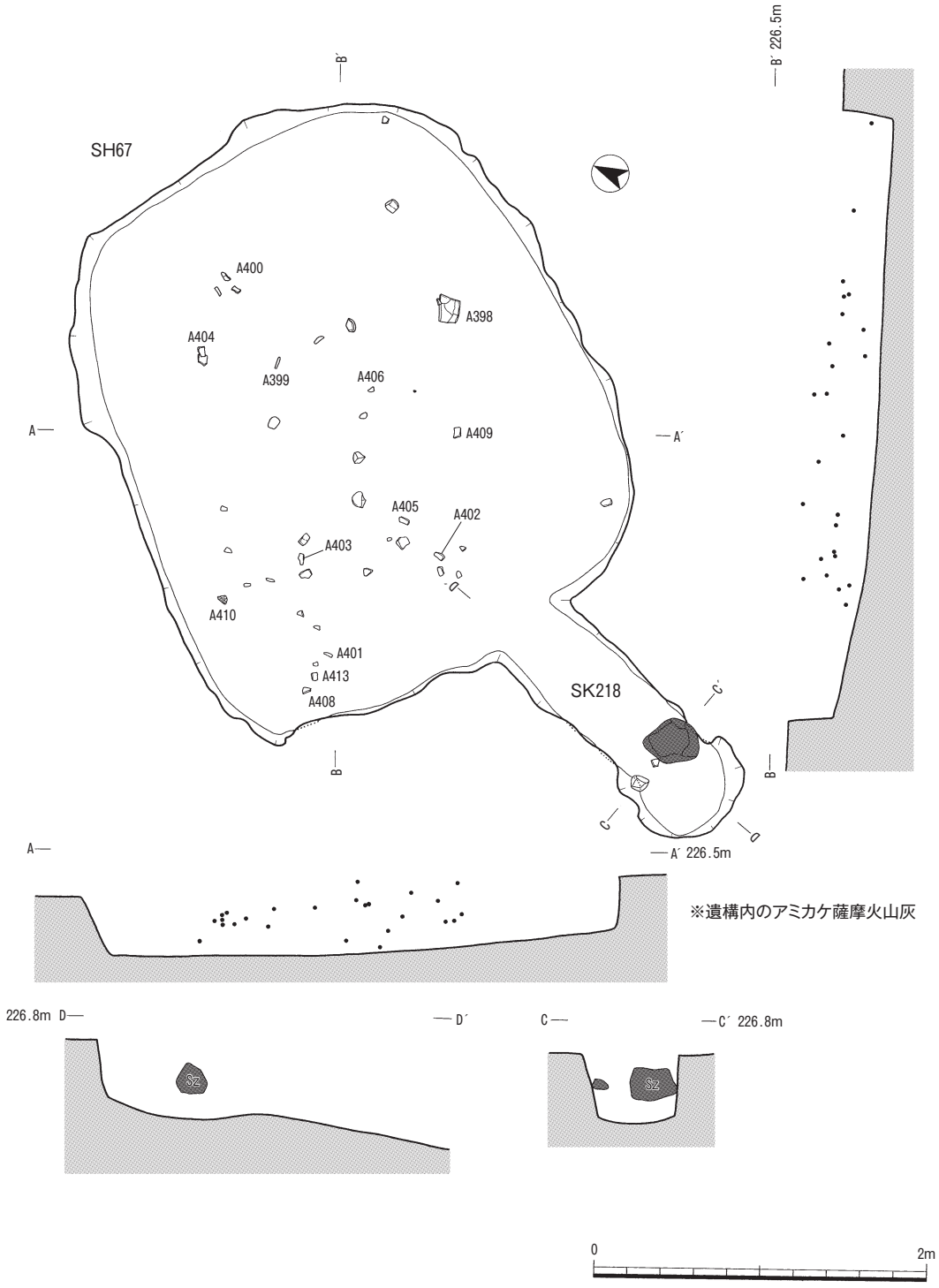
柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。埋土②には，ごくわずかであるが炭化物の粒子が含まれていた。

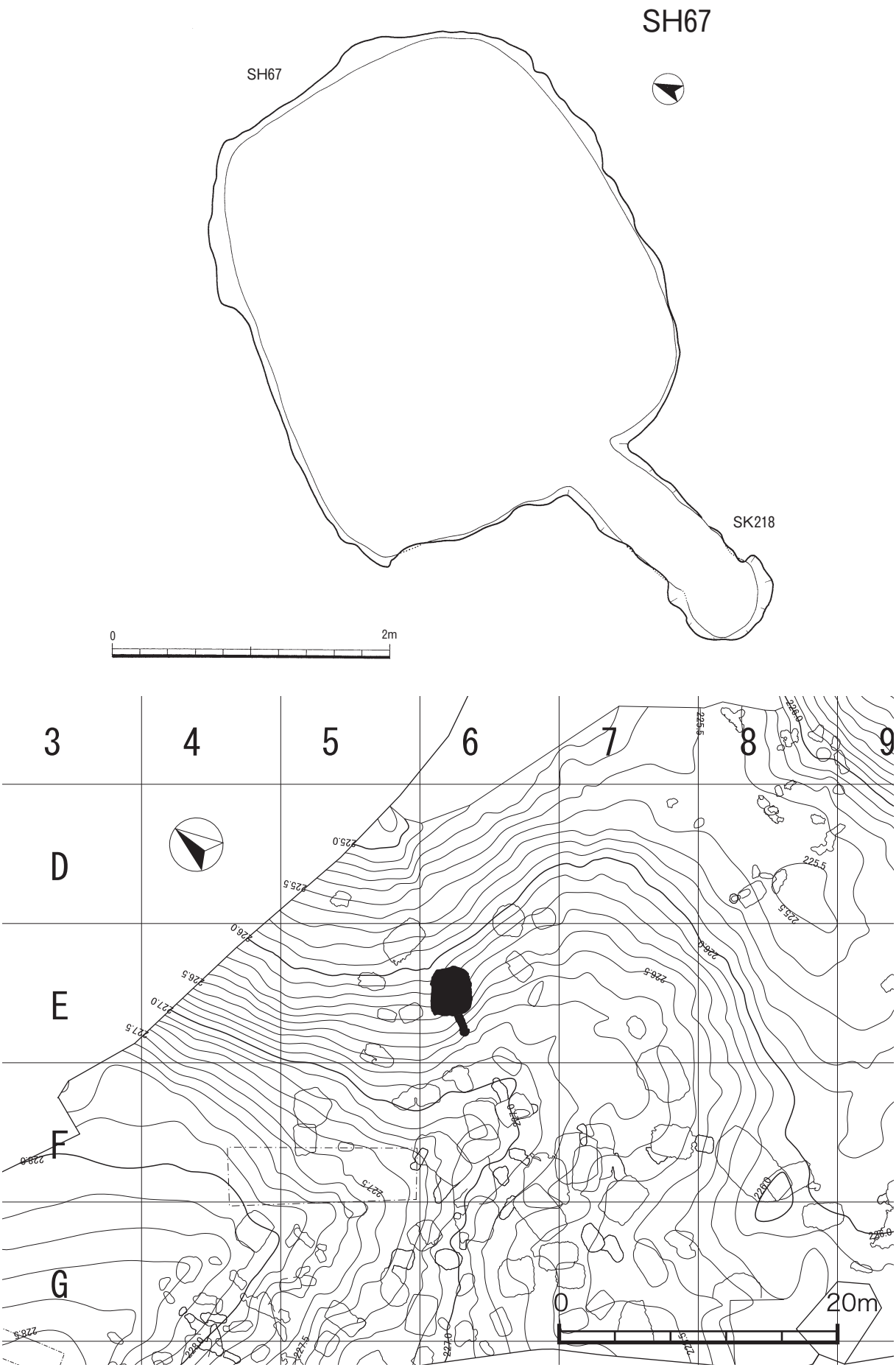
出土遺物　埋土中から出土た遺物16点で，うち３点を図化した。A473は吉田式式土器の口縁部片である。口縁部がやや外傾する器形をもつ。口唇部はフラットで，貝殻腹縁部による極めて浅い押圧文が施されている。口縁部直下には，横位二段の貝殻刺突文が，さらにその下には縦位二段の貝殻刺突文が施されている。縦位二段の貝殻刺突文のそれぞれの上位には，文様の区画を示すかのような横位の貝殻刺突文が施されている。胴部には，一部に浅い押引文が観察できるものの，基本的には横位の貝殻条痕文が施されている。A471と A472は前平式土器の胴部片で，それぞれ横位，斜位の貝殻条痕文が施されている。

B28は安山岩製のスクレイパー状石器である。長さが9.40㎝，幅4.60㎝，厚さ1.30㎝，重さ44.6g を測る。剥片の両側辺に細かな剥離を加えている。一部線状痕が観察できる。

重複遺構　遺構の南西側で SH73が重複して検出された。



第121図　67号竪穴住居状遺構実測図１



第122図　67号竪穴住居状遺構実測図２

74号竪穴住居状遺構（SH74：第131図）

検出状況　SH74はG4区およびH4区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。西側ではSK75やSK174が重複して検出された。

形状と規模　残存状況が厳しいので，平面プランは推定の域を出ないが，隅丸長方形を基本とするものと考えられる。長軸は3.25m，短軸が1.95mを測り，長短値は0.60であった。検出面からの深さは北側で約10cmであったが，南西側では段差を確認することができなかった。基本的には薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達しているが，元来，SH74一帯は薩摩火山灰層自体の堆積が薄い。そのことが，遺構検出面を下げてしまった大きな原因でもある。

推定される面積は，検出面で5.41㎡，床面積で4.84㎡を測る。壁面傾斜値は0.90であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は暗茶褐色の粘質土層を基本に，壁際に比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。前者には，わずかではあるが炭化物の粒子が含まれていた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物２点で，うち１点を図化した。A467は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　遺構の南西側でSK75が重複して検出された。推定される規模は，長軸が145cm，短軸が60cmを測る。深さは約20cmで，埋土は上位に黄色パミスをごく少量含む黒褐色土層，その下に暗茶褐色土層，さらに下部には暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺構内から土器片が１点出土しているが，細片のため図化できなかった。

83号竪穴住居状遺構（SH83：第134図）

検出状況　SH83はD13区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランはおおむね楕円形状を呈する。長軸は2.30m，短軸が1.60mを測り，長短値は0.70であった。検出面からの深さは10cm強と浅かった。薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達している。

推定される面積は，検出面で2.64㎡，床面積で2.45㎡を測る。本遺跡の竪穴住居状遺構の中では最小のグループに入る。壁面傾斜値は0.93と高かった。

遺構の南側には，竪穴本体と接するような形で浅いピット（55×40cm）が１個検出されている。検出面からの深さは15cm弱であるが，ピットの底面は，竪穴の床面よりも高い。

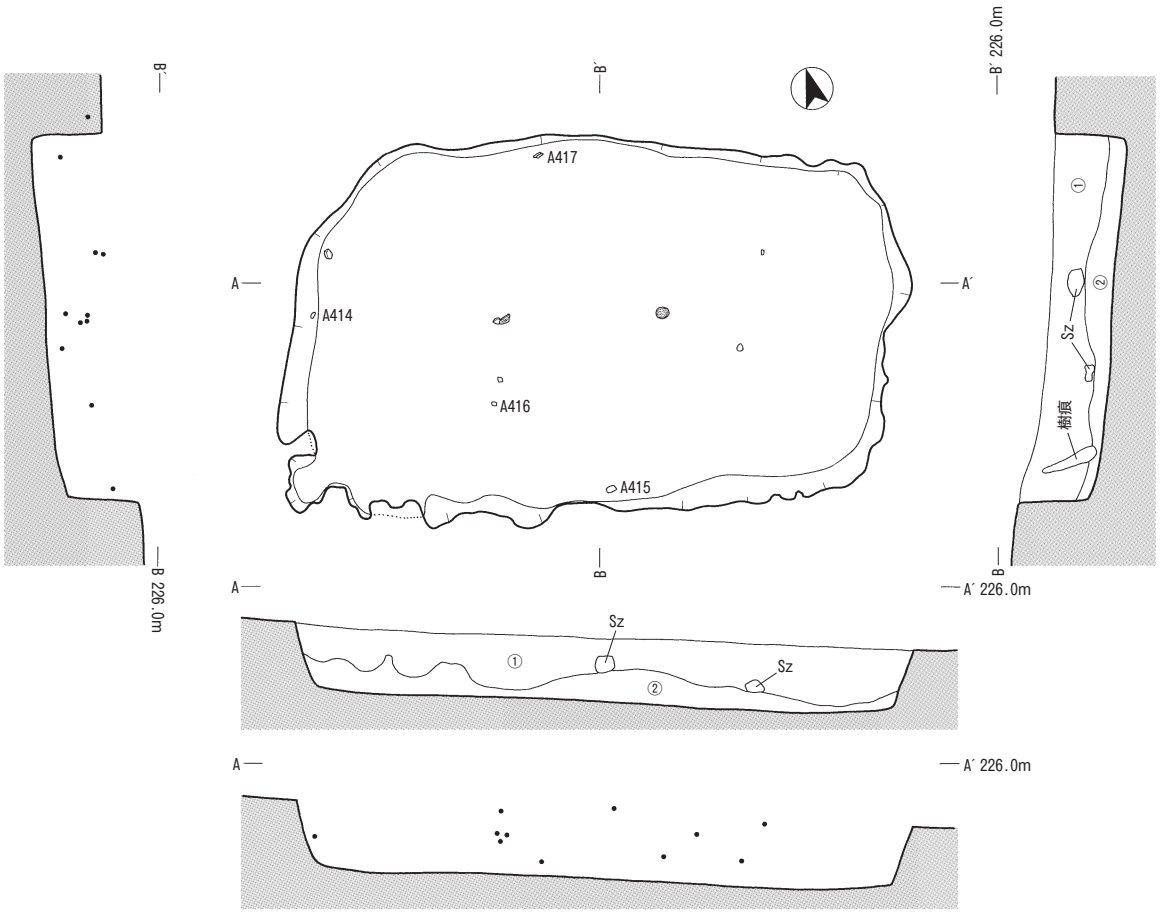
その他のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中には，薩摩火山灰層の拳大ブロックが全体的に含まれていた。

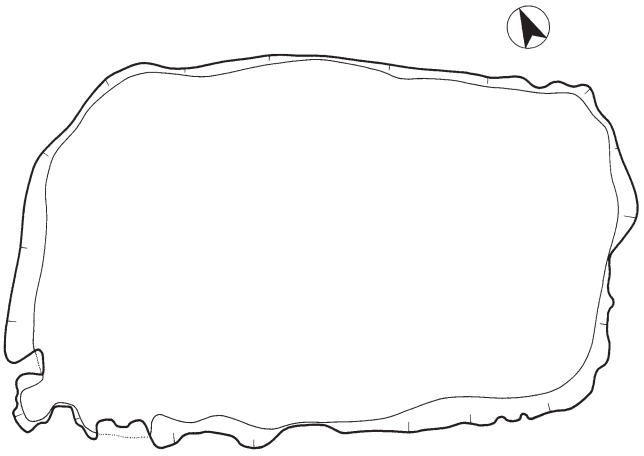
出土遺物　埋土中から出土した遺物２点と少なかった。A498とA501は，いずれも前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

SH68

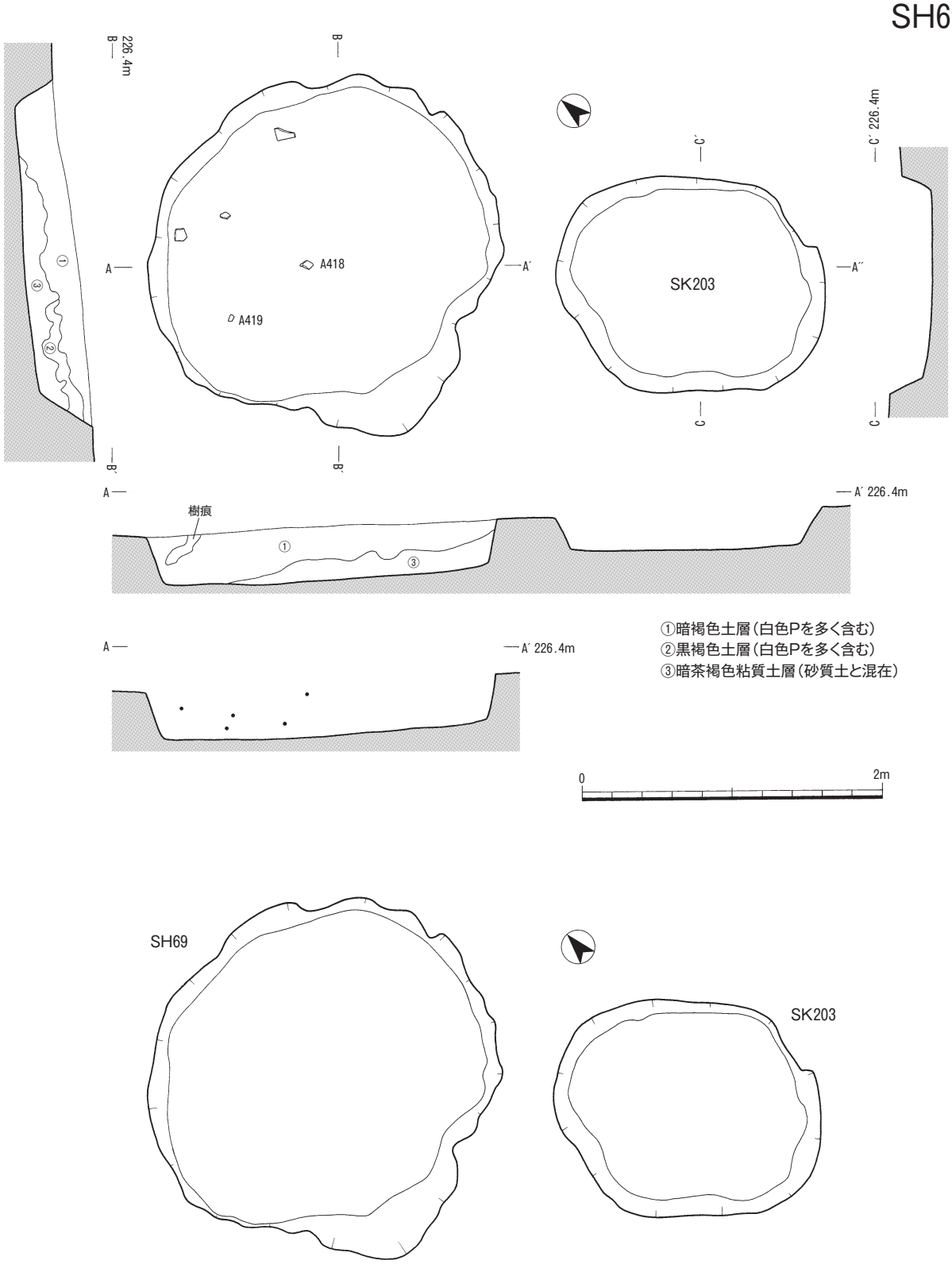


①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②淡茶褐色土層

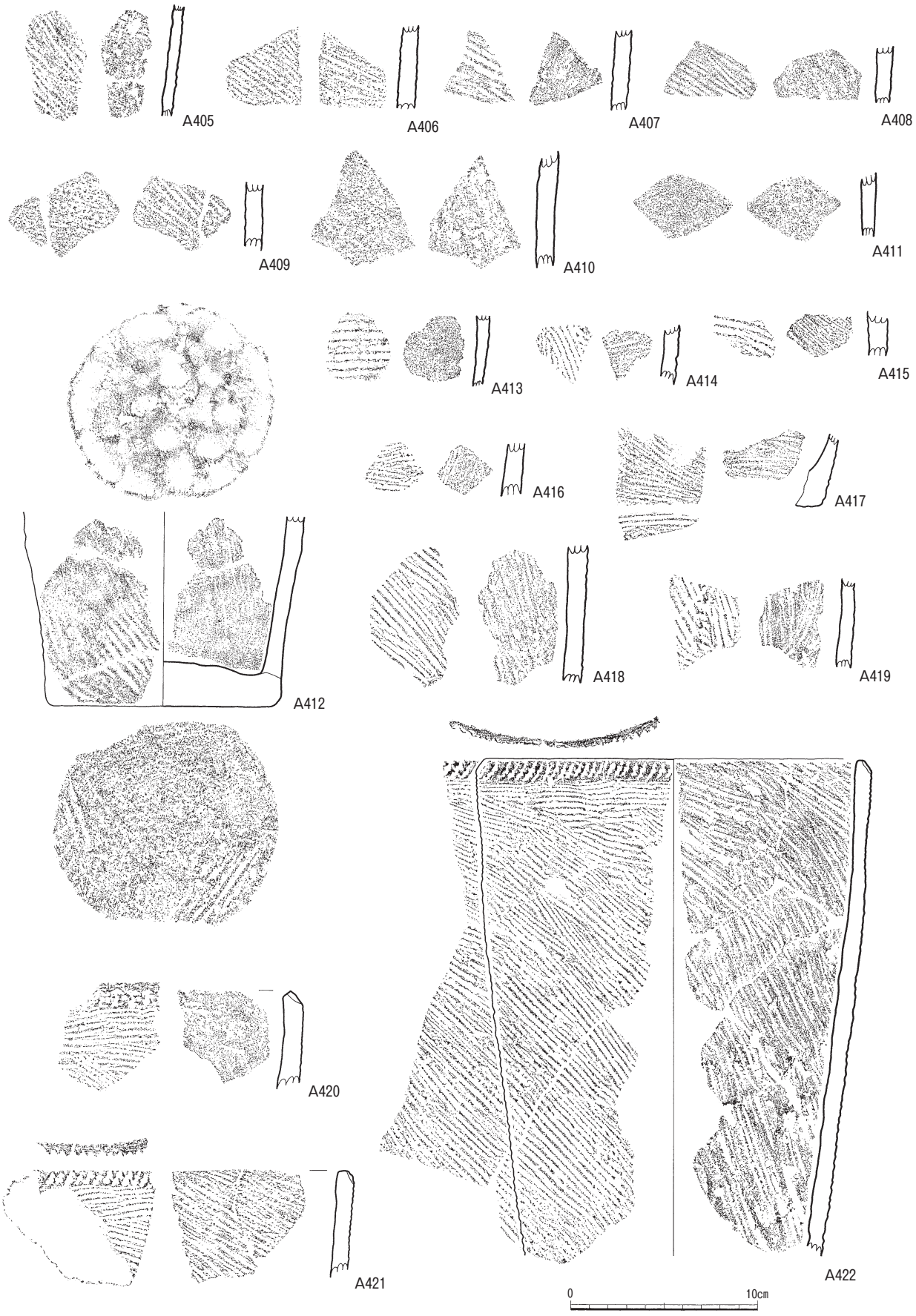


0 2m

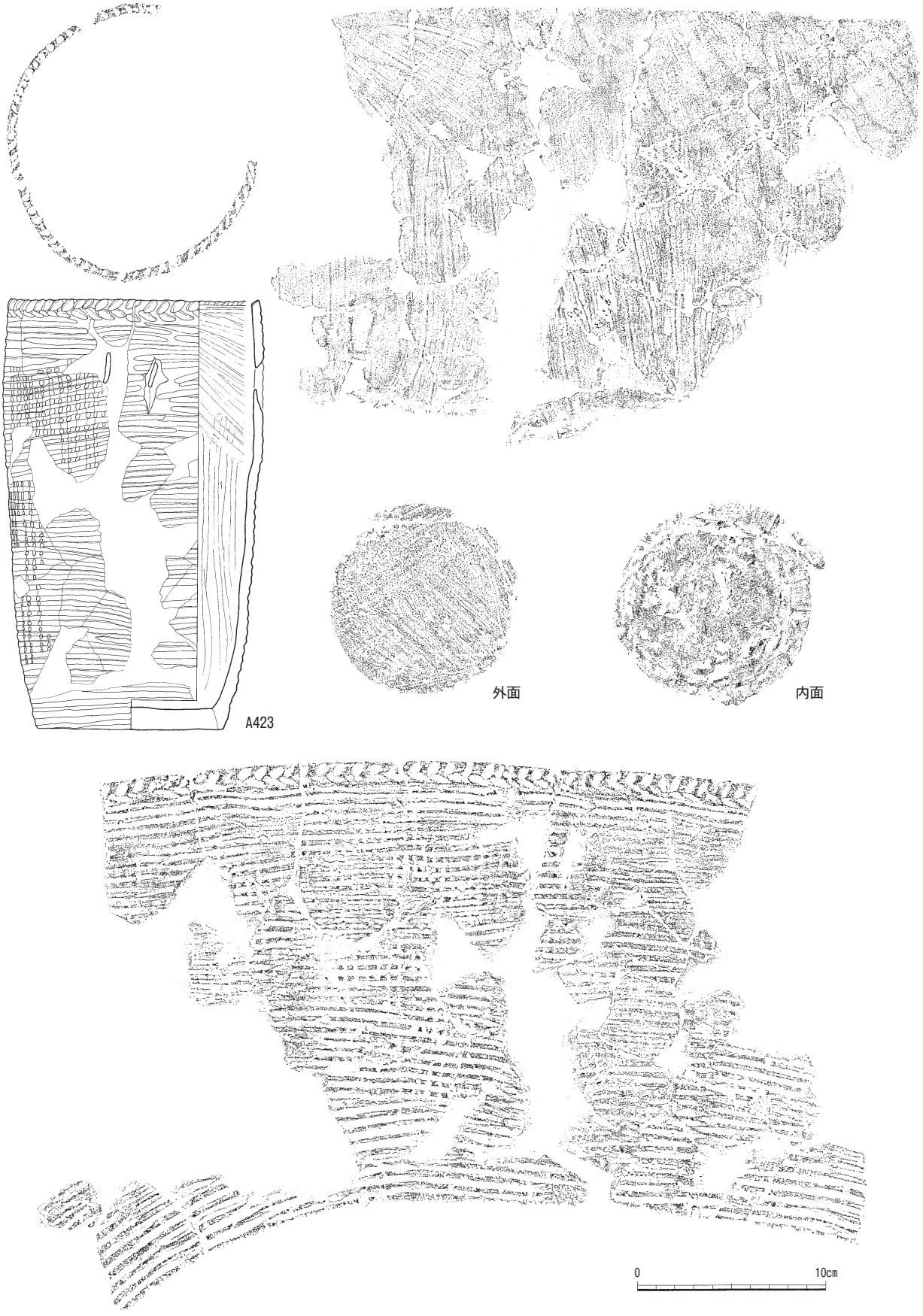
第123図　68号竪穴住居状遺構実測図



第124図　69号竪穴住居状遺構実測図



第125図　竪穴住居状遺構内出土土器50



第126図　竪穴住居状遺構内出土土器51

第127図　竪穴住居状遺構内出土土器52

84号竪穴住居状遺構（SH84：第134図）

検出状況　SH84はD12区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランはおおむね隅丸長方形状を呈する。長軸は3.00m，短軸が1.50mを測り，長短値は0.50で長方形度が高かった。遺構は大きく上段と下段に分かれており，検出面からの深さは上段が約５㎝，下段が10㎝強といずれも浅かった。上段の床面は薩摩火山灰層（Ⅸ層）中にあるが，下段は薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。上段の床面は細かな凹凸が激しかった。

推定される面積は，検出面で4.09㎡，床面積で3.36㎡を測り，壁面傾斜値は0.82であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物６点で，うち３点を図化した。A499とA500は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A502は前平式土器の底部片である。胴部外面には斜位貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。本遺構は，前述のように，上段と下段からなるタイプであるが，それぞれが別々の遺構である可能性も，完全には否定できないことも考慮しておく必要がある。とは言え，本遺跡では，同様に上下２段で構成されている竪穴住居状遺構がいくつか存在するので，それら類似遺構との比較も必要である。

85号竪穴住居状遺構（SH85：第134図）

検出状況　SH85はC10区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランはおおむね卵形に近い楕円形状を呈する。長軸は2.40m，短軸が1.60mを測り，長短値は0.67で，検出面からの深さは約15㎝であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

推定される面積は，検出面で2.87㎡，床面積で2.42㎡を測り，壁面傾斜値は0.84であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色のパミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色土層が堆積していた。黒褐色土の黄色パミスはＰ13と考えられる。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

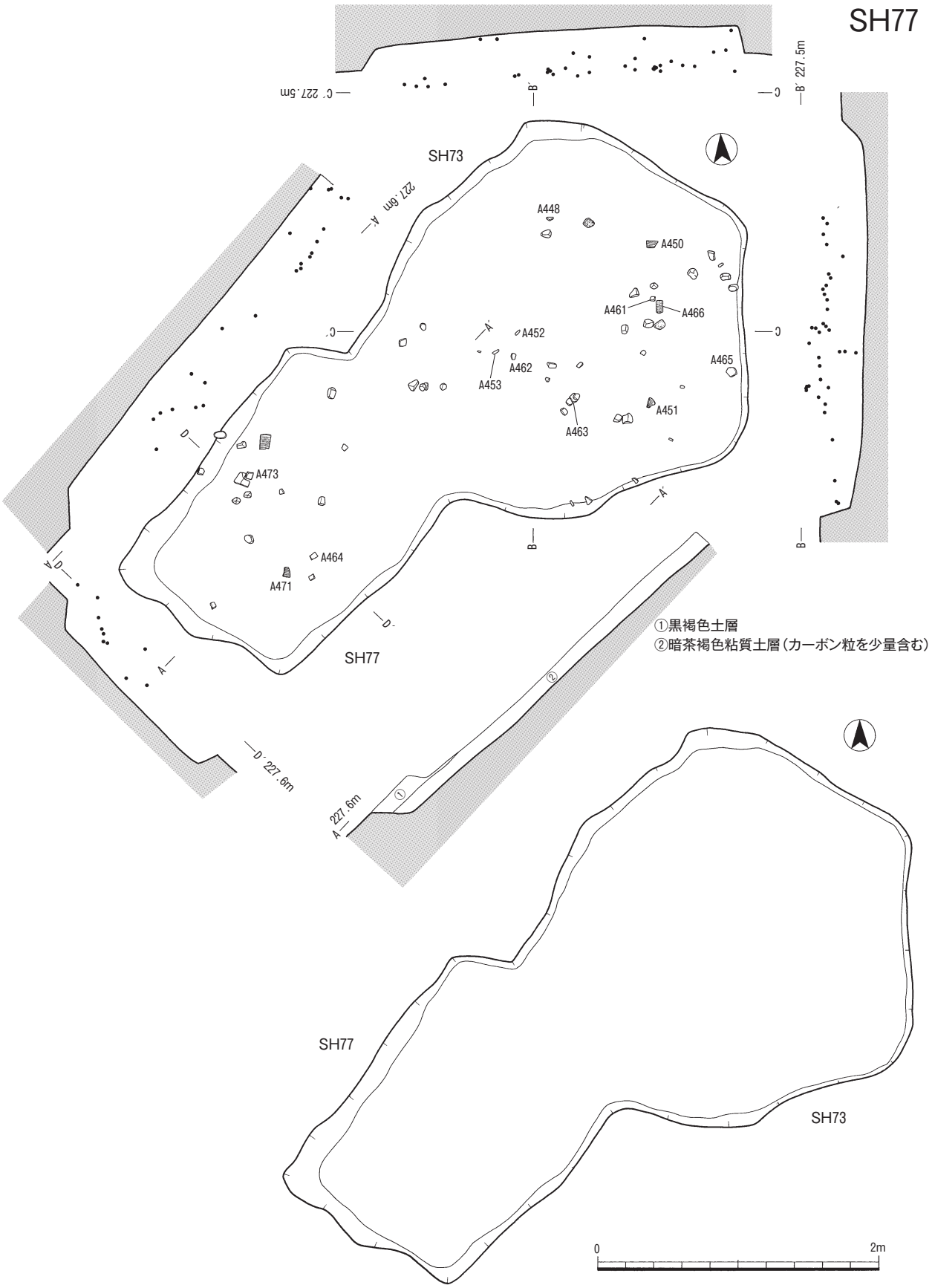
重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

86号竪穴住居状遺構（SH86：第135図）

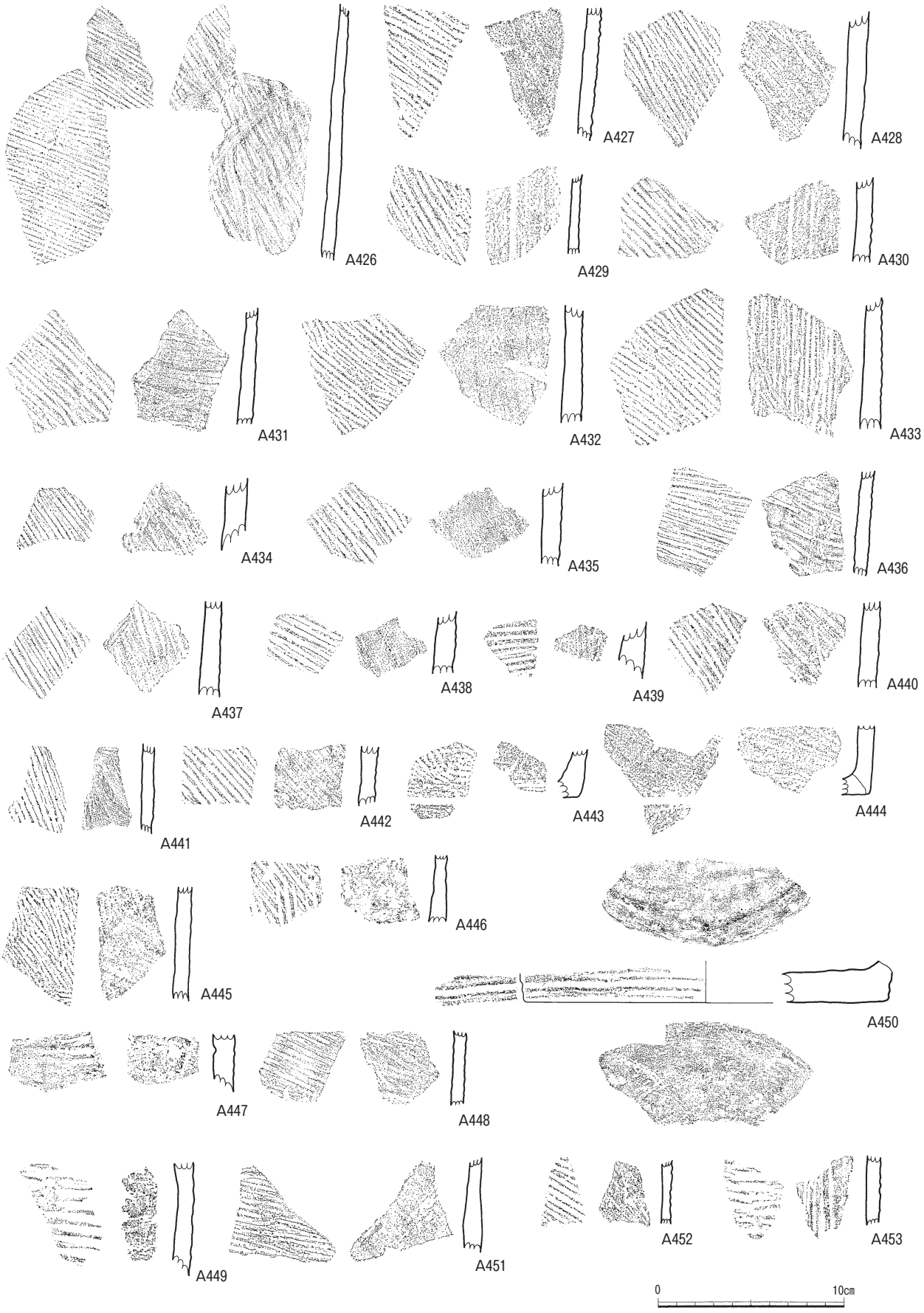
検出状況　SH86はD8区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。遺構の北西隅で連穴土坑（SK138）が重複して検出された。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を呈する。長軸2.05m，短軸1.35mを測り，長短値は0.66で，検出面からの深さは約30㎝であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

推定される面積は，検出面で2.45㎡，床面積で2.19㎡を測り，壁面傾斜値は0.89であった。規模としては，本遺跡の竪穴住居状遺構の中では最も小さな遺構である。



第128図　73，77号竪穴住居状遺構実測図



第129図　竪穴住居状遺構内出土土器53

第130図　竪穴住居状遺構内出土土器54

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物３点で，うち１点を図化した。A503は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　遺構の北西隅で，連穴土坑（SK138）が検出された。SK138はSH86の壁面にトンネルを掘り，外側に設けた土坑と繋いだもので，長軸160㎝，短軸65㎝を測る。外側の土坑は，長軸65㎝，短軸55㎝のほぼ円形を呈している。検出面からの深さは約60㎝であった。トンネル部上位のいわゆるブリッジ部分は，薩摩火山灰層で厚さ約20㎝を測る。

遺構の埋土は，黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位にカーボン粒の多い暗褐色土層（埋土②），さらに暗茶褐色の粘質土層（埋土③）が堆積していた。埋土③にもカーボン粒が含まれていたが，埋土②よりは少なかった。

SK138はSH86の埋土を掘り下げた段階で確認できた。黒褐色土をベースにするという埋土に類似性はあるが，SH86を検出した段階で，SK138の存在に気づくことはなかったということになる。SK138はSH86の壁面を利用した可能性は大なので，要は同時なのか，それとも竪穴住居跡と連穴土坑が重複する場合に，これまで言われてきたように，竪穴部が廃棄された跡を利用したのかということが問題になる。この事例の場合，SH86の規模が検出面積2.45㎡と小規模である。本報告では，検出遺構全体の状況から，SH86は竪穴住居状遺構としたが，いわゆる住居的な機能を持っていたかどうかについては疑問もある。まさに「状」とした所以はそこにあるわけである。この場合，２つの遺構は，同時に存在し，SH86は連穴土坑の機能を補う補助的な施設であった可能性も考えておきたい。

87号竪穴住居状遺構（SH87：第136図）

検出状況　SH87はF12区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。当初，重複する遺構との関係がなかなかつかめなかったため，「F12区土坑群」として調査を進めた。その結果，２基の竪穴住居状遺構と２基の土坑が重複する遺構群として把握した。その１つがSH87であった。北西部でSK120，西側でSK121，南西部でSH90が重複して検出された。

形状と規模　重複が激しいので，平面プランについては推定の域は免れないが，隅丸方形を呈するものと考えられる。長軸1.80m，短軸1.75mを測り，長短値は0.97で正方形に近い数値であった。検出面からの深さは約15㎝で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

推定される面積は，検出面で2.93㎡，床面積で2.69㎡を測り，壁面傾斜値は0.92と高かった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

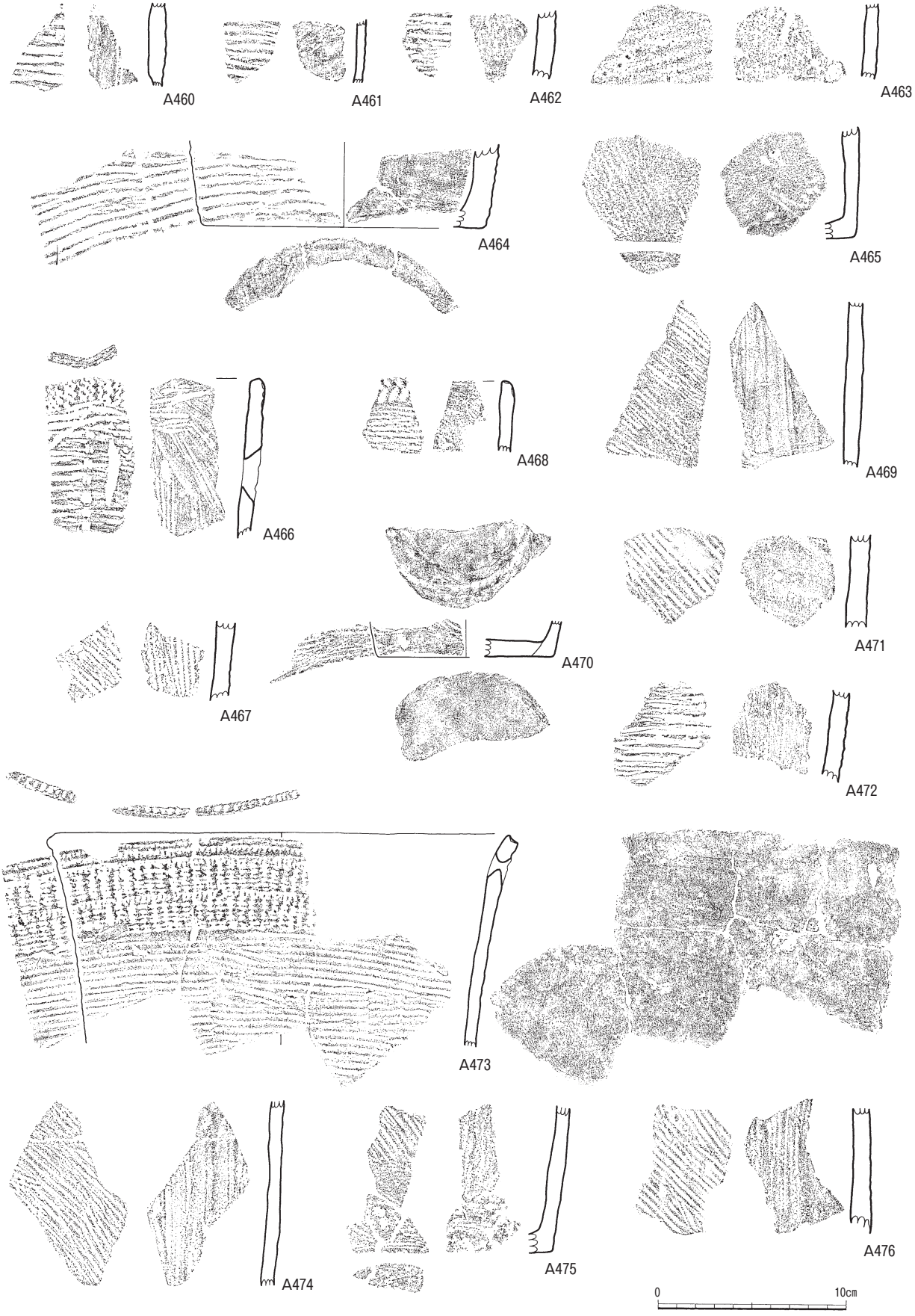
埋土　埋土は黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は７点で，うち１点を図化した。A504は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

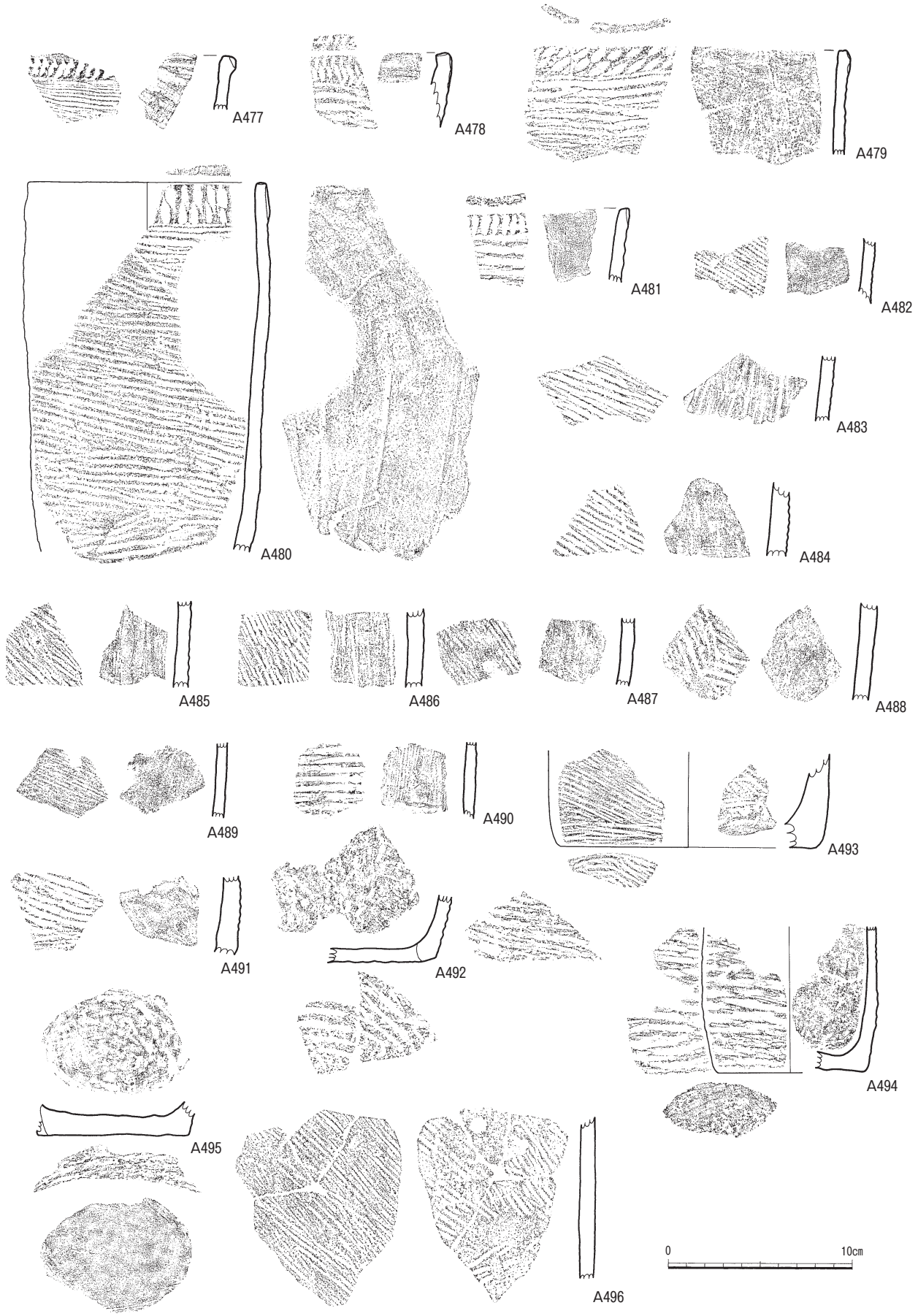
重複遺構　遺構の北西部でSK120，西側でSK121，南西部でSH90が検出された。SH90については次項で述べる。ここでは２つの土坑についてふれておきたい。

SK120は楕円形状の平面プランをもつと推測される土坑である。推定長軸は139㎝，短軸が95㎝

第131図　74号竪穴住居状遺構実測図



第132図　竪穴住居状遺構内出土土器55



第133図　竪穴住居状遺構内出土土器56

で，検出面からの深さは15㎝弱であった。検出面積は0.98㎝であった。遺構の中央部では薩摩火山灰層のブロックが検出された。

西側ではSK121が検出された。重複が激しいので，全容は不明瞭な部分が多いが，残された壁面，外郭線等の状況から，平面プランが隅丸方形状を呈するものと考えられる。推定するサイズは長軸，短軸ともに130㎝で，ほぼ正方形に近い。検出部分の面積は0.75㎡であった。

90号竪穴住居状遺構（SH90：第136図）

検出状況　SH90はF12区において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。当初，重複する遺構との関係がなかなかつかめなかったため，「F12区土坑群」として調査を進めたことは前項でも述べた。その結果，２基の竪穴住居状遺構と２基の土坑が重複する遺構群として把握した。その１つがSH90であった。北部でSH87，SK121が重複して検出された。

形状と規模　重複が激しいので，平面プランについては推定の域は免れないが，卵形に近い楕円形状を呈するものと考えられる。長軸2.25m，短軸1.65mを測り，長短値は0.73であった。検出面からの深さは15㎝強で，薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

推定される面積は，検出面で2.69㎡，床面積で2.49㎡を測り，壁面傾斜値は0.93と高かった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物５点で，うち３点を図化した。A506～A508は，いずれも前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　遺構の北部でSH87，SK121が検出された。内容については前項で述べたとおりである。

88号竪穴住居状遺構（SH88：第137図）

検出状況　SH88はG7区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは隅丸方形を呈する。長軸1.85m，短軸1.50mを測り，長短値は0.81であった。検出面からの深さは5cm弱で極めて浅かった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

推定される面積は，検出面で2.54㎡，床面積で2.39㎡を測り，壁面傾斜値は0.94と高かった。これは検出面が低いことからくる数値と考えられる。規模は，本遺跡の中で最も小さなグループに含まれる。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黒褐色土を主としながら，その下位に暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。

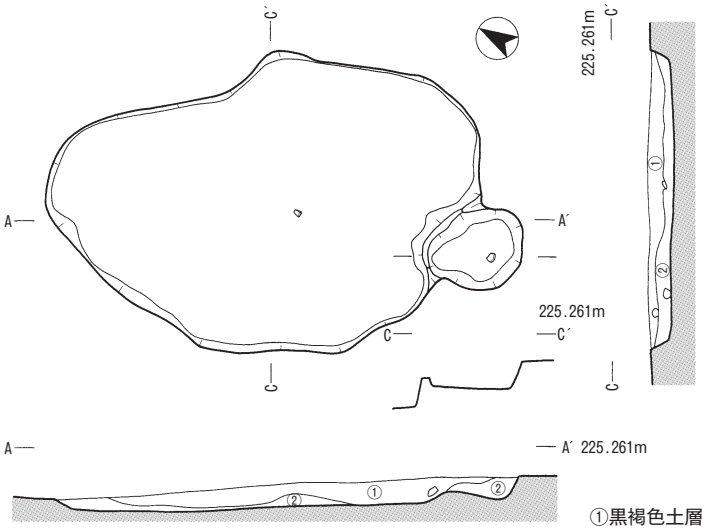
出土遺物　埋土中から出土した遺物はA505の１点のみであった。A505は前平式土器の胴～底部片である。胴部外面には斜位および横位の貝殻条痕文が施されている。底径13.8㎝を測る。

重複遺構　近接して西側にSH89が検出されたが，重複する遺構等はなく，単独で検出された。

89号竪穴住居状遺構（SH89：第137図）

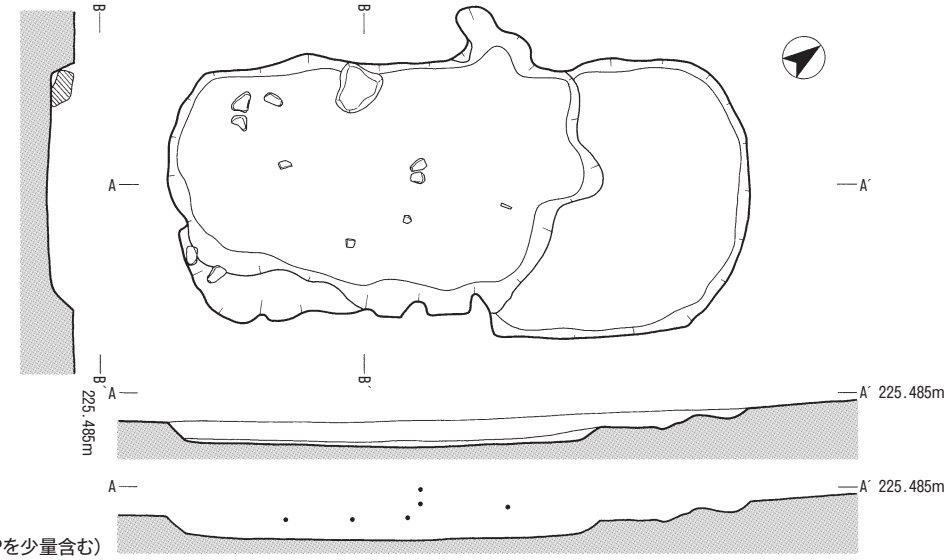
検出状況　SH89はG7区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

SH83



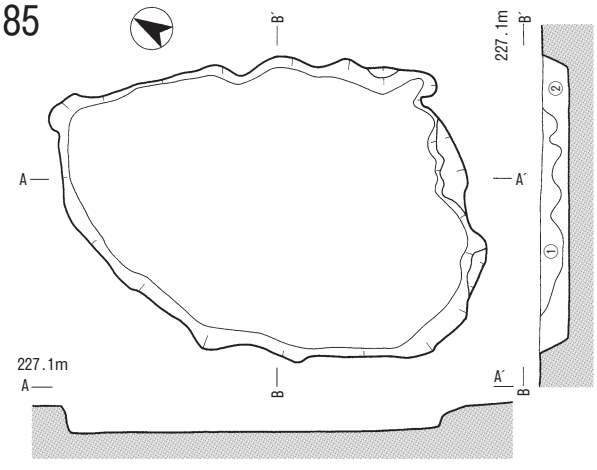
①黒褐色土層
（黄色P,白色Pを少量含む）
②淡茶褐色粘質土層

SH84



①黒褐色土層
（黄色P,白色Pを少量含む）
②淡茶褐色粘質土層

SH85



①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）
②淡茶褐色粘質土層

第134図　83，84，85号竪穴住居状遺構実測図

形状と規模　平面プランは隅丸長方形を呈する。長軸2.10m，短軸1.55mを測り，長短値は0.74であった。検出面からの深さは30cm強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

推定される面積は，検出面で2.92㎡，床面積で2.48㎡を測り，壁面傾斜値は0.85であった。本遺跡の中で最も小さなグループに含まれる。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中からは土器片が１点出土したが，細片のため図化できなかった。

重複遺構　近接して東側にSH89が検出されたが，重複する遺構等はなく，単独で検出された。

91号竪穴住居状遺構（SH91：第137図）

検出状況　SH91はG5区とG6区の境界線上において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは隅丸方形を呈する。長軸2.25m，短軸2.00mを測り，長短値は0.89で正方形度が高かった。内部は上段と下段に分かれていて，検出面からの深さはそれぞれ５㎝，15cm強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

下段は本体のアウトラインよりも隅丸長方形を呈し，長軸1.70m，短軸1.30m を測る。上段はこの下段を「L」字形に囲う。

推定される面積は，検出面で3.87㎡，床面積で3.51㎡を測り，壁面傾斜値は0.01であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかい暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

92号竪穴住居状遺構（SH92：第138図）

検出状況　SH92はG4区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは楕円形状を呈する。長軸2.10m，短軸1.65mを測り，長短値は0.79であった。検出面からの深さは15cm強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。

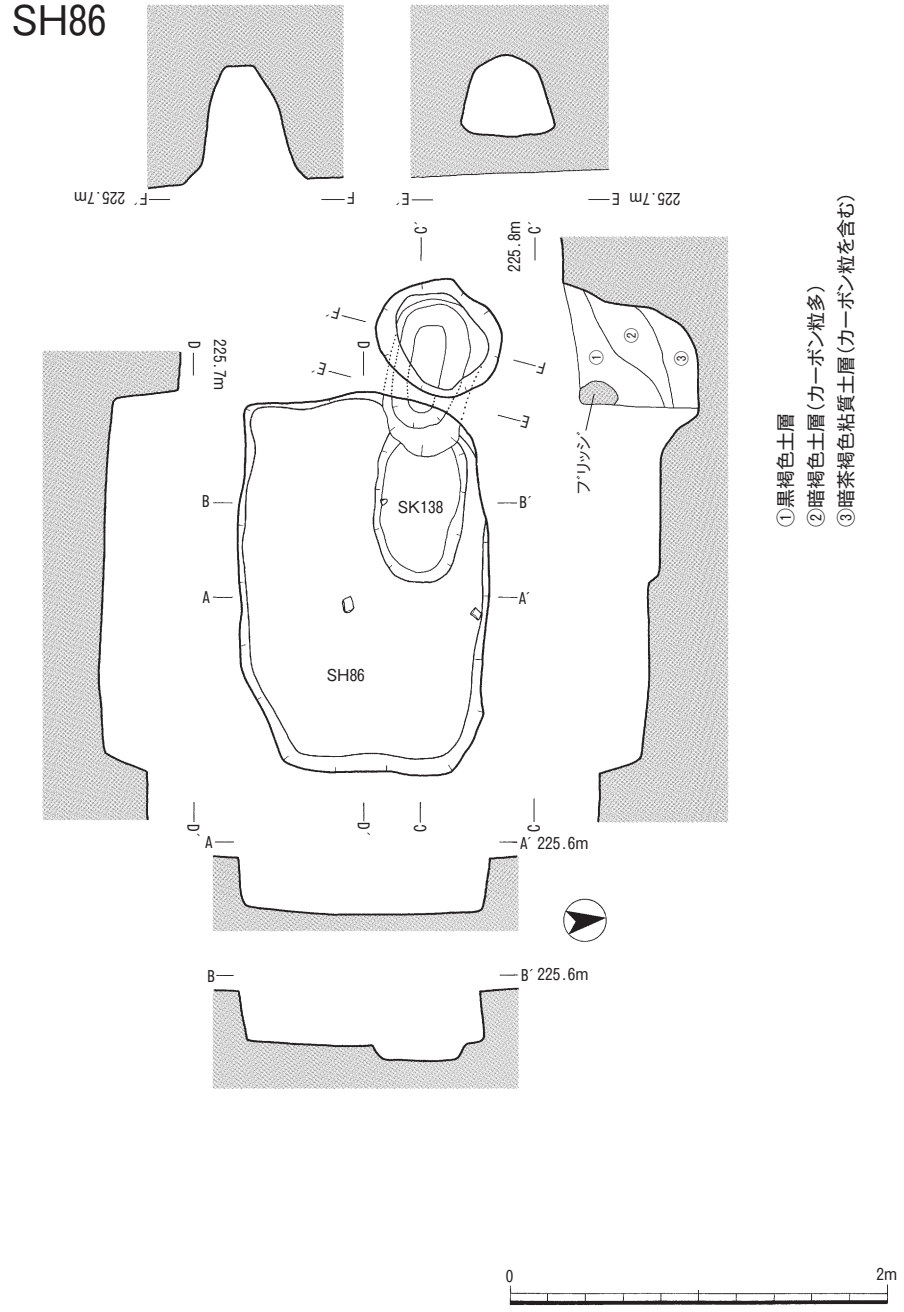
遺構の東南部にＰ１（55×40㎝）が検出された。SH92の床面からの深さは約25cmであった。

推定される面積は，検出面で2.74㎡，床面積で2.44㎡を測り，壁面傾斜値は0.89であった。本遺跡の中で最も小さなグループに含まれる。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかい茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物４点で，うち２点を図化した。A511は前平式土器の口縁部片である。口唇外面端部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文を施している。口唇部はやや内傾しな



第135図　86号竪穴住居状遺構実測図

がらもフラットな面をわずかに残す。外面には口縁部直下が横位，胴部は斜位の貝殻条痕文が施されている。A509は前平式土器の胴部片である。斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

93号竪穴住居状遺構（SH93：第138図）

検出状況　SH93はH3区およびH4において検出された。西側については，調査区外へ延びる。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　推定される平面プランは隅丸方形状を呈する。現状の規模は，長軸1.90m，短軸1.00mを測り，長短値は0.53であった。検出面からの深さは15cm強であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達していた。推定される面積は，検出面で1.67㎡，床面積で1.52㎡を測り，壁面傾斜値は0.89であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかい茶褐色の粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

94号竪穴住居状遺構（SH94：第138図）

検出状況　SH94はE6区において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは隅丸方形状を呈する。現状の規模は，長軸2.15m，短軸1.35mを測り，長短値は0.63であった。検出面からの深さは約30cmであった。薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達していた。推定される面積は，検出面で2.64㎡，床面積で2.30㎡を測り，壁面傾斜値は0.87であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は白色のパミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかく，サクサクの茶褐色粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物は無かった。

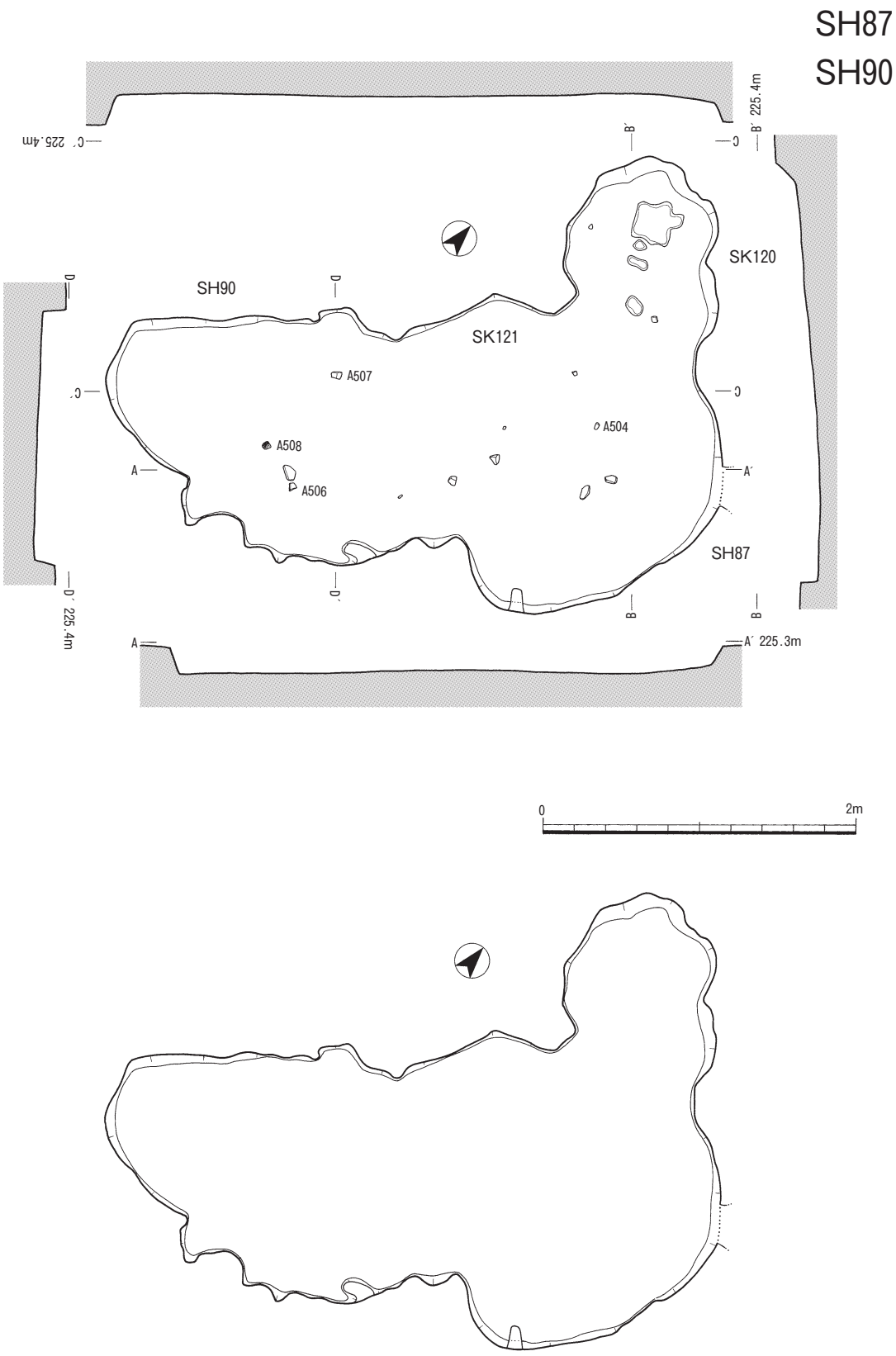
重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

95号竪穴住居状遺構（SH95：第139図）

検出状況　SH95はE6区およびF6区の境界線上において単独で検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。

形状と規模　平面プランは隅丸長方形状を呈する。現状の規模は，長軸2.25m，短軸1.90mを測り，長短値は0.84であった。検出面からの深さは25cm弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてX層に達していた。推定される面積は，検出面で2.66㎡，床面積で2.27㎡を測り，壁面傾斜値は0.85であった。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。



第136図　87，90号竪穴住居状遺構実測図

埋土　埋土は白色のパミスを含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかく，サクサクの茶褐色粘質土層が堆積していた。

出土遺物　埋土中から出土した遺物３点で，うち１点を図化した。A510は前平式土器の底部（底面部分）片である。底面には貝殻条痕文がみられる。

重複遺構　重複する遺構等はなく，単独で検出された。

96号竪穴住居状遺構（SH96：第139図）

検出状況　SH96はD10区およびE10区の境界線上において検出された。検出面はⅨ層の薩摩火山灰上面であった。南西部でSK02が重複して検出された。

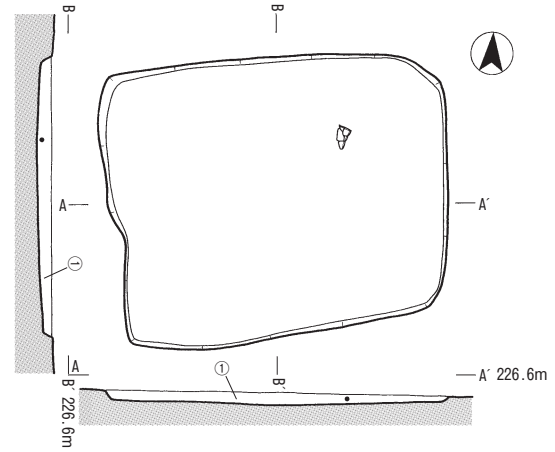
形状と規模　推定される平面プランは隅丸長方形状である。現状の規模は，長軸2.40m，短軸1.40mを測。長短値は0.58で，長方形度が高かった。検出面からの深さは15cm弱であった。薩摩火山灰層を掘り抜けてＸ層に達していた。推定される面積は，検出面で2.81㎡，床面積で2.66㎡を測り，壁面傾斜値は0.95と高かった。これは検出面が低かったことによると考えられる。

柱穴状のピットや焼土，炭化物の集中するような痕跡はみられなかった。

埋土　埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土を主としながら，その下位に比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。

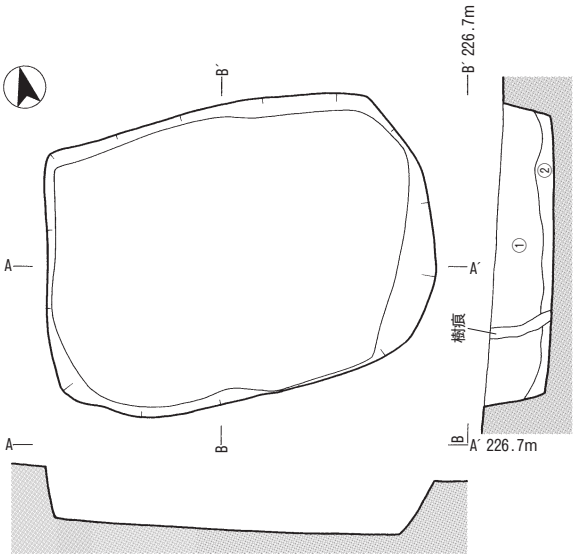
出土遺物　埋土中から出土した遺物17点で，うち５点を図化した。A512は前平式土器の口縁部片である。口唇部および口縁部直下に，ヘラ状工具による連続刺突文が２段施されている。外面には横位の貝殻条痕文がみられる。A513～A515は前平式土器の胴部片である。いずれも外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。

重複遺構　遺構の南西部でSK02が重複して検出された。SK02は平面プランが隅丸長方形状を呈し，長軸150cm，短軸90cmを測る。検出面からの深さは10cm強であった。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土（埋土①）を主としながら，その下位に比較的柔らかい暗茶褐色土層（埋土②）が堆積していた。また，薩摩火山灰層の拳大ブロックも含まれていた。



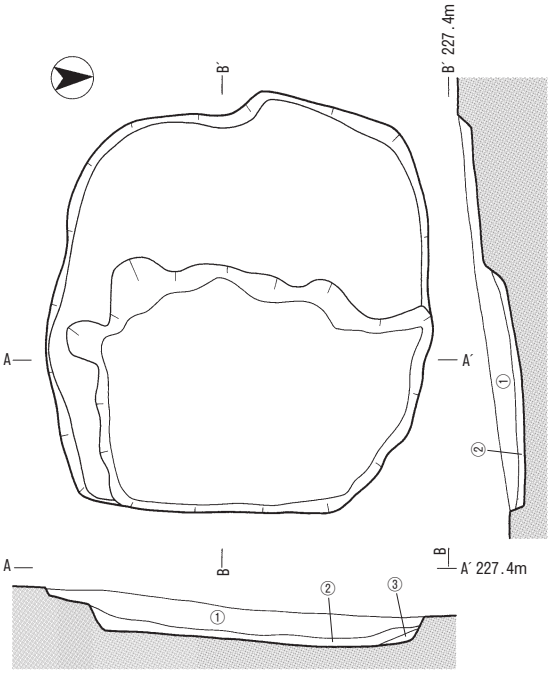
SH88

①黒褐色土層（黄色P,白色Pを少量含む）



SH89

①黒褐色土層（黄色P,白色Pを含む）
②茶褐色粘質土層

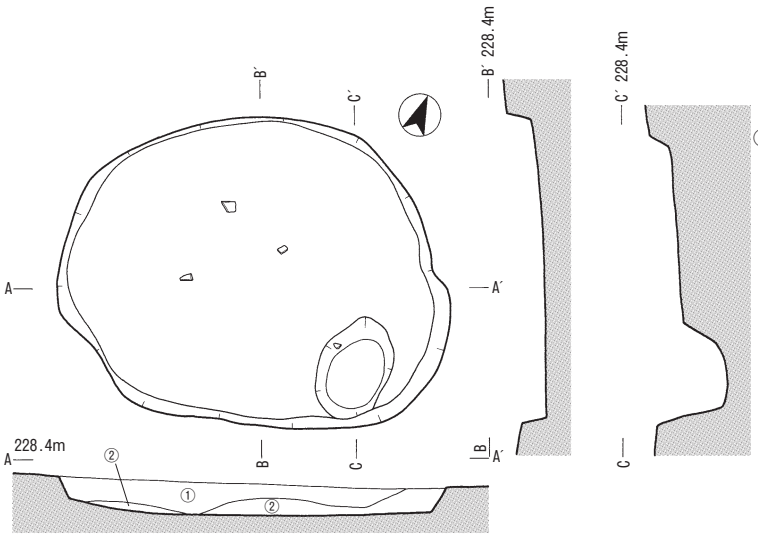


SH91

①黒褐色土層（黄色P,白色Pを含む）
②暗茶褐色土層（柔）
③暗茶褐色粘質土層

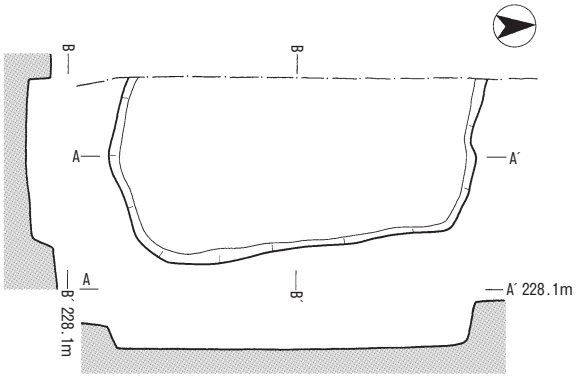
第137図　88，89，91号竪穴住居状遺構実測図

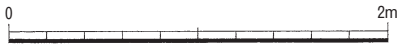
SH92



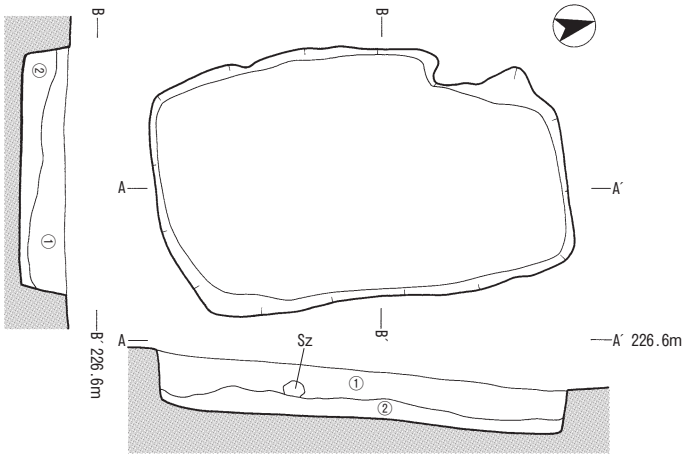
①黒褐色土層（黄色P,白色Pを含む）

SH93



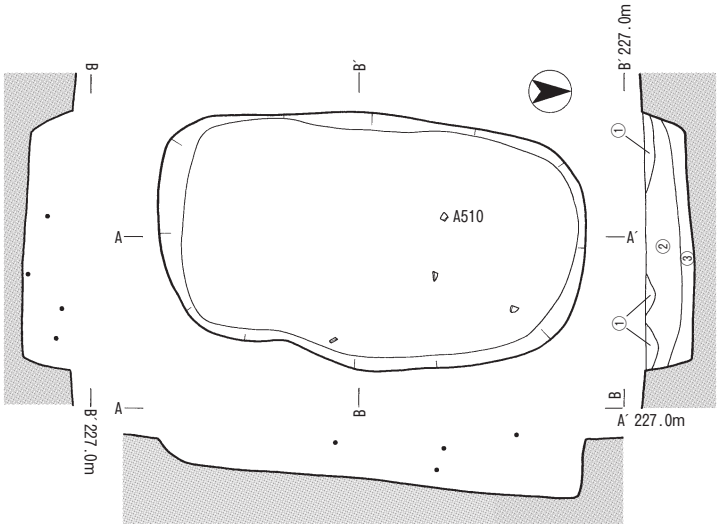


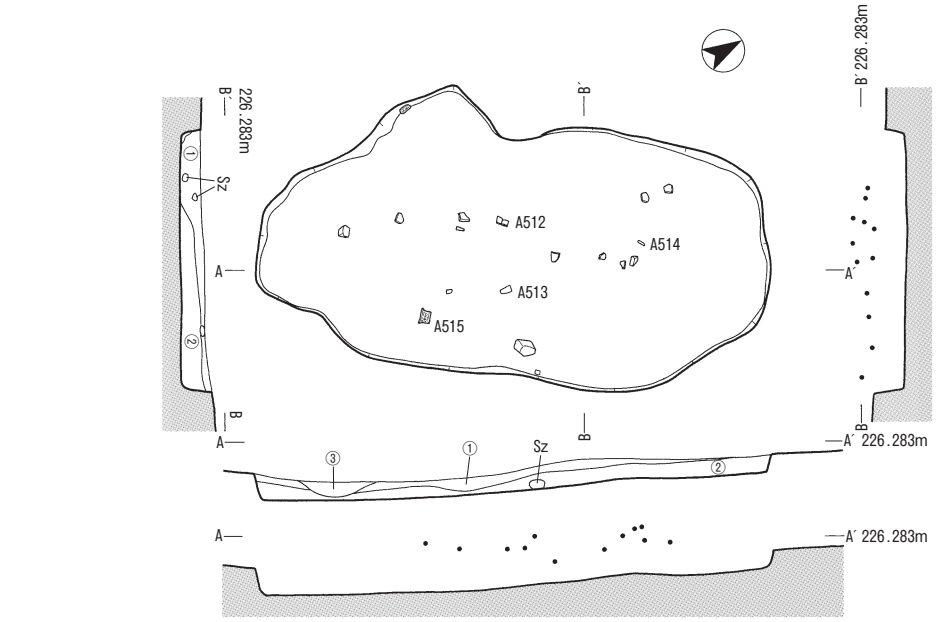
SH94

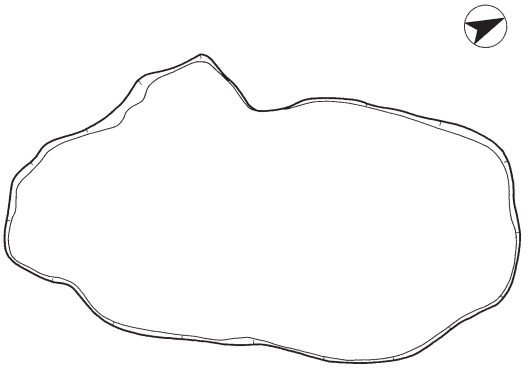


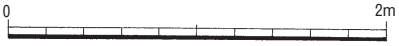
①黒褐色土層（白色Pを含む）
②暗茶褐色土層（柔らかく，サクサクしている）

第138図　92，93，94号竪穴住居状遺構実測図

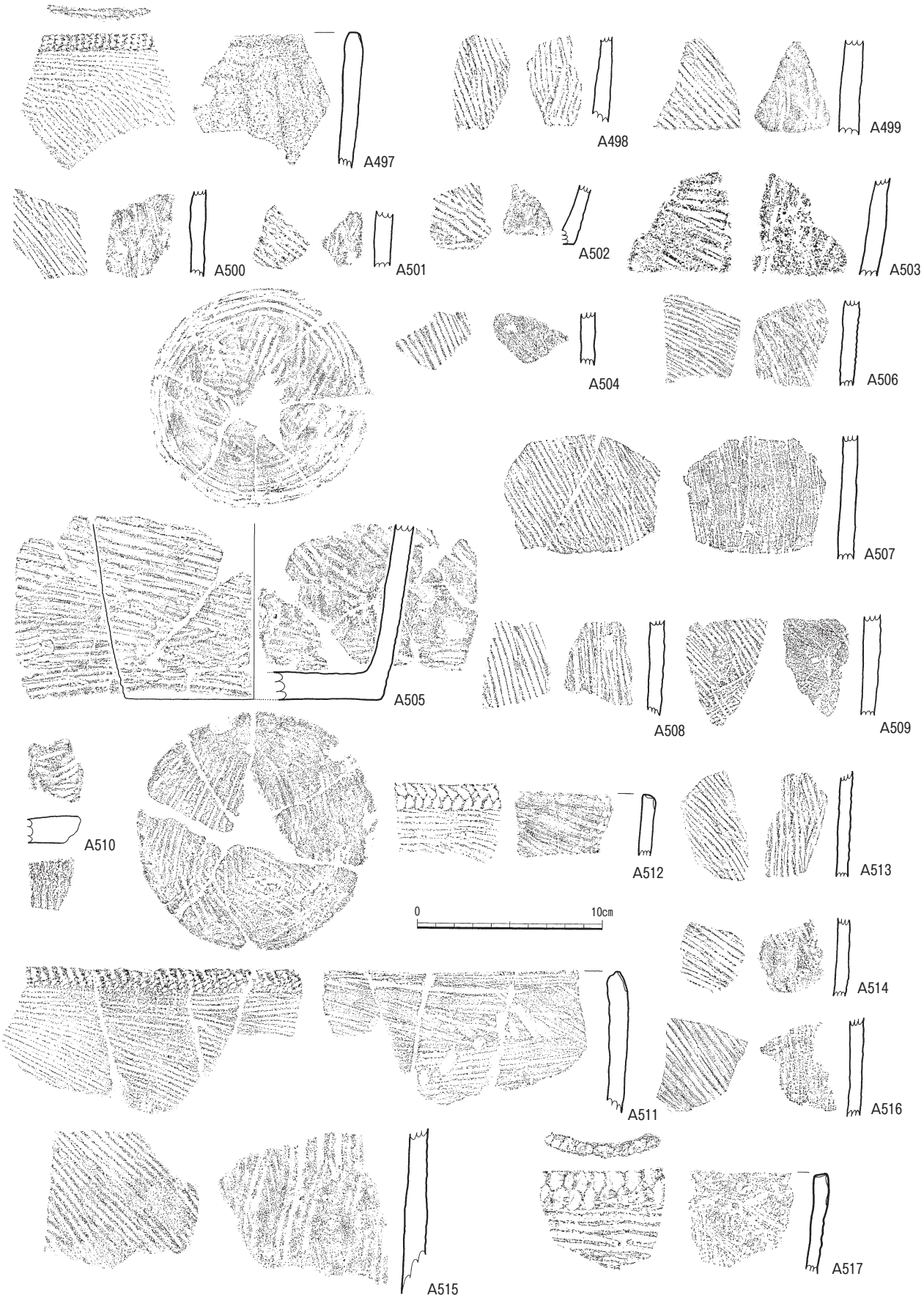




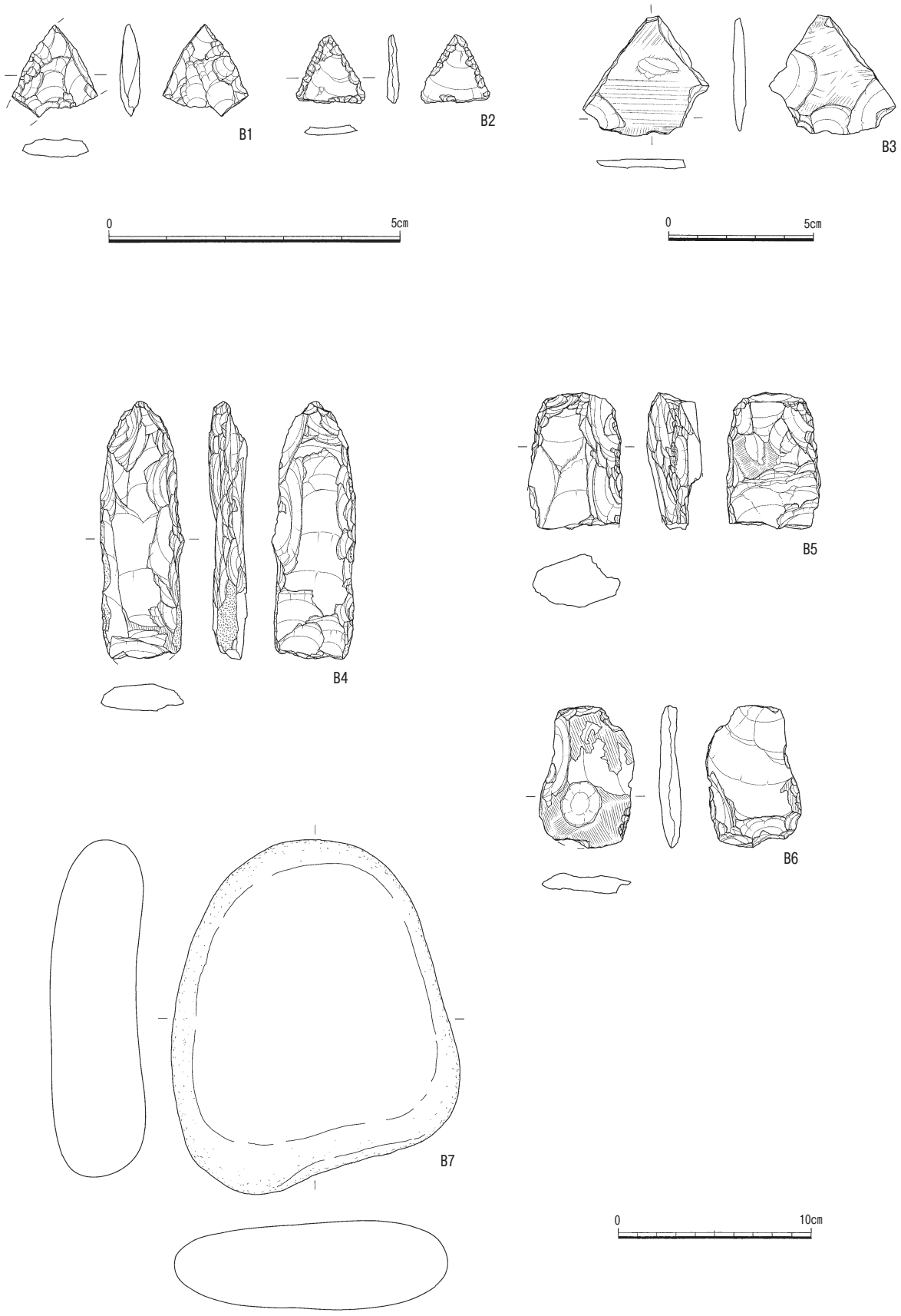




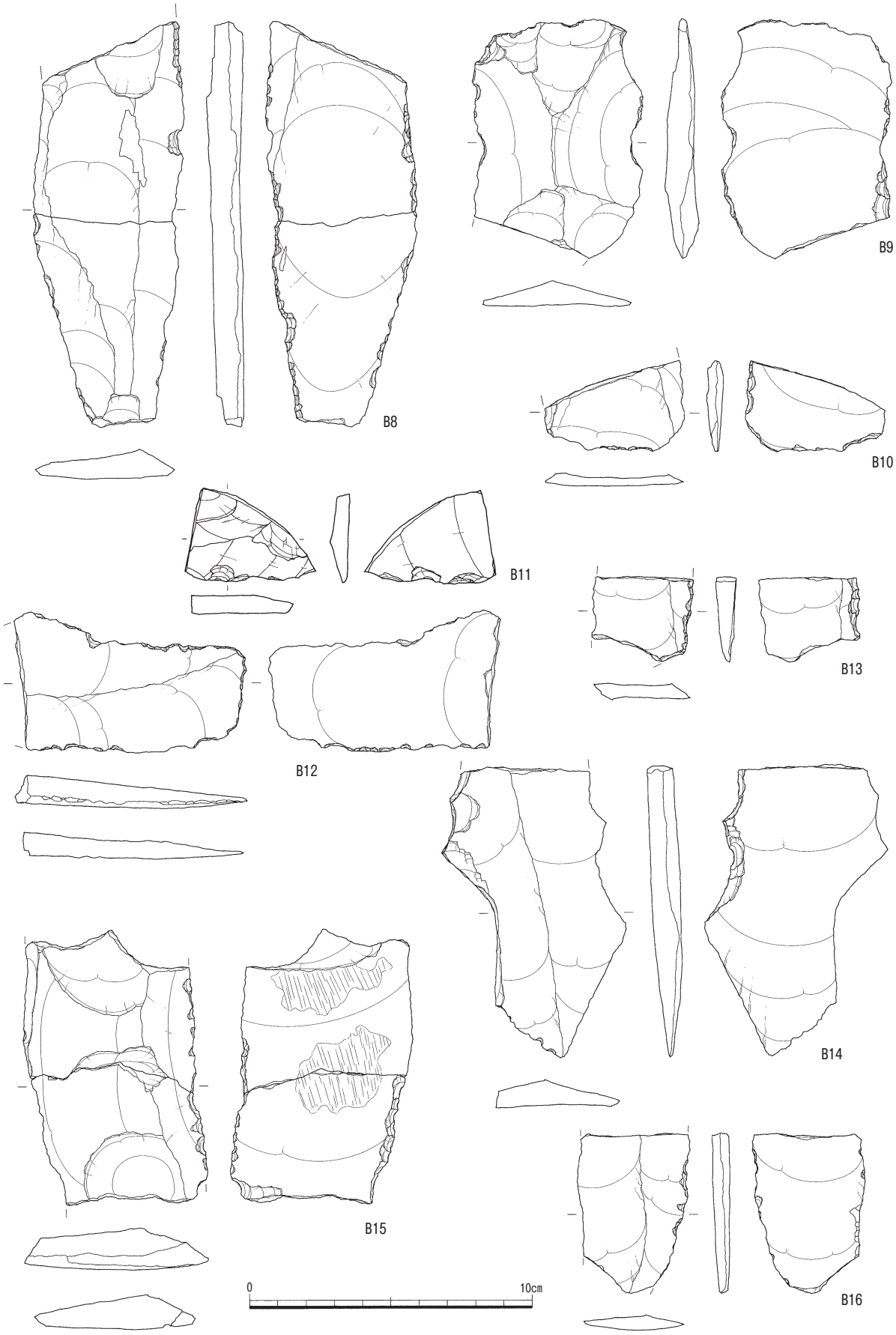
第139図　95，96号竪穴住居状遺構実測図



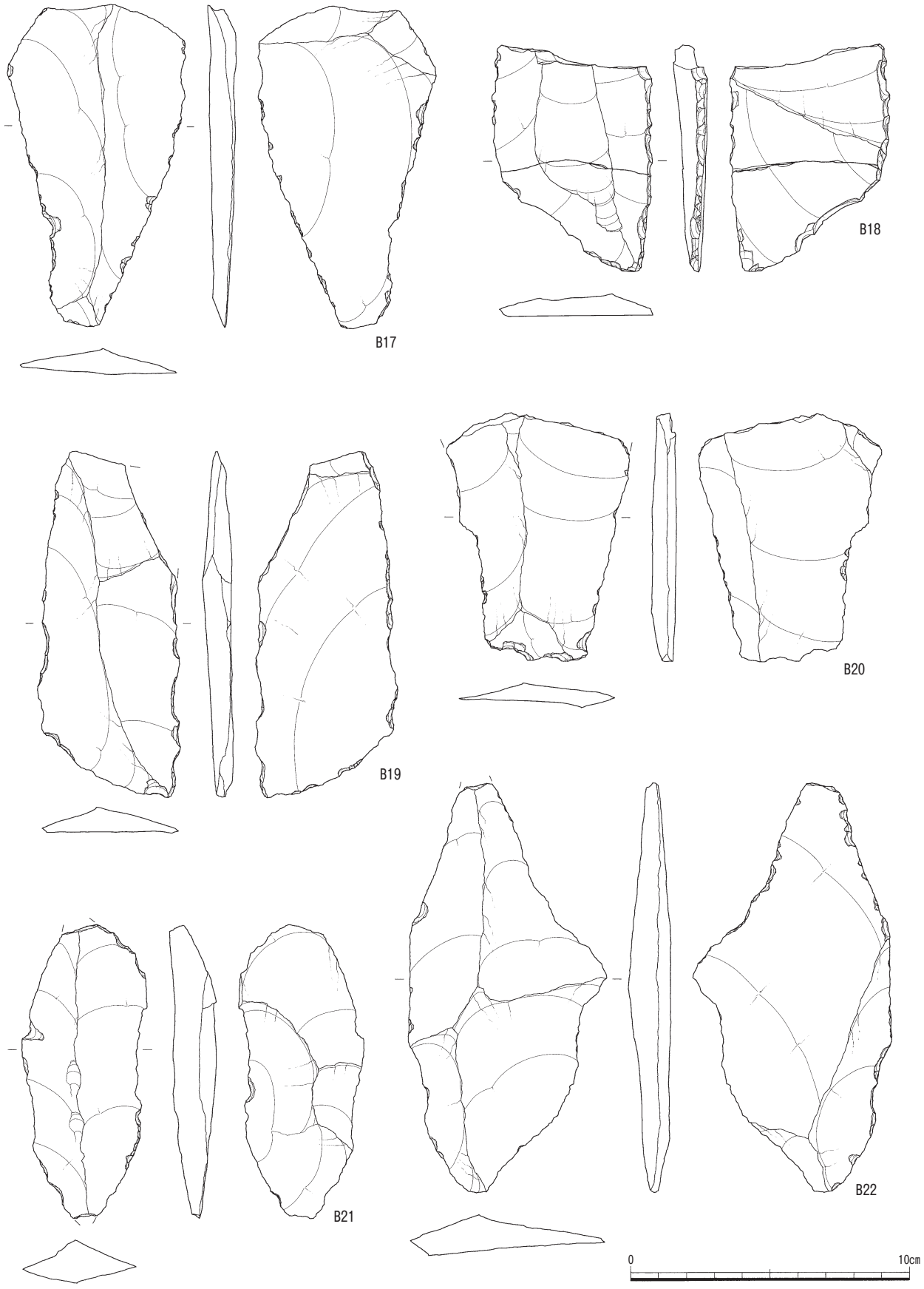
第140図　竪穴住居状遺構内出土土器57



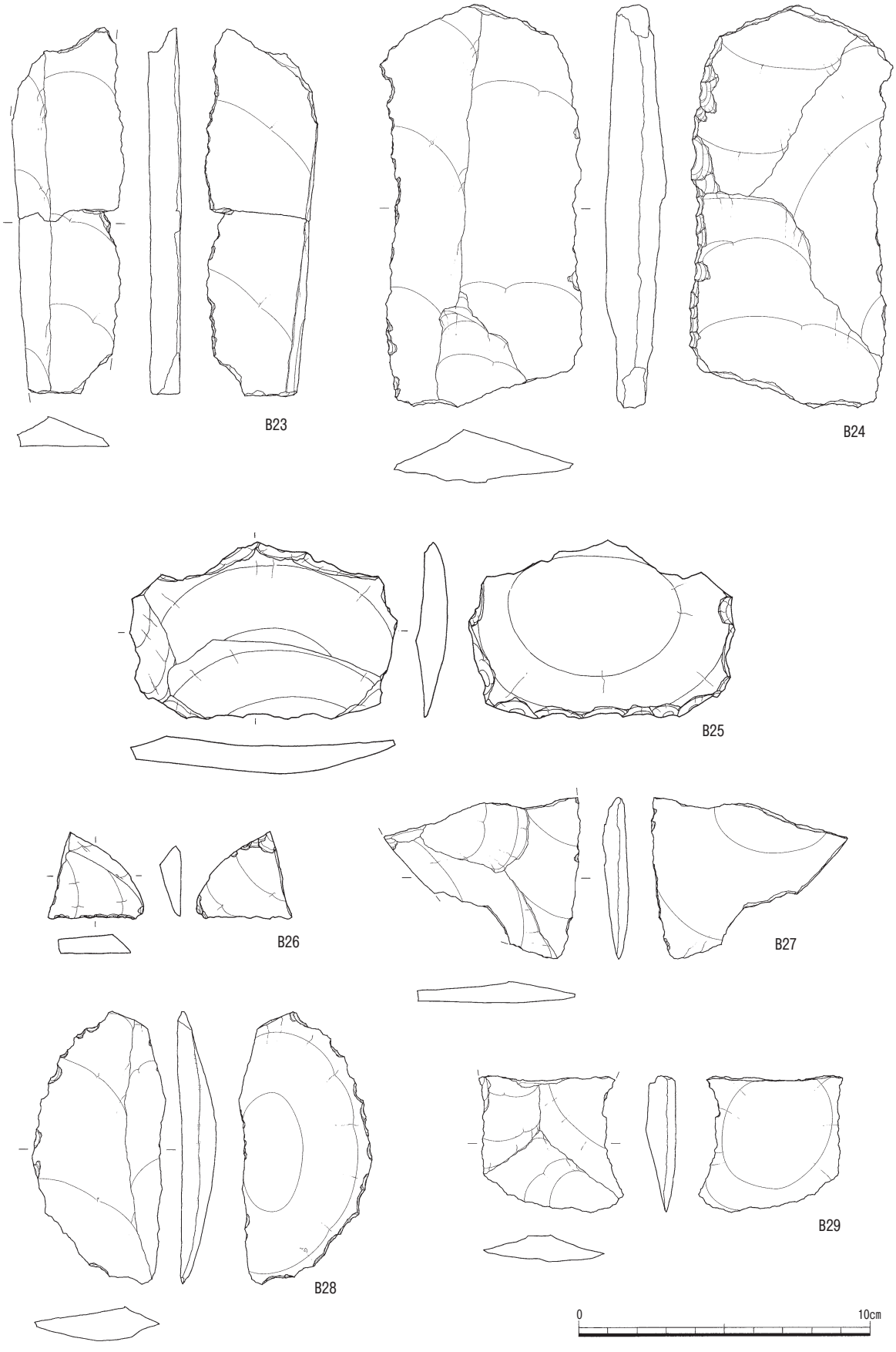
第141図　竪穴住居状遺構内出土石器 1



第142図　竪穴住居状遺構内出土石器２

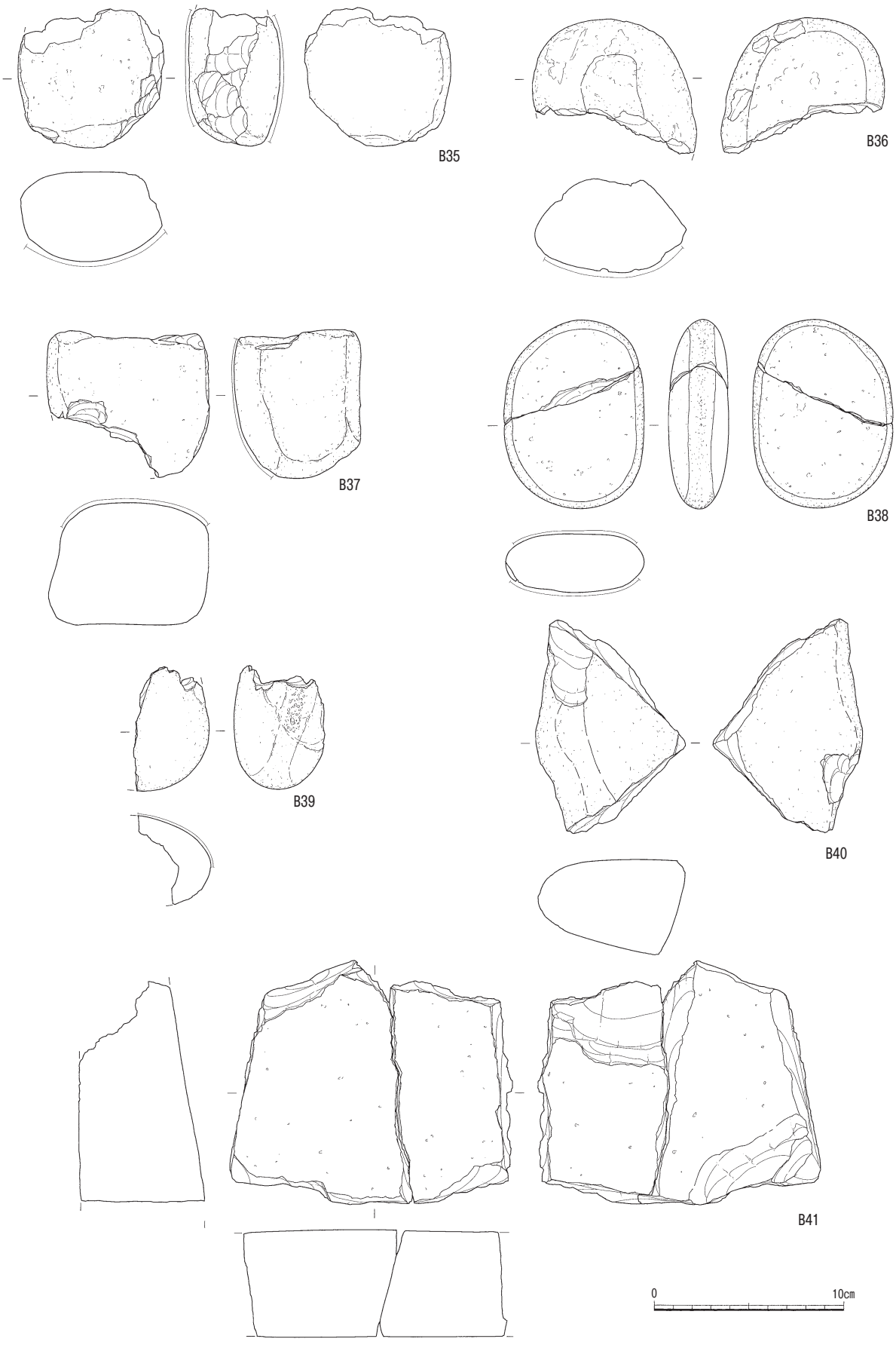


第143図　竪穴住居状遺構内出土石器３

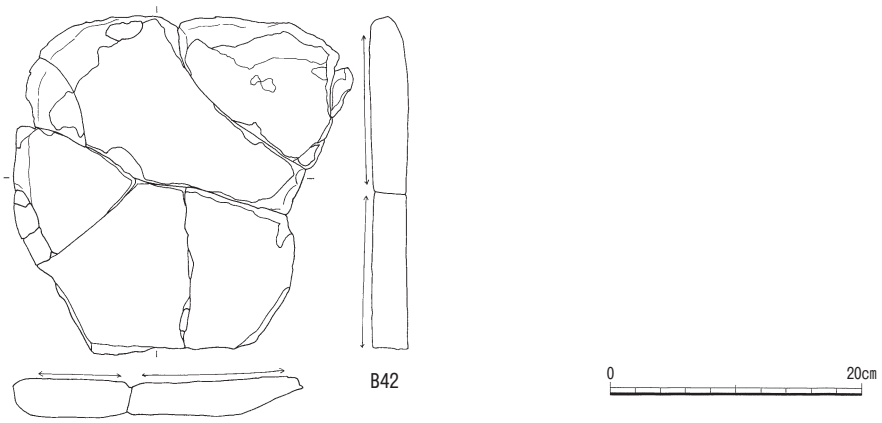


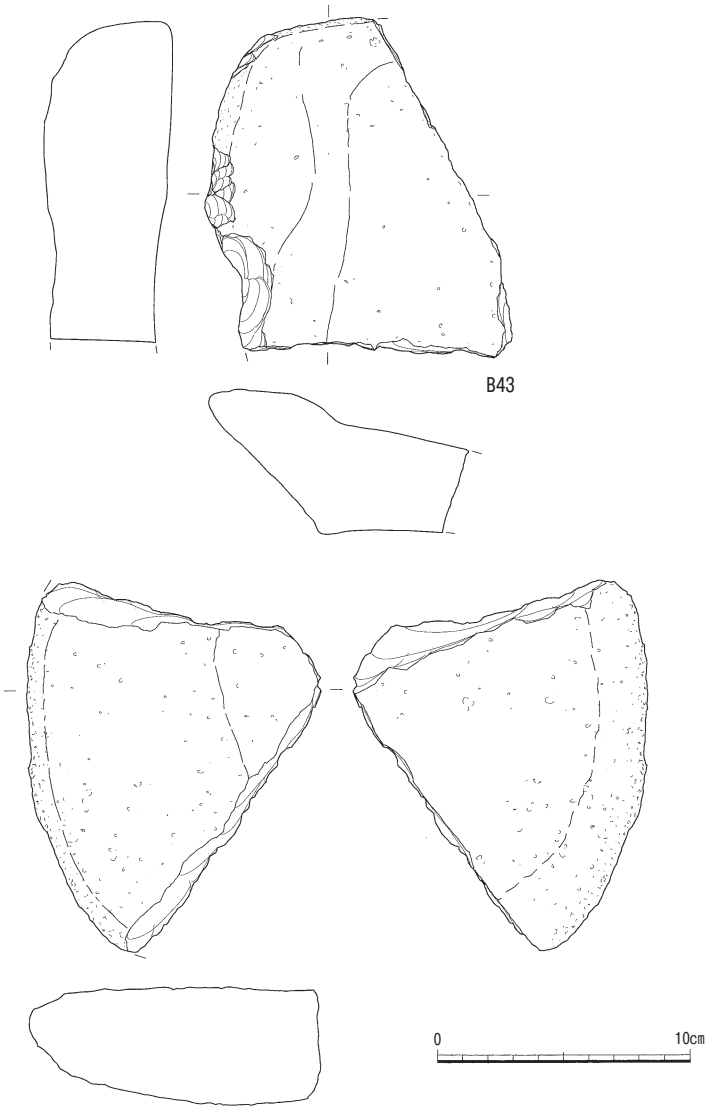
第144図　竪穴住居状遺構内出土石器４

第145図　竪穴住居状遺構内出土石器５

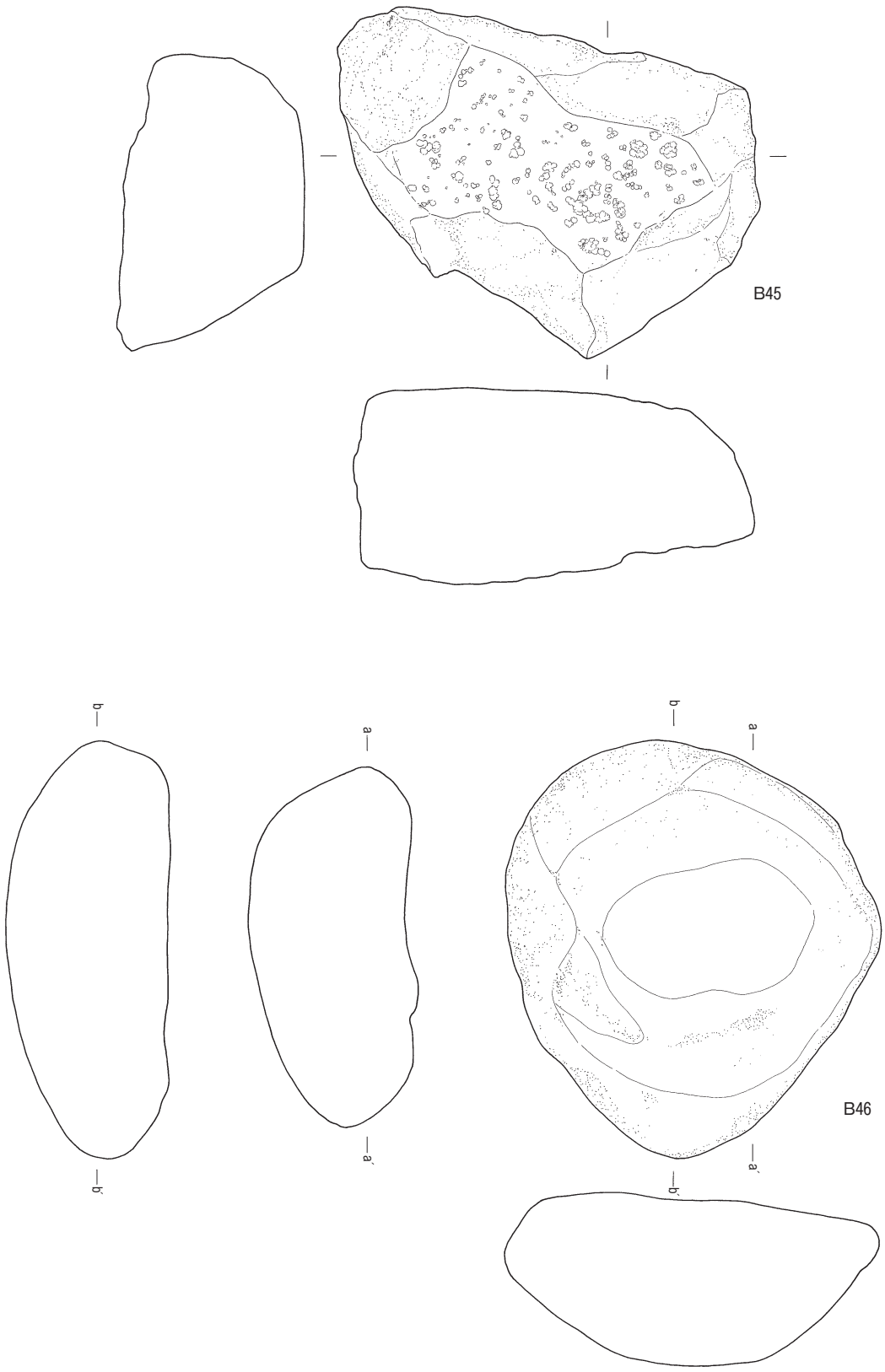


第146図　竪穴住居状遺構内出土石器６

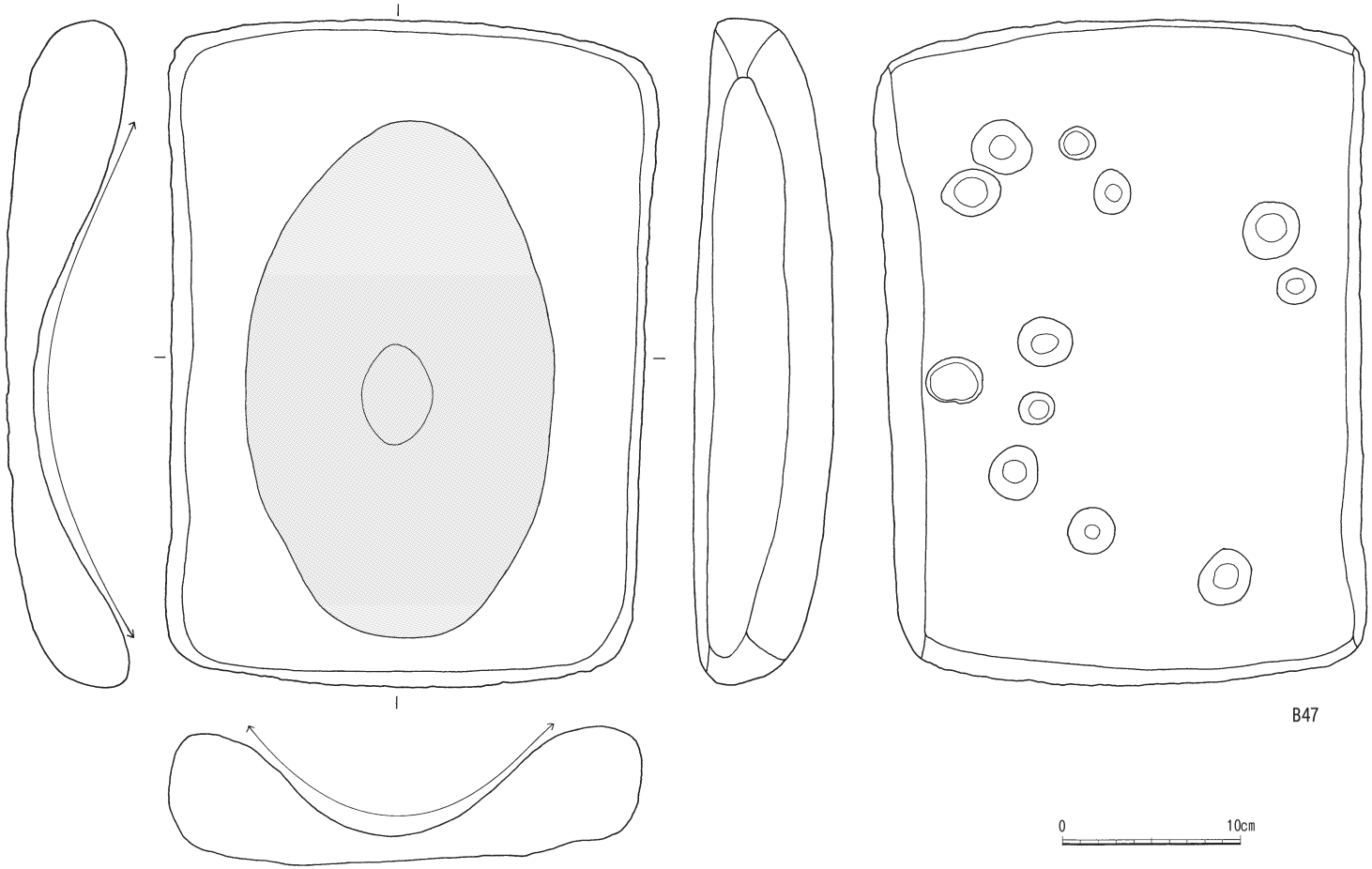




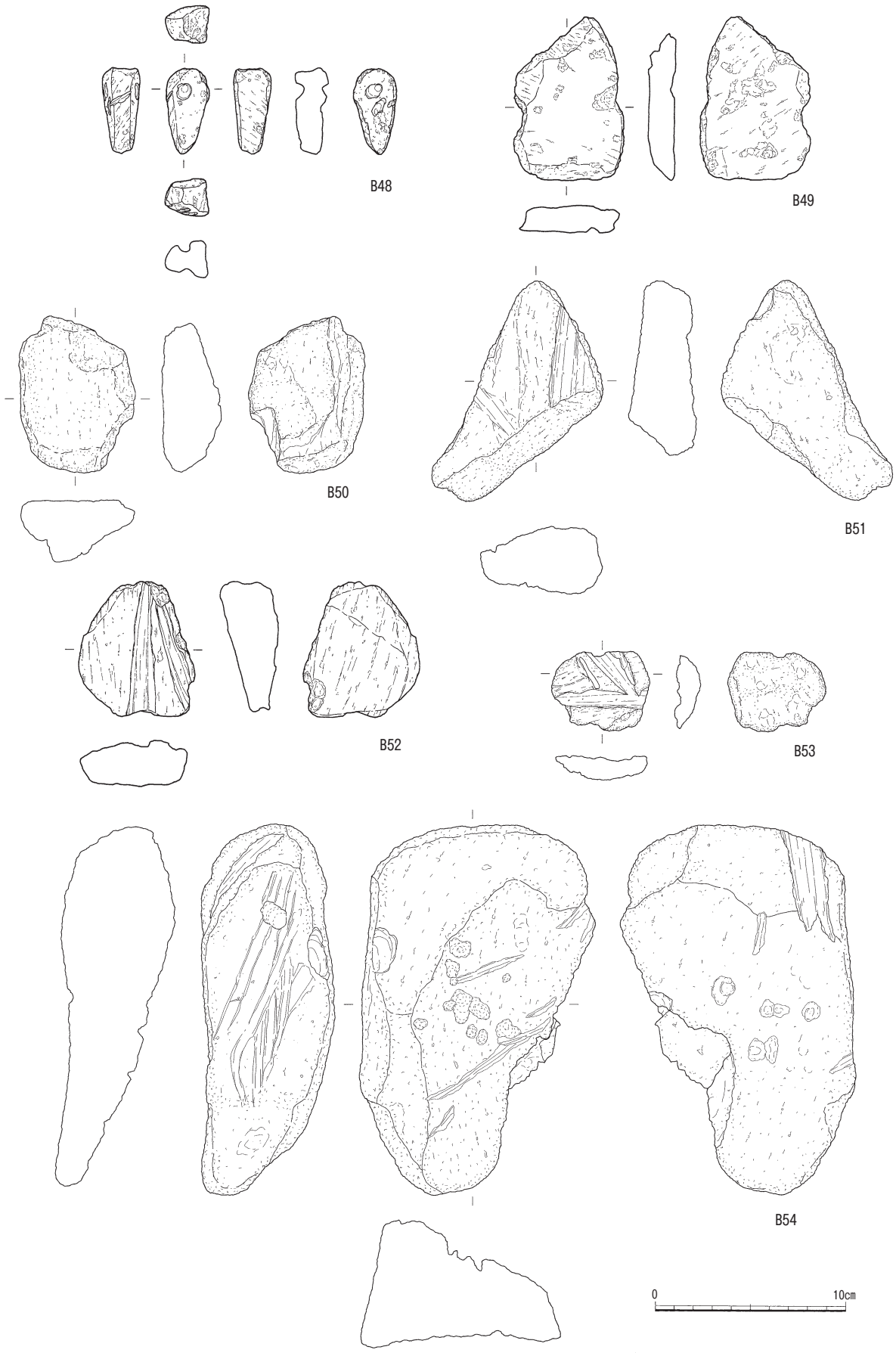
第147図　竪穴住居状遺構内出土石器７



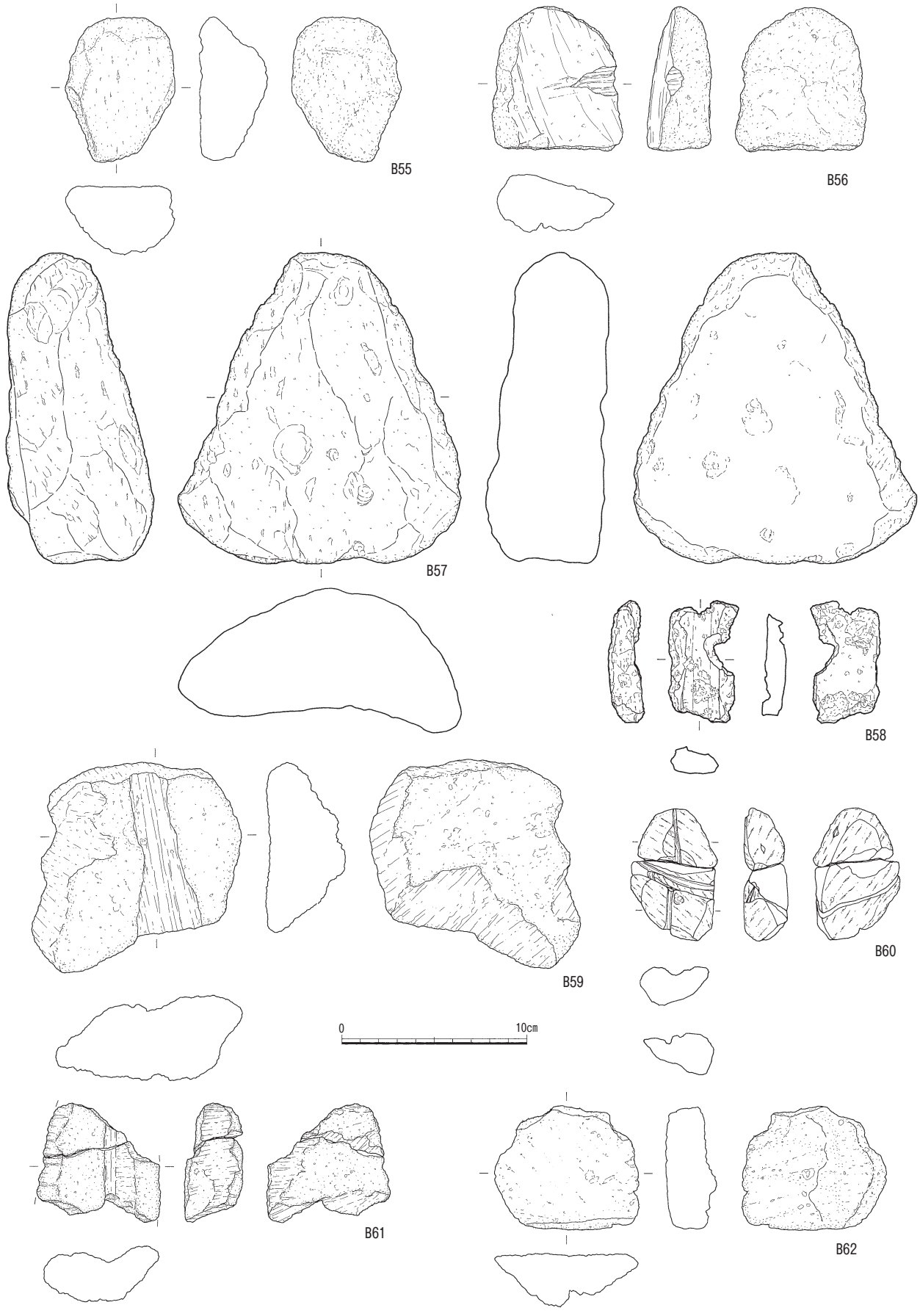
第148図　竪穴住居状遺構内出土石器８



第149図　竪穴住居状遺構内出土石器９



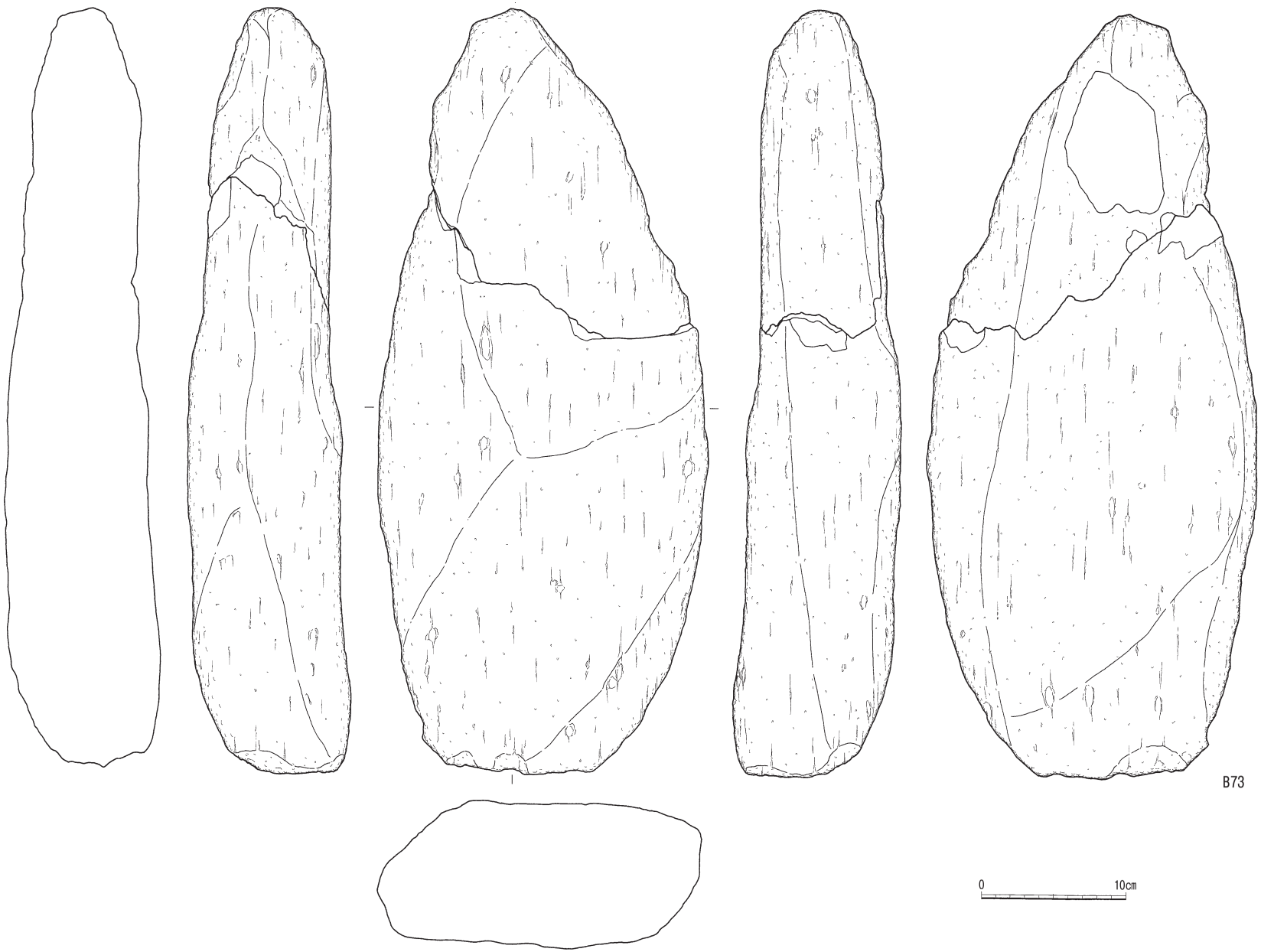
第150図　竪穴住居状遺構内出土石器10



第151図　竪穴住居状遺構内出土石器11

第152図　竪穴住居状遺構内出土石器12

第153図　竪穴住居状遺構内出土石器13



第154図　竪穴住居状遺構内出土石器14

（2）土　坑

土坑は258基検出された。これらのうち，ほぼ単独で検出されたのは149基であった。平面形をもとに以下の10のタイプに分類した。

Type 1……ほぼ円形を呈するもの
Type 2……楕円形状を呈するもの
Type 3……楕円形スモールタイプ（長軸がほぼ１ｍ以下のもの）
Type 4……隅丸正方形状を呈するもの
Type 5……隅丸長方形状を呈するもの
Type 6……隅丸長方形ロングタイプ（長軸が短軸の倍以上あるもの）
Type 7……五角形状を呈するもの
Type 8……釣鐘状を呈するもの
Type 9……その他（不定形あるいは重複により形状が不明なもの）
Type10……いわゆる連穴土坑

これらのうち，「その他」を除いて最も多かったのが，「隅丸長方形タイプ」であった。次いで「楕円形タイプ」，「楕円形スモールタイプ」，「隅丸長方形ロングタイプ」であった。つまり，「隅丸長方形」と「楕円形」のタイプが多いということができる。

Type 1（円形タイプ：第155図）

37号土坑（SK37）　SK37はC13区において単独で検出された。長軸100cm，短軸90cm，深さ約65cm，検出面積0.71㎡を測る。長短値は0.90であった。掘り込みは深くXIII層の上部にまで達している。埋土は白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）を基本に，下部には淡褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。埋土①中には，Ｐ13の可能性がある黄褐色の軽石も若干見られた。

遺物は８点出土し，２点を図化した。A555は前平式土器の口縁部片である。口縁外面端部に貝殻腹縁部による斜位の連続刺突文が施されている。施文時に粘土が柔らかかったせいか，刺突による反発で施文間がやや盛り上がり，口唇部は波状を呈している。口縁直下外面には横位の，胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。A559はSK37内の土器片４点が接合したもので，前平式土器の胴部片である。外面は斜位の貝殻条痕文が顕著である。また内面は縦方向のヘラケズリ痕が観察できる。また，補修孔の一部と見られる穿孔の痕（半円状）も確認できる。

128号土坑（SK128）　SK128はC8区において単独で検出された。長軸105cm，短軸100cm，深さ25cm強，検出面積0.80㎡を測る。長短値は0.95であった。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層（埋土①）を基本とし，下部には淡茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。埋土①には，薩摩火山灰層の拳大ブロックが多く含まれていた。埋土中から出土した遺物は無かった。

251号土坑（SK251）　SK251はC12区において単独で検出された。長軸，短軸共に80cmを測る。深さは20cm弱で，検出面積0.47㎡であった。遺構の検出ラインに多少の凸凹はあるが，ほぼ平面プラン円形を呈するタイプである。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には暗茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

Type 2（楕円形タイプ：第155～158図）

3号土坑（SK03） SK03はC11区で検出された。西隣ではSH12が検出されている。長軸が155cm，短軸115cm，深さ25cm弱，検出面積1.33㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層（やや硬質）を基本に，床面付近では淡黄褐色粘質土層が堆積していた。埋土中には約５cm四方の薩摩火山灰ブロックが点在していた。

遺物は８点出土し，２点を図化した。A519は前平式土器の口縁部片である。口唇端部に貝殻腹縁部による縦位の連続刺突文を施している。口唇部に若干フラットな面が残るが，貝殻文の施文により，口唇部断面がやや舌状をなす。外面は口縁部直下に横位，その下に斜位の貝殻条痕が施されている。

4号土坑（SK04） SK04はC14区のD区寄りで検出された。長軸150cm，短軸115cm，深さ15cm強，検出面積1.70㎡を測る。床面中央では，径約45cm，深さ５cm強の浅いピットが検出された。また，南側には床面からの高さが約10cmほどのステップ状の広がり（85×25cm）がみられた。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が部分的に堆積していた。

遺物は25点出土し，10点を図化した。A532は前平式土器の完形資料である。口径24.0cm，底径19.8cm，器高36.35cmを測る。口縁部下に貝殻腹縁部による連続刺突文が施され，舌状の口唇部は若干波状を呈している。口縁部文様直下には横位の貝殻条痕文が，それより下位には斜位の貝殻条痕文が明瞭に施されている。斜位の貝殻条痕文は内面にもみられ，ヘラケズリと組み合わせた器面調整の様子を知る好資料である。接合した21点の土器片のうち，SK04からは７点の土器が出土した。A521は前平式土器の口縁部大片である。底部近くまである細長い資料である。口唇端部に貝殻腹縁部による縦位の連続刺突文を施している。口唇部には無文でフラットな面が残る。外面は口縁部直下に横位，胴部全体には斜位の貝殻条痕が施されている。A522もA521と同様な文様構成をもつ前平式土器の口縁部片である。口唇部はやや舌状を呈する。胴部の貝殻条痕もA521と同様である。A523～A529は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

6号土坑（SK06） SK06はF11区で検出された。北東隅でSK07と重複する。長軸170cm，短軸105cm，深さ20cm強，検出面積1.43㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい暗茶褐色土層が部分的に堆積していた。

遺物は11点出土し，１点を図化した。A535は前平式土器の底部片である。底径11.0cmを測る。外面には斜位の貝殻条痕が施されている。他の遺物の多くは，焼礫であった。

重複するSK07との関係については，埋土観察の結果，黄色および白色のパミスの含有量（SK07の方が多い）の差から，SK07の方が新しいことが判明した。

14号土坑（SK14） SK14はC8区とC9区の境界線上において単独で検出された。長軸100cm，短軸60cm，深さ25cm弱，検出面積0.50㎡を測る。埋土は白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部ではわずかに黒色土を含む淡茶褐色の粘質土層が部分的に堆積していた。

当初，隣接するSK127とセットで，いわゆる連穴土坑になるのではと検討したが，２つの土坑がトンネルで繋がることはなく，それぞれ独立していることが判明した。

遺物は２点出土し，１点を図化した。

18号土坑（SK18） SK18はD15区において単独で検出された。長軸115cm，短軸70cm，深さ約15cm，検出面積0.58㎡を測る。埋土は白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

遺物は１点出土したが細片のため図化できなかった。

28号土坑（SK28） SK28はD13区において単独で検出された。長軸175cm，短軸120cm，深さ15cm強，検出面積1.50㎡を測る。南側の一部では樹痕が絡み，攪乱を受けていた。埋土は白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

埋土中から出土した遺物はなかった。

30号土坑（SK30） SK18はC13区において単独で検出された。長軸105cm，短軸70cm，深さ約10cm，検出面積0.49㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡褐色土層が堆積していた。

遺物は２点出土し，１点を図化した。A553は前平式土器の底部片で，径約17.0cmを測る。ほとんど底面部分であるが若干残る胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。また，底部外面には貝殻条痕による仕上げの痕が顕著に見られる。

31号土坑（SK31） SK31はC13区において単独で検出された。長軸105cm，短軸60cm，深さ約16cm，検出面積0.48㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡褐色土層が堆積していた。

埋土中から出土した遺物は無かった。

34号土坑（SK34） SK34はC12区およびD12区の境界線上において単独で検出された。南側ではSH19が近接して検出されている。長軸205cm，短軸135cm，深さ約18cm，検出面積2.06㎡を測る。本遺跡の土坑の中では比較的大形のものである。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡褐色土層が堆積していた。

遺物は３点出土し，１点を図化した。A554は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕文が施されている。

46号土坑（SK46） SK46はD16区およびD17区の境界線上において単独で検出された。長軸180cm，短軸100cm，深さ20cm強，検出面積1.31㎡を測る。床面中央よりやや北側では，長軸55cm，短軸40cm，深さ約５cmの小ピットが検出された。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。拳大の薩摩火山灰層のブロックがいくつか含まれていた。

47号土坑（SK47） SK47はD16区において単独で検出された。長軸170cm，短軸90cm，深さ約25cm，検出面積1.08㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを比較的多く含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。拳大の薩摩火山灰層のブロックもみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

53号土坑（SK53） SK53はC17区において単独で検出された。長軸115cm，短軸85cm，深さ約17cm，検出面積0.67㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。拳大の薩摩火山灰層のブロックもみられた。埋土中

から出土した遺物は無かった。

56号土坑（SK56） SK56はD17区において単独で検出された。長軸140cm，短軸85cm，深さ約17cm，検出面積0.90㎡を測る。埋土は黄色パミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

60号土坑（SK60） SK60はD18区において単独で検出された。長軸160cm，短軸90cm，深さ約15cm，検出面積1.12㎡を測る。床面のほぼ中央に長軸55cm，短軸40cmの小ピットが検出された。ピットの最深部は床面からの深さ約30cmであった。遺構全体の埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

64号土坑（SK64） SK64はE13において単独で検出された。長軸115cm，短軸80cm，深さ10cm弱，検出面積0.71㎡を測る。床面のほぼ中央に径約30cmの小ピットが検出された。ピットの最深部は床面からの深さ約10cmであった。小ピットも含む遺構全体の埋土は，黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層であった。遺構内から出土した遺物は無かった。

65号土坑（SK65） SK65はE13において単独で検出された。長軸120cm，短軸60cm，深さ約22～24cm，検出面積0.51㎡を測る。埋土は黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい暗茶勝色土層が堆積していた。遺物は７点出土し，うち５点は接合し，同一個体であることが判明した。○がそうである。前平式土器の底部から胴部にかけての資料で，底径17.2cmを測る。外面には横位の貝殻条痕文が明瞭に施されている。胴部の立ち上がり部分には，わずかに横位の貝殻条痕文が見られる。底部外面にも貝殻腹縁部による調整痕が観察できる。A558は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

69号土坑（SK69） SK69はD11区において単独で検出された。長軸180cm，短軸130cm，深さ12～16cm，検出面積1.83㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

73号土坑（SK73） SK73はE17区において単独で検出された。長軸90cm，短軸55cm，深さ16cm，検出面積0.40㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

78号土坑（SK78） SK78はC10区において単独で検出された。長軸145cm，短軸115cm，深さ約20cm，検出面積1.36㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層を基本とし，下部には淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は２点出土し，１点を図化した。A564は前平式土器の口縁部片である。風化が激しく，不明瞭な部分も多いが，口唇外面端部に貝殻腹縁部による連続刺突文が施されている。胴部外面には横位ないし斜位の貝殻条痕文がみられる。口唇部はフラットで無文である。

80号土坑（SK80） SK80はC17区において単独で検出された。遺構は調査区外の畑地まで延びていると考えられる。現状のサイズは長軸80cm，短軸85cm，深さ約35cm＋α，検出面積0.53㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

99号土坑（SK99） SK99はG5区で検出された。西側でSK98とSK100が重複して検出された。長

軸115cm，短軸55cm，深さ約15cm，検出面積0.53㎡を測る。西側隅では長軸50cm，短軸42cm，深さ約25cmの小ピットが検出された。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は９点出土し，１点を図化した。A571は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

101号土坑（SK101） SK101はD12区において単独で検出された。長軸165cm，短軸140cm，深さ約20cm，検出面積1.55㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は３点出土し，１点を図化した。A574は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

104号土坑（SK104） SK104はF10区とF11区の境界線上において検出された。北側でSK105が重複して検出された。長軸105cm，短軸60cm，深さ約23cm，検出面積0.52㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミス（Ｐ13と考えられる）を多く含む黒褐色土層を基本に，下部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

112号土坑（SK112） SK112はC11区とD11区の境界線上において検出された。長軸175cm，短軸105cm，深さ20cm弱，検出面積1.25㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，床面近くの一部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。遺物は３点出土し，１点を図化した。A580は前平式土器の口縁部片である。口唇外面端部とその直下にそれぞれヘラ状工具による連続刺突文が施されている。口唇部内側は，無文でフラット面を残す。外面は，口縁部直下が横位，さらにその下には斜位の貝殻条痕文が施されている。

116号土坑（SK116） SK116はC10区において単独で検出された。長軸95cm，短軸50cm，深さ60cm弱と深い。検出面積0.34㎡を測る。埋土には暗茶褐色土と明茶褐色土が混在していた。上部には薩摩火山灰層の拳大ブロックが多く含まれていた。遺物は前平式土器と考えられる胴部片が１点出土したが，摩滅が激しいため図化しなかった。

125号土坑（SK125） SK125はH10区において単独で検出された。長軸150cm，短軸80cm，深さ15cm弱，検出面積0.95㎡を測る。埋土には黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。本遺構は，工事用道路建設のため，平成16年度に発掘調査した際に検出されたものである。

132号土坑（SK132） SK132はD8区において単独で検出された。長軸105cm，短軸65cm，深さ約20cm，検出面積0.49㎡を測る。埋土には白色のパミスを含む黒褐色土を基本とし，床面近くには淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

144号土坑（SK144） SK144はC15区において単独で検出された。長軸85cm，短軸70cm，内部は三段構造になっており，深さはそれぞれ約15，25，38cmであった。最深部は土坑のほぼ中央にある径約20cmの小ピットの底面であった。検出面積は0.45㎡を測る。埋土は茶褐色土層および黒褐色土層の堆積を基本とし，小ピット部分には，暗茶褐色の粘質土層がみられた。遺物は３点出土した。A585とA586は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

157号土坑（SK157） SK157はH6区において単独で検出された。長軸130cm，短軸60cm，深さ約22cm，検出面積は0.64㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下

部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺構の中央部分では，人頭大ほどの薩摩火山灰ブロックが検出された。

158号土坑（SK158） SK158はG6区およびH6区の境界線上において検出された。南東側でSK260が重複して検出された。長軸195cm，短軸120cm，深さ約22cm，検出面積は1.80㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）を基本とし，床面付近には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土①中には薩摩火山灰層の拳大ブロックがいくつか検出された。遺物は２点出土し，１点図化した。A591がそうである。斜位の貝殻条痕文をもつ前平式土器である。

169号土坑（SK169） SK169はH4区において単独で検出された。長軸145cm，短軸105cm，深さ約15cm，検出面積は1.18㎡を測る。南側に床面から高さ10cmほどのステップ状平坦面が検出されている。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，床面付近には茶褐色の粘質土層が堆積していた。また，薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。遺物は３点出土し，１点図化した。A603は斜位の貝殻条痕文をもつ前平式土器である。

190号土坑（SK190） SK190はG3区およびH3区の境界線上において単独で検出された。長軸130cm，短軸60cm，深さ35cm強，検出面積は0.59㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

201号土坑（SK201） SK201はD5区において単独で検出された。長軸155cm，短軸105cm，深さ25～30cm，検出面積は1.16㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物が３点出土した。A618は志風頭式土器の胴部片と考えられる。横位の貝殻条痕文の上に縦方向の貝殻条痕文が重ねて施されたものである。A619の胴部片は外面に斜位の貝殻条痕文が見られる。型式については不明瞭である。

205号土坑（SK205） SK205はC12区において単独で検出された。北西側は削平されている。長軸155cm，現存する短軸60cm，深さ約５cm，検出面積0.72㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は１点出土したが，細辺のため図化できなかった。

222号土坑（SK222） SK222はE7区において単独で検出された。長軸170cm，短軸130cm，深さ15～20cm，検出面積1.57㎡を測る。埋土は白色のパミス（Ｐ13？）を含む黒褐色土層を基本に，下部には暗茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

232号土坑（SK232） SK232はG6区において単独で検出された。長軸185cm，短軸105cm，深さ20～25cm，検出面積1.42㎡を測る。埋土は白色のパミス（Ｐ13？）を含む黒褐色土層を基本に，下部には暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は４点出土したが小片のため図化できなかった。

236号土坑（SK236） SK236はE11区において単独で検出された。長軸160cm，短軸100cm，深さ15～20cm，検出面積1.23㎡を測る。埋土は白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物は１点出土した。A628は前平式土器の口縁部片である。口唇外面端部に貝殻腹縁部の刺突文を施したものである。口唇部は舌状を呈する。外面には横位の貝殻条痕文がみられる。

246号土坑（SK246） SK246はC8区およびC9区において単独で検出された。長軸100cm，短軸

65cm，深さ約20cm，検出面積0.54㎡を測る。埋土は暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

249号土坑（SK249） SK249はH3区およびH4区の境界上において検出された。北側でSK189が重複して検出された。長軸135cm，現存する短軸100cm，深さ20～23cm，検出面積0.94㎡を測る。埋土は炭化物の粒子を含む暗褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

250号土坑（SK250） SK250はG4区において検出された。西側でSK170，SK171が重複して検出された。現存する規模は長軸160cm，現存する短軸100cm，深さ約45cm，検出面積53.82㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が上位に，下位にはや暗茶褐色や暗黄褐色の土層が堆積していた。いずれも炭化物の粒子を含んでいた。本遺構が重複する２つの土坑は，いずれも連穴土坑タイプで，火を使用する施設と考えられるが，本遺構の場合，連穴土坑的な構造は想定しにくいものの，埋土中からやはり炭化物が出土していることから，火に関連する何らかの施設であった可能性が高い。遺構の想定範囲内からは，10点の遺物が出土し，４点を図化した。A636は円筒土器の口縁部片である。フラットで無文の口唇部をもち，口唇部直下外面に先端の細い施文具で刻み状の連続刺突文を巡らし，さらにその下に竹管状の押圧文を施したもので，胴部には斜位の貝殻条痕文が見られる。前平式土器の範疇でとらえられるものと考える。A637は外面に斜位の貝殻条痕文が施された底部片である。前平式土器と考えられる。A636と同一個体である可能性もある。B82は軽石製品である。幅約１cmの溝が約４cmにわたって残っている。長さ6.5cm，幅7.05cm，厚さ2.90cm，重さ21.05gを測る。

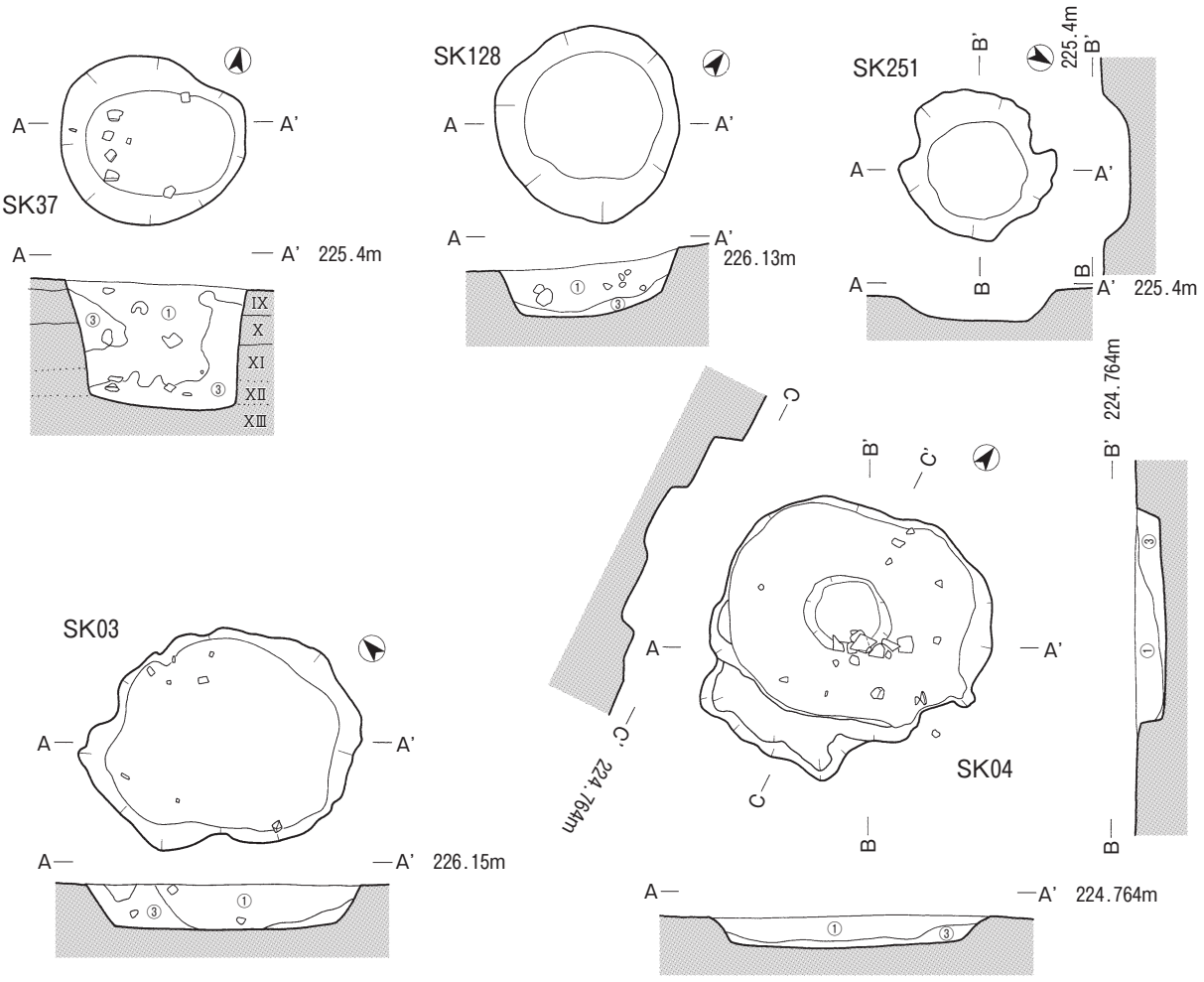
252号土坑（SK252） SK252は長軸120cm，短軸75cm，深さ30cm弱，検出面積0.67㎡を測る。埋土は黄色のパミスを若干含む黒褐色土層を上部に，Ｐ13と考えられる黄色のパミスをや薩摩火山灰層の拳大ブロックを含む黒茶褐色土層（炭化物粒子を若干含む），比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。炭化物の粒子を含む暗褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

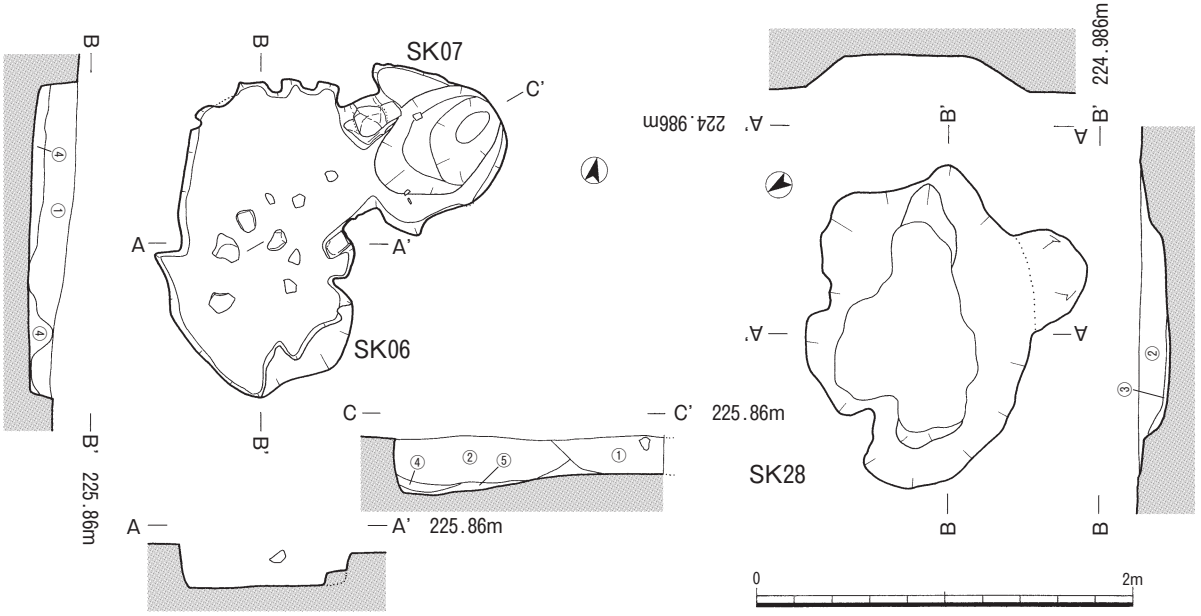
259号土坑（SK259） SK259はG6区において単独で検出された。長軸190cm，短軸150cm，深さ15cm弱，検出面積2.23㎡を測る。本遺跡の中では大形の土坑に入る。埋土は黄色のパミスを若干含む黒褐色土層を上部に，Ｐ13と考えられる黄色のパミスをや薩摩火山灰層の拳大ブロックを含む黒茶褐色土層（炭化物粒子を若干含む），比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。炭化物の粒子を含む暗褐色の粘質土層が堆積していた。遺物は４点出土したが小片のため図化しなかった。

268号土坑（SK268） SK268はF10区において検出された。北西側でSK55が重複して検出された。長軸115cm，短軸80cm，深さ20～25cm，検出面積0.58㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層や淡黄茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

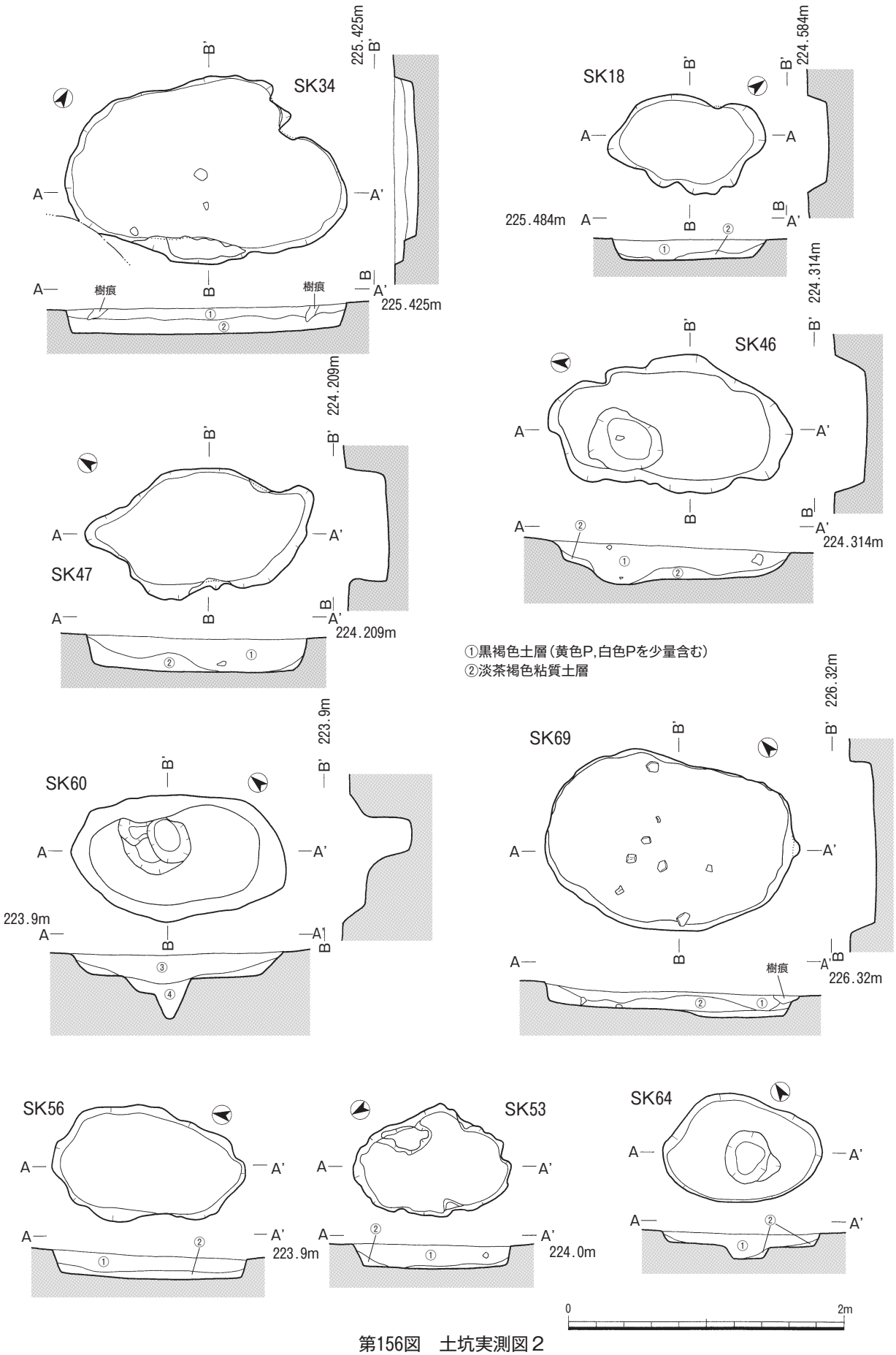
Type ３（楕円形スモールタイプ：第159，160図）

７号土坑（SK07） SK07はF11区で検出された。北東隅でSK06と重複する。長軸80cm，短軸65cm，深さ約30cm，検出面積0.43㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，その下に比較的柔らかい暗茶褐色土層，床面付近では暗黄茶褐色土層が堆積していた。

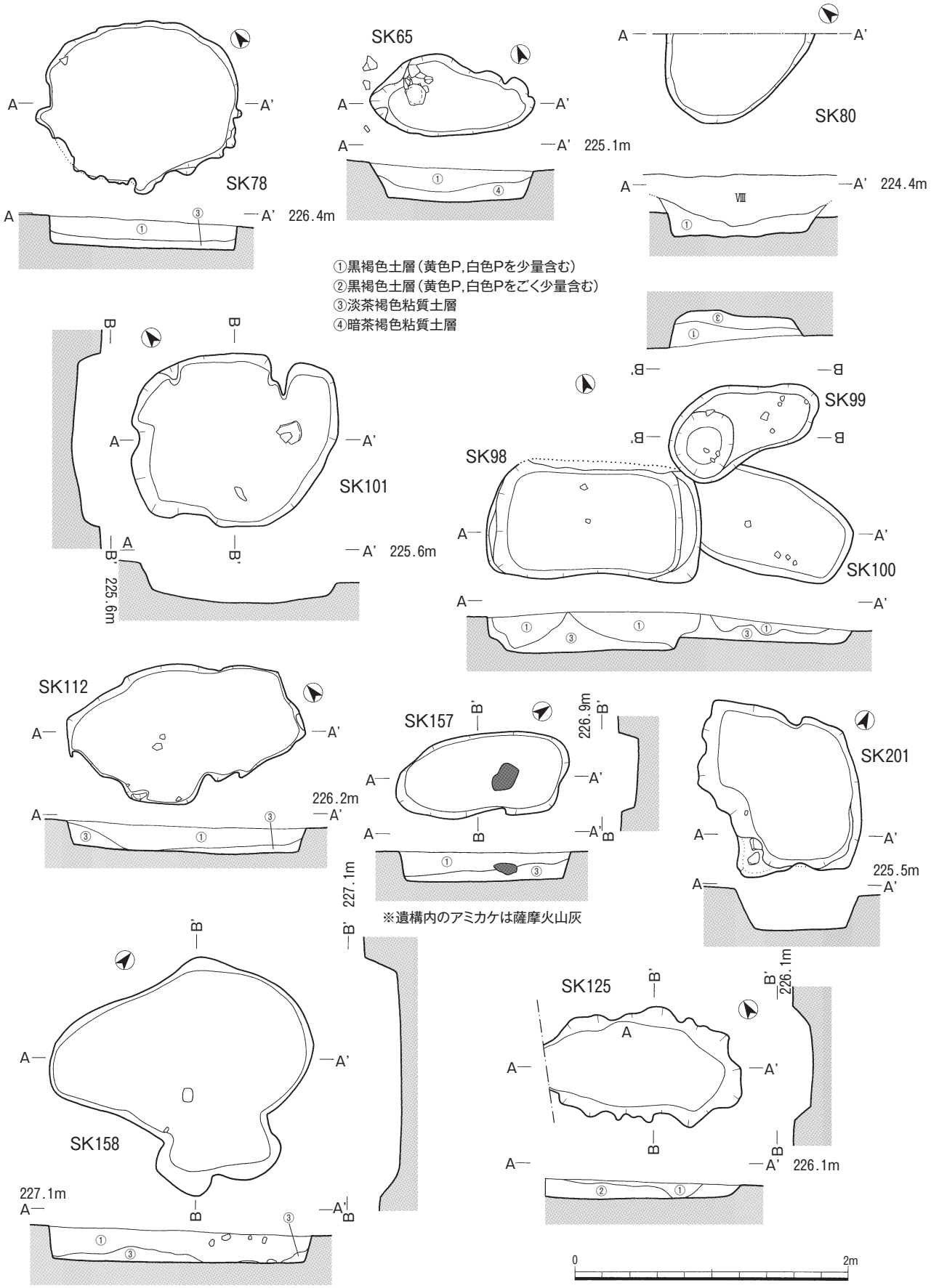




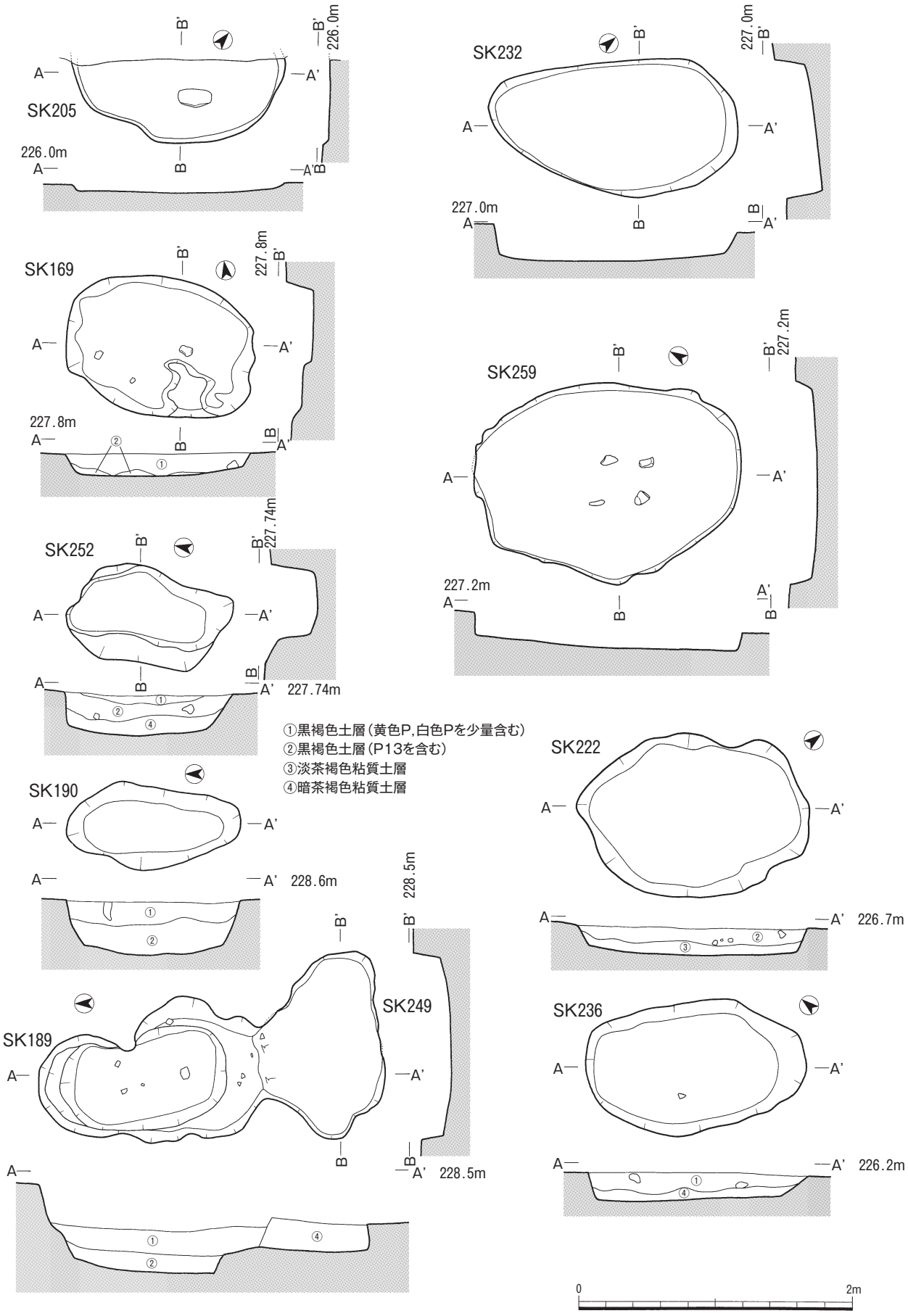
第155図　土坑実測図１



第156図　土坑実測図２



第157図　土坑実測図３



第158図　土坑実測図４

遺物は３点出土し，１点を図化した。A536は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕が施されている。

19号土坑（SK19） SK19はC17区において単独で検出された。長軸85cm，短軸70cm，深さ35cm強，検出面積0.44㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。後述するSK20と近接して検出された。

20号土坑（SK20） SK20はC17区において単独で検出された。長軸95cm，短軸75cm，深さ30cm強，検出面積0.53㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。前述したSK19と近接して検出された。

29号土坑（SK29） SK29はC8区で検出された。西側でSK130が重複して検出された。長軸70cm，短軸55cm，深さ20cm弱，検出面積0.30㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

36号土坑（SK36） SK29はC18区において単独で検出された。長軸70cm，短軸60cm，深さ20cm弱，検出面積0.30㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

41号土坑（SK41） SK41はC16区において単独で検出された。長軸95cm，短軸70cm，深さ20cm弱，検出面積0.54㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

51号土坑（SK51） SK51はC17区において単独で検出された。長軸100cm，短軸70cm，深さ約20cm，検出面積0.46㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

55号土坑（SK55） SK55はF10区において検出された。東南側でSK268が重複して検出された。長軸75cm，短軸50cm，深さ20cm強，検出面積0.28㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。A557は埋土中から出土した前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

57号土坑（SK57） SK57はC17区において単独で検出された。長軸95cm，短軸50cm，深さ約35cm，検出面積0.35㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とする。白色パミスが比較的多い埋土①と少ない埋土②に分けることができた。埋土中から出土した遺物は無かった。

59号土坑（SK59） SK59はF9区において単独で検出された。長軸90cm，短軸60cm，深さ約22cm，検出面積0.41㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

94号土坑（SK94） SK94はD11区において単独で検出された。SK93，SK95が近接して検出された。長軸100cm，短軸50cm，深さ20cm弱，検出面積0.41㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

124号土坑（SK124） SK124はB8区とC8区の境界線上で検出された。南東側でSK122と重複する。

長軸65cm，短軸35cm，深さ30cm強，検出面積0.20㎡と小形の土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。

129号土坑（SK129） SK129はC8区で検出された。南側でSK24と重複する。長軸70cm，短軸65cm，深さ20cm強，検出面積0.32㎡と小形の土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。

137号土坑（SK137） SK137はD8区において単独で検出された。南東側でSK136と近接する。長軸100cm，短軸55cm，深さ30cm弱，検出面積0.39㎡を測る。南西隅では径約35cm，深さ約20cmのピットが検出された。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。

139号土坑（SK139） SK139はD8区で検出された。北側でSK270，南側でSK271が重複して検出された。長軸100cm，短軸60cm，深さ約35cm，検出面積0.55㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は１点出土した。A583は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

142号土坑（SK142） SK142はD7区とD8区の境界線上で検出された。長軸90cm，短軸55cm，深さ約15cm，検出面積0.38㎡を測る。東隅で径20cm，深さ５cmのピットが検出されている。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とする。埋土から出土した遺物は無かった。

143号土坑（SK143） SK143はD7区のＣ区寄りで境界線上で検出された。長軸80cm，短軸45cm，深さ20cm弱，検出面積0.28㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とする。埋土から出土した遺物は無かった。

178号土坑（SK178） SK178はG4区において単独で検出された。長軸95cm，短軸55cm，深さ20cm弱，検出面積0.38㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい茶褐色土層が堆積していた。埋土から出土した遺物は無かった。

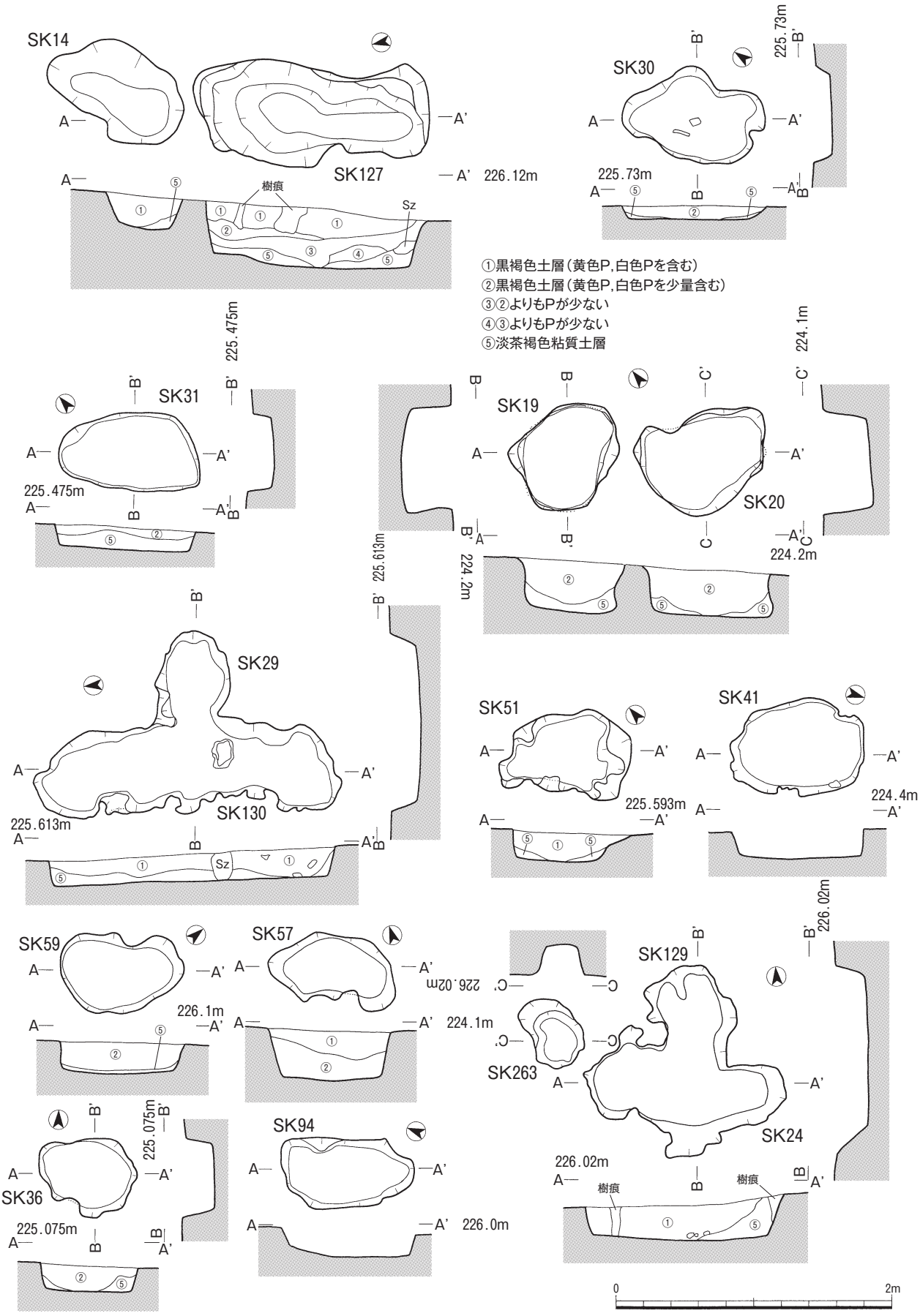
181号土坑（SK181） SK181はG4区において単独で検出された。長軸100cm，短軸50cm，深さ5～10cm，検出面積0.41㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい茶褐色土層が堆積していた。埋土から出土した遺物は無かった。

260号土坑（SK260） SK260はG6区およびH6区の境界線上で検出された。北西部でSK158が重複して検出された。全形は推測の域を出ないが，現況で長軸90cm，短軸35cm，深さ約13cm，検出面積0.31㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とする。埋土から出土した遺物は無かった。

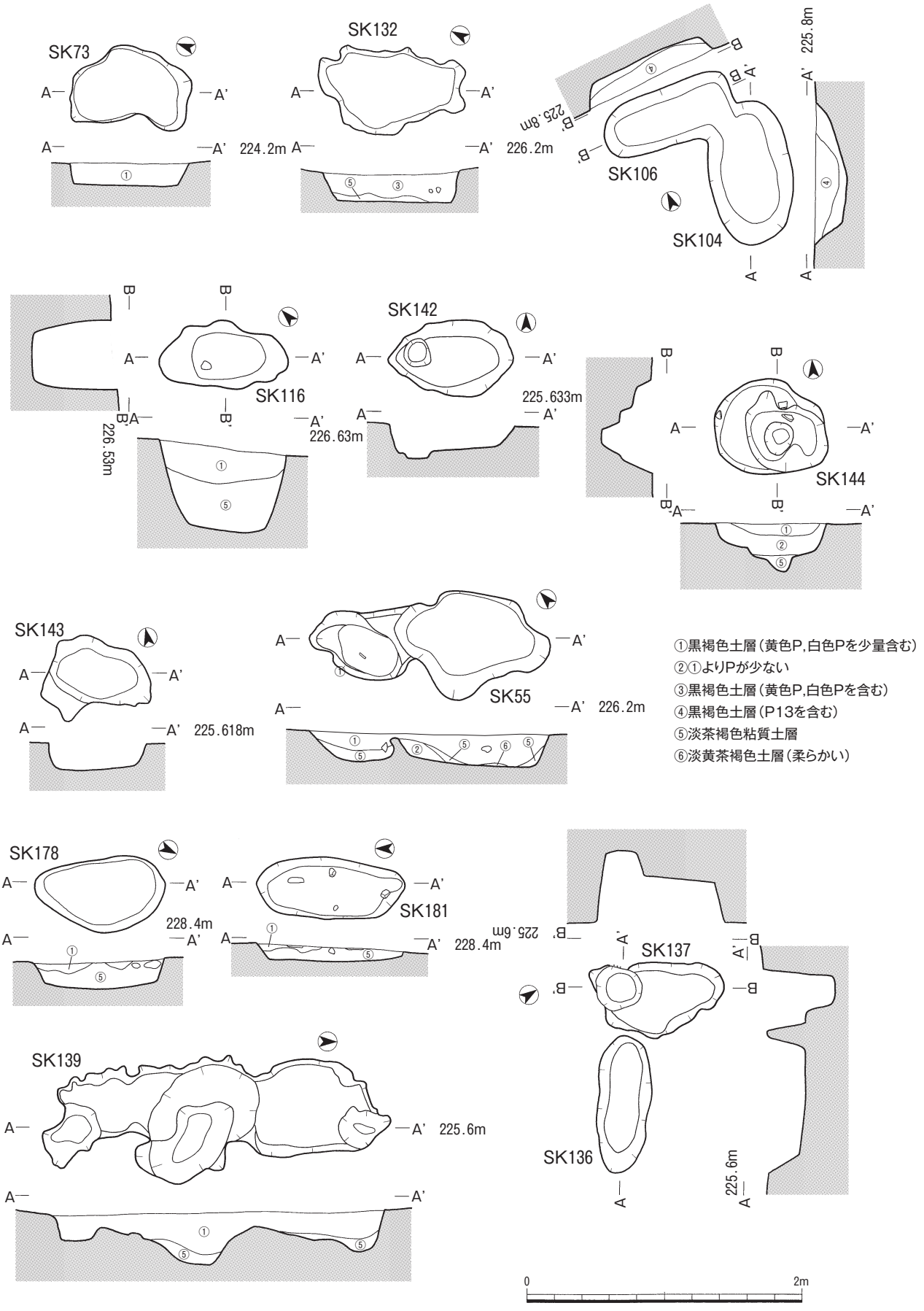
263号土坑（SK263） SK263はC8区において単独で検出された。東側にSK24，SK129が近接する。長軸55cm，短軸35cm，深さ20cm強，検出面積0.17㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とする。埋土から出土した遺物は無かった。

Type ４（隅丸正方形タイプ：第161，162図）

61号土坑（SK61） SK61はD18区において単独で検出された。長軸170cm，短軸150cm，深さが12～16cm，検出面積2.01を測る，比較的大形の土坑である。長短値は0.88であった。ほぼ床面中央で径約30cmの小ピットが検出された。遺構全体の埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色



第159図　土坑実測図５



第160図　土坑実測図６

土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が部分的に堆積していた。小ピットの埋土は淡黒褐色土層であった。埋土から出土した遺物は無かった。

81号土坑（SK81） SK81はB15区およびC15区の境界線上において単独で検出された。長軸100cm，短軸90cm，深さが約13cm，検出面積0.74㎡を測る。長短値は0.90であった。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土から出土した遺物は無かった。

121号土坑（SK121） SK121はF12区で検出された。東側でSH87，南側でSH90が重複して検出された。重複が激しく，SK121の輪郭は想定の域を出ないが，長軸130cm，短軸130cm，深さが約15cm，検出面積0.75㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土から出土した遺物は無かった。

166号土坑（SK166） SK166はG5区およびH5区の境界線上において単独で検出された。長軸170cm，短軸150cm，深さが約12cm，検出面積2.21㎡を測る。長短値は0.88であった。本遺跡の中では大形の土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，壁際には暗茶褐色の粘質土層（若干白色パミスを含む）が堆積していた。遺物は８点出土し，２点を図化した。A600とA601はいずれも前平式土器の胴部片で，外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

203号土坑（SK166） SK203はD6区およびE6区の境界線上において単独で検出された。長軸160cm，短軸145cm，深さが20cm弱，検出面積2.06㎡を測る。本遺跡の中では大形の土坑である。長短値は0.91であった。埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土層（埋土①）を基本とし，下部には暗茶褐色の粘質土層（埋土①が極小ブロックで若干混ざる）が堆積していた。埋土①は１cm大の黄色軽石（Ｐ13と考えられる）を含んでいた。遺物は２点出土し，１点を図化した。A620は縦横の貝殻条痕文がみられる底部片である。

211号土坑（SK211） SK211はＨ４区で検出された。北東側でSK184，南西側でSK183が重複して検出された。推定長軸75cm，短軸60cm，深さが8～12cm，検出面積0.65㎡を測る。長短値は0.80であった。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層が堆積していた。遺物が１点出土しているが,胴部小片のため図化しなかった。

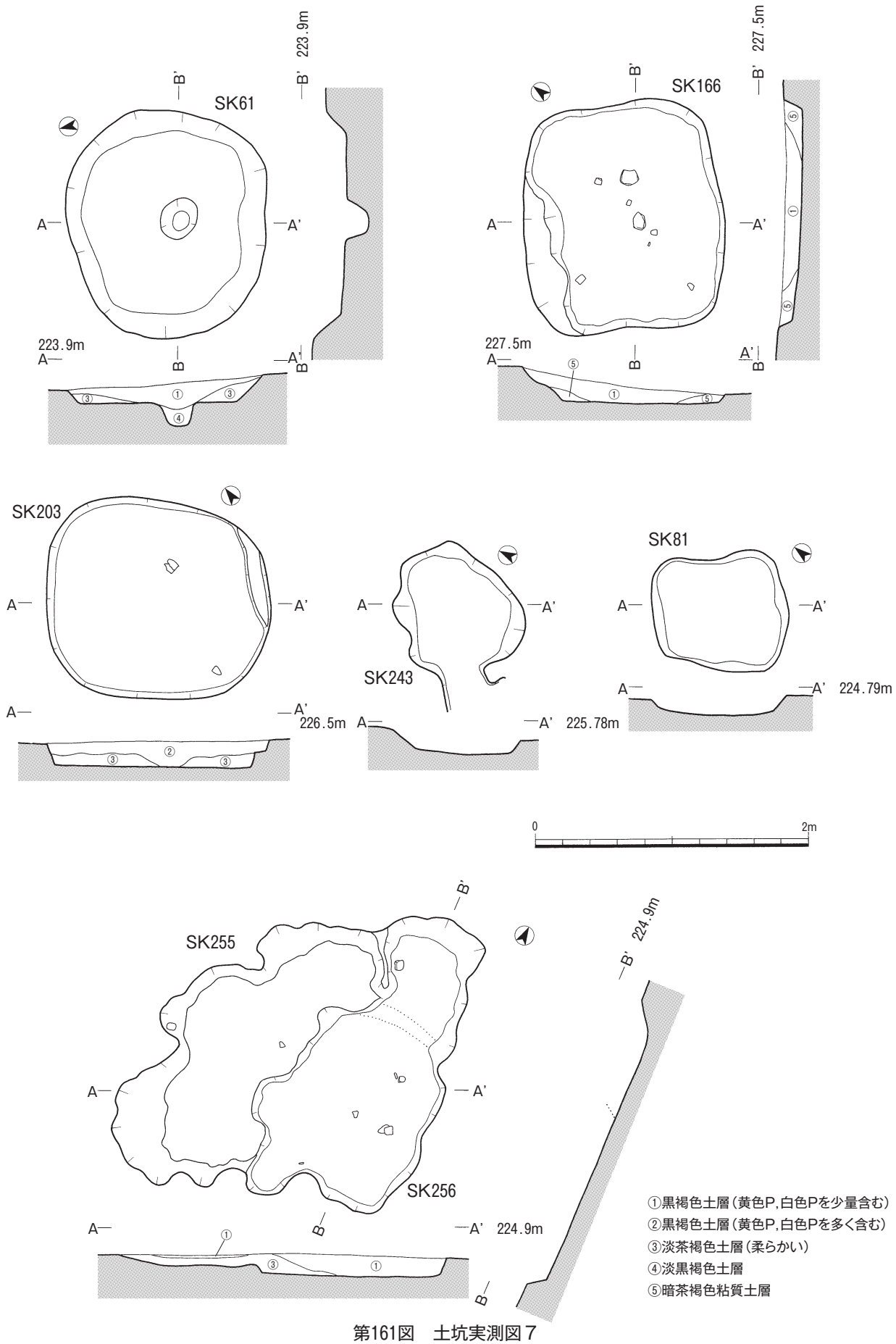
243号土坑（SK243） SK243はE11区において単独で検出された。長軸100cm，短軸90cm，深さ約12cm，検出面積0.69㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

256号土坑（SK256） SK256はD14区で検出された。東側でSK255と重複する。長軸135cm，短軸110cm，深さ約15cm，検出面積1,52㎡を測る。北側は樹痕で攪乱されている。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とし，下部に比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は７点出土したが小片のため図化しなかった。

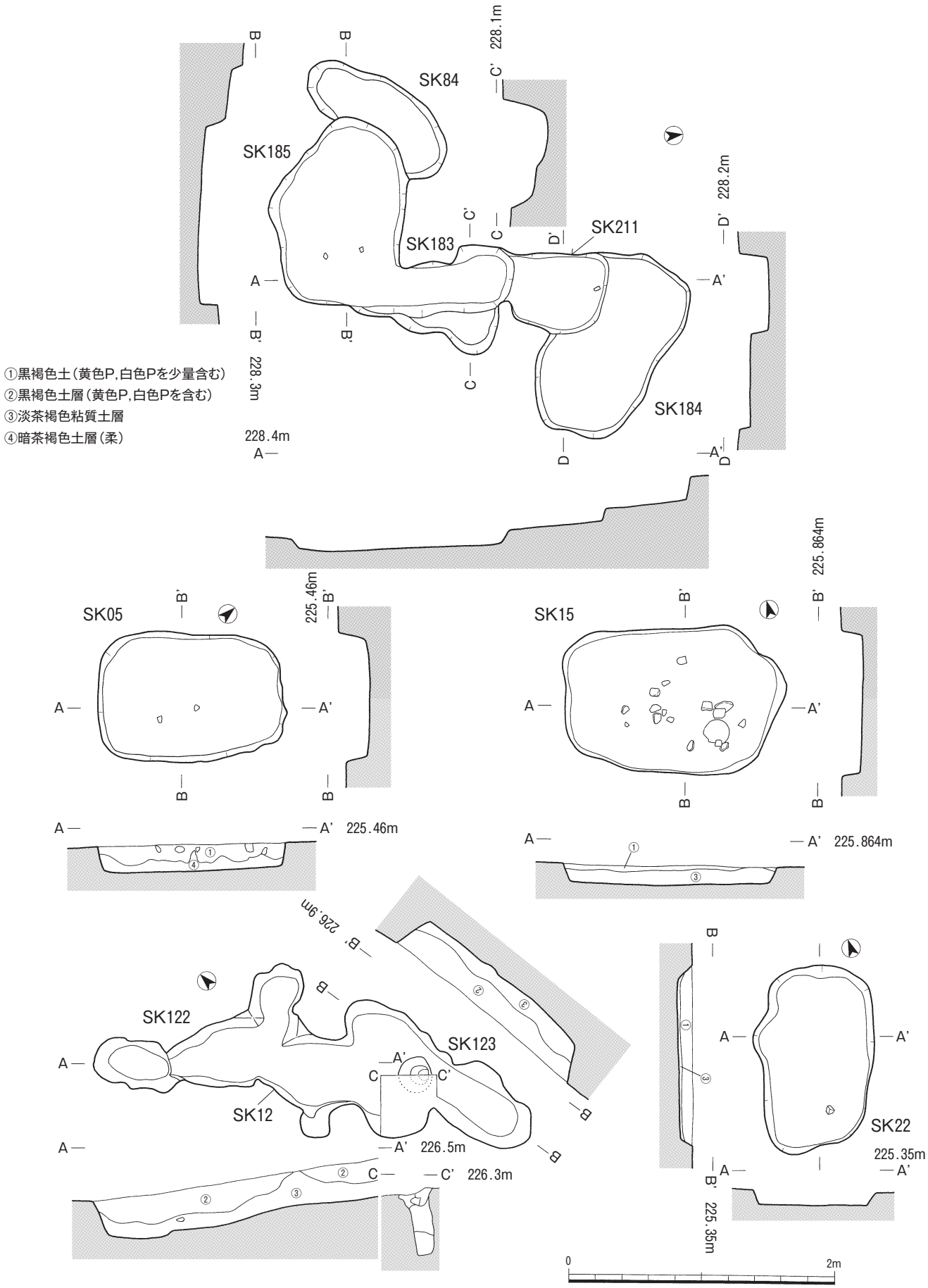
Type ５（隅丸長方形タイプ：第162～166図）

５号土坑（SK05） SK05はF11区とF12区の境界線上で検出された。長軸140cm，短軸100cm，深さ20cm弱，検出面積1.23㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい暗茶褐色土層が部分的に堆積していた。

遺物は２点出土した。A531は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕が施されて



第161図　土坑実測図７



第162図　土坑実測図８

いる。A530は底径14.0cmを測る前平式土器の底部片である。斜位の貝殻条痕文が顕著である。

12号土坑（SK12） SK12はB8区とC8区の境界線上で検出された。北西側でSK122，南東側でSK123と重複する。長軸135cm，短軸75cm，深さ30cm弱，検出面積0.67㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。SK122側へ傾斜している。

15号土坑（SK15） SK15はC15区において単独で検出された。長軸165cm，短軸115cm，深さ約15cm，検出面積1.59㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層が若干あり，下部では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

遺物は17点出土し，６点を図化した。A540は前平式土器の口縁部である。口唇部にヘラ状工具による連続刺突文を施し，胴部は斜位の貝殻条痕文で埋めるタイプである。A539とA543は斜位の貝殻条痕文が施された胴部片である。A541は前平式土器の底部片である。底面近くは横位，胴部は斜位の貝殻条痕文が施されている。また，底面にも貝殻条痕による仕上げ痕がみられる。底径21.0cmを測る。A542，A544も前平式土器の底部片である。内外面共に斜位の貝殻条痕文が顕著である。底径はそれぞれ16.2cm，14.0cmを測る。

16号土坑（SK16） SK16はC16区において単独で検出された。長軸175cm，短軸95cm，深さ約15cm，検出面積1.38㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層（埋土①）を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層（埋土③）が堆積していた。また，壁際には埋土の①と②が混在したような暗褐色土層（黄色および白色のパミスを少量含む）が堆積していた。北西側半分の床面は掘りすぎのため，遺構の下端は推定ラインである。

遺物は１点出土したが，小片のため図化しなかった。

22号土坑（SK22） SK22はC13区において単独で検出された。長軸140cm，短軸90cm，深さ約10cm，検出面積1.04㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

遺物は１点出土したが磨石状礫小片のため図化しなかった。

32号土坑（SK32） SK32はD8区で検出された。西側でSK133，北東側でSK33が重複して検出された。長軸140cm，短軸75cm，深さ35cm強，検出面積0.77㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，床面付近では淡茶褐色の粘質土層が若干堆積していた。

埋土中から出土した遺物はなかった。

35号土坑（SK35） SK35はD18区において単独で検出された。長軸105cm，短軸45cm，深さ約22cm，検出面積0.36㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層を基本に，下部には淡褐色土層が堆積していた。また，部分的に拳大の薩摩火山灰層ブロックが含まれていた。

SK36の北西側と南東側にはそれぞれＰ１，Ｐ２の小ピットが検出されている。Ｐ１は長軸55cm，短軸40cm，深さ25cm弱，Ｐ２が長軸36cm，短軸23cm，深さ20cm強を測る。これら三者の関係については不明である。いずれの埋土中からも，出土遺物はなかった。

50号土坑（SK50） SK50はC17区とC18区の境界線上において単独で検出された。長軸100cm，短軸50cm，深さ25～30cm，検出面積0.44㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかっ

た。

58号土坑（SK58） SK58はC17区において単独で検出された。長軸130cm，短軸75cm，深さ約20cm，検出面積0.85㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

63号土坑（SK63） SK63はE15区において単独で検出された。南側ではSK79が近接して検出された。長軸105cm，短軸55cm，深さ約20～25cm，検出面積0.43㎡を測る。隅丸長方形タイプに入れたが，SK63の長辺中央にはいずれもくびれ状の微妙な凸部が存在する。埋土は黄色パミスをごく少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

68号土坑（SK68） SK68はD19区で検出された。北西側でSK70が重複して検出された。長軸230cm，短軸140cm，深さ18～25cm，検出面積2.07㎡を測る。土坑の中では比較的大形である。埋土は黒褐色土層（薩摩火山灰の拳大ブロックを含む）を基本に，下部には比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

70号土坑（SK70） SK70はD19区で検出された。北東側でSK269が重複して検出された。長軸125cm，短軸80cm，深さ25cm強，検出面積0.90㎡を測る。埋土は黄色パミスをごく少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物としては軽石製品が１点（B68）出土した。一面に溝状の凹みをもつ，いわゆる有溝軽石製品である。長さ6.00cm，幅5.60cm，厚さ2.85cm，重さ17.41gを測る。

83号土坑（SK83） SK83はB14区で検出された。遺構は調査区外の畑地まで延びていると考えられる。現況のサイズは，長軸120cm，短軸100cm，深さ10cm強，検出面積1.10㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層（Ⅷ層）を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中からは土器の底部片が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。型式等についても不明である。

86号土坑（SK86） SK86はD12区において単独で検出された。長軸145cm，短軸75cm，深さ約18cm，検出面積0.87㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもいくつかみられた。埋土中から出土した遺物はなかった。

88号土坑（SK88） SK88はC12区において単独で検出された。長軸140cm，短軸90cm，深さが約16cm，検出面積1.03㎡を測る。埋土は黄色パミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。また，薩摩火山灰層の拳大ブロックもいくつか検出された。埋土中から出土した遺物は無かった。

87号土坑（SK87） SK87はG5区で検出された。北東側でSK193と重複する。長軸95cm，短軸60cm，深さが約40cm，検出面積0.48㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

89号土坑（SK89） SK89はC12区において単独で検出された。長軸165cm，短軸100cm，深さ16～18cm，検出面積1.33㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，

下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

92号土坑（SK92） SK92はG9区で検出された。北側でSK204が重複して検出された。推定長軸100cm，短軸55cm，深さ30cm弱，推定面積0.42㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。土器片が１点出土しているが小片のため図化しなかった。

98号土坑（SK98） SK98はG5区で検出された。東側でSK99とSK100が重複して検出された。長軸155cm，短軸85cm，深さ30cm弱，検出面積1.25㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもいくつかみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

100号土坑（SK100） SK100はG5区で検出された。北西側でSK98，北東側でとSK99が重複して検出された。推定長軸130cm，短軸75cm，深さ約15cm，検出面積0.80㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもいくつかみられた。遺物は４点出土し，２点を図化した。A572とA573はいずれも前平式土器の胴部片で，外面に斜位の貝殻条痕文が施されたものである。

103号土坑（SK103） SK103はG11区で検出された。長軸180cm，短軸110cm，深さ約22cm，検出面積1.50㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックも検出面近くでいくつかみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

108号土坑（SK108） SK108はE10区で検出された。長軸155cm，短軸100cm，深さ約10cm，検出面積1.23㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，床面近くには淡茶褐色土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。A575は埋土中から出土した前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されたものである。

114号土坑（SK114） SK114はC10区とC11区の境界線上において単独で検出された。長軸135cm，短軸70cm，深さ約10cm，検出面積0.76㎡を測る。埋土は白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，東側の壁際には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

118号土坑（SK118） SK118はC10区において単独で検出された。長軸95cm，短軸55cm，深さ20～25cm，検出面積0.43㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，床面近くには淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

119号土坑（SK119） SK119はB9区において単独で検出された。長軸100cm，短軸65cm，深さ10cm強，検出面積0.58㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

埋土中から出土した遺物は無かった。

120号土坑（SK120） SK120はF12区で検出された。南側でSH87が重複して検出された。長軸140cm，短軸95cm，深さ15cm弱，検出面積0.98㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

遺物は２点出土し，１点を図化した。A582は前平式土器の口縁部片である。口縁部直下にヘラ

状工具による連続刺突文をめぐらせ，胴部には斜位の貝殻条痕文を施している。

135号土坑（SK135） SK135はD8区において単独で検出された。北側にSK136が近接して検出されている。長軸115cm，短軸60cm，深さ25cm弱，検出面積0.59㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，床面付近では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。

埋土中から出土した遺物は無かった。

140号土坑（SK140） SK140はD8区において単独で検出された。長軸80cm，短軸50cm，深さ20cm弱，検出面積0.33㎡を測る。埋土は白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には淡茶褐色土層が堆積していた。

埋土中から遺物が１点出土した。A584は前平式土器の胴部片（底部に近い）である。外面に斜位および横位の貝殻条痕文が施されている。

141号土坑（SK141） SK141はC8区およびD8区の境界線上において単独で検出された。長軸95cm，短軸40cm，深さ20cm弱，検出面積0.28㎡を測る。埋土は白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から１点の土器片が出土しているが，摩耗が激しいため図化できなかった。

156号土坑（SK156） SK156はG6区において単独で検出された。長軸200cm，短軸115cm，深さ20cm強，検出面積2.11㎡を測る。本遺跡の中では大形の土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，床面付近では暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。遺物は９点出土し，図化できるものは無かった。

159号土坑（SK159） SK159はH5区およびH6区において単独で検出された。南側は調査区外へ延びている。長軸160cm，短軸135cm，深さ30～40cm，検出面積1.58㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，床面付近では暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。遺物は９点出土し，８点を図化した。A592～A594はいずれも前平式土器の口縁部片である。A592は口唇外面端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を施している。口唇部内側には無文のフラット面が残る。外面は口縁部直下が横位，それより下位が斜位の貝殻条痕が施されている。A594は口唇外面端部にヘラ状工具による連続刺突文が２段施されたものである。口唇部はやや丸味があり，断面蒲鉾状を呈する。外面には横位の貝殻条痕文がみられる。A595～A598は前平式土器の胴部片で，外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

B81は平行する３本の線刻がみられる軽石製品である。長さ7.10cm，幅6.50cm，厚さ3.70cm，重さ34.65gを測る。

160号土坑（SK160） SK160はG6区において単独で検出された。長軸100cm，短軸60cm，深さ27～33cm，検出面積0.49㎡を測る。埋土は淡黄褐色のパミス（Ｐ13と考えられる）を含む黒褐色土層を基本とし，下部では暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

164号土坑（SK164） SK164はH3区で検出された。SK165，SK210，SK248等と複雑に重複する。長軸160cm，短軸145cm，深さ約10cm，検出面積2.09㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とする。埋土中から出土した遺物は無かった。

165号土坑（SK165） SK165はH3区で検出された。SK165，SK202，SK237等と複雑に重複する。全形は推定の域を出ないが，現状のサイズは長軸95cm，短軸80cm，深さ約10cm，検出面積1.13㎡を

測る。ただし，最大の想定範囲を考慮した場合，本遺跡で竪穴住居状遺構とした遺構に匹敵する規模を持つ可能性もある。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とする。埋土中から出土した遺物は無かった。

184号土坑（SK184） SK184はH4区で検出された。西側でSK211が重複して検出された。長軸150cm，短軸85cm，深さ8～16cm，検出面積1.08㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，床面付近では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

187号土坑（SK187） SK187はH4区において単独で検出された。長軸90cm，短軸55cm，深さ約12cm，検出面積0.46㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層（埋土①）を基本とし，下位には黄色および白色のパミスを若干含む茶褐色の粘質土層（埋土②）が堆積していた。埋土①の方が埋土②よりも新しいが，埋土①は土坑の南半分に集中して堆積していた。埋土①部分が小ピットである可能性もある。埋土中から出土した遺物は無かった。

189号土坑（SK189） SK189はH3区で検出された。南側でSK249が重複して検出された。長軸135cm，短軸100cm，深さ約23cm，検出面積0.94㎡を測る。埋土は炭化物の粒子を含む暗褐色の粘質土層が堆積していた。断面図からは，SK189の方が新しいことがわかる。遺物は10点出土し，１点を図化した。A611は前平式土器の胴部片で，横位の貝殻条痕文が施されている。

土坑の中央付近の東壁に，薩摩火山灰層がやや内部へ突出している部分がある。埋土に炭化物の粒子が含まれていることも考慮すれば，元来，本遺構は連穴土坑としての機能を果たしていた可能性も考えられる。

193号土坑（SK193） SK193はG5区で検出された。南西側でSK87が重複して検出された。長軸70cm，短軸45cm，深さ約30cm，検出面積0.27㎡を測る。埋土は炭化物の粒子を含む暗褐色の粘質土層が堆積していた。遺物が１点出土しているが小片のため図化しなかった。

194号土坑（SK194） SK194はG5区において単独で検出された。北側が確認トレンチにより削平されている。現況のサイズが長軸155cm，短軸115cm，深さ18～28cm，検出面積1.59㎡を測る。埋土は炭化物の粒子を含む暗褐色の粘質土層が堆積していた。遺物は１点出土した。A613は前平式土器の胴部片で，外面に横位の貝殻条痕文が施されている。

198号土坑（SK198） SK198はF6区で検出された。北西側でSK197と重複する。長軸200cm，短軸115cm，深さ約16cm，検出面積2.07㎡を測る。本遺跡の中では大形の土坑である。埋土は黒褐色土層（埋土①）を基本とし，下部には比較的柔らかくて白色パミスを含む暗茶褐色土層が堆積していた。埋土①には３～５㎝の薩摩火山灰層の小ブロックが含まれていた。遺物が１点出土したが小片のため図化しなかった。

200号土坑（SK200） SK200はE5区において単独で検出された。長軸200cm，短軸120cm，深さ約15cm，検出面積1.93㎡を測る。埋土は黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかくて白色パミスを含む暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は８点出土し，２点を図化した。A616とA617はいずれも前平式土器の口縁部片である。口唇外面端部にヘラ状工具による連続刺突文を施している。口唇部は舌状を呈する。外面は，口唇部直下が横位，胴部が斜位の貝殻条痕文が施されている。A616の口縁部下には口唇とほぼ平行する沈線がみられる。

202号土坑（SK202） SK202はH3区で検出された。東側でSK237，西側でSK188と重複する。重複部分が多く推定の域を出ないが，長軸120cm，短軸60cm，深さ約10cm，検出面積0.63㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とする。埋土中から出土した遺物は無かった。

204号土坑（SK204） SK204はG9区で検出された。南側でSK92が重複して検出された。推定長軸77cm，短軸55cm，深さ20cm弱，推定面積0.33㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもいくつかみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

210号土坑（SK210） SK210はH3区で検出された。SK164，SK248と重複する。特に本土坑はSK164の中にすっぽり収まった状態で検出された。長軸135cm，短軸100cm，深さ50cm弱，検出面積1.10㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）が上部に堆積し，下位には暗褐色土層（埋土②）および淡褐色土層（埋土③）が堆積していた。埋土②，③の中には炭化物の粒子が含まれていた。遺物は２点出土し，１点を図化した。A622は前平式土器の胴部片で，外面に横位の貝殻条痕文が施されている。

213号土坑（SK213） SK213はF5区において単独で検出された。長軸115cm，短軸65cm，深さ10cm弱，検出面積0.63㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）が上部に堆積し，下位には暗褐色土層（埋土②）および淡褐色土層（埋土③）が堆積していた。遺物は６点出土したが小片のため図化しなかった。

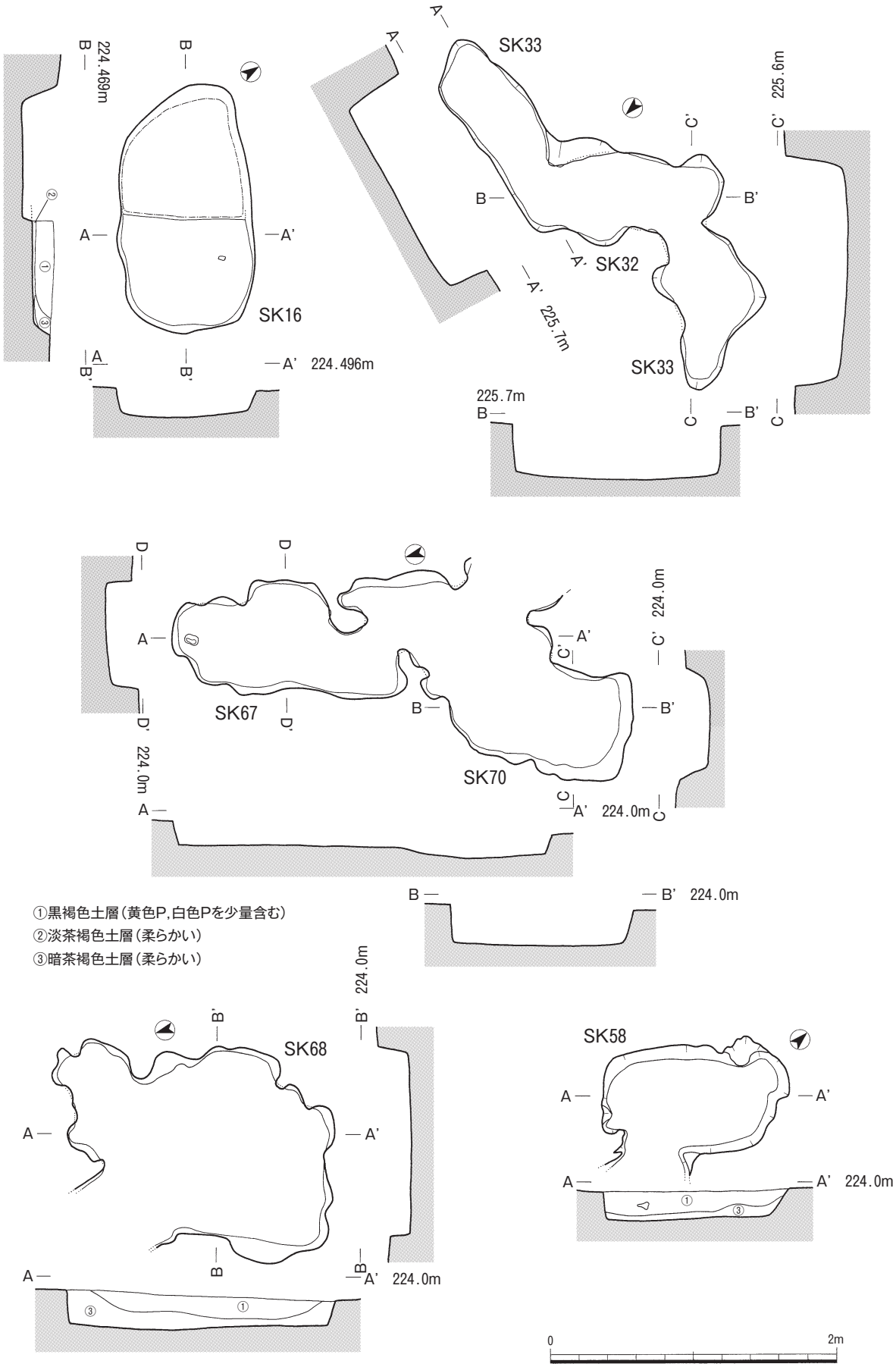
216号土坑（SK216） SK216はE5区において単独で検出された。長軸135cm，短軸80cm，深さ約20cm，検出面積0.99㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）が上部に堆積し，下位には暗褐色土層（埋土②）および淡褐色土層（埋土③）が堆積していた。遺物は２点出土し，１点を図化した。A623は前平式土器の底部片である。底径15.4cmを測る。胴部への立ち上がり部分には，横位の貝殻条痕文が施されている。

217号土坑（SK217） SK217はE5区およびE6区の境界線上において単独で検出された。長軸165cm，短軸120cm，深さ約24cm，検出面積1.77㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）が上部に堆積し，下位には暗褐色土層（埋土②）および淡褐色土層（埋土③）が堆積していた。遺物は２点出土したが小片のため図化しなかった。

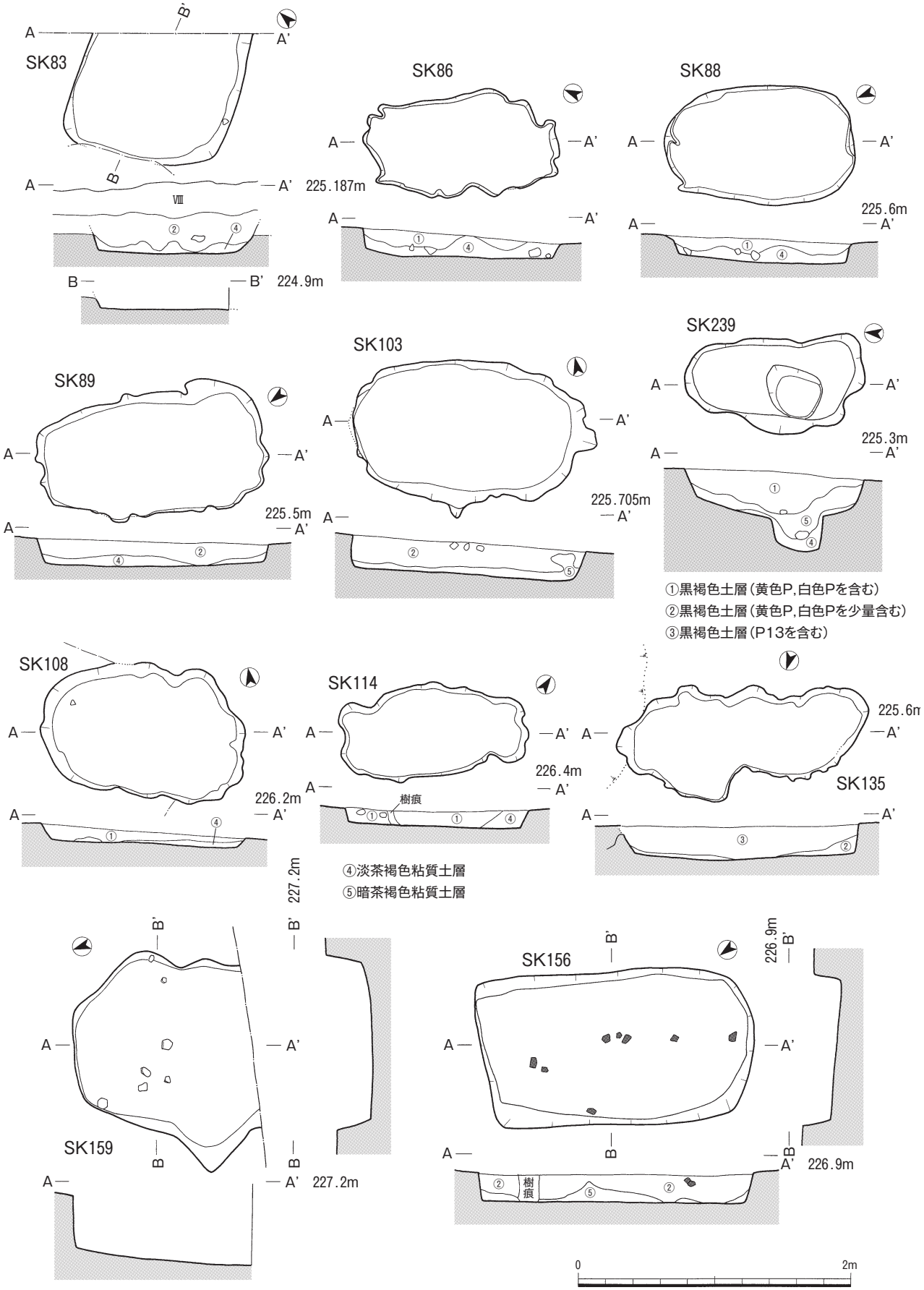
237号土坑（SK237） SK237はH3区で検出された。SK164，SK165，SK179，SK202等と重複する。長軸115cm，短軸80cm，深さ30cm弱，検出面積0.82㎡を測る。埋土は炭化粒子を含む淡褐色土層を基本とする。遺物は３点出土したが，いずれも摩耗が激しく図化できなかった。胴部２点と底部１点であった。

239号土坑（SK239） SK239はF12区において単独で検出された。長軸130cm，短軸70cm，深さ約30cm，検出面積0.73㎡を測る。遺構のほぼ中央部分に長軸43cm，短軸34cm，深さ25cm強の小ピットが検出された。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部に暗茶褐色土層，小ピットを含む床面付近には淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は１点出土した。A629は前平式土器の胴部小片で，外面に斜位の貝殻条痕が施されている。

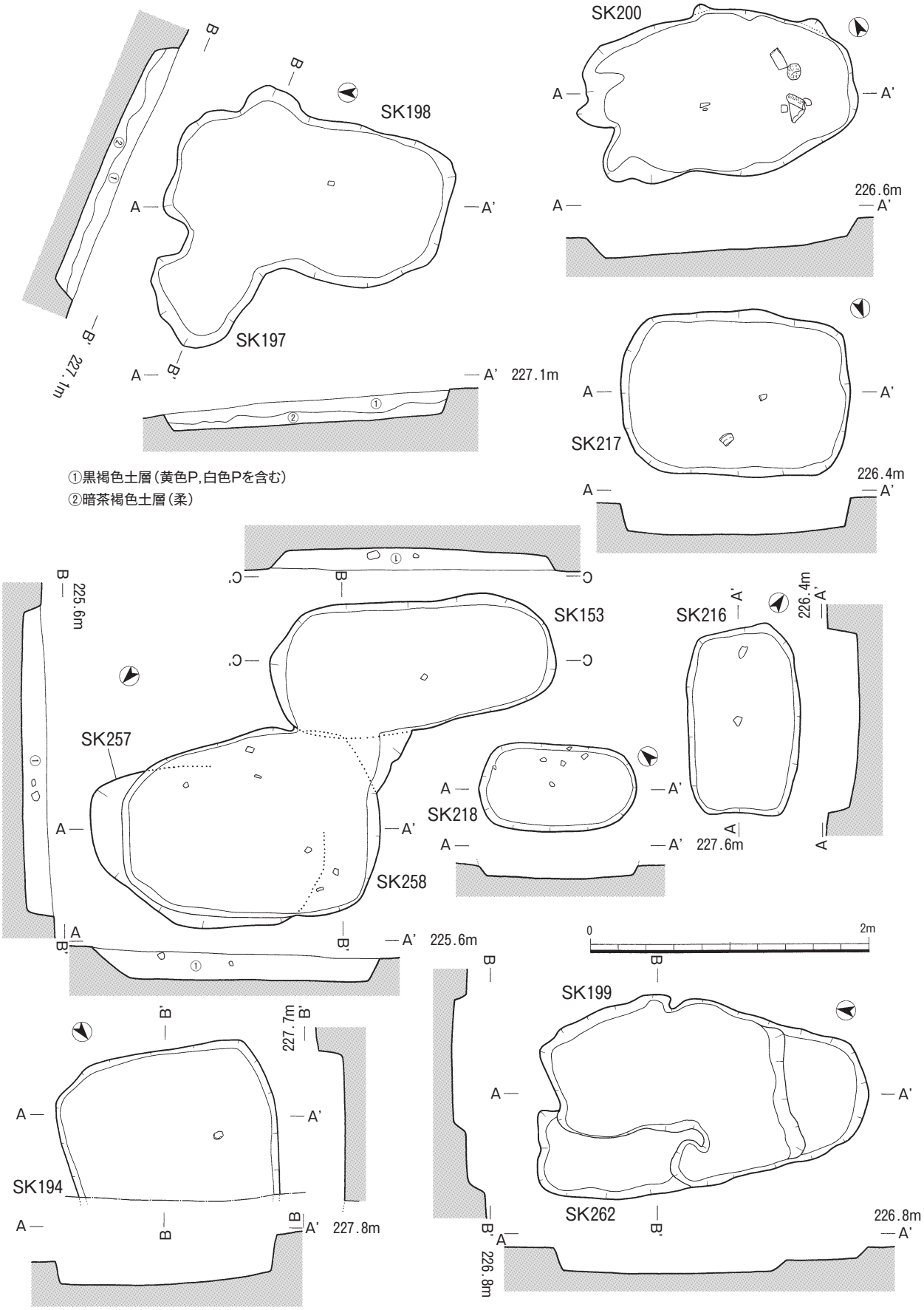
257号土坑（SK257） SK257はG7区で検出された。南側でSK258が重複して検出された。推定長



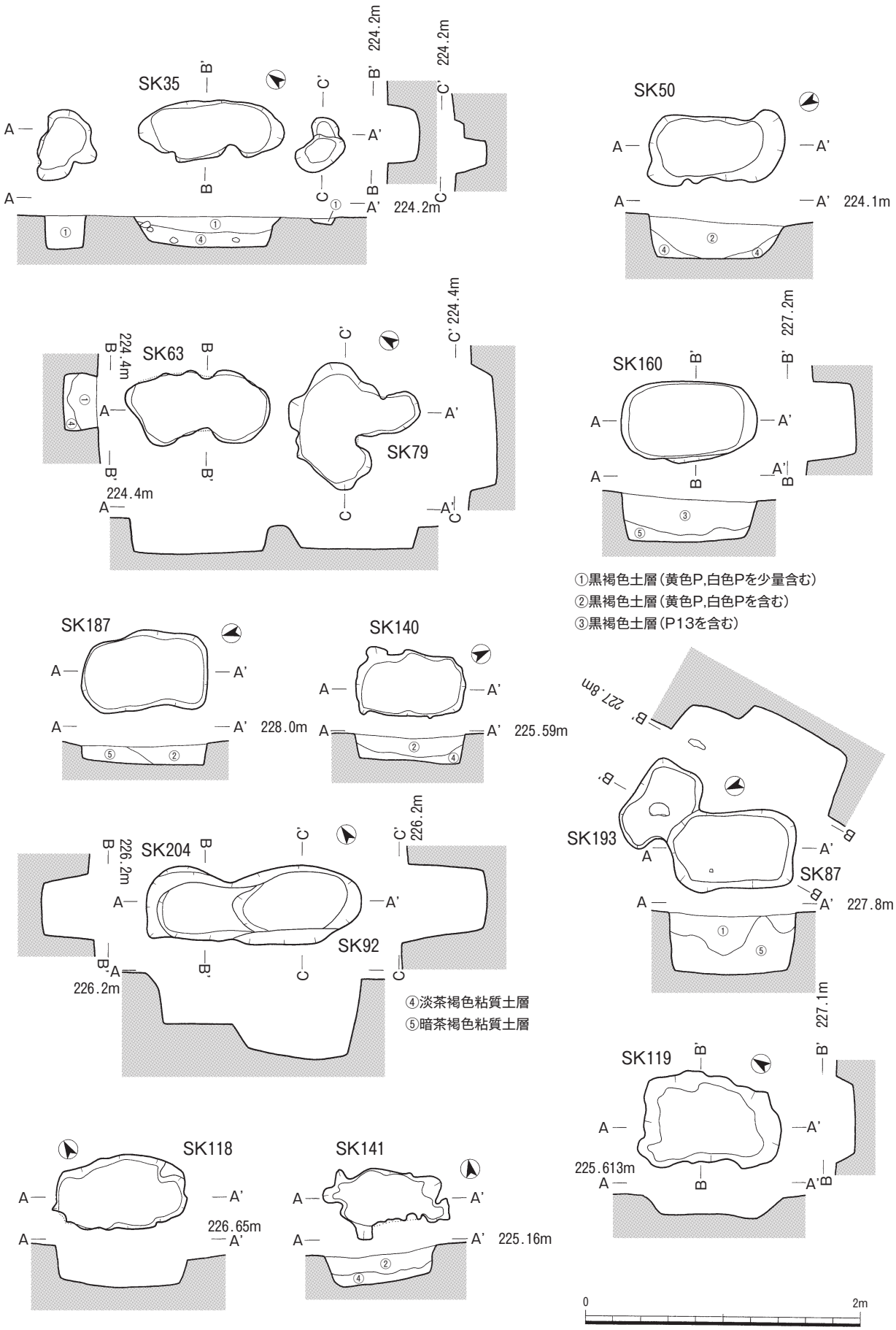
第163図　土坑実測図９



第164図　土坑実測図10



第165図　土坑実測図11



第166図　土坑実測図12

軸165cm，短軸115cm，深さ20cm強，検出面積0.88㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもいくつかみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

258号土坑（SK258） SK258はG7区で検出された。北側でSK257，南側でSK153が重複して検出された。長軸185cm，短軸130cm，深さ20cm弱，検出面積2.11㎡を測る。本遺跡の中では大形の土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもいくつかみられた。遺物は６点出土し，４点を図化した。A638は前平式土器の口縁部片である。口唇外面端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を施している。口唇部は内側にごくわずかにフラット面が残る。胴部外面には口縁部直下に横位，あとは斜位の貝殻条痕文が施されている。A639とA640は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A641は前平式土器の底部片である。胴部の立ち上がり部分には横位の貝殻条痕文が施されている。

262号土坑（SK262） SK262はE5区およびF5区の境界線上で検出された。東および南側でSK199と重複する。現況のサイズは，長軸105cm，短軸60cm，深さ約13cm，検出面積0.49㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

270号土坑（SK270） SK270はD8区で検出された。南側でSK139が重複して検出された。推定長軸100cm，短軸70cm，深さ20cm，推定面積0.57㎡を測る。北東隅には長軸38cm，短軸30cmの小ピットが検出された。床面からの深さは10cm弱であった。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

Type ６（隅丸長方形ロングタイプ：第167，168図）

13号土坑（SK13） SK13はE12区とE13区の境界線上において単独で検出された。長軸180cm，短軸85cm，深さ15cm強，検出面積1.26㎡を測る。長短値が0.47であった。埋土は白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面近くの一部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックが部分的に含まれていた。

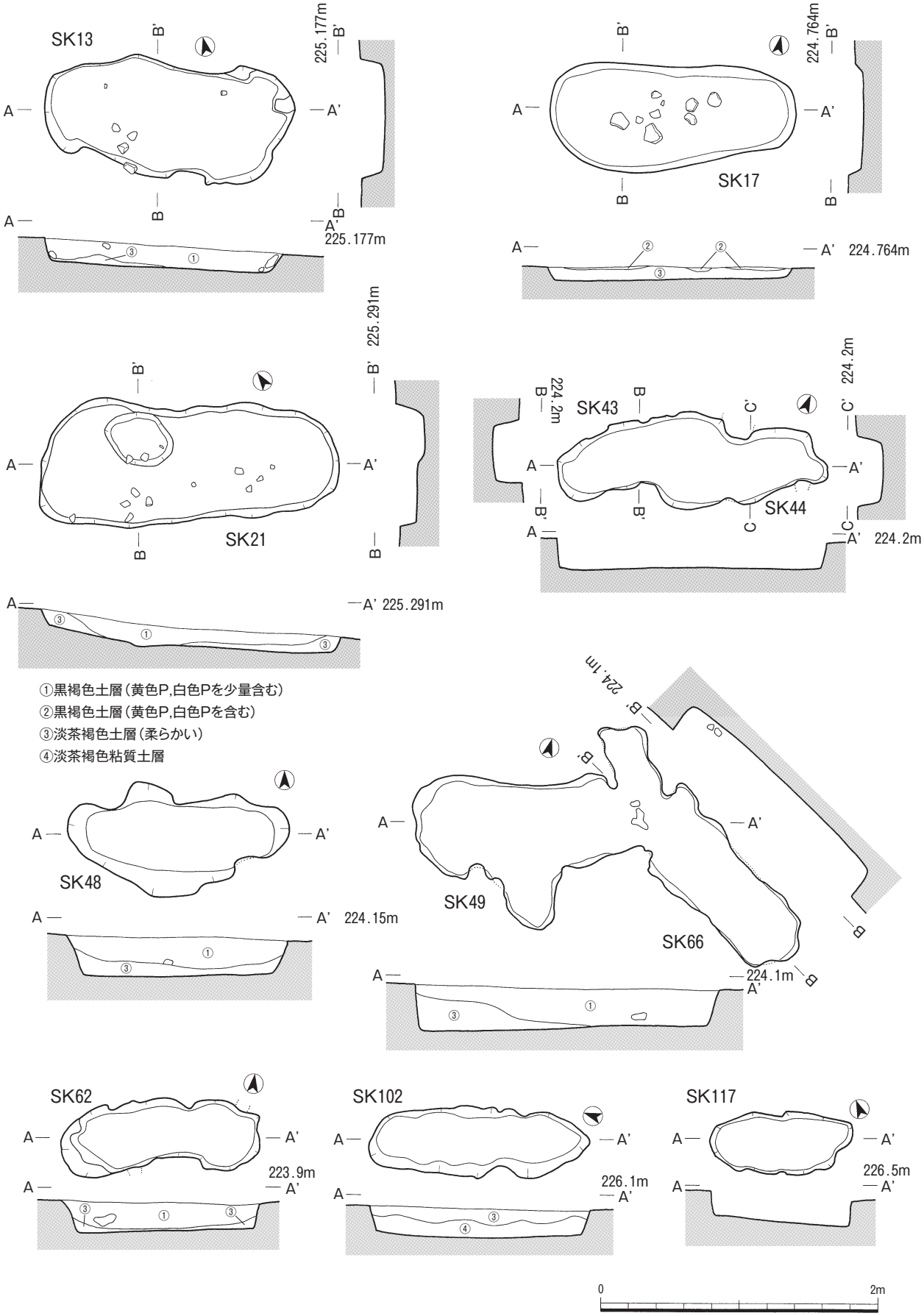
遺物は６点出土したが図化できるものはなかった。

17号土坑（SK17） SK13はC15区において単独で検出された。長軸180cm，短軸80cm，深さ約10cm，検出面積1.26㎡を測る。長短値が0.44であった。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層の下に，比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。

遺物は９点出土し，１点を図化した。A545は前平式土器の底部片である。底部外面は，若干貝殻条痕文が見られるが，丁寧なナデ仕上げを行っている。内面には底部と胴部の接合部分を貝殻腹縁部で押圧した状況が観察できる。

21号土坑（SK21） SK13はC13区とC14区の境界線上において単独で検出された。長軸215cm，短軸95cm，深さ15cm弱，検出面積1.66㎡を測る。長短値が0.44であった。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層の下に，比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。また，床面中央からやや北西寄りのところで，径約45cm，深さ約５cmの浅いピットが検出された。

遺物は14点出土し，３点を図化した。A546は前平式土器の口縁部である。口縁外面端部に貝殻腹縁部による連続刺突文を巡らしている。胴部には斜位の貝殻条痕文が施されている。胎土に茶色



第167図　土坑実測図13

の砂粒を含む。A547と A548は外面に斜位の貝殻条痕文が施された胴部片である。

24号土坑（SK21） SK24は C8区で検出された。北側で SK129と重複する。長軸145cm，短軸50cm，深さ約25cm，検出面積0.75㎡を測る。長短値が0.34と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が基本で，南側の壁際から床面中央にかけて，淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。また，５cm四方の薩摩火山灰層ブロックが部分的にみられた。埋土中から出土した遺物はなかった。

33号土坑（SK33） SK33は D8区と D9区の境界線上で検出された。西側で SK32と重複する。長軸125cm，短軸50cm，深さ40cm弱，検出面積0.49㎡を測る。長短値が0.40と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層が基本で，床面付近では茶褐色の粘質土層が若干堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

43号土坑（SK43） SK43は C16区および D16区の境界線上で検出された。東側で SK44と重複する。長軸125cm，短軸45cm，深さ20cm強，検出面積0.53㎡を測る。長短値が0.36と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層が基本で，床面付近では茶褐色の粘質土層が若干堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

44号土坑（SK44） SK44は C16区で検出された。西側で SK43と重複する。長軸120cm，短軸45cm，深さ20cm弱，検出面積0.48㎡を測る。長短値が0.38と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層が基本で，床面付近では茶褐色の粘質土層が若干堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

48号土坑（SK48） SK48は D18区において単独で検出された。長軸160cm，短軸80cm，深さ約30cm，検出面積0.84㎡を測る。長短値は0.50であった。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が基本で，下部では淡茶褐色の粘質土層が若干堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

49号土坑（SK49） SK49は D18区と D19の境界線上において検出された。北東部で SK266，東側で SK66，南側で SK267と重複する。長軸185cm，短軸55cm，深さ30cm強，検出面積1.05㎡を測る。長短値は0.30と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が基本で，下部では淡茶褐色土層が若干堆積していた。一部に拳大の薩摩火山灰層がみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

62号土坑（SK62） SK62は D17区において単独で検出された。長軸145cm，短軸50cm，深さ約20cm，検出面積0.62㎡を測る。長短値は0.34と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が基本で，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が若干堆積していた。一部に拳大の薩摩火山灰層がみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

66号土坑（SK66） SK66は D18区と D19区の境界線上において検出された。北西部で SK49，西側で SK49と重複する。長軸145cm，短軸60cm，深さ25cm強，検出面積0.71㎡を測る。長短値は0.30と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が基本で，下部では淡茶褐色土層が若干堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

84号土坑（SK84） SK84は H4区で検出された。南側で SK185が重複して検出された。長軸125cm，短軸50cm，深さ約10cm，検出面積0.53㎡を測る。長短値は0.40と細長い土坑である。埋土は黄色お

よび白色のパミスを少量含む黒褐色土層が基本で，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が若干堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

102号土坑（SK102） SK102はF10区において単独で検出された。南側には近接してSH04が検出されている。長軸160cm，短軸50cm，深さ20cm弱，検出面積0.65㎡を測る。長短値は0.31と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層が基本で，下部では比較的柔らかい淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。５cmの薩摩火山灰層ブロックもみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

105号土坑（SK105） SK105はF10区とF11区の境界線上において検出された。南側でSK104が重複して検出された。長軸100cm，短軸45cm，深さ約16cm，検出面積0.39㎡を測る。長短値は0.45であった。埋土は黄色および白色のパミス（P13と考えられる）を多く含む黒褐色土層を基本に，下部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

117号土坑（SK117） SK117はC10において単独で検出された。長軸105cm，短軸45cm，深さ20cm弱，検出面積0.37㎡を測る。長短値は0.43であった。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が基本で，下部では淡茶褐色土層が若干堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

123号土坑（SK123） SK123はB8区とC8区の境界線上で検出された。北西側でSK12と重複する。長軸170cm，短軸50cm，深さ30cm強，検出面積0.67㎡を測る。長短値が0.29と細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。SK12側へ少しずつ傾斜している。床面のほぼ中央で径25cm，深さ約50cmのピットが検出された。若干北側へ傾いた状態で検出されている。埋土中から出土した遺物はなかった。

127号土坑（SK127） SK127はC8区とC9区の境界線上において単独で検出された。長軸170cm，短軸70cm，深さ40cm強，検出面積1.04㎡を測る。長短値が0.41であった。埋土は白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部ではわずかに黒色土を含む淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックも見られた。

当初，隣接するSK14とセットで，いわゆる連穴土坑になるのではと検討したが，二つの土坑がトンネルで繋がることはなく，それぞれ独立していることが判明した。埋土中から出土した遺物はなかった。

130号土坑（SK130） SK130はC8区で検出された。東側でSK29が重複して検出された。長軸225cm，短軸70cm，深さ20cm弱，検出面積1.22㎡を測る。長短値が0.31とかなり細長い土坑である。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の人頭大ブロックも見られた。埋土中から出土した遺物は無かった。

134号土坑（SK134） SK134はH10区で検出された。南西側は削平されている。現況のサイズは長軸210cm，短軸105cm，深さ約20cm，検出面積1.76㎡を測る。長短値が0.50であった。実際はもっと数値が下がると考えられる。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，壁際では薩摩火山灰層のパミスを含む茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

136号土坑（SK136） SK136はD8区において単独で検出された。北西側でSK137と近接する。長軸100cm，短軸40cm，深さ25cm強，検出面積0.32㎡を測り，長短値が0.40と細長い小形の土坑であ

る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

153号土坑（SK153） SK153はG7区で検出された。北側でSK258が重複して検出された。長軸200cm，短軸95cm，深さ約15cm，検出面積1.66㎡を測る。長短値は0.48であった。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中には薩摩火山灰層の拳大ブロックが含まれていた。遺物としては，貝殻条痕文が施されている胴部片が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

172号土坑（SK172） SK172はG4区で検出された。北西側でSK272が重複して検出された。長軸175cm，短軸75cm，深さ約13cm，検出面積1.10㎡を測る。長短値は0.43であった。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層が上部に，その下位に炭化物の粒子を比較的多く含む暗茶褐色土層が堆積し，さらに床面付近では，やや粘質の淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は１点出土したが風化が進んでいたため図化できなかった。

177号土坑（SK177） SK177はG4区において単独で検出された。長軸155cm，短軸70cm，深さ25cm弱，検出面積0.86㎡を測る。長短値は0.45であった。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とし，その下位に暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。いずれも炭化物の粒子を若干含んでいた。埋土中から出土した遺物は無かった。

192号土坑（SK192） SK192はG5区で検出された。北側でSK191と重複する。長軸180cm，短軸65cm，深さ20～35cm，検出面積0.91㎡を測る。長短値は0.36であった。埋土は黄色および白色のパミス（Ｐ13？）を多く含む黒褐色土層を基本とし，その下位に炭化物粒子を含む暗茶褐色土層が堆積していた。いずれも炭化物の粒子を若干含んでいた。遺物は２点出土し，１点を図化した。A612は前平式土器と考えられる胴部使用片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

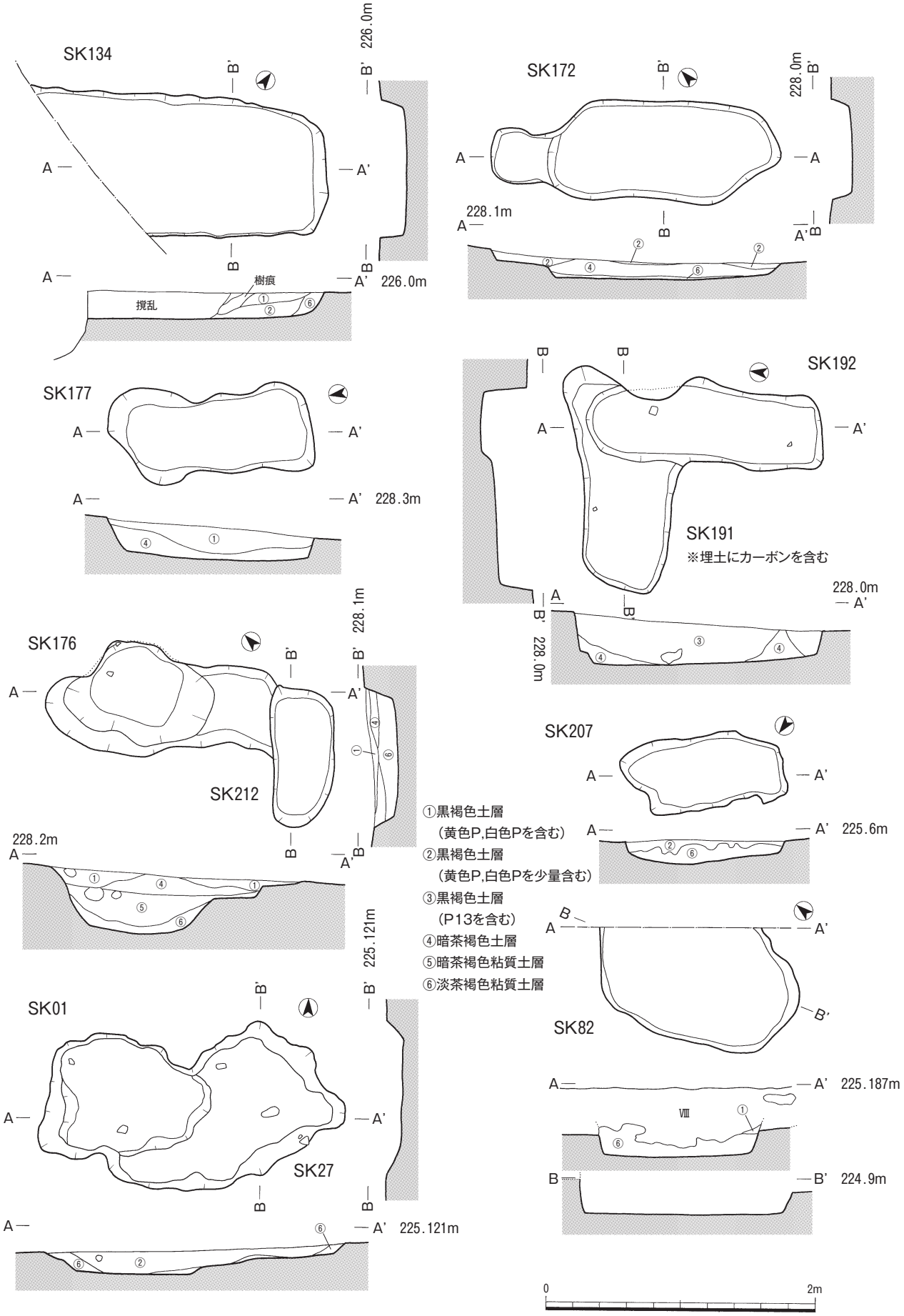
土坑の北よりの東壁が一部（薩摩火山灰層部分に当たる）オーバーハングしている点，床面直上に薩摩火山灰層の拳大ブロックが見られる点，埋土に炭化物粒子が含まれている点などを考慮すると，本土坑は元来，連穴土坑の形状を呈していた可能性が高い。

207号土坑（SK207） SK207はC12区において単独で検出された。長軸120cm，短軸55cm，深さ12～18cm，検出面積0.61㎡を測る。長短値は0.46であった。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）を基本とし，その下位に淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土①には薩摩火山灰層の拳大ブロックが含まれていた。埋土中から出土した遺物は無かった。

212号土坑（SK212） SK212はG4区で検出された。北側でSK176が重複して検出された。長軸105cm，短軸45cm，深さ約20cm，検出面積0.42㎡を測る。長短値は0.43であった。埋土は黄色のパミス（Ｐ13の可能性有り）を含む黒褐色土層が上部に，その下位に炭化物の粒子を含む淡茶褐色土層が堆積し，さらに床面付近では，やや粘質の暗褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物はなかった。

Type ７（五角形タイプ：第168，169図）

１号土坑（SK01） SK01はD13区で検出された。東側でSK27と重複する。長軸120cm，短軸90cm，深さ15cm強，検出面積0.90㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本



第168図　土坑実測図14

に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が部分的に堆積していた。

遺物は２点出土し，１点を図化した。A518は前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕が施されている。

82号土坑（SK82） SK82はB14区で検出された。遺構は調査区外の畑地まで延びていると考えられる。推定長軸155cm，短軸120cm，深さ15cm強，推定面積1.46㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層（Ⅷ層）を基本に，下部では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺構内から出土した遺物は無かった。

93号土坑（SK93） SK93はD11区で検出された。SK94，SK95が近接して検出された。長軸100cm，短軸65cm，深さ14～19cm，検出面積0.46㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層（Ⅷ層）を基本に，下部では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺構内から出土した遺物は無かった。遺物は２点出土し，１点を図化した。A569は前平式土器の胴部片で，外面に斜位の貝殻条痕文がみられる。

110号土坑（SK110） SK110はD10区において単独で検出された。長軸170cm，短軸130cm，深さ35cm弱，検出面積1.80㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物は３点出土した。A577～A579は前平式土器の胴部片で，外面に斜位の貝殻条痕文がみられる。

149号土坑（SK149） SK149はG7区で検出された。南側でSK150が重複して検出された。長軸205cm，短軸125cm，深さ15cm，検出面積2.06㎡を測る。本遺跡の土坑の中では大形のグループには入る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物は８点出土し，４点を図化した。A587～A590はいずれも前平式土器の胴部片で，外面に斜位の貝殻条痕文がみられる。

195号土坑（SK195） SK195はF5区で検出された。南東側でSK261と重複する。長軸165cm，短軸125cm，深さ約10cm，検出面積1.55㎡を測る。埋土は暗茶褐色土層を基本としながら，北西部分に黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層が堆積していた。遺物としては23個の礫が出土した。

196号土坑（SK196） SK196はF5区およびF6区の境界線上で検出された。北側でSK261と重複する。長軸170cm，短軸160cm，深さ約20cm，検出面積2.07㎡を測る。本遺跡の土坑の中では大形のグループには入る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部では暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は３点出土し，１点を図化した。A614は前平式土器の胴部片で，外面に横位の貝殻条痕文がみられる。

185号土坑（SK185） SK185はH4区で検出された。北側でSK84，東側でSK183が重複して検出された。長軸145cm，短軸100cm，深さ16cm，推定面積1.11㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層（Ⅷ層）を基本に，下部では比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は２点出土したが，小片のため図化しなかった。

244号土坑（SK244） SK244はE11区において単独で検出された。長軸100cm，短軸60cm，深さ10～13cm，推定面積0.43㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。遺物としては９点の礫が出土し，集石土坑といえるものでもある。

269号土坑（SK269） SK269はD19区で検出された。北側でSK67，南東側でSK68，南西側で

SK70と重複する。推定長軸150cm，短軸75cm，深さ約15cm，推定面積0.88㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が部分的に堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

Type 8（釣鐘形タイプ：第169，170図）

2号土坑（SK02） SK02はE10区で検出された。北側でSH96と重複する。長軸150cm，推定短軸90cm，深さ10～20cm，検出面積1.12㎡を測る。埋土は白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。

遺物としては軽石が1点出土しているが明瞭な加工痕はない。

25号土坑（SK25） SK25はD13区とD14区の境界線上において単独で検出された。北西端部樹痕により攪乱されている。長軸180cm，短軸105cm，深さ約15cm，検出面積1.64㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。

遺物は9点出土し，すべて接合し，同一個体であることが判明した。これらと，D14区Ⅷ層出土の底部大片と接合したのがA549である。前平式土器の底部～胴部と考えられる。底径は21.2cmを測る，比較的大形の土器である。胴部外面には斜位の明瞭な貝殻条痕文が施されている。胴部の立ち上がり部分に，若干横位の貝殻条痕文がみられる。底面の内外にも貝殻腹縁部による調整痕が観察できる。

38号土坑（SK38） SK38はE13区において単独で検出された。長軸115cm，短軸75cm，深さ10cm弱，検出面積0.74㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層を基本に，下部には暗黄褐色土（薩摩火山灰の軽石を含む）が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

77号土坑（SK77） SK77はC 9区において単独で検出された。長軸115cm，短軸90cm，深さ約12cm，検出面積0.88㎡を測る。また，床面中央からやや南西寄りのところで径15cm，深さ14cmの小ピットが検出された。遺構全体の埋土は黒褐色土層が堆積していた。出土遺物は1点のみで，細片のため図化できなかった。

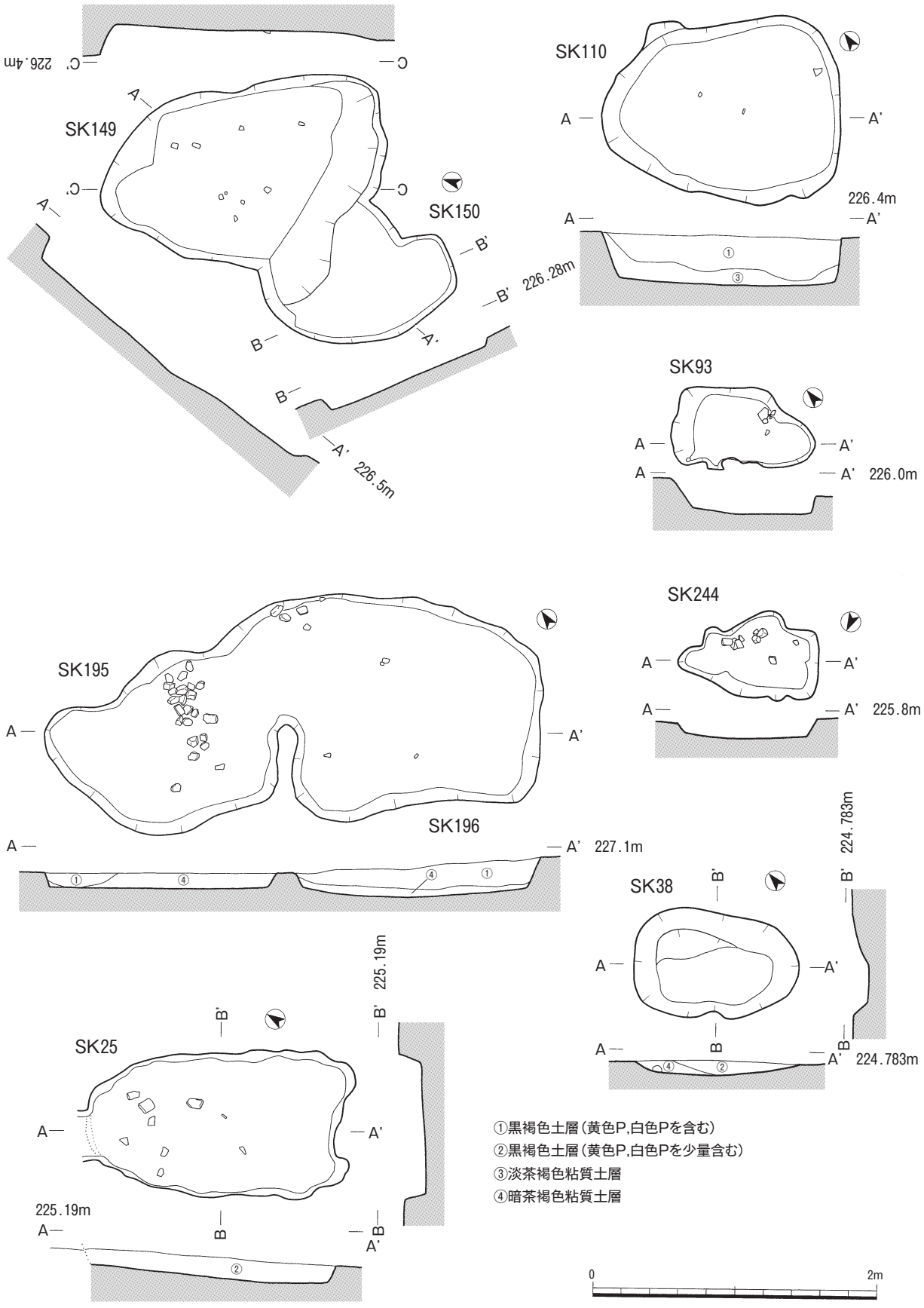
115号土坑（SK115） SK115はC10区において単独で検出された。長軸125cm，短軸75cm，深さ20cm弱，検出面積0.63㎡を測る。埋土は黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

Type 9（その他：第170～172図）

10号土坑（SK10） SK10はF12区で検出された。平面は不定形を呈する。長軸145cm，短軸130cm，深さ約35cm，検出面積1.17㎡を測る。中央よりやや北東寄りの床面で，24×19cm，深さ10cm弱の円形ピットが検出されている。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とする。

遺物は3点出土したが，小片のため図化できなかった。

23号土坑（SK23） SK23はC14区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸115cm，短軸90cm，深さ約13cm，検出面積0.75㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを比較的多く含む黒褐色土層を基本に，壁際には柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。拳大の薩摩火山灰層ブロックもみられた。床面は薩摩火山灰層中にあった。埋土中から遺物は出土しなかった。



第169図　土坑実測図15

遺物は１点出土したが，細片のため図化しなかった。

26号土坑（SK26） SK26はD13区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸140cm，短軸105cm，深さ約18cm，検出面積0.99㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを比較的多く含む黒褐色土層を基本に，床面近くには比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。また，埋土上部中央には，Ⅶ層類似の黄褐色土（含パミス）層が堆積していた。

SK26の西側には径30～35cm，深さ10cm弱の小ピットが検出されている。軽石が１点出土しているが，加工痕は認められなかった。

A550は唯一出土した遺物で，前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

27号土坑（SK27） SK27はD13区で検出された。東側でSK01と重複する。平面は不定形を呈する。長軸175cm，短軸95cm，深さ10cm弱，検出面積1.09㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，床面付近では比較的柔らかい淡茶褐色土層が部分的に堆積していた。床面は薩摩火山灰層中にあり，多少凹凸がある。

遺物は５点出土し，２点を図化した。A551とA552は，いずれも前平式土器の胴部片である。外面には斜位の貝殻条痕が施されている。

39号土坑（SK39） SK39はC16区において検出された。西側でSK40と接している。平面は不定形を呈する。長軸100cm，短軸85cm，深さ約20cm，検出面積0.68㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを比較的多く含む黒褐色土層を基本に，床面近くには比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

40号土坑（SK40） SK40はC16区において検出された。東側でSK39と接している。平面は不定形を呈する。長軸140cm，短軸90cm，深さ20cm弱，検出面積0.81㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを比較的多く含む黒褐色土層を基本に，床面近くには比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

42号土坑（SK42） SK42はC16区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸130cm，短軸110cm，深さ20cm弱，検出面積0.93㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを比較的多く含む黒褐色土層を基本に，床面近くには比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

45号土坑（SK45） SK45はC16区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸90cm，短軸80cm，深さ約12cm，検出面積0.56㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，壁際には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

52号土坑（SK52） SK52はC17区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸125cm，短軸90cm，深さ25cm弱，検出面積0.81㎡を測る。埋土は白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層（埋土①）を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土①には，一部薩摩火山灰層が含まれていた。埋土中から出土した遺物は，前平式土器の胴部片であったが図化できなかった。

79号土坑（SK79） SK79はD，E15区とD，E16区において単独で検出された。北西側において

SK63が近接して検出されている。平面は不定形を呈する。長軸95cm，短軸95cm，深さ15cm，検出面積0.49㎡を測る。埋土は白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層（埋土①）を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

67号土坑（SK67） SK67はD19区で検出された。南側においてSK269が重複して検出されている。平面は不定形を呈する。推定長軸170cm，短軸80cm，深さ約18cm，推定面積0.89㎡を測る。埋土は白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層（埋土①）を基本に，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

72号土坑（SK72） SK72はC11区とC12の境界線上において単独で検出された。南東側でSK106が近接して検出されている。平面は不定形を呈する。長軸120cm，短軸95cm，深さ約16cm，検出面積0.79㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，壁際には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は５点出土し，１点を図化した。A561は吉田式土器の胴部片で，外面に押引文がわずかにみられる。

76号土坑（SK76） SK76はC9区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸105cm，短軸60cm，深さ約25cm，検出面積0.42㎡を測る。また，床面中央からやや北西寄りのところで径13cm，深さ５cmの小ピットが検出された。遺構全体の埋土は黄色および白色のパミスをごく少量含む黒褐色土層を基本に，下部には暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物は２点出土し，１点を図化した。A562は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

85号土坑（SK85） SK85はD12区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸175cm，短軸70cm，深さ16～18cm，検出面積0.90㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，下部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックも見られた。遺物が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

90号土坑（SK90） SK90はC12区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸150cm，短軸75cm，深さ20cm強，検出面積0.87㎡を測る。北西側には床面からの高さが10cm程度を有するステップ状の平坦面が検出されている。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部には暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。埋土中から出土した遺物は無かった。

91号土坑（SK91） SK91はC12区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸175cm，短軸115cm，深さ13～24cm，検出面積1.35㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には淡黄褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

95号土坑（SK95） SK95はD11区において単独で検出された。SK93，SK94が近接して検出された。平面は不定形を呈する。北側に床面から高さ約12cmを測るステップ状の平坦面がある。長軸70cm，短軸50cm，深さ20cm弱，検出面積0.21㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本に，下部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。薩摩火山灰層の拳大ブロックも見られた。遺物が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

106号土坑（SK106） SK106はC11区とC12の境界線上において単独で検出された。北東側でSK72が近接して検出されている。平面は不定形を呈する。長軸115cm，短軸75cm，深さ約12cm，検出面積0.63㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中か

ら出土した遺物は無かった。

111号土坑（SK111） SK111はC10区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。東側には床面からの高さが約10cm弱を測るステップ状の平坦面が検出された。長軸165cm，短軸145cm，深さ10cm強，検出面積1.79㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

113号土坑（SK113） SK113はC11区とD11区の境界線上において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸125cm，短軸55cm，深さ20cm強，検出面積0.55㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。A581は埋土中から出土した前平式土器の胴部片である。外面には横位の深い貝殻条痕文が施されている。

122号土坑（SK122） SK122はB8区とC8区の境界線上で検出された。平面は不定形を呈する。北西側でSK124，南東側でSK12と重複する。長軸110cm，短軸50cm，深さ約30cm，検出面積0.52㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本に，下部では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。SK124側へ傾斜している。埋土中から出土した遺物はなかった。

126号土坑（SK126） SK126はC8区において単独で検出された。平面は不定形を呈する。長軸170cm，短軸115cm，深さ約30cm，検出面積0.87㎡を測る。埋土は黒茶褐色土層（埋土①），黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層層（埋土②），さらに下部には淡茶褐色の粘質土層（埋土③）が堆積していた。埋土①は埋土②と③が混在したような状況であった。埋土①，③には薩摩火山灰層の拳大ブロックが多く含まれていた。埋土中から出土した遺物は無かった。平面形状や床面が二段になっていることから，二つの土坑の重複である可能性も考えられる。

131号土坑（SK131） SK131はD8区とD9区の境界線上において単独で検出された。平面は不定形を呈し，基本形は長軸85cm，短軸65cmを測るが，さらに内側には長軸60cm，短軸48cmを測る小ピットがあり，。上下二段の構造を有している。深さは上段が約20cm，下段が約35cmであった。検出面積0.44㎡を測る。埋土は黒褐色土層を基本とし，下部には暗茶褐色土層，床面近くには暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

133号土坑（SK133） SK133はD8区で検出された。東側でSK32と重複する。平面は不定形を呈する。推定長軸が120cm，短軸65cm，深さ15～20cmを測る。検出面積0.53㎡であった。埋土中から出土した遺物は無かった。

150号土坑（SK150） SK150はG7区で検出された。北側でSK149が重複して検出された。平面は不定形を呈し，長軸140cm，短軸105cm，深さ５～10cm，検出面積1.07㎡を測る。埋土は黒褐色土層を基本とし，下部には暗茶褐色土層，床面近くには暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

174号土坑（SK174） SK174はG4区で検出された。西側でSK75が重複して検出された。平面は不定形を呈し，長軸170cm，短軸100cm，深さ約20cm，検出面積1.04㎡を測る。遺構の南側では60×35cm，深さ約25cmの楕円形小ピットが検出された。埋土は黒褐色土層を基本とし，下部には暗茶褐色土層，床面近くには暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中からは９点の遺物が出土し，４点を図化した。A604，A606，A607は外面に横位ないし斜位の貝殻条痕文が施された前平式土器の胴部片である。SK174は横位の貝殻条痕文が施された胴部をもつ底部片である。前平式土器と考え

られる。

176号土坑（SK176） SK176はG4区で検出された。南側でSK212が重複して検出された。平面は不定形を呈し，長軸180cm，短軸85cm，深さ10cm強，検出面積1.11㎡を測る。遺構の北側には長軸110cm，短軸75cm，深さ30cmの落ち込みがあり，段を有する。埋土は落ち込みの最下面に淡茶褐色土層が堆積し，その上位には暗茶褐色土層，暗褐色土層，黒褐色土層等が層序を形成していた。遺物は３点出土しているが，いずれも土器細片で，図化しなかった。

179号土坑（SK179） SK179はH3で検出された。東側でSK165と重複し，西側は調査区外へと延びるため，全形は知り得ないが，明瞭な段差を有することから遺構として把握した。現況のサイズは，長軸65cm，短軸35cm，深さ約10cm，検出面積0.18㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とする。埋土中から出土した遺物は無かった。

180号土坑（SK180） SK180はG4区において単独で検出された。平面プランは隅丸三角形状を呈している。長軸110cm，短軸60cm，深さ12～14cm，検出面積0.49㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

183号土坑（SK183） SK183はH4区で検出された。平面は不定形を呈する。北東側でSK211，西側でSK185が重複して検出された。推定長軸130cm，短軸80cm，深さ約15cm，検出面積0.65㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本に，下部には淡黄褐色の粘質土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

188号土坑（SK188） SK188はH3区で検出された。東側でSK202と重複し，西側は調査区外へと延びるため，全形は知り得ないが，明瞭な段差を有することから遺構として把握した。現況のサイズは，長軸80cm，短軸45cm，深さ約10cm，検出面積0.33㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層を基本とする。埋土中からは３点の土器片が出土したが，いずれも小片のため図化できなかった。

191号土坑（SK191） SK191はG5区で検出された。南側でSK192と重複している。推定長軸175cm，短軸75cm，深さ30cm弱，検出面積0.99㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土層を基本とし，下部には炭化物粒子を少量含む暗茶褐色土層が堆積していた。遺物が２点出土しているが，いずれも土器の小片で図化しなかった。

197号土坑（SK197） SK197はF6区で検出された。南東側でSK198と重複する。現況のサイズは長軸75cm，短軸70cm，深さ約18cm，検出面積0.43㎡を測る。埋土は黒褐色土層（埋土①）を基本とし，下部には比較的柔らかくて白色パミスを含む暗茶褐色土層が堆積していた。埋土①には３～５cmの薩摩火山灰層の小ブロックが含まれていた。埋土中から出土した遺物は無かった。

199号土坑（SK199） SK199はE5区およびF5区の境界線上で検出された。北西側でSK262と重複する。長軸240cm，短軸125cm，深さ約18cm，検出面積2.20㎡を測る。土坑の南側には床面からの高さが８cm程度のステップ状の平坦面が検出されている。埋土は黒褐色土層（埋土①）を基本とし，下部には比較的柔らかくて白色パミスを含む暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は３点出土し，１点を図化した。A615は前平式と考えられる土器の胴部片で，外面に横位の浅い貝殻条痕文が施されている。

206号土坑（SK206） SK206はC11区およびC12区の境界線上で検出された。長軸130cm，短軸50cm，深さ30cm弱，検出面積0.61㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は１点出土した。A621は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

221号土坑（SK221） SK221はE6区において単独で検出された。長軸185cm，短軸70cm，深さ25～30cm，検出面積1.08㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色硬質土層を基本とし，下部には暗茶褐色の砂質粘土層，床面付近には明黄茶褐色の粘質土層が堆積していた。遺物は大形の軽石が１点出土した。

241号土坑（SK241） SK241はC11区およびC12区の境界線上において単独で検出された。長軸90cm，短軸40cm，深さ約16cm，検出面積0.27㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミス（Ｐ13と考えられる）を多く含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい暗茶褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

242号土坑（SK242） SK242はE11区において単独で検出された。長軸250cm，短軸130cm，深さ15cm弱，検出面積2.02㎡を測る。埋土は黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。遺物は22点出土し，５点を図化した。A630～A632は前平式土器の胴部片である。いずれも外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

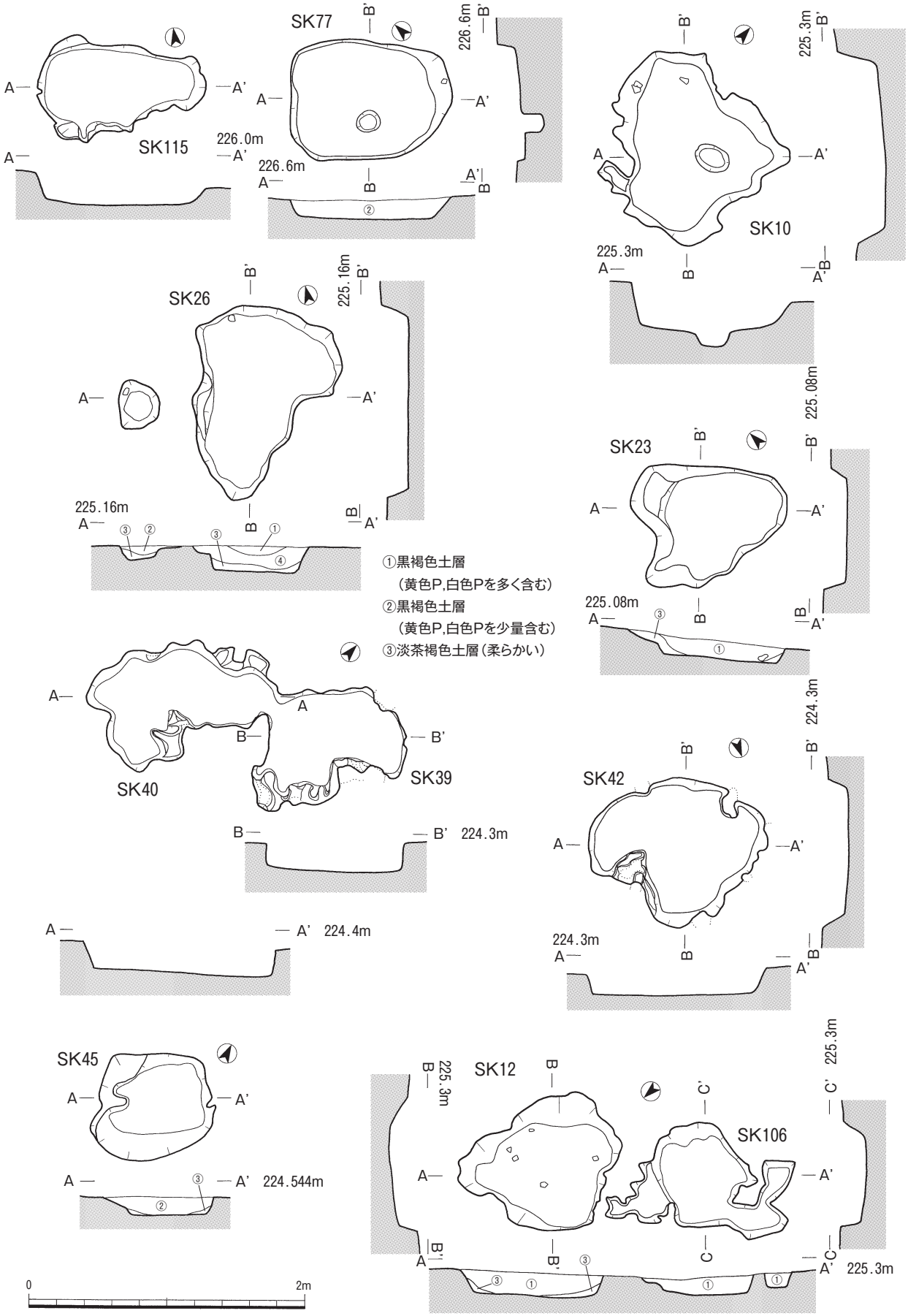
253号土坑（SK253） SK253はG4区およびG5区の境界線上において単独で検出された。長軸150cm，短軸60cm，深さ30～40cm，検出面積0.70㎡を測る。埋土は炭化物粒子を含む黒褐色土層を基本とし，下部にはやや粘質のある暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は２点出土したが図化できなかった。

255号土坑（SK255） SK255はD14区において単独で検出された。東側でSK256と重複する。全形は不明であるが，現況のサイズは，長軸245cm，短軸100cm，深さ10cm弱，検出面積1.94㎡を測る。埋土は比較的柔らかい暗茶褐色土層を基本とし，わずかではあるが上部に黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。遺物は２点出土したが図化できなかった。

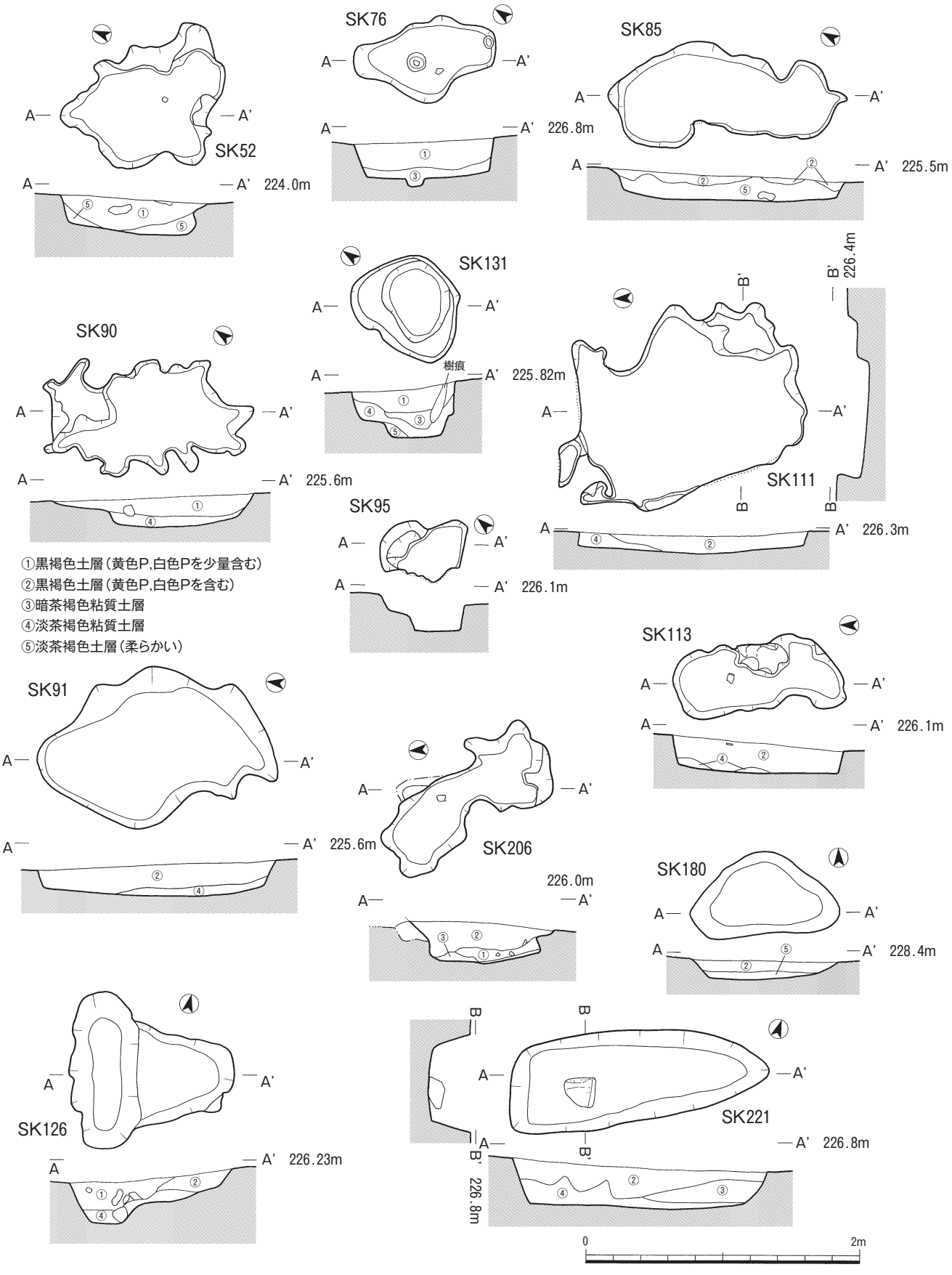
261号土坑（SK261） SK261はF5区およびF6区の境界線上において検出された。西側でSK195，南東側でSK196と重複する。重複部分が多くを占め，詳細については不明瞭である。現況のサイズは，長軸115cm，短軸80cm，深さ10cm弱，検出面積0.80㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層を基本とし，下部には比較的柔らかい茶褐色土層が堆積していた。遺物は５点出土し，１点を図化した。A642は前平式土器の口縁部片である。口縁部下にヘラ状工具による連続刺突文，胴部にほぼ横位の貝殻条痕文が施されている。

266号土坑（SK266） SK266はD18区で検出された。SK49と重複するために，本来の形状は不明である。南西側でSK49，南東側でSK66と重複する。現存するサイズは長軸50cm，短軸30cm，深さ約25cm，検出面積0.15㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

267号土坑（SK267） SK267はD19区で検出された。SK49と重複するために，本来の形状は不明である。北側でSK49と重複する。現存するサイズは長軸50cm，短軸45cm，深さ約30cm，検出面積0.17㎡を測る。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から



第170図　土坑実測図16



第171図　土坑実測図17

出土した遺物は無かった。

271号土坑（SK271） SK271はD8区で検出された。北側でSK139と重複するために，本来の形状は不明である。現存するサイズは長軸70cm，短軸50cm，深さ10～15cm，検出面積0.40㎡を測る。東南隅では長軸48cm，短軸28cm，深さ10cm強の小ピットが検出された。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

272号土坑（SK272） SK272はG4区で検出された。南東側でSK172と重複するために，本来の形状は不明である。現存するサイズは長軸50cm，短軸40cm，深さ約５cm，検出面積0.16㎡を測る。埋土は黄色のパミスを少量含む黒褐色土層が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

Type10（連穴土坑タイプ：第172，174～177図）

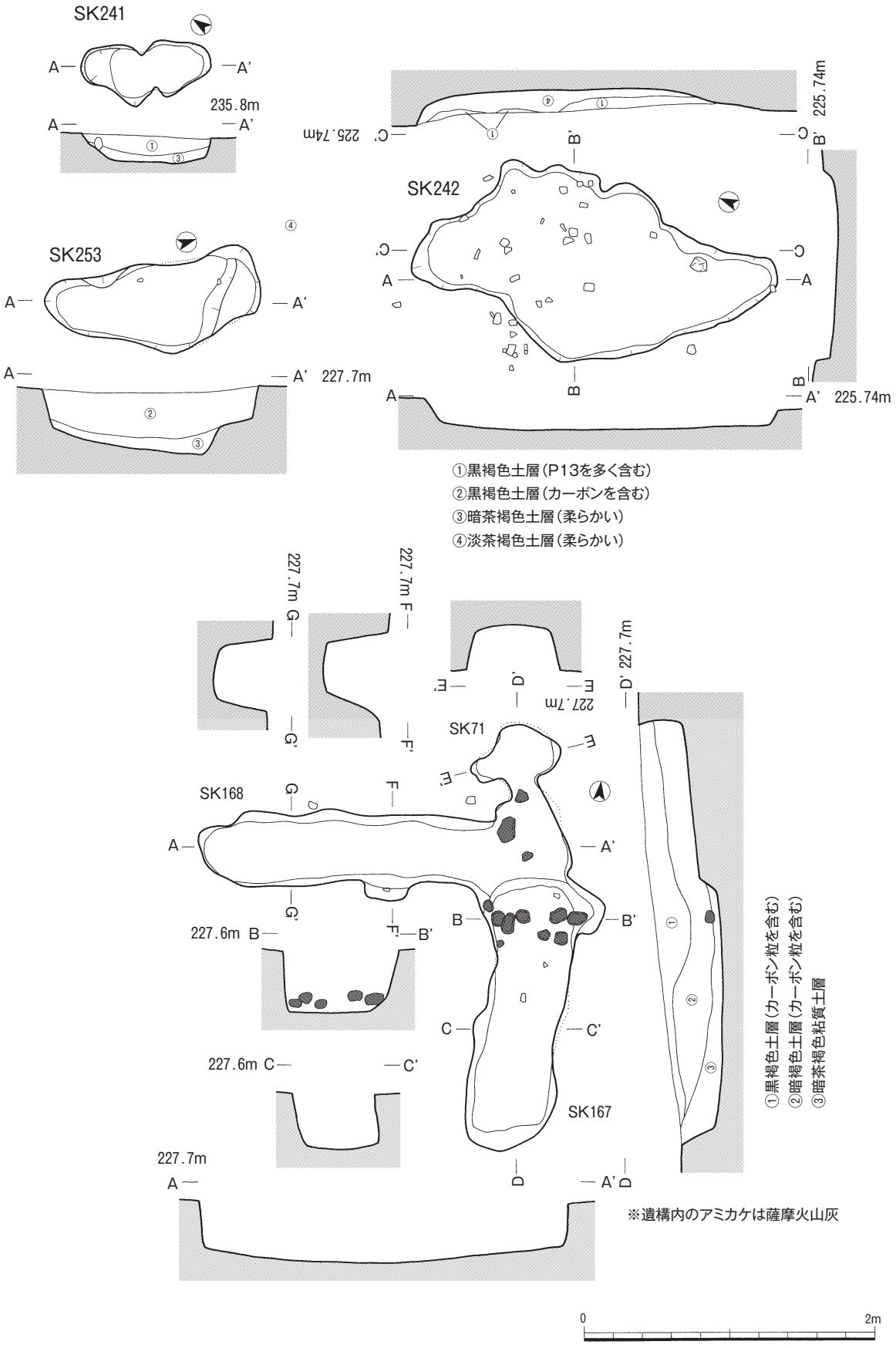
54号土坑（SK54） SK54はD17区で検出された。長軸140cm，短軸65cm，深さ25cm強，検出面積56.77（38.78＋17.99）㎡を測る。長短値は0.46であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジも残る。トンネル部は約30×10cmと狭い。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が上位に下位には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。ブリッジ下の底面には炭化物の粒子がみられたが，明瞭な焼土は確認できなかった。埋土中から出土した遺物は無かった。

71号土坑（SK71） SK71はH5区で検出された。南側には同じ連穴土坑タイプと考えられるのSK167が続く。ただし，いずれもブリッジが崩壊し，原形は留めていない。71号は長軸145cm，短軸60cm，深さ約35cm，検出面積64.19㎡を測る。長短値は0.41であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジとしたと考えられる部分は崩壊しているが，土坑の両側辺から壁が突出していることから，ブリッジの名残と考えられる。埋土は黒褐色土層が上位に下位には暗茶褐色土層が堆積していたが，いずれも炭化物の粒子を含んでいた。明瞭な焼土は確認できなかった。埋土中からは遺物が３点出土している。２点は軽石で，１点は土器片であった。A568は前平式土器と考えられる底部片である。底径14.2cmを測る。底部内面に貝殻腹縁部による仕上げ痕が残る。

96号土坑（SK96） SK96はE9区で検出された。長軸205cm，短軸90cm，深さ50cm弱，検出面積137.25（102.20＋35.05）㎡を測る。長短値は0.44であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジも残る。トンネル部は約40×20cmであった。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が上位に下位には比較的柔らかい淡茶褐色土層が堆積していた。ブリッジ下の底面には炭化物の粒子が多くみられ，焼土は確認できた。埋土中からは軽石と土器片が１点出土している。A570は前平式土器と考えられる胴部片である。外面に横位ないし斜位の貝殻条痕文が施されている。東側にはSK97がほぼ直線上に並ぶ形で検出された。

97号土坑（SK97） SK97はE9区で検出された。長軸150cm，短軸80cm，深さ25cm弱，検出面積96.45㎡を測る。長短値は0.53であった。ブリッジに想定される部分はないが，土坑の両側辺から壁が突出している部分があることから，ブリッジの名残ではないかと考えられる。埋土中に１㎜ほどの炭化物の粒子を含むことも，炉穴的な機能を示唆しているものと考える。埋土中から安山岩製の磨石片が１点出土している。近接して西側にあるSK96とはほぼ一直線上に並ぶ。

109号土坑（SK109） SK109はE10区で検出された。長軸225cm，短軸50cm，深さ30cm強，検出面積68.59（56.44＋12.25）㎡を測る。長短値は0.22であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用し



第172図　土坑実測図18

たブリッジも残る。トンネル部は約18×14cmと狭い。埋土は黄色および白色のパミスを含む黒褐色土層（埋土①）が上位に下位には暗茶褐色の粘質土層（埋土④）が堆積していた。埋土①の黄色パミスは，Ｐ13である可能性が高い。焚き口側と考えられる土坑の中央部からは薩摩火山灰層のブロックが床面から浮いた状態で検出されている。埋土中からは土器片が１点出土した。A576は前平式土器と考えられる胴部小片で，外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

167号土坑（SK167） SK167はH5区で検出された。SK71と南側に連続して延びている。ブリッジがあったと想定される部分の床面付近に薩摩火山灰層の拳大ブロックが集中して検出されている。ブリッジの名残であろう。167号は長軸190cm，短軸60cm，深さ30～45cm，検出面積106.67㎡を測る。長短値は0.32であった。埋土は黒褐色土層が上位に下位には暗茶褐色土層が堆積していたが，いずれも炭化物の粒子を含んでいた。また，床面付近には，暗茶褐色の粘質土層が堆積していた。明瞭な焼土は確認できなかった。埋土中からは遺物が４点出土している。すべて土器片であるが１点のみ図化した。A602は前平式土器と考えられる胴部小片である。外面に斜位の貝殻条痕文が見られる。

168号土坑（SK168） SK168もSK71やSK167と同様にH5区で検出された。これら２つの土坑とは長軸が90度ずれて検出された。SK71とSK167の接点付近から西側へ直線的に延びた土坑である。ブリッジは崩壊し，原形を留めていないが，平面形や断面の形状，埋土に炭化物を含む等の特色から，本来は連穴土坑としての機能を持っていた可能性が高いのではないかと考える。168号は長軸200cm，短軸50cm，深さ40cm弱，検出面積92.96㎡を測る。長短値は0.25で細長い土坑である。上面幅約50cm，下面幅30～40cmの断面逆台形状の掘り込みが約２ｍ続いている。埋土は黒褐色土層が上位に下位には暗茶褐色土層が堆積していたが，いずれも炭化物の粒子を含んでいた。明瞭な焼土は確認できなかった。埋土中からは土器片が１点出土しているが，細片のため図化できなかった。

170号土坑（SK170） SK170はG4区とG5区の境界線上で検出された。ブリッジは崩壊しているが，壁から薩摩火山灰層が突出している部分があり，ここがかつてブリッジを形成していた痕跡部分と考えられる。ほぼ長軸の直線上に後述するSK171がある。想定される規模は，長軸260cm，短軸75cm，深さ40cm弱，検出面積144.73㎡を測る。長短値は0.29であった。想定されるトンネル部のサイズは22×30cm程度と考えられる。埋土は黄色および白色のパミスを少量含む黒褐色土層が上位に，下位には明茶褐色土層が堆積していたが，いずれも炭化物の粒子を多く含んでいた。明瞭な焼土は確認できなかった。遺構内遺物としては，確実にSK170内の遺物と考えられるものは無かった。

171号土坑（SK171） SK171はG4区で検出された。ブリッジは崩壊しているが，残存部から想定される全体的な形状や埋土に炭化物を含んだり，焼土の存在から，かつてブリッジが存在し，いわゆる連穴土坑としての構造をもっていたものと考える。長軸の南側延長線上にはSK170がある。ブリッジが存在したと考えられる部分の床面では炭化物や焼土が確認された。想定される規模は，長軸250cm，短軸80cm，深さ約40cm，検出面積1.65㎡を測る。長短値は0.32であった。埋土は黄色および白色のパミスを多く含む黒褐色土層（埋土①）が上位に，下位には暗褐色土層（埋土②）が堆積していたが，いずれも炭化物の粒子を多く含んでいた。特に前述のように埋土②の床面では多くの炭化物粒や使用度が確認された。遺構内遺物としては，４点の土器片が出土したが，小片のため図化できなかった。

173号土坑（SK173） SK173はH4区で検出された。北側にはSH74と重複するSK75があり，本遺構とはほぼ一直線上に並ぶ。長軸195cm，短軸50cm，深さ25～30cm，検出面積0.83（0.56＋0.27）㎡を測る。長短値は0.26であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジもわずかながら残る。トンネル部は約42×18cmであった。埋土は黄色パミスをごく少量含む黒褐色土層（埋土①）が上位に，下位には炭化物の粒子を含む暗茶褐色土層（埋土②）が堆積していた。ブリッジ下の床面付近（埋土②下部）には炭化物の多い土層が堆積していた。また，埋土①中には薩摩火山灰層の拳大ブロックが含まれていた。ブリッジの崩壊土である可能性も考えられる。埋土中からは遺物が３点出土したが，いずれも小片のため図化しなかった。

175号土坑（SK175） SK175はG4区において単独で検出された。西側には近接してSK174やSK182が存在する。長軸190cm，短軸60cm，深さ約15cm，検出面積1.03㎡を測る。長短値は0.32であった。ブリッジは無いが，北側に若干くびれ部があり，ブリッジの存在をうかがわせている。埋土は黄色および白色のパミスを若干含む黒褐色土層が上位に，下位には淡茶褐色土層が堆積していた。いずれの層からも炭化物の粒子が少量ながら確認されている。火を用いた施設である可能性と，全体の形状から，連穴土坑タイプの遺構である可能性を考えたい。遺構内から出土した遺物はなかった。

182号土坑（SK182） SK182はG4区で検出された。南側でSK174と重複する。長軸240cm，短軸75cm，深さ40～50cm，検出面積1.13㎡を測る。長短値は0.31であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジもわずかながら残る。トンネル部は幅約40cm，高さ約30cmであった。ブリッジ下や焚き口と考えられる部分は，約12cmほど低くなって，段差ができていた。基本的には上位から黒褐色土層，暗茶褐色土層，淡褐色土層の順に堆積し，いずれも炭化物の粒子が含まれていた。特に中位の暗茶褐色土層中の炭化物は多かった。遺構内からは底部片が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

186号土坑（SK186） SK186はH4区において単独で検出された。長軸205cm，短軸70cm，深さ20～50cm，検出面積1.14㎡を測る。長短値は0.34であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジも一部残る。トンネル部は幅約45cm，高さ約25cmであった。ブリッジ下を中心に約15cmほど低くなって，段差ができていた。埋土は，基本的には上位から黒褐色土層，暗茶褐色土層（南側がやや暗く粘質が強い），暗褐色土層，暗褐色土層，淡茶褐色土層の順に堆積し，最上位の黒褐色土層の他は，いずれも炭化物の粒子が含まれていた。また，薩摩火山灰層の拳大ブロックもみられた。遺構内からは胴部片と底部片がそれぞれ１点ずつ出土しているが，小片のため図化しなかった。

240号土坑（SK240） SK240はF10区とF11区の境界線上において単独で検出された。長軸185cm，短軸80cm，深さ30～40cm，検出面積1.12㎡を測る。長短値は0.43であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジも一部残る。トンネル部は幅約65cm，高さ約30cmであった。ブリッジの下では薩摩火山灰層の拳大ブロックが検出されているるブリッジの名残と考えられる。埋土は黄色および白色の大粒パミスを含む黒褐色土層を基本とし，下位にパミスが少量はいる黒褐色土層，床面付近では淡茶褐色の粘質土層が堆積していた。いずれも炭化物の粒子を含む。また，焚き口付近の床面近くでは焼土が確認された。遺構内から出土した遺物は無かった。

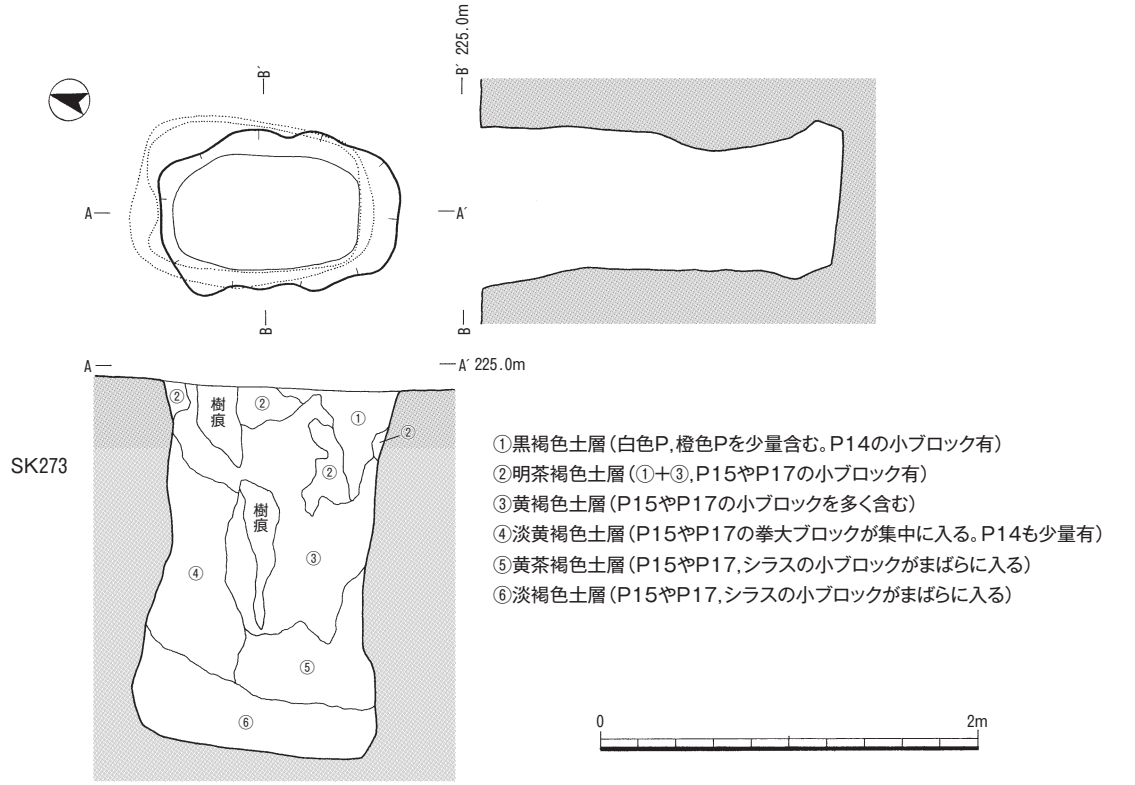
248号土坑（SK248） SK248はH3で検出された。南側でSK164やSK210と重複する。長軸130cm，

短軸65cm，深さ30～45cm，検出面積0.62（0.26＋0.36）㎡を測る。長短値は0.50であった。薩摩火山灰層（Ⅸ層）部分を利用したブリッジも一部残る。トンネル部は幅約45cm，高さ約28cmであった。埋土は黒褐色土層を上位に，下位には炭化物粒子を含む暗褐色土層が堆積していた。遺構内からは土器片が２点出土した。２点とも前平式土器の口縁部片で，同一個体と考えられる資料であるが，表面の風化が激しく，触るだけで砂粒が剥げ落ちるような状態であったので，１点のみ図化した。A642がそうである。無文でフラットな口縁部をもち，口縁部直下には，ヘラ状工具による縦位の刺突文が巡らされている。胴部には，横位をベースにした貝殻条痕文が施されている。

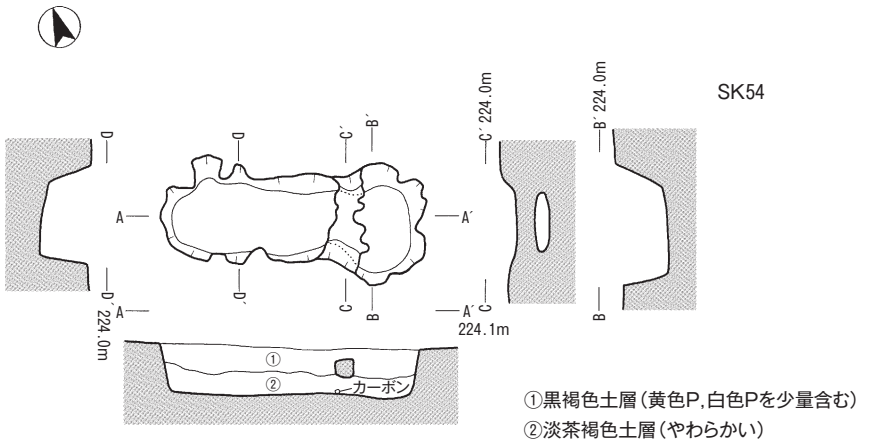
273号土坑（SK273）　SK273はF12区において検出された。長軸125cm，短軸85cm，深さ195cmを測る土坑である。平面形は隅丸長方形状を呈し，検出面積は1.06㎡，長短値は0.86であった。

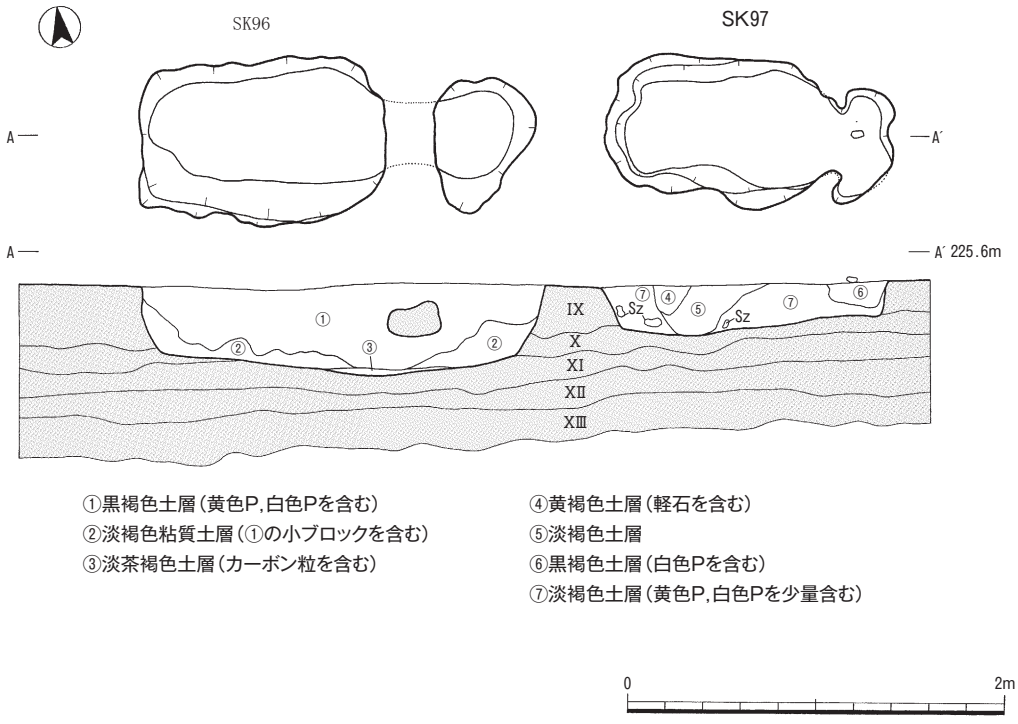
２m近い深さを有する土坑は筒状を呈し，床面付近はややオーバーハングした状態であった。特徴的な点は，埋土中にⅩⅣ層やⅩⅥ層をはじめとする拳大の土塊が多く含まれていたということであった。それらは，掘削する際に掘り出されたであろう土とほぼ同じ内容とみられることから，本土坑は掘削後，あまり時間をおかずに埋められたものと考えられる。

検出面はⅨ層，いわゆるP14（薩摩火山灰）の上面であった。埋土中にもP14が存在することから，少なくとも掘削時にはⅨ層が堆積していたものと考えられる。これと類似する土坑が竪穴住居状遺構（SH18とSH37）から検出されており，どのような機能をもっていた土坑なのか注目される。



第173図　土坑実測図19

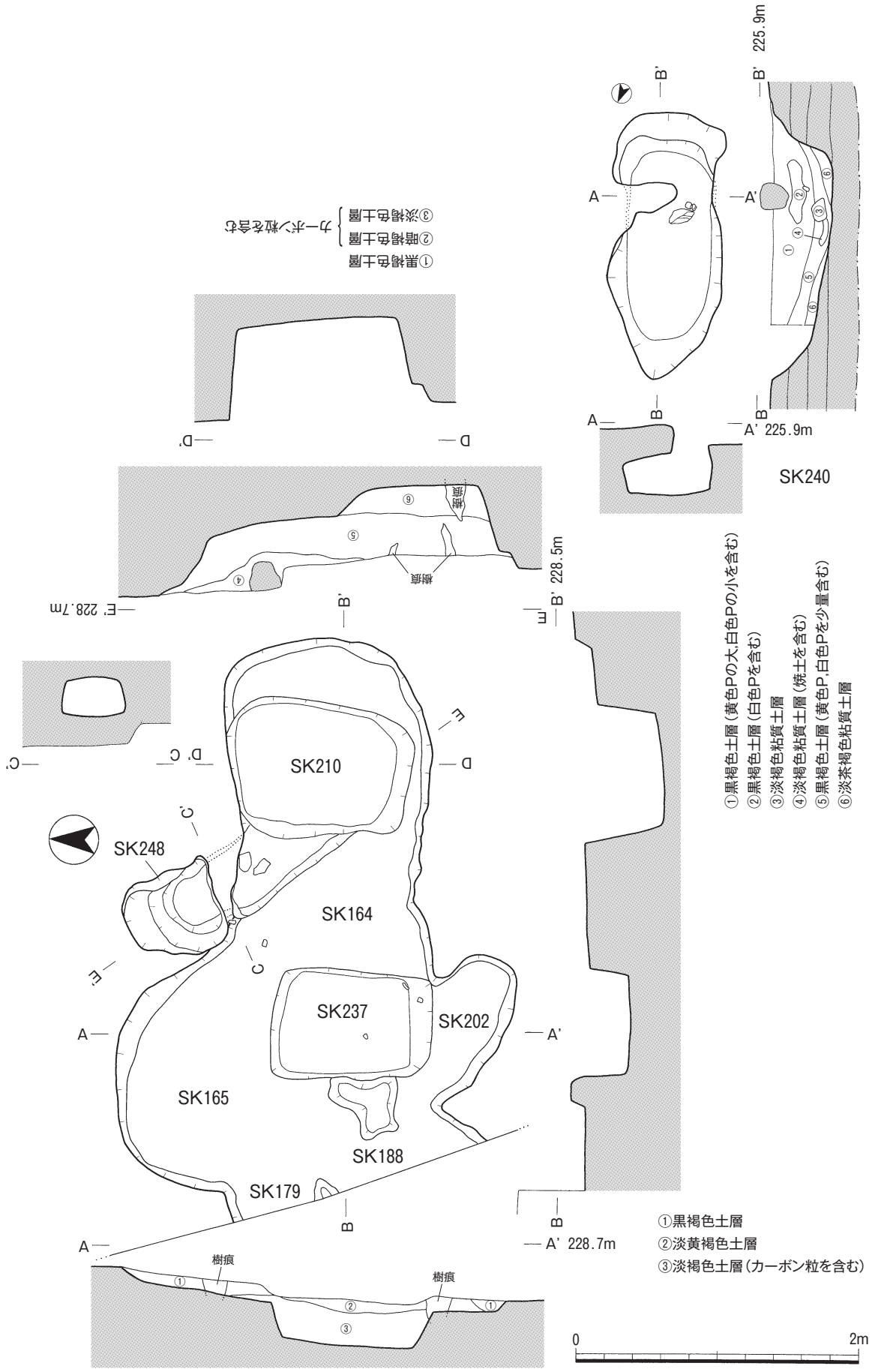




第174図　土坑実測図20

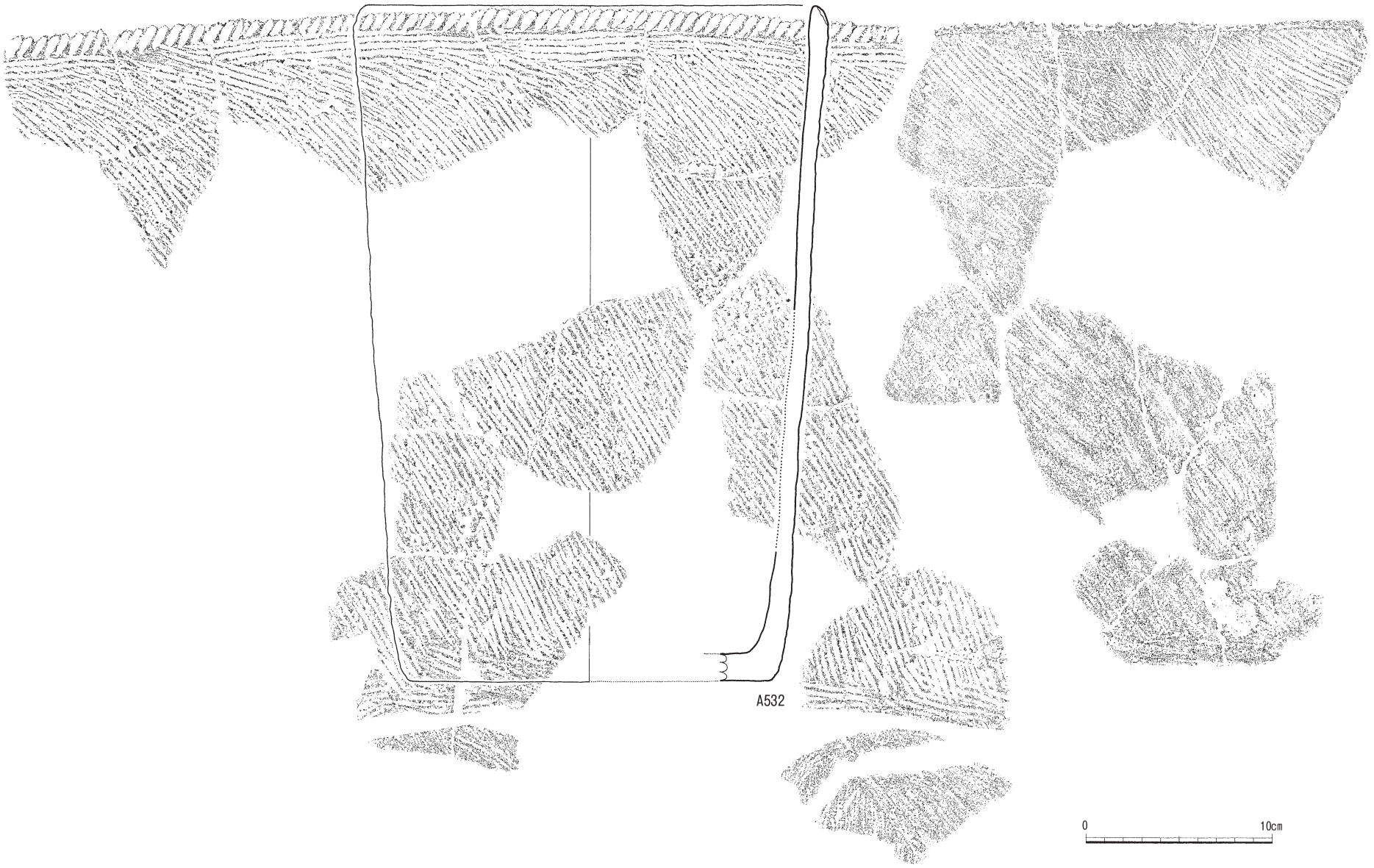
第175図　土坑実測図21

第176図　土坑実測図22

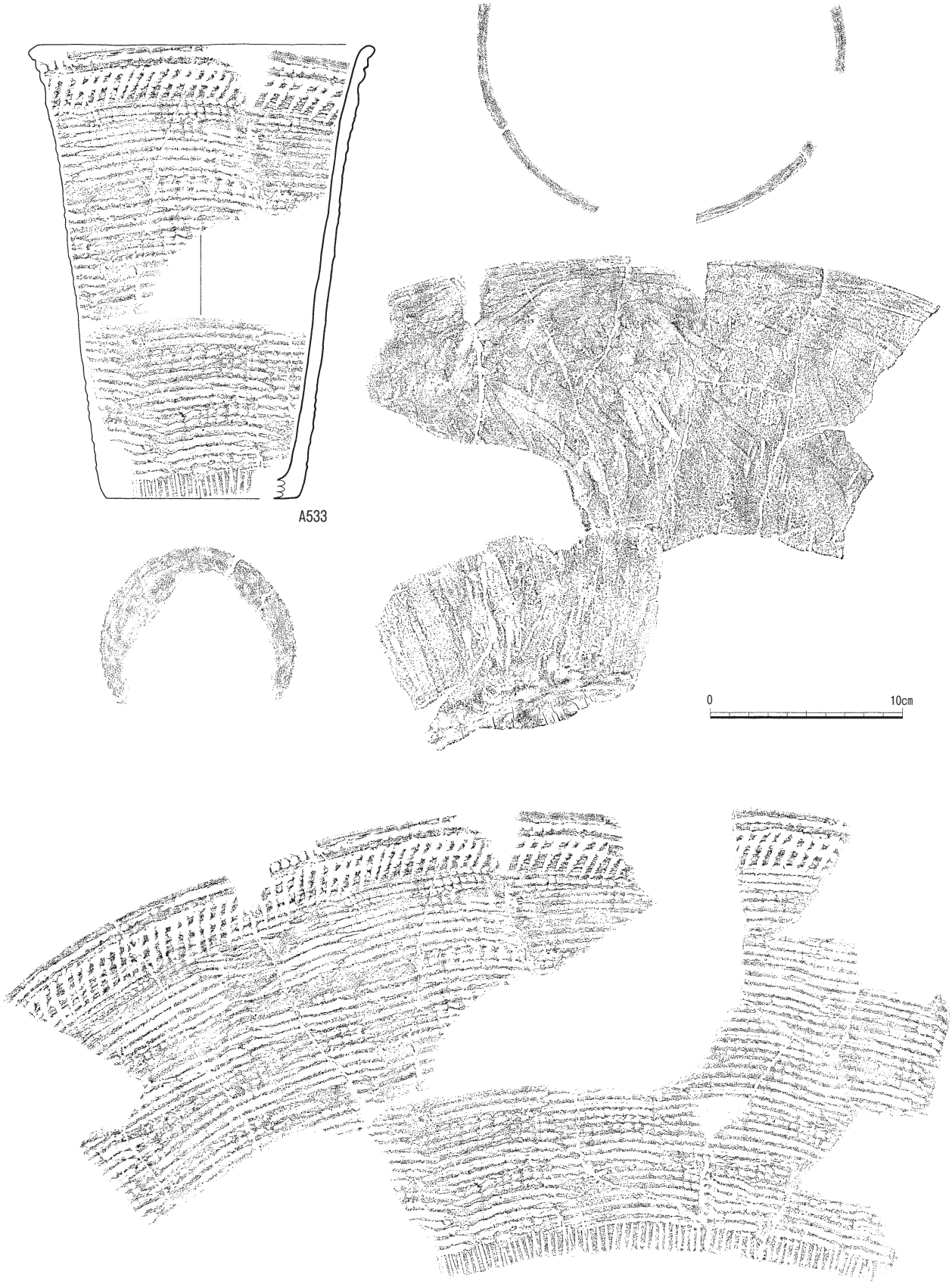


第177図　土坑実測図23

第178図　土坑内出土土器 1

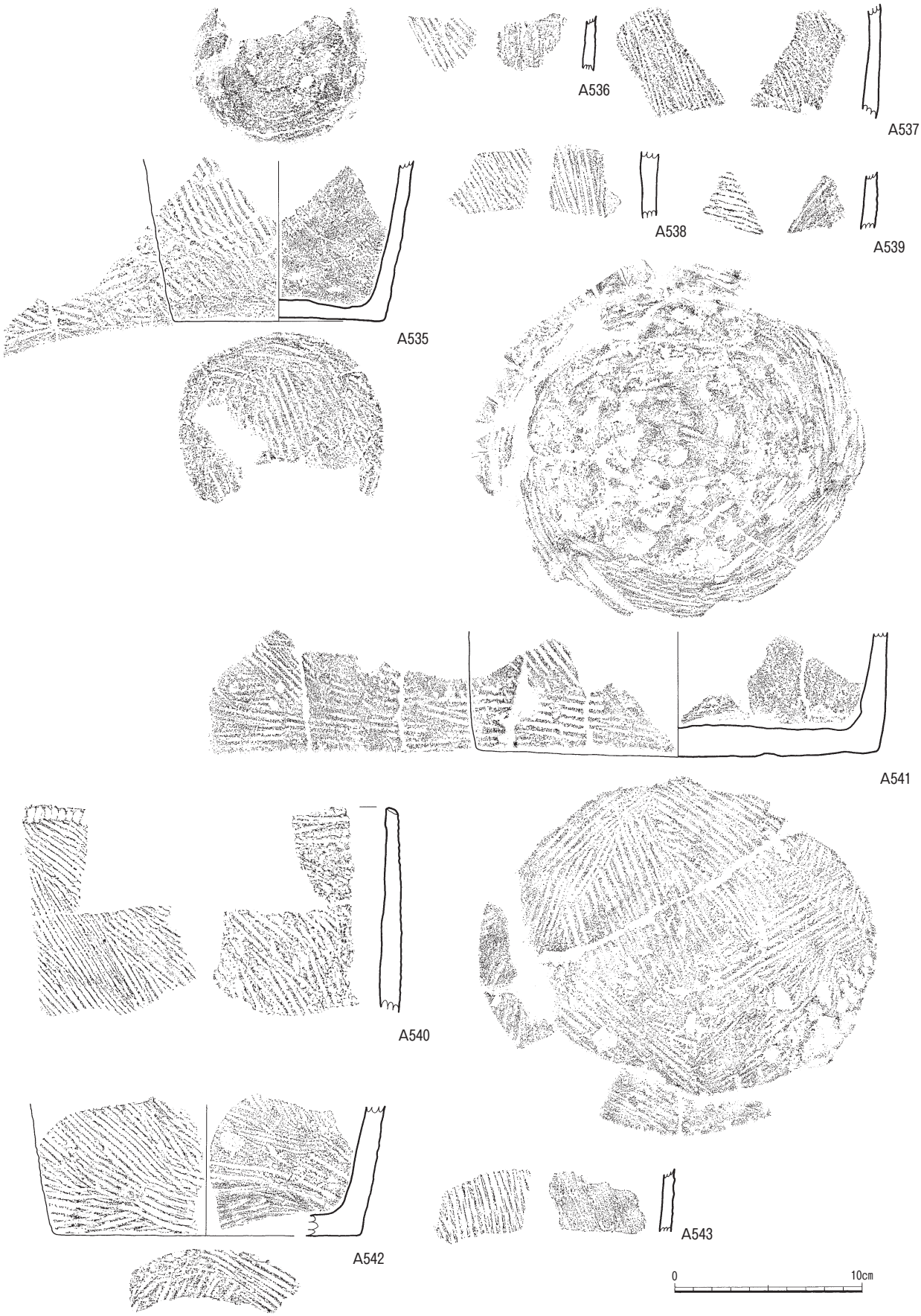


第179図　土坑内出土土器２

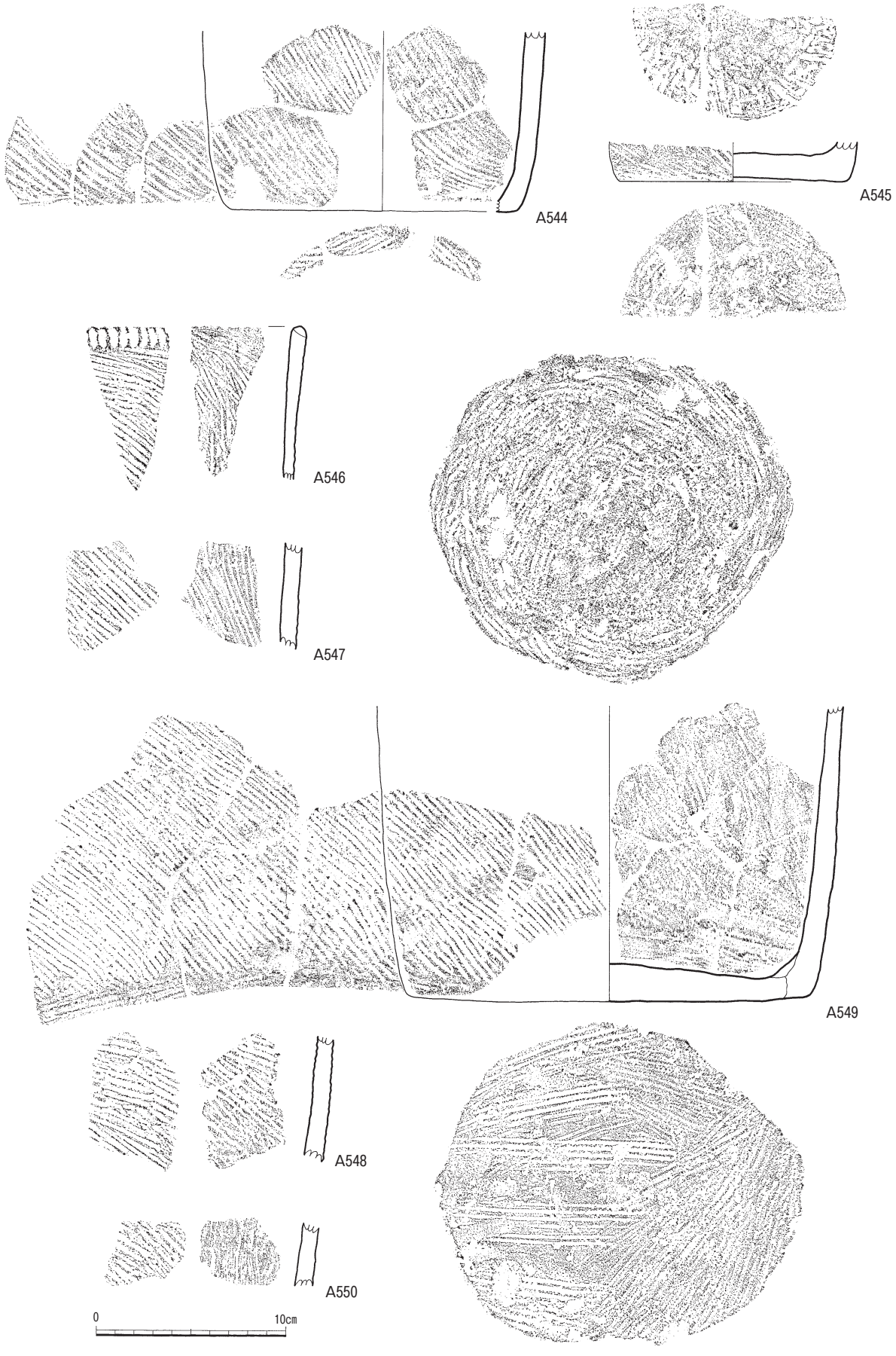


第180図　土坑内出土土器３

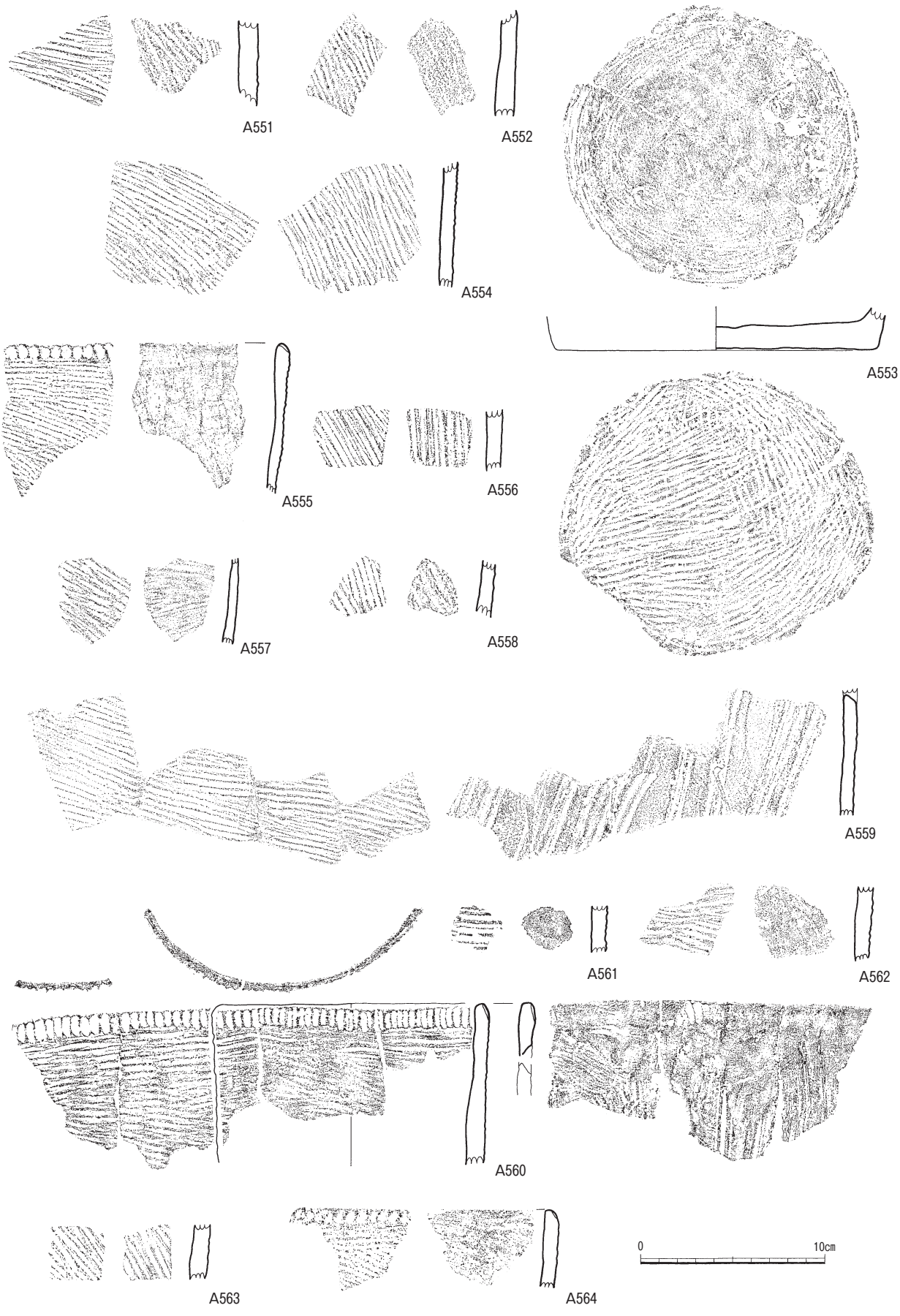
第181図　土坑内出土土器４



第182図　土坑内出土土器５

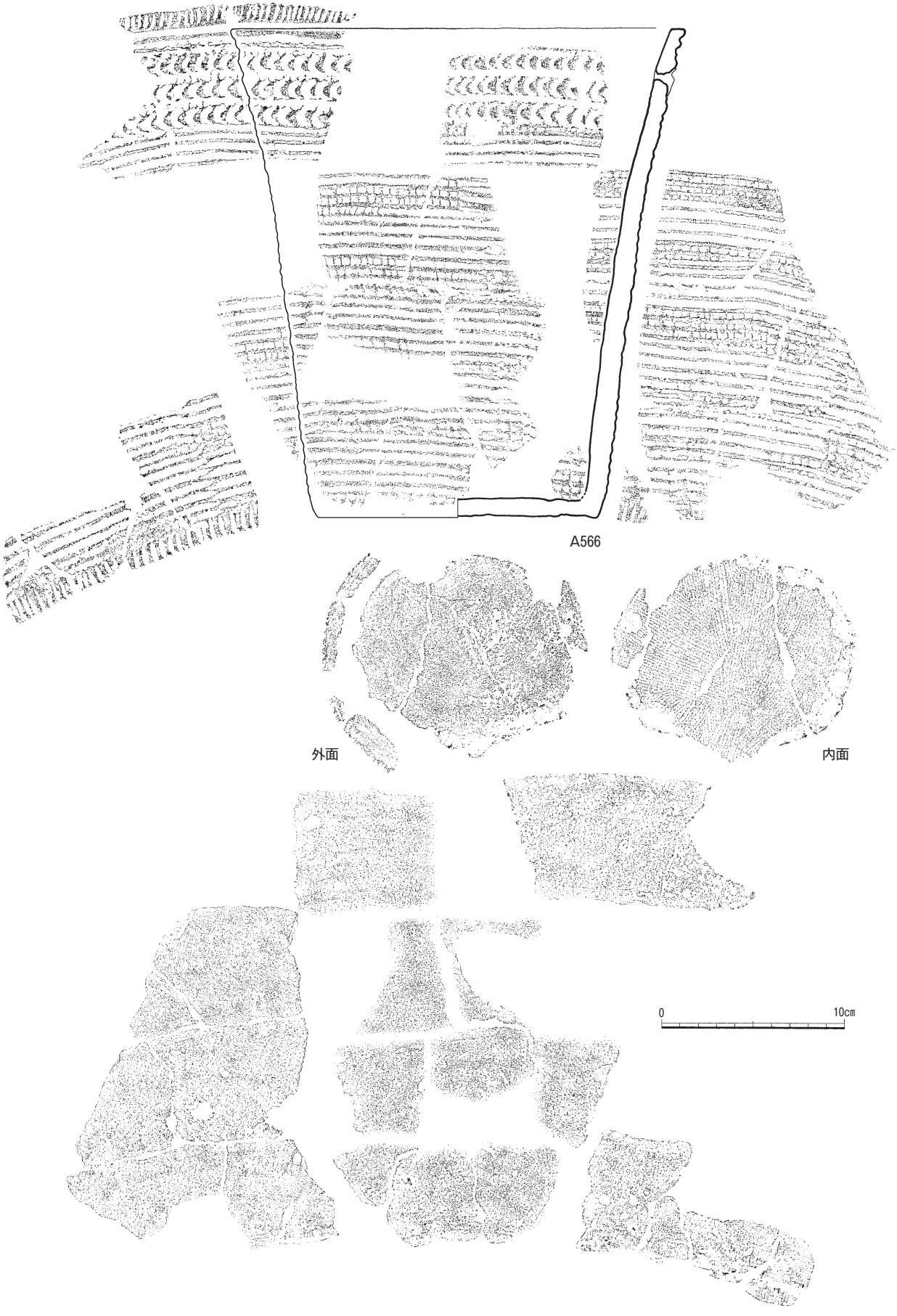


第183図　土坑内出土土器６

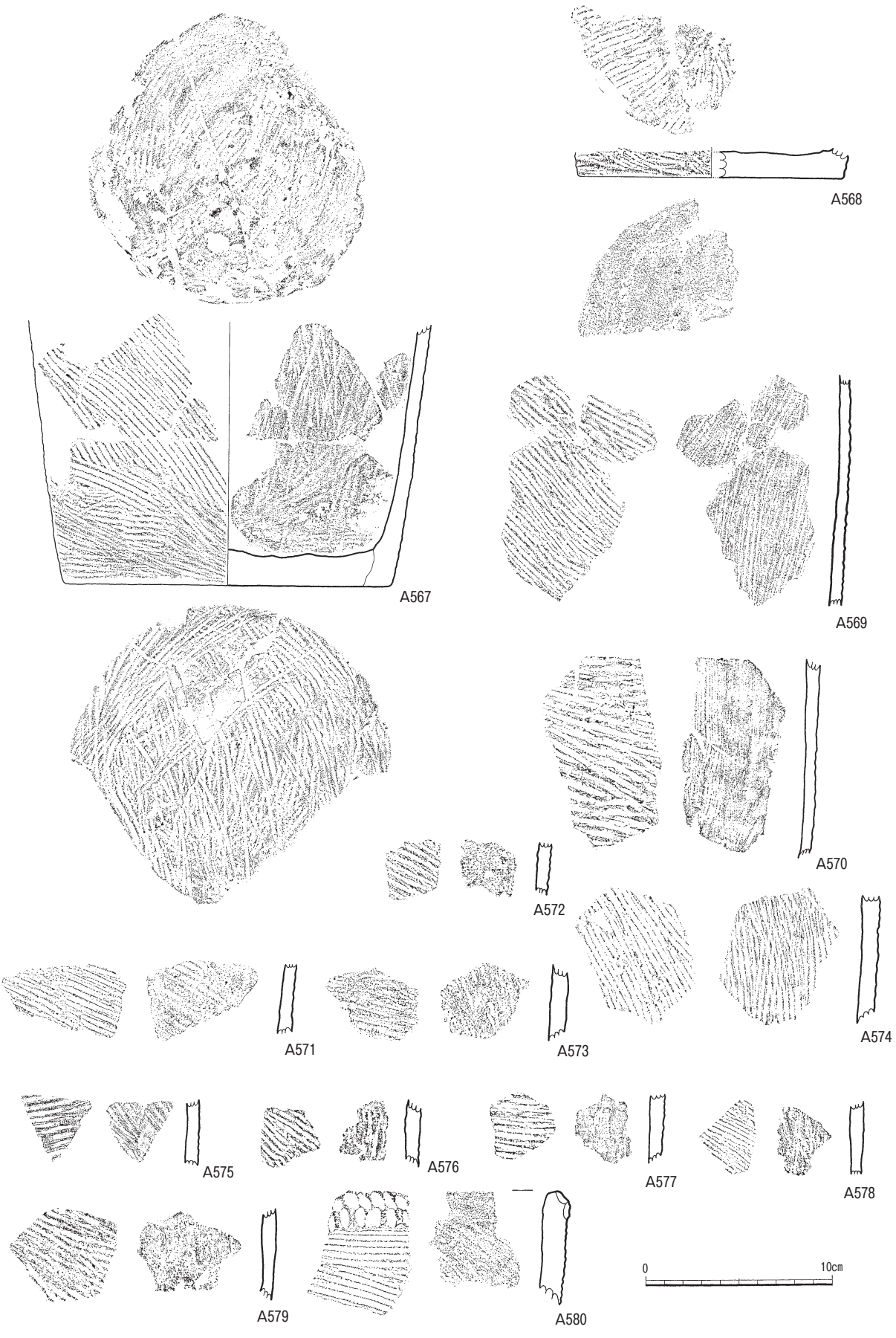


第184図　土坑内出土土器７

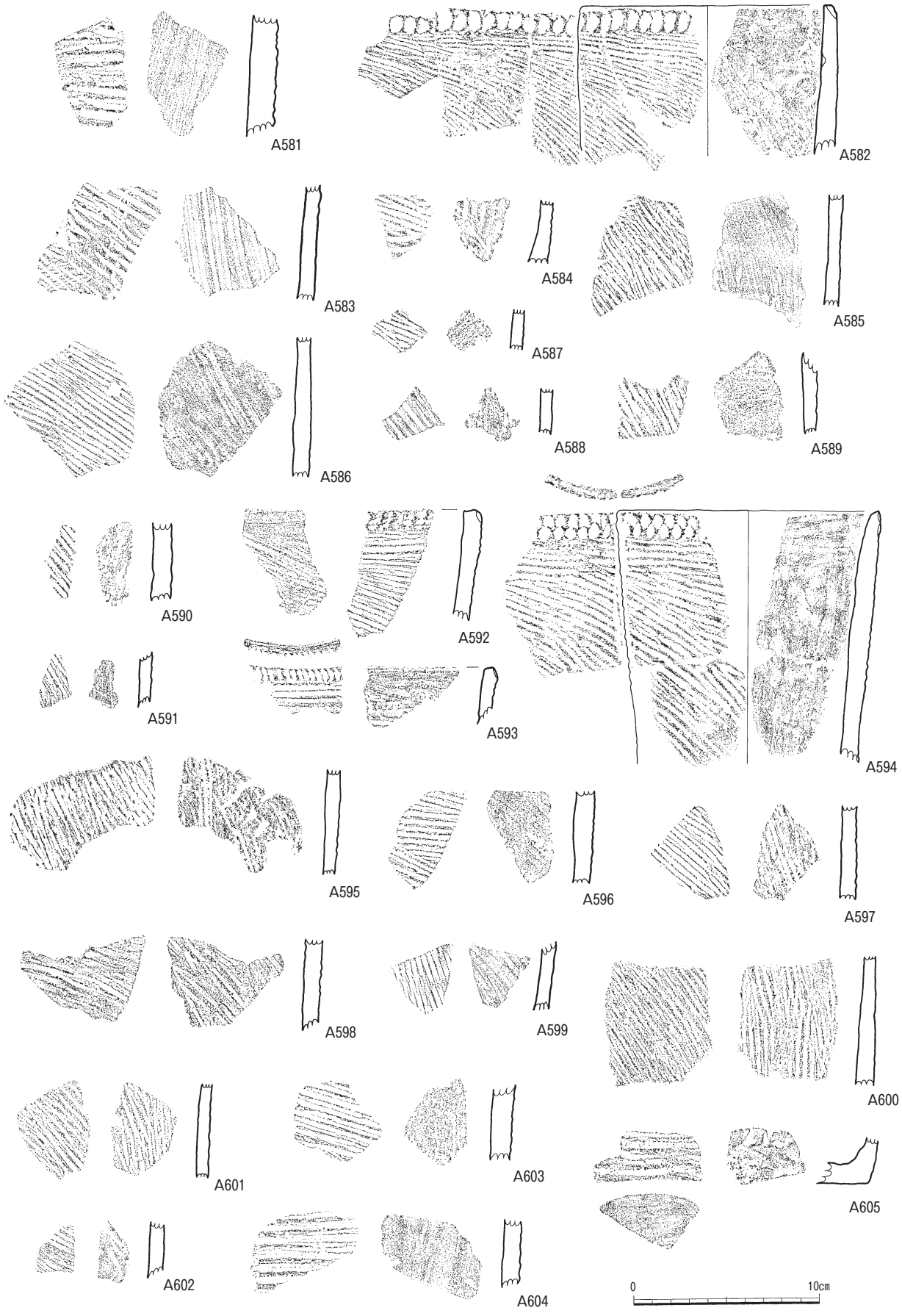
第185図　土坑内出土土器８



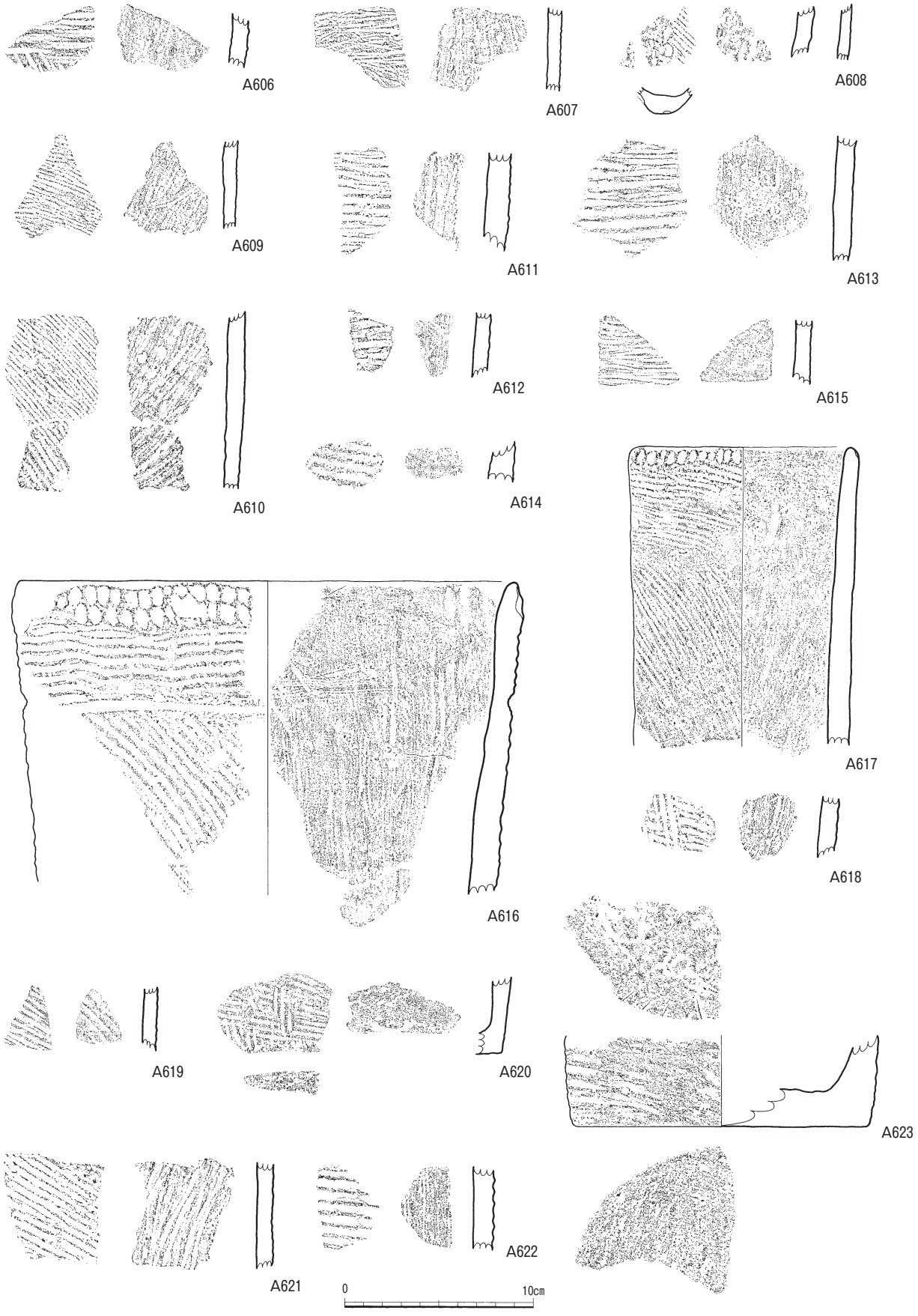
第186図　土坑内出土土器９



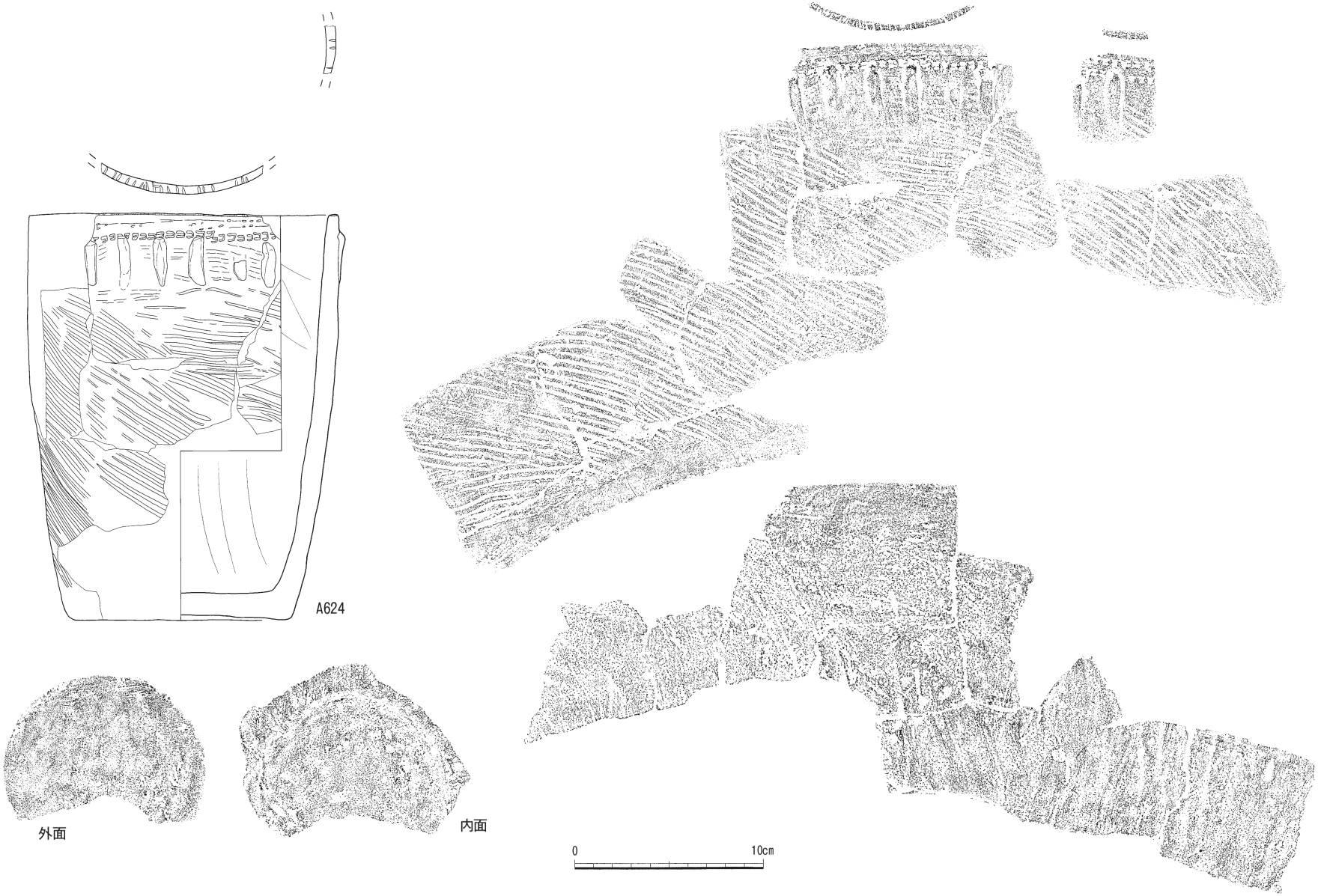
第187図　土坑内出土土器10



第188図　土坑内出土土器11



第189図　土坑内出土土器12

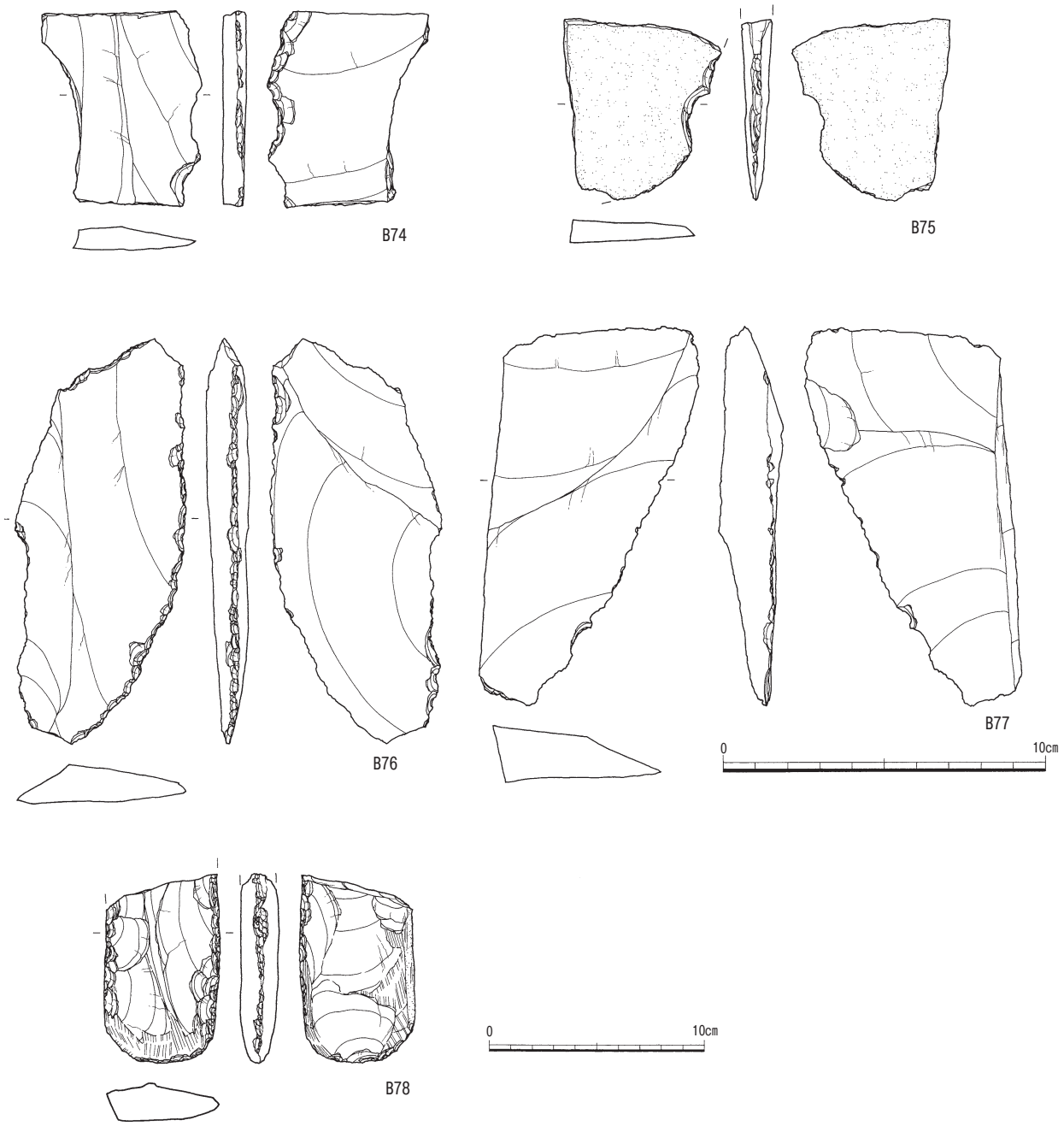


第190図　土坑内出土土器13

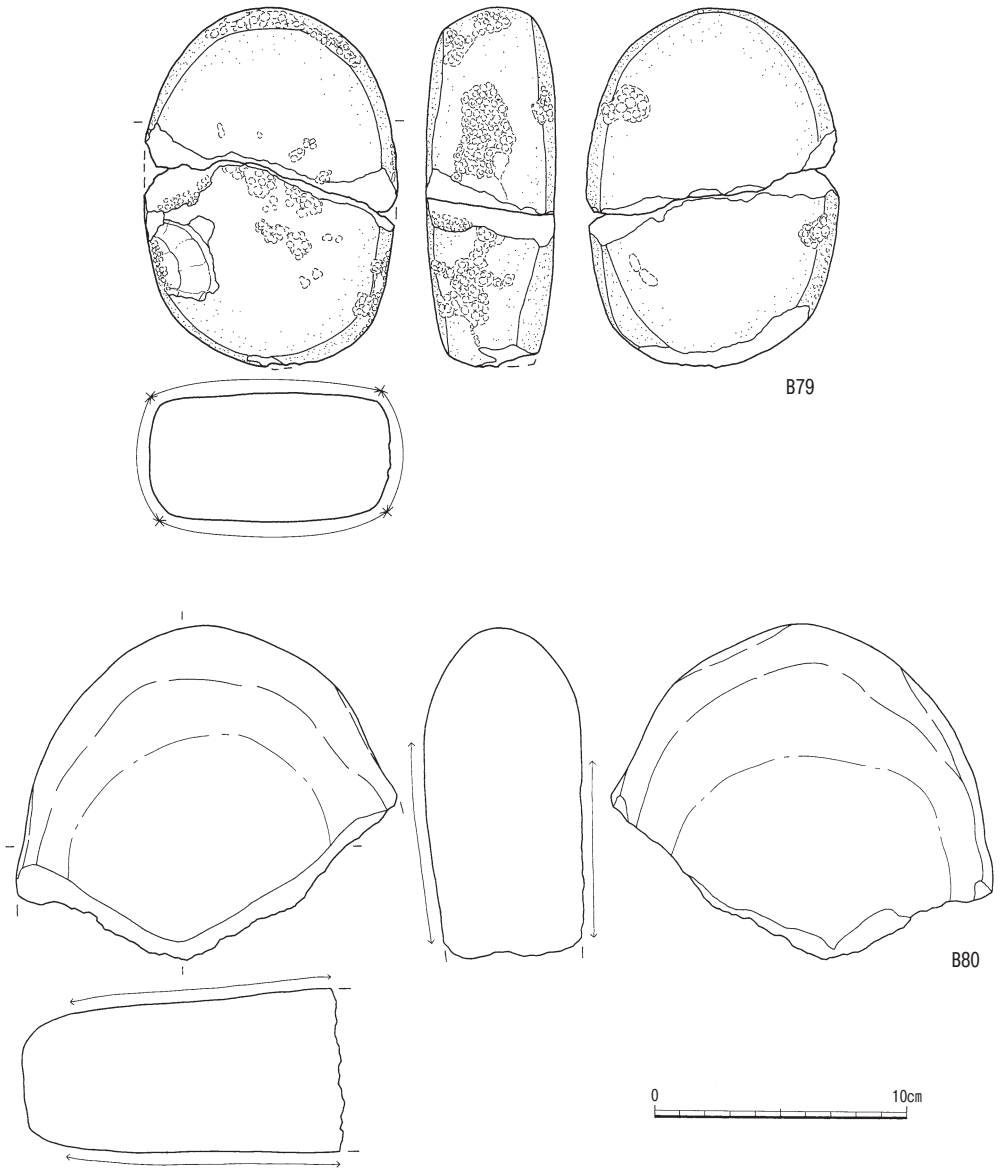
第191図　土坑内出土土器14

第192図　土坑内出土土器15

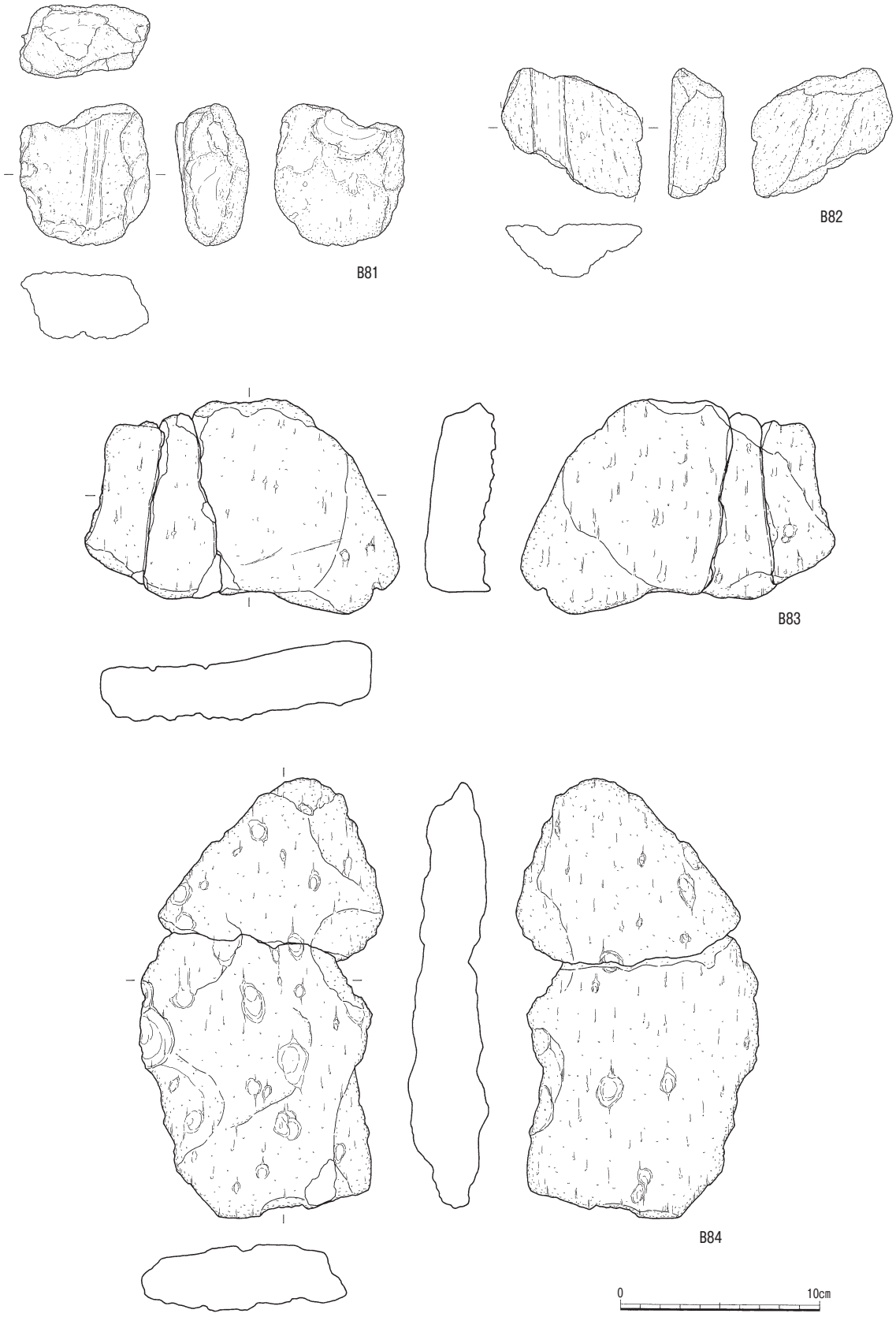
第193図　土坑内出土土器16



第194図　土坑内出土石器 1



第195図　土坑内出土石器２



第196図　土坑内出土石器３

表４　土坑一覧表１

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK01	D, E10	隅丸長方形？	7	140	(130)	0. 90	2		
SK02	D, E10	隅丸長方形？	8	150	(120)	1. 12	1		SH96
SK03	C11	隅丸長方形	2	150	110	1. 33	8		旧SK92
SK04	C14	楕円形	2	145	115	1. 70	25		
SK05	F11, 12	隅丸長方形	5	140	100	1. 23	2		
SK06		楕円形	2	170	95	1. 43	11		SK07
SK07	F11	楕円形	3	80	75	0. 43	3		SK06
SK08	E13	楕円形？	2	150	(70)	1. 26	16		SH25
SK09	C11	不定形	9	(115)	100	0. 66	16		SH12
SK10	F12	不定形	9	140	120	1. 17	3		
SK11	D11, 12	不定形	9	155	(55)	0. 82	0		SH06
SK12	B, C8	不定形	5	(120)	50	0. 67	0		SK122, 123
SK13	E12, 13	長楕円形	6	180	80	1. 26	6		
SK14	C8, 9	楕円形	2	105	55	0. 5	0		
SK15	C15	隅丸長方形	5	160	110	1. 59	17		
SK16	C16	隅丸長方形	5	175	90	1. 38	1		
SK17	C15	長楕円形	6	180	80	1. 16	9		
SK18	D15	楕円形	2	115	70	0. 58	0		
SK19	C17	楕円形	3	85	65	0. 44	0		
SK20	C17	楕円形	3	95	65	0. 53	0		
SK21	C13, 14	隅丸長方形	6	215	85	1. 66	14		
SK22	C13	隅丸長方形	5	135	90	1. 04	1		
SK23	C14	不定形	9	120	95	0. 75	0		
SK24	C8	楕円形？	6	140	55	0. 75	1		SK129
SK25	D13, 14	隅丸長方形	8	180	100	1. 64	9		

表５　土坑一覧表２

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK26	D13	不定形	9	140	110	0. 99	2		
SK27	D13	不定形	9	230	105	1. 09	5		段差有り
SK28		不定形	2	170	120	1. 50	0		
SK29	C8	楕円形	3	(60)	55	0. 30	0		
SK30	C13	不定形	2	100	70	0. 49	2		
SK31	C13	楕円形	2	100	60	0. 48	0		
SK32	D8	隅丸長方形	5	(125)	55	0. 77	0		
SK33	D8	隅丸長方形	6	150	50	0. 49	0		
SK34	C, D12	楕円形	2	205	135	2. 06	3		
SK35	D18	楕円形	5	105	40	0. 36	0		
SK36	D18	楕円形	3	70	60	0. 30	0		
SK37	C13	円形	1	100	90	0. 71	8		
SK38	E13	楕円形	8	115	70	0. 74	0		
SK39	C16	不定形	9	100	80	0. 68	0		SK40
SK40	C16	不定形	9	140	85	0. 81	0		SK39
SK41	C16	楕円形	3	95	70	0. 54	0		
SK42	C16	不定形	9	150	110	0. 93	0		
SK43	C, D16	隅丸長方形	6	125	45	0. 53	0		SK44
SK44	C16	隅丸長方形	6	115	45	0. 48	0		SK43
SK45	C16	不定形	9	95	85	0. 56	0		
SK46	D16, 17	楕円形	2	175	100	1. 31	1		
SK47	D16, 17	楕円形	2	165	90	1. 08	0		
SK48	D18	長楕円形	6	160	80	0. 84	0		
SK49	D18, 19	隅丸長方形	6	(165)	70	1. 05	0		SK66
SK50	C17, 18	隅丸長方形	5	100	45	0. 44	0		

表６　土坑一覧表３

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK51	C17	不定形	3	95	60	0. 46	0		
SK52	C17	不定形	9	125	80	0. 81	1		
SK53	C17	楕円形	2	115	80	0. 67	0		
SK54	D17	隅丸長方形	10	140	60	0. 39	0	◎	
SK55	F10	不定形	3	175	80	0. 28	1		
SK56	D17	楕円形	2	140	80	0. 90	0		
SK57	C17	不定形	3	105	45	0. 35	0		
SK58	C17	楕円形	5	130	80	0. 85	0		
SK59	F9	楕円形	3	90	60	0. 41	0		
SK60	D18	楕円形	2	155	90	1. 12	0		
SK61	D18	隅丸長方形	4	165	150	2. 01	0		
SK62	D17	隅丸長方形	6	140	45	0. 62	0		
SK63	E15	楕円形	5	105	45	0. 43	0		
SK64	E13	楕円形	2	115	80	0. 71	0		
SK65	E13	楕円形	2	120	60	0. 51	10		
SK66	D18, 19	隅丸長方形	6	(140)	60	0. 71	0		SK49
SK67	D19	不定形	9	170	75	0. 89	0		SK70
SK68	D19	隅丸方形	5	185	130	2. 07	0		SK70
SK69	D11	楕円形	2	180	130	1. 83	8		
SK70	D19	不定形	5	220	95	0. 90	1		SK67, 68
SK71	H5	隅丸長方形	10	(105)	55	0. 64	4	○	SK167, 168
SK72	C11, 12	不定形	9	120	95	0. 79	5		
SK73	E17	不定形	2	85	55	0. 40	0		
SK74	G10	隅丸方形	4	70	65	0. 43	0		SH01
SK75	G4	隅丸長方形	5	(130)	70	0. 37	1		SK173, 174

※◎はブリッジが残っているもの,○はブリッジの一部が残っているもの

表７　土坑一覧表４

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK76	C9	不定形	9	105	60	0. 42	2		旧SK56
SK77	C9	楕円形	8	115	85	0. 88	1		
SK78	C10	楕円形	2	140	120	1. 36	2		
SK79	D, E15, 16	不定形	9	95	95	0. 49	0		
SK80	C17	楕円形？	2	(110)	(80)	0. 53	0		路線外
SK81	B, C15	隅丸方形	4	100	90	0. 74	0		
SK82	B14	楕円形？	7	(155)	(100)	1. 46	0		路線外
SK83	B14	隅丸方形？	5	(120)	(115)	1. 10	1		路線外
SK84	H4	楕円形	6	120	40	0. 53	0		SK185
SK85	D12	不定形	9	170	60	0. 90	1		
SK86	D12	隅丸長方形	5	50	80	0. 87	0		
SK87	G5	隅丸長方形	5	90	55	0. 48	1		SK193
SK88	C12	隅丸長方形	5	140	90	1. 03	0		
SK89	C12	隅丸長方形	5	160	90	1. 33	0		
SK90	C12	不定形	9	150	80	0. 87	0		
SK91	C12	不定形	9	160	110	1. 35	0		
SK92	G9	楕円形	5	(90)	50	0. 42	1		SK204
SK93	D11	楕円形	7	100	50	0. 46	2		
SK94	D11	楕円形	3	95	50	0. 41	0		
SK95	D11	不定形	9	70	50	0. 21	0		
SK96	E9	隅丸長方形	10	205	90	1. 02	2	◎	
SK97	E9	隅丸長方形	10	150	80	0. 96	1	○	
SK98	G5	隅丸長方形	5	155	(85)	1. 25	2		SK99, 100
SK99	G5	楕円形	2	115	55	0. 53	9		SK98, 100
SK100	G5	隅丸長方形	5	(120)	75	0. 80	4		SK98, 99

表８　土坑一覧表５

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK101	D12	楕円形	2	165	135	1．55	3		
SK102	F10	長楕円形	6	160	50	0．65	0		
SK103	G11	長楕円形	5	180	110	1．50	0		
SK104	F11	楕円形	2	100	60	0．52	0		SK105
SK105	F10	楕円形	2	100	40	0．39	0		SK104
SK106	C11，12	不定形	9	80	60	0．63	0		
SK107	F，G9	楕円形	3	50	40	0．18	0		SK235
SK108	E10	隅丸長方形	5	145	100	1．23	1		
SK109	E10	隅丸長方形	10	225	40	0．56	1	◎	
SK110	D10	楕円形	7	170	130	1．80	4		
SK111	C10	隅丸長方形	9	165	130	1．79	1		
SK112	C，D11	楕円形	2	175	100	1．25	3		
SK113	C11	不定形	9	125	45	0．55	1		
SK114	C10	隅丸長方形	5	140	70	0．76	0		
SK115	C10	楕円形	8	120	60	0．63	0		
SK116	C10	楕円形	2	90	50	0．34	1		
SK117	C10	楕円形	2	105	50	0．37	0		
SK118	C10	隅丸長方形	5	90	55	0．43	0		
SK119	B9	隅丸長方形	5	100	60	0．58	0		
SK120	F12	楕円形？	5	(120)	90	0．98	2		SH87
SK121	F12	隅丸方形？	4	(140)	(130)	0．75	0		SH87
SK122	B，C8	不定形	9	(105)	50	0．52	0		SK122
SK123	B，C8	隅丸長方形	6	170	50	0．67	0		
SK124	B14，15	楕円形	3	(70)	(70)	0．20	0		
SK125	H9，10	楕円形	2	(140)	80	0．95	0		トレンチで削平

表９　土坑一覧表６

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK126	C8	不定形	9	120	115	0. 87	0		
SK127	C8, 9	隅丸長方形	6	170	75	1. 04	0		
SK128	C8	円形	1	105	100	0. 80	0		
SK129	C8	楕円形？	3	(70)	55	0. 32	0		SK129
SK130	C8	隅丸長方形	6	220	60	1. 22	0		
SK131	D8, 9	楕円形	9	80	65	0. 44	0		
SK132	D8	不定形	2	110	60	0. 49	0		
SK133	D8	不定形	9	(115)	55	0. 53	0		
SK134	H10	隅丸長方形？	6	(210)	100	1. 76	2		路線外
SK135	D8	隅丸長方形	5	185	65	0. 59	0		
SK136	D8	楕円形	2	100	40	0. 32	0		
SK137	D8	楕円形	3	95	55	0. 39	0		
SK138	D8	隅丸長方形	10	160	65	0. 31	0	◎	SH86
SK139	D8	不定形	3	225	60	0. 55	1		重複？
SK140	D8	隅丸長方形	5	80	50	0. 33	1		
SK141	C, D8	隅丸長方形	5	85	35	0. 28	1		
SK142	D7, 8	楕円形	3	90	55	0. 38	0		
SK143	D7	楕円形	3	80	50	0. 28	0		
SK144	C15	楕円形	2	80	70	0. 45	5		SH48
SK145	G9	楕円形	3	(90)	55	0. 48	0		SK146
SK146	G9	不定形	9	(150)	65	0. 81	0		SK145
SK147	G9	隅丸長方形	6	110	55	0. 58	0		SK234
SK148	F8	不定形	9	(90)	50	0. 37	0		SH50
SK149	G7	楕円形	7	210	125	2. 06	8		
SK150	G7	不定形	9	130	90	1. 07	0		

表10　土坑一覧表７

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK151	F7, 8	隅丸方形	4	120	115	1. 40	0		SH51
SK152	F9	隅丸長方形？	5	(135)	(85)	0. 84	0		SH48
SK153	G7	隅丸長方形	6	200	95	1. 66	1		
SK154	F9	不定形	9	110	(95)	0. 59	0		SH48
SK155	F9	楕円形？	3	(80)	55	0. 38	0		SH48
SK156	G6	隅丸長方形	5	200	115	2. 11	9		
SK157	H6	楕円形	2	130	60	0. 64	1		
SK158	G, H6	楕円形	2	190	160	1. 80	2		
SK159	H5, 6	隅丸長方形	5	155	140	1. 58	9		
SK160	G6	隅丸長方形	5	100	60	0. 49	0		
SK161	F7	隅丸長方形？	10	160	60	0. 73	0	○	SH80, 81
SK162	F7	隅丸長方形？	6	(200)	75	1. 15	3		SH52, 82
SK163	G6	不定形	9	(80)	(60)	0. 35	0		SH62
SK164	H3	隅丸長方形？	5	(230)	130	2. 09	0		SK210, 261, 260
SK165	H3	隅丸長方形？	5	(250)	(140)	1. 13	2		SK260, 261
SK166	G, H5	隅丸長方形	4	165	145	2. 21	9		
SK167	H5	隅丸長方形	10	190	55	1. 07	4	△	SK168
SK168	H4, 5	隅丸長方形	10	(200)	50	0. 93	2	△	SK167
SK169	H4	隅丸長方形	2	135	100	1. 18	3		
SK170	G4, 5	隅丸長方形	10	(190)	75	1. 45	3	○	SK263
SK171	G4	隅丸長方形	10	(205)	80	1. 65	4	○	SK263
SK172	G4	長楕円形	2	210	70	1. 1	1		
SK173	H4	隅丸長方形	10	(185)	60	0. 56	3	◎	SK75
SK174	G4	不定形	9	(180)	(100)	1. 04	9		
SK175	G4	隅丸長方形	10	190	65	1. 03	0	△	

※△はブリッジの名残りがみられるもの

表11　土坑一覧表８

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK176	G4	不定形	9	(165)	85	1. 11	3		
SK177	G4	隅丸長方形	6	150	60	0. 86	0		
SK178	G4	楕円形	3	95	55	0. 38	0		
SK179	H3	不明	9	65	(20)	0. 18	0		路線外
SK180	G4	不定形	9	105	60	0. 49	0		
SK181	G4	楕円形	3	100	50	0. 41	0		
SK182	G4	隅丸長方形	10	(200)	65	1. 13	1	◎	SH74
SK183	H4	不定形	9	(125)	80	0. 65	0		SK185, 211
SK184	H4	隅丸長方形	5	150	80	1. 08	0		SK211
SK185	H4	楕円形	7	140	100	1. 11	2		SK183, 185
SK186	H4	長楕円形	10	205	70	1. 14	2	○	
SK187	H4	隅丸長方形	5	90	60	0. 46	0		
SK188	H3	不明	9	(100)	(45)	0. 33	5		路線外
SK189	H3	隅丸長方形	5	(160)	100	1. 32	10		SK262
SK190	G, H3	楕円形	2	130	60	0. 59	0		
SK191	G5	隅丸長方形	9	150	70	0. 99	1		SK192
SK192	G5	隅丸長方形	6	175	55	0. 91	2		SK191
SK193	G5	隅丸長方形	5	65	45	0. 27	1		SK193
SK194	G5	隅丸長方形？	5	150	115	1. 59	1		
SK195	F5	隅丸長方形	7	160	120	1. 55	23		SK196
SK196	F6	隅丸長方形	7	170	160	2. 07	3		SK195
SK197	F6	不定形	9	(75)	70	0. 43	0		SK198
SK198	F6	隅丸長方形	5	195	110	2. 07	1		SK197
SK199	E, F5	不定形	9	230	140	2. 20	3		
SK200	E5	隅丸長方形	5	190	120	1. 93	8		

表12　土坑一覧表９

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK201	D5	隅丸長方形	2	155	105	1．16	1		
SK202	H3	隅丸長方形	5	(110)	(60)	0．63	0		SK260
SK203	D，E6	隅丸長方形	4	160	145	2．06	2		
SK204	G9	楕円形	5	(70)	50	0．33	0		SK204
SK205	C12	楕円形？	2	155	(60)	0．72	1		一部削平
SK206	C11，12	不定形	9	135	60	0．61	1		
SK207	C12	隅丸長方形	5	120	55	0．56	0		
SK208	F10，11	楕円形？	3	(85)	80	0．55	0		SH04
SK209	F13	隅丸方形？	4	125	(120)	1．60	1		SH10
SK210	H3	隅丸長方形	5	130	95	1．11	2		SK261
SK211	H4	不定形	4	(75)	55	0．40	1		
SK212	G4	楕円形	2	105	45	0．42	0		
SK213	F5	隅丸長方形	5	115	65	0．63	6		
SK214	C10，11	隅丸方形？	4	120	(100)	1．17	0		SH11
SK215	E13	楕円形	2	120	100	0．95	0		SH14
SK216	E5	隅丸長方形	5	135	80	0．99	2		
SK217	E5，6	隅丸長方形	5	165	120	1．77	2		
SK218	E6	隅丸長方形	10	(170)	55	0．88	1	○	SH67
SK219	C9，10	楕円形？	3	125	(60)	1．00	0		SH38
SK220	G5	不定形	9	60	(50)	0．40	0		SH56
SK221	E6	長楕円形	9	190	70	1．08	1		
SK222	E7	楕円形	2	170	120	1．57	0		
SK223	H5	不定形	9	(70)	70	0．34	0		SH59
SK224	F6	隅丸長方形	6	(180)	80	1．17	0		SH75
SK225	F6	楕円形	3	(65)	(50)	0．27	0		SH75

表13　土坑一覧表10

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK226	F6	長楕円形？	2	(160)	100	1．19	0		SH61
SK227	F，G6	不定形	9	(120)	90	0．73	0		SH62
SK228	G6	隅丸長方形	5	120	60	0．63	0		SH62
SK229	F6	楕円形	2	140	(110)	1．07	0		SH79
SK230	F6	不定形	9	170	80	1．07	0		SH66
SK231	G6	隅丸長方形	6	(150)	70	1．10	0		SH65
SK232	G6	楕円形	2	185	100	1．42	4		
SK233	F7	隅丸長方形？	5	130	(90)	0．89	1		SH51
SK234	G9	不定形	9	125	90	1．28	0		
SK235	F，G9	隅丸長方形	6	(140)	50	0．68	0		SH48
SK236	E11	楕円形	2	160	95	1．23	1		
SK237	H3	隅丸長方形	5	110	75	0．82	3		
SK238	B11	長楕円形	2	(150)	80	0．99	0		SH39
SK239	F12	隅丸長方形	5	130	70	0．73	1		
SK240	F10，11	長楕円形	10	190	80	1．12	0	○	
SK241	C11，12	不定形	9	90	40	0．27	0		
SK242	E11	不定形	9	250	130	2．02	21		
SK243	E11	楕円形	4	105	90	0．69	0		
SK244	E11	不定形	7	100	60	0．43	9		
SK245	F12	楕円形	2	145	90	0．92	1		
SK246	C8，9	楕円形	2	100	60	0．54	2		
SK247	F5，6	隅丸長方形	10	170	65	0．98	0	○	SH61
SK248	H3	隅丸長方形？	10	(170)	60	0．26	2	◎	SK210
SK249	H3	不定形	2	140	(90)	0．94	0		SK189
SK250	G4	楕円形？	2	(145)	100	0．54	10		SK170，171

表14　土坑一覧表11

遺構名	検出区	形状	タイプ	長軸(cm)	短軸(cm)	面積(㎡)	遺物数	連穴の状態	備考(重複遺構等)
SK251	C12	円形	1	80	80	0.47	0		
SK252	G4, 5	楕円形	2	120	70	0.67	0		
SK253	G4, 5	不定形	9	150	60	0.70	2		
SK254	G5, 6	隅丸正方形	4	160	120	1.93	0		SH60
SK255	D14	不定形	9	245	100	1.94	2		SK256
SK256	D14	隅丸方形	4	135	110	1.52	7		SK255
SK257	G7	隅丸長方形	5	165	115	0.88	0		SK258
SK258	G7	隅丸長方形	5	185	130	2.11	6		SK257, 153
SK259	G6	楕円形	2	190	150	2.23	4		
SK260	G, H6	楕円形	3	90	35	0.31	0		SK158
SK261	F5, 6	不定形	9	115	80	0.80	5		SK195, 196
SK262	E, F5	隅丸長方形	5	105	60	0.49	2		SK199
SK263	C8	楕円形	3	55	35	0.17	0		SK24, 129
SK264	D8	楕円形	3	85	80	0.59	0		SK135
SK265		楕円形	3	55	40	0.16	0		
SK266	D18	不定形	9	50	30	0.15	0		SK49, 66
SK267	D19	不定形	9	50	45	0.17	0		SK49
SK268	F10	楕円形	2	115	80	0.58	0		SK55
SK269	D19	五角形	7	150	75	0.88	0		SK67, 68, 70
SK270	D8	隅丸長方形	5	100	70	0.57	0		SK138a
SK271	D8	不定形	9	70	50	0.40	0		SK139
SK272	G4	不定形	9	50	40	0.16	0		SK172
SK273	F12	隅丸長方形	5	125	80	0.95	0		深さ190cm

（３）集石遺構（第197～213図）

集石遺構は54基検出された。検出面はおおむねⅦ層中とⅧ層上面にあった。集石遺構を構成する礫の状態や掘り込みの有無等から以下の５つのタイプに分類した。

Type １……礫の集中度が高く，下部に掘り込みがある。

Type ２……礫の集中度は高いが，下部に掘り込みはない。

Type ３……礫はほぼ平面的に広がり，下部に掘り込みがある。

Type ４……礫はほぼ平面的に広がり，下部に掘り込みはない。

Type ５……礫の集中度は低く，散在的であるが，周囲と比較的すると礫が集まっている。

礫の集中度とは，感覚的であるが，礫と礫の間に空間があるか無いか，また，礫が上下に重なり合っているかどうか等を目安とした。

また，集石遺構を構成する礫の重量を計測したところ，P354～P357図のグラフのような結果となった。縦軸が礫の個数，横軸が礫の重量を表している。そのグラフのパターンから，構成礫の重量の状況を大きく以下の３つのパターンに分類した。

A……グラフは「へ」字状になる。

B……グラフは「山」字状になる。構成する礫の数が，

C……グラフは平坦な台状になる。

以下，タイプ別に集石遺構の概略を説明したい。

Type １

７号集石遺構　７号はG10区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸85cm，短軸65cmの範囲に重なり合いながら広がる。ただ，礫の広がりとは別に，下部には長軸105cm，短軸90cmの楕円形状を呈する掘り込みが検出された。礫は，掘り込みに沿うように広がっているが，床面からは浮いた状態で検出されており，敷石的な礫は無かった。構成礫数は48個で，１個平均の重さが300ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物はなかった。

９号集石遺構　１号はE11区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸110cm，短軸50cmの範囲に広がる。広がりは礫が集中する東側と６個が散在する西側の２か所に分かれ，礫が集中する東側は下部に掘り込みが検出された。掘り込みは長軸50cm，短軸40cmの楕円形を呈し，深さが10cm弱であった。礫は重なりながら掘り込み内まで入り込んでいたが，敷石的な礫は無かった。構成礫数は44個で，１個平均の重さが483ｇ，重量パターンはＣであった。遺構関連としては，小形の石皿状石器がある。これは構成礫２点が接合した資料である。

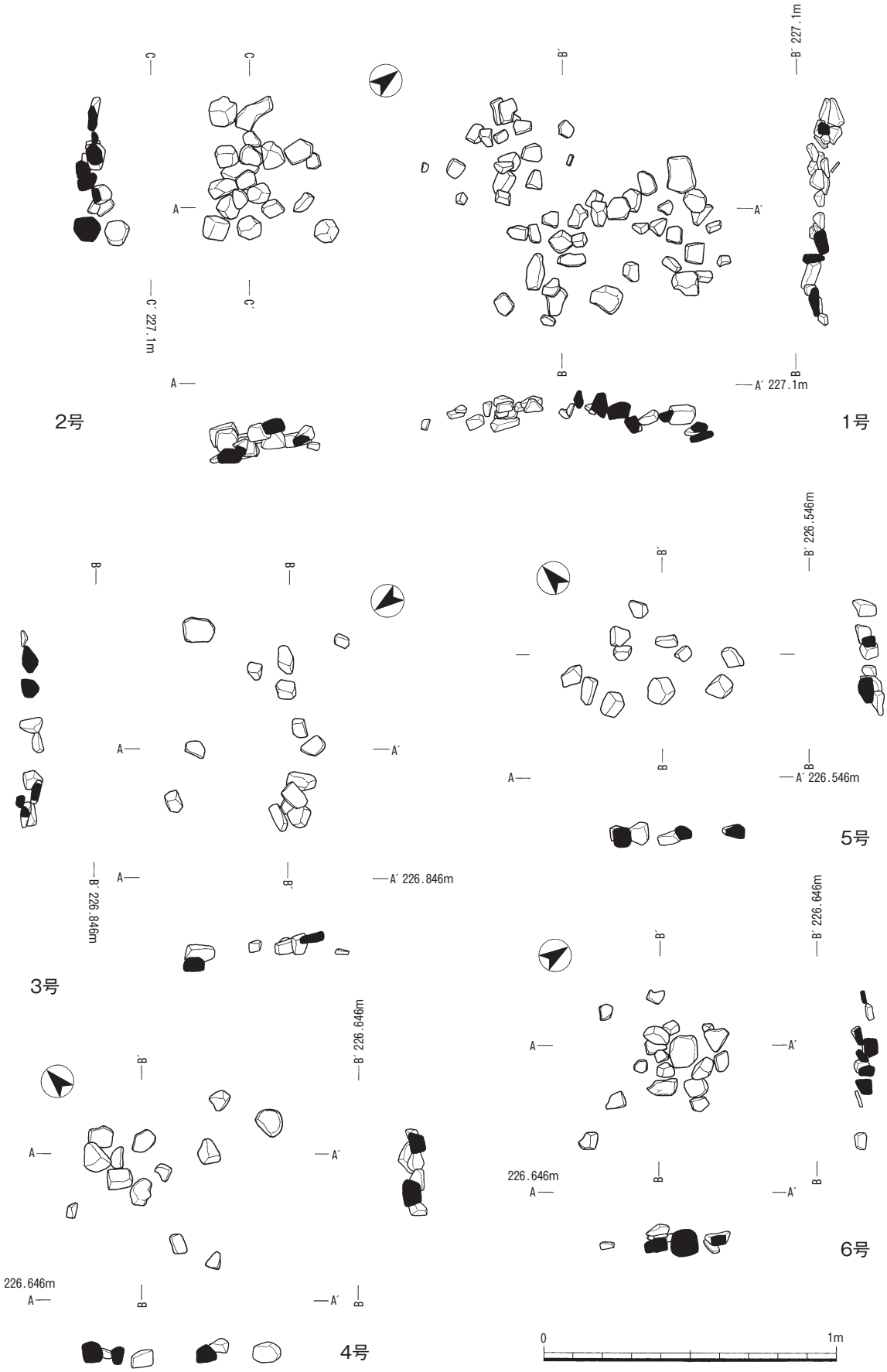
11号集石遺構　11号はF10区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸80cm，短軸65cmの範囲に重なりながら広がり，下部には礫の広がりとほぼ同規模の掘り込みが検出された。掘り込みの深さは10cm強であったが，多くは床面から浮いた状態で出土した。敷石的な礫は無かった。構成礫数は91個で，１個平均の重さが503ｇ，重量パターンはＢであった。礫の中には，１kgを越えるものが６個と，比較的重量のある礫を含んでいた。そのうちの１個は6kgもあり，突出した規模をもつ礫であった。これは石皿状の大形礫で集石の東端に置かれていた。B96は安山岩製の扁平な石皿片である。包含層中の２点と接合した資料である。現況では長さ20.15cm，幅13.4cm，厚さ4.85cm，重さ1971g を

表15　集石遺構一覧表１

No.	検出区	検出層	形態	重量	長軸	短軸	掘込	構成礫の内容数（個）							熱を受けた痕跡のある礫数（重複有）			１個あたり	備考
			タイプ	パターン	cm	cm		総数	安山岩	頁岩	凝灰岩	砂岩	花崗岩	軽石	すす	ひび	赤化	の重量(g)	
1	F7	Ⅶ下	2	A	100	70	無	47	40	4	3	0	0	0	29	5	1	247	土器1点
2	F7	Ⅶ下	2	C	50	45	無	19	17	0	1	0	1	0	4	4	2	421(363)	
3	D10	Ⅷ上	5	C	80	80	無	14	13	0	0	0	1	0	3	3	0	295	
4	D11	Ⅷ上	4	C	80	65	無	13	11	0	2	0	0	0	1	3	2	345	
5	D11	Ⅷ上	4	A	65	35	無	11	10	1	0	0	0	0	7	1	0	232	
6	D11	Ⅷ上	4	A	65	50	無	18	14	4	0	0	0	0	9	2	1	281(192)	
7	G10	Ⅷ上	1	A	85	60	有	48	47	1	0	0	0	0	14	12	6	300(281)	
8	G10	Ⅷ上	5	C	55	40	無	6	6	6	0	0	0	0	1	0	1	688(243)	
9	E11	Ⅷ上	1	C	110	50	有	44	42	1	0	1	0	0	10	8	5	483	
10	E11	Ⅷ上	4	B	140	110	無	40	37	1	0	2	0	0	1	3	4	247	土器1点
11	F10	Ⅷ上	1	B	80	65	有	91	83	0	3	0	5	0	32	9	10	503(441)	
12	F11	Ⅷ上	4	A	145	90	無	43	25	5	1	1	11	0	11	8	7	233(208)	
13	F11	Ⅶ下	4	A	75	50	無	23	17	0	0	0	6	0	7	6	1	256	
14	F12	Ⅷ中	1	A	75	35	有	31	24	1	4	2	0	0	18	1	0	96	土器1点
15	C12	Ⅷ上	4	C	125	70	無	14	12	1	1	0	0	0	3	4	0	438	土器4点
16	C13	Ⅷ上	4	A	55	30	無	9	8	0	0	0	1	0	1	0	1	252	
17	D15	Ⅷ上	4	B	115	105	無	13	9	0	0	2	2	0	4	2	2	264	土器2点
18	F13	Ⅷ中	5	A	80	45	無	8	8	0	0	0	0	0	0	0	0	169	
19	C14	Ⅶ上	2	A	150	130	無	88	38	15	2	21	12	0	29	10	7	140	
20	C13	Ⅷ上	2	A	120	95	無	88	64	3	15	6	0	0	9	12	11	96	土器4点
21	E13	Ⅷ上	4	C	80	35	無	8	5	0	3	0	0	0	6	1	0	498	土器1点
22	F14	Ⅷ上	3	B	95	65	有	28	27	0	0	0	1	0	5	8	4	517(362)	
23	C10	Ⅷ上	1	A	55	40	有	29	21	4	0	4	0	0	12	8	1	116	
24	C10	Ⅷ上	2	C	45	25	無	8	0	0	1	0	0	0	1	0	2	234	
25	D10	Ⅶ下	1	A	50	40	有	32	18	4	4	5	1	0	6	8	8	187	
26	C11	Ⅶ	2	A	180	100	無	197	70	58	47	10	9	3	43	65	13	52	土器5点
27	G9	Ⅷ中	2	A	65	55	無	29	20	4	0	5	0	0	13	5	6	159	土器2点

表16　集石遺構一覧表２

No.	検出区	検出層	形態	重量	長軸	短軸	掘込	構成礫の内容数（個）							熱を受けた痕跡のある礫数（重複有）			1個あたり	備考
			タイプ	パターン	cm	cm		総数	安山岩	頁岩	凝灰岩	砂岩	花崗岩	軽石	すす	ひび	赤化	の重量(g)	
28	G9	Ⅷ上	2	B	85	60	無	24	15	6	2	1	0	0	14	3	2	481(198)	
29	G9	Ⅷ上	4	B	90	65	無	27	21	2	2	2	0	0	8	6	5	176	
30	G9	Ⅷ上	3	C	85	60	有	16	15	0	0	1	0	0	6	2	4	238	
31	E14	Ⅷ中	1	A	105	90	有	90	52	20	0	18	0	0	51	12	2	116	土器1点
33	G9	Ⅷ中	4	A	105	90	無	41	41	0	0	0	0	0	2	3	4	117	
35	D14	Ⅷ上	2	C	100	95	無	48	44	0	0	1	3	0	18	9	3	606	
36	G5	Ⅷ上	5	B	240	140	無	47	37	6	3	1	0	0	7	5	7	171	土器3点
37	G6	Ⅷ上	5	A	195	195	無	59	0	12	3	3	0	0	20	11	10	181	土器1点
38	C9	Ⅷ上	5	B	85	55	無	9	0	3	0	0	0	0	7	5	0	183	
39	C10	Ⅷ下	1	B	70	65	有	55	46	3	2	2	2	0	28	9	6	366	
40	E10	Ⅷ上	2	B	100	75	無	29	20	3	1	5	0	0	6	8	2	290	
41	D16	Ⅷ上	4	B	120	50	無	30	21	5	0	1	3	0	10	5	3	173	
42	D16	Ⅷ上	4	B	40	20	無	9	5	1	0	3	0	0	8	0	1	229	
43	D16	Ⅷ上	5	C	85	50	無	11	0	3	0	1	0	0	10	0	0	136	
44	E7	Ⅷ上	2	A	305	240	無	182	124	23	2	28	5	0	76	29	21	181(128)	土器6点
45	B13	Ⅷ上	5	B	120	80	無	17	15	1	0	0	0	1	9	1	3	143	土器2点
46	E13	Ⅷ中	4	A	165	100	無	77	41	8	4	23	1	0	37	8	7	102	土器1点
47	C9	Ⅷ上	2	A	190	150	無	111	85	8	4	13	0	1	28	16	4	115	
48		Ⅷ下	2	A	120	105	無	41	30	3	2	2	3	0	33	1	3	175	土器4点
49		Ⅷ上	5	A	110	90	無	19	15	2	0	2	0	0	10	1	2	215(173)	
50	E9	Ⅷ上	2	A	410	260	無	314	247	41	1	22	2	1	58	84	22	216	土器10点
51	E4	Ⅷ下	2	A	40	25	無	14	13	0	0	0	1	0	1	0	3	309	土器1点
52		Ⅷ上	4	A	250	180	無	65	51	7	1	4	0	2	4	8	0	178	土器6点
53	E9	Ⅷ上	5	A	215	100	無	22	18	2	0	1	1	0	4	2	1	162(112)	土器6点，OB2点
54		Ⅷ上	2	A	260	130	無	115	75	18	1	19	0	2	19	4	15	96	土器2点
55	E9	Ⅷ上	2	A	90	60	無	66	41	10	1	13	1	0	30	19	3	157	
56	B10	SH44	2	A	140	110	無	127	74	18	3	22	9	1	30	34	3	61	土器2点



第197図　集石遺構実測図１

測る。

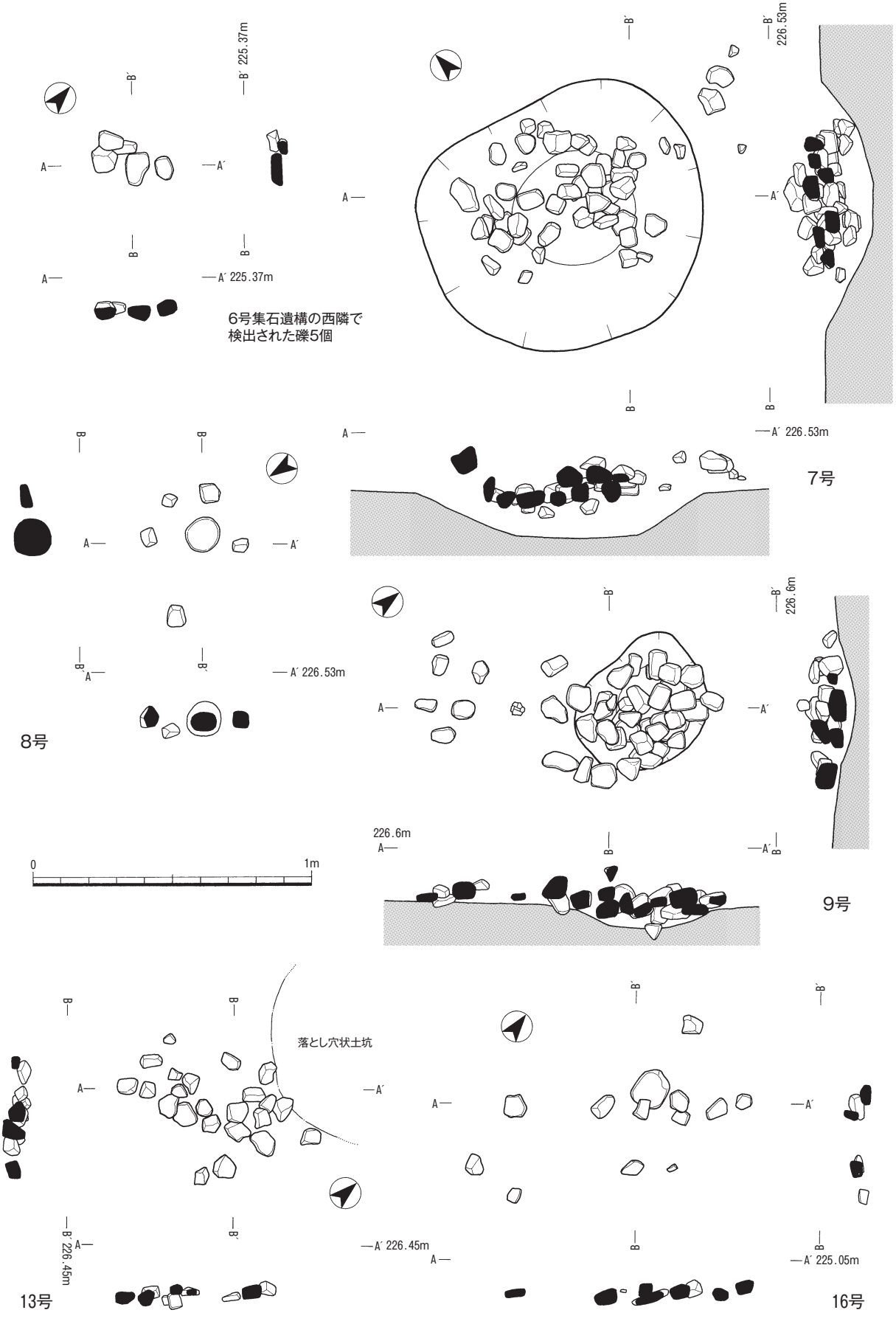
14号集石遺構　14号はF12区のⅧ層中で検出された。礫は長軸75cm，短軸35cmの範囲に一部重なりながら広がり，下部には礫の広がりと若干中心がずれるがほぼ同規模の掘り込みが検出された。掘り込みの深さは15cm強であったが，礫は掘り込みの検出面よりも上位で出土しているが，実際は，当時の掘り込み面自体がまだ上位にある可能性があり，礫は掘り込み内の上位に位置していると理解したい。敷石的な礫は無かった。掘り込みの埋土はⅧ層をベースにする黒褐色土層で，炭化物の粒子が含まれていた。また，薩摩火山灰層のブロック（５cm前後）も含まれていた。構成礫数は31個で，１個平均の重さが96ｇ，重量パターンはＡであった。１個平均が100ｇを切るこの数値は，その小ささにおいて突出しており，他の遺構との違いが注目される。遺構の東端から，土器片が１点出土している。A645がそうである。外面に斜位の貝殻条痕文が施されたもので，前平式土器と考えられる。

23号集石遺構　23号はC10区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸55cm，短軸40cmの範囲に一部重なりながら広がる。また，北東側に約35cm離れて４個集中して出土した礫も本遺構に加えた。下部では礫の広がりと若干中心がずれるが，長軸60cm，短軸45cm，深さ５cm強の浅い掘り込みが検出された。礫は掘り込みの底面よりも若干浮いた状態で出土している。敷石的な礫は無かった。構成礫数は29個で，１個平均の重さが116ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物は無かった。約1.5m 東に24号集石遺構が検出されている。

25号集石遺構　25号はD10区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸50cm，短軸40cmの範囲に一部重なりながら広がる。下部には，礫よりも広がりよりもまた，北東側に約35cm離れて４個集中して出土した礫も本遺構に加えた。下部では礫の広がりよりも一回り大きな掘り込みが検出された。ただ，遺構の南西側は落とし穴状遺構によって削平されていた。掘り込みは，長軸60cm，短軸30＋αcm，深さ８cmを測る。礫は床面から若干浮いた状態であるが，ほぼ掘り込みラインに沿って検出されている。敷石的な礫は無かった。構成礫数は32個で，１個平均の重さが187ｇ，重量パターンはＡであった。下面には炭化物の粒子が少量含まれていた。遺構関連の遺物は無かった。

31号集石遺構　31号はE14区のⅧ層中位で検出された。礫は長軸105cm，短軸90cmの範囲に一部重なりながら広がる。下部には，礫の広がりとほぼ重なる掘り込みが検出された。掘り込みは長軸85cm，短軸75cm，深さ約８cmを測る。礫は床面から若干浮いた状態であるが，ほぼ掘り込みラインに沿って検出されている。敷石的な礫は無かった。構成礫数は90個で，１個平均の重さが116ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，外面に貝殻条痕が見られる土器片が１点出土しているが，細片のため図化できなかった。

39号集石遺構　39号はC10区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸70cm，短軸65cmの範囲に一部重なりながらまとまって出土した。下部には，礫の広がりより一回り大きな掘り込みが検出された。掘り込みは長軸90cm，短軸85cm，深さ約６cmを測る。礫は床面から若干浮いた状態であるが，ほぼ掘り込みラインに沿って検出された。敷石的な礫は無かった。構成礫数は55個で，１個平均の重さが366ｇ，重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物は無かった。



第198図　集石遺構実測図２

Type 2

１号集石遺構　１号はF7区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸100cm，短軸70cmの範囲に広がる。礫は若干重なりが見られるが，ほぼ平面に広がっている。礫の集中度から，大きく東西に分かれているようにも見える。構成礫数は47個で，１個平均の重さが247ｇ，重量パターンはＡであった。近接して２号集石遺構が検出されている。それぞれの遺構の礫の最短距離は40cmしかない。検出レベルに若干差があるが，Ⅶ層下部という大枠では違和感がないことを考慮すれば，２基は何らかの関連性がある可能性が高い。

構成礫には遺物が１点含まれていた。B85は安山岩製の磨石である。欠損品であるが，長さ10.2cm，幅9.8cm，重量817gを測る。また，集石遺構の若干外側の資料であるが，土器片が１点近接して出土している。A644は吉田式土器の胴部片と考えられるものである。

２号集石遺構　２号はF7区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸50cm，短軸45cmの範囲に広がる。礫は若干重なりが見られるが，ほぼ平面に広がっている。構成礫数は19個で，１個平均の重さが421ｇ，重量パターンはＣであった。近接して１号集石遺構が検出されたことは前述の通りである。遺構関連の遺物はなかった。

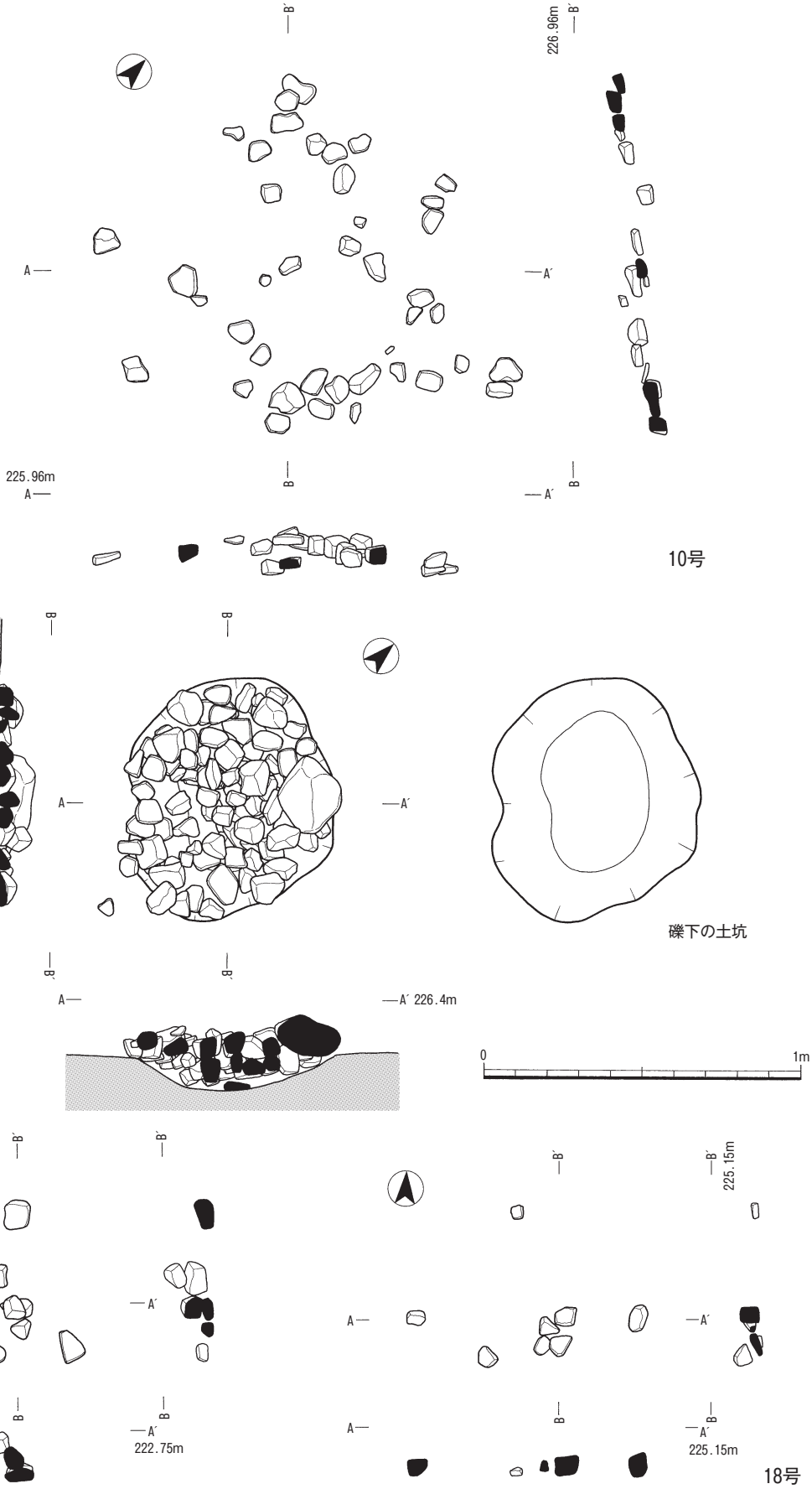
２号集石遺構　２号はF7区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸50cm，短軸45cmの範囲に広がる。礫は若干重なりが見られるが，ほぼ平面に広がっている。構成礫数は19個で，１個平均の重さが421ｇ，重量パターンはＣであった。遺構関連の遺物はなかった。近接して１号集石遺構が検出されたことは前述の通りである。

19号集石遺構　19号はC14区のⅦ層上部で検出された。礫は長軸150cm，短軸130cmの範囲に広がる。礫はおおむね集中しているが，南側は散在気味に広がっている。構成礫数は88個で，１個平均の重さが140ｇ，重量パターンはＡであった。本遺構の特色として，他の集石遺構と同様に，構成礫の中心は安山岩であることに変わりないが，その他のＳＡ，SH，ＫＡなども比較的多いことがあげられる。遺構関連の遺物はなかった。

20号集石遺構　20号はC13区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸120cm，短軸95cmの範囲に広がる。礫はおおむね集中しているが，中心部に若干空白部がある。構成礫数は88個で，１個平均の重さが96ｇと小さい。重量パターンはＡであった。礫間や下面に炭化物の粒子が含まれていた。本遺構の特色として，他の集石遺構と同様に，構成礫の中心は安山岩であることに変わりないが，その他のTu，SA，SHなども比較的多いことがあげられる。遺構関連の遺物としては４点出土し，３点を図化した。いずれも前平式土器と考えられる。A654は口縁部片である。A652とA653は遺構の端で出土した胴部小片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

24号集石遺構　24号はC10区のⅦ層上部で検出された。礫は長軸45cm，短軸25cmの狭い範囲に集中する。構成礫数は８個で，１個平均の重さが234ｇと小さい。重量パターンはＢであった。下面には炭化物の粒子が含まれていた。遺構関連の遺物は無かった。約1.5m西に23号集石遺構が検出されている。

26号集石遺構　26号はC11区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸180cm，短軸100cmの比較的広い範囲に集中する。構成礫数は197個で，１個平均の重さが52ｇと極めて小さいのが大きな特色である。重量パターンは変則Ａであった。また，構成する礫にAN，SA，SH，KA等があることや，それ



第199図　集石遺構実測図３

ぞれの数が多いことなども特色といえる。遺構内からは４点の土器片が出土し，３点を図化した。A658は吉田式土器の胴部片である。口縁部に近い部分と考えられ，縦位の下位が刺突文と押引文がみられる。A656と A657は外面に貝殻条痕が見られる胴部片である。前平式土器の可能性が高い。A656には補修孔と考えられる穿孔もみられるが，外面から内面へ斜に穿たれているので，別な用途の可能性もある。

27号集石遺構　27号は G9区のⅧ層中で検出された。礫は長軸65cm，短軸55cmの範囲に集中する。構成礫数は29個で，１個平均の重さが159ｇであった。重量パターンはＡであった。下部に明瞭な掘り込みは確認されなかったが，礫は上下にややバラツキをもちながら出土した。遺構内からは２点の土器片が出土した。A659は前平式土器の胴部片である。外面に貝殻条痕が見られる。A660は前平式土器の底部片である。底径13.5cmを測る。外面は斜位の貝殻条痕文が顕著である。

28号集石遺構　28号は G9区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸85cm，短軸60cmの範囲に広がる。構成礫数は24個で，１個平均の重さが481ｇであったが，これは１個だけ平均値を上げる７kgを測る安山岩の円礫を含んだ数値で，それを除くと198g であった。重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物はなかった。

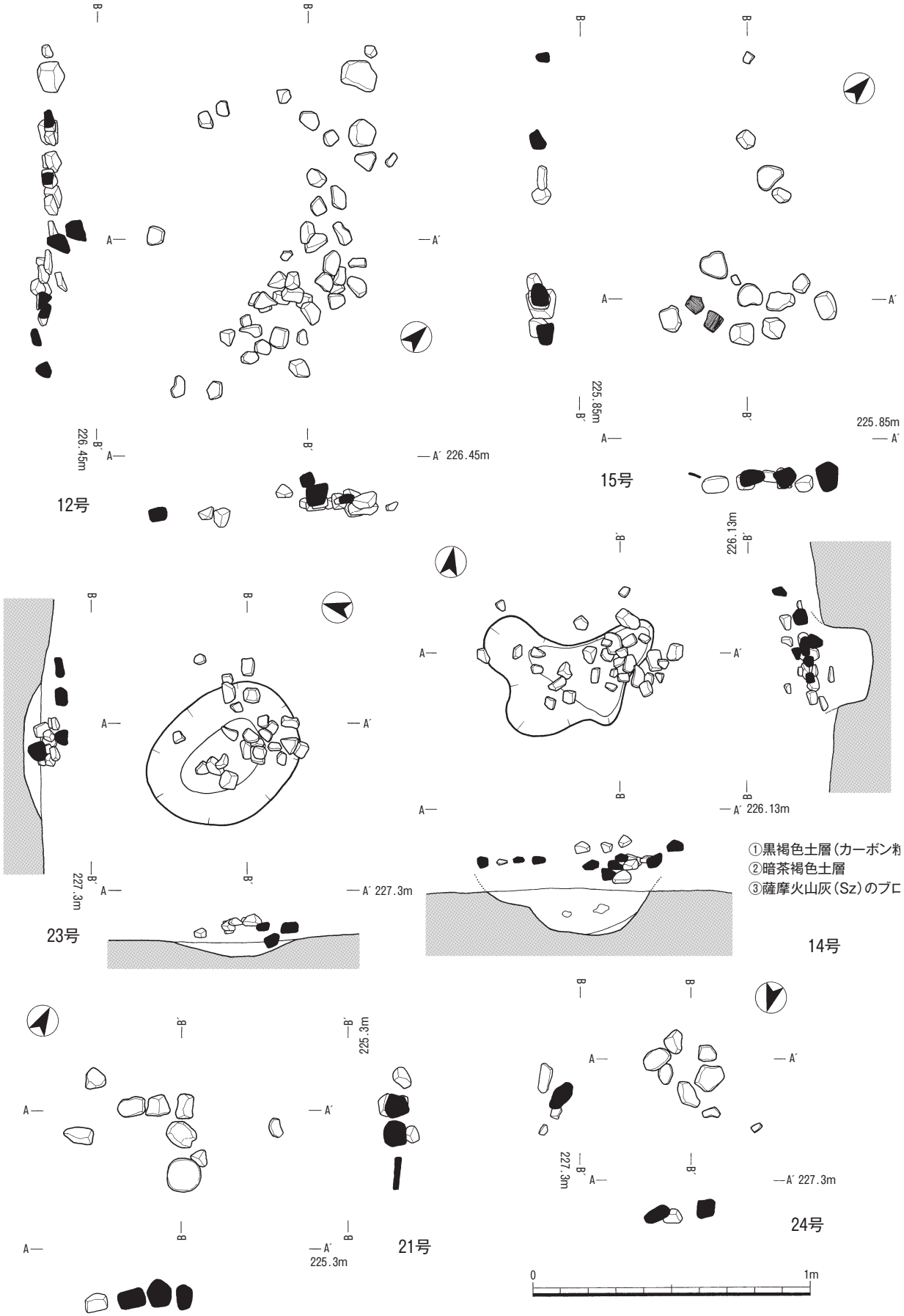
35号集石遺構　35号は D14区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸100cm，短軸95cmの範囲に広がる。構成礫数は48個で，１個平均の重さが606ｇと重かった。重量パターンはＣであった。これらの礫は集中するが，ほとんど重なりはなく，平坦面に並べたような状況で出土している。遺構関連の遺物としては磨石と考えられる石器が１点出土した。B87がそうである。安山岩製で，長さ12cm，幅10.09cm，厚さ6.6cm，重さ1035g を測る。

40号集石遺構　40号は E10区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸100cm，短軸75cmの範囲に広がるが，礫の集中箇所は大きく南北に分かれ，両者の間には空白部分もある。構成礫数は29個で，１個平均の重さが290ｇであった。重量パターンはＢであった。礫の下面では炭化物の粒子が少量検出されている。また，P13と考えられる黄色の軽石粒も見られた。遺構関連の遺物は無かった。

44号集石遺構　44号は E7区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸305cm，短軸240cmの範囲に広がるが，礫の集中箇所は大きく南北に分かれ，両者の間には空白部分もある。構成礫数は182個で，１個平均の重さが181ｇであった。ただし，突出して大きい２点を除いた平均値は128g であった。重さにおいて突出した２個の礫は，南側で検出されたまとまりの中では，中心的な位置を占めている。重量パターンはＡであった。礫の下面では炭化物の粒子が少量検出されている。遺構関連の遺物としては，土器片が６点出土したが，A665と A666の２点を図化した。いずれも前平式土器の胴部片と考えられるが，A666については，志風頭式土器の角筒土器である可能性もある。

47号集石遺構　47号は C9区のⅧ層上面で検出された。礫は長軸190cm，短軸150cmの範囲に広がるが，礫の集中箇所は大きく３箇所に分かれ，それぞれの間には空白部分もある。構成礫数は111個で，１個平均の重さが115ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物は無かった。

48号集石遺構　48号はⅦ層下部で検出された。礫は長軸120cm，短軸105cmの範囲に広がる。構成礫数は41個で，１個平均の重さが175ｇ，重量パターンは Ａであった。遺構関連の遺物としては，A669の胴部小片がある。外面に斜位の貝殻条痕文が施されているものである。前平式土器と考えられる。



第200図　集石遺構実測図４

48号関係では，２個体の完形資料を取り上げた。A678は吉田式土器である。口径24.8cm，底径17.4cm，器高27.8cmを測る。口縁部下に縦位の貝殻刺突文を連続して２段巡らすもので，胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。明瞭な押引文は無い。口唇部には浅くて細い刻みがやや雑に施されている。集石内からの１点と周辺の包含層からの６点が接合した資料である。

A679は石坂式土器である。口径17.2cm，底径10.1cm，器高20.6cmを測る。口縁部はやや楕円形状を呈し，いわゆるレモン形に近い形状をなす。口縁部下に斜位の貝殻刺突文を巡らし，胴部には綾杉状の丁寧な貝殻条痕文が全面に施されている。底部付近は横位の条痕がみられ、石坂式土器の典型的な文様構成をもつ。口唇部外面端部に刻みがみられる。集石内からの１点と周辺の包含層からの17点が接合した資料である。

50号集石遺構　50号はⅧ層上面で検出された。礫は長軸410cm，短軸260cmの範囲に広がる。構成礫数は314個で本遺跡の集石遺構の中で最も多い。１個平均の重さが216ｇ，重量パターンはＡであった。礫は西側で集中し，東側は散在している。遺構関連の遺物としては A680と A682がある。A680は吉田式土器の口縁部から胴部にかけての資料である。口径15.6cmを測る。遺構関係は１点のみで，周辺の包含層出土の15点と接合した。外面は全体を押引文のみで飾っている。フラットな口唇部は無文である。A681も同一個体と考えられる。A682は推定口径38.4cmを測る大形の吉田式土器である。口縁部下に横位の貝殻刺突文と，「C」字状の連続刺突文を組み合わせた文様帯を明瞭に形成し，胴部には強弱をつけた押引文が全面に施された土器である。口唇部には浅いながらも細かで密な刻みが施されている。集石内から出土した１点と周辺の包含層から出土した79点が接合した資料である。

51号集石遺構　51号は E4区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸40cm，短軸25cmの範囲に集中して出土した。構成礫数は14個で，１個平均の重さが309ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，A673の胴部小片がある。外面に斜位の貝殻条痕文が施されているものである。前平式土器と考えられる。

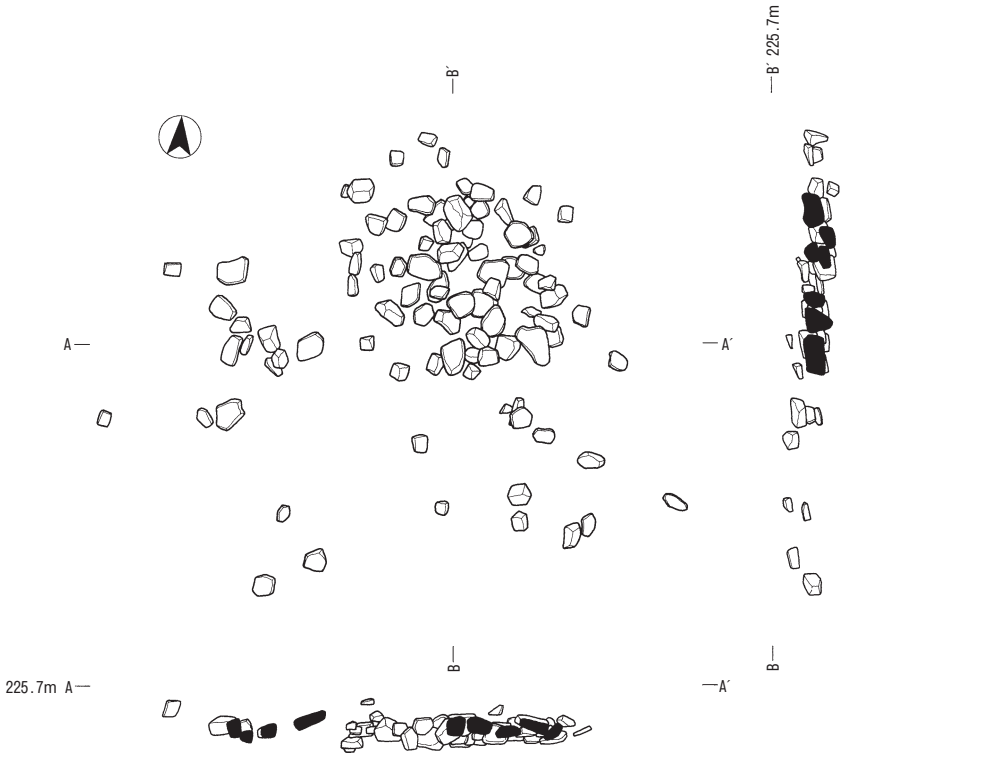
54号集石遺構　54号はⅧ層上面で検出された。礫は長軸260cm，短軸130cmの範囲に集中して出土した。構成礫数は115個で，１個平均の重さが96ｇと本遺跡の集石遺構の中で20号と並び２番目に小さな数値であった。重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，B90の安山岩製扁平磨石がある。長さ9.9cm，幅9.45cm，厚さ2.3cm，重さ279g を測る。

55号集石遺構　55号は E9区のⅧ層上面で検出された。礫は長軸90cm，短軸60cmの範囲に集中して出土した。構成礫数は66個で，１個平均の重さが157ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物は無かった。

56号集石遺構　56号は E9区の44号竪穴住居状遺構（SH44）内で検出された。内容については，SH44の項で既に述べたので参照していただきたい。

Type ３

22号集石遺構　22号は F14区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸95cm，短軸65cmの範囲に広がる。礫はほぼ平面的な広がる。下部からは長軸75cm，短軸60cm，深さ５cm強の浅い掘り込みが検出された。構成礫数は28個で，１個平均の重さが517ｇであった。礫はほぼ掘り込みに添って広がってい



第201図　集石遺構実測図５

た。重量パターンはＢであった。掘り込み床面には，炭化物の粒子が含まれていた。遺構関連の遺物としては，ほぼ中央で出土した。大形磨石の半欠品があるが図化しなかった。

30号集石遺構　30号はG9区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸85cm，短軸60cmの範囲に広がる。礫はほぼ平面的な広がる。下部からは長軸60cm，短軸55cm，深さ５cm強の浅い掘り込みが検出された。構成礫数は16個で，１個平均の重さが5238ｇであった。礫はほぼ掘り込みに添って広がっていた。重量パターンはＣであった。遺構関連の遺物は無かった。北西側１ｍのところに29号集石遺構があり，関連が注目される。

Type ４

４号集石遺構　４号はD11区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸80cm，短軸65cmの範囲に広がる。礫はほぼ平面的な広がる。構成礫数は13個で，１個平均の重さが345ｇであった。重量パターンはＣであった。遺構関連の遺物としては，欠損品で不明瞭な部分も多いが磨石状の礫が１点出土している。

５号集石遺構　５号はD11区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸65cm，短軸35cmの範囲に広がる。礫はほぼ平面的な広がる。構成礫数は11個で，１個平均の重さが232ｇであった。重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物はなかった。

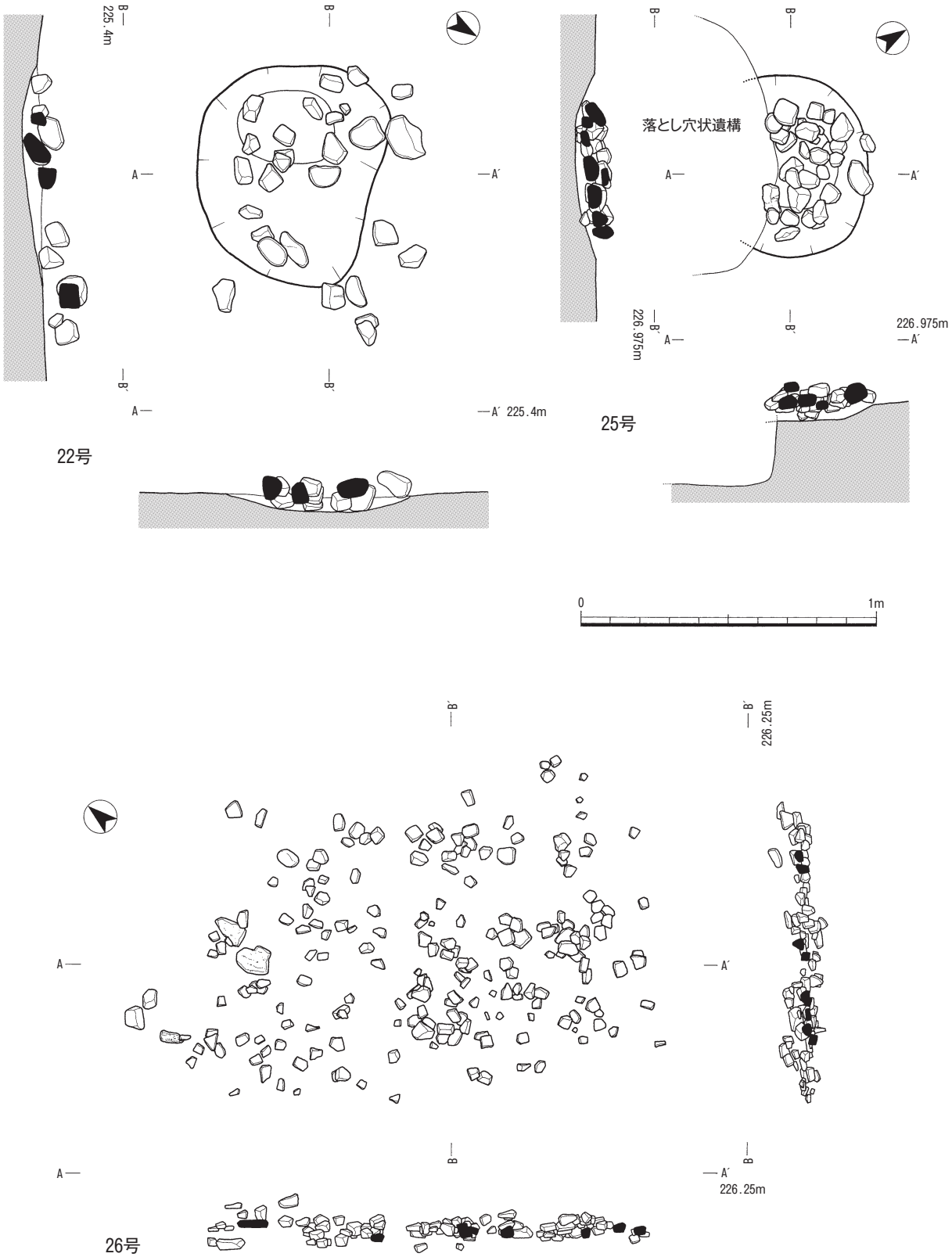
６号集石遺構　６号はD11区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸65cm，短軸50cmの範囲に広がる。礫は比較的集中するが，ほぼ平面的な広がる。構成礫数は18個で，１個平均の重さが281ｇであった。重量パターンはＡであった。中心部にある礫には煤が付着していた。遺構関連の遺物としてB91スクレイパー状石器がある。安山岩製で，長さ6.7cm，幅6.4cm，厚さ1.4cm，重さ68.2g を測る。礫集中部とは若干離れて出土していることから，遺構との関連については不明瞭である。

10号集石遺構　10号はE11区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸140cm，短軸110cmの範囲に広がる。礫はほぼ平面的な広がるが，中央部に空白部分があり，礫が抜けたような感じになっている。構成礫数は40個で，１個平均の重さが247ｇであった。重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物としては安山岩製の磨石状礫があるが，欠損品のため不明瞭である。

12号集石遺構　12号はF11区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸145cm，短軸90cmの範囲に広がる。礫は東側に大きく偏り，あたかも中央部の礫が抜けたような感じになっている。構成礫数は43個で，１個平均の重さが233ｇであった。構成礫が安山岩を中心とすることは他の遺構と同様であるが，本遺構はＫＡが比較的多いという特徴を有する。の中に重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物はなかった。

13号集石遺構　13号はF11区のⅦ層下部で検出された。礫は長軸75cm，短軸50cmの範囲に広がる。北側に後世の落とし穴状遺構状遺構があり，集石遺構の一部が削平されている可能性が高い。構成礫数は23個で，１個平均の重さが256ｇであった。重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物はなかった。

15号集石遺構　13号はC12区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸125cm，短軸70cmの範囲に平面的に広がる。礫の重なりはみられない。構成礫数は14個で，１個平均の重さが438ｇであった。重量パターンはＣであった。遺構関連の遺物としては，安山岩製の磨石が出土している。B86がそうで



第202図　集石遺構実測図６

ある。長さ9.6cm，幅10.1cm，厚さ5.6cm，重さ694g を測る。また，土器片４点が遺構内から出土している。関係資料を含め５点を図化した。A646は前平式土器と考えられる胴部片である。外面に浅い横位の条痕がみられる。A647～A650は同一個体と考えられる資料で倉園Ｂ式土器である。口縁部下に横位３段の貝殻刺突文があり，胴部には横位の貝殻条痕文が施されている。押引文はみられないが，実際には吉田式土器（ここでは６ｃ類）と大きな時間差はないのかも知れない。口唇部には浅くて密な刻みが施されている。

16号集石遺構　16号は C13区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸55cm，短軸30cmの範囲にややまとまって検出された。構成礫数は９個で，１個平均の重さが252ｇであった。重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，花崗岩製の石皿片（板状を呈する）が出土しているが，図化はしていない。

17号集石遺構　17号は D15区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸115cm，短軸105cmの範囲に平面的に広がる。構成礫数は13個で，１個平均の重さが264ｇであった。重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物としては，近接して A651が出土している。前平式土器の胴部片と考えられる。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

21号集石遺構　21号は E13区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸80cm，短軸35cmの範囲に平面的に広がる。構成礫数は８個で，１個平均の重さが498ｇであった。重量パターンはＣであった。下面には炭化物の粒子が含まれていた。遺構関連の遺物としては，近接して A655が出土している。径12.0cmの底部で，前平式土器と考えられる。底部は底面が完全に残っているが，意図的に円形に仕上げられている可能性もある。

29号集石遺構　29号はＧ９区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸90cm，短軸65cmの範囲に平面的に広がる。構成礫数は27個で，１個平均の重さが176ｇであった。重量パターンはＢであった。東南側１ｍのところに30号集石遺構がある。30号は下部に掘り込みをもつタイプであるが，何らかの関連も考えられる。遺構関連の遺物は無かった。

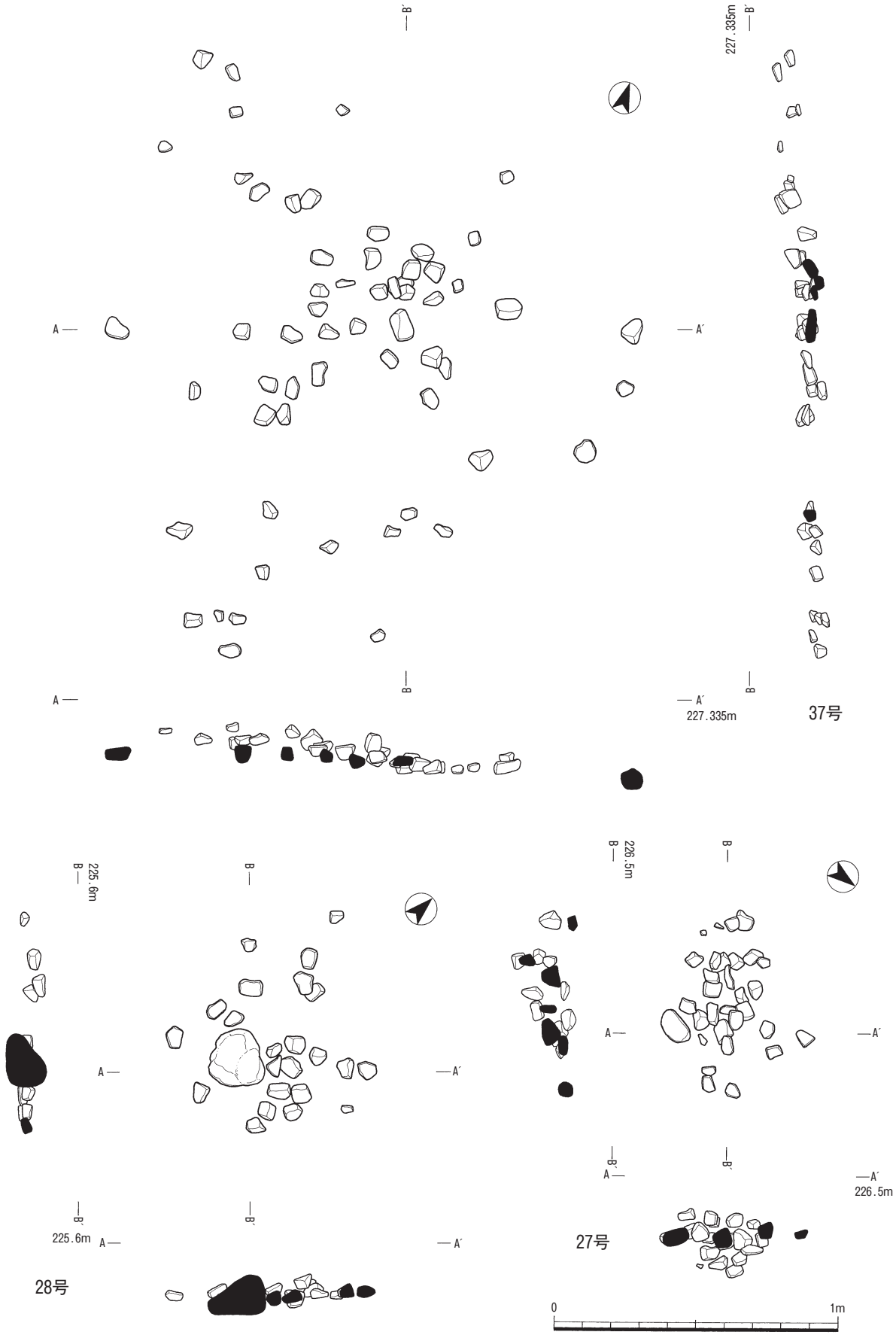
33号集石遺構　33号はＧ９区のⅧ層中で検出された。礫は長軸105cm，短軸90cmの範囲に平面的に広がる。構成礫数41個で，１個平均の重さが117ｇであった。重量パターンはＡであった。礫はすべて安山岩であった。遺構関連の遺物は無かった。

41号集石遺構　41号は D16区のⅧ層上で検出された。礫は長軸120cm，短軸50cmの範囲に平面的に比較的まとまって広がる。構成礫数30個で，１個平均の重さが173ｇであった。重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物は無かった。

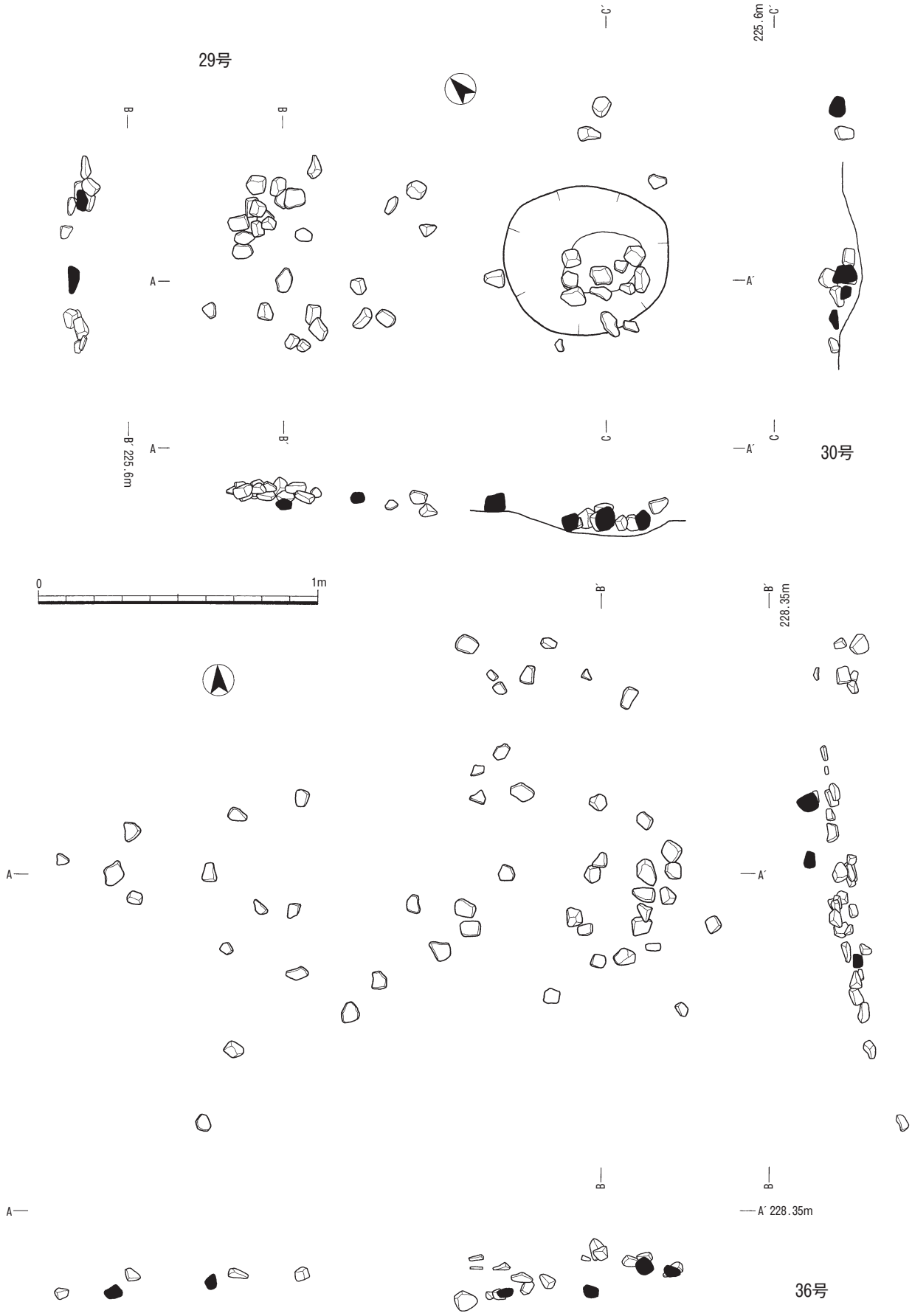
42号集石遺構　42号は D16区のⅧ層上で検出された。礫は長軸40cm，短軸20cmの狭い範囲に礫９個がまとまって出土した。１個平均の重さが229ｇで，重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物は無かった。

46号集石遺構　46号は E13区のⅧ層中で検出された。礫は長軸165cm，短軸100cmの範囲に広がって出土した。構成する礫は77個で，１個平均の重さが102ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，前平式土器の胴部片と考えられる，外面に斜位の貝殻条痕文のある土器片が１点出土しているが，剥落が激しいため図化しなかった。

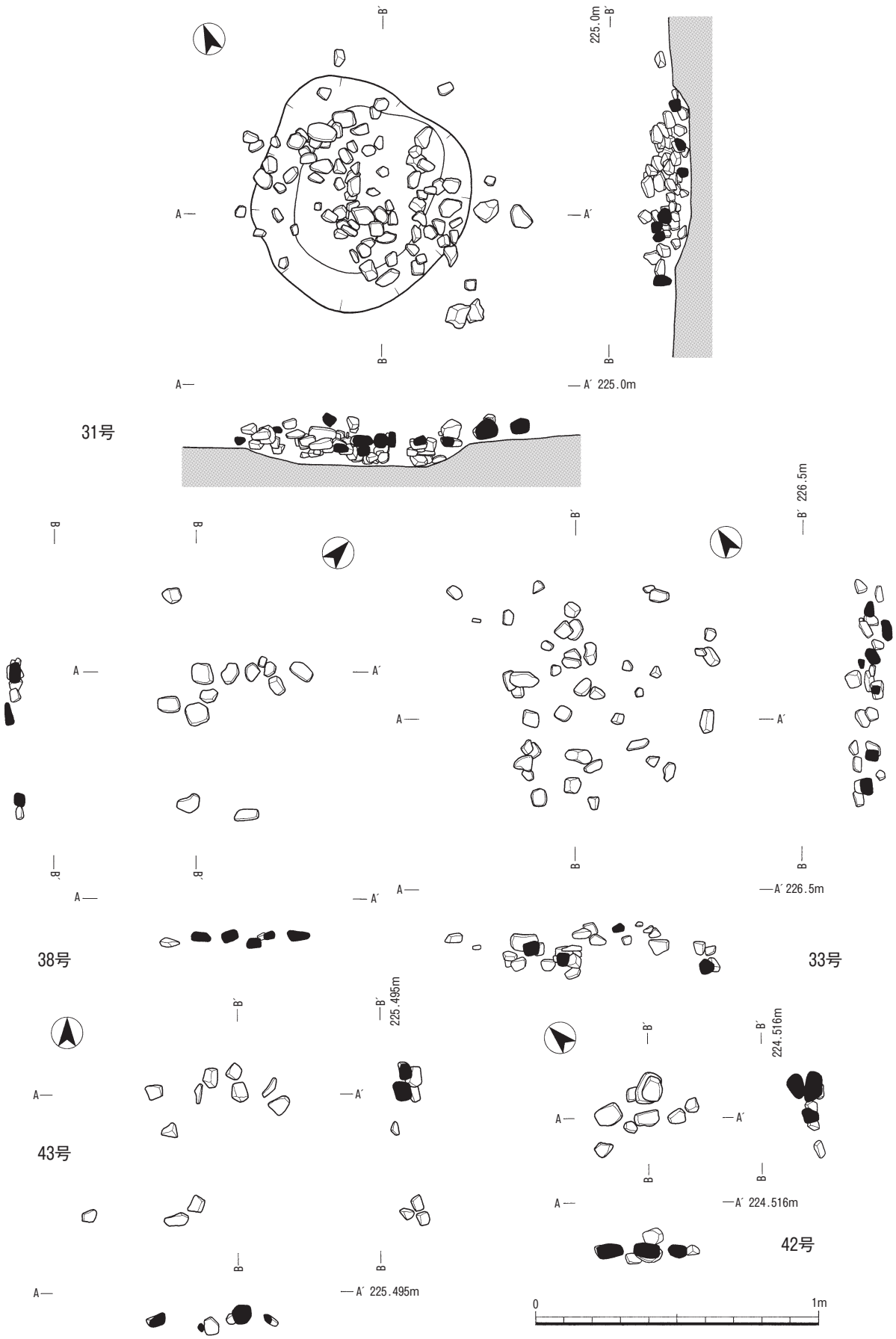
52号集石遺構　52号はⅧ層上で検出された。礫は長軸250cm，短軸180cmの範囲に広がって出土した



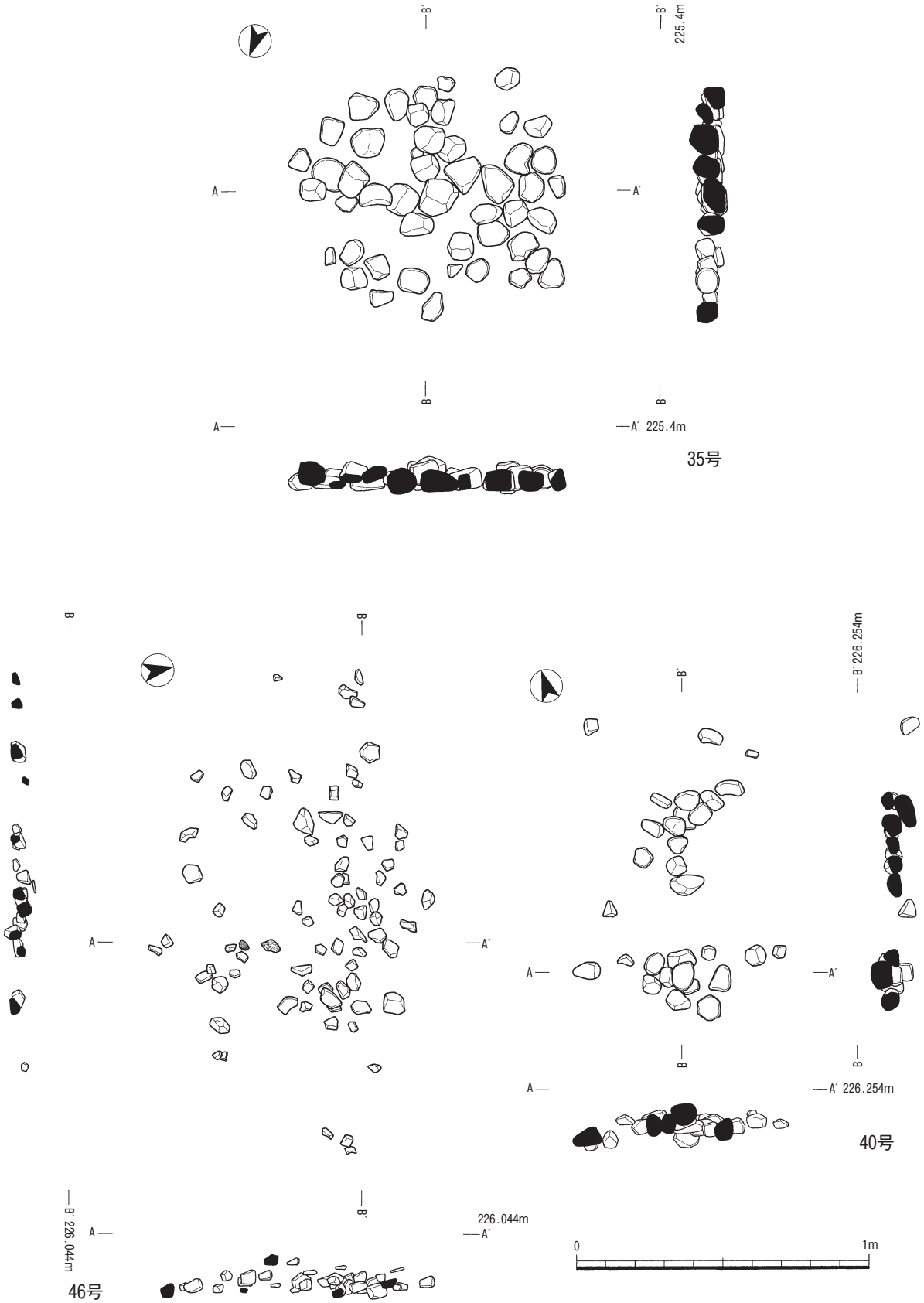
第203図　集石遺構実測図７



第204図　集石遺構実測図８



第205図　集石遺構実測図９



第206図　集石遺構実測図10

が，遺構の南西部に集中区がある。構成する礫は65個で，１個平均の重さが178ｇ，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，土器片が６点出土し，A683は吉田式土器の口縁部片である。遺構内の２点が接合した。やや外傾する口縁部外面には貝殻腹縁部による刺突文が規則的に施されている。口唇部直下から横位２段，縦位，横位１段，縦位の順で施文されている。胴部には横位の貝殻条痕文がみられるが，押引文は確認できなかった。フラットな口唇部にはシャープな刻目文が施されている。A684は吉田式土器の底部である。底径13.8cmを測る。A674は遺構内の１点と周辺の包含層から出土して土器と接合した資料である。胴部のみの資料であるが，アナダラ属の二枚貝の背面による押圧文が全面に施された土器片である。吉田式土器の段階と考えられる。

B89は安山岩製の磨石である。凹部もみられる。長さ10.5cm，幅８cm，厚さ3.95cm，重さ405gを測る。

Type ５

３号集石遺構　３号はD10区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸80cm，短軸80cmの範囲に広がる。礫は若干重なりが見られるが，全体的には散在しているというイメージである。強いて言えば，礫は南側に偏り，中央部が抜けたような感じもする。構成礫数は14個で，１個平均の重さが276ｇであったが，これは端にある小形の軽石を入れた数値で，それを省くと平均値が295gとなる。重量パターンはＣであった。遺構関連の遺物はなかった。

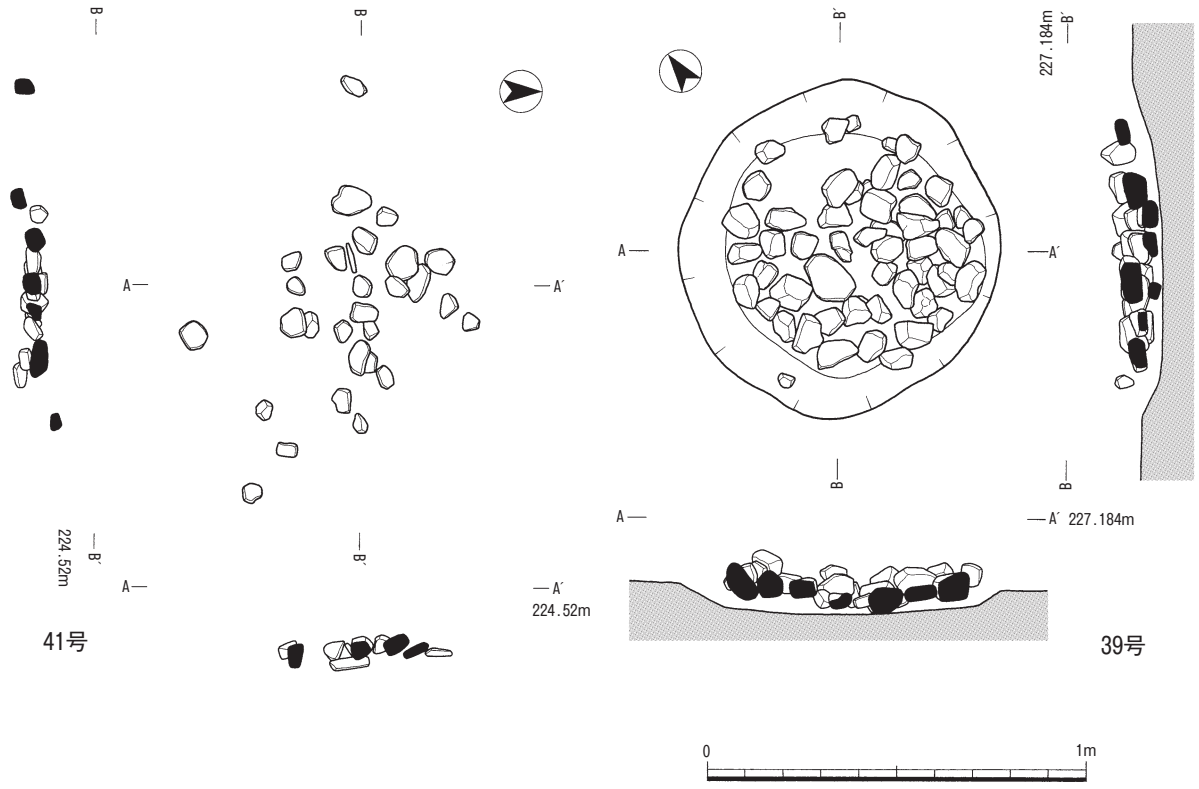
８号集石遺構　８号はG10区のⅧ層上部で検出された。礫は長軸55cm，短軸40cmの範囲に広がる。とは言え，構成礫が６個と集石遺構としていいものか疑問が残るところではある。礫の重なりもない。１個平均の重さが688ｇであったが，これは１個だけ2670gのものが含まれていることにもよる。重量パターンはＣであった。遺構関連の遺物はなかった。

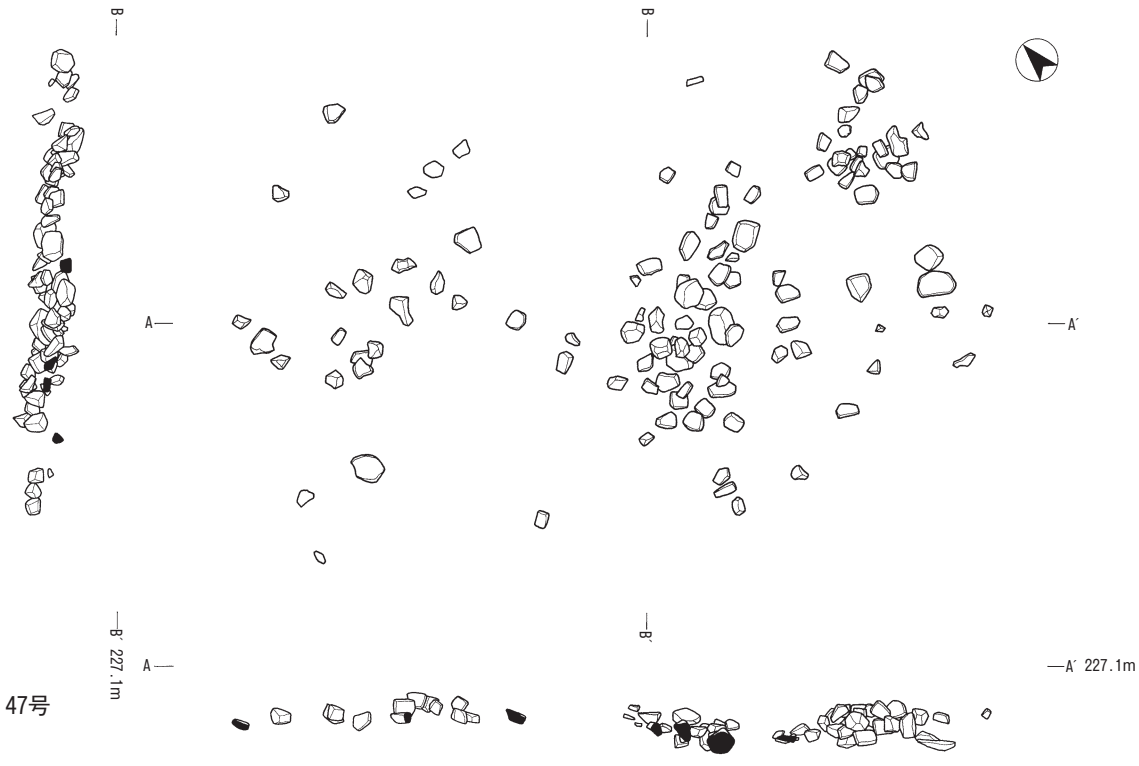
18号集石遺構　18号はF13区のⅧ層中で検出された。礫は長軸80cm，短軸45cmの範囲に礫８個が広がる。１個平均の重さは169ｇであった。重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物はなかった。

36号集石遺構　36号はＧ５区のⅧ層上面で検出された。礫は長軸240cm，短軸140cmの広範囲に礫47個が広がっている。１個平均の重さは171ｇで，重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物としては，土器片が３点出土している。A661は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。A662は志風頭式土器の胴部片と考えられる。外面に横位の貝殻条痕文のあと，ヘラ状工具による浅い連続刺突文が縦位に施されている。A663は角筒土器底部の角部である。小片であるが，底部の立ち上がり部分に縦位の刻みがあり，角部には貝殻腹縁部による刺突文が見られる。志風頭式土器か加栗山式土器と考えられる。

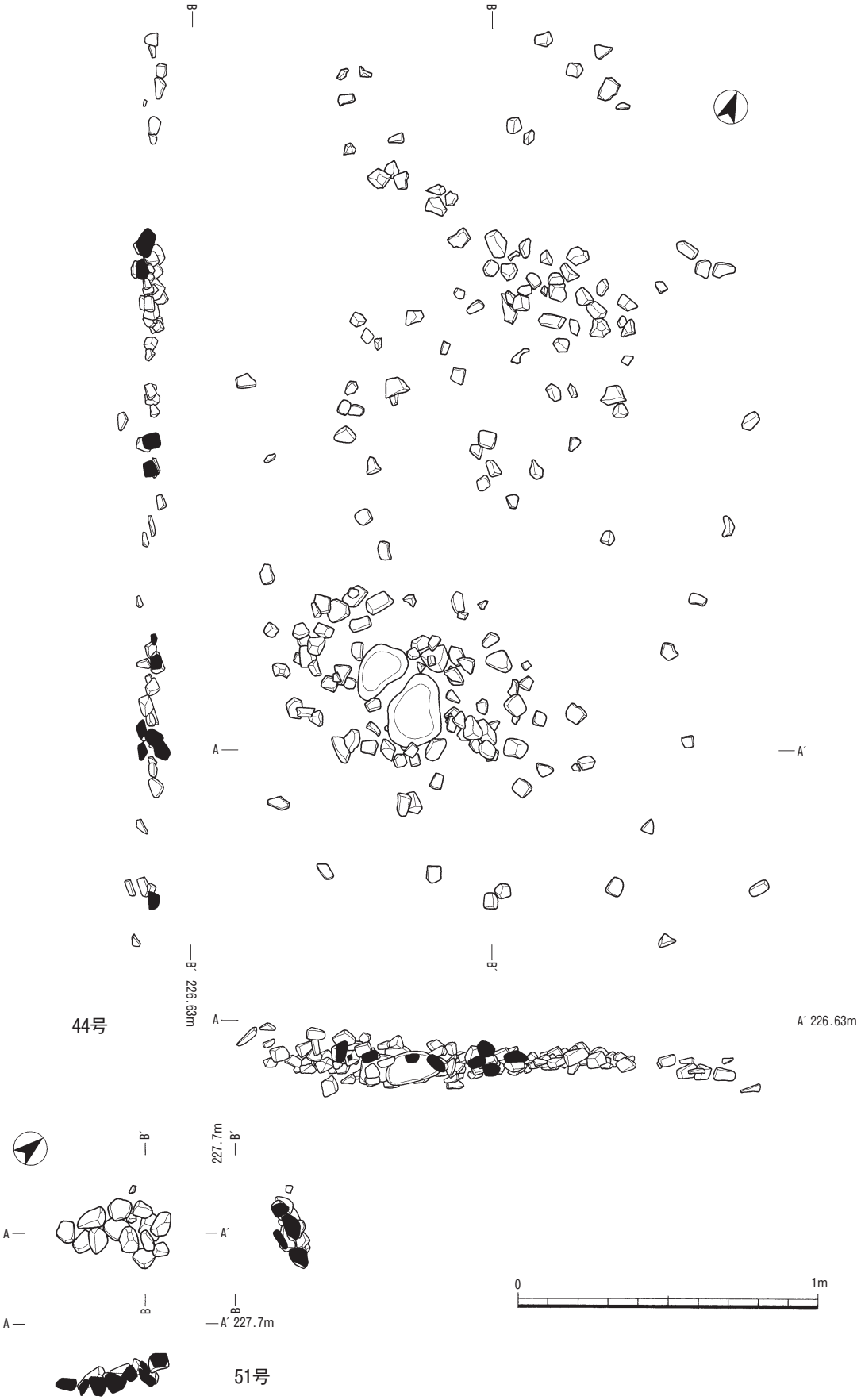
37号集石遺構　37号はG6区のⅧ層上面で検出された。礫は長軸195cm，短軸195cmの広範囲に礫59個が広がっている。１個平均の重さは181ｇで，重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，土器片が１点出土している。A664は前平式土器の胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕文が施されている。

38号集石遺構　38号はC9区のⅦ層上面で検出された。礫は長軸85cm，短軸55cmの範囲に礫12個が広がっていたが，西側の10個は比較的まとまっていた。１個平均の重さは183ｇで，重量パターンはＢであった。礫の下面には炭化物の粒子が少量含まれていた。遺構関連の遺物は無かった。

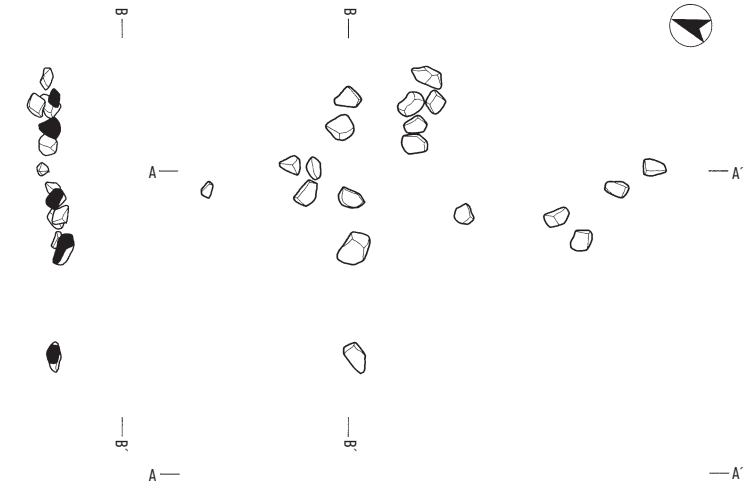




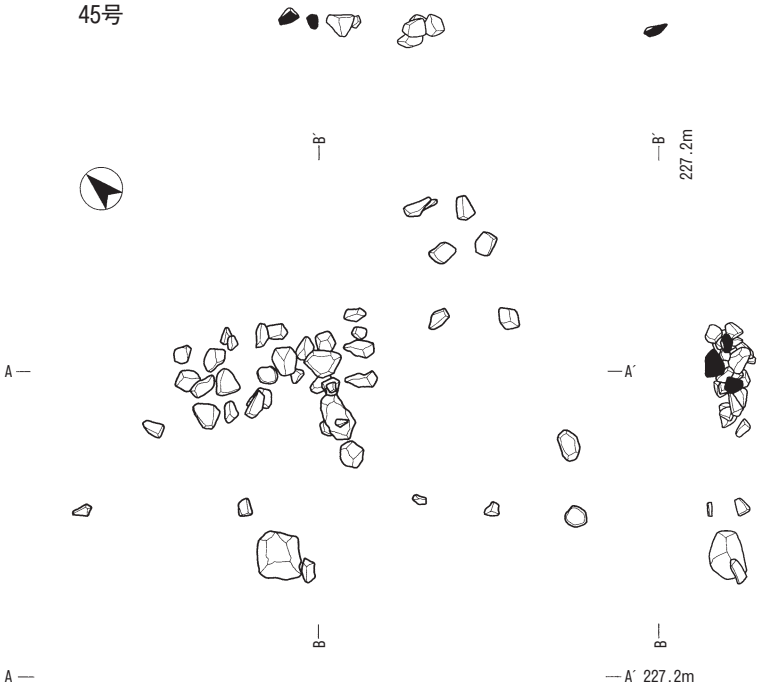
第207図　集石遺構実測図11



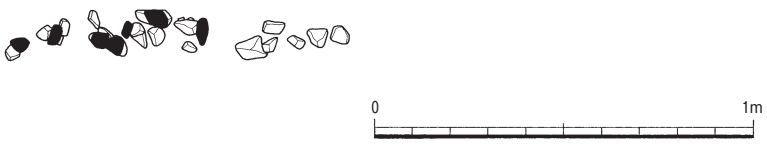
第208図　集石遺構実測図12



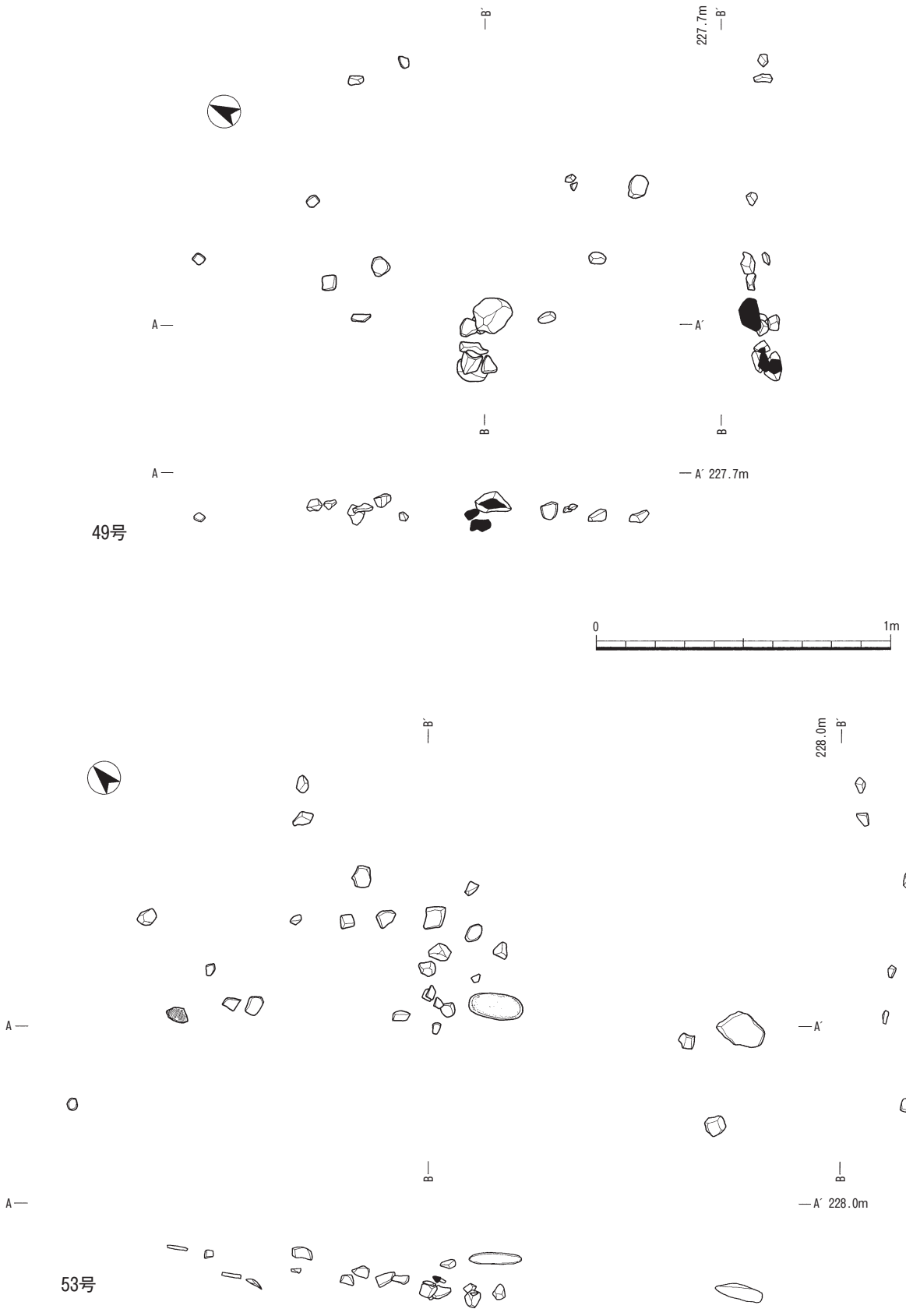
45号



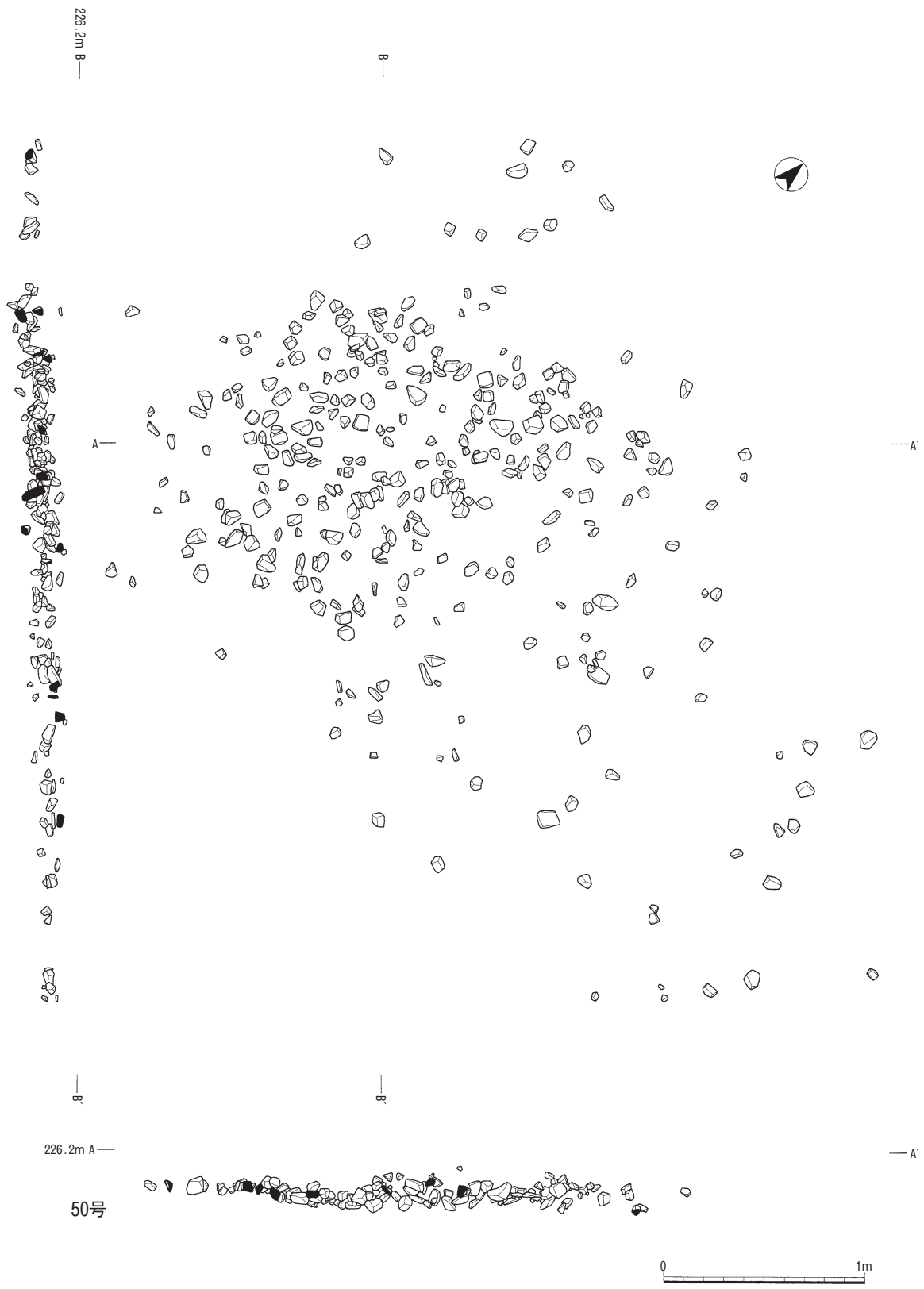
48号



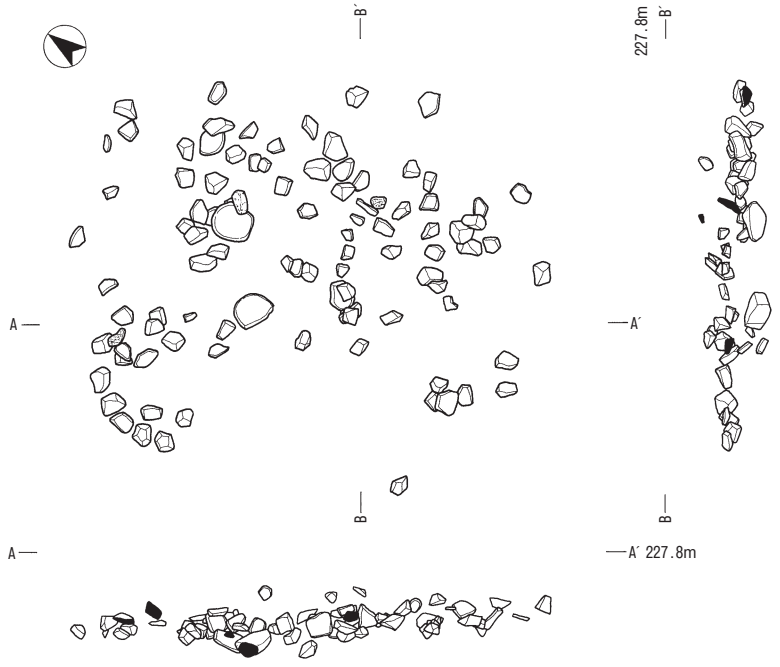
第209図　集石遺構実測図13



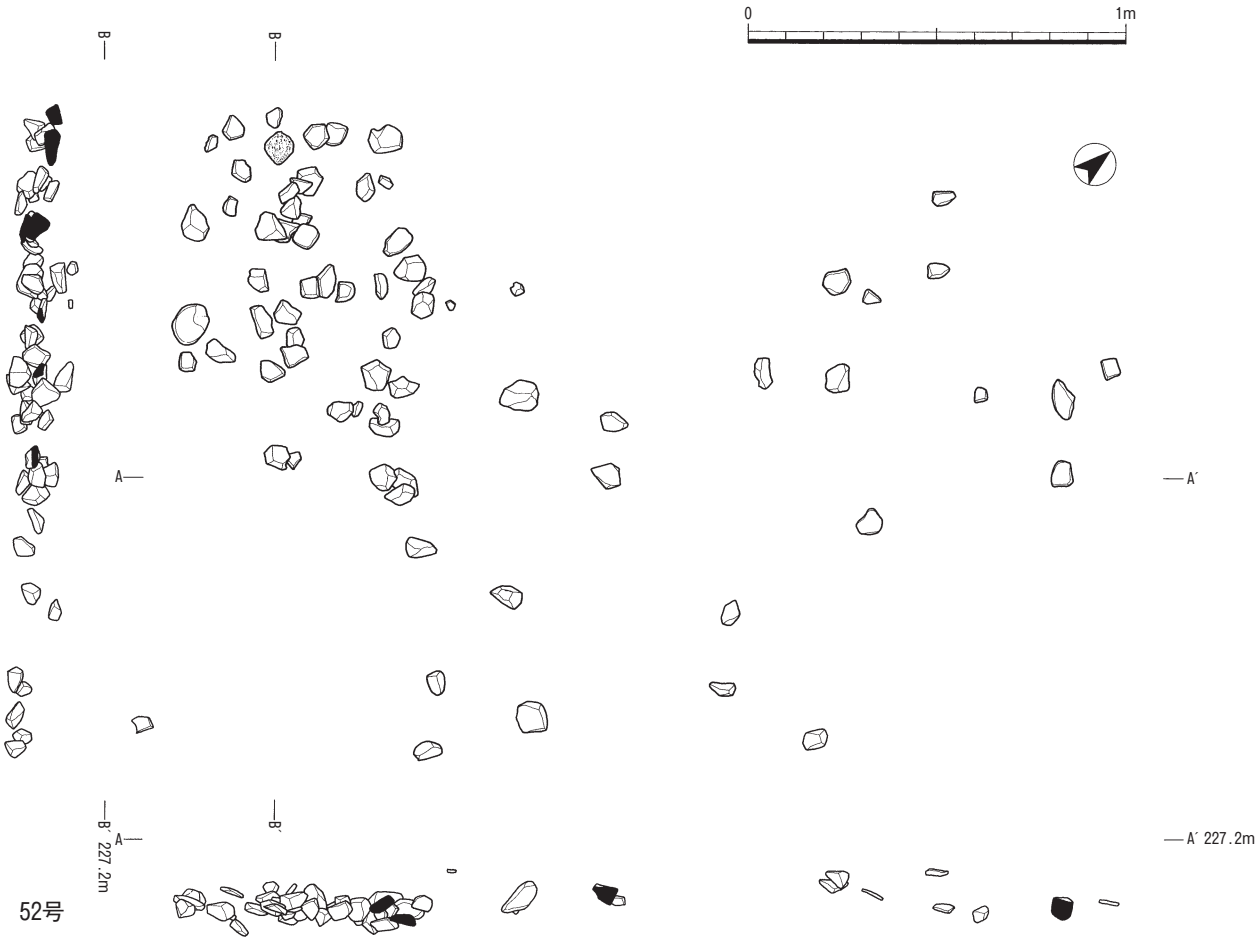
第210図　集石遺構実測図14



第211図　集石遺構実測図15

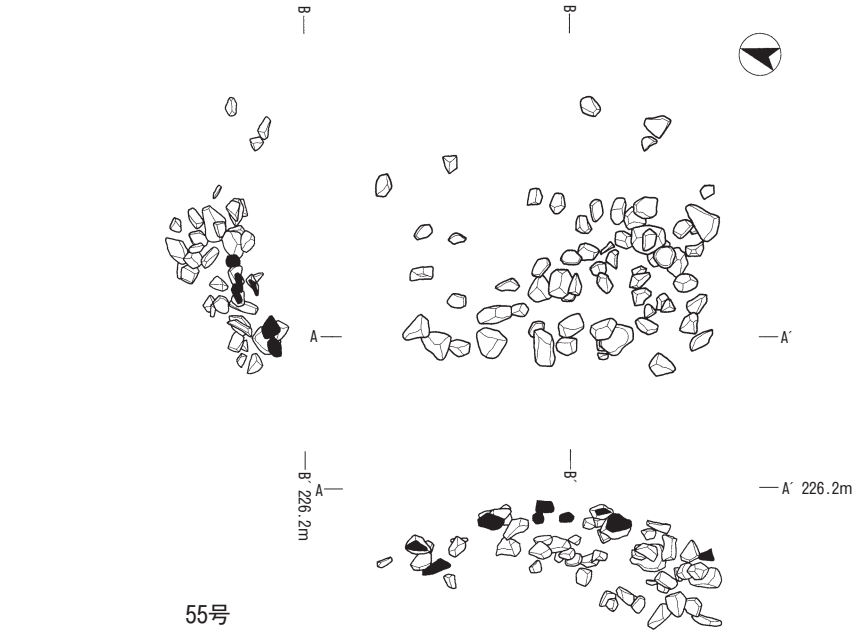


54号

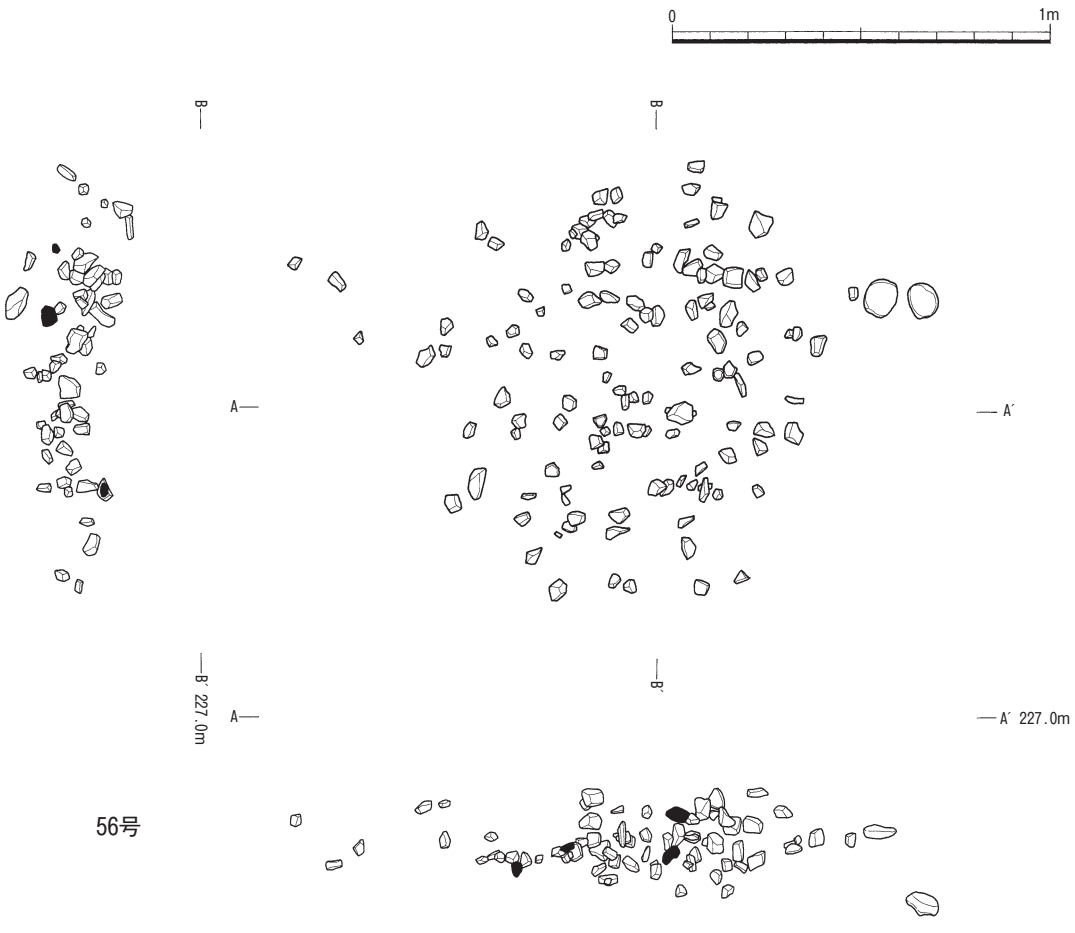


52号

第212図　集石遺構実測図16

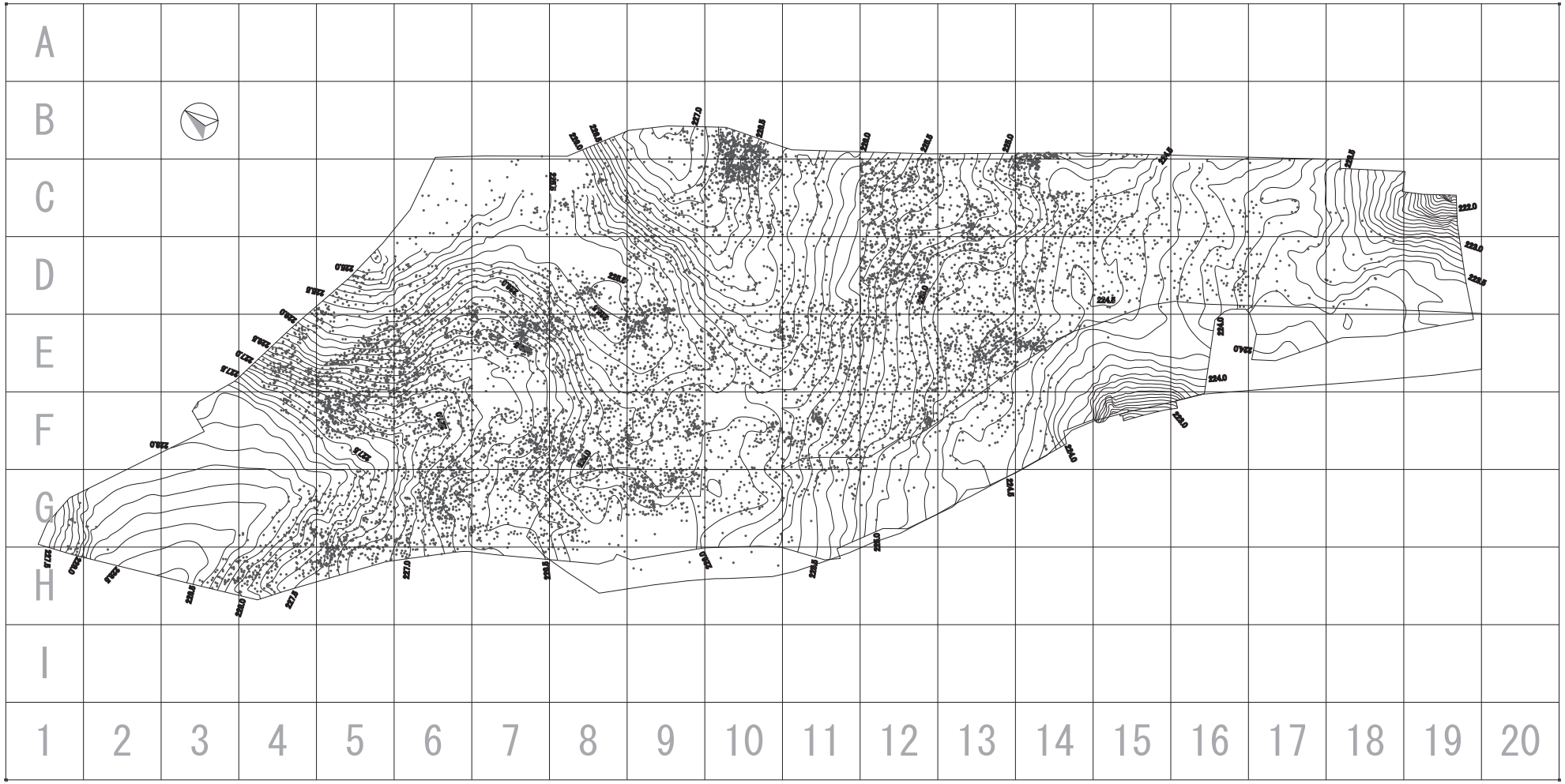


55号



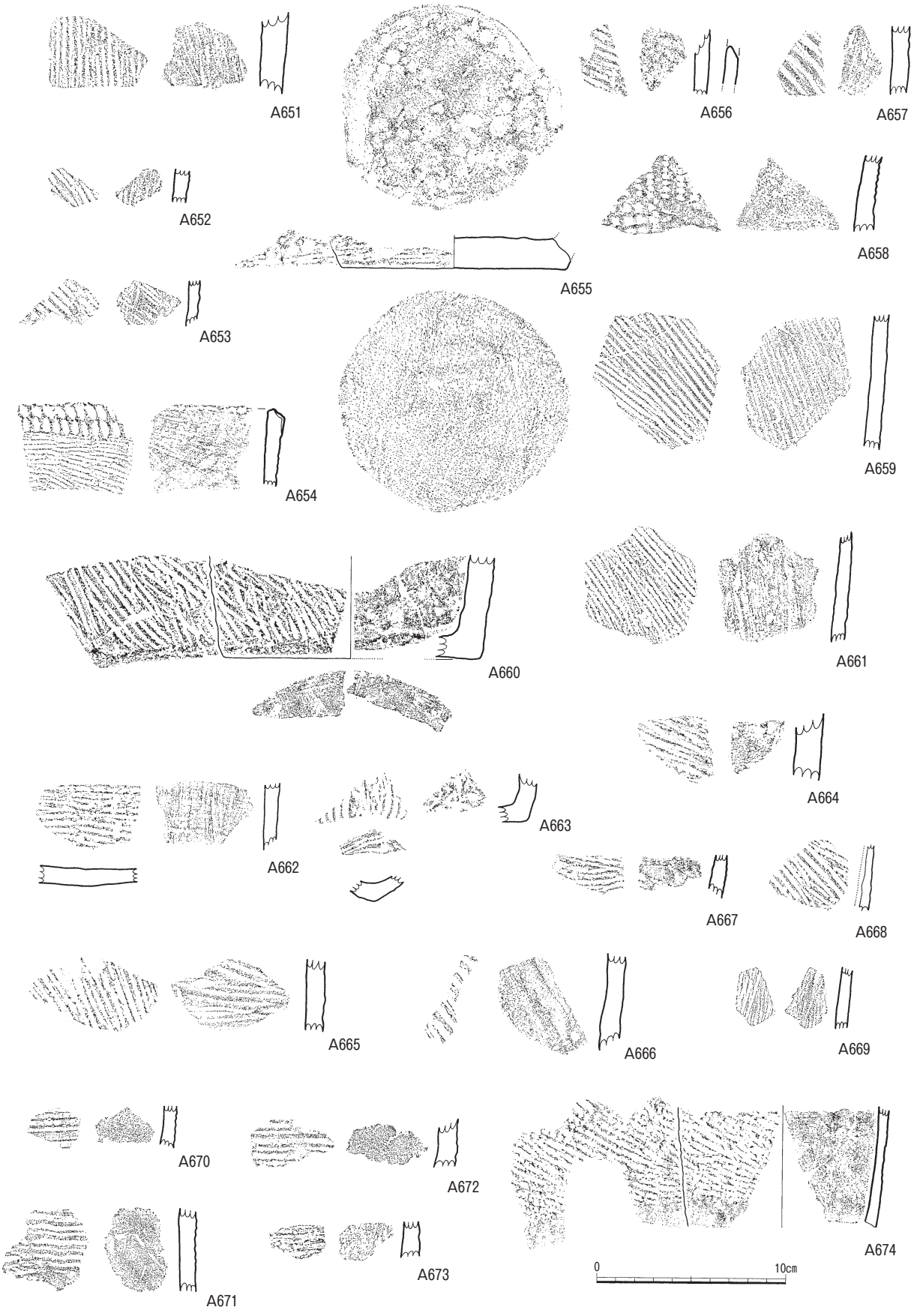
56号

第213図　集石遺構実測図17

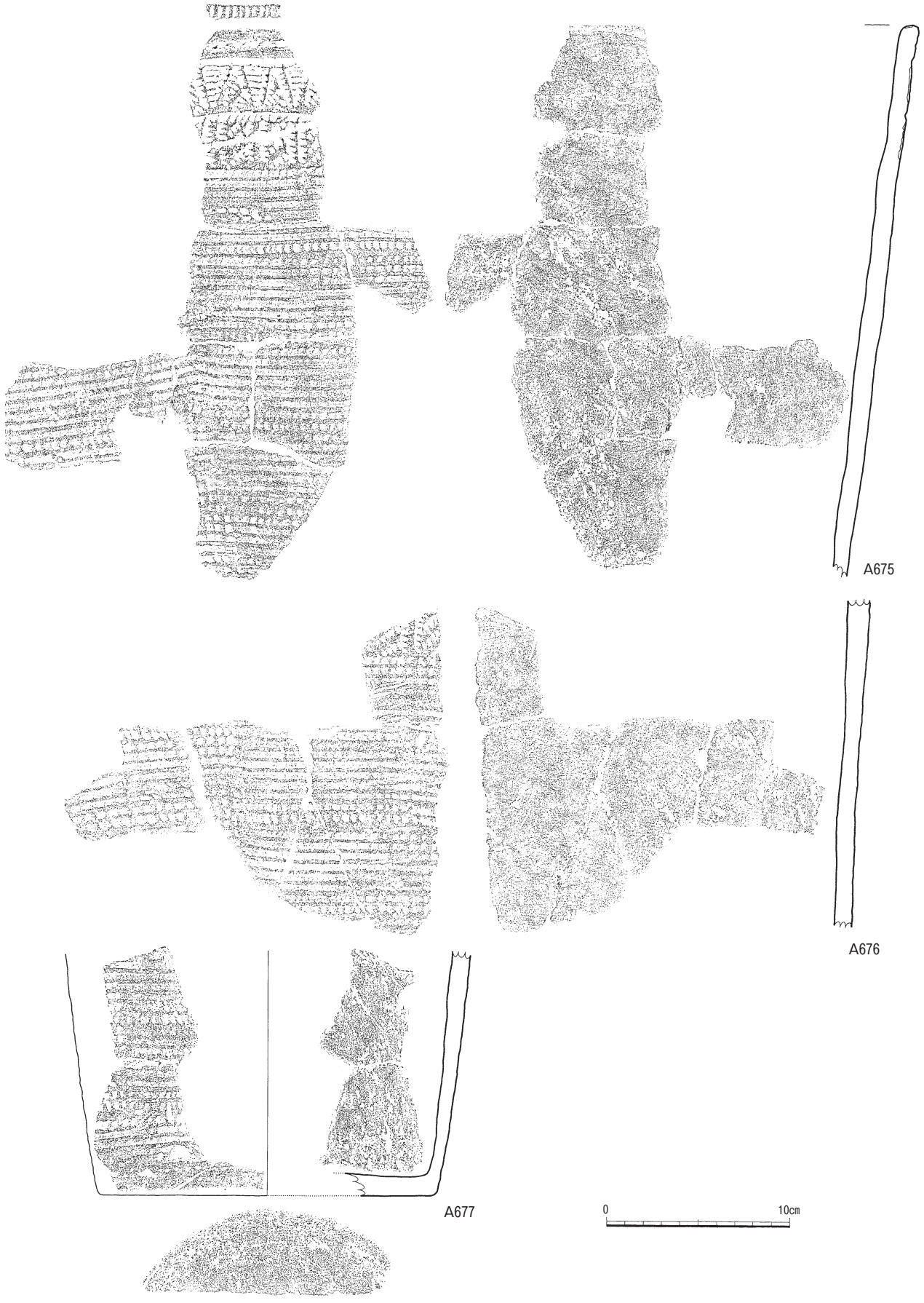


第214図　縄文時代早期包含層出土礫分布図

第215図　集石遺構内出土土器１

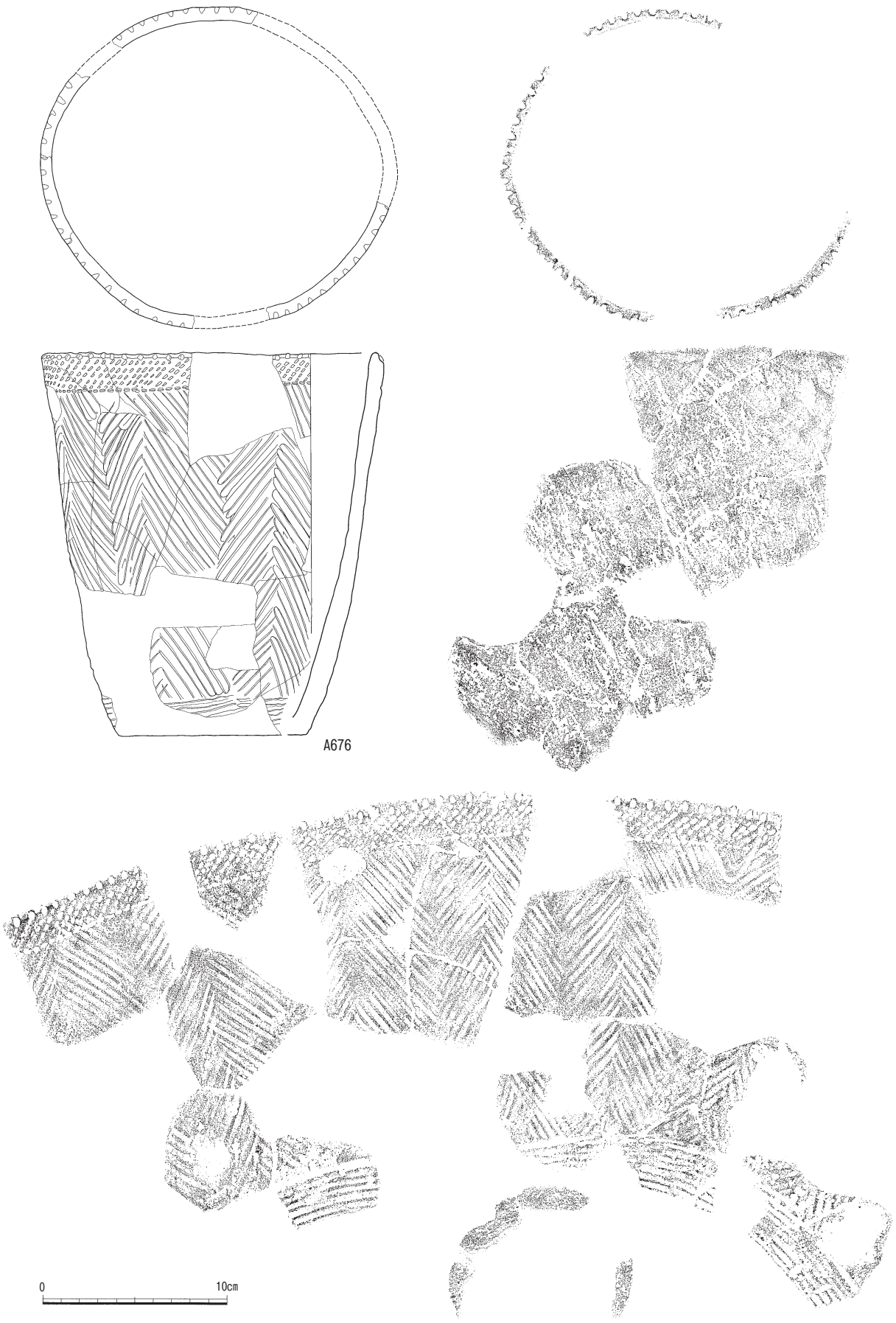


第216図　集石遺構内出土土器２

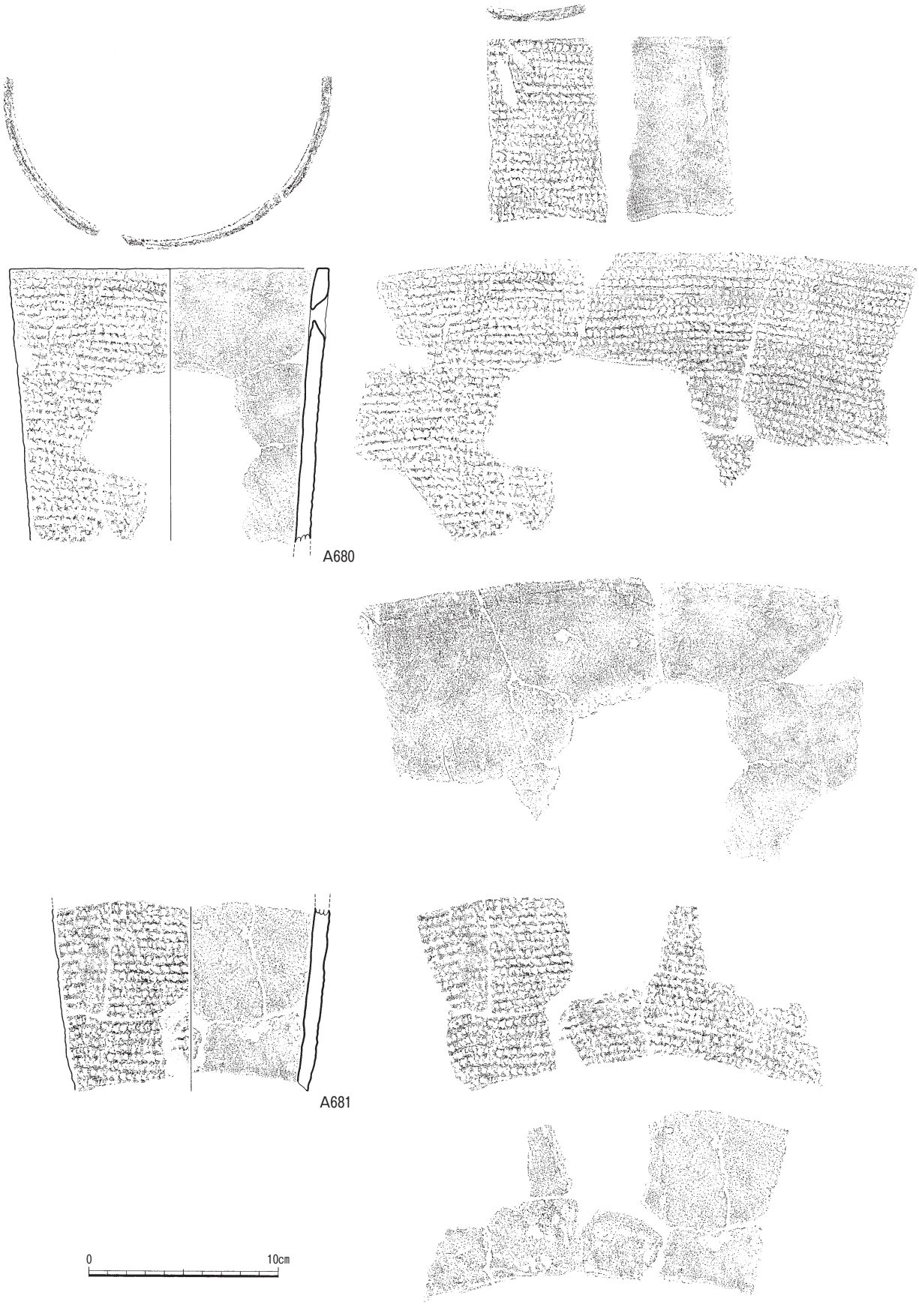


第217図　集石遺構内出土土器３

第218図　集石遺構内出土土器４



第219図　集石遺構内出土土器５



第220図　集石遺構内出土土器６

第221図　集石遺構内出土土器７

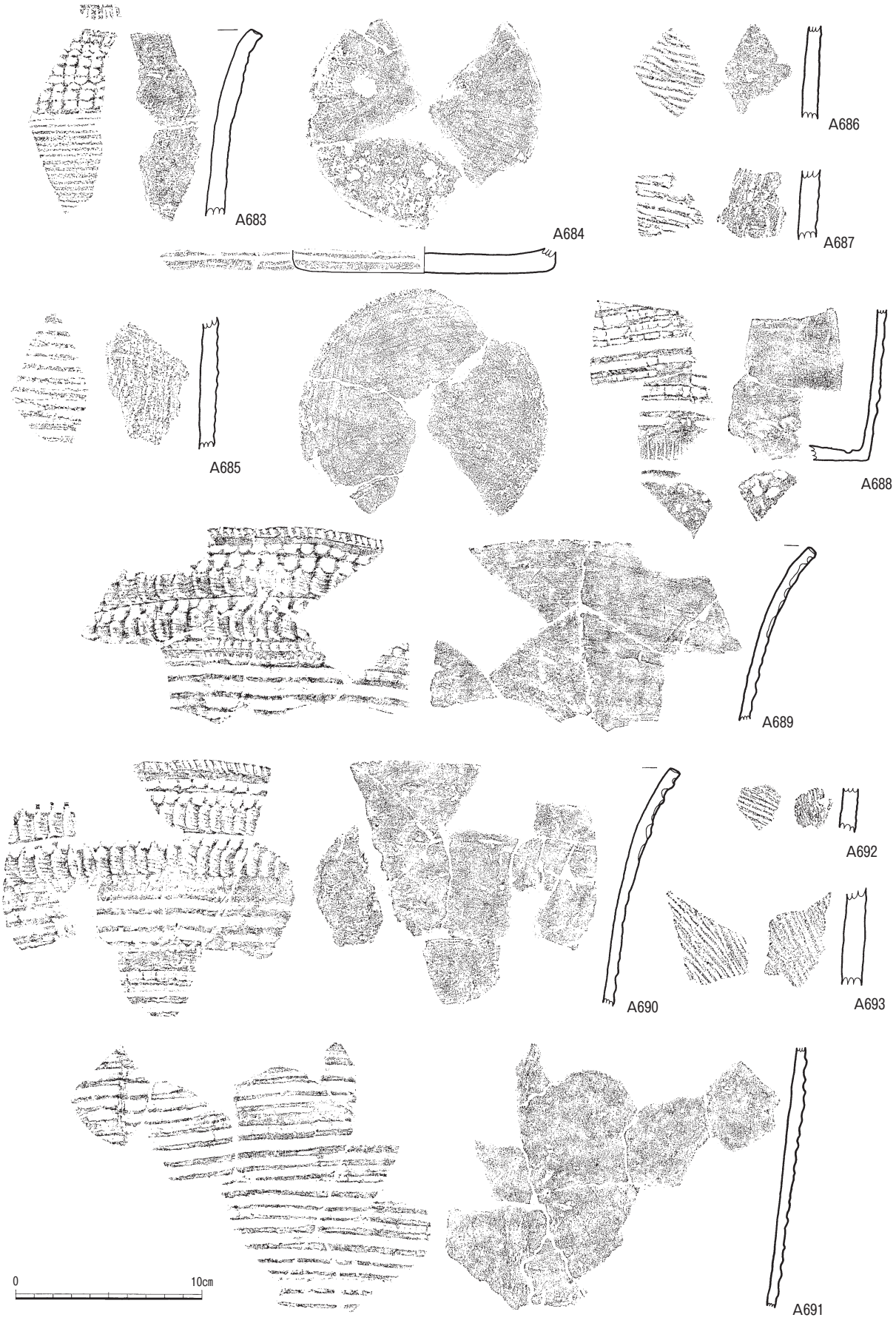
第222図　集石遺構内出土土器８

43号集石遺構　43号はD16区のⅧ層上面で検出された。礫は長軸85cm，短軸50cmの範囲に礫11個が広がって出土した。１個平均の重さは136ｇで，重量パターンはＣであった。礫の下面には炭化物の粒子が少量含まれていた。遺構関連の遺物は無かった。

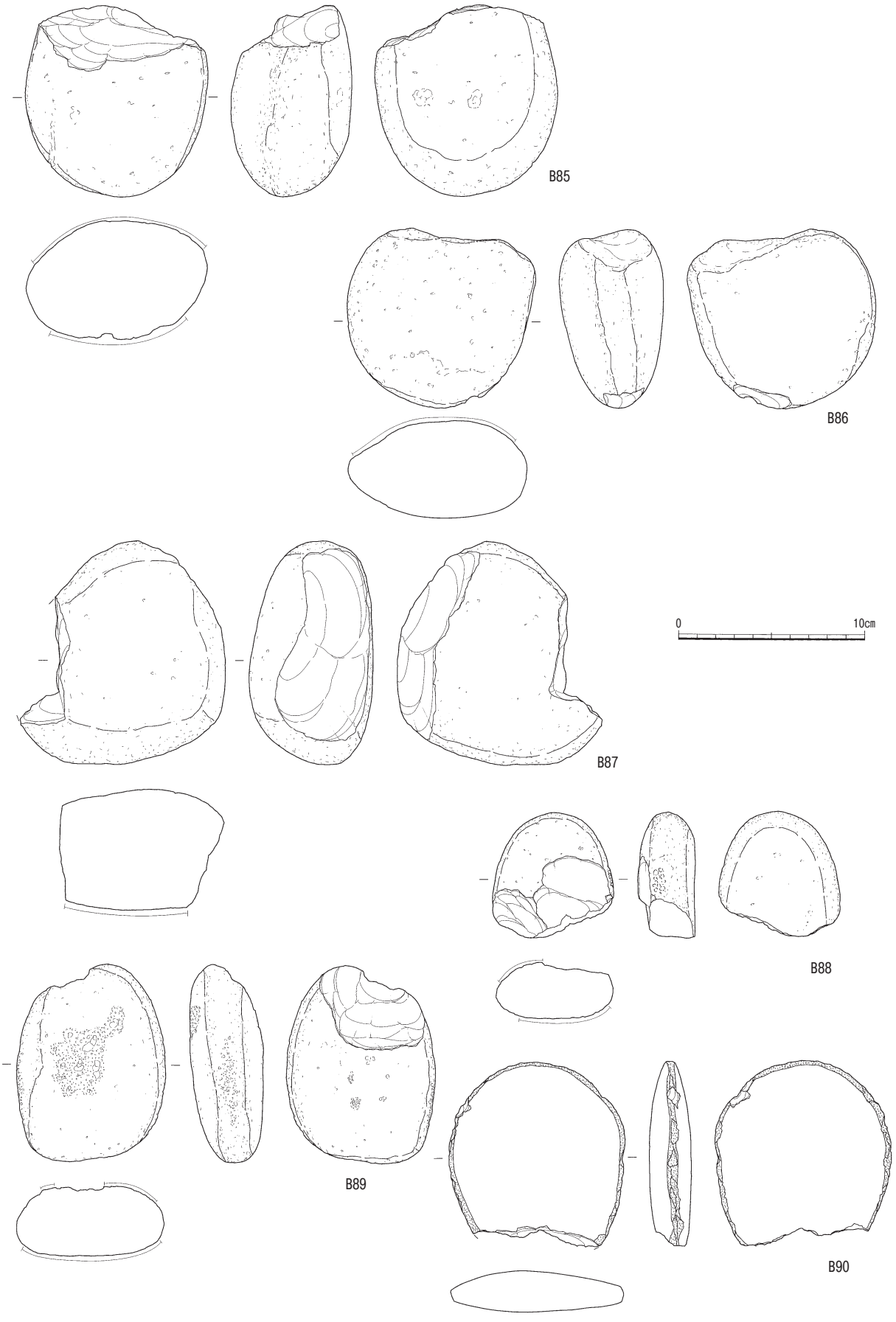
45号集石遺構　45号はB13区のⅧ層上面で検出された。礫は長軸120cm，短軸80cmの範囲に礫17個が広がって出土した。１個平均の重さは143ｇで，重量パターンはＢであった。遺構関連の遺物は無かった。

49号集石遺構　49号はⅧ層上面で検出された。礫は長軸110cm，短軸90cmの範囲に礫19個が広がって出土した。１個平均の重さは215ｇ，突出した１個を除くと173gであった。重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，B88の小形磨石がある。安山岩製で，長軸6.65cm，短軸6.5cm，厚さ3.1cm，重さ180gを測る。

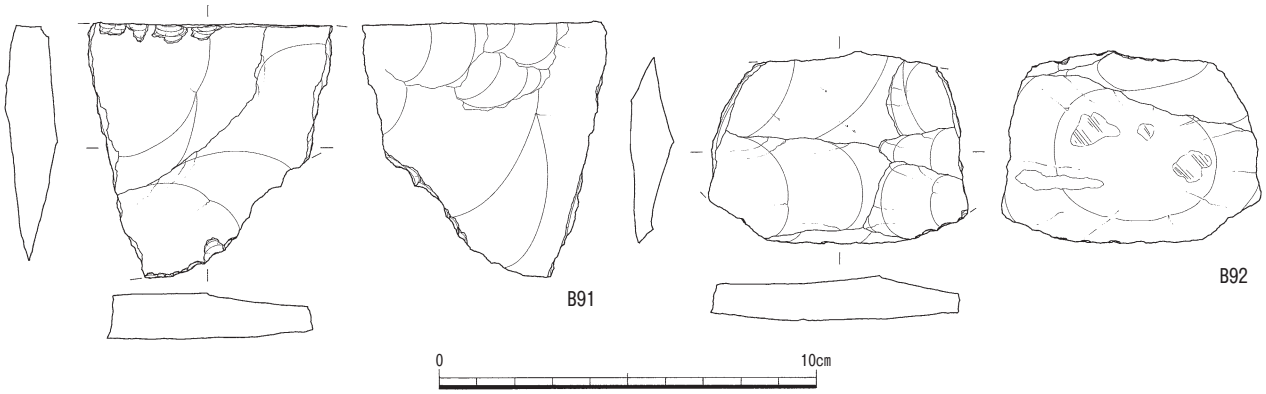
53号集石遺構　53号はE9区のⅧ層上面で検出された。礫は長軸215cm，短軸100cmの範囲に礫22個が広がって出土した。１個平均の重さは162ｇ，突出した１個を除くと112gであった。重量パターンはＡであった。遺構関連の遺物としては，６点の土器片が出土し，２点を図化した。A685は前平式土器の胴部片で，外面に横位の貝殻条痕文が施されている。A686は斜位の貝殻条痕文が施された胴部片である。型式については不明である。内面が丁寧なナデ調整を行っているので，吉田式系の土器である可能性もある。B92は安山岩製のスクレイパー状石器である。縦長剥片の側辺に刃部をもつ。長さ５cm，幅6.9cm，厚さ1.4cm，重さ46.23gを測る。B95は安山岩製の小形石皿である。半欠品であるが，扁平な円礫の平坦面２面を利用したもので，かなり摩耗が進んでいる。長さ19cm，幅11cm，厚さ5.2cm，重さ1227gを測る。遺構内に花崗岩製の円礫が出土したが，風化が激しくボロボロの状態であった。検出時に長さ約18cm，幅約９cmのこの円礫は磨石であった可能性が高い。

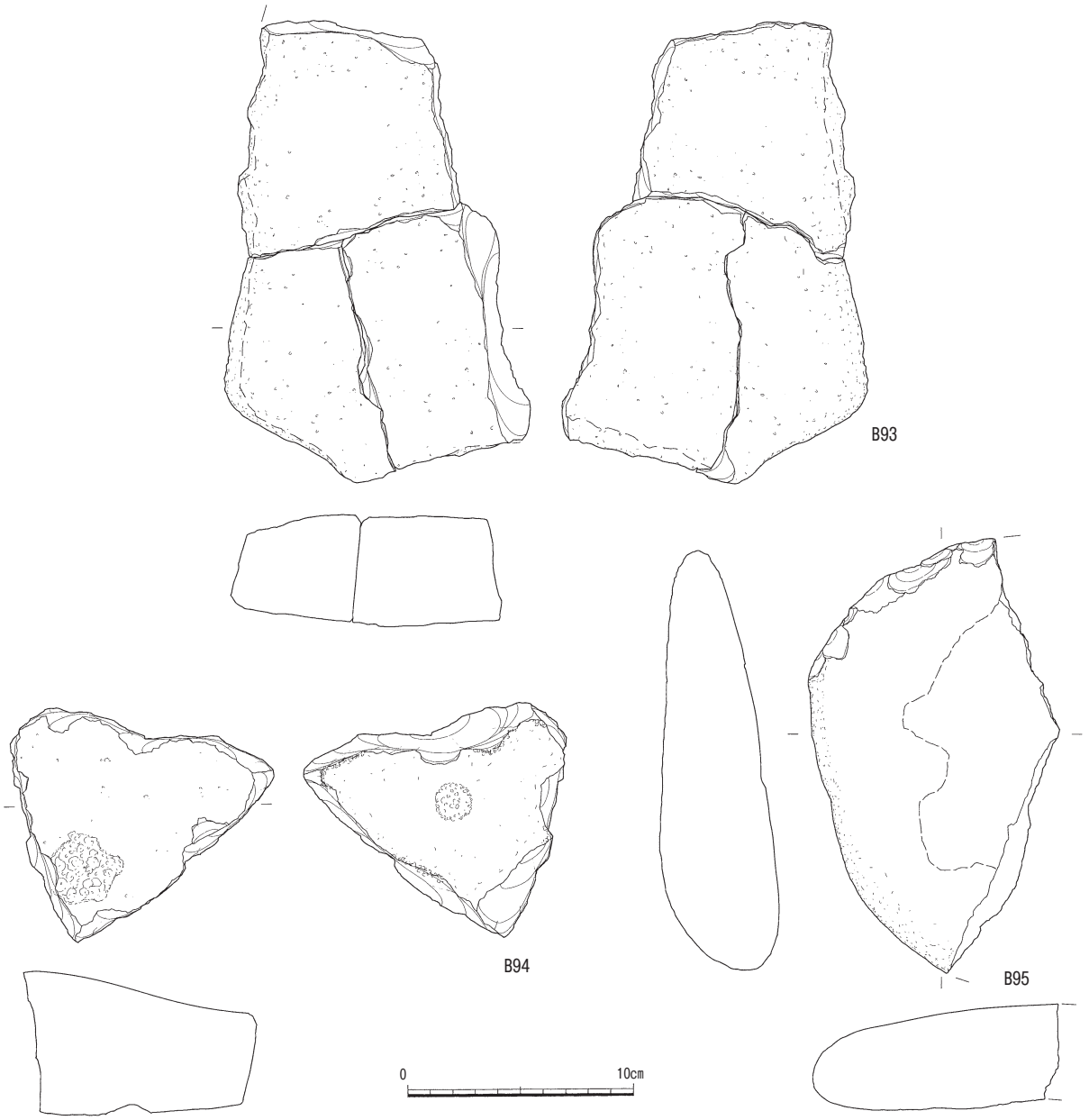


第223図　集石遺構内出土土器９

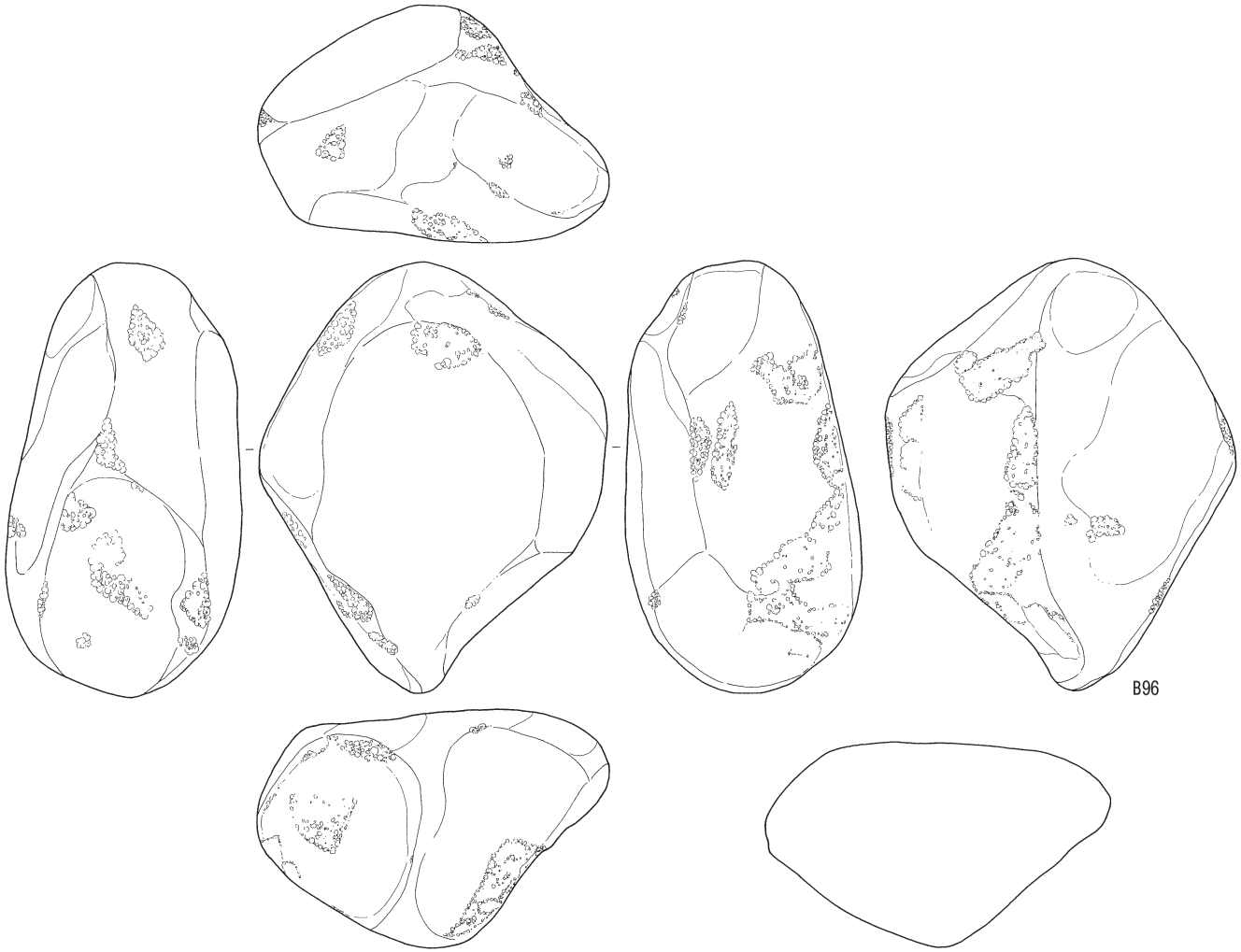


第224図　集石遺構内出土石器 1

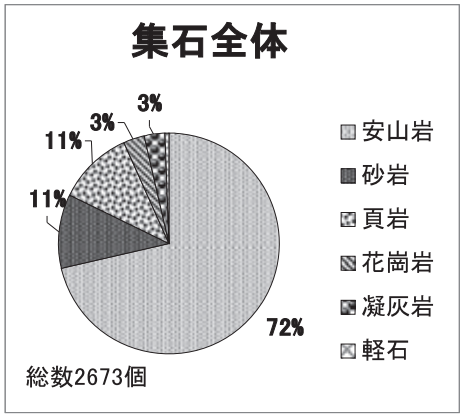


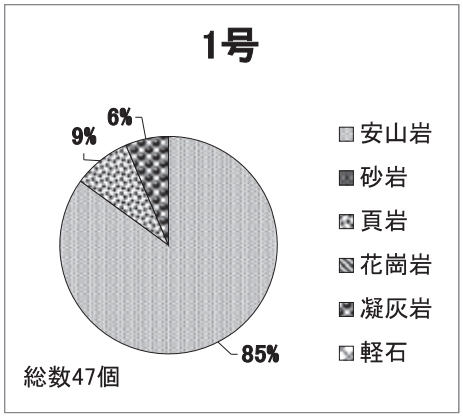


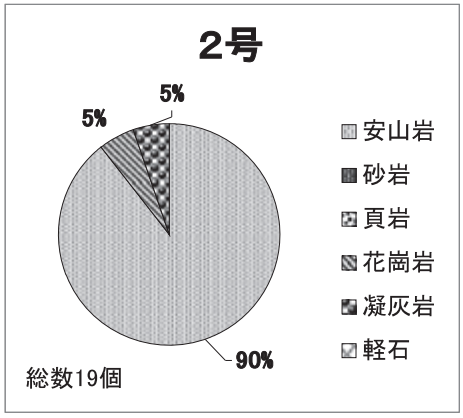
第225図　集石遺構内出土石器２

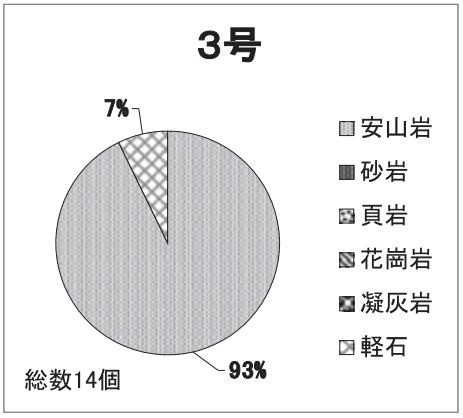


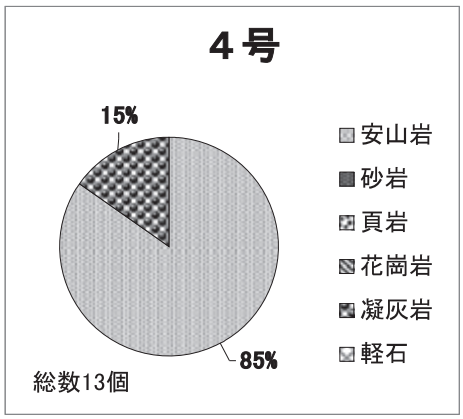
第226図　集石遺構内出土石器３

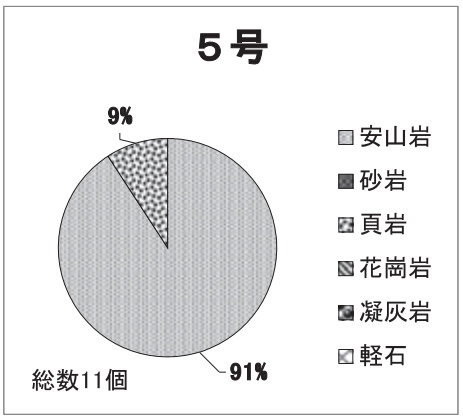


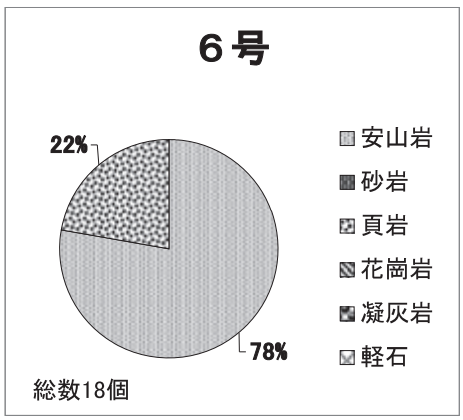


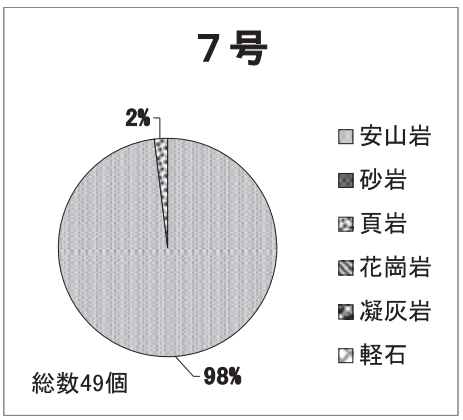




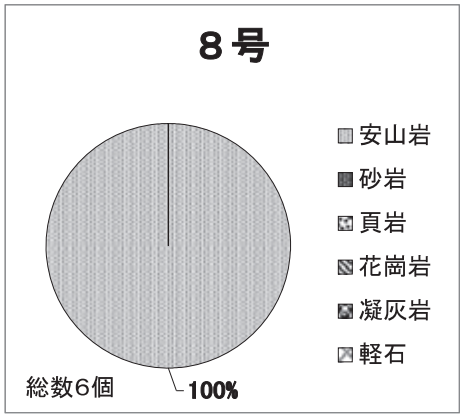


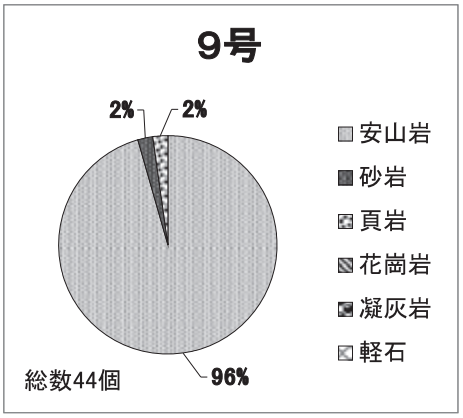


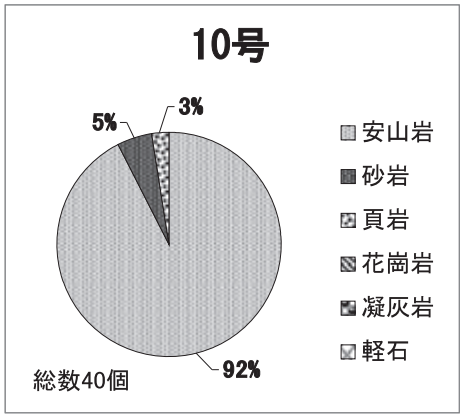


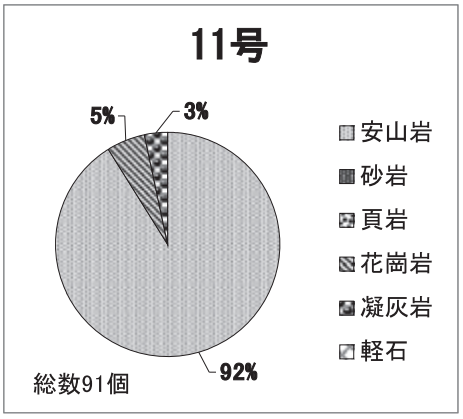


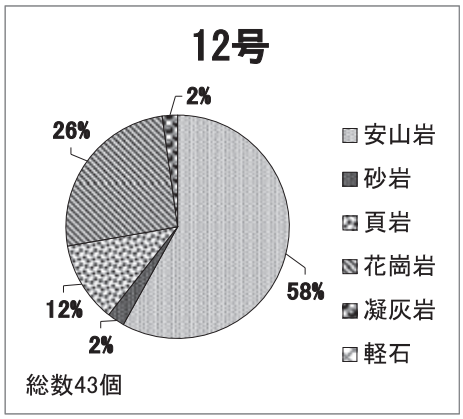
グラフ１　集石遺構構成礫データ１

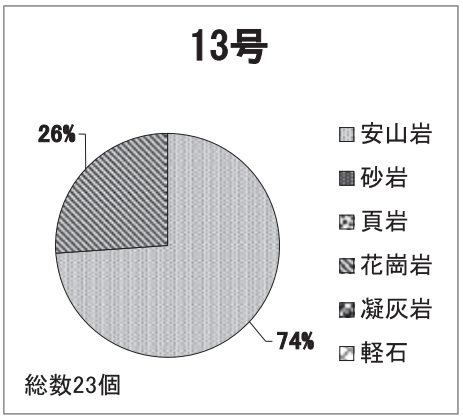


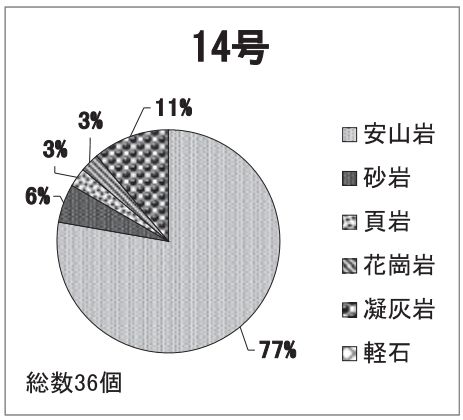


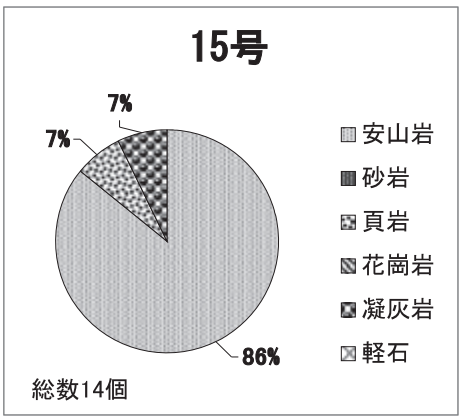




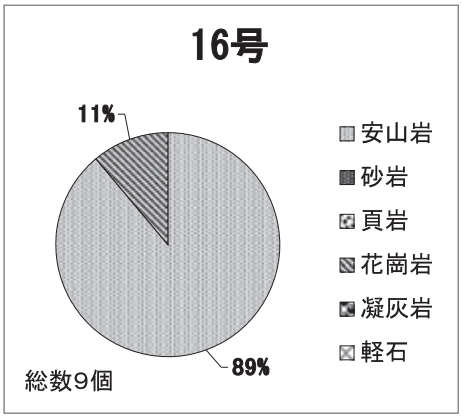


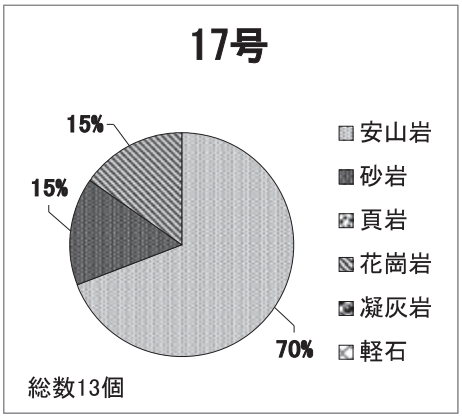


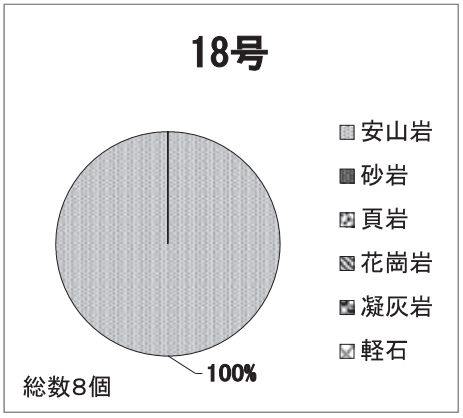


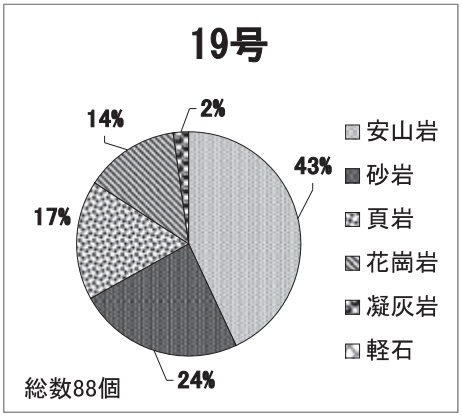


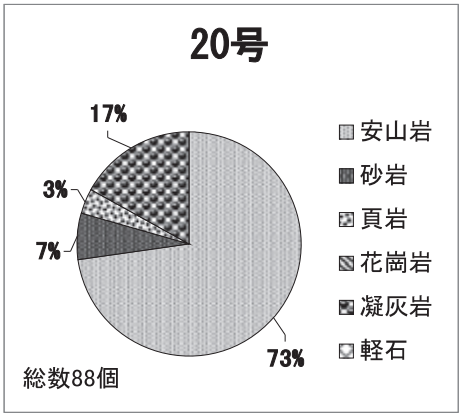
グラフ２　集石遺構構成礫データ２

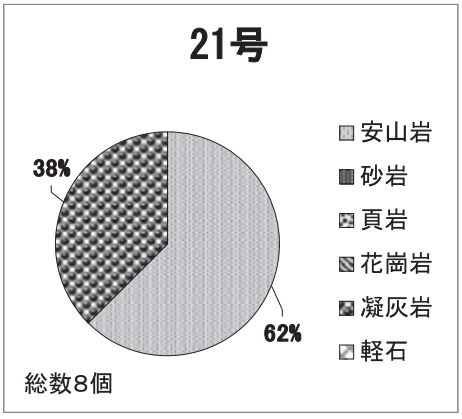


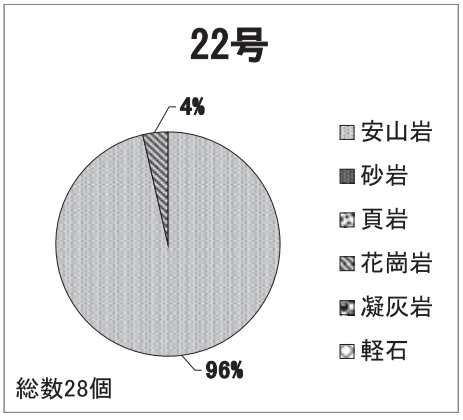


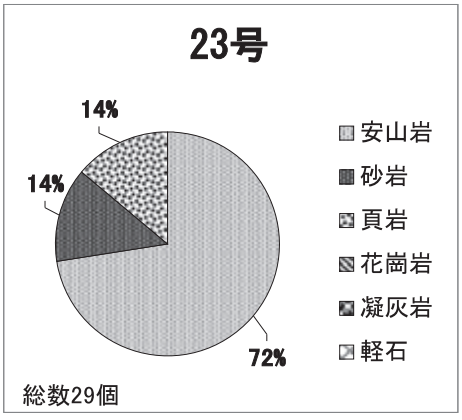




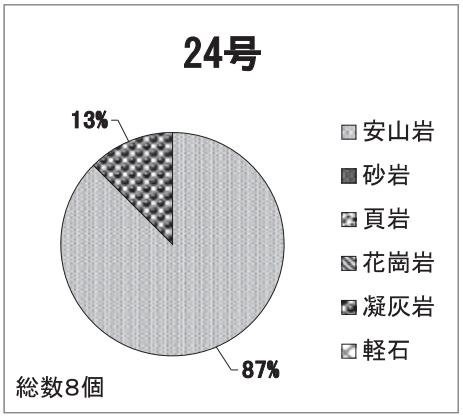


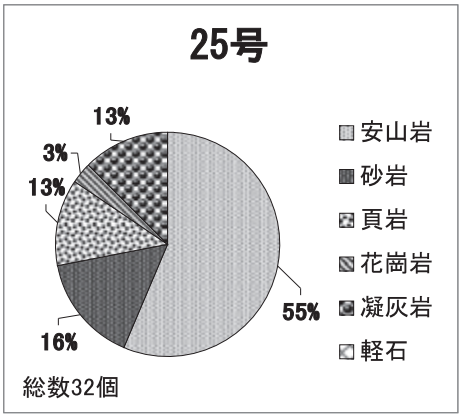


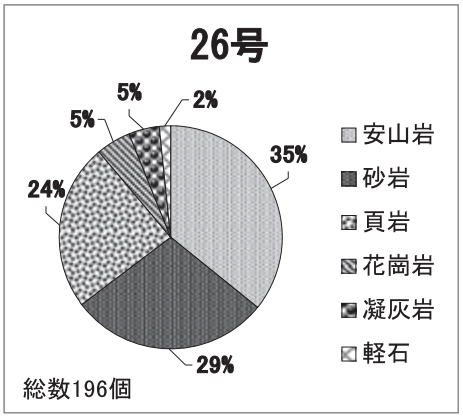


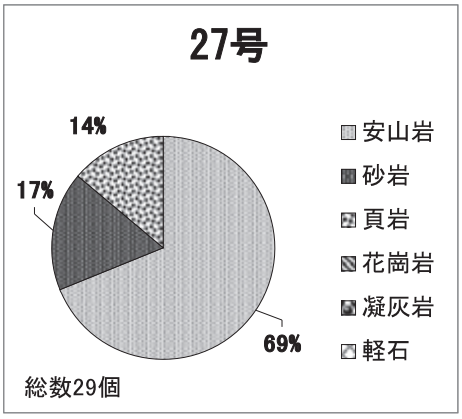


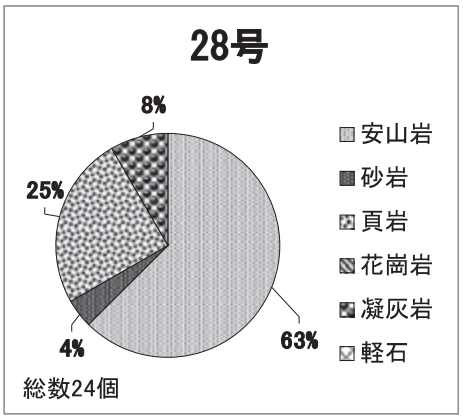
グラフ３　集石遺構構成礫データ３

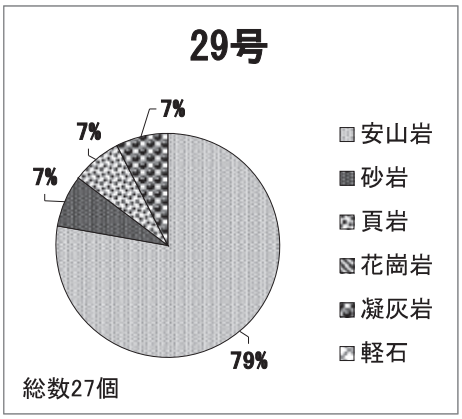


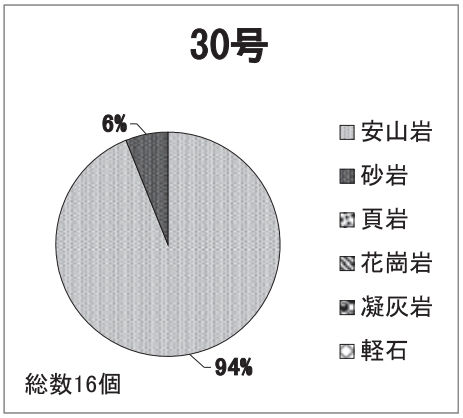


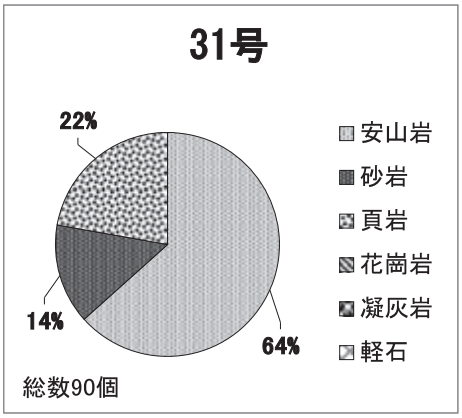




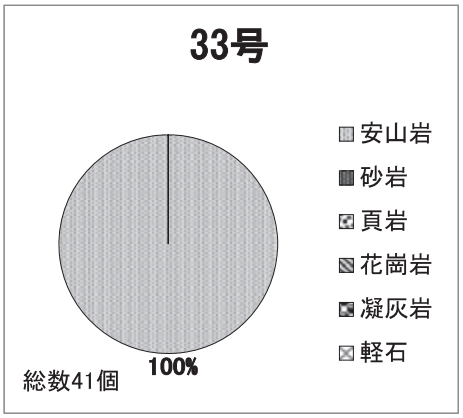


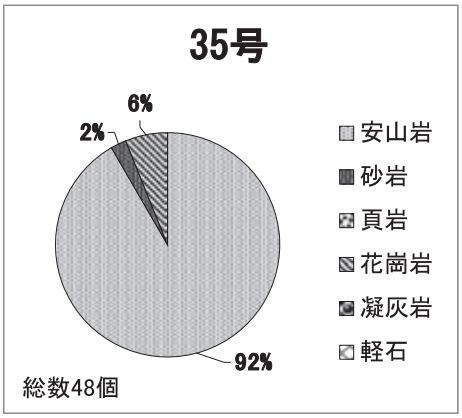


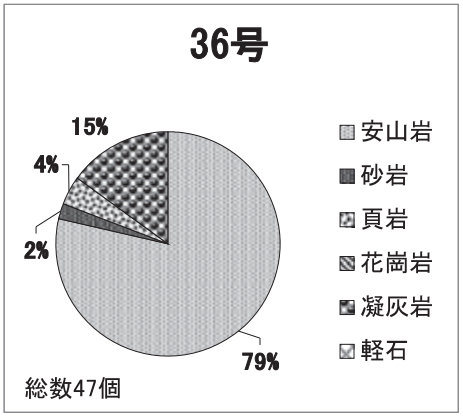


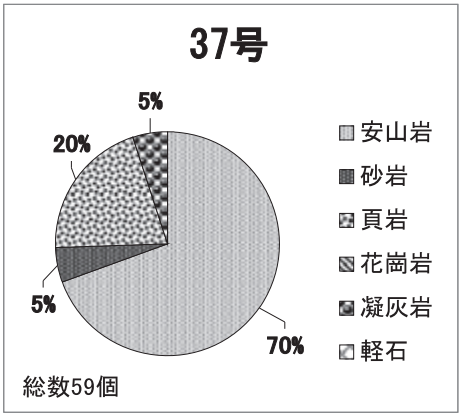


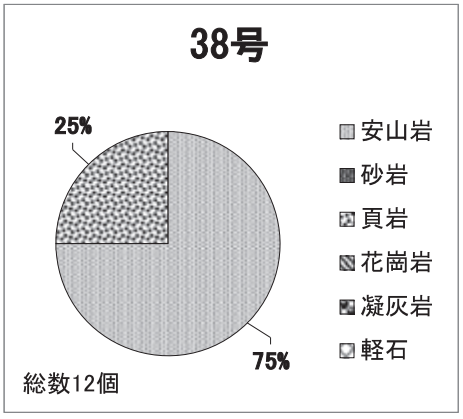
グラフ４　集石遺構構成礫データ４

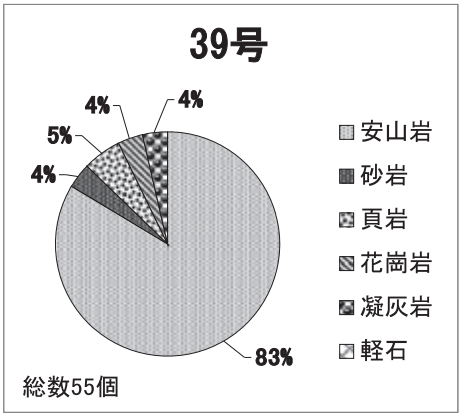


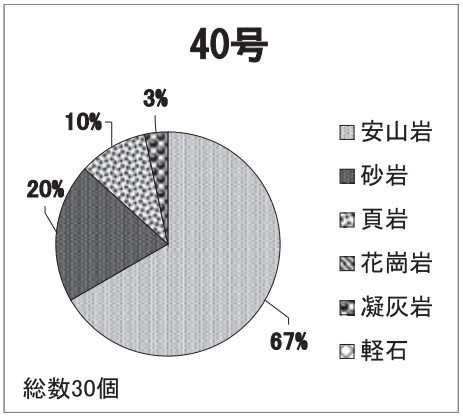


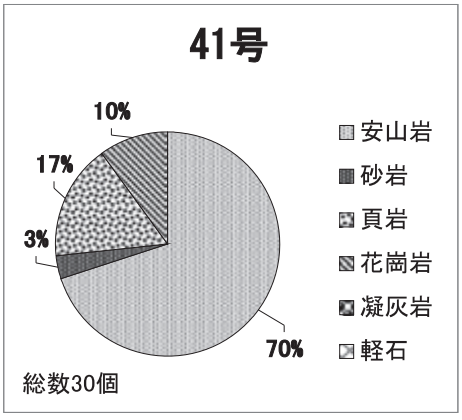




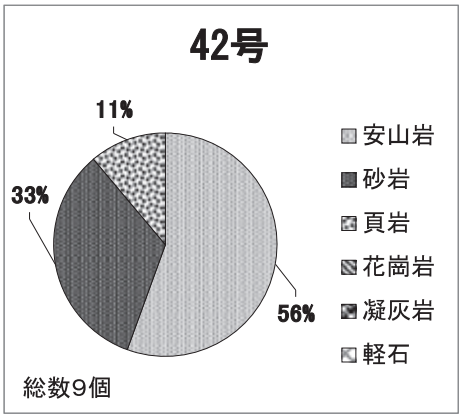


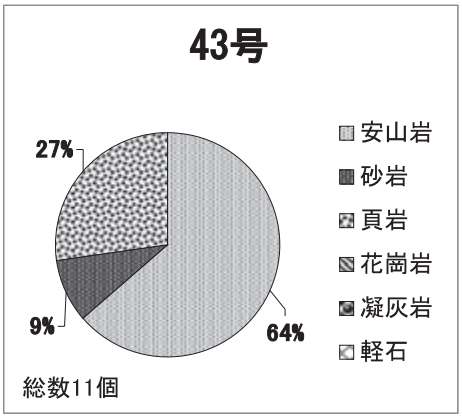


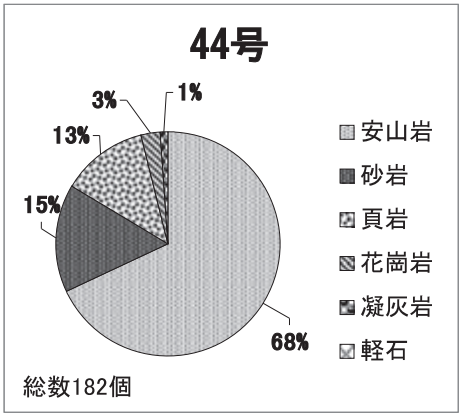


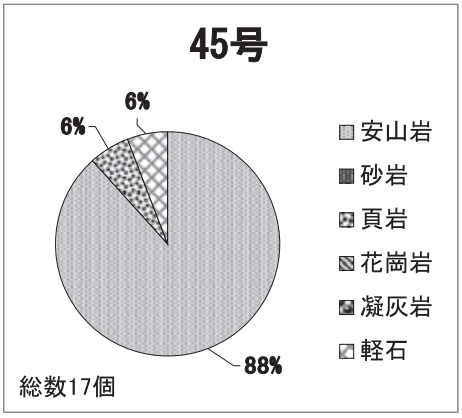


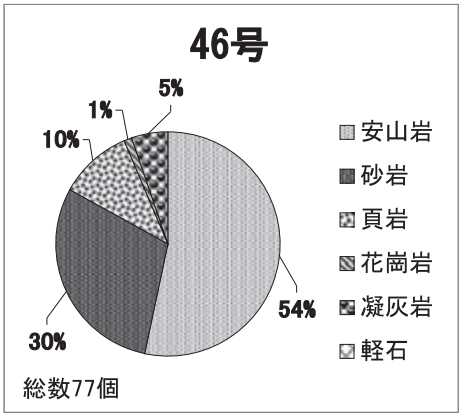
グラフ５　集石遺構構成礫データ５

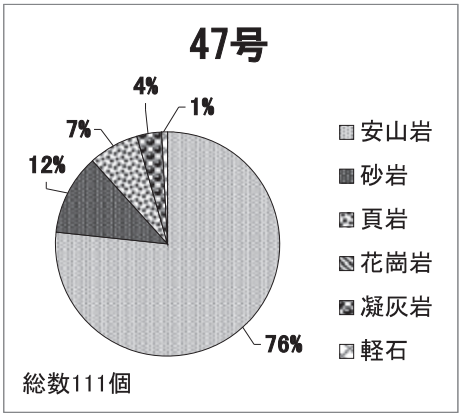


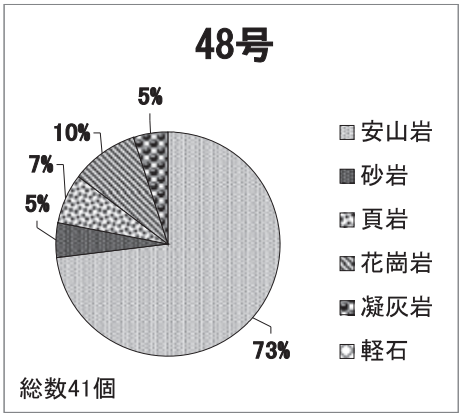


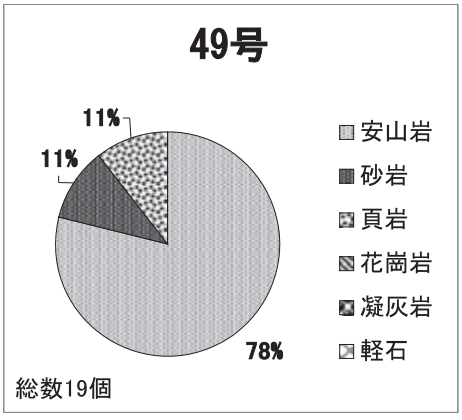




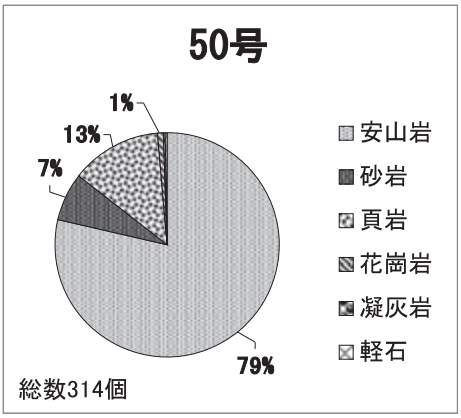


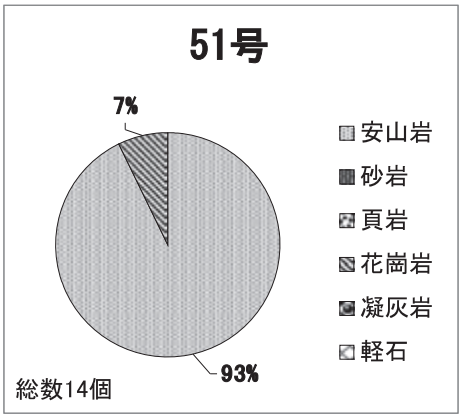


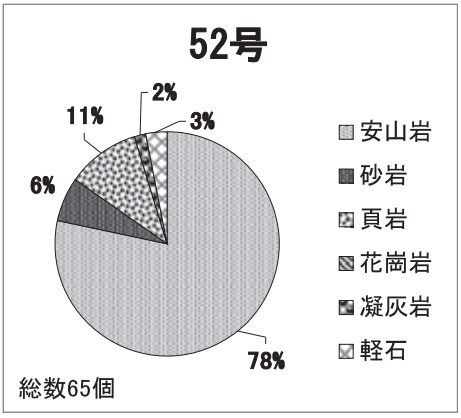


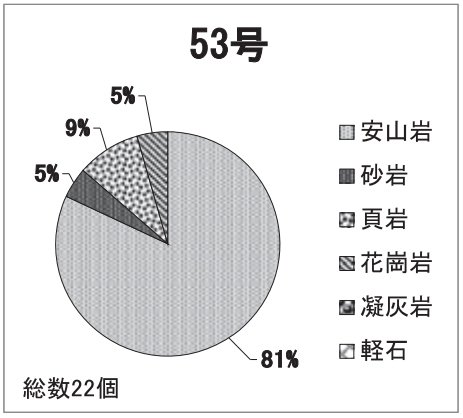


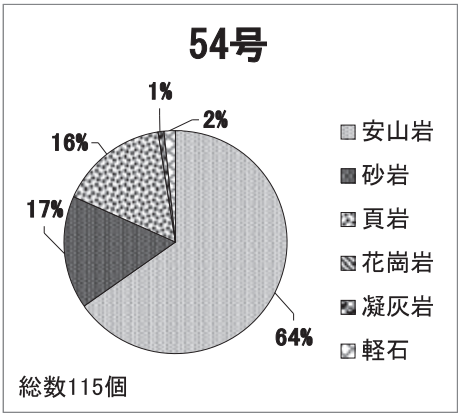
グラフ６　集石遺構構成礫データ６

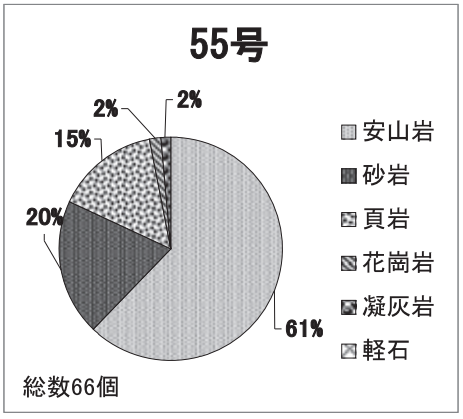


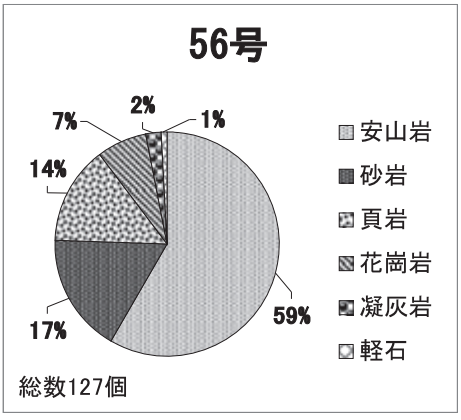




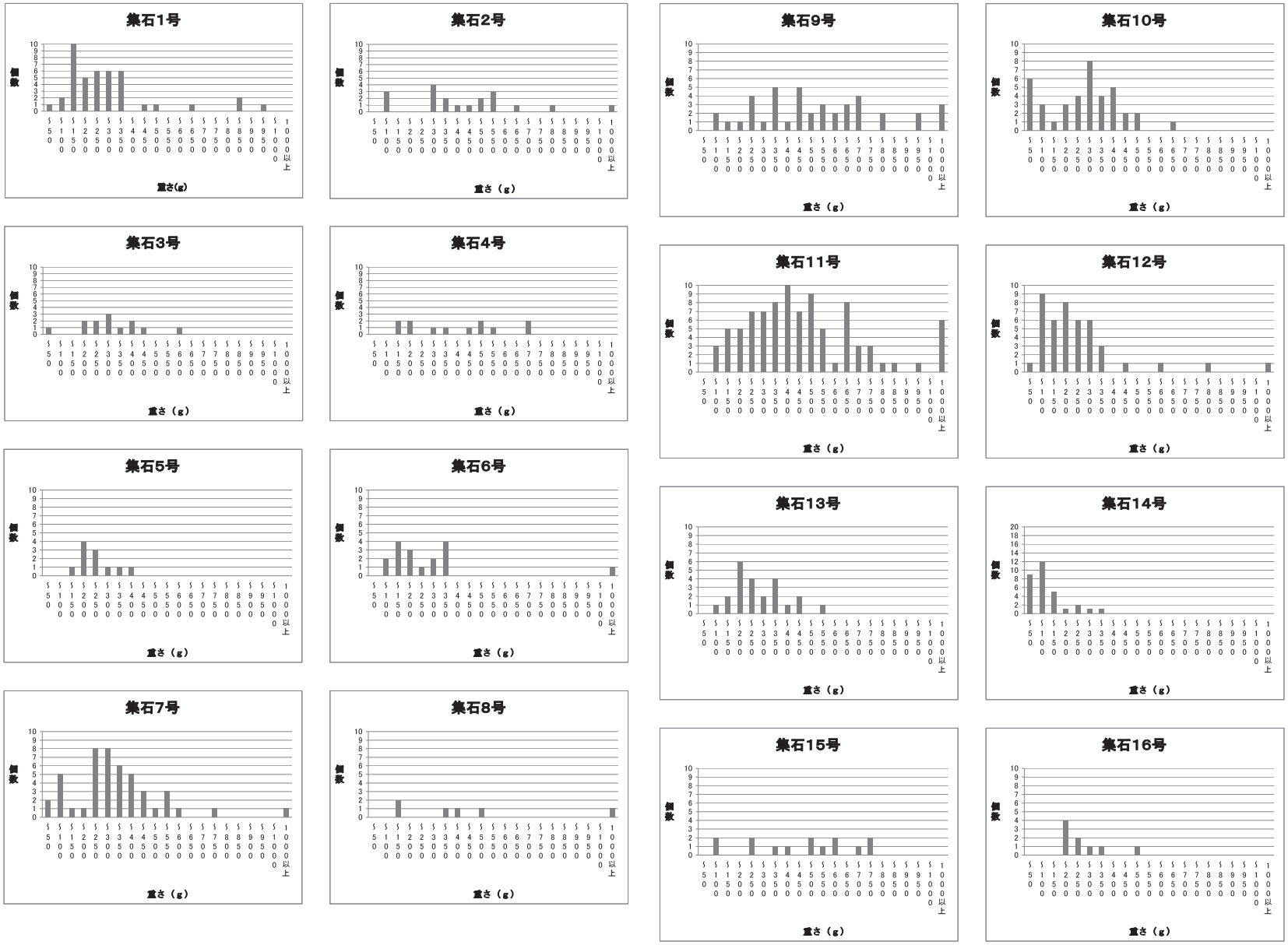




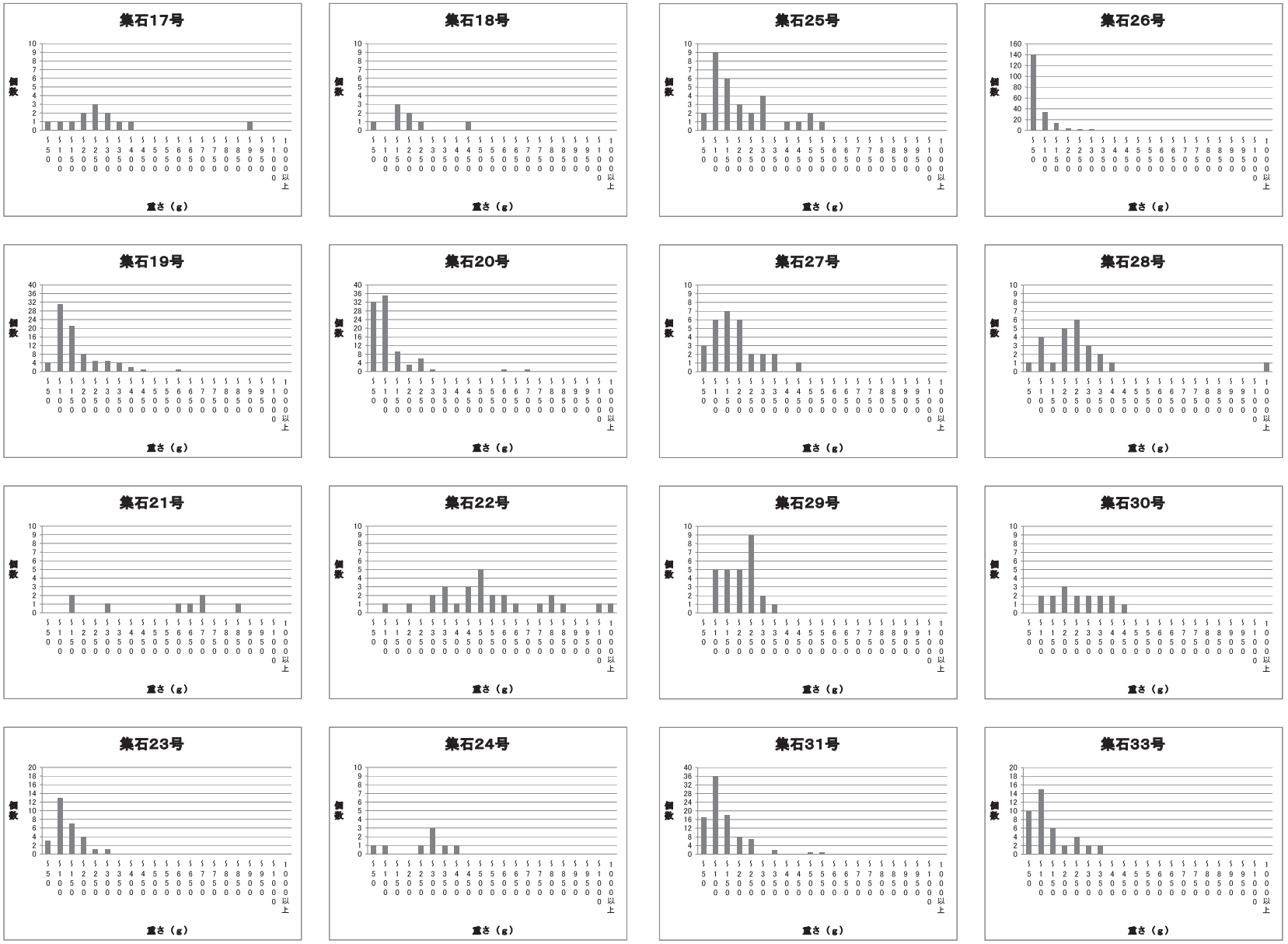




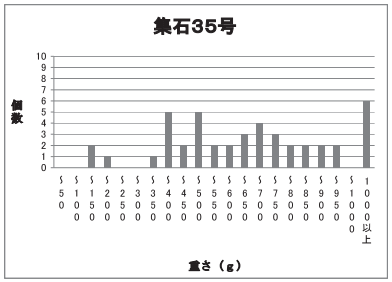
グラフ７　集石遺構構成礫データ７

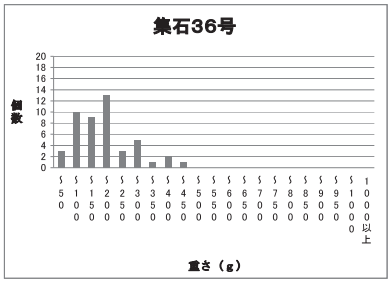


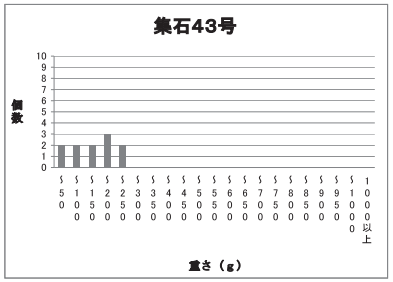
グラフ８　集石遺構構成礫重量１

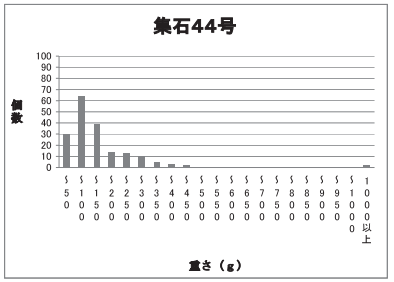


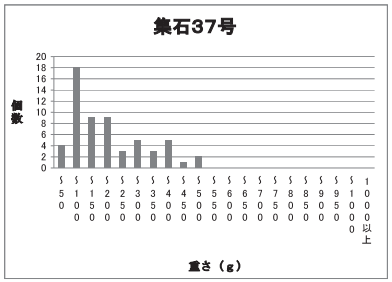
グラフ９　集石遺構構成礫重量２

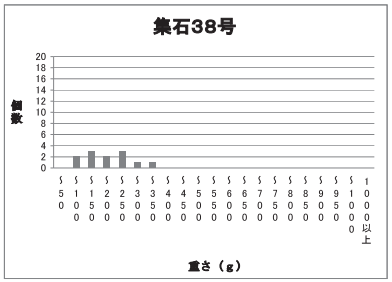


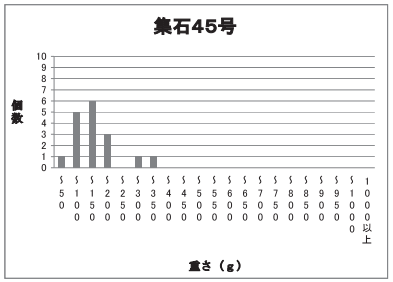


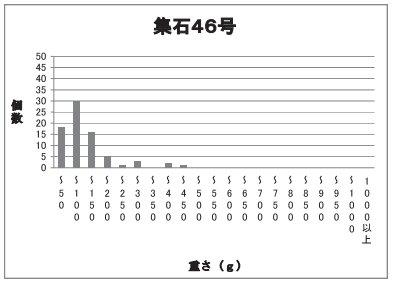


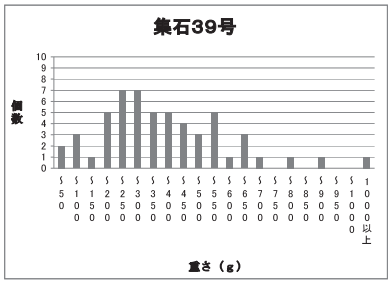


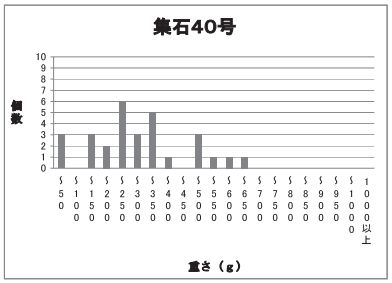


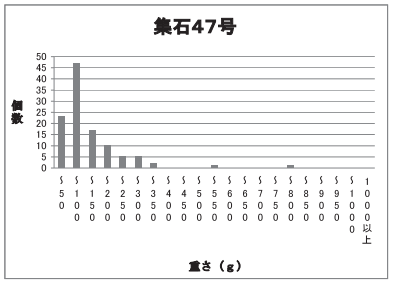


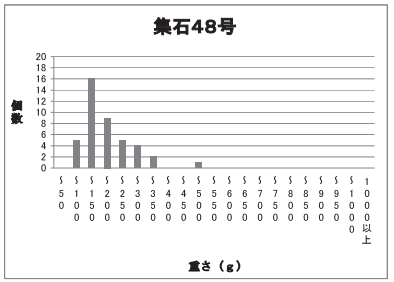


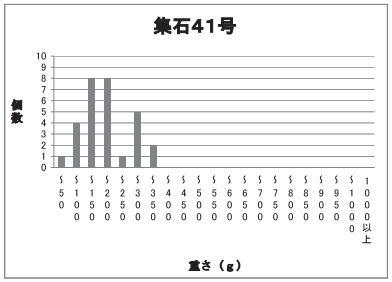


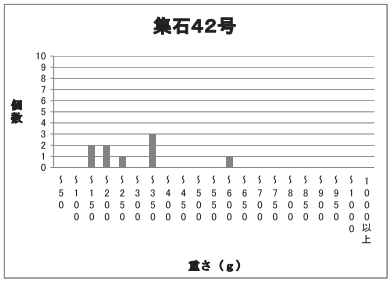


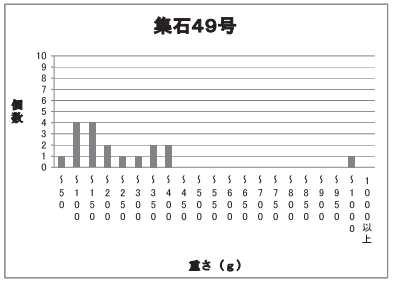


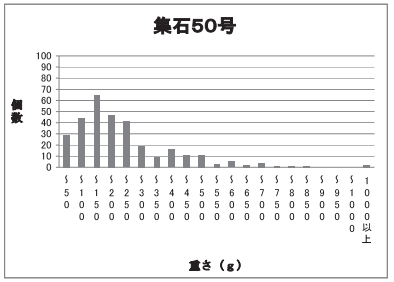




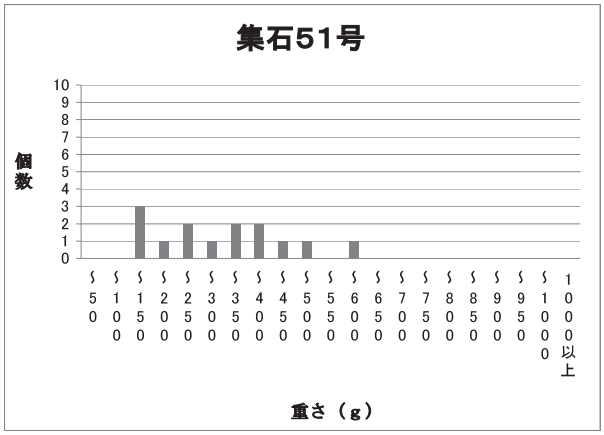


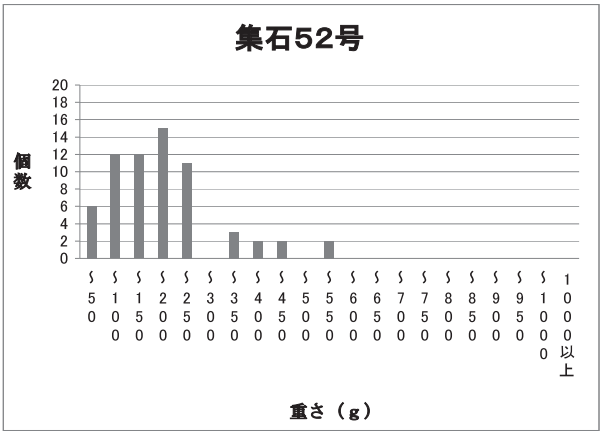


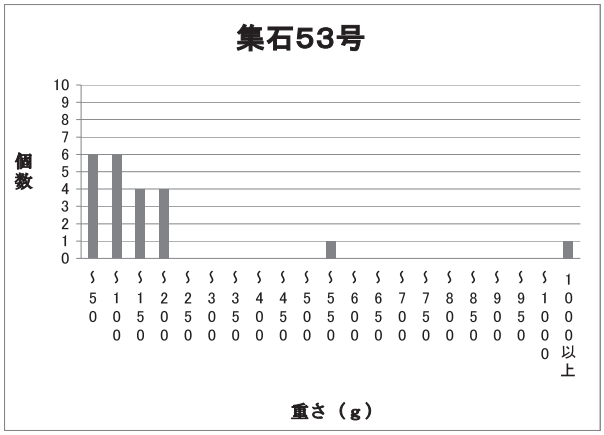


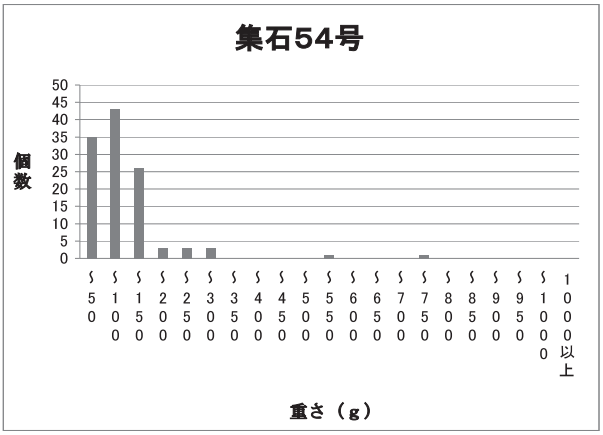


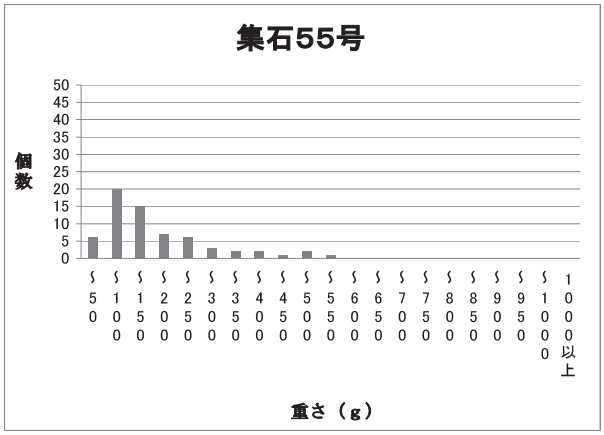
グラフ10　集石遺構構成礫重量３

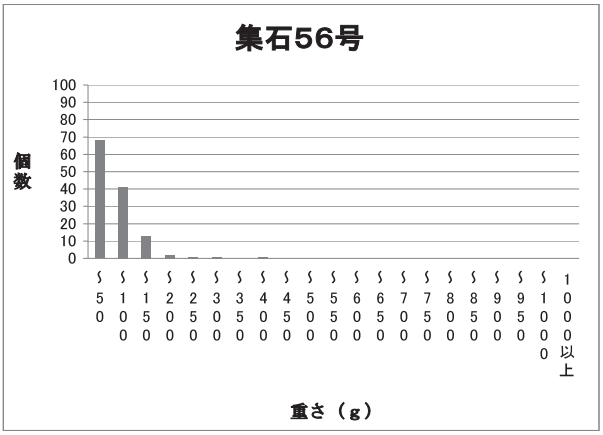












グラフ11　集石遺構構成礫重量４

（4）道路状遺構

道路状遺構と考えられるものが１か所確認された。下の図にあるようにD，E13区において硬化面が「Y」字状に検出された。幅は１m弱で10mほど検出された。明らかに溝状を呈する凹みは確認できなかった。「分かれ道」の状態で検出されているが，南側にはコンターが密になる急な谷筋があり、「一本道」はその方向へ伸びていくものと考えられる。分岐点（合流点）付近は遺構こそないが，周辺には竪穴住居状遺構をはじめとする遺構が集中しており，集落と南側の谷側とを結ぶルートであった可能性が考えられる。

第227図　道路状遺構位置図

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）

定塚遺跡・稲村遺跡

（第２分冊）

発　行　2010年３月

編　集　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811　FAX 0995-48-5821

印　刷　株式会社　トライ社
〒892-0834
鹿児島県鹿児島市南林寺町12－6
TEL 099-226-0815　FAX 099-225-7933